ちくま学芸文庫

原典訳マハーバーラタ 5

第5巻(1-197章)

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

原典訳 マハーバーラタ5

［家系図］

太陽神―タパティー
パラターサンヴァラナ―クル―プラティーパ―スバラ
ガンガー女神―シャンタヌ―ビーシュマ
サティヤヴァティー―チトラーンガダ
ヴィチトラヴィーリヤ
アンバー
アンビカー
アンバーリカー
パラーシャラ―ヴィヤーサ
ヤドゥ―ヴリシュニ……シューラ

クリピー
ドローナ―アシュヴァッターマン
ガーンダーリー
シャクニ
太陽神―カルナ
ドリタラーシュトラ
パーンドゥ
マードリー
ヴィドゥラ
クンティー
ヴァスデーヴァ
ドゥルヨーダナ
ドゥフシャーサナ
（百王子）
ヴィカルナ
ナクラ
サハデーヴァ
ユディシティラ
ビーマセーナ
アルジュナ
（マツヤ国王）
ヴィラータ―ウッタラー
スバドラー
クリシュナ
バララーマ
ドルパダ―ドラウパディー（クリシュナー）
ドリシタデュムナ
シカンディン
アビマニュ―パリクシット―ジャナメージャヤ

パーンダヴァ　カウラヴァ

主要登場人物

アシュヴァッターマン　ドローナの息子で、父に劣らぬ勇士。

アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。

アビマニユ　アルジュナとスバドラーの息子。

アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。

アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。

アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。

ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。

ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。

ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。

ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の徳高い息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。

ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、

ヴィドゥラの実父。

ヴィラータ　マツヤ国の王。パーンダヴァたちは変装してこの王の宮廷に仕えた。

ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。

ウッタラ　ヴィラータの息子。妹のウッタラーはアビマニユの妻になる。

カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。

ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。

ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。

クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子（ヴァースデーヴァ）。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。

クリタヴァルマン　ヴリシュニ族の勇士。

クリパ　武術の達人で、クル族に仕える。妹のクリピーはドローナの妻。

クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。

サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。

サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの双子の息子の一人。

サーティヤキ　ヴリシュニ族の勇士。ユユダーナとも呼ばれる。シニの孫。

サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。

シカンディン　ドルパダの次男。アンバーの生まれ変わり。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行うナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物語をウグラシュラヴァスから聞く。

シャクニ　ガンダーラ国王スバラの長男。ドゥルヨーダナ兄弟の叔父。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

ジャヤドラタ　シンドゥの王。ドリタラーシトラの娘婿。

シャリヤ　マドラ国の王。ナクラとサハデーヴァの母マードリーの兄（または弟）。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。夫アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

ソーマダッタ　バーフリーカの息子。ブーリシュラヴァスの父。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王ドルパダの娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリシタデュムナ　ドルパダの長男。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの双子の息子の一人。

バガダッタ　プラーグジョーティシャの王。クル族の側につく。

バーフリーカ　ソーマダッタの父。シャンタヌの兄。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

ブーリシュラヴァス　クル族の勇士。ソーマダッタの息子、バーフリーカの孫。

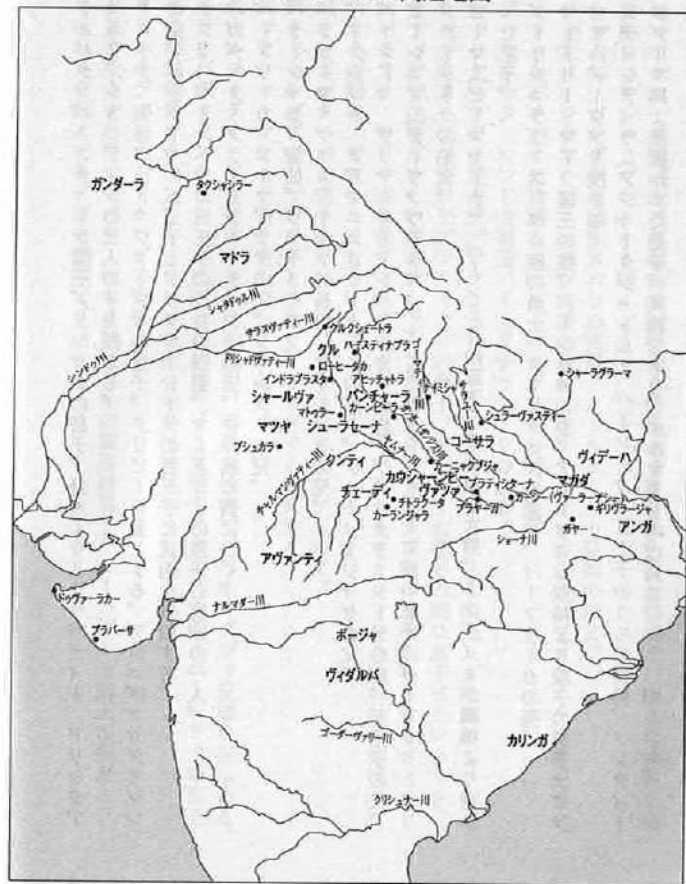
マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

第5巻　努力の巻（ウディヨーガ・パルヴァン）

第一章―第百九十七章

マハーバーラタ関連地図

㈣ 努力（第一章—第二十一章）

パーンダヴァ側の協議

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クル（パーンダヴァ）の勇士たちは、喜んだ味方の人々とともにアビマニユの結婚を行なった後、満足して四日休息してから、ヴィラータの集会場にやって来た。（一）マツヤ国王の豪華な集会場は、最高の宝玉や宝物で美しく飾られ、座席が配され、花輪で飾られ、芳香がただよっていた。最上の王たちがその集会場に集まった。（二）

ヴィラータとドルパダとの二人の王は先頭の座席に座った。また、〔バラ〕ラーマとクリシュナの祖父である、諸王に敬われる老王（シニ）もそこに座った。（三）パーンチャーラ王（ドルパダ）のそばに、シニ族の勇士（サーテイヤキ）とバララーマが座った。またマツヤ国王のそばに、クリシュナとユディシティラが座った。（四）そしてドルパダ王のすべての息子たち、ビーマとアルジュナとナクラとサハデーヴァ、勇士プラデュムナとサーンバ（いずれもクリシュナの息子）、ヴィラータの息子とアビマニユもそこに座った。（五）ドラウパディーの息子である王子たちは、すべて、勇敢さと容姿と力にかけて父たちと等しい勇士たちであったが、黄金できらびやかなすばらしい座席に座った。（六）輝かしい衣服と装飾を身につけた勇士たちがこのように座った時、王たちがいるその豪華な集会場は、清らかな星々に満ちた天空のように輝いた。（七）

それから勇猛な王たちは、集会にふさわしい多彩な会話をしてから、クリシュナを見つめ

て、しばし黙考していた。（八）パーンダヴァの件でクリシュナに集められた王中の獅子たち一同は会話をやめて、重大な意義のある、大なる成果をもたらすクリシュナの言葉を聞いた。（九）

クリシュナは言った。

「あなた方はすべて、よく知っている。ここにいるユディシティラはシャクニに賭博で欺かれて敗れた。王国が奪われ、さらに亡命の約定が交わされた。（一〇）パーンドゥの息子たちは力ずくで大地を征服することもできるが、約束を守り、その恐るべき誓戒を十三年間、適切に実行した。（一一）彼らは非常に越えがたい第十三年目を、あなた方のそばで気づかれることなく、耐えがたい苦悩を忍びながら生活した。その次第はすべて御存知である。（一二）このようであるから、ユディシティラ王とドゥルヨーダナとに有益なことを考えてもらいたい。クル族とパーンダヴァたちにとって法（ダルマ）にかない、適切で、名声をもたらすことを考えてもらいたい。（一三）ユディシティラは神々の王国でさえ、それが非法（アダルマ）をともなっていれば、それを望まないであろう。法と実利（アルタ）をそなえていれば、どこかの村の王にでもなりたいと思うであろう。（一四）彼の父からの王国は、ドリタラーシトラの息子たちによって、詐術により奪われた。そのことは諸王に周知のことだ。しかし彼は、耐えがたい大きな苦難を受け入れた。（一五）アルジュナはその威光により、戦闘において、あのドリタラーシトラの息子たちに敗れることはなかった。しかし王は、親しい人々とともに、彼らが恙無（つつがな）いことのみを願っている。（一六）勇猛なパーンダヴァの五王子は、彼ら自身が敵たちを破って勝ち取ったも

のだけを望んでいる。(二七) あのおぞましい悪党どもは、王国を奪おうとして、幼少の頃からこの勇士たちを、種々の方策を用いて殺そうと企てて来た。あなた方はそのことをすべてよく御存知である。(二八)

悪党たちの盛んな貪欲を見て、またユディシティラの徳性を見て、そしてまた彼らの結束を見て、そろって、また各自、心を決めなさい。(二九) 彼らは常に真実に専念する。彼らは適切に例の約定を完了した。そこで、もしドリタラーシトラの息子たちが誤って対応すれば、彼らはその息子たちをみな殺しにするであろう。(三〇) ユディシティラ王があの者たちに苦しめられているのを見て、親しい人々はパーンダヴァのまわりに集まるであろう。彼らは戦闘によってあの者たちを殺すであろう。戦いにおいてあの者たちに殺されつつも、彼らはあの者たちを殺すであろう。(三一) あなた方は、彼らは少数なのであの者たちに勝利できないと思うかも知れないが、みなで結束し、盟友といっしょになって、あの者たちを滅ぼす努力をするであろう。(三二)

ドゥルヨーダナが何をするか、その思うところはしかとはわからぬ。敵の考えがわからない時、何をしたら最善か、あなた方は考えることができない。(三三) それ故、徳性あり、清く、生まれがよく、注意深い使節、ユディシティラに王国の半分を返すように彼らを説得できる使節を派遣しなさい。(三四)」

法(ダルマ)と実利(アルタ)をそなえた、穏健で公平なクリシュナの言葉を聞いて、彼の兄(バラ・ラーマ)はその言葉を非常に称讃し、次のように述べた。(三五)(第一章)

バラデーヴァ(バラ・ラーマ)は言った。

「あなた方はクリシュナから法(ダルマ)と実利(アルタ)にかなった言葉を聞いた。それはユディシティラ王にもドゥルヨーダナ王にも有益な言葉だ。(一) クンティーの息子である勇士たちは、王国の半分を放棄して、治国に努力するであろう。ドゥルヨーダナは半分を譲渡して、安楽になり、我々とともに大いに喜ぶであろう。(二) 勇猛な男たちは王国を得て、もし相手方が正しくふるまうなら、必ずや気も鎮まり幸福になるであろう。彼らには平安が、臣民には安寧がもたらされる。(三) ドゥルヨーダナの考えを知るため、ユディシティラの言葉を述べるために、クルとパーンダヴァの和平の目的で誰かがあちらに行くことは、私も賛成だ。(四)

彼はクルの英雄ビーシュマ、栄光あるドリタラーシトラ、ドローナとその息子、ヴィドゥラ、クリパ、シャクニ、カルナに挨拶すべきである。(五) そして文武に長(た)け、各自の法を守り、学識の点でも年齢の点でも長老であり、世界的な勇士であるドリタラーシトラの息子たちに挨拶する。(六) 彼らすべてが集まり、長老の市民たちが集まった時、ユディシティラの用事をするのにふさわしいように、恭しい言葉を述べるべきである。(七)

あらゆる場合、彼らを怒らせるべきではない(異本によるも、テクスト疑問)。彼らは力に依存して(正当に)あの利益を得たのであるから。(八) ユディシティラは喜んで出かけて行き、賭博に酔い痴れ、その王国が奪われたのである。(九) ユディシティラは賭博に通じておらず、すべての親しい

クルの勇士たちに制止されたのに、賭博に通達したシャクニに挑戦した。(九)そこにはユディシティラが勝つことができる賭博師が他に幾千といた。ところが彼は彼らを捨て置いて、シャクニにのみ挑戦した。そして賭博においてシャクニに敗れた。(一〇)骰子(さいころ)は常に裏目に出たが、敵手(シャクニ)と賭け続け、興奮して、手ひどく負けた。そこにおいて、シャクニには何の過失もない。(一一)
それ故、尊敬にふさわしいドゥルヨーダナに対し、恭しい言葉を述べるべきである。その使節はこのようにして、ドリタラーシトラの息子を自分の目的の方に向かわせることができる。(一二)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
マドゥ族の勇士(バララーマ)がこのように言うと、シニ族の勇士(サーティヤキ)は突然立ち上がった。そして彼の言葉を非難して、怒って次のように告げた。(一三)　(第二章)

サーティヤキは言った。
「人はその本性に応じて発言する。あなたはその内なる心性に従ってそのように述べる。(一)勇猛な人もいれば臆病な人もいる。人間にはこの確固とした二つの種類が認められる。(二)一本の樹木に果実のなる枝とならない枝があるように、同一の一族に不能者と勇士とが

生まれる。(三)バララーマよ、私はあなたの言葉に怒っているのではない。あなたの言葉を聞いている人々に対して怒っているのだ。(四)というのは、ダルマ王(ユディシティラ)のほんのわずかな過失を言い立てて、どうして会衆の中で何の恐れもなく発言できるのだろうか。(五)賭博に巧妙な者たちが、賭博を知らない偉大な王に挑戦し、望みのままに勝利した。どうして彼らに合法的勝利があるか。(六)もし彼らが、ユディシティラが家で弟たちとゲームをしている時、彼の家に来て勝利したのなら、彼らの勝利は合法的と言える。(七)しかし彼らは、常に王族(クシャトリヤ)の法に専念する王に挑戦し、詐術により勝利したのであるから、どうして彼らが正しいことがあろうか。(八)
彼は約定をすべて果たし、森林の生活から解放されたのに、父祖伝来の地位につくために、どうして平伏しなければならないか。(九)もしユディシティラが他人の財産を望むのであるとしても、相手方にあまり懇願することはふさわしくない。(一〇)パーンダヴァたちが定められた亡命生活を終了したのに、彼らが発見されたと彼らは言う。どうして彼らが法にかなっていて、王国を奪おうとしていないと言えるのか。(一一)
彼らはビーシュマや偉大なドローナに説得されても、パーンドゥの息子たちに父祖伝来の財産を返すことに同意しない。(一二)私は戦場で鋭い矢により彼らを説得して、偉大なユディシティラの両足に平伏させてやろう。(一三)もし彼らが英邁な王に平伏することを承知しないなら、彼らは顧問たちとともにヤマ(閻魔)の住処(すみか)に行くことになろう。(一四)というのは、彼らは怒って戦おうとするユユダーナ(サーティヤキ)の激しさに耐えることはできないから。山々

が〔インドラの〕金剛杵に耐えることができないように。(二五) ガーンディーヴァ弓を持つ者（アルジュナ）、円盤を武器とするもの（クリシュナ）、そしてこの私に、戦いでかなう者はいるか。(二六) そしてまた、剛弓を持つ、ヤマにも似た、栄光に満ちた双子（ナクラとサハデーヴァ）に対し、生命を惜しむ者が立ち向かえようか。(二七) またドラウパディーの名声を高める、パーンダヴァたちの五人の息子に対して。彼らはパーンドゥの息子たちと同様の身体をし、同じように勇猛で、誇り高い。(二八) そして神々にも抗しがたい勇士アビマニユ、ガタ、プラデュムナ、サーンバ。それぞれカーラ（時間、破壊神）、金剛杵、火に等しい。(二九) そこで我々は、ドゥルヨーダナとシャクニとカルナを戦いで殺して、ユディシティラを即位させよう。(三〇) 危害を加えようとする敵を殺しても非法にはならない。しかし敵に懇願することは法にもとり、不名誉なことである。(三一) ユディシティラの心に存する願望を倦むことなく実現せよ。ドリタラーシトラに譲られた王国を彼が取り戻すように。(三二) 今こそパーンドゥの息子ユディシティラが王国を得るべきだ。さもなくば、彼らはすべて殺されて、地面に横たわることになろう。(三三)」

(第三章)

司祭をクル族のもとへ派遣する

ドルパダは言った。

「勇士よ、疑いもなくそのようになるであろう。ドゥルヨーダナは穏健な手段（柔懐）によっては王国を渡さないであろう。(一) そしてドリタラーシトラは息子可愛さで彼に従うだろう。ビーシュマとドローナは憐れみから、カルナとシャクニは愚かしさから彼に従うだろう。(二) 私の考えでは、バラデーヴァの言葉は適切でない。それはよい政策を望む人によってまず第一になされるべきことではある。(三) しかし、ドゥルヨーダナには甘い言葉を決して言うべきではない。というのは、邪悪な了見の彼は優しい言葉でつられはしないと私は思う。(四) 悪い心のドゥルヨーダナに優しい言葉を言うならば、驢馬に優しくして牛に厳しくするようなものだ。(五) 悪人は優しい言葉は能力のなさから生ずると考える。もし優しくすれば、愚かな者は、目的を成就したと思うであろう。(六)

我々は次のようにしよう。努力すべきである。盟友たちに使者を送り、我々のために軍隊の準備をさせるべきである。(七) シャリヤ、ドリシタケートゥ、強力なジャヤトセーナ、そしてすべてのケーカヤに、早飛脚を派遣しよう。(八) ドゥルヨーダナも必ずやすべての者に使者を送るであろう。しかし、我々が先に誘えば、善良な人々は先に要請した者につくであろう。(九) それ故、王たちに先に要請するように急ぎなさい。というのは、我々は大仕事をやらなければならないと私は考えるから。(一〇)(一一―二五略)

そして王よ、この私の司祭であるバラモンを急いでドリタラーシトラのもとに派遣すべきである。ドゥルヨーダナ、ビーシュマ、ドリタラーシトラ、最高の知者ドローナに言うべきことを彼に申しつけなさい。(二六―二七)」

(第四章)

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。
「この言葉はソーマカ一族の指導者にふさわしい。威厳に満ちたユディシティラ王の目的を成就するものだ。[一] もし我々が正しい政策を望むなら、それは最初にしなければならないことだ。別様にふるまう人は、非常に愚かであろう。[二] しかし、パーンダヴァとクルとがどのように望みのままに行動しようと、我々の彼らに対する関係は同等である。[三] 我々みなはあなたと同じように、結婚式のために招かれた。結婚式が終わったから、我々は喜んで家に帰ろうではないか。[四] あなたは年齢の点でも学識の点でも諸王のうちで最長老である。我々はすべてあなたの弟子のようであるということについては疑問の余地はない。[五] ドリタラーシトラはあなたをいつも尊敬している。そしてあなたは、ドローナとクリパという二人の師匠の友人である。[六] そこであなたは今日、パーンダヴァのためになる言葉を〔使節によりクルに〕送りなさい。あなたが送る言葉は、我々一同が決めたことである。[七] もしクルの雄牛が道理にかなって和平を結ぶなら、クル族とパーンドゥの息子たちの兄弟愛により、大帰滅はないであろう。[八] もしドゥルヨーダナが慢心し、迷妄から和平を結ばないなら、他の者たちに使者を派遣し、それから我々を召集すべきである。[九] それから、愚鈍なドゥルヨーダナは、顧問や縁者たちとともに、怒ったアルジュナによって滅亡することになろう。[一〇]」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
そこでヴィラータ王はクリシュナに敬意を表し、眷属や縁者とともに家に送り出した。[一一] クリシュナがドゥヴァーラカーに去った時、ユディシティラに従う者たちとヴィラータ王は、戦争のためのすべての準備をした。[一二] それからヴィラータとその親族、そしてドルパダ王は、すべての王に使者を送った。[一三] クルの獅子（パーンダヴァ）、マツヤとパーンチャーラの言葉により、強力な王たちは喜んで参集した。[一四]
パーンドゥの息子たちのために大軍が集結したことを聞いて、ドゥルヨーダナも諸王を招集した。[一五] その時、クルとパーンダヴァのために諸王が出動したので、すべての大地はごったがえしていた。[一六] 勇士たちの軍隊はあちこちから集まってきて、山や森林もろとも大地の女神を震動させるかのようであった。[一七] それからパーンチャーラ国王（ドルパダ）は、ユディシティラの同意を得て、叡知と年齢の点で長老である自分の司祭をクル族のもとに派遣した。[一八]

（第五章）

ドルパダは言った。
「万物のうちで生命（息気）あるものが最上である。生命あるもののうちで知性あるものが最上である。知性あるもののうちで人間が最上である。人間のうちでは再生者（バラモン、王族、ヴァイシャ。特にバラ

モン）が最上である。(一)再生者のうちでは博識者が最上である。博識者のうちでは知性を確立した者が最上である。あなたは知性を確立した者たちの最上者であると私は考える。(二)あなたは家柄の点でも年齢の点でも学識の点でも最高である。そして叡知にかけては、シュクラ（悪魔たちの師）やブリハスパティ（神々の師）にも劣らない。(三)あなたはドゥルヨーダナとユディシティラの人となりをよく知っている。(四)ドリタラーシトラの承認のもとに、パーンダヴァたちは敵に欺かれた。彼はヴィドゥラに説得されたのに、息子の言うことだけに従う。(五)賭博をわきまえたシャクニは悪知恵をめぐらし、賭博を知らないで王族（クシャトラ）の道に従う清らかなユディシティラに挑戦した。(六)彼らはあのようにダルマの息子ユディシティラを騙して、いかなる情況においても自ら王国を返そうとしない。(七)しかしあなたが法（ダルマ）をそなえた言葉をドリタラーシトラに言えば、あなたはきっと彼の戦士たちの心をひきつけることができよう。(八)ヴィドゥラもあなたの言葉を実行するであろう。ビーシュマとドローナとクリパを離間させるであろう。(九)顧問たちが離間し、戦士たちが顔を背ける時、彼らは再び結束しようと努力するであろう。(一〇)

その間、パーンダヴァたちは容易に心を一つにして、軍事的な仕事や財物の蓄積をすることができよう。(一一)味方は離間し、またあなたが係わっているので、彼らは我々と同じようには軍事的な仕事をできないことは確かだ。(一二)これがあなたの仕事の第一の目的である。

あなたと会えば、ドリタラーシトラはあなたの法にかなった言葉を実行するであろう。

(一三)あなたは法をそなえているから、彼らに対して法にかなって行動すべきである。情け深い人々に、パーンダヴァたちの苦難を語りつつ、(一四)そして長老たちに、先人により実行された一族（クラ）の法（ダルマ）を語れば、彼らの心は離間するであろう。その点は疑いない。(一五)あなたは彼らを恐れる必要はない。あなたはヴェーダを知るバラモンであるし、使節に任じられたものである。その上、あなたは長老である。(一六)そこであなたはプシュヤ（月宿の名）の合に、そしてジャヤの刻限に、ユディシティラの目的成就のために、速やかにクル族のもとに出発するべきである。(一七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

偉大なドルパダにこのように指示されて、その行ない正しい司祭は、象の都（ハースティナプラ）に向けて出発した。(一八)

（第六章）

アルジュナ、非戦のクリシュナを選ぶ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

マーダヴァ族のクリシュナとバラデーヴァ（バララーマ）が、すべてのヴリシュニとアンダカとボージャの幾百の人々とともに、ドゥヴァーラヴァティー（ドゥヴァーラカー）に向けて発った時、ドリタラーシトラの息子である王（ドゥルヨーダナ）は、使節や起用したスパイにより、パーンダヴァ

たちの行動をすべて知った。(一―二) 彼はクリシュナが去ったのを聞いて、自らも少数の兵を連れて、風のような駿馬によりドゥヴァーラカーの都に行った。(三) その同じ日に、パーンドゥの息子アルジュナも、急いで美しいアーナルタ国の都（ドゥヴァーラカー）に行った。(四)

二人の人中の虎は、クリシュナが眠っているのを見出して、そのそばに近づいた。(五) クリシュナが眠っている間に、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は入って行き、クリシュナの頭のそばの上等な座席に座った。(六) それから偉大なアルジュナは彼に続いて入り、クリシュナの足もとに、合掌して恭しく立っていた。(七) クリシュナは目覚め、先にアルジュナを見た。クリシュナは二人を歓迎し、ふさわしくもてなして、来訪のわけをたずねた。(八) するとドゥルヨーダナは微笑してクリシュナに言った。

「あなたは来るべき戦いにおいて、どうか私の援助をして下さい。(九) あなたの私に対する友情はアルジュナに対するものと同様です。また我々にも同じく、あなたとの結びつきがあります。マーダヴァよ。(一〇) クリシュナよ、私は今日、先にあなたのもとに来た。最上の善き人々は先に来た人につくものだ。(一一) クリシュナよ、あなたはこの世で、善き人々のうちの最上者であり、常に尊敬されている。善き人々の行なうことを守りなさい。(一二)」

クリシュナは言った。

「あなたが先に来たことは、私は疑わない。しかし王よ、私はアルジュナを先に見た。(一三) スヨーダナよ、私は二人に援助をしよう。(一四) しかしながら、年の若い方が先に選ぶべきであるとされている。それ故、アルジュナが先に選ぶべきである。(一五) 私には、ナーラーヤナという名で知られる、私と同等の力を持つ牛飼の無数の大群がいる。彼らはみな勇猛な戦士である。(一六) 戦いにおいて無敵な兵士たちが一方の側につく。そして、もう一方の側には、武器を収めて戦わない私個人がつくことにする。(一七) アルジュナよ、この二つのうちであなたがより好ましい方を選びなさい。法（ダルマ）によりあなたが先に選んでよい。(一八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナにそう言われて、アルジュナは戦場において戦わないクリシュナを選んだ。(一九) 一方ドゥルヨーダナ王は、クリシュナは戦いに加わらないことを知り、幾百万の兵士を得て最高に喜んだ。(二〇) 恐るべき力の彼は、そのすべての軍隊を得てから、強力なバララーマのもとに行った。(二一) そして彼は来訪のわけをすべてバララーマに話した。するとバララーマは、ドゥルヨーダナに次のように答えた。(二二)

「人中の虎よ、先にヴィラータの結婚式において私が語ったことを、すべて理解すべきである。(二三) クルの王よ、私はあなたのためにクリシュナを制して、双方の側に対する我々の関係は等しいと何度も告げた。(二四) しかしクリシュナは私が言ったことを受け入れなかった。そして私は、一瞬たりともクリシュナなしではいられない。(二五) クリシュナのことを考慮して、私はパーンダヴァたちにもドゥルヨーダナにも味方しないと決心した。(二六) あなたはすべての王に尊敬されるバラタ族の家系に生まれた。バラタの雄牛よ、行きなさい。王族の法により戦いなさい。(二七)」

このように言われて、彼はバララーマを抱きしめた。そしてクリシュナが戦いに加わらないことを知って、勝利が得られたと考えた。（二八）それからドゥルヨーダナ王はクリタヴァルマンのもとに行った。クリタヴァルマンは彼に大軍を与えた。（二九）そこでクルの王は喜んで、恐ろしいすべての軍隊に囲まれ、親しい人々を歓喜させつつ出発した。（三〇）

ドゥルヨーダナが去った時、クリシュナはアルジュナにたずねた。

「あなたはいかなる考えで戦わない私を選んだのか。（三一）」

アルジュナは答えた。

「あなたは疑いもなく彼らすべてを殺すことができる。私もまた一人で彼らを殺すことができる。最高の人よ。（三二）しかしあなたは世界的に誉れ高い。そこで名声はあなたに行ってしまうだろう。だが私も名声を求める。それ故、私はあなたを選んだのだ。（三三）ところで私は、いつもあなたに御者をしていただきたいと考えていた。長いこと望んで来た願いをどうかかなえていただきたい。（三四）」

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「アルジュナよ、私と競いたいとはあなたにふさわしい。私はあなたの御者をしよう。あなたの願いがかなうように。（三五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このようにして、喜んだアルジュナはクリシュナをともなって、ダーシャールハ族

（ヤーダヴァ）の主立った人々に囲まれて、再びユディシティラのもとにもどった。（三六）

（第七章）

シャリヤとの約束

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

シャリヤは使者たちの言葉を聞くと、勇士である息子たちとともに、大軍に囲まれて、パーンダヴァたちのもとに行こうと軍を進めた。（一）（二―五略）ドゥルヨーダナはその勇士が大軍を率いてやって来るのを聞いて、急いで出かけて行って、自ら敬意を表した。（六）

ドゥルヨーダナは彼をもてなすために、心地よい場所に、宝石をちりばめて美しく飾られたいくつかの宿舎を作らせた。（七）シャリヤは各地でそれらの宿舎に着くと、ドゥルヨーダナの重臣たちに神のようにふさわしく接待された。そして神々の家のように輝く他の宿舎に着いた。（八）彼はそこでこの世のものでないような心地よい感官の対象を享受して、自分は並外れていると思い、インドラをも低く見るほどであった。（九）そこでこの王族（クシャトリヤ）の雄牛は喜んで、召使たちにたずねた。

「ユディシティラの臣下たちがこれらの宿舎を作ったのか。宿舎を作った人たちを連れて来なさい。謝礼をしたいと思うから。（一〇）」

そこで隠れていたドゥルヨーダナは、母方の伯父（実はパーンダヴァの伯父）の前に姿を現わした。マド

ラ国王（シャリヤ）は彼を見ると、すべて彼の努力であると知り、喜んで彼を抱きしめて、「望みのことをかなえてあげよう」と告げた。（一一）

ドゥルヨーダナは言った。

「すばらしい方よ、約束を守って下さい。私の願いをかなえて下さい。どうか私の全軍の司令官になって下さい。（一二）」

シャリヤは「よろしい」と言って、「他に何をしようか」とたずねた。ドゥルヨーダナは「十分です」とのみ、何度も答えた。（一三）そしてシャリヤに別れを告げ、自分の都にもどった。

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

シャリヤは彼の行なったことを話すために、パーンダヴァたちのもとに行った。（一四）シャリヤはウパプラヴィヤに着くと、本営に入ってすべてのパーンダヴァたちに会った。（一五）勇士シャリヤはパーンドゥの息子たちに会い、洗足の水と接客用の品と牛を作法通りに受け取った。（一六）勇猛なマドラ国王は、まず息災かどうかたずね、最高に喜んでユディシティラを抱きしめた。（一七）それから喜んだビーマとアルジュナを、そして妹（マードリー）の息子である双子を抱きしめた。座席についたシャリヤは、ユディシティラに告げた。（一八）

「王中の虎よ、息災であるか。最高の勝利者よ、幸いなことにそなたは森林の生活から解放された。（一九）そなたは人のいない森林に住み、非常になしがたいことをなした。弟たちや

クリシュナー（ドラウパディー）とともに。王中の王よ。（二〇）そしてそなたは、恐ろしく行ないがたい、人に知られずに生活することをなしとげた。バーラタよ、王国を失ったものには苦難のみがあり、どこに幸福があるか。（二一）しかしドリタラーシトラの息子がもたらした大きな苦難の後で、勇猛な王よ、そなたは敵たちを殺して幸福を得るであろう。（二二）偉大な王よ、そなたは世間の真実を知っている。それ故わが子よ、そなたには貪欲のもたらす害は何も認められない。（二三）」

それからシャリヤ王は、ドゥルヨーダナと会ったこと、すべての約束、願いをかなえたことを彼に語った。（二四）

ユディシティラは言った。

「勇猛な王よ、あなたが心から満足してドゥルヨーダナと約束したことは、善行をなさいました。しかし王よ、どうか一つだけやっていただきたいことがあります。（二五）偉大な王よ、この世であなたは戦闘にかけてヴァースデーヴァ（クリシュナ）に匹敵します。最高の王よ、カルナとアルジュナが一騎打ちになった時、あなたは疑いなくカルナの御者になるでしょう。（二六）王よ、もし私に好意をかけて下さるなら、アルジュナを守って下さい。そしてカルナの威光を殺すようにして下さい。そうすれば我々が勝利します。それはなすべき行為ではないかも知れませんが、どうかそのようにして下さい。伯父上。（二七）」

シャリヤは言った。

「パーンダヴァよ、どうか聞いて欲しい。そなたは戦場において、邪悪なカルナの威光を殺

してくれと私に頼んだ。(二八)私は必ずや戦いにおいて彼の御者になるであろう。彼は常に私がヴァースデーヴァに等しいと思っているから。(二九)ユディシティラよ、戦場で彼が戦おうと望む時、私は必ず彼に逆らうこと、有益でないことを語るであろう。(三〇)その結果、彼は誇りを失い、威光を失い、容易に殺されることになろう。パーンダヴァよ、私はそなたにこの約束をする。(三一)わが子よ、そなたが私に言った通りにするであろう。そして、その他のことでもそなたのためになることは、私にできることなら何でもしよう。(三二)そなたがクリシュナー(ドラウパディー)とともに賭博で受けた苦難、カルナの言った乱暴な言葉、ジャタースラとキーチャカによる苦難、輝きに満ちた者よ、ドラウパディーがダマヤンティーと同じように経験したすべての苦難、勇士よ、これらの苦難はすべてハッピーエンドとなるであろう。そなたはそのことを怒ってはいけない。運命はより強力であるから。(三三―三五)ユディシティラよ、実に偉大な人々は苦難を受けるものだ。王よ、神々も苦難を経験した。(三六)バラタ族の王よ、偉大な神々の王インドラは妻とともに大なる苦難を経験したと伝えられている。(三七)」

(第八章)

インドラの勝利

インドラ、トリシラスを殺す

ユディシティラはたずねた。

「王中の王よ、どのようにして偉大なインドラが妻とともに最高に恐ろしい苦難を経験したのですか。それを知りたいと思います。(一)」

シャリヤは語った。――

「王よ、昔の出来事を説く古い伝説を聞きなさい。インドラが妻とともに苦難を受けた次第を。バーラタよ。(二)

造物主(プラジャーパティ)であるトゥヴァシトリは神々のうちの最上者で、偉大な苦行者であった。彼はインドラ(帝釈天)を憎んで、トリシラス(三つの頭を持つ者)という息子を創造したという。(三)この輝きに満ちたヴィシュヴァルーパ(トリシラス)は、太陽と月と火に似た三つの顔により、インドラの地

位を望んだ。(四) 彼は一つの口でヴェーダを学習した。一つの口で酒を飲んだ。そして一つの顔で、すべての方角を呑み込むかのように凝視した。(五) この苦行者は温和で自制し、法《ダルマ》と苦行に努力し、非常に行ないがたい激しい大苦行を行じた。(六) シャクラ(インドラ)は無量の威光を持つ彼の苦行の力と精神力を見て、「彼がインドラ(神々の王)になるのでは」と考えて心配した。(七)

「どのようにしたら彼が諸々の享楽にふけるようになるか。そして激しい苦行をやめるか。トリシラスが増大したら、彼は三界(全世界)を呑むであろう。(八)」

バラタの雄牛よ、英邁な彼はこのように何度も考えた末、天女《アプサラス》たちにトゥヴァシトリの息子を誘惑するように命じた。(九)

「すぐにあのトリシラスが享楽にこの上なく執着するようにせよ。急いで行って誘惑せよ。(一〇) 美しい尻の女たちよ、愛を高める衣裳を身につけ、魅力的な風情で誘惑せよ。どうか私の恐れを鎮めてもらいたい。(一一) 美しい女たちよ、私は具合がよくないようだ。この非常に恐ろしい恐怖を早く取り除いてくれ。(一二)」

天女たちは言った。

「シャクラよ、あなたが彼を恐れることがないように、私たちは彼を誘惑するために努力します。(一三) あの苦行者はその眼ですべてを燃やすかのように座っています。神よ、私たちは彼を誘惑するためにそろって行って参ります。彼を虜にしあなたの恐れを除くよう努力します。(一四)」

シャリヤは語った。——

彼女たちはインドラに送り出されて、トリシラスのもとに行った。そこで美女たちは、彼を種々の手練手管で誘惑しようとした。舞踊を見せたり、肢体の美しさを見せたりして動きまわった。しかし大苦行者は喜ばなかった。彼は満潮の海のように、諸感官を制御していた。(一五―一六) 彼女たちは最高に努力したが、再びシャクラのもとに帰った。彼女たちはみなして合掌して神々の王に言った。(一七)

「主よ、彼は難攻不落で、平静さを失わせることはできません。気高い方よ、次にすべきことをなさって下さい。(一八)」

叡知に満ちたシャクラは天女たちをねぎらってから退出させ、偉大なトリシラスを殺す方法を考えた。(一九) 勇猛で栄光ある神々の王は沈思黙考した。そして聡明な彼は、トリシラスを殺す決意をした。(二〇)

「今日、金剛杵《ヴァジュラ》を投じて、速やかに彼を殺そう。強力な者は、弱小の敵といえども増大している場合は、それを無視すべきではない。(二一)」

教典の知性により決定し、殺そうと堅く決意して、シャクラは怒って火のような恐ろしい形の、恐怖をもたらす金剛杵を、トリシラスめがけて放った。(二二) トリシラスはその金剛杵に強く打たれて死に、地面に崩れ落ちる山頂のように倒れた。(二三) 神々の王は、金剛杵に打たれて山のように横たわっている彼を見て、彼の威光《テージャス》に燃やされるかのようで、心が

安まらなかった。彼は殺されてもその威光が燃え上がり、まるで生きているかのようであった。(二四)

その時シャクラはその付近で仕事をしている樵(きこり)を見た。そこでシャクラは急いで彼に言った。

「すぐに彼の頭を切れ。私の言う通りにせよ。(二五)」

樵は言った。

「彼はひどく大きな肩をしている。この斧では切れない。また、私は善き人々に非難される行為をすることはできない。(二六)」

インドラ(シャクラ)は言った。

「恐れることはない。すぐに私の言葉を実行せよ。私の恩寵により、お前の斧は金剛杵のようになるであろう。(二七)」

樵は言った。

「今日、このような恐ろしい行為をしたあなたは誰ですか。私はお聞きしたい。ありのまま私に語って下さい。(二八)」

インドラは言った。

「私は神々の王インドラだ。樵よ、覚えておいてくれ。言われた通りにやれ。ぐずぐずするな。(二九)」

樵は言った。

「シャクラよ、このような残酷な行為をして、どうして恥じないのですか。この聖仙の息子を殺して、バラモン殺しを恐れないのですか。(三〇)」

インドラは言った。

「後で浄めのために非常になしがたい法(ダルマ)を行なうであろう。この強力な敵は、私が金剛杵で殺した。(三一)しかし樵よ、今もなお私は不安で彼を恐れている。すぐに頭を切ってくれ。お前に恩寵を与えるであろう。(三二)祭祀において人々は犠牲獣の頭をお前の取り分として与えるであろう。樵よ、これがお前への恩寵だ。すぐに私の望み通り実行しなさい。(三三)」

シャリヤは語った。――

樵は大インドラの言葉を聞いて、トリシラスの頭を斧で切った。(三四)それらが切られた時、山鳥(カピンジャラ)、鷓鴣(しゃこ)(ティッティラ)、雀(カラヴィンカ)などがトリシラスから一斉(いっせい)に飛び立った。(三五)ヴェーダを学習しソーマ汁を飲んだ彼の口からは、速やかに山鳥たちが出た。(三六)三界を呑みそうに凝視した彼の顔(口)からは鷓鴣たちが出た。(三七)酒を飲んでいたトリシラスの口からは雀たちが出た。(三八)それらの頭が切られた時、インドラは苦熱も去り、喜んで天界へ帰った。樵も自分の家に帰った。(三九)

造物主トゥヴァシトリは、シャクラにより息子が殺されたことを聞いて、怒りで眼を赤くして、次のように言った。(四〇)

「私の息子は常に苦行を行じ、忍耐あり、自制し、感官を制御している。彼はその罪もない

私の息子を殺した。(四一) そこでシャクラを殺すために、私はヴリトラを創造する。世界の者たちは私の精力と苦行の大きな力を見るがよい。あの邪悪な心をした悪党、神々の王も見るがよい。(四二)」

それから誉れ高い苦行者は怒って、水に触れ、火中に供物を投じ、恐ろしいヴリトラを創り出して告げた。

「インドラの敵よ、私の苦行の力によって増大せよ。(四三)」

太陽や火のような彼は、天空を支えるかのように成長した。彼は終末の太陽が昇るかのように立ち上がり、「何をいたしましょうか」とたずねた。そして「シャクラを殺せ」と命じられて、天界へ行った。(四四)

それから、猛り立ったヴリトラとインドラとの間に、非常に恐ろしい絶え間のない戦いが行なわれた。(四五) 勇猛なヴリトラは怒って、神々の王シャクラをつかまえ、口を開いて呑んだ。(四六) シャクラがヴリトラに呑まれた時、強力な神々は動揺したが、ヴリトラを滅ぼすべく、あくび(ジュリンビカー)を創り出した。(四七) それから、インドラは自分の体を小さくして、開いたヴリトラの口から抜け出した。それ以来、諸世界においては、あくびが生き物に宿るようになった。(四八) すべての神々は、シャクラが脱出したのを見て喜んだ。それから再び、怒ったヴリトラとインドラとの非常に長く恐ろしい戦いが始まった。(四九)

戦闘において、強力なヴリトラが、トゥヴァシトリの苦行の力により増大した時、賢明なシャクラは退却した。(五〇) 彼が退却したので、神々はこの上なく悲嘆に暮れた。彼らはす

べてトゥヴァシトリの威光に当惑して、シャクラといっしょに、聖者(ムニ)たちとともに協議した。(五一) 彼らはみな恐怖にかられ、マンダラ山頂に座り、ヴリトラを殺したいと願って、そろって偉大な不滅の神ヴィシュヌを念想した。(五二) (第九章)

インドラ、ヴリトラを殺して姿を消す

インドラは言った。

「神々よ、この不滅の全世界はヴリトラによりおおわれた。彼に匹敵しこれを阻止できるようなものは何もないから。(一) かつては私もそれが可能であったが、今は可能ではない。一体どのようにしたらよいだろう。汝らに幸あらんことを。彼は無敵であると思う。(二) 彼は威光あり偉大で、戦闘において無量の勇武を発揮する。彼は神や阿修羅や人間たちもろとも、三界すべてを呑みこむだろう。(三) それ故、天に住む者たちよ、私の決意を聞きなさい。ヴィシュヌの住処に近づき、その偉大な神と会い、彼と相談して、あの邪悪なヴリトラを殺す方法を知ろう。(四)」

シャリヤは語った。――

インドラにそう言われて、神々と聖仙の群は、庇護者である強力な神ヴィシュヌに庇護を求めた。(五) 彼らはすべてヴリトラを恐れて悩み、神々の主ヴィシュヌに告げた。

「主よ、あなたは三歩で三界を闊歩した。(六)ヴィシュヌよ、あなたは甘露(アムリタ)を奪い、戦闘で悪魔たちを殺した。あなたは偉大な悪魔バリを縛り、シャクラ(インドラ)を神々の王にした。(七)あなたは全世界の主であり、あなたにより全世界は満たされている。神よ、あなたは実に偉大な神であり、全世界の者たちに尊敬されている。(八)最高の神よ、あなたはインドラをはじめとする神々の寄る辺となって下さい。阿修羅を殺す者よ、この全世界はヴリトラによって遍く満たされている。(九)」

ヴィシュヌは言った。

「必ずやあなた方に最も有益なことをするであろう。それ故、彼が亡き者になるような方策を言う。(一〇)聖仙やガンダルヴァ(半神の一種)たちとともに、一切の姿をとる彼のもとへ行きなさい。彼に対し懐柔策を採用せよ。そうすれば彼を滅ぼすことができよう。(一一)神々よ、私の威光により、シャクラに道が見出されるだろう。私は姿を隠して、彼の最高の武器である金剛杵(ヴァジュラ)に入り込むであろう。(一二)最高の神々よ、聖仙やガンダルヴァたちとともに出かけて行き、すぐにヴリトラとシャクラとの和平を締結せよ。(一三)」

シャリヤは語った。——

神にそのように言われて、シャクラをはじめとする神々と聖仙たちはそろって出発した。(一四)そしてすべての威厳に満ちた神々は、威光で輝き十方を燃やしているヴリトラに近づいた。(一五)シャクラと神々はそこで、三界と太陽と月を呑みこんでいるかのようなヴリト

ラを見た。(一六)そこで聖仙たちは、近づいてヴリトラに友好的な言葉を述べた。

「無敵の者よ、この全世界はあなたの威光で満たされている。(一七)しかしあなたは勇武に満ちたヴァーサヴァ(インドラ)をうち破ることはできない。あなた方が戦っている間に、非常に長い時間が経過した。(一八)神や阿修羅や人間たちをはじめ、すべての生類が苦しんでいる。ヴリトラよ、シャクラとともに恒久的な友好関係を結んで下さい。そうすれば、あなたは幸福になり、永遠のシャクラの世界を得るでしょう。(一九)」

非常に強力な阿修羅ヴリトラは、聖仙たちの言葉を聞くと、頭を下げて挨拶し、彼らすべてに言った。(二〇)

「高徳の方々よ、あなた方すべてと、すべてのガンダルヴァたちが言われたことは、すべて承った。非の打ち所のない方たちよ、私の言うことも聞いてくれ。(二一)私とシャクラとの両者の和平はどのようにしたら実現するか。神々よ、二つの威光がどのようにしたら和合するか。(二二)」

聖仙たちは言った。

「善き人々の結びつきは一度は望まれるべきである。それから後は、なるようになるであろう。善き人との結びつきを逸すべきではない。それ故、善き人々との結びつきを望むべきである。(二三)善き人々との結びつきは強固で恒久的である。賢者は難局に際して実利(アルタ)について説くであろう。善き人々との結びつきは非常に利益のあることである。それ故、賢者は善き人を殺そうと望むべきではない。(二四)

インドラは善き人々に尊敬されており、偉大な人々の拠り所である。彼は真実を語り、意気消沈することなく、法を知り、非常に確固としている。(二五)それ故、あなたとシャクラとは恒久的な和平を結ぶべきである。このように信頼しなさい。考え違いしてはならぬ。(二六)」

シャリヤは語った。——

光輝に満ちたヴリトラは大仙たちの言葉を聞くと、彼らに告げた。

「苦行を積んだ尊者たちは、必ずや私によって尊敬されるべきである。(二七)神々よ、私が言うことをすべて実行しなさい。そうすれば、このバラモンの雄牛たちが言ったことをすべて行なうであろう。(二八)乾いたものによっても、濡れたものによっても、石や木材によっても、通常の武器によっても金剛杵によっても、昼も夜も、私がシャクラ(インドラ)と神々によって殺されることのないように。最高のバラモンたちよ。このようにすれば、私はシャクラとの和平を常に歓迎する。(二九―三〇)」

聖仙たちは「承知した」と彼に答えた。

このようにして和平が成立した時、ヴリトラは非常に喜んだ。(三一)しかしインドラは遺恨を抱き、いつもヴリトラを殺す方法を考えることに専念していた。彼は不安にかられ、常に隙をうかがっていた。(三二)

ある時、彼は海辺でその偉大な阿修羅を見た。それは美しくも恐ろしくもある黄昏

(または、黎明)であった。(三三)それからインドラは偉大な神(ヴィシュヌ)が恩寵を授けたことを思い出し、次のように考えた。

「今は恐ろしい黄昏である。夜でも昼でもない。私のすべてを奪う敵であるヴリトラをどうしても殺すべきである。(三四)もし今日、騙し討ちにより、強力で巨大な大阿修羅ヴリトラを殺さなければ、私は浮かばれないだろう。(三五)」

シャクラ(インドラ)はこのように考え、ヴィシュヌを念じたところ、その時、彼は海上に山のような泡を見出した。(三六)

「これは乾いていても濡れてもいない。そしてこれは武器ではない。これをヴリトラに投げれば、奴は直ちに死ぬであろう。(三七)」

そこで彼は、金剛杵のように(原文を少し読み替えた)その泡をヴリトラめがけて速やかに投じた。ヴィシュヌはその泡に入りこんでヴリトラを殺した。(三八)

ヴリトラが殺された時、諸方は闇を脱した。吉祥の風が吹き、生類は歓喜した。(三九)そして神々とガンダルヴァ、夜叉、羅刹、蛇、聖仙たちは、種々の讃歌により偉大なインドラを讃えた。(四〇)インドラは一切の生類に敬礼され、一切の生類を慰撫し、敵を殺して神々とともに心から喜び、法を知る彼は三界における最高者であるヴィシュヌに敬意を表した。(四一)

しかしながら、神々を恐れさせる強力なヴリトラが殺された時、シャクラは最高に意気消沈し、自ら犯した虚偽に圧倒された。しかも彼は、以前にトリシラスの件で、バラモン殺し

の罪にうちひしがれていた。(四二)神々の王は自分の犯した罪により、正気を失い、茫然自失し、諸世界の果てに達し、何もわからなくなった。そしてうごめく蛇のように水中に隠れ住んだ。(四三)

神々の王がバラモン殺しの恐怖に悩んで姿を消した時、樹木がなくなり、森林は干涸（ひから）び、大地はほとんど滅亡したかのようになった。河川は流れなくなり、湖水には水がなくなった。(四四)雨が降らないので諸生物は苦しみ、神々とすべての偉大な聖仙たちはひどく恐れた。(四五)王がいないのですべての世界は種々の災禍に悩まされた。そこで神々は「誰が我々の王になるか」と恐れ気づかった。(四六)天界において、神や聖仙たちは神々の王を失ったが、誰も神々の王になろうとは思わなかった。(四七)（第十章）

ナフシャ、神々の王になる

シャリヤは語った。——

その時、すべての聖仙と主立った神々は言った。

「あの栄光あるナフシャを神々の王位につけるべきである。」

彼らはみなして〔ナフシャのもとに〕出かけて行って、「王よ、我々の王になって下さい」と告げた。(二)ナフシャは自分の幸せを願って、神々や聖仙の群や祖霊たちに答えた。(三)

「私は無力である。私にはあなた方を守る力はない。強力な者が王になる。シャクラ（インドラ）

には常に力があった。(三)」

聖仙たちに先導されたすべての神々は再び彼に言った。

「我々の苦行（タパス）（熱力）により強化されて天界の王位を守りなさい。(四)疑いもなく我々はお互いにひどく恐れている。王中の王よ、即位式をしなさい。天界の王になりなさい。(五)神々、悪魔、夜叉、聖仙、羅刹、祖霊、ガンダルヴァ（半神の一種）、鬼霊（ブータ）たちがあなたの視界に入ったら、あなたはそれを見てその威光（アージャス）を奪って強力になるであろう。(六)常に法（ダルマ）を前提として、全世界の帝王となりなさい。天界において梵仙（バラモン出身の聖仙）たちや神々を守護しなさい。(七)」

ナフシャはこの非常に得られがたい恩寵を得て天界の王位を得ると、常に徳性ある者であったのに、次第に享楽的になった。(八)すべての神々の庭園において、歓喜園（ナンダナ）において、カイラーサ山において、ヒマーラヤの頂において、マンダラ山において、シュヴェータ山、サヒヤ山、マヘーンドラ山、マラヤ山、諸々の海や川において、ナフシャは神々の王として、天女（アプサラス）たちに囲まれ、神々の娘に取り巻かれ、様々に遊び戯れた。(九—一〇)そして耳に心地よい多くの神的な物語を聞き、甘美な音のありとあらゆる器楽や歌を聞いた。(一一)ヴィシュヴァーヴァス（半神の名）、ナーラダ（神仙の名）、ガンダルヴァや天女の群、実際に身体を持った六つの季節が、神々の王に仕えた。芳しく、心地よく、快く涼しい風が吹いた。(一二)

偉大なナフシャがこのように遊び戯れている時、シャクラの愛しい妃である女神（シャチー）が彼の眼に留まった。(一三)彼は彼女を見ると邪（よこしま）な心を抱き、すべての宮廷にいる人々に告げた。

「インドラの妃である女神がどうして私に奉仕しないのか。(二四) 私は神々のインドラ（王）であり、世界の主である。シャチーを今すぐ私の宮殿に来させろ。(二五)」

それを聞くと女神は悲しみ、ブリハスパティ（神々の師）に言った。

「バラモンよ、私をナフシャから守って下さい。私はあなたに庇護を求めます。(二六) あなたは私がすべての吉相をそなえていると告げました。そして神々の王の愛しい妻として最高の幸福を享受すると。(二七) そしてまた、私が寡婦とならない相をそなえ、貞節で夫に忠実な妻になると、以前あなたは私に告げました。その言葉を真実のものにして下さい。(二八) 尊者よ、あなたはかつて嘘をついたことは決してありません。それ故、最高のバラモンよ、あなたに言われたことが真実になりますように。(二九)」

するとブリハスパティは、恐怖にかられたインドラーニー（シャチー）に答えた。

「女神よ、私が告げたことは必ずやその通りになるであろう。(三〇) あなたは遠からず神々の王インドラがここに帰るのを見るであろう。ナフシャのことを恐れる必要はない。私はこの真実をあなたに告げる。私は遠からずしてあなたをインドラと再会させるであろう。(三一)」

その時ナフシャ王は、インドラーニーがブリハスパティ・アンギラスに庇護を求めたことを聞いて怒った。(三二)

（第十一章）

インドラの妃シャチーの苦難

シャリヤは語った。――

聖仙たちに先導される神々は、ナフシャが怒ったことを知り、恐ろしい様子をした神々の王ナフシャに言った。(一)

「神々の王よ、怒りを捨てて下さい。主よ、あなたが怒ると、阿修羅、ガンダルヴァ、キンナラ、大蛇を含む世界が戦慄します。(二) 善き人よ、怒りを捨てなさい。あなたのような方は怒らないものです。神々の王よ、あの女神は他の男の妻です。お許し下さい。(三) 他人の妻を犯すという罪悪を思いとどまりなさい。あなたは神々の王です。どうかお願いです。臣民を法（ダルマ）により守って下さい。(四)」

このように言われても、愛欲に惑わされた彼はその言葉を受け入れなかった。その時、神々の王はインドラについて神々に次のように言った。(五)

「インドラはかつて、誉れある聖仙の妻アハリヤーを、夫が生きているのに犯した。あなた方は何故、彼を制止しなかったのか。(六) インドラは昔、多くの残酷な行為をした。法にもとる行為や詐術を行なった。あなた方は何故、彼を制止しなかったのか。(七) あの女神は私に仕えるべきだ。それが彼女にとって最高に幸せなことだ。そして神々よ、あなた方にとっても常に幸せになるであろう。(八)」

神々は言った。
「神々の主よ、あなたの望み通り、インドラーニーを連れて来ます。勇士よ、怒りを捨てて下さい。神々の王よ、満足して下さい。(一九)」
シャリヤは語った。――
神々はそのように言うと、聖仙たちとともに、インドラーニーに対して好ましくない知らせを伝えるために、ブリハスパティのところに行った。(二〇)
「インドラーニーがあなたの家に庇護を求めたことを我々は知っています。そしてあなたが彼女の安全を保証したことも。バラモンの王よ、最高の聖仙よ。(二一)
神々とガンダルヴァと聖仙たちはあなたにお願いします。インドラーニーをナフシャに引き渡して下さい。(二二) 光輝に満ちた神々の王ナフシャはインドラよりも優れています。この美しい尻をした美しい顔色の女が彼を夫として選ぶように。(二三)」
このように告げられると、女神は声をあげて涙を流し、哀れな様子で泣きながらブリハスパティに次のように言った。(二四)
「私はナフシャを夫にしたくありません。あの主人に仕えたのに……。バラモンよ、私はあなたに庇護を求めたのです。この大きな恐れから私を救って下さい。(二五)」
ブリハスパティは言った。
「インドラーニーよ、私は庇護を求めて来たあなたを決して捨てない。非の打ち所のない女よ、私は法(ダルマ)を知りいつも法を実践するあなたを捨てない。(二六) 特に私はバラモンであるから、私はなすべきでないことをしたくはない。私は法について学び、真実を習いとし、法についての教えを知っている。(二七) 私はそのようなことをしない。最高の神々よ、去りなさい。このことについて、かつて梵天が詠じたことを聞きなさい。(二八)
『彼にとって種子は種まきの時に生じない。彼にとって雨は雨の時期に雨降らない。恐れて頼って来た人を敵に渡す者は……。彼が救助を求めても助けを見出せない。(二九)
彼は正気でなくなり、食物を見出すことはない。彼は意識を失い、天界から堕(お)ちるであろう。恐れて頼って来た人を敵に渡す者は……。神々は彼の供物を受けることはない。(三〇)
彼の子孫は時ならぬ時に死ぬ。彼の父はいつも不在である。恐れて頼って来た人を敵に渡す者は……。インドラをはじめとする神々は、彼に金剛杵を投ずる。(三一)』
このように理解して、私はこのインドラの妃シャチーを渡さないであろう。彼女はシャクラの愛しい妻として世に知られている。(三二) 最高の神々よ、彼女のためになるように、また私のためになるようにして下さい。私は決してシャチーを渡さない。(三三)」
シャリヤは語った。――
そこで神々は、アンギラス族の最上者である師に言った。
「ブリハスパティよ、どのようにことを運んだらよいだろうか。教えて下さい。(三四)」
ブリハスパティは言った。

る。それが彼女のためにもなり、我々のためにもなるであろう。(二五) 時間は多くの障碍を作る。時間は時間を導く。ナフシャは〔今、神々の〕恩寵により強力で高慢である。(二六)」

シャリヤは語った。——

彼がそう告げた時、神々は喜んで彼に言った。

「バラモンよ、よくぞ言われた。それはすべての天界に住む者たちにとって有益なことだ。その通りである。最高のバラモンよ。そしてこの女神にお願いしなければならぬ。(二七)」

それから、アグニ(神火)をはじめとするすべての神々は、諸世界の幸せを願って、インドラーニーに一心に頼んだ。(二八)

「あなたは動不動のこの全世界を担っている。あなたは貞節な妻で、約束を守る。ナフシャのもとに行って下さい。(二九) あなたを渇望するナフシャ王はすぐに滅びるであろう。女神よ、シャクラは神々の主に復帰するであろう。(三〇)」

このように決定して、目的を成就するために、インドラーニーは屈辱を感じながらも、恐ろしい姿のナフシャのもとに行った。(三一) 邪悪なナフシャの方は、若さと容色をそなえた彼女を見て、愛欲にかられて有頂天になった。(三二)

(第十二章)

シャリヤは語った。——

神々の王ナフシャは彼女を見て言った。

「美しい微笑の女よ、私は三界の王である。美しい尻をした美しい顔色の女よ、私を夫として愛せ。(一)」

このようにナフシャに言われて、夫に貞節な女神は恐怖にかられて、風の中のバナナの木のようにふるえた。(二) 彼女は梵天(ブラフマー)に敬礼し、頭上で合掌し、恐ろしい姿の神々の王ナフシャに言った。(三)

「神々の王よ、あなたからしばしの時間をいただきたいと思います。シャクラがどうなったか、そしてどこへ行ったかわかりません。(四) 真相を知ったら、あるいはわからないでも、私はあなたに仕えるでしょう。主よ、私はあなたにこのように誓います。」

インドラーニーにこのように言われてナフシャは喜んだ。(五)

ナフシャは言った。

「美しい尻の女よ、あなたが私に言った通りにしよう。〔シャクラの行方を〕調べたら来なさい。この誓いを忘れないように。(六)」

シャリヤは語った。——

その美しい女は、ナフシャと別れて退出した。そしてその哀れな女はブリハスパティの家に行った。(七) 彼女の言葉を聞くと、アグニ(神火)をはじめとする神々は、シャクラのために一心に相談した。(八) 心配した彼らは神々の神である主ヴィシュヌに会い、弁舌に長じた彼

らはヴィシュヌに次のように言った。(九)
「神群の王シャクラはバラモン殺しの罪でうちひしがれています。神々の主よ、世界で第一に生じた主であるあなたは我々の寄る辺です。あなたは一切万物の守護のためにヴィシュヌの相をとりました。(一〇)あなたの力によりヴリトラが殺された時、インドラはバラモン殺しの罪を負いました。神群の最上者よ、彼が救済される方法を教えて下さい。(一一)」
神々の言葉を聞いてヴィシュヌは告げた。
「シャクラは私に対して祭祀を行なうべきである。私は彼を浄化するであろう。(一二)インドラは清浄な馬祀(アシュヴァメーダ)により私を崇拝すれば、彼は何の恐れもない神々の王(インドラ)の位に復帰するであろう。(一三)愚かなナフシャは自分の行為によって破滅するであろう。神々は怠ることなく、少しの時間、彼のことを辛抱せよ。(一四)」
ヴィシュヌの甘露のようなすばらしい真実の言葉を聞いて、すべての神々の群は、師(ブリハスパティ)と聖仙たちとともに、シャクラが恐怖にうちひしがれている場所に行った。(一五)そこで、バラモン殺しの罪を滅する、偉大な大インドラの盛大な馬祀が、贖罪のために行なわれた。(一六)彼はバラモン殺しの罪を、樹木、河川、山、大地、女性に配分した。(一七)神々の王インドラはそれを種々のものに配分し、遺棄して、その罪が浄められ、熱を離れ、自分を取りもどした。(一八)しかしインドラは、ナフシャがその地位から揺らぐことなく、すべての生類の威光を奪い、神々の恩寵により無敵なのを見た。(一九)そこで勇猛なシャチーの夫は再び消え失せた。彼はすべての生類から身を隠し、時の至るのを待ってさすらっていた。

(二〇)
シャクラが失踪した時、女神シャチーは悲しみに暮れ、非常に苦しんで、「ああ、シャクラよ」と嘆いた。(二一)
「もし私が布施をし、祭祀を行ない、目上(グル)を満足させたなら、もし私に真実が存するなら、一人の夫のみを持つという誓いを守らせて下さい。(二二)そして私は、〔太陽の〕北行の時期(冬至)に入った、清浄で神聖な夜の女神に、私の願望がかなうように敬礼するでしょう。(二三)」
そこで彼女は、専念して夜の女神を崇拝した。彼女は夫に貞節であったから、またその真実により、彼女はウパシュルティ(予知能力を持つ女神)を作り出した。(二四)女神(シャチー)はウパシュルティに言った。
「神々の王がいる場所を私に見せておくれ。真実を真実により示して下さい。(二五)」
(第十三章)

シャリヤは語った。——

シャチー、インドラに再会する

その時、ウパシュルティは美しい貞女のそばに立った。若さと容色にめぐまれた女神がそばに立っているのを見て、インドラーニー(シャチー)は喜んで、彼女に敬意を払ってたずねた。

「私はあなたのことを知りたい。あなたは誰ですか。美しい顔の女(ひと)よ、言って下さい。(一二)」

ウパシュルティは言った。

「女神よ、私はウパシュルティです。あなたのもとに参りました。あなたの真実に満足して会いに来ました。(三)あなたは夫に貞節で、禁戒(ヤマ)と誓戒(ニヤマ)をそなえています。私はあなたをヴリトラの殺戮者である神シャクラに会わせてあげます。どうぞすぐに私の後について来なさい。最高の神に会えるでしょう。(四)」

シャリヤは語った。――

それから、インドラーニーは出発したその女神について行った。そして神々の森を過ぎ、多くの山々を越え、ヒマーラヤを越えてその北側に出た。(五)そして何由旬(ヨージャナ)も広がる海に達して、種々の樹木や蔓で満ちた大きな島に着いた。(六)そこで、種々の鳥に満ちた神聖な湖を見た。それは百由旬の幅と百由旬の奥行きを持ち、美しい湖であった。(七)そこには五色の神々しい蓮があり、幾千と開花していた。蜂たちがそこで羽音をたてていた。(八)ウパシュルティとともに、彼女が蓮の茎を破って中に入って行くと、蓮根の糸に入りこんだインドラを見つけた。(九)非常に微細な姿でそこにいる主を見ると、女神とウパシュルティも微細な姿をとった。(一〇)

そしてインドラーニーは、広く知られた過去の業績を讃えてインドラを満足させた。すると讃えられたインドラ神はシャチーに告げた。(一一)

「何のために来たのか。またどうやって私を見つけたか。」

そこで彼女はナフシャの行状を語った。(一二)

「三界のインドラの位についた彼は力に酔い痴れました。シャクラよ、その邪悪な男は尊大にも『俺に仕えろ』と私に言いました。その残酷な男は、私に猶予をくれました。(一三)主よ、もしあなたが救って下さらないなら、彼は私を支配するでしょう。シャクラよ、私は彼に苦しめられてあなたのもとに来ました。勇士よ、あの悪い了見の恐ろしいナフシャを殺しなさい。(一四)魔類の殺戮者よ、姿を現わしなさい。主よ、威光を取りもどしなさい。神々の王国を治めなさい。(一五)」

(第十四章)

ナフシャの没落

シャリヤは語った。――

シャチーにそう言われて、尊い神は答えた。

「今は勇武の時ではない。ナフシャはより強力である。(一)美しい女よ、彼は聖仙たちにより、神々と祖霊に捧げる供物で増強された。女神よ、私は政略を講ずる。どうかそれを実行して欲しい。(二)あなたはそれを秘密裏にやらなければならぬ。美しい女よ、いかなる場合もそれについて話してはならぬ。細い胴の女よ、ナフシャのもとに行き、密かに言いなさい。

（三）
『世界の主よ、聖仙たちに担われる神々しい輿に乗って私のもとに来て下さい。そうすれば私は喜んであなたのものになります。』
彼にそう言いなさい。（四）」

神々の王にこのように告げられた蓮の眼をした妻は、「承知しました」と答えて、ナフシャのもとに行った。（五）

それからナフシャは、彼女を見ると驚いて次のように言った。

「ようこそ、美しい尻の女よ。美しい微笑の女よ、何をすればよいか。（六） 美しい女よ、あなたを愛する私を愛してくれ。思慮ある女よ、何を望むか。美しい胴の女よ、あなたがしてもらいたいことを私はするであろう。（七） 恥ずかしがることはない。美しい尻の女よ、私を信用しなさい。私は真実にかけて誓う。女神よ、私はあなたの言う通りにする。（八）」

インドラーニーは言った。

「世界の主よ、あなたが私に下さった時間を私は待っています。その後は、あなたが私の夫になるでしょう。神々の主よ。（九） 神々の王よ、私が心の中で望むことを聞いて下さい。王様、もし好意をかけて下さるなら申し上げます。私の愛情に満ちた言葉を実行して下さい。そうすれば私はあなたのものになります。（一〇）

インドラは乗物として、馬と象と戦車を持っています。神々の王よ、そこで私は、あなたにも前代未聞の乗物を持っていただきたいのです。ヴィシュヌもルドラも阿修羅や羅刹たち

も持っていないような。（一一） 大王様、主よ、すべての聖仙たちがこぞって、輿にあなたを乗せてかつぐようにして下さい。王よ、そうすれば私は嬉しいのです。（一二） あなたは阿修羅や神々と同等ではいけません。あなたは見るだけで、御自身の力により、すべての者たちの威光（テージャス）を奪いなさい。誰もあなたの面前に立つことを望むような強力な者はいません。（一三）」

シャリヤは語った。――

そのように言われて、ナフシャは大喜びしたという。そしてその神々の王は、非の打ち所のない彼女に告げた。（一四）

「美しい尻の女よ、あなたが言ったのは、まさに前代未聞の乗物だ。女神よ、気に入ったぞ。美しい顔の女よ、私はあなたの僕（しもべ）だ。（一五） 聖者（ムニ）たちを乗物にする者は、確かに力の弱い者ではない。私は苦行を積み、強力で、過去と未来と現在の主である。（一六） 私が怒れば、世界は存在しないであろう。すべてが私に依存している。神々、悪魔、ガンダルヴァ、キンナラ、蛇、羅刹たちも。（一七） 美しい微笑の女よ、全世界は怒った私に対抗できない。私が眼で何かを見る時、私はその者の威光を奪い取る。（一八） それ故、女神よ、私は疑いもなくあなたの言葉を実行する。七仙もすべての梵仙も、私を担うであろう。吾輩の偉大さと富貴を見よ。美しい顔色の女よ。（一九）」

このように言って、彼は美しい顔の女神と別れた。それから彼は、誓戒を保っている聖仙

たちを天車に結びつけた。(二〇) 邪悪で不敬な彼は、力をそなえて、神々の恩寵に酔い痴れ、愛欲にかられて、聖仙たちにそれを運ばせた。(二一)

シャチーはナフシャと別れて、ブリハスパティに言った。

「ナフシャが私にくれた時間はわずかしか残っていません。すぐにシャクラを探して下さい。あなたを信愛している私にお慈悲をかけて下さい。(二二)」

尊者ブリハスパティは、「承知した」と彼女に答えた。

「女神よ、邪悪なナフシャを恐れる必要はない。(二三) 彼はもう長くはもたないから。あの最低の男はすでに身を滅ぼした。あの法(ダルマ)を知らない男は、偉大な聖仙たちを乗物にしたから打倒されるであろう。美しい女よ。(二四) 私はあの悪党を滅ぼすために祭祀を行なおう。そして私はシャクラを見つけよう。あなたは恐れることはない。あなたに幸あらんことを。(二五)」

それから、大威光あるブリハスパティは、神々の王を見出すために、火を燃やして、作法通りに火中に供物を投じた。(二六) そこから聖なる火神が現われ、自ら驚異的な女性の身なりをして、突然消え失せた。(二七) 彼は思考よりも速い速度で、四方八方、山々、森林、地上、空中を探した。そしてまたたく間に、ブリハスパティのもとにもどった。(二八)

火神は言った。

「ブリハスパティよ、私は神々の主をどこにも見つけることができなかった。水の中は探さなかった。常に私は水中に入ることはできない。バラモンよ、そこには私の道はない。他に

どのようなことをやればよいか。(二九)」

シャリヤは語った。——

神々の師は彼に「水に入りなさい。輝きに満ちた者よ」と告げた。(三〇)

火神は言った。

「私は水に入ることはできない。そこでは私は滅亡するであろう。あなたに庇護を求めます。あなたに幸あらんことを。輝きに満ちた者よ。(三一) 火は水から生じた。バラモンから王族(クシャトラ)が生じ、岩石から鉄が生じた。これらの遍在する威光は、自己を生み出したものにおいては消失するのだ。(三二)」

(第十五章)

インドラの復権

ブリハスパティは言った。

「火神よ、あなたはすべての神々の口である。あなたは供物を運ぶ者である。あなたは一切万物の中に潜み、証人のようにふるまう。(一) 聖仙(詩人)たちはあなたを唯一であるとも、三種であるとも説く。火神よ、この世界はあなたに捨てられたら即座に滅亡するであろう。(二) バラモンたちはあなたに敬礼して、自己の行為により勝ち得た永遠の道に、妻や息子たちとともに行く。(三) 火神よ、あなたのみが供物を運ぶ。あなたのみが最高の供物である。

人々はサットラ祭によってあなたを崇拝する。最高の祭祀において、祭祀によって崇拝する。(四)火神よ、あなたはこの三界を創造して、時が来ると燃え上がり、再び煮る。あなたはこの全世界を生んだ者である。火神よ、あなたはまたその基底である。(五)火神よ、人々はあなたを雲と呼び、あなたはまさに稲妻である。あなたから焔が出て、一切万物を燃やす。(六)すべての水はあなたに依存する。この全世界はあなたに依存する。火神よ、三界においてあなたに知られないものはない。(七)すべてのものは自分を生んだものを愛する。恐れることなく水に入りなさい。私は永遠のヴェーダの聖句により、あなたを増強するであろう。(八)」

シャリヤは語った。——

最高の聖仙である聖なる火神は、このように讃えられて、喜び、ブリハスパティに次のような最高の言葉を述べた。

「私はあなたにシャクラを見せるであろう。私はこの真実をあなたに誓う。(九)」

そこで火は海や池をはじめとする水に入り、インドラが隠れている湖に行った。(一〇)そこで彼は蓮を探し、蓮糸の中にいる神々の王(インドラ)を見出した。(一一)それから彼は急いで帰り、インドラが極微ほどの体をとって、蓮糸の中に住んでいることをブリハスパティに報告した。(一二)そこでブリハスパティは、神々や聖仙やガンダルヴァたちとともにそこに行き、以前の業績を述べてインドラ神を讃えた。(一三)

「シャクラよ、あなたは大阿修羅ナムチと、恐ろしく勇猛なシャンバラとヴァラの両名を殺した。(一四)インドラよ、強大となれ。すべての敵を殺せ。金剛杵を持つ者よ、立ち上がれ。神々と聖仙が集まっているのを見よ。(一五)大インドラよ、主よ、あなたは悪魔たちを殺して諸世界を救った。神々の王よ、世界の主よ、あなたはかつて、ヴィシュヌの威光で強化された水泡を用いてヴリトラを殺した。(一六)あなたは一切万物のうちの最上者であり、称讃されるべきである。この世にはあなたに等しいものはいない。シャクラよ、一切万物はあなたによって維持される。あなたは神々の偉大さをもたらした。(一七)神々と諸世界を守護せよ。大インドラよ、力を取りもどせ。」

このように讃えられると、彼は徐々に増大した。(一八)そして自分本来の身体をとって、彼は力にあふれた。そしてその神は、そばに立っている師ブリハスパティに告げた。(一九)

「あなたのためになすべきことが何か残っているのか。トゥヴァシトリの息子である大阿修羅(トリシラス)は殺した。非常に巨大な体をして、世界を呑もうとしたあのヴリトラも殺した。(二〇)」

ブリハスパティは言った。

「神々と聖仙の群の威光により、人間のナフシャが王となった。彼は神々の王位につき、我々すべてをひどく苦しめている。(二一)」

インドラは言った。

「一体どうしてナフシャが得られがたい神々の王位についたのか。彼はいかなる苦行の力

（熱力）をそなえているのか。また、いかなる精力をそなえているのか。ブリハスパティよ。（二二）」

ブリハスパティは言った。

「あなたが大インドラの地位を捨てた時、恐れた神々は、シャクラ〔に代わる者〕がその位につくことを望んだ。その時、すべての神々、祖霊たち、聖仙たち、ガンダルヴァの群は集まって、ナフシャのいる所に行って告げた。シャクラよ。

『あなたが我々の王に、世界の守護者になりなさい。』

ナフシャは彼らに答えた。

『私は能力がありません。あなた方は苦行（熱力）と威光により私を増強して下さい。（二三ー二四）』

このように言われて、神々は彼を増強した。恐ろしい力をそなえたナフシャは王となった。その邪悪な男は、三界の王位につき、苦行者たちに車を運ばせて諸世界をまわっている。（二五）非常に恐ろしい彼の毒のような視線は相手の威光を奪い取る。あなたは決してナフシャを見てはならぬ。すべての神々は恐怖にかられ、姿を隠し、ナフシャを見ないようにして行動している。（二六）」

シャリヤは語った。——

アンギラス族の最高者ブリハスパティがこのように言った時、世界守護神であるクベーラ（毘沙門天）、古のヴィヴァスヴァットの息子ヤマ（閻魔）、ソーマ神、ヴァルナ（水天）がやって来た。（二七）彼らはそこに着くと大インドラに言った。

「トゥヴァシトリの息子とヴリトラが殺されたのは幸いなことだ。敵を殺し、無傷で息災なあなたに会えたのは幸いなことだ。シャクラよ。（二八）」

シャクラは彼らにふさわしく答礼して、ナフシャに関して彼らに要請した。

「恐ろしい姿のナフシャは神々の王である。そこであなた方は私を援助していただきたい。（二九）」

彼らは言った。

「ナフシャは恐ろしい姿をしている。彼の視線は毒のようである。神よ、我々は恐れている。王よ、シャクラよ、もしあなたがナフシャを破れば、我々は供物の配分に与ることができる。（三〇）」

インドラは告げた。

「そのようになるべきだ。水の主（ヴァルナ）、ヤマ、クベーラは、今日、みないっしょに彼（ブリハスパティ?）により盛大な灌頂式を受けるべきである。我々は、恐ろしい眼をした敵ナフシャに勝利しよう。（三一）」

すると火神もシャクラに言った。

「私にも配分を下さい。あなたに協力します。」

シャクラは彼に答えた。

「アグニ（神火）よ、あなたにも配分があるだろう。盛大な祭祀において、『インドラとアグニの配分』という一つの配分が。(三二)」

聖なる大インドラはこのように考えて、クベーラをすべての夜叉たちと財産との主にした。(三三)そして願いをかなえるシャクラは、ヤマとヴァルナに敬意を表し、ヤマを祖霊たちの主に、ヴァルナを水の主にした。(三四)（第十六章）

ナフシャは大蛇になる

シャリヤは語った。――

さて、賢明な神々の王が、世界守護神たちとナフシャを殺す方法を考えていた時、そこに尊い苦行者アガスティヤが現われた。(一)彼は神々の王に敬意を表してから言った。

「ヴィシュヴァルーパ（トリシラス）を殺し、阿修羅ヴリトラを殺され、おめでとうございます。(二)インドラよ、幸いなことに、ナフシャは神々の王位から堕ちました。幸いなことに、敵を滅ぼしたあなたに会えました。インドラよ。(三)」

インドラは言った。

「大仙よ、ようこそ。あなたに会えて嬉しい。洗足の水と、口をゆすぐ水と、牛と、接客用の品を私から受け取りなさい。(四)」

シャリヤは語った。――

その最高の聖者（ムニ）はもてなしを受けて座席に座った。神々の王は喜んでそのバラモンの雄牛にたずねた。(五)

「最高のバラモンである尊者よ、どうか語っていただきたい。あの邪悪なナフシャはどのようにして天界から堕ちたのか。(六)」

アガスティヤは告げた。

「シャクラよ、よい知らせを聞きなさい。力に驕り、悪行を働いた邪悪なナフシャ王が天界から堕ちた次第を。(七)栄光に満ちた神仙や汚れなき梵仙たちは、悪行を働くナフシャを運んでいるうちに疲労し、ナフシャに質問した。最高の勝利者である神よ。(八)

『犠牲の牛に水を灌ぐ際に、ブラフマン（ヴェーダ）に説かれた聖句（マントラ）は権威があるかどうか』と。

インドラよ、ナフシャは暗質（タマス）によって心迷い、『ない』と彼らに答えた。(九)

聖仙たちは告げた。

『あなたは非法（アダルマ）に専念していて法（ダルマ）に従わない。それはかつて大仙たちによって唱えられたものであるから、我々にとって権威である。(一〇)』

アガスティヤは続けた。

「インドラよ、彼は聖者たちと論争している間に、非法にうちひしがれて、足で私の頭に触れた。(一一)そのために彼は威光を失い、幸運に見捨てられてしまった。シャチーの夫よ。そこで私は、動揺し恐怖に打ちのめされた彼に言った。(一二)

『あなたは古(いにしえ)の梵仙たちに唱えられ実践された、汚れなきブラフマンを非難し、また足で私の頭に触れたから、更に、ブラフマンにも等しい、侵しがたい聖仙たちに乗物を運ばせたから、それ故、光輝を失い、天界から堕ちよ。悪党。地上に堕ち、功徳を失い、一万年の間、大蛇の姿をとって地上をさまようであろう。しかし満期になったら、再び天界にもどるであろう。(一三―一五)』

それ故、あの邪悪な男は神々の王位から堕ちました。シャクラよ、我々にとってめでたいことです。バラモンを苦しめる棘(とげ)は取り除かれました。(一六) シャチーの夫よ、天界にもどって下さい。諸世界を守って下さい。感官を制御し、敵に勝利し、大仙たちに讃えられながら。(一七)」

シャリヤは語った。――

それから、大仙の群に囲まれ、非常に満足した神々、祖霊、夜叉、蛇、羅刹、ガンダルヴァ、神の娘たち、すべての天女(アプサラス)の群、湖水、河川、山、海が近づいて来て、みなして言った。

「敵を殺す者よ、おめでとうございます。幸いなことに、邪悪なナフシャは、賢明なアガスティヤにより倒されました。幸いなことに、あの悪行を働いた男は地上の蛇にされました。(一八―二〇)」

(第十七章)

シャリヤは語った。――

それからシャクラは、ガンダルヴァや天女たちの群に讃えられつつ、瑞相をそなえた象王アイラーヴァタに乗った。(一) 大威光をそなえた火神、大仙ブリハスパティ、ヤマ、ヴァルナ、財主クベーラがつき従った。(二) ヴリトラの殺戮者シャクラは、すべての神々と、ガンダルヴァと天女たちに取り巻かれて、三界に行った。(三)

神々の王インドラは、大インドラーニー(シャチー)と再会し、最高の喜びに満ちて世界を守護した。(四) それから、かの尊いアンギラスが現われ、『アタルヴァ・ヴェーダ』の聖句により神々の王を讃えた。(五) インドラ神は喜び、そのアタルヴァ・アンギラスに恩寵を与えた。(六)

「このヴェーダにおいて、この引用はアタルヴァ・アーンギラサという名になるであろう。そしてあなたは祭祀の配分を得るであろう。(七)」

神々の王である尊いインドラは、このようにアタルヴァ・アンギラスに敬意を表してから彼と別れた。(八) 王よ、インドラはすべての神々と苦行を積んだ聖仙たちに敬意を表し、喜んで、法(ダルマ)に従って生類を守護した。(九)(「インドラの勝利」終わり)

以上のように、インドラは妻とともに苦難を経験し、敵を殺そうとして隠れた生活をした。(一〇) 王中の王よ、そなたも大森林でドラウパディーや偉大な弟たちとともに苦しんだが、そのことについて恨んではいけない。(一一) 王中の王ユディシティラよ、シャクラがヴリト

ラを殺してから再び王位についたように、そなたも王国を取りもどすであろう。(一二) パラモンの敵、悪行を働いた邪悪なナフシャが、アガスティヤの呪いにより永劫に身を滅ぼしたように、そなたの邪悪な敵たちであるカルナとドゥルヨーダナなどは、速やかに滅亡するであろう。敵を成敗する者よ。(一三―一四) それから勇猛なる主よ、そなたは弟たちやドラウパディーとともに、海に囲まれたこの大地を享受するであろう。(一五)

このヴェーダ聖典にも等しい「シャクラの勝利」の物語を、勝利を望む王は、軍隊が陣形を整えた時に聞くべきである。(一六) 最高の勝利者よ、それ故、私はそなたにこの「勝利」を聞かせたのである。ユディシティラよ、偉大な人々は称讃される時に増大するものである。(一七) ユディシティラよ、ドゥルヨーダナの過失と、ビーマとアルジュナの力により、偉大な王族(クシャトリヤ)たちは滅亡する。(一八) この「インドラの勝利」の物語を専心して朗誦する者は、その罪過を浄め、天界を得て、現世と来世において喜ぶであろう。(一九) その人には敵から生ずる恐怖はなく、息子がいないことはないであろう。いかなる災禍にも陥ることはなく、長寿を得るであろう。あらゆる場合に勝利を得て、決して敗れることはない。(二〇)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このようにシャリヤに激励されて、法(ダルマ)を守る人々のうちで最上者である王は、作法通りにシャリヤに敬意を表した。(二一) 強力なユディシティラはシャリヤの言葉を聞くと、彼に対して告げた。(二二)

「あなたは疑いもなくカルナの御者をするであろう。その際、私を称讃してカルナの威光をなくして下さい。(二三)」

シャリヤは答えた。

「そなたの言う通りにしよう。その他、そなたのために私にできる限りのことをしよう。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、栄光あるマドラの王である勇猛なシャリヤは、パーンダヴァたちに別れを告げ、軍隊を連れてドゥルヨーダナのもとに行った。(二五)（第十八章）

両陣営に集結した諸軍団

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、サートヴァタ族の強力な勇士ユユダーナ（サーティヤキ）が、四部門よりなる大軍を率いて、ユディシティラのもとに来た。(一)（二―五略）この軍団はユディシティラの軍隊に合流して溶け込んだ。小さな川が海に溶け込むように。(六)

同様に、強力なチェーディ国の雄牛ドリシタケートゥも、軍団を率いて、無量の威光を持つパーンダヴァたちのもとに来た。(七) ジャラーサンダの息子である、強力なマガダ国王ジ

ヤヤトセーナも、軍団を率いてユディシティラのもとに来た。(八) 同様にパーンディヤも、海辺の土地に住む多くの戦士たちとともに、ユディシティラのもとに来た。(九)
この軍隊が集結した時、美しく装った彼の強力な軍は非常に見事なものであった。(一〇) そしてまた、ドルパダの軍隊は諸地方から集まった勇士や彼の強力な息子たちによって飾られていた。(一一) 同様に、軍隊の長、マツヤ国王ヴィラータは、山岳地方の王たちとともに、パーンダヴァたちのもとに来た。(一二) 方々から、種々の旗に満ちた七軍団が、クル軍と戦おうとして、偉大なパーンダヴァたちのもとに集結し、パーンダヴァたちを歓喜させた。(一三)

同様にして、バガダッタ王は、軍団を引き渡してドゥルヨーダナの喜びを増大させた。(一四) 彼の無敵の軍隊は、金色のチーナ族とキラータ族（部族民の一種）に満ち、カーンチャナ樹に囲まれたカルニカーラの森のように輝いていた。(一五) 勇士ブーリシュラヴァスとシャリヤも、それぞれ軍団を率いてドゥルヨーダナのもとに来た。(一六) クリタヴァルマンも、ボージャとアンダカの軍隊とともに、軍団を率いてドゥルヨーダナのもとに来た。(一七) 彼の軍隊は、森の花々の輪をつけた人中の虎たちにより輝いていた。ちょうど森が、発情して遊ぶ象たちによって輝くように。(一八) 他の、シンドゥとスヴィーラに住む王たちが、ジャヤドラタを先頭に、山々を震動させるかのようにやって来た。(一九) 彼らの大軍団は、風に揺り動かされる多様な形の雲のようであった。(二〇) カーンボージャのスダクシナは、ヤヴァナ族とシャカ族とともに、軍団を率いてクル軍のもとに来た。(二一) 彼の軍隊の集結した様は蝗(いなご)のようであった。それはクル軍に合流して、その中に融合した。(二二)
〔その他、アヴァンティ地方の二王、ケーカヤの五名の兄弟などがドゥルヨーダナのもとに集結した。(二三―二六略)〕このようにして、十一の軍団が、種々の旗に満ち、パーンダヴァたちと戦おうとして、ドゥルヨーダナのもとに来た。(二七) (二八―三二略) (第十九章)

パーンダヴァ側の使節

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
ドルパダの司祭はクル軍に着いて、ドリタラーシトラとビーシュマとヴィドゥラに歓迎された。(一) 彼はまず一同に挨拶し、息災かどうかたずねてから、すべての軍隊の指導者たちの中で、次のように告げた。(二)
「あなた方はすべて、永遠の王法(ラージャダルマ)を御存知であろう。しかし御存知とはいえ、話を始めるために申し上げよう。(三) ドリタラーシトラとパーンドゥとは、同じ父の息子たちであると知られる。疑いなく、彼らは父祖の財産に対して同等の権利を有する。(四) ドリタラーシトラの息子たちは父祖の財産を得た。パーンドゥの息子たちはどうして父祖の財産を得られないのか。(五) そのようであるのに、かつてパーンドゥの息子たちは父祖の財産を得られず、ドリタラーシトラの息子たちに横領されていたということはあなた方も御存知である。(六) ドリタラーシトラの息子たちは幾度もパーンダヴァたちを殺す方策を講じて努力したが、寿

命が残っている彼らをヤマ（閻魔）の住処に送ることはできなかった。(七)
そして偉大な彼らは再び自力によって王国を繁栄させた。しかし、卑しいドリタラーシトラの息子たちとシャクニは、詐術によりそれを奪った。(八) 彼（ドリタラーシトラ）はそのような不適切な行為をも承認した。彼らは十三年間、大森林で生活した。(九) 集会場でひどく苦しめられた勇士たちとその妻は、森林において非常におぞましい種々の苦難を受けた。(一〇) そしてまたヴィラータの都において、偉大な男たちは、他の胎内に入ったかのように、悪人たちが受けるような最高の苦難を経験した。(一一)
しかしすべてのパーンドゥの雄牛たちは、以上のようなすべての過去の過失を水に流して、クル族と講和することのみを望んでいる。(一二) 親しい方たちは、彼らの行為とドゥルヨーダナの行動とを知り、ドリタラーシトラを説得していただきたい。(一三) あのパーンダヴァの勇士たちはクル族と戦争をしたくない。彼らは世界を滅亡させないようにして自分のものを得たいと望んでいる。(一四) ドリタラーシトラの息子たちに戦争を行なう何らかの理由があるとしても、それは適切な理由ではないと考えられるべきである。彼らはより強力であるから。(一五) ダルマの息子（ユディシティラ）のもとに七つの軍団が集結した。彼らはクル軍と戦おうとして彼の命令を待っている。(一六) そして他にも、千の軍団に匹敵する人中の虎たちがいる。サーティヤキ、ビーマセーナ、非常に強力な双子。(一七) 一方ではこれらの十一の軍隊が集結し、他方では多様な姿をとる勇士アルジュナがいる。(一八) アルジュナがすべての軍隊よりも優れているように、光輝に満ちた勇士ヴァースデーヴァ（クリシュナ）も、まったくそれと同様である。(一九) その大軍、アルジュナの勇猛さ、クリシュナの英邁なこと、以上を知ったらいかなる人が戦うであろうか。(二〇) そこであなた方は、法（ダルマ）と約定に従い、引き渡すべきものを引き渡しなさい。時を失することがないように。(二一)」

（第二十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
叡知において長老の、光輝に満ちたビーシュマは、彼の言葉を聞くと、彼に敬意を表してから、その時にふさわしい言葉を述べた。(一)
「すべてのパーンダヴァとその縁者たちが息災であるのは幸いなことだ。彼らが盟友を得て、法に専念しているのは幸いなことだ。(二) パーンダヴァの兄弟が和平を望んでいるのは幸いなことだ。彼らとクリシュナが戦争を望んでいないのは幸いなことだ。(三) あなたの言ったことは疑いもなくすべて真実である。しかしあなたの言葉はあまりにも辛辣である。あなたはバラモンであるから、と私は思う。(四) 疑いもなく、パーンダヴァたちはここと森で苦難を経験した。そして疑いもなく、法により彼らは父のすべての財産を継承〔すべきである〕。(五) アルジュナは強力で武器に通達し偉大な力をそなえている。いかなる男が戦闘においてアルジュナに対抗できよう。(六) たといインドラ自身であろうとも対抗できない。いわんや他の弓取りはなおさらである。彼は三界すべてに匹敵すると私は思う。(七)」
ビーシュマが話している時、カルナは怒って、無礼にもその言葉を遮り、ドゥルヨーダナ

を見てから言った。(八)

「バラモンよ、世間において誰も知らない者はいない。それを何度も繰り返して言って何になるか。(九)かつてシャクニはドゥルヨーダナのために賭博に勝利した。パーンドゥの息子ユディシティラは約定により森に行った。(一〇)その王は約定を考慮せず、マツヤとパーンチャーラの力に依存して、父祖の王国を望んでいる。(一一)賢者よ、ドゥルヨーダナは恐怖によっては一歩の土地ですら与えないだろう。しかし法(ダルマ)によっては、敵に対してでも、すべての大地を与えるであろう。(一二)だがもし彼らが父祖の王国を望むなら、約定による期間を森で生活しなければならぬ。(一三)それから、何も恐れることなく、ドゥルヨーダナの膝下で暮らすべきである。彼らはまったくの愚かしさからこのように法に背く考えを抱いたのだ。(一四)もしパーンダヴァたちが法を捨てて戦いを望むなら、これらのクルの最上者たちと対峙した時、私の言葉を思い出すであろう。(一五)」

ビーシュマは言った。

「カルナよ、お前の言葉が何になるか。あのめざましい働きを思い出すがよい。アルジュナがただ一騎で、戦闘において六名の戦士を破った時の。(一六)このバラモンが言った通りにしなければ、我々は必ずや戦いに敗れてほこりを食らうことになろう。(一七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それからドリタラーシトラはビーシュマに敬意を表し、なだめ、カルナを非難して次のように言った。(一八)

「ビーシュマは我々に有益な言葉を告げた。そしてパーンダヴァたちとすべての世界に有益な言葉を告げた。(一九)よく考えたが、サンジャヤをパーンダヴァたちのところに派遣しようと思う。そこであなたは、今日、すぐにパーンダヴァたちのもとに帰りなさい。(二〇)」

ドリタラーシトラは彼をもてなして、パーンダヴァたちのもとに帰らせた。そしてサンジャヤを集会場に呼んで、次のように告げた。(二一)

(第二十一章)

(50) サンジャヤの使節（第二十二章―第三十二章）

サンジャヤ、ユディシティラに会う

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、パーンドゥの息子たちはウパプラヴィヤに着いたという話だ。行って確かめて来なさい。そしてアジャータシャトル（ユディシティラ）に挨拶すべきである。『非の打ち所のない方よ、幸いなことにこの町に着かれました』と。（一）サンジャヤよ、全員に告げるべきである。『それに値しないのに苦難の生活をし、それを完了されておめでとうございます』と。すぐに彼らは我々に対して穏やかになるであろう。彼らは騙（かた）られたが善良で親切である。（二）サンジャヤよ、私はあらゆる場合、決してパーンダヴァたちの誤った行動を見たことがない。パーンダヴァたちは自力ですべての富貴を得て、私に引き渡した。（三）いつも彼らの欠点を探しても、彼らを非難できるような欠点を何も見出すことができない。彼らは常に法（ダルマ）と実利（アルタ）に従って行動し、幸せを好みつつも、享楽（カーマ）に執着することはない。（四）彼らは暑さ、寒さ、飢えと渇き、眠気、倦怠、怒りと喜び、不作法を、平常心と叡知とによって克服し、法と実利の実践に努力している。（五）彼らはふさわしい時に友らに財産を喜捨する。彼らの友情は長いつき合いによりすり切れることはない。彼らは適切に名誉と財産を与える。アージャミーダの家系（クル一族）では、彼らを憎む者はいない。（六）あの邪悪でひねくれて愚かなドゥルヨーダナと、この上なく卑しいカルナとを除いて。実に彼らは、偉大なパーンダヴァたちの幸せと喜びを奪い、その熱（怒り）を生じさせる。（七）旺盛な力を持ち、快適に育ったドゥルヨーダナは愚かにも、パーンダヴァたちが生きているのに、彼らの取り分を奪うことができると思うようなことが正しいと考えている。（八）ユディシティラの足跡に、アルジュナ、クリシュナ、狼腹（ビーマ）、サーティヤカ（サーティヤキ）、マードリーの双子、すべてのスリンジャヤ（パーンチャーラ）の人々が従っている。戦争になる前に、彼に取り分を与えた方がよい。（九）ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナ一人だけでも、戦車に乗り、地上を蹂躙することができよう。また、ヴィシュヌ〔の化身である〕無敵のクリシュナは、三界の偉大な主である。（一〇）

（二一―三〇略）

私の愚かで考え違いしている息子が、あの両者と戦争することのないように。サンジャヤよ、あの二人がクル族を燃やすことのないように。インドラとヴィシュヌが悪魔の軍隊を燃やすように。というのは、アルジュナはシャクラ（インドラ）に等しく、ヴリシュニの英雄（クリシュナ）は永遠なるヴィシュヌであると考えるから。（三一）

クンティーの息子ユディシティラは、法（ダルマ）に専念し、廉恥心あり、強力である。その賢明な男がドゥルヨーダナに苦しめられた。彼が怒って私の一族を燃やすことのないように。（三二）私はアルジュナやクリシュナやビーマや双子をユディシティラほど恐れない。サンジャヤよ、あの王が怒りに燃えるのを、いつもひどく恐れている。（三三）彼は苦行と梵行（清浄行）を十分にそなえ、彼の心願は必ず成就する。戦いにおける彼の怒りを尤もであると思い、サンジャヤよ、私は今ひどく恐れている。（三四）

そこでそなたを派遣する。戦車に乗って速やかに行け。パーンチャーラ王の軍に着いたら、ユディシティラに息災かどうかたずねよ。繰り返し、愛情をこめて語るべきである。(三五) そして友よ、強力な人々のうちの最上者である気高いクリシュナに会ったら、私からの言葉として、息災かどうかたずねるべきである。そして、ドリタラーシトラはパーンダヴァたちと平和でいることを望んでいると伝えてくれ。(三六) というのはサンジャヤよ、ユディシティラはクリシュナの言葉に必ず従うからだ。クリシュナは彼らに愛され、自身に等しい存在だ。彼は常に専心して、彼らの行為について知っている。(三七) パーンチャーラの人々、クリシュナ、ユユダーナ（サーティヤキ）、ヴィラータに会ったら、私からの言葉として、息災かどうかたずねるべきである。ドラウパディーの五人の息子すべてに対しても同様である。(三八) サンジャヤよ、相手に対して時宜にかなったこと、バラタ族にとって有益なことと思われることは、諸王の中で何でも告げるべきである。彼らの怒りをかきたてないように、戦いにならないように……。(三九)」

（第二十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

サンジャヤはドリタラーシトラ王の言葉を聞いてから、無量の威厳を有するパーンダヴァたちに会うために、ウパプラヴィヤに行った。(一) サンジャヤは徳性あるユディシティラ王のもとに行き、まず平伏してから次のように言った。(二)

「スータ（御者、吟誦詩人）のガヴァルガナの息子であるサンジャヤは、喜びをもって、アジャータシャトル（ユディシティラ）に申し上げる。

王よ、大インドラのようなあなたが、仲間とともに息災でいるのを見るとは、幸せなことである。(三) 賢明な老王ドリタラーシトラは、あなたが息災かどうかたずねておられる。パーンダヴァの最上者ビーマは息災か。アルジュナとマードリーの双子は息災か。(四) また、勇士たちの妻であり、息子たちの母である、誓戒を守る聡明な王女ドラウパディー、別名クリシュナーは息災か。そこにおいてあなたが願わしい享楽を望み、その幸せを望むところの……。バーラタよ。(五)」

ユディシティラは言った。

「ガヴァルガナの息子サンジャヤよ、ようこそ。スータよ、私は心から喜んで御挨拶する。私はまさに健康である。弟たちとともに元気である。賢者よ。(六) 久しぶりでクルの長老であるバーラタ王（ドリタラーシトラ）が息災であることを聞いてから、サンジャヤよ、愛情をこめてあなたを見て、現にその王自身を見ているようである。(七) 我々の祖父（大伯父）である思慮深い長老、大知者ですべての徳性（ダルマ）をそなえているあのビーシュマはお元気ですか。友よ、前と同じように生活しておられるか。(八) 偉大なドリタラーシトラ王とその息子たちは息災ですか。プラティーパの息子である大王バーフリーカ（シャンタヌの弟）、賢明で巧妙なあの王は息災ですか。サンジャヤよ。(九)」

〔以下、ユディシティラの問いはなおも続く。(一〇―二七略)〕（第二十三章）／（第二十四章略）

ユディシティラはたずねた。

「パーンダヴァ、スリンジャヤ（パーンチャーラ）たち、ジャナールダナ、ユユダーナ（サーテイヤキ）、ヴィラータが集まっている。ガヴァルガナの息子サンジャヤよ、ドリタラーシトラの伝言を言いなさい。（一）」

サンジャヤは言った。

「ユディシティラ、ビーマ、アルジュナ、マードリーの双子、そしてクリシュナ、ユユダーナ、チェーキターナ、ヴィラータに対し御挨拶申し上げる。（二）そしてパーンチャーラの老王（ドルパダ）とドリシタデュムナに対しても。みなさん、私の言葉を聞いて下さい。私はクル一族の繁栄を望んで申し上げる。（三）

ドリタラーシトラ王は平和を願って、急いで私に車の準備をさせた。王が弟や息子や縁者たちとともに、それを歓迎せんことを。パーンダヴァたちに平和があらんことを。（四）あなた方はすべての徳性をそなえている。堅固さ、柔和さ、廉直さをそなえている。あなた方は良家に生まれ、親切で、寛大である。廉恥心あり、行動において決然としている。（五）あなた方においては卑しい行為はふさわしくない。ビーマセーナたちよ、あなた方の勇気はこのようであるから。あなた方にとって過失は、白衣に落ちた墨汁のように目立つであろう。（六）

そこにおいてはすべてが滅亡し、ありとあらゆる罪悪が生じ、地獄が現出し、虚無が現われ、勝利が敗北に等しいならば、それを知りながら一体誰がその行為をするであろうか。（七）親族のための仕事をする人々は幸せである。彼らはあなた方のまさに息子であり友であり縁者である。彼らは非難される生き方を捨てるであろう。それから、クル一族の繁栄は確立するであろう。（八）

プリター（クンティー）の息子たちよ、もしすべての敵を成敗し、クル族を懲らしめるなら、あなた方の生は死に等しいであろう。親族を殺して生きていてもよいことはないから。（九）クリシュナをともない、チェーキターナをともない、ドリシタデュムナの腕で守られ、サーテイヤキをともなうあなた方を、誰がうち破ることができるか。インドラをはじめとする神々を助力者に得たとしても……。（一〇）また王よ、ドローナとビーシュマに守られ、アシュヴァッターマン、シャリヤ、クリパなどをともない、カルナとその他の諸王に守られたクル族を、誰が戦いで破ることができよう。（一一）ドゥルヨーダナ王の大軍を誰が自ら滅びずに滅ぼすことができるか。そこで私は、勝利しても敗北しても、決して幸せにはなれない。（一二）プリターの息子たちが、どうして生まれの悪い卑しい者たちのように、法（ダルマ）と実利（アルタ）を欠いた行為をすることができよう。そこで私は、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）とパーンチャーラの老王に伏してお願いする。（一三）私は合掌し、あなた方に庇護を求める。どうしたらクル一族とスリンジャヤ（パーンチャーラ）の幸せになるだろうか。クリシュナやアルジュナは、あなたのいかなる言葉にも必ず従うはずだ。（一四）要請されれば生命などでも与える。いわんや他

のものをどうして与えないか。賢者よ、私は使命を成就するためにこのことを申し上げた。あなたと講和することが最上であるというのが、ビーシュマに導かれた王（ドリタラーシトラ）の考えである。(二五)」

（第二十五章）

講和を求めるユディシティラ

ユディシティラは言った。

「サンジャヤよ、一体どのような好戦的な言葉を私から聞いたのか。あなたが戦争を恐れるとは。友よ、平和は戦争よりも優れている。もし平和を得たら、誰が戦いを望むであろうか。スータよ。(一)もし何もしない人にとって、心で望む意図がすべて成就するとしたら、サンジャヤよ、戦争はおろか、もっとずっと容易な行為すらやらないと思う。(二)賢明な人がどうして戦争をするだろうか。戦争を選ぶほど運命に呪われた人は誰もいない。プリターの息子たちは幸福を願い、法（ダルマ）を踏み外すことのない、世界に有益な行為を行なっている。(三)行為から生じる幸福を望む者（困難な手段による行為は真実には苦である）、幸福を望んで不幸をなくそうと望む者は、諸感官の喜びに支配される。享楽を望むことは自己の身体を憔悴させる。それにかりたてられた者は不幸を追い求める。(四)燃え上がる火が、かきたてられると（薪をくべると）いっそう力を増すように、欲望は目的を達するといっそう（盛んになる）（異本による）。燃える火が乳酪（サルピス）（物供）を注がれても満足しないように。ドリタラーシトラ王の山ほど積んだ享楽を見なさい。そして

我々のわずかなそれと比較しなさい。(五)

劣った人は戦争に勝利しない。劣った人は歌の音を聞けない。劣った人は花輪や香を楽しめない。劣った人は香油を楽しめない（異本による）。(六)劣った人は上等の服を着ない（異本による）。どうして彼は我々をクルから追放したのか。そしてこの場合も、欲望が愚者の身体において大いに心を苦しめる（異本による）。(七)自ら不平等な王が他者に平等を求めることは正しくない。自分に見られる行為と同じものを他者から受けるものだ。(八)寒季が終わって、暑い季節に、枯れ木の茂った森で、近くに火を放てば、それは風によって広がり、それから逃れようとしても、絶望して嘆くことになろう。(九)

サンジャヤよ、ドリタラーシトラ王は今や権力を得たのに、いかなる理由で嘆くのか。知性がなく、曲がったことに専念し、愚かで迷った、政策に暗い息子を受け入れて……。(一〇)信頼できないスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は、信頼の置けるヴィドゥラの言葉を軽んじて、そしてドリタラーシトラは、息子に気に入られることを望み、知りつつも非法（アダルマ）に入った。(一一)ヴィドゥラは叡知あり、クル族の利益を望み、博識、雄弁で、徳性をそなえているのに、サンジャヤよ、ドリタラーシトラ王は息子可愛さのあまり、クルのためになるヴィドゥラを顧みなかった。(一二)その息子は、誇りを損ない、自己を愛し、妬み深く激しやすく、実利（アルタ）と法（ダルマ）を逸脱し、口汚なく、怒りに我を忘れ、欲深く、心性邪悪である。(一三)彼は導きがたく、下劣で、執念深く、友を裏切り、根性が悪い。サンジャヤよ、ドリタラーシトラ王はそのような息子が可愛くて、知っていながら法と享楽（カーマ）とを捨てた。(一四)サンジャヤよ、

私が賭博をしていた時、クル族に滅亡が訪れないようにと、ヴィドゥラが予言的な言葉を述べているのに、ドリタラーシトラは彼を讃えなかった。(一五) もしヴィドゥラの考えに従っていれば、災難がクル族にふりかかることはない。彼の知見に従っている間は、彼らの王国は繁栄した。(一六)

さてサンジャヤよ、あの貪欲なドゥルヨーダナについて私の言うことを聞け。彼の顧問は、ドゥフシャーサナ、シャクニ、カルナである。ガヴァルガナの息子よ、彼の迷妄を見よ。(一七)

この私は、色々と探したが、クル族とスリンジャヤ族がどうしたら幸せであるか見出すことができない。深謀遠慮のヴィドゥラが他にやられている間に、ドリタラーシトラは他の人々から権力を奪った。(一八) ドリタラーシトラとその息子は、地上において並ぶもののない大王国を望んでいる。そこで、平和は決して得られることはない。私に属する財産はあまりにも近くにある(容易に手に入る)と彼は考えている。(一九)

カルナは戦闘において武器をとったアルジュナをうち破ることができると考えているが(異本による)、前に多くの戦いがあったのに、どうしてカルナは彼らの拠り所にならなかったのか。(二〇) カルナもスヨーダナ(ドゥルヨーダナ)も知っている。ドローナも祖父(ビーシュマ)も知っている。また他のクル族の人々も知っている。アルジュナに匹敵する弓取りはいないと。(二一) すべてのクル族も、その他の集まった王たちも知っている。敵を滅ぼすアルジュナがいない時にドゥルヨーダナが悪事を働けると。(二二) ドゥルヨーダナは頑迷にも(テクスト疑問)パーンダヴァの財産を奪えると考えている。棕櫚ほどもある(または、ターラの長さの)武器(弓)を持つ、弓術を知るアルジュナと戦って……。(二三) ドリタラーシトラの息子たちは、戦場でガーンディーヴァ弓の震動する音を聞かないうちは生きながらえることができる。ビーマセーナが激しく怒っているのに、スヨーダナは目的が成就したと考えている。(二四) 友よ、ビーマセーナが生きているうちは、インドラ(帝釈天)といえども我々の権力を奪うことはできない。アルジュナとナクラとわが勇士サハデーヴァが生きているうちは……。サンジャヤよ。(二五) もし老王とその息子がこの道理を受け入れるなら、サンジャヤよ、戦いにおいて彼らはパーンダヴァの怒りに焼かれて滅びることはなかろう。(二六) あなたは我々に起こった苦難を知っている。だがサンジャヤよ、あなたに敬意を表し、私はそれを辛抱する。以前、我々とクルの者たちの間に起きたこと、我々がドゥルヨーダナにどのようにふるまったか……。(二七) これからも、以前と同様にしましょう。あなたの言われたように、講和しましょう。私がインドラプラスタを治めることにします。バラタ族の長スヨーダナがそれを譲渡するように。(二八)」

(第二十六章)

非戦を説くサンジャヤ

サンジャヤは言った。

「パーンダヴァよ、あなたの行動は常に法(ダルマ)に基づいている。それは世間において知られ、

また認められている。人生は激流のようで、無常であると見て、パーンダヴァよ、それを滅ぼしてはならぬ。（一）アジャータシャトル（ユディシティラ）よ、もしクル族が戦うことなくあなた方に領土を割譲しないなら、アンダカ・ヴリシュニの王国で乞食をしている方がましだと思う。戦争により王国を得るよりも。（二）人生は束の間であり、激流であり、絶えざる苦しみであり、定めない。更にそれは名声にふさわしくない（異本に従うも疑問）。それ故、パーンダヴァよ、罪悪を大きくしてはならぬ。（三）王よ、法を阻害するもとである諸欲は人間につきまとう。賢明な人はまず諸欲を滅ぼして、世間において非難の余地ない称讃を得る。（四）プリター（クンティー）の息子よ、この世で財物に対する渇愛は人を束縛する。それを求める者の法（性質）は損なわれる。法を選ぶ者は知者である。享楽を貪る者は、財物に執着することにより滅びる。（五）友よ、法を諸行為の先頭に置けば、人は光輝に満ちた太陽のように輝く。法を欠けば、その邪悪な心の人はこの大地を得ても沈み込む。（六）あなたはヴェーダを学んだ。梵行（清浄行）を行なった。祭祀を行なった。バラモンたちに布施した。あなたは最高の状態について考えつつも、長年の間享楽に身を委ねた。（七）限度を越えて享楽を味わい、ヨーガの実修において行為しなければ、財産が尽きる時、はなはだしく享楽を失い、激しい欲望にかられ、苦しんで横たわる。（八）そこで彼は再び財物を得ることに没頭し、法を捨てて非法を行なう。その迷える愚者は他の世界を信じることなく、身体を捨てた後に苦しむ。（九）あの世においては、善業にせよ悪業にせよ（現世の）業が滅することはない。行為者の行く前に、善悪の業が行く。行為者はそれに従うのみである。（一〇）最高の謝礼をともなう、月ごとに行なう祖霊祭

においてて浄められ、香りと味をそなえた、バラモンたちに正しく与えられた食物。あなたの行為はその食物のように清く、知れ渡っている。（一一）この土地（体身）においてすべての行為はなされる。プリターの息子よ。死後になされるべきことは何も存在しない。あなたによってなされた行為は、来世においても存続する。善き人々によって称讃されている大なる善業は……。（一二）そこにおいては死を離れ、老いも恐怖もない。飢えも渇きも、心に不快なこともない。なされるべきことも何も存在しない。諸感官を喜ばすものを除いて……。（一三）

王よ、このようなものが我々の行為の果報である。パーンダヴァよ、それは怒りより生じ、また喜びより生じる。二つの世界を永遠に捨ててはならぬ（テクスト疑問）。（一四）（一五—一九略）

あなたは何故に敵の力を増大させ、自分の盟友を減少させたのか。パーンダヴァよ、何故に多年の間森で生活し、適切でない時に戦おうとしているのか。（二〇）パーンダヴァよ、愚かで法を知らない者は戦って、繁栄の道から離れる。知性ある者は法を知るが、彼も怒りのために繁栄から離れる。（二一）しかしプリターの息子よ、あなたの知性は非法には向けられない。あなたは怒りにより悪業をなさなかった。実にいかなる原因により、このような知性に背く行為をなそうと望むのか。（二二）怒りは病から生じないひどい頭痛だ。名声を損ない、悪しき結果をもたらす。善き人々はそれを飲み込むが、そうでない人々はそれを飲み込めない。大王よ、怒りを鎮めて飲み込みなさい。（二三）悪い結果をもたらすそれを誰が望むだろうか。あなたにとって忍耐のみが優れている。享楽はしからず。そこにおいて、ビーシュマ

とドローナとその息子が死ぬことになるような享楽は……。(二四) クリパ、シャリヤ、ヴィカルナ、ヴィヴィンシャティ、カルナ、ドゥルヨーダナ。これらを殺してどのような楽があると見るのか。それを言って下さい。プリターの息子よ。(二五) 海に至るまでのこの大地を得ても、あなたは老と死を捨てることはできない。快と不快とを、楽と苦とを捨てることはできない。このように知って、決して戦争をしてはいけない。(二六) もしあなたが、顧問たちの望みが原因でこのような行為を望むなら、自分の財産を彼らに与えて逃げ出しなさい。神々へ至る道から逸れるべきではない。(二七)」

(第二十七章)

講和を望むクリシュナ

ユディシティラは言った。

「サンジャヤよ、疑いもなくそれは正しい。あなたの言ったように、諸行為のうちで法(ダルマ)は最高であるということは。しかしサンジャヤよ、私が行なっているのが法か非法かを確認してから私を非難してもらいたい。(二) 非法が法の外見をとっている場合、法がすべからく非法の形をとって見える場合、また法が法の形をとっている場合。賢者たちはそれぞれの場合を確認する。(三)(三―八略)

クリシュナは法の主であり、巧妙で、政策通である。バラモンたちを敬い、賢者である。種々の強力な王たちに教示する。(九) 私が戦いを放棄したら非難されないか、あるいは戦えば自己の法を捨てることにならないか、誉れ高いクリシュナがそれを告げるべきである。ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は双方の利益を望んでいるのだ。(一〇)(一一―一三略) 友よ、クリシュナはこのように偉大だ。彼は諸々の行為の決着を知っている。最も立派なクリシュナは、我々にとって親しい人である。私はクリシュナの言葉に背くことはできない。(一四)」

(第二十八章)

ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は言った。

「サンジャヤよ、私はパーンダヴァたちが滅びないことを望む。そして彼らの繁栄と幸せを望む。同様にまた、多くの息子を持つドリタラーシトラ王の隆盛を常に望む。(一) サンジャヤよ、私の願いは、常に講和せよということであった。彼らに対してもそれ以外のことは言わなかった。というのは、それは王にとっても好ましく、パーンダヴァたちにとっても適切であると思うから。(二) サンジャヤよ、ユディシティラは非常に保ちがたい寂静の性質を示している。一方、ドリタラーシトラとその息子たちは貪欲である。どうして彼らの間で争いが増大しないであろうか。(三) サンジャヤよ、ここで真実と法(ダルマ)を行ないつつ、あなたは私とユディシティラからそれを学ぶ。それなのに何故、あなたはユディシティラのことを貶すのか。彼は精を出して自己の義務を果たし、言われた通り家長としての生活を送り、生まれつき善き人であるのに。(四)(五―一四略)

サンジャヤよ、バラモンと王族（クシャトリヤ）と実業者（ヴァイシャ）にとっての、全世界の法（ダルマ）を知りながら、知者たちのうちの知者であるあなたが、どうしてクル族のために苦労するのか。（二五）ユディシティラは聖典、馬祀（アシュヴァメーダ）、皇帝即位式（ラージャスーヤ）に常に専念しているではないか。彼はまた、弓、鎧、弓籠手（ゆごて）、戦車と武器に専念している。（二六）もしプリターの息子たちがクル族の人々を殺さないでも目的を達する方法を見出すなら、彼らは聖なる法を守るであろう。貴顕の行ないをするようにビーマセーナを抑制して……。（二七）もし彼らが父祖の行為に従って、運命の力により死に赴くなら、彼らは力の及ぶ限り自己の義務を果たして、彼らの死は称讃されるであろう。（二八）実にあなたはすべてについて心得ている。そこであなたの言葉を聞きたい。王たちが戦うことが法にかなっているか、戦わないことが法にかなっているか。（二九）サンジャヤよ、まず第一に四姓の区分と、それぞれの義務を考慮し、それからパーンダヴァたちの本務を聞いて、お好きなように、讃えるなり非難するなりしなさい。（三〇）

バラモンは学習し、祭祀を行ない、布施し、主要な聖地を訪れるべきである。学習させ、祭主（パトロン）のために祭祀を執行すべきである。そして、よく知られた贈物を受けるべきである。（三一）また王族は、法に従って生類を守護し、怠ることなく、布施し、祭祀を行ない、すべてのヴェーダを学び、妻を娶り、善行をなして家庭の生活を送るべきである。（三二）実業者（ヴァイシャ）は学習し、農耕・牧畜・商業により財産を蓄積し、怠ることなくそれを守り、バラモンや王族に対し親切にして、法に従い善行をなして家庭生活を送るべきである。（三三）〔シュードラ（従僕の階層）は、〕バラモンに仕え崇敬すべきである。学習と祭祀は彼には禁じられている。

孜々として繁栄のために常に努力すべきである。以上が古くからのシュードラの法（ダルマ）であると伝えられる。（三四）

王は怠ることなくすべての種姓（ヴァルナ）を守りつつ、それぞれの法（本務）に勤しませ、欲望にふけることなく、臣民たちに対し平等にふるまい、法にもとる願望を抱くべきではない。（三五）もし一切の法をそなえた知者で、彼よりも優れた人が誰かいるなら、その知者はその劣った者を教導すべきである。しかし、〔彼の土地を〕渇望すべきでない。それは正しくない。（三六）もし邪悪な男が運命の悪戯（いたずら）から力を得て、他人の土地を渇望するなら、諸王の間に戦争が起きるであろう。そのために鎧と刀槍と弓が生じた。インドラは悪魔（ダスユ）を殺すために、鎧と刀槍と弓を創った。（三七）

盗賊が人に見られずに財産を奪った場合、あるいは、人が見ているのに力ずくで財産を奪った場合、彼らは両者とも有罪である。サンジャヤよ。ドリタラーシトラの息子の場合がどうして例外であろうか。彼は悪意に支配され、貪欲にかられ、自分がやろうと望むことが法にかなっていると考えてしまう。（三八）

パーンダヴァたちの取り分は定まっている。どうして他人がそれを我々から奪ったのか。このような事情であるから、我々は戦って死んでも讃えられる。父祖の土地は、他人の王国よりも優れている。サンジャヤよ、これらの古くから伝わる法をクル族の王国の中で告げなさい。（三九）彼らは頓馬で、死神の支配下にあり、愚かにもドゥルヨーダナとともに集結している。あのクル族の集会場の中で行なわれたあの最悪の行為を再び思い出しなさい。

(三〇)ビーシュマをはじめとするクル族の人々は、あのパーンダヴァたちの愛しい妻である、徳性にめぐまれた誉れ高いドラウパディーが、欲にかられた男に悩まされて泣いていた時、それを捨てて置いた。(三一)もしそこに集まっていた老若のクル族の人々がそれを止めたならば、ドリタラーシトラは私に好意をかけたことになったであろう。そして彼の息子たちにも好意がかけられたことになったであろう。(三二)ドゥフシャーサナは敵意にかられ、舅たちの面前で、集会場の中にクリシュナー(ドラウパディー)を連れて来た。そこに連れて来られた彼女は、悲痛な言葉を述べたが、ヴィドゥラ以外には誰も庇護者を見出さなかった。(三三)その集会場に集まった王たちは愚かしさから、止めることができなかった。ただヴィドゥラだけが、法を知って、法にかなったことを説いて、愚かな男を批判した。(三四)

あなたも集会場で法を説かなかった。それなのにユディシティラに説教しようと望んでいる。しかしクリシュナーは清らかでなしがたい行為を行なった。というのは、集会場に行き、彼女はパーンダヴァたちと自分自身を危機から救い上げたから。舟が荒海から人を救うように。(三五)

あの集会場にクリシュナーがいた時、カルナは舅たちのそばで彼女に告げた。

『ドラウパディーよ、お前にはもはや道はない。今はドゥルヨーダナの家に行け。お前の夫たちはうち破られて、もう存在しない。美しい女よ、他の男を夫に選べ。(三六)』

このカルナから放たれた激しく燃える矢のような恐ろしい言葉は、アルジュナの心の中で強大となり、骨を断ち、急所を断ち、その心の中にしっかりと残った。(三七)黒羚羊の皮を

身につけようとする彼らに向かって、ドゥフシャーサナは辛辣な言葉を述べた。

『彼らはみな駄目になった不毛の胡麻の実のようだ。滅び、長い期間、地獄に堕ちた。(三八)』

ガーンダーラの王シャクニは、賭博の際に、パーンダヴァたちに対し、嘲って告げた。

『お前はナクラを失った。お前に何が残っているかね。クリシュナー(ドラウパディー)を賭けなさい。(三九)』

サンジャヤよ、賭博に際し、言われるべきでない言葉が言われたことを、あなたはすべて知っている。

ところで、この難局を打開するために、私自身がそこに行くことを希望する。(四〇)もしパーンダヴァの利益を損なわないで、クル族の講和をもたらすことができれば、私の清浄な行為は大なる成果をあげることになる。そしてクル族は死神の輪縄から解放されるであろう。(四一)法(ダルマ)にかなう内容豊かで害のない聖賢の言葉を私が語れば、ドリタラーシトラの息子たちは、私の見ている前でそれを考慮するであろう。クル族の人々はやって来た私に敬意を表するであろう。(四二)もしそうでなければ、戦車に乗るアルジュナと、戦いの準備をしたビーマによって、愚かなドリタラーシトラの息子たちは、自らの所行の故に燃やされ、滅ぼされてしまうであろう。(四三)パーンダヴァたちが賭博で敗れた時、ドリタラーシトラの息子たちは乱暴な言葉を言った。しかし時至れば、棍棒を持つビーマセーナは怠ることなく、ドゥルヨーダナにそれを思い出させるであろう。(四四)

ドゥルヨーダナは怨恨よりなる大樹である。カルナはその幹である。シャクニはその枝である。ドゥフシャーサナは豊かな花と果実である。無思慮なドリタラーシトラ王はその根である。(四五) ユディシティラは法よりなる大樹である。アルジュナはその幹である。ビーマセーナはその枝である。マードリーの双子は豊かな花と果実である。私とブラフマンとバラモンたちはその根である。(四六)

ドリタラーシトラとその息子は森である。パーンダヴァたちは森の虎である。サンジャヤよ。虎のいる森を切ってはならぬ。森から虎たちを追い出してはならぬ。(四七) 森がなくては虎は殺される。虎がいなければ森は切られる。それ故、虎は森を守るべきである。森は虎を守るべきである。(四八)

サンジャヤよ、ドリタラーシトラの息子たちは蔓草のようなものだ。パーンダヴァたちはシャーラ樹だ。蔓草は大樹に寄らなければ決して成長しない。(四九)

勇猛なプリター(クンティー)の息子たちは、ドリタラーシトラに仕えるか、戦うかの境目である。王はなすべきことをなすべきである。(五〇) 偉大で法を実践するパーンダヴァたちは、盛んな戦士たちであるが、講和を望んでいる。聖者よ、ありのままに報告しなさい。(五一)」

(第二十九章)

サンジャヤ、クル族のもとに帰る

サンジャヤは言った。

「王中の王よ、さようなら。パーンダヴァよ、私は帰ります。御機嫌よう。心の迷いから何か悪いことを言ったのでなければよいが。(一) クリシュナ、ビーマセーナ、アルジュナ、マードリーの双子、サーティヤキ、チェーキターナにもお別れする。御機嫌よう。達者でいてくれ。諸侯も温かい眼で私を見送って下さい。(二)」

ユディシティラは言った。

「サンジャヤよ、さようなら。恙無く行きなさい。あなたは決して我々に何も不快なことをしなかった。彼らも我々も、〔クルの〕集会場にいるあなたが心清らかで公平な人だということを知っている。(三) サンジャヤよ、あなたはふさわしい使節で、親密である。好ましく語り、徳性をそなえ、見識がある。サンジャヤよ、あなたは決して心迷うことはない。真実を言われても怒らない。(四) あなたは決して人の弱点をつくような荒々しいことを言わない。噂話(異本の読みをとる)や辛辣なことを言わない。(五) あなたの言葉は法にあふれて喜ばしく、意味深く、人を害さないと私は知っている。あなたはまさに我々にとって最も親密な使節である。ここに来るべき使節としては、ヴィドゥラがあなたと並ぶ。我々は以前、いつもあなたに会っていた。あなたはアルジュナにとってわが身に等しい友である。(六)(七―四五略)

ところでサンジャヤよ、この言葉をドリタラーシトラの息子スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)に聞かせなさい。

『競争相手のいないクル族を統治したいという望みが汝の身体において心を苦しめる。

(四六) それには何の道理も存在しない。我々は汝の好きなようにはならない。汝はインドラプラスタを私に返すか、それとも戦争をするかだ。バラタ族の長である勇士よ。(四七)』

(第三十章)

ユディシティラは続けた。

「サンジャヤよ、善人であろうと悪人であろうと、若者であろうと老人であろうと、弱者であろうと強者であろうと、配置者（造物主）は支配下に置く。(一) 主は幼稚な者に博識を、博識な者に幼稚さを与える。これはすべて、種子をまく時に予め定められたことだ。(二) もうお説教はやめよう。お互いに心ゆくまで相談したのだから、あなたはありのままに告げるべきである。(三)

ガヴァルガナの息子よ、クル族のもとに帰り、強力なドリタラーシトラに挨拶し、平伏し、息災かどうかたずねるべきである。(四) クルの人々に取り巻かれて座っている彼に告げるべきである。

『王よ、あなたの力により、パーンダヴァたちは幸福に暮らしています。(五) 敵を制する者よ、あなたの恩寵により、彼らは若くして王国を獲得しました。先に彼らに王国を与えながら、彼らが滅亡するのを捨てて置くべきではありません。(六) ――サンジャヤよ、誰もすべてを独り占めすることはできないから。――伯父上、我々は力を合わせて暮らしましょう。

敵たちの支配下に帰してはなりませぬ。(七)』

同様に、私の名前を告げながら、バラタ族の祖父ビーシュマに頭を下げて挨拶しなさい。(八) 挨拶してから、我々の祖父に言うべきである。

『あなたは沈んでいたシャンタヌの家系を救い上げました。(九) 祖父よ、そこで御自身のお考えにより、あなたの孫たちがお互いに仲よく暮らすように計らって下さい。(一〇)』」

(一一―一三略)

(第三十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

サンジャヤは偉大なドリタラーシトラの命令をすべて果たしてから、ユディシティラに別れを告げて、出発した。(一) 彼はハースティナプラに着いて、すぐに王宮に入った。宮中に来ると、彼は門衛に言った。(二)

「門衛よ、私がパーンダヴァのもとから帰ったことをドリタラーシトラに告げよ。侍従よ、もし彼が目覚めていたら取り次いで欲しい。王に予め知らせてから入りたい。(三)」

門衛は言った。

「陛下、御免下さい。サンジャヤが帰りました。お目にかかりたいと、門のところに来ています。使節がパーンダヴァのもとから帰りました。王よ、お命じ下さい。彼はどうすればよろしいか。(四)」

ドリタラーシトラは言った。

「私は気分がよく、彼に面会できると言え。サンジャヤを中に入れて歓迎せよ。私は彼といつでも面会する。侍従よ、彼はどうして門にいるのか。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王に許されて、サンジャヤは賢者と勇士と貴人に守られた大邸宅に入り、玉座にいるドリタラーシトラ王に合掌して近づいた。(六)

サンジャヤは言った。

「私サンジャヤは王に敬礼します。王よ、私はパーンダヴァたちのもとに行って、帰って来ました。賢明なパーンドゥの息子ユディシティラは、あなたに挨拶し、お元気かとたずねました。(七) 彼は機嫌よくあなたの息子たちについてたずねました。息子や孫たち、親しい人々、顧問たちや、あなたに養われている人々によって、あなたが満足しているかどうかも……。(八)」

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、私はそなたに会い、喜んでアジャータシャトル(ユディシティラ)についてたずねる。あの王と息子たちは息災か。弟たちと顧問たちは息災か。(九)」

サンジャヤは答えた。

「パーンドゥの息子と顧問たちは息災です。あなたが知っている以前の状態よりも更に……。

彼は汚れのない、法（ダルマ）と実利（アルタ）を行ない、賢明で、博識で、見識があり、徳性を有します。(一〇)

パーンダヴァにとっては、温情が法よりも勝り、財産の蓄積よりも法が勝ると考えられます。彼は法にもとる快楽にふけりません。バーラタよ、彼についてそのように知りなさい。(一一) 人は木製の操り人形のように、他に操られて行動します。パーンダヴァのこの苦難を見ると、神的な行為(運命)が人間よりも勝ると考えます。(一二) そしてあなたの罪悪をもたらす、不名誉で恐ろしい過失を見ると、人は時にかなったことを望む限り称讃を得ると考えます。(一三)

しかし勇猛なユディシティラは、蛇が古い無用の皮を脱ぐように罪過を離れ、あなたに罪悪を引き渡して、本来の状態をとって輝いています。(一四) ああ王よ、御自分の行為について考えてみなさい。それは法と実利をそなえた高貴な行為を逸脱しています。王よ、あなたはこの世で非難の的になりました。あなたはそれを除くことができないでしょう。罪悪はあの世までつきまといます。(一五) 今、あなたは息子の言うままになって、パーンダヴァたちを除いて疑わしい利益を望んでいます。あなたが法にもとるという声が地上に広まっています。バラタ族の長よ、このような行為はあなたにふさわしくありません。(一六) 知性を欠いた者、生まれの悪い者、残酷な者、執念深い者、王族の学術に暗い者、気力を欠いた者、教養のない者、このような者たちは災禍を乗り越えることができないでしょう。(一七)

(一八―二六略)

私はバラタ族の不和を引き起こしたことであなたを非難します。必ずや人類は滅亡するでしょう。もし〔講和〕しないなら、あなたの誤った行動により、火が枯木を燃やすように、

〔アルジュナは〕クル族を燃やすでしょう。（二七）王よ、全世界のうちでただあなただけが、生まれた息子たちの支配下に帰し、賭博の時に、欲望にかられた者たちを讃えました。見なさい。講和しなければ彼の運は尽きます。（二八）王よ、信用できない者たちに好意を寄せ、信用できる者たちを抑圧することにより、あなたは無力となったので、繁栄する無限の土地を守ることができません。クルの王よ。（二九）

高速の車に揺られ、私は疲れました。人中の獅子よ、お許しを得て私は寝所で休みます。明日、クル族の人々は集会場に集まって、ユディシティラの言葉を聞くことでしょう。（三〇）」

（第三十二章）

(51) ドリタラーシトラの不眠（第三十三章―第四十一章）

ヴィドゥラの教え（一）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

大知者ドリタラーシトラ王は門衛に告げた。

「ヴィドゥラに会いたい。すぐに彼をここに連れて来なさい。（一）」

ドリタラーシトラに遣わされた門衛はヴィドゥラに言った。

「大知者よ、大王様があなたに会いたがっておられる。（二）」

そう言われて、ヴィドゥラは王宮に行って、「門衛よ、ドリタラーシトラに取り次ぎなさい」と告げた。（三）

門衛は言った。

「王中の王よ、御命令によりヴィドゥラがやって来ました。あなたの両足を拝したいと望んでいます。彼は何をすればよいのですか。お命じ下さい。（四）」

ドリタラーシトラは言った。

「大知者で思慮深いヴィドゥラを入らせなさい。私はいつでも喜んでヴィドゥラに会う。（五）」

門衛は言った。

「ヴィドゥラよ、英邁なる大王の宮中に入りなさい。王はいつでも喜んであなたに会うと言

われる。（六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからヴィドゥラは、ドリタラーシトラの部屋に入り、考えこんでいる王に合掌して告げた。

「大知者よ、御命令によりヴィドゥラが参りました。もし何かやるべきことがあれば、私に命じて下さい。（七）」

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、サンジャヤがもどった。私を非難して去った。（八）明日、彼はユディシティラからの伝言を集会場の中で述べるであろう。（九）私は今、ユディシティラの言葉がどんなものか知らない。それは私の全身を燃やし、私を眠らせない。（一〇）不眠で燃えている者によいと思われることを言ってくれ。弟よ、お前は法（ダルマ）と実利（アルタ）に通じているから。（一一）サンジャヤがパーンダヴァたちのもとから帰ってから、私の心はうまく静まらない。すべての感官は正常でなくなった。彼は何を言うだろうと、今私は心配している。（一二）」

ヴィドゥラは言った。

「強力な敵に攻撃された者、弱小な者、手立てを欠いた者、財産を奪われた者、恋愛した者、盗賊。以上の者に不眠が入りこむ。（一三）王よ、あなたはこれらの大なる災いに悩まされていないではないか。他人の財産を渇望して悩んでいるのではないか。（一四）」

ドリタラーシトラは言った。

「私はお前から法にかない最高の至福をもたらす言葉を聞きたいと願っている。というのは、この王仙（王族の聖者）の家系において、お前一人が知者と考えられているから。（一五）」

ヴィドゥラは言った。

「讃えられることを行ない、非難されることを行なわず、異端でなく（異本による）信仰する。以上が賢者の特徴である。（一六）怒り、歓喜、高慢、破廉恥、虚栄心が、その人を目的から引き離すことがなければ、彼が賢者と言われる。（一七）敵たちがその人の計画や彼が企てた政策を知ることなく、彼がなしたことのみを知るなら、彼が賢者と言われる。（一八）寒暑、恐怖と快楽、盛衰が彼の計画を妨げることがないなら、彼が賢者と言われる。（一九）その人の世間的な叡知が法（ダルマ）と実利（アルタ）に従い、享楽（カーマ）よりも実利を選ぶなら、彼が賢者と言われる。（二〇）パラタの雄牛よ、賢者は能力に応じて求め、能力に応じて実行する。何ものをも軽んじない。（二一）彼は速やかに理解し、忍耐強く聞く。理解してから目的を追求する。欲望からではない。たずねられなければ他人のことに関わらない。これが第一の賢者の特徴である。（二二）

賢明な知性を持つ人々は、得られないものを望まない。失ったものについて嘆こうとしない。窮迫時においてうろたえない。（二三）決断してから始める。仕事の途中で中断しない。時間を無駄にしない。自己を制する。このような人が賢者と言われる。（二四）パラタの雄牛よ、賢者というものは気高い行為を愛する。繁栄をもたらす行為を行なう。有益な助言者に不満を言わない。（二五）自分が尊敬されても喜ばず、軽蔑されても苦しまない、ガンガー（ガンジス）の湖のように動揺しない人が賢者と言われる。（二六）万物の真実を知り、すべての仕事の方法を知り、人々の方策を知る人が賢者と言われる。（二七）雄弁で話題に富み、推理力があり、閃きがあり、速やかに書物の解説をする。彼が賢者と言われる。（二八）その学識が知性に従い、その知性が学識に従い、貴人（アーリヤ）の規範を破ることのない人が賢者と呼ばれる。（二九）

学識がないのに高ぶり、貧困であるのに誇り高く、仕事もしないで利益を得ようと望む者が、知者たちにより愚者と言われる。（三〇）自分の目的を捨てて他人の目的に従事する。友のために偽って行動する。そういう人が愚者と言われる。（三一）自分を愛している者を憎み、愛していない者を愛する。強力な者を憎む。そういう人を愚者と言う。（三二）敵を友とし、友を憎み害する。悪業を企てる。そういう人を愚者と言う。（三三）自分の計画を露呈してしまう。あらゆる場合に躊躇する。すぐになすべきことに手間どる。パラタの雄牛よ、それが愚者である。（三四）愚かな最低の人は、呼ばれないのに入り、問われないのに多く語り、信用すべきでない人々を信用する（異本による）。（三五）自分の過失は棚に上げて他人を非難し、権力（アルタ）もないのに怒るような者は、最も愚かな人である。（三六）自分の力を知らないで、法（ダルマ）と実利を欠いた得られがたいことを、何も努力しないで得ようと望む者は、この世で愚者と言われる。（三七）王よ、教えるべきでない者を教え、空しく仕え、吝嗇な者に頼るような人を愚者と言う。（三八）しかるに、莫大な財産、学術、権力を得ても、高慢でなくふるまう人は賢者と言われる。（三九）

従者たちに分け与えないで、一人だけたくさん食べ、美しい衣服を着る人。それよりもひ

どい者があろうか。（四〇）一人が罪悪を犯し、多くの人がその果報を受ける場合、果報を受ける人々は罪を免がれ、行為者が罪に汚される。（四一）一人の射手に放たれた矢は、一人を殺すか殺さないかである。しかし知性ある人の放った知性は、王もろとも王国を滅ぼすことができる。（四二）一により二を確定して、四により三を支配せよ。五を征服し、六を知り、七を捨てて幸福になれ（各数字に色々なものを当てはめ、種々の解釈が可能）。（四三）

毒液は一人を殺す。刀により一人が殺される。しかし政策〔審議〕の漏洩は王と王国と臣民を滅ぼす。（四四）一人で御馳走を食べてはいけない。一人で諸事を計画してはいけない。一人で旅に出てはいけない。眠っている人々の間で一人で目覚めてはいけない。（四五）第二のものがない唯一のもの——王よ、それについてあなたは知らない——は、真実であり、天界への階段であり、海における船のようである。（四六）忍耐ある人々には唯一の欠点があるが、第二の欠点はない。人々は忍耐ある人を無力と考えるということである。（四七）法（ダルマ）のみが唯一、最高の至福である。忍耐のみが唯一、最高の寂静である。学術のみが唯一、最高の眼である。無傷害（不殺生）のみが唯一、最高の幸福をもたらす。（四八）

蛇が穴に住むものたちを食うように、大地は二つのものを食う。戦わない王と、巡礼をしないバラモンとを。（四九）人は二つの行為をしてこの世で輝く。決して乱暴なことを言わないことと、邪悪な人に要請しないことと。（五〇）人中の虎よ、この二つのものが他に依存する。他の女に愛される男を愛する女と、他の人々に尊敬される人を尊敬する人々と。（五一）この二つの鋭い棘が身体を苦しめる。財産のない者が欲望を抱くこと。権力のない者が怒る

こと。（五二）王よ、この二人の人が天上に立つ。忍耐をそなえた主君と、布施をする貧者と。（五三）公正に得た財産には、二つの浪費があると知るべきである。不適切な受者に与えることと、適切な受者に与えないことと。（五四）

バラタの雄牛よ、人間には三種の道理（方策）があるとされる。それは劣ったものと、中位のものと、最上のものであると、ヴェーダを知る人々は説く。（五五）王よ、三種類の人々がいる。最上、最低、中位の人々である。それらの人々を適切に三種の仕事につけるべきである。（五六）王よ、三種の人々は財産を有しない。すなわち、妻、奴隷、息子である。彼らが得たものは、彼らが属する者に帰する。（五七）

強力な王は以下の四つのことを避けるべきであると言われる。賢者はそれらを知るべきである。——小知の者と政策を協議すべきではない。仕事の遅い者、怠惰な者、遍歴者（または「おべっか使い」）と協議すべきではない。（五八）友よ、あなたが家長の法（ダルマ）において繁栄にめぐまれている場合、以下の四はあなたの家に住むべきである。年老いた親類、家柄がよいが落ちぶれた者、貧しい友人、子供のいない姉妹。（五九）大王よ、インドラが問うたのに対し、ブリハスパティは四つの即座に生ずることを述べた。それらを私から聞きなさい。（六〇）神々の意向。叡知ある人々の力。学術を修めた人々の修養。悪をなした人々の滅亡。（六一）

バラタの雄牛よ、人間は努力して次の五つの火に仕えるべきである。すなわち、父、母、火、〔真実の〕自己、師。（六二）人は以下の五を敬って特別の名声を得る。すなわち、神々、祖霊、人間、比丘（びく）、第五に客人。（六三）あなたがどこに行こうとも、次の五があなたについ

て行く。すなわち、友人、敵、友でも敵でもない者、あなたを養う者、養われる者。（六四）もし人間の五つの感官のうちの一つの感官に欠陥があるなら、皮袋の底から水がもれるように、彼の知性はそこから流れ出る。（六五）

繁栄を望む人はこの世で六つの過失を捨てるべきである。眠り、倦怠、恐れ、怒り、怠惰、遅延。（六六）人は以下の六を海上の破船のように捨てるべきである。教えない師匠、ヴェーダを学ばない祭官、守護しない王、好ましく話さない妻、村に住むことを望む牛飼、森に住むことを望む床屋。（六七―六八）しかし、人は次の六つの美質を決して捨てるべきでない。真実、布施、勤勉、不満（悪意）がないこと、忍耐、堅固（充足）。（六九）この六つの永遠の美質を自分のものにした、感官を制御した人は、罪過に陥ることはないし、いわんや不利益を被ることはない。（七〇）以下の六は他の六を食いものにする。盗人は油断した者を、医者は病人を、女は愛欲にかられた男を、祭官は祭主（施主）を、王は争っている人々を食いものにし、賢者は常に愚者を食いものにする。（七一―七二）

七つの過失は災禍を生じ、確立した王も概してそれらにより滅びる。王たちは常にそれらを避けるべきである。（七三）すなわち、女性、賭博、狩猟、飲酒、乱暴な言葉、苛酷な刑罰、浪費。（七四）

滅亡する人の八つの前兆がある。まずバラモンを憎むこと。バラモンと争うこと。（七五）バラモンの財産を奪うこと。バラモンを殺そうとすること。彼らを非難することを喜ぶこと。彼らを称讃することを喜ばぬこと。（七六）そうすべき時に彼らを想起しないこと。彼らに要請された時に不平を言うこと。叡知ある人は以上の八を知性により知って避けるべきである。（七七）バーラタよ、以下の八は歓喜の精製バターである。それらが存在すれば、まさに非常に快いものと認められる。（七八）友人と出会うこと。大きな財産を入手すること。息子を抱くこと。性的結合。（七九）適切な時に親密な会話をすること。自分の身内の栄達（異本による）。望んでいたものの獲得。人々の集会における尊敬。（八〇）

九門（両眼、二つの鼻孔など人間の体にある九の穴）、三柱（無明、欲望、行為）、五証人（五つの感官）を持ち、土地を知る者（個我）に支配される家を知る賢者は最高の聖仙である。（八一）

ドリタラーシトラよ、十の者が法（ダルマ）を知らない。彼らについて知れ。すなわち酔人、放逸の人、狂人、疲れた人、怒った人、飢えた人、急いでいる人、恐れる人、貪欲な人、愛欲にかられた人の十である。それ故、賢者はこれらの状態に陥ってはならぬ。（八二―八三）

この点に関し、息子のために阿修羅（アスラ）の王（プラフラーダ）とスダンヴァン（バラモンの名。五・三五・五参照）が歌った古（いにしえ）の伝承（イティハーサ）が引用される。（八四）」（八五―一〇四略）　（第三十三章）

ヴィドゥラの教え（二）

ドリタラーシトラは言った。

「眠れないで苦しんでいる者は何をやればよいと思うか。それを私に言ってくれ。というのは弟よ、お前は法と実利（アルタ）に通じていて清浄であるから。（一）ヴィドゥラよ、叡知にもとづき

私にすべてを正しく教えてくれ。高邁な男よ、ユディシティラのためによいと思うことを、クル族の人々に幸せをもたらすことをすべて告げてくれ。(二) 罪悪を恐れ、罪悪を犯したと考え、私は動揺した心でお前にたずねる。聖者よ、すべてを正しく私に語れ、ユディシティラのすべての望みを。(三)」

ヴィドゥラは語った。——

その人の敗北を望まない場合は、たずねられなくても、善であろうと悪であろうと、厭なことでも好ましいことであろうと、その人に言うべきである。(四) 王よ、それ故私はあなたに申し上げる。クル族繁栄を望んで、私は幸せをもたらす法にかなった言葉を言うから聞きなさい。(五)

バーラタよ、たとい成功するとしても、不正をともなう適切な手段によらない行為に心を向けてはならぬ。(六) 王よ、適切な方法と手段で行なわれた行為がもし成功しなくても、叡知ある人は決して落胆することはない。(七) 諸行為は帰結をともなうから、帰結を考慮すべきである。熟慮して行なうべきである。性急に行なうべきではない。(八) 賢者は諸行為の帰結と結果と自分の能力を考慮して、行なうべきか否かを決めるべきである。(九) 現状維持、増大、減損に関して、また国庫と地方（国土）と軍隊に関して、基準を知らない者は王位にとどまることはない。(一〇) それに反し、以上述べた基準を見て、法と実利の知識に専心する者が王位に達する。(一一) 王国が得られたと考えて不適切に行動してはならぬ。というのは

修養のないことは富貴を滅ぼし、老年は最高の容姿を滅ぼすから。(一二)

魚は見かけに飛びついて、最高の餌におおわれた鉄の釣針を呑み、帰結を考慮しない。(一三) 繁栄を望む者は、食べられるもの、食べたら消化されるもの、消化されたら体に有益なものを食べるべきである。(一四) 木から未熟の果実を摘む者は、それから汁を得ず、種子も取れない。(一五) しかし、時期が来て熟した果実を取る人は、果実から汁を得る。そして、種子から果実を再び得る。(一六) 蜂が花を損なわずに蜜を取るように、人々を害することなしに彼らから財産を取るべきである。(一七) 園林における花輪づくりのように、色々な花を摘んでも、根こぎにしてはならぬ。炭焼きのように〔木を根こぎに〕してはならぬ。(一八)

これをすればどうなるだろう、しなければどうなるだろうと考えて、人は諸行為をすべきか否かを決めるべきである。(一九) ある種のものごとは常に変わりようがなくて、それらを得ようと企てるべきではない。それらを求めていくら努力しても無駄な場合がある。(二〇) またあるものごとはわずかな努力で大きな成果をもたらす。賢者はそれらのことを速やかに企てる。彼はそのようなことを行なうことを妨げない。(二一) もし彼が眼で飲むかのようにすべてを真っ直ぐに見るならば、彼が黙って座っていても、臣民は彼を愛する。(二二) もし彼が眼と意（こころ）と言葉と行為とにより四通りに世間の人々に恩寵を与えれば、世間の人々も彼に好意を抱く。(二三) しかし獣が猟師を恐れるように、生類が彼を恐れれば、彼は海に至るまでの大地を得たとしても見捨てられる。(二四)

もし彼が自己の威光により父祖伝来の王国を得ても、悪しき政策を行なえば、風が雲を滅

ぼすようにそれを滅ぼす。(二五) 善き人々により以前から行なわれていた法（ダルマ）を王が行なうなら、財宝に満ちた大地は栄えて繁栄を増大する。(二六) しかし王が法を捨てて非法を行なうなら、大地は火の上に置かれた皮のように縮まる。(二七) 敵の国土を粉砕するために努力するのと同じように、自己の国土を守るために努力すべきである。(二八) 法により王国を得るべきである。法によりそれを守るべきである。法に基づく繁栄を得れば、それを捨てないし、捨てられることもない。(二九) 狂人のたわごとや幼児の這い這いのようなことからも、あらゆるものからよいものを取るべきである。岩石から黄金を取るように。(三〇) 賢者は叡知ある人々の優れた言葉や善行をいたるところで集めて座すべきである。落ち穂拾いが落ち穂を集めるように。(三一) 牛は臭いで見る。バラモンはヴェーダ聖典で見る。王はスパイで見る。他の人々は肉眼で見る。(三二) よく乳を出さない牝牛は多くの苦難を受ける。しかし王よ、乳の出すぎる牝牛の場合、人々はそれを制御することはできない。(三三) 熱せ（苦しめ）られずとも曲がる（屈する）ものの場合、人々はそれを熱する（苦しめる）ことはない。また、自ら曲がる木の場合、人々はそれを曲げることはない。(三四) このたとえにより、賢者はより強力な者に服従すべきである。より強力な者に服従する人は、インドラに服従する（テクスト疑問）。(三五) 家畜は雨神を主（拠り所）とする。諸王は友邦（異本は「顧問官」）を友とする。夫は妻の友である。バラモンはヴェーダ聖典を友とする。(三六) 法は真実により守られる。学術は実践により守られる。美は浄めることにより守られる。一族（クラ）は行動により守られる。(三七) 穀物は計量により守られる。調教が馬を守る。牝牛は絶えず見ることにより守られる。女性は粗末な服装により守ら

れる。(三八) 作法を欠いた人にとって、家柄は拠り所にはならないと私は考える。最も低い生まれの人々の場合も、正しい作法は高く評価される。(三九) 他人の財産、容姿、勇気、家柄、幸福、及び歓迎されていることを妬む者の病気は果てしない。(四〇) なすべきでないことをしたり、なすべきことをしなかったり、不適切な時期に政策（審議）の機密が洩れたりするといけないから、人を酔わせるようなものを飲むべきでない。(四一) 酔い痴れる人々には、学術という酔い（マダ）、財産という酔い、第三に高貴な生まれという酔いがある。善き人々（賢者）にとっては、まさにそれらが、自制（ダマ）（の原因）である。(四二) 愚かな人でも、時に善き人（賢者）に何かの仕事を要請されたら、愚者だと定評のある自分のことを善き人であると考えるものだ。(四三) 善き人々は自己を制する人々の寄る辺である。善き人々のみが善き人々の寄る辺である。善き人々は愚かな人々の寄る辺である。しかし愚かな人々は善き人々の寄る辺ではない。(四四) 見事な衣裳を着た人は集会場を征服する。牛を所有する者は食事を共にする女を（テクスト疑問）征服する。車を有する者は道を征服する。徳性（シーラ）を持つ者はすべてを征服する。(四五) 徳性は人間にあって最も重要なものである。それを失った人にとって、生命も財産も縁者も意味がない。(四六) バラタの雄牛よ、富者の食事は主として肉よりなる。中位の人々の食事は主として牛乳よりなる。貧者の食事は主として塩（異本は「胡麻油」）からなる。(四七) しかし貧者は常により美味な御馳走を食べている。飢えは美味を生じさせる。それは富者においては得られがたい。(四八) 王中の王よ、世間一般では、富者には食欲がない。しかるに貧者の場合は、木片ですら消化される。(四九) 最低の人々の恐れは失業である。中位の人々

の場合は死を恐れる。しかるに最高の人々の場合は軽蔑されることをこよなく恐れる。（五〇）酔いには飲酒による酔いなどがあるが、そのうちでも権力に酔うことは最悪である。権力に酔った者は、倒れるまで目覚めることはない。（五一）

この世の人々は、感官の対象に働いている制御されない諸感官により苦しめられる。星々が惑星によって苦しめられるように。（五二）生得の自己を悩ませる五種の感官に征服されるなら、その人に災禍が増大する。白月（白分）における月のように。（五三）自己を制御せずに重臣たちを制御しようと望み、また重臣たちを制御せずに敵を征服しようと望む者は、どうしようもなく滅びる。（五四）敵国を征服するように、まず自己を制御するなら、必ずや重臣たちや敵たちを征服するのに成功する。（五五）感官を制御し、重臣（異本は「自己」）を制御し、罪を犯した者たちを罰し、よく考慮してから行動する賢者。幸運（繁栄）の女神はそのような王にこの上なく仕える。（五六）

王よ、人間の体は戦車である。真我（アートマン）（真実の自己）は彼の御者である。諸感官は彼の馬たちである。賢者は巧みな操従者がそれらの調御した馬により注意深く快適に進むように行動する。（五七）制御されない諸感官は人を破滅させもする。柔順でなく調御されない馬たちが、道で下手な御者を破滅させるように。（五八）諸感官に支配された愚者は、利益に不利益を、不利益に利益を見て、非常な不幸を幸福と考える。（五九）感官に支配された者は、法（ダルマ）と実利（アルタ）を捨て、幸運（繁栄）、生命、財産、妻たちから速やかに捨てられる。（六〇）財富の主（あるじ）であっても諸感官の主でない者は、諸感官を支配しないことにより権力の座から堕ちる。（六一）意（こころ）と知性（根源

的思惟機能）と感官を制御して、自ら自己を探求すべきである。実に自己こそ自己の友である。自己こそ自己の敵である。（六二）王よ、細かい目の網に入れられた二匹の大魚〔が網を破る〕ように、欲望と怒りは知性を損なう。（六三）法（ダルマ）と実利（アルタ）を考慮して必需品を集めれば、必需品を備え、常に幸福に繁栄する。（六四）知性を滅ぼす五つの内部の敵を征服しないで外部の敵を征服しようと望むなら、敵が彼を征服する。（六五）邪悪な王たちが、諸感官を制御しないことから、権力に迷い、自分の行為によって滅びるのが認められる。（六六）罪の無い者も、罪を犯した者を捨てなければ、仲間だということで、同じ刑罰に処せられる。湿ったものも乾いたものと交わることにより燃やされる。それ故、邪悪な者たちと同盟を結んではならぬ。（六七）五つの目的を持つ跳梁する自己の五つの敵（感官）を、迷妄の故に制御しないなら、その人を災禍が食う。（六八）

不満（悪意）のないこと、廉直、清さ、満足、好ましく語ること、自制、真実、寛ぎ（くつろぎ）（落着き）。以上は邪悪な人々には認められない。（六九）自己を知ること、寛ぎ、忍耐、常に法に従うこと、言葉を慎むこと、布施。バーラタよ、これらは卑しい者たちには認められない。（七〇）愚者は暴言と中傷により賢者を非難する。言う者が罪悪を受ける。忍耐する者は解放される。（七一）邪悪な者にとって加害が力である。王にとって刑罰権（または、武力行使）が力である。女性にとっては従順が力である。有徳の人にとって忍耐が力であるとされる。（七二）

王よ、言葉を制御することは最も行ないがたいこととされる。意味内容があり多彩なことをたくさん言うことはできないから。（七三）王よ、様々に見事に説かれた言葉は幸せをもた

らす。まずく説かれた言葉は不利益をもたらす。（七四）矢で断たれ斧で切り倒された森は再生する。しかし暴言による恐ろしい言葉の傷は決して癒えない。（七五）様々な種類の矢は身体から抜き取ることができる。しかし言葉の矢は、心に刺さっているので抜くことができない。（七六）言葉の矢は口から発せられる。それに撃たれた者は昼夜嘆き苦しむ。それは必ず他者の急所に当たる。賢者はそのような矢を他者に放つべきでない。（七七）

神々がある人を滅ぼしたいと望む時、彼の知性を奪う。彼はものごとを転倒して見る。（七八）知性が暗くなり破滅が近づいた時、条理のように見える不条理が彼の心から離れなくなる。（七九）

バーラタよ、あなたの息子たちの知性は、パーンダヴァたちに対する敵意に満ちている。そしてあなたはそれについて知らない。（八〇）三界の王にもなれるような特相をそなえている、あなたの弟子であるユディシティラが統治者になるべきである。ドリタラーシトラよ。（八一）彼はあなたのすべての息子たちに勝って幸運にめぐまれ、威光と叡知をそなえ、法と実利の真実を知っている。（八二）王中の王よ、法を保つ者たちのうちの最上者である彼は、温和さと憐憫により、またあなたに対する尊敬の念から、多くの苦難に耐えた。（八三）

（第三十四章）

ヴィドゥラの教え（二）

ドリタラーシトラは言った。

「大知者よ、更に法と実利にかなった言葉を説いてくれ。私は聞いていて飽きることはない。お前はすばらしいことを語る。（一）」

ヴィドゥラは語った。――

すべての聖地で沐浴すること。すべての生類に対して廉直であること。この両者は等しい（功徳がある）。あるいは、廉直が優れている。（二）王よ、常に息子たちに対して廉直であれ。あなたはこの世で最高の名声を得て、死後は天界に達するであろう。（三）人中の虎よ、人間の清浄な名声が世間で謳われている限り、その人は天界において敬われる。（四）

この点に関しても、古の伝承が引用される。すなわち、ケーシニーのための、ヴィローチャナ（魔王の名）とスダンヴァン（バラモンの名）との論争である。（五）

ケーシニーは言った。

「ヴィローチャナよ、バラモンが優れているか、あるいはディティの息子（ダイティヤ、悪魔）たちが、優れているか。また、どうしてスダンヴァンは長椅子に座らないのですか。（六）」

ヴィローチャナは言った。

「ケーシニーよ、我らは造物主（プラジャーパティ）の息子であるから優れている。我らは最高である。実にこれらの世界は我々のものである。神々が何だ。バラモンが何だ。(七)」

ケーシニーは言った。

「ここに座りなさい。ヴィローチャナよ、集会場で待ちましょう。スダンヴァンは朝に来るでしょう。そうすれば、あなた方二人がいっしょにいるのを見ることができます。(八)」

ヴィローチャナは言った。

「可愛い御婦人よ、あなたの言う通りにしょう。朝になったら、あなたはスダンヴァンと私とがいっしょにいるのを見ることができるでしょう。(九)」

スダンヴァンは言った。

「プラフラーダの息子よ、私はあなたの黄金の座席を受ける。しかしあなたといっしょに座りたくはない。(一〇)」

ヴィローチャナは言った。

「木の板か草の束の座席を持ってこさせよう。スダンヴァンよ、あなたは私といっしょに座るにふさわしくない。(一一)」

スダンヴァンは言った。

「あなたの父でさえ、私がいっしょに座る時、私の下方に座った。あなたは家で安楽に育った坊ちゃんで、何もわからない。(一二)」

ヴィローチャナは言った。

「スダンヴァンよ、黄金や牛馬や、阿修羅にある財産は何でも賭けて、知っている人にこの質問をしよう。(一三)」

スダンヴァンは言った。

「ヴィローチャナよ、黄金や牛馬などは取っておけ。二つの生命を賭けて、知っている人にこの質問をしよう。(一四)」

ヴィローチャナは言った。

「我々は生命を賭けてどこへ行こうか。私は神々の前にも人間の前にも立ったことがない。(一五)」

スダンヴァンは言った。

「生命を賭けて、我々はあなたの父のところに行こう。プラフラーダは息子のためにも虚偽を言わないだろう。(一六)」

プラフラーダは言った。

「いっしょに行動したことがない二人が現われた。怒った二匹の毒蛇のように、一つの道をこちらにやって来る。(一七)

以前にいっしょに行動したことがないのに、どうしていっしょに歩いているのか。ヴィローチャナよ、どうしてスダンヴァンと仲良くなったのか。(一八)」

ヴィローチャナは言った。

「スダンヴァンと仲良くなったのではありません。生命を賭けたのです。プラフラーダよ、私は質問をします。虚偽を言ってはなりませぬ。(一九)」

プラフラーダは言った。

「スダンヴァンのために、水と接客の飲食物を持って来させよう。バラモンよ、あなたは尊敬さるべきである。白い牝牛は太っている。(二〇)」

スダンヴァンは言った。

「水と飲食物は途中で供えられました。プラフラーダよ、我々の質問に答えて下さい。〔バラモンが優れているか、ヴィローチャナが優れているか。〕(二一)」

プラフラーダは言った。

「バラモンよ、息子ともう一人あなたが眼の前にいるのに、論争している二人の質問に、どうして私のようなものが答えられるか。(二二) スダンヴァンよ、真実を告げなかったり、不真実を告げたりする悪しき解答者はいかなる生活をするか聞きたい。(二三)」

スダンヴァンは言った。

「捨てられた妻や賭博で敗れた人が送る夜、重荷で身体が憔悴した者が送る夜。悪しき解答者はそのような夜を送るであろう。(二四) 悪しき解答者は、都に入るのを禁じられ、城門の外で飢えて、多くの敵を見ている人が過ごすのと同様の夜を過ごすのであろう。(二五) 家畜(山羊など)に関する虚偽で彼は五人を殺す。牝牛に関する虚偽で十人を殺す。馬に関する虚偽で百人を殺す。人間に関する虚偽で千人を殺す。(二六) 金に関して虚偽を語れば、生まれた者

と生まれない者たちを殺す。土地に関する虚偽はすべてを殺す。土地に関する虚偽を述べてはならぬ。(二七)」

プラフラーダは言った。

「アンギラス(スダンヴァンの父)は私より優れ、スダンヴァンはお前より優れている。ヴィローチャナよ。彼の母はお前の母よりも優れている。それ故、お前は彼に敗れた。(二八) ヴィローチャナよ、スダンヴァンは今、お前の生命の主(あるじ)である。スダンヴァンよ、どうかヴィローチャナを返していただきたい。(二九)」

スダンヴァンは言った。

「あなたは法(ダルマ)を選び、自分勝手に虚偽を言わなかった。それ故あなたに得がたい息子をお返ししましょう。(三〇) プラフラーダよ、あなたの息子ヴィローチャナをこの通りお返しする。しかし彼は、王女(ケーシニー)の前で私の足を洗わなければならぬ。(三一)」

ヴィドゥラは語った。──

それ故、王中の王よ、あなたは土地に関する虚偽を述べてはなりませぬ。息子に従って迷い、息子や顧問たちとともに破滅してはなりませぬ。(三二) 神々は牧夫のように杖を持って守らない。しかし守りたいと望む人に、神々は知性を与える。(三三) 人間は善に心を注げば注ぐほど、彼のすべての目的はかなう。その点は疑問の余地がない。(三四)

諸ヴェーダは幻影にとらわれた者を苦悩から救い出さない。羽根の生えた鳥が巣を捨てる

ように、ヴェーダは臨終の時に彼を捨てる。（三五）

飲酒、喧嘩、大勢に対する敵意、夫婦喧嘩、親族の離間、王に対する憎悪、男女の諍い（いさかい）。以上の悪しき道を避けるべきであると言われる。（三六）身相学者（人相見）、以前に盗人であった

商人、詐欺師（または「鳥猟師」）、医師、敵、友、役者。以上の七を証人にすべきではない。（三七）

名誉を得るための火供（アグニホートラ）、名誉のための沈黙行、名誉のための学習、名誉のための祭祀。これらの四は危険をもたらさないが、不適切に行なわれれば危険をもたらす。（三八）家を燃やす者、毒を盛る者、不義の子の食物を食べる者、ソーマ酒を売る者、矢（武器）を作る者、占い師、友を欺く者、姦通者、堕胎させる者、師（グル）の寝台を犯す者、酒飲みのバラモン、辛辣な者、鴉のように卑しい者、異端者、ヴェーダ聖典を非難する者、着服する者、落伍者（ヴラーティヤ）、金持ちなのに吝嗇な者、守護を要請されたのに危害を加える者。以上はすべてバラモン殺しに等しい。（三九―四一）黄金は薬の火によって確かめられる。幸運な人は態度により（異本による）、善良な人は行為により、勇士は危険において、友人と敵は災禍において確かめられる。（四二）老いは容色を奪う。希望は平静さを奪う。死は生命を奪う。妬みは法（ダルマ）の実践を奪う。怒りは繁栄を奪う。卑しい者に仕えることは徳性を奪う。愛欲は廉恥を奪う。自惚れはすべてを奪う。（四三）繁栄は幸運から生ずる。大胆さにより増大する。巧みさにより根づく。自制により確立する。（四四）（四五―六五略）

愚かなドゥルヨーダナ、シャクニ、ドゥフシャーサナ、カルナに権力を与えて、あなたはどうして繁栄を望むのか。（六六）バラタの雄牛よ、パーンダヴァたちはすべての美質をそな

えている。彼らは父に対するようにあなたに対している。あなたも息子に対するように彼らに接しなさい。（六七）

（第三十五章）

ヴィドゥラの教え（四）

ヴィドゥラは語った。――

この点に関し、次のような古（いにしえ）の伝承（イティハーサ）が引用される。それはアートレーヤ（アトリの息子）とサーディヤ神たちの対話であると聞いている。（一）誓戒を厳守する大仙がかってハンサ（鵞鳥の一種）の姿をとってさすらっていた時、サーディヤ神たちがその大知者にたずねた。（二）

「大仙よ、我々はサーディヤ神だ。我々はあなたを見ても、誰であるか推量することができない。あなたは博識をそなえた賢者で、知性があると考える。どうか高貴な聖賢の言葉を語ってもらいたい。（三）」

ハンサは言った。

「神々よ、以下のようにすべきであると聞いております。

心のすべての結び目を解いて、好ましいことと不快なこととを制御すべきである。（四）非難されても言い返すべきではない。もし人が耐え忍べば、その怒りは、非難する者を燃やし、その人は相手の善行（の功徳）を得る。（五）他を非難してはならぬ。他者を軽蔑してはならぬ。友を裏切ってはならぬ。卑しい者に仕えてはならぬ。高慢であっても卑屈であってもな

らぬ。荒々しい言葉と人を傷つける言葉を避けるべきである。(六) 恐ろしい言葉は人々の急所、骨、心、生命を燃やす。それ故、法に喜ぶ者は、人を傷つける言葉、荒々しい言葉を常に避けるべきである。(七) 人を傷つける粗野で荒々しい言葉を述べ、言葉の棘で人々を刺すような者を、人間のうちで最も不幸な者と知るべきである。そのような者の口には災いがとりついている。(八)

敵が火や太陽のように燃える鋭い矢で彼を手ひどく射た場合、もし彼が賢明なら、傷つきながらもそれをこらえ、相手が功徳を自分に引き渡すと知るであろう。(九)

もし善き人、邪悪な人、苦行者、盗賊に仕えるなら、衣が染料の色に染まるように、その人も彼らに影響される。(一〇) 非難されても非難を返さず、他の者にも非難させない人。打たれても打ち返さず、他の者にも打たせない人。自分を殺そうと望む相手に悪意を持たぬ人。神々はそのような人が来ることを望む。(一一) 語らないことは語ることに勝ると言われる。第二に、もし語ったら真実を語るべきである。第三に、もし真実を語ったら、好ましく語るべきである。第四に、もし好ましく語ったら、法にかなったことを語るべきである。(一二) 人は言い合う相手、仕える相手、そのようになりたい相手と同様になる。(一三) 人はそれぞれのものごとから退避すれば、それぞれから解放される。すべてのものから退避することにより、ほんのわずかの苦を経験することもない。(一四) 彼は敗れることはなく、また他者に勝とうと望むこともない。彼は敵意を抱くことも、反撃することもない。毀誉褒貶に対して平等心を保ち、悲しむことも喜ぶこともない。(一五) すべての者の幸福を願い、不幸を願わず、真実を語り、柔和で自制した人、彼は最上の人である。(一六) 無益に他人を慰撫せず、約束したものを与え、成功と失敗とを知る人、それが中位の人である。(一七) 教導されがたく、他に危害を加え、他を教導せず、怒りに支配され、恩知らずで、誰の友でもなく、邪悪である。以上が最低の人の標である。(一八) 他の人々によいことをされてもそれを信じず、自分自身を疑い、友人を斥ける人、それが最低の人である。(一九) 自己の幸せを願う者は最上の人々にのみ仕えるべきである。時に応じて中位の人々にも仕えるべきである。しかし最低の人々には決して仕えるべきではない。(二〇) 人は力、絶えざる努力、叡知、勇気によって空しい財産を得られるが、真に称讃を得ることはできない。また、偉大な一族の人々の行動に達することはできない。(二一)」

ドリタラーシトラはたずねた。

「神々、法と実利に長じた人々、博識者たちも、偉大な一族にあこがれる。ヴィドゥラよ、お前に質問する。偉大な一族とはいかなるものか。(二二)」

ヴィドゥラは語った。——

正しい行動をする偉大な一族には七つの美質がある。すなわち、苦行、自制、ブラフマン(ヴェーダ)を知ること、祭祀、清浄なる結婚、〔柔和さ、〕食物を与えること。(二三) 偉大な一族の行動と生まれは欠点がない。彼らは行動(または「心」)の清澄さにより法を実践する。彼らは一族

における特別の名声を望む。彼らは虚偽を離れる。(二四)
祭祀を行なわないこと、不適切な結婚、ヴェーダ聖典の放棄、法(ダルマ)に違反すること。以上により一族は堕落する。(二五)神々に帰すべき財産を損なうこと、バラモンの財産を奪うこと、バラモンに対して過失を犯すこと。以上により一族は堕落する。(二六)バーラタよ、バラモンたちを侮辱することにより、彼らを中傷することにより、彼らに委託されたものを奪うことにより、一族は堕落する。(二七)畜牛や人や馬をそなえていても、よい行動を欠いていれば、一族と呼ばれるに値しない。(二八)しかし、よい行動を欠いていなければ、一族がわずかの財物しか持たなくても、一族と呼ばれるに値し、大なる名声を得る。(二九)

我々の一族の中に敵意を抱く者が誰もいないように。王の顧問(大臣)が他人の財産を奪わないように。友を裏切ったり、不実であったり、嘘をついたりしないように。祖霊と神と客人よりも先に食べることのないように。(三〇)我々の一族で、バラモンを殺したり、バラモンを憎んだり、農業をしたりする者は、我々と交際できない。(三一)草(座るための薦)、土地(座るための場所)、水、第四に親切な言葉。以上は善き人々の家々において決して欠けることはない。(三二)大知者である王よ、法を守る、功徳をなす人々にあっては、客をもてなすために、最高の信頼をこめて、これらのものを捧げるのである。(三三)王よ、車は小さいといえども重荷を運ぶことができる。他の樹木はできない。同様に、偉大な一族の人々は結合すれば重荷に耐える。他の人々はそうではない。(三四)人が彼の怒りを恐れ、疑いをもってつき合うなら、それは友ではない。人が彼を父のように信頼する場合、それが実に友である。その他は

縁故にすぎない。(三五)縁故関係はなくても、友情を抱いているなら、実にそれが縁者であり友であり、寄る辺であり、最高の拠り所である。(三六)もし人が移り気で、長老に仕えず、心が動揺するなら、その人は常に友を得がたい。(三七)もし人が移り気で、自己を制御せず、感官に支配されるなら、利益はその人を避ける。ハンサ(鳥鷺)が乾いた湖を捨てるように。(三八)突然に怒り、理由もなく静まる。揺れ動く雲のように……。これは善き人々の性質ではない。(三九)よいことをされても友たちによいことを返さないなら、その恩知らずが死んだ時、猛獣も彼を食わない。(四〇)財産が有ろうと無かろうと、友たちに求めるべきである。求めないでは、友の優劣はわからない。(四一)苦悩により容姿が損なわれる。苦悩により力が損なわれる。苦悩により知識が損なわれる。苦悩により病気になる。(四二)悲嘆により何も得られない。身体は苦しみ、敵は喜ぶ。悲嘆に暮れてはならぬ。(四三)

人は何度も死んでは生まれる。人は何度も衰えては栄える。人は何度も求めては求められる。人は何度も悲しんでは悲しまれる。(四四)幸不幸、有無、得失、死と生。これらは交互に、すべての者に降りかかる。それ故、賢者は喜ぶべきでない。悲しむべきでない。(四五)これらの六つの感官は揺れ動く。それらの一つが働くごとに、そこから人の知性が流れ出る。穴のあいた水瓶から常に水が流れるように。(四六)

ドリタラーシトラは言った。

「燃え上がる細い火のようなユディシティラ王に対して、私は奸計を用いた。彼は私の愚か

な息子たちを戦いにより滅ぼすであろう。(四七) この一切は悲嘆に暮れ、私の心も常に悲嘆に暮れている。大知者よ、私の悲嘆を除くような言葉を語ってくれ。(四八)」

ヴィドゥラは語った。——

罪のない人よ、学術と苦行を除いて、感官の制御を除いて、貪欲を捨てることを除いて、あなたに平安を見出せない。(四九) 人は知性により恐怖を除去する。苦行により大いなるものを得る。師に仕えることにより知識を得る。捨離により寂静を得る。(五〇) 解脱を求める人は、この世で、布施の功徳やヴェーダ聖典の功徳に依存することなく、愛憎を離れて暮らす。(五一) よく学習し、よく戦い、よく仕事を行ない、よく苦行を行じた時、その終わりに、人は幸福になる。(五二)

王よ、離間した人々は、よく整えられた寝台に寝ても眠りを得られない。女性において悦びを得られない。讃嘆者(マーガダ)や吟誦者(スータ)たちに讃えられても喜べない。(五三) 離間した人々は決して法(ダルマ)を実践しない。離間した人々はこの世で幸福を見出せない。離間した人々は尊敬を得られない(異本による)。離間した人々は平安を喜ばない。(五四) 離間した人々にとっては、適切な忠告は好ましくない。彼らにとっては、獲得と維持(安寧)はあり得ない。王よ、彼らにとっては、滅亡より他に拠り所は他に何もない。(五五) 牝牛においては豊かさ(乳など)が想定される。バラモンには苦行(修養)が想定される。女性には移り気が想定される。親族からは危険が想定される。(五六) 細く長い糸でも多くの糸がいっしょになれば、数が多いので常に多くの重

荷に耐える。これは善き人々の比喩である。(五七) ドリタラーシトラよ、バラタの雄牛よ、燃える木は別々なら煙をたてるだけだが、いっしょになれば燃え上がる。親族も同様である。(五八) ドリタラーシトラよ、バラモン、女性、親族、牝牛に対して威張る人々は、熟して軸から落ちる果実のように落ちる。(五九) 強くしっかりとした大樹でも、一本で生えていれば、風は力まかせにその枝や幹を破壊する。(六〇) しっかりとした木が群なしていっしょにいれば、お互いに依存することにより、最も強い風に耐える。(六一) 同様に、諸々の美質にめぐまれた人も、一人でいれば、敵たちは倒せると考える。風が一本の樹木を倒すように。(六二) 親族はお互いに支え合うことにより、お互いに依存することにより栄える。池における蓮のように。(六三) バラモン、牝牛、女性、子供、親族、食物をくれた人、庇護を求めて来た人。これらの人々は殺されるべきでない。(六四)

財産を持つ人々の場合でも、人間において健康に勝る美質はない。あなたに幸あらんことを。病気の人々は死んだも同様である。(六五) 怒りは病気によらない激しい頭痛である。それは悪い結果をもたらし、荒々しく、激しく、おぞましい。それは善き人々により呑まれる。愚かな人々はそれを飲まない。大王よ、それを鎮めて呑みなさい。(六六) 病に苦しむ人々は果報を考慮しない。感官の対象について識別しない。病人は常に苦しみ、財産を享受することも幸福も知らない。(六七)

王よ、かつてドラウパディーが賭博において勝ち取られたのを見て、私があなたに言ったことを、あなたは実行しなかった。ドゥルヨーダナを止めよと私は言った。賢者は賭博にお

ける詐術を避けるものだ。(六八) 柔和さに反する力は力ではない。混交した法(ダルマ)が孜々として追求さるべきである。残酷さに基づく繁栄は滅びる。柔和でかつ強力な繁栄が子々孫々まで存続する。(六九) ドリタラーシトラの息子たちがパーンダヴァたちを守らんことを。パーンドゥの息子たちがあなたの息子たちを守らんことを。王よ、クル族が敵味方を同じくし、政策を同じくして、幸福に繁栄して暮らしますように。(七〇) あなたは今やクル族の柱である。クルの一族はあなたに依存している。アージャミーダよ。森林の暮らしで疲労した若いパーンダヴァたちを守れ。自分の名声を守りつつ。(七一) クル族をパーンドゥの息子たちと講和させなさい。敵たちがつけ入る隙を求めないように。王よ、彼らはすべて真実に立っている。王よ、ドゥルヨーダナを止めなさい。(七二)

(第三十六章)

ヴィドゥラの教え (五)

ドリタラーシトラはたずねた。(一—七略)

「すべてのヴェーダ聖典に、人間は百歳の寿命を有すると説かれている。いかなるわけで、そのすべての寿命を全うしないのか。(八)」

ヴィドゥラは語った。——

多弁、高慢、捨離しないこと、怒り、過度の知識欲(または欲望)、友を裏切ること。王よ、以上の六つの鋭利な刀が人間の寿命を切る。これらが人間を殺すのであって、死が殺すのではない。あなたに幸あらんことを。(九—一〇) バーラタよ、彼を信用している人の妻と交わる者、師の妻を犯す者、バラモンであってシュードラ女の夫となる者、及び酒を飲む者、庇護を求めて来た人を殺す者。以上はすべてバラモンの殺害者に等しい。これらの者と会ったら、贖罪式を行なうべきであるとヴェーダに説かれる。(一一—一二) 家住者にして、寛大で、卑しく語らない者、御下(おさ)がりを食べる者、他者を害さぬ者、不利益なことをしない者、不和を避ける者、恩を知り、真実で、柔和で、賢明な者は天界へ行く。(一三)

王よ、常に好ましいことを言う人は得られやすい。しかし好ましくないが有益なことを言う人と聞く人は得られがたい。(一四) 法(ダルマ)に依存して、主君の好悪を離れて、好ましくないが有益なことを言う人、そのような人により王は真に友を持つ者となる。(一五) 一族のために人を捨てよ。村のために一族を捨てよ。地方(国土)のために村を捨てよ。自己(アートマン)のために大地を捨てよ。(一六) まさかの時のために財産を守るべきである。財産を犠牲にしても妻を守るべきである。妻や財産を犠牲にしても、常に自己を守るべきである。(一七)

王よ、賭博の際に私は、これは正しくないと告げた。病人にとって良薬が苦いように。しかしその言葉はあなたにとって好ましくなかった。(一八) あなたは鴉のような息子たちのために、美しい尾羽根の孔雀のようなパーンダヴァたちを滅ぼそうとした。獅子たちを捨て、ジャッカルたちを守り、王よ、時至ってあなたは嘆いている。(一九)(二〇—三七略)

パーンダヴァたちと戦うことの悪しき結果を見よ。インドラをはじめとする神々ですら恐れるであろう。息子〔及びそれに等しい者〕たちの敵対、常に悲嘆に暮れて過ごすこと、名声を失うこと、敵たちの喜び。(三八)インドラのような王よ、ビーシュマやあなたの怒り、ドローナやユディシティラ王の怒りは、増大したらこの全世界を滅ぼすであろう。空を水平に横切る白い彗星のように。(三九)あなたの百人の息子、カルナ、五名のパーンダヴァたちは、海に囲まれたすべての大地を治めることができる。(四〇)王よ、あなたの息子たちは森で、パーンドゥの息子たちは虎であると考えられる。虎とともに森を切ってはならぬ。虎たちを森から追い払ってはならぬ。(四一)虎たちなしでは森はない。森なしでは虎たちはない。というのは、虎たちにより森は守られ、森は虎たちを守る。(四二)

邪な心の悪党は、他人の欠点を知りたいと望むが、他人の美質を知りたいと望まない。(四三)もし最高の実利(アルタ)を望むなら、まず法(ダルマ)を行なうべきである。というのは、実利は法から離れないから。甘露(アムリタ)が天界から離れないように。(四四)その人の心が悪を嫌い、善に住するなら、彼は本来のものとそれが変化したものとの、この一切を知る。(四五)法と実利と享楽(カーマ)とを適切な時に実践する人は、現世と来世で法と実利と享楽の集合を得る。(四六)王よ、怒りと歓喜の増大する力を制御し、まさかの時にも迷うことのない人は繁栄を享受する。(四七)

私の言うことを聞きなさい。人間には常に五種の力が存する。腕の力は最も劣る力であると言われる。(四八)あなたに幸あらんことを。よい顧問を得ることは第二の力と言われる。

征服を欲する人々は、財産の獲得が第三の力であると説く。(四九)王よ、父祖から伝わる生まれつきそなえた家柄の力は第四の力とされる。(五〇)しかるに、以上すべてに勝るもの、力のうちの最高の力であるもの、それは知力であると言われる。(五一)(五二—五八略)あなたと息子たちは蔓のようである。パーンドゥの息子たちはシャーラ樹であると考えられる。大樹に依存しないで蔓が成長することは決してない。(五九)アンビカーの息子である王よ、あなたと息子たちは森である。そしてパーンダヴァたちは森にいる獅子であると知れ。実に獅子たちがいなければ森は滅びる。森がなければ獅子たちは滅びる。(六〇)

(第三十七章)

ヴィドゥラは語った。——

長老が訪れる時、若者の気息は上方に上がる。しかし立ち上がりおじぎをすることにより、彼はその気息をもとにもどす。(一)賢者は訪れた善き人に対して椅子を出し、水を運んで、両足を洗い、息災かどうかたずね、自分の近況を伝え、注意して食物を出すべきである。(二)聖句(マントラ)を知る者が、ある人の家で、その人の貪欲や恐怖や物惜しみにより、水や飲食物や牝牛を受けない場合、その人の人生は無意味であると高貴な人々は言う。(三)医師、矢作り、禁欲の誓いを破った者、盗人、残酷な人、酒飲み、胎児殺し、職業軍人、ヴェーダ聖典を売る者。以上の客人はいかに親密であっても、これに水を出すべきでない。(四)

〔バラモンが〕売るべきでない物――塩、調理された食物、凝乳（ダディ）、ミルク、蜂蜜、油、グリタ（ギー）、胡麻、肉、根と実、野菜、染めた布、すべての香料、糖蜜。（五）
怒らず、土塊（つちくれ）と黄金を等しく見て、悲嘆を離れ、友好と敵対の関係を離れ、毀誉褒貶と好き嫌いを離れ、中立者のように（何ごとにもとらわれずに）行動する者、それが、比丘（修行者）である。（六）野生の米、根、木の実を食べて生活し、よく自己を制御し、火の儀式に勤しみ、森に住み、客人の接待に怠りない者、それが最上で清浄なる苦行者である。（七）

知性ある者に過失をなしたら、遠くにいるからといって、安心してはならぬ。知性ある人の腕は長く、それにより害をなした者を害する。（八）信用できない者を信じてはならぬ。信用した者をあまりにも信用してはならぬ。信用により危険が生じ、それはすべてを根こそぎにする。（九）妬みを捨てよ。妻を守るべきである。分かち与えよ。好ましく語れ。妻女に対しては穏やかに優しく語れ。しかし彼女たちに支配されてはならぬ。（一〇）妻女は敬われるべきであり、高貴であり、清浄で、家の光輝であり、家庭の繁栄（吉祥）である。それ故、妻女は特別に守られるべきである。（一一）後宮は父に任せるべきである。台所は母に任せるべきである。牛の世話は自分に等しい者に任せるべきである。しかし自ら農耕を行なうべきである。従者たちにより商人に、息子たちによりバラモンに奉仕すべきである。（一二）

火は水から、王族（クシャトラ）はバラモンから、鉄は岩石から生ずる。火などの遍在する威光はそれぞれの起源において消失する。（一三）良家に生まれ常に善き人々は、火のような威光を持ちながら、忍耐し、木材の中に潜む火のように、姿を隠して生活する。（一四）外部と内部の

人々にその政策（はかりごと）を知られることのない王で、いたるところに眼（スパイ）を有する者は、長く主権を享受する。（一五）これから行なおうとする時に話してはならぬ。法（ダルマ）と享楽（カーマ）と実利（アルタ）に関する行為で、すでになされたもののみを明らかにすべきである。そうすれば政策の秘密は破れることがない。（一六）山の頂上に登り、あるいは密かに楼閣に登り、草木の生えていない荒野において、政策の密議がなされる。（一七）バーラタよ、友人でない者が最高の政策の秘密を知るべきでない。また、賢者でない者や、友人や賢者であっても自己を制していない者も知るべきでない。というのは、利益を獲得しようと企てることと、政策の秘密を守ることは、顧問に依存するから。（一八）王が秘密の政策を講じた場合、すでに一切の仕事がなしとげられた時に彼の臣下たちがそれを知るならば、彼の成就は疑いない。（一九）

迷妄のために、非難される行為を行なう者は、その行為に失敗し、生命すら失う。（二〇）一方、称讃される行為を行なうことは幸福をもたらす。それを行なわないことは、大きな後悔をもたらす。（二一）王よ、現状維持と増大と減損を知り、六計（和平、戦争、進軍、静止、依投、二重政策）に関し自己を知り、その性行が非難されることがないならば、その人は大地を支配する。（二二）

無駄に怒ったり喜んだりせず、自らなすべきことを考慮し、自ら国庫を管理する王にとって、大地はまさに大地（富をもたらすもの）である。（二三）王は称号と傘（王者のしるし）によって満足すべきである。彼は臣下たちに財物を分け与えるべきである。一人ですべてを取ってはならぬ。（二四）バラモンはバラモンを知る。夫は妻を知る。王は顧問を知る。また、王だけが王を知る。（二五）殺すべき敵が膝下に来たら、これを釈放すべきではない。というのは、もし彼を

殺さなければ、遠からず危険が生ずるから。(二六) 神々、王、バラモン、老人、子供、病人に対し、努力して常に怒りを抑えるべきである。(二七) 愚者は無益な怒りにかられるが、知者はそれを避けるべきである。彼はこの世で名声を得、不利益に陥ることはない。(二八) その好意が無益でその怒りが無益であるなら、人々は彼を主君として望まない。女性が去勢者を夫として望まないように。(二九)

知性は財物の獲得をもたらすとは限らない。愚かさは貧困をもたらすとは限らない。他ならぬ知者は、世の移り変わりの様態を知る。(三〇) バーラタよ、愚者というものは常に、学術と徳性と年齢の点で長老である人々、知性の点で長老である人々、財産と生まれの点で長老である人々を軽蔑する。(三一) 卑しい行為をする者、愚かな者、悪意ある者、法にもとる者、口の悪い者、短気な者。不利益は以上の者に速やかに訪れる。(三二) 偽らないこと、布施、約定を違えないこと、正しく用いられた言葉が人々をひきつける。(三三) 偽ることなく、巧妙で、恩を知り、思慮あり、廉直な人は、その国庫が消耗しても従者たちを得る。(三四) 堅固さ(充足)、寂静、自制、清浄、哀愍、柔和な言葉、友人を傷つけないこと。以上の七が繁栄を燃え上がらす薪である。(三五) 分かち与えない者、邪悪な者、恩知らず、恥知らず。王よ、この世でそのような最低の人間を避けるべきである。(三六) 自分が罪があって、内部の罪のない人を怒らせる者は、蛇のいる家に住むように、安楽に眠れない。(三七) バーラタよ、それらの人々が害されたら、安寧に障害があるならば、神々に対するように、常に彼らを満足させるべきである。(三八) 女性に依存する事柄、不注意な人々に依存する事柄(異本に基づく)、卑しい人に依存する事柄。以上すべては、成功する可能性がない。(三九) 女性や賭博師や子供が治める国は、どうしようもなく滅びる。川で石の舟が沈むように。(四〇) バーラタよ、特殊でなく一般原則に専念する人々を、私は賢者と考える。というのは、特殊は偶発的なものにすぎない。(四一) 賭博者と吟遊詩人(または「旅芸人」)と娼婦に讃えられる人々は身を滅ぼす。(四二) あの最高の射手、無量の威光を持つパーンダヴァたちを捨て、あなたは大なるバラタ族の主権をドゥルヨーダナに託した。(四三) あなたは遠からずして、権力に驕り高ぶった彼が主権の座から堕ちるのを見るであろう。バリ(魔王の名)が三界から堕ちたように。(四四)

(第三十八章)

ヴィドゥラの教え(六)

ドリタラーシトラは言った。

「人間は幸不幸を司るものではない。木製の操り人形のようだ。彼は配置者(創造主)により運命の支配下に置かれた。それ故、語ってくれ。私は注意深く聞く。(一)」

ヴィドゥラは語った。——

ブリハスパティ(神々の師)といえども、不適切な時に言葉を発すれば、知性が劣るとされ、軽蔑されるであろう。バーラタよ。(二) 布施により好ましい人がいる。他の人は親密な言葉に

より好ましい。他の人は魔術の力により（異本による）好ましい。もともと好ましい人はいつも好ましい。（三）恨まれる者は善き人でない。知者でも賢者でもない。好ましい人には好ましい仕事があり、恨まれる人には悪い仕事がある。（四）大王よ、減損が増大をもたらすなら、それは減損ではない。減損を得て更に多くを失うなら、それはまさに減損であると考えられるべきだ。（五）ある人々は美質の点で豊かである。他の人々は財産の点で豊かである。ドリタラーシトラよ、美質を欠いて財産だけで豊かな人々を避けるべきだ。（六）

ドリタラーシトラは言った。

「お前が告げたことはすべて有益で、知者に承認されるものである。しかし私は息子を捨てることはできない。法（ダルマ）のあるところ勝利がある。（七）」

ヴィドゥラは語った。——

本性から美質をそなえ、修養をそなえた者は、ごくわずかでも生類を害することはないだろう。（八）他人の悪口に専念する人々は、他人の幸不幸において、また相互に敵対する時、常に懸命に努力する。（九）彼らに会うことが有害であり、彼らと共にいれば非常に大きな危険がある。彼らの財物を受けると非常に有害で、彼らに財物を与えれば大きな危険がある。（一〇）彼らは邪悪であると知れわたっている。彼らと共にいると非難される。彼らは他の非常に有害な人々といっしょにいる。以上のような人々を避けるべきである。（一一）

友好関係が終わる時、卑しい人の愛情はなくなる。そして、友情の結果と幸福もなくなる。（一二）彼は相手を非難することに専念し、その滅亡に向けて努力する。罪はわずかなのに、迷妄の故に彼は平静になれない。（一三）賢者は知性により観察して、そのような卑しい、邪悪な、自己を制していない者たちとの交際を遠く避けるべきである。（一四）

貧しく哀れな、苦しむ親族に好意を寄せる人は、子供や家畜にめぐまれ、不滅の名声を得る。（一五）自己の幸せと一族の発展を望む人々は、親族を栄えさせるべきである。王中の王よ、それ故正しく行動しなさい。（一六）王よ、親族を敬えばあなたは幸せになれるでしょう。バラタの雄牛よ、美質のない親族といえども守られるべきである。（一七）いわんや美質のある親族があなたの好意を望む場合はなおさらである。王よ、貧しいパーンダヴァたちに好意をかけなさい。（一八）彼らの生活のためにいくつかの村を与えなさい。王よ、そうすれば、あなたは世間で名声を得るでしょう。（一九）兄さん、老いたあなたは息子たちを守りなさい。そして私は有益なことを言うべきである。私があなたによかれと望んでいることをわかって下さい。（二〇）兄さん、繁栄を望む者は親族と争ってはなりませぬ。バラタの雄牛よ、親族とともに幸福を享受しなさい。（二一）親族とともに、お互いに食事し、会話をし、楽しみなさい。決して争ってはなりませぬ。（二二）この世では、親族が救済し、親族が滅ぼす。よい行ないの人々は救済し、悪い行ないの人々は滅ぼす。（二三）王中の王よ、誇りを与える方よ、パーンダヴァたちに対しよい行ないの者となりなさい。あなたは彼らに囲まれて、敵たちにうち勝たれない者となるでしょう。（二四）ある親族が、繁栄する親族がいながら苦しむなら

ば、その繁栄する親族は彼の罪を引き受ける。鹿が血まみれの手をした〔猟師に遭遇〕して殺された時、猟師が罪を得る〕ように。(二五)

最高の人よ、後であなたは苦しむことになろう。あなたの息子たちが殺されたことを聞いて……。そのことを考えて下さい。(二六)後で寝台に昇って苦しむような行為をすべきではない。人生は不確実であるから。(二七)パールガヴァ(シュクラ)を除いて、他の何人(なんぴと)が政策を誤らないだろうか。しかし、それにしても知性ある人々には結果を考慮する力がある。(二八)ドゥルヨーダナが彼らに悪事をなしたのなら、一族の長老であるあなたがそれを償いなさい。王よ。(二九)あなたは彼らをもとの地位にもどせば、世間で罪を離れ、思慮ある人々に尊敬されるようになるでしょう。最上の人よ。(三〇)

結果に関し、賢者たちの優れた言葉を考慮して諸々の仕事を決定すれば、長く名声を保つ。(三一)修養は悪い行為を滅ぼす。勇武は不利益を滅ぼす。忍耐は常に怒りを滅ぼす。よい行ないは不吉な相を滅ぼす。(三二)王よ、従者、土地、住居、奉仕、食物、衣服によって一族を調査することができる。(三三)心と心が、秘密と秘密が、知性と知性が釣合う同士の友情は古びることはない。(三四)叡知ある人は、草で隠された井戸のような、知性のない愚者を避けるべきである。そのような者との友情は滅する。(三五)高慢な者、愚者、恐ろしい者と無謀な者、法(ダルマ)を欠いた者。知者は以上の者と友情を交わしてはならぬ。(三六)恩を知る人、徳性ある人、真実の人、卑しからぬ人、献身的な人、感官を制御した人、確固たる人、友を捨てない人。以上が友として望まれる。(三七)感官〔の対象〕を捨てないことは、死と異ならない。しかし、極度に捨てることは、神々をも滅ぼすであろう。(三八)

すべての生類に対する優しさ、悪意のないこと、忍耐、堅固さ(平静さ)、友人を軽蔑しないこと。以上は長寿をもたらす。(三九)(四〇—六八略)

地上における米と麦、黄金、家畜、女性のすべてといえども、一人の人を満足させない。〔賢者は〕そのように知って、迷うことはない。(六九)王よ、私は再びあなたに言う。息子たちに平等にふるまいなさい。自分の息子とパーンドゥの息子たちに対して……。(七〇)

(第三十九章)

ヴィドゥラは語った。——

善き人々に要請されて、執着なく、能力の限り目的を追求する善き人に、名声は速やかに近づく。というのは、善き人々は満足した時に幸福をもたらすことができるから。(一)大きな利益といえども法(ダルマ)にもとる場合、自発的にそれを捨てる人は、諸々の苦を離れて安楽にやすらう。蛇が古い皮を捨ててやすらうように。(二)上位の身分に属すると偽ること、王に対する中傷、偽って師を告発することは、バラモン殺しに等しい。(三)妬み(不満)、死、暴言は、一度に繁栄を滅ぼす。〔師に対する〕不服従、性急、自慢は、学術の三つの敵である。(四)快楽を求める者にどうして学術があるか。学術を求める者に快楽はない。快楽を求める者は学術を捨てるべきである。学術を求める者は快楽を捨てるべきである。(五)火は木々に

飽くことはない。海は川々に飽くことはない。死神は一切の生類に飽くことはない。美しい眼の女は男たちに飽くことはない。(六) 王よ、希望は平静さを殺す。死は富貴を殺す。怒りは幸運（繁栄）を殺す。吝嗇は名声を殺す。保護しないことは家畜を殺す。一人の怒ったバラモンは王国を殺す。(七) 山羊、青銅、車、蜜、解毒薬、鳥、ヴェーダに通じた人、老齢の親族、失意の友人。以上のものが常にあなたの家に存すべきである。(八)「山羊、雄牛、栴檀、ヴィーナー（琵琶）、鏡、蜜、サルピス（精製バター）、鉄、銅器、法螺貝、金、麝香、ローチャナー（黄色い顔料）。神とバラモンと客人をもてなすために、以上の吉祥のものが家に置かれるべきだ」とマヌは説いた。(九―一〇)

そして兄さん、このすべてのうちで最高の、神聖で、非常に優れた言葉をあなたに語ろう。享楽や恐怖や貪欲のために、決して法（ダルマ）を捨てるべきでない。たとい生命のためにも。(一一) 法は永遠であるが、苦楽は無常である。生命は永遠であるが、その拠り所は無常である。無常を捨てて、永遠に任せよ。満足せよ。満足は最高の利得であるから。(一二)

強力で威力に満ちた諸王を見よ。彼らは財産と作物に満ちた大地を統治してから、王国と多大な享楽を捨てて、死の支配下に帰した。(一三) 王よ、人々は苦労して育てた息子が死んだ時、その子を持ち上げて自分の家から連れ出す。そして髪を振り乱し、嘆き悲しみ、火葬の火の中に木材のように彼を投じる。(一四) 死んだ人に属した財産を他の者が享受する。鳥と火とは彼の身体を享受する。彼は二つのものとともにあの世に行く。功徳と罪悪とに取り巻かれて。(一五) 親族と友人と息子たちは火中に投じられた人を捨てて引き返す。しかし彼自身がなした行為（カルマン）（業）が彼につき従う。(一六) この世界よりも上方に、そしてあの世の下方に、暗黒に満ちた闇が存在する。それは諸感官をすっかり迷わすものであると知りなさい。王よ、それがあなたを迷わせることのないように。(一七)

以上の言葉を聞いてすべて正しく理解することができるなら、あなたは生類の世界において最高の名声を得るでしょう。そして、あの世とこの世における恐怖はないでしょう。(一八) バーラタよ、自己（アートマン）（真我）は川である。それは功徳を渡り場（聖場）とし、真実を水とする。堅固（平静さ）という岸を持ち、自制という波を持つ。功徳を積んだ人は、その川に沐浴して清らかになる。というのは、自己は常に清浄であるから。水は水に他ならない。(一九)

人生は難儀で川のようだ。そこには欲望と怒りという鰐がいて、五つの感官という水がある。堅固さよりなる舟を造り、それを渡れ。(二〇) 知性と法（ダルマ）と学術と年齢の点で長老の親族を敬い満足させて、何かをなすべき時とそうでない時に質問するなら、彼は決して迷うことはない。(二一) 堅固さにより性器と腹を守れ。眼によって手足を守れ。意（こころ）により眼と耳を守れ。行為によって意と言葉を守れ。(二二) バラモンが常に水を持ち、常に祭紐をかけ、常にヴェーダを学び、落ちた食物を避け、師（グル）に真実を述べ、〔祭式などの〕行為を行なえば、梵界から堕ちることはない。(二三) 王族（クシャトリヤ）がヴェーダを学び、祭火を諸所で燃やし、祭祀を行ない、臣民を守り、牛やバラモンを守るために武器でその心を浄化し、戦闘で死ぬなら、彼は天界へ行く。(二四) 実業者（ヴァイシャ）は学習し、適切な時にバラモンと王族と従者たちに財物を分配し、三種の火で浄めた聖なる煙を嗅げば、死んでから天界で神々の幸せを享受する。(二五)

シュードラ（僕従）は、バラモンと王族と実業者を順次に正しく敬い、彼らが満足した時、その罪過を燃やし、苦悩なく、身体を捨てた後に天界の幸せを享受する。（二六）

以上、四姓の法をあなたに説いた。私は今その理由を言うから聞きなさい。パーンドゥの息子（ユディシティラ）は王族の法から逸れている。王よ、あなたは彼を、王の法に携わるようにさせなさい。（二七）

ドリタラーシトラは言った。

「お前がいつも私に教えている通りだ。よい男よ。そして私もお前が私に告げたのと同様に考える。（二八）私はいつもパーンダヴァたちに対してそのように決心するのだが、しかしドゥルヨーダナに会うと逆になってしまうのだ。（二九）いかなる人間でも運命に逆らうことはできない。運命のみが目的を達する。人間の努力は無益である。（三〇）」（第四十章）

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、お前がまだ言ってないことが何かあるか。私は聞きたい。話してくれ。お前の言うことはすばらしいから。（一）」

ヴィドゥラは言った。

「ドリタラーシトラよ、古の永遠の童子であるサナツジャータは、死は存在しないと告げた。バーラタよ。（二）大王よ、一切の知性ある者たちのうちの最上者である彼が、あなたの心に

存する密かな、あるいは公然としたすべての疑問に答えるであろう。（三）」

ドリタラーシトラは言った。

「あの永遠の童子が告げるであろうことをお前は知らないのか。ヴィドゥラよ、もしお前の知性に余力があるなら。（四）」

ヴィドゥラは言った。

「私はシュードラの胎に生まれた。これ以上言うことはできない。しかしあの童子の知性が永遠であることを私は知っている。（五）というのは、バラモンの胎に生まれた者が深い秘密を告げても神々に非難されない。それ故、私はあなたにこのように言うのである。（六）」

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、私に言ってくれ。あの古の永遠の存在に、この身体のままで、今この場所で会うことができるか。（七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ヴィドゥラは誓戒を堅く守るかの聖仙を思念した。彼は思念されたことを知って姿を現わした。バーラタよ。（八）ヴィドゥラは作法通りに彼をもてなした。安楽に座り、疲れのとれた彼にヴィドゥラは言った。（九）

「尊者よ、ドリタラーシトラの心にはある疑問があります。私はそれを説明することができません。それを彼に説いて下さい。人間の主である彼は、それを聞いて、苦楽を超えるでし

よう。(二〇) 得失、好悪、老死、恐怖と怒り、飢えと渇き、酔いから生ずる無気力と怠惰、欲望と怒り、盛衰に耐えるでしょう。(二一)」(第四十一章)

(52) サナツジャータ (第四十二章—第四十五章)

サナツジャータの教え（一）

偉大で賢明なドリタラーシトラ王は、ヴィドゥラに説かれた言葉に敬意を払ってから、最高の知性を望んで、密かにサナツジャータに質問した。——

ドリタラーシトラはたずねた。（一）

「サナツジャータよ、死は存在しないというのがあなたの教えであると聞いている。しかし神々や阿修羅たちは、不死を得るために梵行《ブラフマチャリヤ》（ヴェーダ学習）を行なう。一体どちらが真実であるか。（二）」

サナツジャータは答えた。

「ある人々は、行為（儀式）により不死が得られるとする。また他の人々は、死は存在しないとする。王よ、私の言うことを聞きなさい。疑問を抱くことがないように。（三）

王よ、二つの真実は原初より存する。聖仙《カヴィ》たちにとって、死（ムリテュ）は迷妄であると考えられる。実に放逸が死であると私は言う。常に不放逸であることが不死であると私は言う。（四）実に阿修羅たちは、放逸により滅亡し、不放逸によりブラフマン（絶対者、「梵」）と合一した。

ムリテュ（死）は虎のように生類を食うものではない。というのは、その形態は認められない。（五）ある人々はヤマ（閻魔）がムリテュであると言い、あるいはその他のものがそれだと

言う。自己《アートマン》に沈潜する梵行が不死である。その神（ヤマ）は祖霊界における王国を統治している。彼は吉祥なる者たちにとっては吉祥であり、不吉な者たちにとっては不吉である。（六）

彼の口から、人間に、怒りと放逸と迷妄の形をとったムリテュ（死）が生じる。迷わされ、彼の支配下にある人々は、ここから逝去し、再びかしこに落ちる。（七）彼に続いて、神々が滅びる。そこでムリテュは『死』（マラナ）という名を得る。

行為が成果をあげた時、行為の果報を欲する人々はそこについて行き、死を越えることはない。（八）結果が生じた時、よく考えて、それを取るに足らぬものとして、考慮することなく捨てるならば、死は彼を食べることはない（異本を考慮して訳した）。このようにして賢者は諸々の欲望を滅する。（九）諸々の欲望を追い求める人は諸欲に従って滅亡する。諸欲を捨てれば、人はありとあらゆる激質《ラジャス》を滅する。（一〇）万物にとって地獄である、光明のない闇《タマス》が認められる。人々はとりつかれたかのように、その坑《あな》めざして駆けて行く。（一一）

考えること（願望）がまず第一に彼を殺す。それから、欲望と怒りが彼を捕えて殺す。それらは愚者たちを死に到達させる。しかし賢者たちは、堅固さにより死を越える。（一二）王よ、もし人が何も考えないなら、薬で作った虎が彼に向けられたようなものだ（全く危険がない）。（一三）怒りと貪欲により、心が迷妄に陥り、あなたの身体にいるのはまさにムリテュである。

このように死が（迷妄より）生じることを知り、知識に立脚すれば、世人は死を恐れない。

彼の感官の対象（に対する執着）が滅すれば、死も滅する。あたかも人間がムリテュの領土（対象）に達して滅するように。（一四）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「この世では、ある人々は法を行なわず、またある人々は法を行なう。法が悪により滅ぼされるのか、それとも法が悪を滅ぼすのか。(一五)」

サナツジャータは答えた。

「二つの果報が経験される。法の果報とそうでないものの果報と。この世で賢者は法により非法を除去する。彼にとって法はより強力であると知れ。(一六)」

ドリタラーシトラはたずねた。

「善行をなしたバラモンの自己の法から生じる永遠の世界と言われるもの、それらには別の次第があると説かれる。それを知りながら、どうして〔宗教的〕行為をしないのか(最後の部分のみ異本に従う)。(一七)」

サナツジャータは答えた。

「強力な者たちが力を競うように、力を競わないバラモンたちは、この世を去ってから天界において輝く。(一八) 雨季における草や茂みのように、バラモンは多くの食物や飲物があると考える場所で生活して、それを悔いることはない。(一九) 語らない者にとって不幸や危険をもたらすような状況においても、自分が優れているようにふるまわない人は真に優れている。そうでない人は優れていない。(二〇) あるいは、自己を語る(誇る)者に対して(異本によりテクストを修正)苦しむことなく、またバラモンの財産を享受することがなければ、彼の食物は善き人々のそれであると考えられる。(二一) 犬は惨めにも、常に自分の吐いたものを食べる。同様に、彼

ら(自分の能力を切り売りにする人々)は、自分の力を生活の糧にすることにより、吐いたものを食べているのだ。(二二) バラモンが親族たちの間に住み、『私の行為が常に知られることがない〔ように〕』と考えるなら、賢者たちは彼を〔真の〕バラモンと知る(異本による)。(二三)

いかなるバラモンが内なる自己を害することができるか。王よ、それ故、彼は言い知れぬブラフマン(梵、絶対者)の住するのを見るのである。(二四) バラモンは疲れることなく、布施を受けないことにより尊敬され、災禍なく、教養あるが教養あるように見えず、ブラフマン(ヴェーダ、または「梵」)を知る賢者であるべきだ。(二五) 人間的な財産に関しては富んでおらず、ヴェーダに関して富んでいるバラモンは、侵しがたく揺るぎない。そのようなバラモンを、ブラフマンの体(権化)と知るべきである。(二六) 祭祀において自ら努力して、すべての神々を見事に供養したと考える人は誰でも、〔真理を知る〕バラモンに匹敵しない。(二七) 努力しないでも彼を人々が尊敬するなら、彼がまさに尊敬されている。彼は尊敬されても誇らず、尊敬されなくても苦しまない。(二八) 尊敬される人は、『賢者たちが尊敬している』と考える。尊敬されない場合は、『法を知らず、世知にのみ通じた愚者たちは、尊敬さるべき者を尊敬しないであろう』と考える。(二九) 尊敬(マーナ)と沈黙(マウナ)は常に共存しない。尊敬にとってこの世があり、沈黙にとってかの世があると知られる。(三〇) この世では繁栄が幸福の住処である。しかしそれは〔至福への〕道の障害である。王よ、ブラフマンにおける幸せは、知性を欠いた者には得られがたい。(三一) それに至る門は多種であり、守られがたいと善き人々は説く。真実、廉直、廉恥、自制、清浄、知識の六が、慢心と迷妄を滅ぼす。(三二)

(第四十二章)

サナツジャータの教え（二）

ドリタラーシトラはたずねた。

「讃歌（リチュ）、祭詞（ヤジュス）、歌詠（サーマン）を学んだバラモンが罪悪を犯したら、彼は罪悪により汚されるか汚されないか。（一）」

サナツジャータは答えた。

「賢者よ、歌詠、讃歌、祭詞は、彼を悪業から救わない、私はあなたに偽りを言わない。（二）ヴェーダは詐術により生活する詐欺師を罪悪から救済しない。羽根の生えた鳥が巣を離れるように、ヴェーダは臨終において彼を捨てる。（三）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「賢者よ、もしヴェーダがヴェーダを知る者を救うことができないなら、どうしてバラモンたちはそれが永遠であると説くのか（この問いに対しては直接的に答えていない）。（四）」

サナツジャータは言った。

「この世で苦行（タパス）（修養、功徳）を積めば、その果報は他の世においても認められる。バラモンにとって、これらの世界は苦行が栄える時に制御される。（五）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「どうして苦行が栄えるか栄えないかなのか。サナツジャータよ、我々がわかるように告げ

て下さい。（六）」

サナツジャータは答えた。

「王よ、ある者は怒りなどの十二の過失と残酷さなどの六の過失を有する。ある者はバラモンたちに知られる、教典に広く説かれる法（ダルマ）などの十二の徳性を有する。（七）怒り、欲望、貪り、迷妄、好奇心、憐れみ、妬み（不満、悪意）、慢心、悲しみ、願望、嫉妬、嫌悪。人は以上の十二を常に避けるべきである。（八）王中の王よ、これらの一つ一つが隙をうかがって人間に仕えている。猟師が鹿の隙をうかがっているように。（九）自慢、切望、尊大、短気、移り気、無防備。これらの六が訪れた時、人間を悪しき性質にする。……（テクスト疑問）（一〇）快楽の知覚に対する敵意、知性を鼻にかけること、与えてから後悔すること、惨めさ、無力、身贔屓、妻を憎むこと。以上の七が他の邪悪な法である。（一一）法、真実、自制、苦行、妬みのないこと、廉恥、忍耐、不満のないこと、祭祀、布施、堅固、博識。以上がバラモンの十二の大誓戒である。（一二）これらの十二とともに生活する者は、すべての地上を支配するであろう。もし彼が三または二、または一つに関して優れているなら、彼には所有がないと知られるべきである。（一三）

自制、捨離、不放逸。これらに不死が宿る。賢明なバラモンたちは、それらは真実に従うと言う。（一四）自制を損なう十八の過失がある。（自制のために）なされたことなされなかったことに反すること、虚偽、不満、性欲、財欲、切望、怒り、悲しみ、渇愛、貪欲、中傷、妬み、好奇心、苦悩、快楽、失念、暴言、自慢。これらの過失から解放された場合が自制で

あると善き人々に説かれる。（一五—一七）六種の捨離が最上である。好ましいものを得ても喜ばない。不快なことが起こっても決して悩まない。（一八）他ならぬ愛しい妻や息子をくれというような非常識なことを言われても、請願者に与える（テクスト疑問、意訳した）。これが第三の美質であるとされる。（一九）財産を捨てる。勝手にそれを使用しない。諸々の行為（祭式）においてそれを欠くことがない。すべての美質をそなえた人は、財産を所有していても、弟子のような気持ちで（謙虚に）、以上のようであるべきである。（二〇）

不放逸には八過失が存する。それらの過失を避けるべきである。五つの感官と思考器官から生ずるものと過去と未来から生ずるものとである。バーラタよ、これらから解放された者は幸福になるであろう。（二一）以上の過失から離れ、以上の美質をそなえた苦行（修養）のみが栄える。あなたの問いに答えた。王中の王よ。他に何を聞きたいのか。（二二）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「人々は多くの場合、物語（アーキヤーナ・イティハーサとプラーナ）を第五のものとする〔四〕ヴェーダを有すると説かれる。他の人々は四ヴェーダを有する。他の人々は三ヴェーダを有する。（二三）また他の人々は二ヴェーダ、一ヴェーダを有し、あるいはヴェーダをまったく有しない。彼らのうちでいずれをバラモンと見なしたらよいだろうか。（二四）」

サナツジャータは答えた。

「唯一のヴェーダを知らないことから、唯一の真実を知らないことから、多くのヴェーダが存する。王中の王よ、そのどれもが真実に基づいている。かくて、ヴェーダを廃することなく、彼らは大なるもの（マハット）に知性を向ける。（二五）布施、ヴェーダ学習、祭祀が貪欲により行なわれるなら、その真実から堕ちた者たちの意向（願い）は空しくなるであろう。（二六）それ故、祭祀はただ真実のみを考慮して行なわれるべきである。ある者は意により祭祀を行なう。ある者は言葉により祭祀を行なう。ある者は行為により祭祀を行なう。意向の成就した人は意向の通りの状態を得る。（二七）その意向を隠すことなく潔斎して準備した誓戒を行なうべきである。サティヤム（真実）という名称は、サティヤムという語根から派生したものである。それは善き（サット）人々にとって最高のものである。

知識〔の結果〕は眼に見えるものである。苦行（功徳）は眼に見えないものとして生じる。（二八）多く読誦するバラモンは、多く読誦する者にすぎないと知るべきである。王よ、読誦のみによってバラモンであると考えてはならぬ。真実から逸れない者がバラモンであると知るべきである。（二九）王よ、かつてアタルヴァンが聖仙の創造において歌ったものがチャンダス（ヴェーダ讃歌）である。それらを学習した者たちはチャンダスを知る者たちである。しかし彼らは、知らるべきヴェーダのうちで知らるべきものを知らない。（三〇）何人もヴェーダを知る者ではない。王よ、誰もヴェーダを理解しない。諸ヴェーダを知る者は、知らるべきものを知らない。しかし真実に立つ者は、知らるべきものを知る。（三一）〔自らの〕疑惑を断ち、すべての〔他者の〕疑惑を語る者が、巧みに説く者であると私は考える。（三二）それを探しに、東にも、南にも、その反対にも、水平にも、いかなる方面にも行くべきではない。（三三）沈黙して座すべきである。意によっても動くべきではない。自己のうちに宿るブラフ

マン（梵）が彼に現われるであろう。(三四) 沈黙により彼は聖者である。森に住むから聖者であるのではない。不滅なるものを知る者、それが最高の聖者であると言われる。(三五) すべての意味を分析するから文法学者と呼ばれる。諸世界を現に見る人は一切を見る人である。(三六) 諸ヴェーダに従うことにより、真実に立脚するバラモンはブラフマンを見る。賢明な王よ、私はこのことをあなたに告げる。(三七)」　（第四十三章）

サナツジャータの教え（二）

ドリタラーシトラは言った。

「サナツジャータよ、あなたはこの最高の内容の、一切を含む、ブラフマンに関する言葉を説く。諸々の願望の中で最高の、非常に得られがたい語を。童子よ、そこでその言葉を私に語って下さい。(一)」

サナツジャータは答えた。

「あなたが喜んで私にたずねたブラフマンは、急ぐ者には得られない。私は古の非顕現についての知識を述べよう。その知識は、梵行により、知性（根源的思惟機能）でもって人々に成就する。(二)」

ドリタラーシトラはたずねた。

「あなたは、永遠の非顕現についての知識は梵行により成就すると説いた。その知識は〔それを得ようと〕企てられないもので、今、この瞬間に存する。高貴な方よ。どのようにしたらブラフマンに属する不死性を得られるか。(三)」

サナツジャータは答えた。

「この世で諸欲を克服し、孜々としてブラフマンの境地を求める人々は、純質に住し、ムンジャ草から茎を引き抜くように、身体からアートマン（真我）を引き抜く。(四) バーラタよ、父母が身体を作るが、師匠の教えによる『誕生』が真実であり、不老不死である。(五) 師匠の『胎内』に入り、『胎児』となって梵行を行なう人々は、この世で、教典の作者となり、身体を捨ててから、最高のヨーガ（ブラフマンとの合一）に達する。(六)

真実をなしつつ、不死（甘露）を授けつつ、真実によって両耳を満たす者が父母であると考えるべきである。彼のなしたことを知って、彼を害すべきではない。(七) 弟子は常に師に敬意を払い、清浄であり、怠ることなく学習を望むべきである。慢心することなく、怒ることなく。これが梵行の最初の四分の一である。(八) 生命、財産、行為、意、言葉によって、師匠に好ましいことを行なうべきである。これが第二の四分の一と言われる。(九) 師の妻に対しても、師に対すると同様の行動をする。言われた通りにし、好ましいことをして。これが第三の四分の一と言われる。(一〇) 賢者は師に仕えて、『私はそれをしない』と口答えすべきでない。そのように考えていても言うべきではない。これが梵行の第四の四分の一である。(一一)

このように生活している彼に財産がもたらされたら、それを師匠に与えるべきである。そ

うすれば善き人々にとって、それは何倍にも増大する。師の息子に対しても同様の行動をする。（二二）このように生活すれば、彼はこの世であらゆる面で繁栄する。多くの息子たちを得、確固たる地歩を占める。四方四維は彼のために雨を降らせる。人々も彼と同じ梵行に住する。（二三）

このような梵行により、神々は神性に達する。栄光あり賢明な聖仙たちは梵界(ブラフマローカ)に達する。（二四）梵行によりガンダルヴァ（半神の一種）たちと天女(アプサラス)たちの容色がある。それにより太陽は一日を作るために生ずる。（二五）王よ、苦行を行じつつ、梵行によって全身を浄める（異本による）賢者は、これにより無邪気さに達し、臨終の時に死を終わらせる。（二六）王よ、人々が汚れなき（異本による）行為により〔天上の〕諸世界を勝ち取っても、それらは有限である。しかし賢者たちは、一切である（無限の）ブラフマンに達する。〔解脱に〕至るには、他の道は存在しない。（二七）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「賢明なバラモンが見るところのその不滅で不死の境地はいかなる形状のものか。白色のように見えるのか。赤色のようにか。黒色か、墨色か、茶色か。（二八）」

サナツジャータは答えた。

「それは白色のようにも、赤色のようにも見えない。黒色でも鉄色でも太陽の色でもない。それは地上にあるのでも空中にあるのでもない。また海中の水がそれを蔵するのでもない。（二九）それは星々の中にもなく、稲妻に存するのでもない。また雲の中にもその姿は見られ

ない。風にも神々のうちにも見られない。月にも太陽にも見られない。（三〇）それは讃歌(リチ)にも祭詞(ヤジュス)にも呪詞(アタルヴァン)にも汚れのない歌詠(サーマン)にも見られない。それはラタンタラやブリハット旋律（いずれも代表的なサーマン）にも見られない。王よ、その恒久のものは大誓戒(マハーヴラタ)においても見られない。（三一）それは越えがたい闇の彼方にある。死神(アンタカ)といえども死滅の時にそれに逝く。それは剃刀の刃よりも微細で、山よりも大きな姿をしている。（三二）それは基底であり、不死であり、諸世界であり、ブラフマンであり、栄誉(ヤシャス)である。それによって万物は生じ、そこに帰滅する。（三三）それは健全であり、偉大であり、そびえる栄誉である。聖仙(カヴィ)たちは、それは言葉においてのみ変異すると述べる。そこにおいてこの全世界が確立する。それを知る人々は不死になる。（三四）」

（第四十四章）

サナツジャータは続けた。

「その精液(シュクラ)（種子）は大なる光輝であり、燃え上がる大なる栄誉である。神々もそれに仕える。それにより太陽は輝く。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（一）精液からブラフマンが生ずる。ブラフマンは精液により増大する。その精液は発光体（星々）の中にあって、熱せられない太陽を熱する。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（二）

水は水中にある水から生じた。両神は虚空に横たわる。……（テクスト疑問）両者は天地を支える。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（三）その精液（種子）は、両神、天地、諸方位、宇宙

を支える。それから諸方位と河川が流出する。大なる海はそれにより創造された。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（四）

恒久で尽きることなく動く車の車輪に立つ、旗標を持つ、神聖で不老の彼を、馬たちは天空において運ぶ。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（五）

彼の姿は比類ないものである。誰も肉眼で彼を見ることはない。しかし知性により、思考器官（マナス）と心（フリド）とにより、このように知る人々は不死になる。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（六）

自己を制した人々は、神々に守られた甘く恐ろしい十二の川を渡る。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（七）

蜂は半カ月の蜜を集めて飲む。イーシャーナ（主）はすべての生類において、それを供物とした（原文疑問）。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（八）

彼らは羽根のない鳥となり、黄金の葉のアシュヴァッタ（菩提樹）に下り、それからそれぞれの方角に飛び立つ。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（九）

彼らは満ちたものから満ちた諸々のものを引き上げる。満ちたものから満ちた諸々のものを作る。満ちたものから満ちた諸々のものを奪う。しかし満ちたものは常に満ちたものとして残る。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（一〇）

実に風は常にそれから到来し、それにおいて静まる。そして火とソーマはそれから生じ、気息（プラーナ）はそれにおいて広がる。（一一）

一切はそれから生じたと知るべきである。我々はそれについて語ることはできない。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（一二）

プラーナ気（出息）はアパーナ気（入息）を呑む。月はプラーナ気を呑む。太陽は月を呑む。最高のものは太陽を呑む。ヨーギンたちはその永遠の尊い神を見る。（一三）（一四―二二略）

いたるところで水があふれている時、井戸は無用である。同様に、真実を知るバラモンにとって、すべてのヴェーダは無用である。（二三）（『バガヴァッド・ギーター』二・四六に同じ）

その親指ほどの偉大な霊我（プルシャ）が心臓に住するのは見られることはない。その不生なるものは、昼夜、倦むことなく動く。聖仙（カヴィ）はそれについて思念し、清澄に（満足して）座する。（二四）

私はまさにあなた方の母であり父である。私はまた息子である。私はまた、存在するもの存在しないものの一切のアートマンである。（二五）私は古（いにしえ）の祖父である。父であり息子である。バーラタよ。あなた方は私のアートマンに住する。だがあなた方は私に属さず、また私はあなた方に属さない。（二六）

私の拠り所はアートマンである。出生〔の原因〕もアートマンである。私は不老の拠り所を有するとヴェーダに説かれる。（二七）私は極微よりも極微であり、よき心で、一切の生類において目覚めている。

この蓮華（心）に宿る一切の生類の父を、〔賢者たちは〕知っている。（二八）」（第四十五章）

(53) 進軍か和平か（第四十六章―第六十七章）

（第六十八、六十九章略）

サンジャヤの報告

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

　このように王がサナツジャータと賢者ヴィドゥラとともに話している間に、その夜は過ぎた。(一)夜が明けた時、すべての王たちはサンジャヤに会いたいと思い、いそいそと集会場に入った。(二)ドリタラーシトラをはじめとするすべての人々は、法(ダルマ)と実利(アルタ)にかなうプリターの息子(パーンダヴァ)たちの言葉を聞きたいと望んで、美しい王の集会場に行った。(三)それは漆喰を塗られて純白で、黄金の中庭で飾られ、月光のようで、非常に輝かしく、そこには最上の水がまかれていた。(四)黄金製、木製、鉄製、象牙製で、上質のクッションにおおわれた美しい座席が一面に置かれていた。(五)

　ビーシュマ、ドローナ、クリパ、シャリヤ、クリタヴァルマン、ジャヤドラタ、アシュヴァッターマン、ヴィカルナ、ソーマダッタ、バーフリーカ、(六)大知者ヴィドゥラ、偉大な戦士ユユツ、そしてすべての勇猛な王たちは、ドリタラーシトラを先頭として、こぞってその美しい集会場に入った。(七)ドゥフシャーサナ、チトラセーナ、シャクニ・サウバラ、ドゥルムカ、ドゥフサハ、カルナ、ウルーカ、ヴィヴィンシャティは、短気なクルの王ドゥルヨーダナを先頭として、その集会場に入った。神々がシャクラ(インドラ)の住居に入るように。(八―九)その時、入場する鉄棒のような腕をした勇士たちにより、その集会場は輝いた。山の

洞窟が獅子たちにより輝くように。(一〇)

　戦場において輝く、太陽のような威光を有する偉大な射手たちは、集会場に入って、非常に上等な座席についた。(一一)すべての王が座った時、門衛がサンジャヤの到着を告げた。(一二)

「パーンダヴァのもとに行った我らの使節は、シンドゥ産の駿馬にひかれた車に乗って、速やかに帰って来た。(一三)」

耳環をつけた彼は、急いで車から飛び下りて近づき、偉大な王たちで満ちた集会場に入った。(一四)

　サンジャヤは言った。

「クル族の人々よ、聞きなさい。私はパーンダヴァのもとに行って帰って来た。パーンダヴァたちは、年齢に応じてクル族の人々すべてに挨拶した。(一五)彼らは長老たち、同年輩の人々に挨拶し、年齢に応じて、若い人々に敬意を表して挨拶した。(一六)私は前にドリタラーシトラに命じられて、ここからパーンダヴァのもとに行った次第を話すから、諸王よ、お聞きなさい。(一七)」

(第四十六章)

　ドリタラーシトラはたずねた。

「なあサンジャヤよ、私はそなたにたずねる。アルジュナは元気旺盛で、戦士たちの指導者

であり、邪悪な人々の生命を断ち、偉大である。その彼は、諸王の中で何と言ったか。（一）」
　サンジャヤは言った。
「ユディシティラに許可され、クリシュナの聞いているところで、偉大なアルジュナが戦おうとして告げた言葉を、ドゥルヨーダナは聞くべきです。（二）アルジュナは恐れることなく、自分の腕の力を知り、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の近くにいて平然として、戦おうとして、私に告げました。
『クル族の人々の中で、ドゥルヨーダナに言うべきである。（三）そしてまた、パーンダヴァと戦うために集まっている王たちが聞いている中で……。私が告げたすべての言葉を、あの王と顧問たちに聞かせるように。（四）』
　すべての神々が金剛杵（ヴァジュラ）を持つ神々の王（インドラ）の言葉を聞くように、パーンダヴァたちとスリンジャヤ（パーンチャーラ）たちはアルジュナが述べる力強い言葉を聞きました。（五）ガーンディーヴァ弓を持ち、紅蓮のような眼をしたアルジュナは、戦おうとして次のように言いました。
『もしドゥルヨーダナがユディシティラ王に王国を引き渡さないなら、彼らはかつてなされたことがないような罪を犯すことになる。（六）ビーマセーナとアルジュナ、アシュヴィン双神（ナクラとサハデーヴァ）、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）、武器をとるサーティヤキ、ドリシタデュムナ、シカンディン、そしてインドラのようなユディシティラ——そう意図するだけで天地を燃やすことができる——と彼らが戦えば……。（七）
　もしドゥルヨーダナがそれらの人々と戦おうと考えるなら、パーンダヴァたちのすべての

目的は成就する。そこでパーンダヴァの望みをかなえるようなことはしなくてよい。もし汝がよいと思うなら戦うことにせよ。（八）もし法（ダルマ）を践むパーンダヴァが流浪し、森で苦労して寝るなら、ドゥルヨーダナはより苦しんで、息絶えて臨終の床に寝るであろう。（九）
　邪悪なドゥルヨーダナは、不正な行動をし、クル族とパーンダヴァ一族を支配した。一方〔ユディシティラは〕廉恥、知識、苦行（修養）、自制、義憤、法を守ること、財物により治めていた。（一〇）〔ユディシティラは〕詐術にかかったが、敬意と廉直さにより、苦行と自制により、法を守ることにより、力により〔行動し〕、好意をもって真実を語り、虚偽に〔対しても〕忍耐し、この上なく苦しんでいる。（一一）自己を完全に制したパーンダヴァの長子が、憤慨して、長年の間こらえた恐るべき怒りをクル族に対して放つ時、ドゥルヨーダナは戦ったことを後悔するであろう。（一二）夏に焚かれ燃え上がる火が乾いた森を燃やすように、ユディシティラも怒りに燃え上がり、ドゥルヨーダナの軍勢を見て燃やすであろう。（一三）
　恐ろしく強烈で短気なビーマセーナが、棍棒を持って戦場に立ち、怒りの毒を吐いているのを見る時、ドゥルヨーダナは戦ったことを後悔するであろう。（一四）強大な獅子が牛の群に入るように、恐るべき姿のビーマが棍棒を持ってドリタラーシトラの息子たちに近づき、彼らを殺す時、ドゥルヨーダナは戦ったことを後悔するであろう。（一五）彼は非常な危機においても恐れを離れ、武器に通達し、合戦において敵軍を粉砕する。ひとたび戦車で出陣すれば、戦車の群と歩兵の群を棍棒で破壊する。（一六）その勇士が、森を斧で切るかのように、多くの軍隊を速やかに粉砕し、ドゥルヨーダナの軍を滅ぼす時、ドゥルヨーダナは戦ったこ

とを後悔するであろう。（二七）ほとんど藁ぶきである村が火で燃えるように、熟した穀物が雷火で燃えるように、自分の大軍が滅ぼされる。そして自軍の勇士たちは殺され、兵たちは顔を背け、恐怖にかられる。兵士はほとんど勇気を失い、自軍は退却する。武器の火を持つビーマセーナにより自軍が燃やされるのを見て、ドゥルヨーダナは戦ったことを後悔するであろう。（二八—一九）（二〇—八九略）

クル族よ、私は現に汝らに告げる。戦えばドリタラーシトラの息子たちは生存しない。戦わなければクル族は存続するが、戦えば何人（なんぴと）も残らない（異本を考慮した）。（九〇）

私はドリタラーシトラの息子たちとカルナを殺して、クル族の領土をすべて征服するであろう。あなた方は各自なすべきことをせよ。愛しい妻や子供たちを享受せよ。（九一）我々にも長老のバラモンたちがいる。博識で、徳性をそなえ、良家の出である。占星術に専心し、星宿の合について確実な知識を持っている。（九二）様々な運命に関する秘密、神的な問い（前兆学、予言）、獣帯（十二宮）、〔吉凶の〕刻限（ムフールタ）……。彼らはクル族とスリンジャヤ（パーンチャーラ）族の全滅、パーンダヴァの勝利を予言した。（九三）アジャータシャトル（ユディシティラ）は、敵を制圧するという我々の目的は成就したも同然と考えている。ヴリシュニ族の獅子クリシュナも、見えざるものを知る能力を持つが、疑いもなくこれらすべてを見通している。（九四）そして私も、未来の姿がわかる。迷うことなく、自ら知性により見る。私の古くからの知見は損なわれてはいない。戦えばドリタラーシトラの息子たちは生存しない。（九五）

私のガーンディーヴァ弓は握られないのであくびをする。私の弓弦は触れられないのでふ

るえる。私の矢は箙（えびら）の口から出て、何度も飛んで行こうとする。（九六）蛇が自分の古い皮を捨てて抜け出るように、私の輝かしい刀は鞘から抜け出る。旗においては、恐ろしい声が叫ぶ。「アルジュナよ、いつ戦車に馬をつなぐか」と。（九七）夜中、ジャッカルの群が吠える。羅刹たちが空から降下する。鹿、ジャッカル、孔雀、鴉、禿鷲、鳶（異本は「鶴」）、ハイエナたちが、白馬につながれた戦車を見ると、金翅鳥（スパルナ）（ガルダ）が飛ぶように速く後から飛んで来る。私は一人で、矢を雨のように浴びせて、諸王とすべての戦士を死神の世界に送りこむであろう。（九八—九九）燃え上がる火が夏に森を燃やすように、私はそれぞれの武器の術を発揮し、ストゥーナーカルナ、恐るべきパーシュパタ（シヴァの武器）、梵天の武器（ブラフマ・アストラ）、及びシャクラ（インドラ）が私に授けた武器（異本による）〔を放つ〕。（一〇〇）私は殺戮の決意をし、それらの高速の武器を放ち、生類を全滅させるであろう。そして私は平安を得るであろう。私のこの気持はこの上なく確固としている。ガヴァルガナの息子（サンジャヤ）よ、彼らに告げよ。（一〇一）

インドラをはじめとする集結した神々をも戦闘においてうち破る者たちと争うことを考えている（異本に基づく）、そのドゥルヨーダナの迷妄を見よ。（一〇二）シャンタヌの息子である老いたビーシュマ、クリパ、ドローナとその息子、賢者ヴィドゥラ。これらすべての人が言う通りになるように。すべてのクル族が長寿であるように。（一〇三）』」

（第四十七章）

ビーシュマの忠告

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

すべての王たちが集まった時、シャンタヌの息子ビーシュマはドゥルヨーダナに次のように言った。(一)

「ある時、ブリハスパティ(神々の師)とウシャナス(悪魔たちの師)は梵天（ブラフマー）に伺候していた。インドラとマルト神群、ヴァス神群、アシュヴィン双神(異本による)、アーディティヤ神群、サーディヤ神群、天空の七仙たち、ガンダルヴァ(半神)のヴィシュヴァーヴァス、美しい天女たちの群。(二―三)彼らは世界の長老である祖父(梵天)に敬礼して近づいた。神々は宇宙の主を取り囲んで座った。(四)その時、古（いにしえ）の神である聖仙ナラとナーラーヤナとが、彼ら神々の意（マナス）と威光（テージャス）とを奪いつつ通り過ぎて行った。(五)そこでブリハスパティは梵天にたずねた。

『あの両者は誰ですか。あなたに伺候しないが。祖父よ、両者について我々に語って下さい。(六)』

梵天は言った。

『天地を輝かせつつ、遍満し超越し、光り輝いている強力な苦行（タパス）者たちは、ナラとナーラーヤナである。彼らは方々の世界に滞在する。彼らは自己の苦行により強力で、大きな気力と勇武を有する。(七―八)この確固たる両者は、神々とガンダルヴァたちに尊敬され、阿修羅（アスラ）た

ちを滅ぼすことをめざし、その行為により諸世界を喜ばせる。(九)』

ヴァイシャンパーヤナは語った(ビーシュマは続けた)。――

シャクラ(インドラ)はそれを聞いて、ブリハスパティに先導されるすべての神群とともに、両者が苦行を行じている場所へ行った。(一〇)その頃、神々と阿修羅の戦いにおいて(異本による)、神々に恐怖が生じていたので、インドラは偉大なナラとナーラーヤナに願いごとをかなえて欲しいと頼んだ。(一一)彼らは『願いを選びなさい』と告げた。そこでシャクラは、『我々を援助してもらいたい』と言った。(一二)すると両者は、『あなたの望むことをやろう』とシャクラに言った。シャクラはその両者とともに悪魔たちを滅ぼした。(一三)

合戦において、敵を苦しめるナラはインドラの敵であるパウローマ族とカーラカンジャ族を幾百幾千と殺した。(一四)それがあのアルジュナである。彼は戦場で走りまわる戦車に立ち、半月形の先の矢で、祭祀を呑もうとするジャンバの頭を切り取った。(一五)彼は戦闘において六万のニヴァータカヴァチャ族を殺して、海のかなたのヒラニヤプラ(都市名)を苦しめた。(一六)敵の都市を滅ぼす強力なアルジュナは、インドラをはじめとする神々を破り、火神を満足させた。同様にナーラーヤナも他の多くの者たちを殺害した。(一七)

見よ、その非常に強力な両者が連合した。強力な勇士ヴァースデーヴァ(クリシュナ)とアルジュナが手を組んだのだ。(一八)その両者は古（いにしえ）の神ナラとナーラーヤナであると聞く。人間界にあって、インドラをはじめとする神々や阿修羅たちによってもうち破られない。(一九)ナ

ーラーヤナがクリシュナであり、ナラがアルジュナであると伝えられる。ナーラーヤナとナラは、一つのものが二つになったのである。(二〇) その両者はその行為により不滅で恒久の世界を得た。しかし戦いの時に、繰り返し各所に生まれるのである。(二一) それ故ナーラダ仙は『行為(戦闘)がなされるべきである』と言った。ヴェーダを知る彼は、これらすべてをヴリシュニ軍に告げた。(二二)

ドゥルヨーダナよ、法螺と円盤と棍棒を持つケーシャヴァ(クリシュナ)と、諸々の武器を持つ恐るべき弓取りのアルジュナとを見る時、永遠で偉大な二人のクリシュナが一つの戦車に乗っているのを見る時、わが子よ、その時お前は私の言葉を思い出すであろう。(二三―二四) クル族の滅亡が近づいているのでなければ、わが子よ、(何故に)お前の知性は実利と法から逸れるのか。(二五) もしお前が私の言葉を聞かないなら、多くの人々が殺されることを聞くであろう。すべてのクルは、お前の考えに従うから。(二六) バラタの雄牛よ、お前だけが、次の三人の意見を真実だと考えている。すなわち、(パラシュ)ラーマに呪われた生まれの悪い御者の子のカルナと、スバラの息子シャクニと、卑しい悪党である弟のドゥフシャーサナの意見を。(二七―二八)」

カルナは言った。

「祖父よ、あなた様は私についてそのように言うべきではない。私は王族の法に立脚し、自己の義務から逸れたことはない。(二九) 私がどんな悪さをしたので非難するのか。ドリタラーシトラの関係者は、私に何か罪があるとは決して思わない。(三〇) 私はドリタラーシトラ

王にとって好ましいことをすべてやるつもりだ。ドゥルヨーダナにとってもだ。彼は王国の統治に専念しているから。(三一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

カルナの言葉を聞くと、ビーシュマは再びドリタラーシトラ大王に話しかけて、次のように言った。(三二)

「彼はいつも『俺はパーンダヴァたちを殺す』と大言を吐いている。偉大なパーンダヴァたちの足下にも及ばないのに。(三三) 汝の邪悪な息子たちに訪れるであろう災いは、この邪な御者の息子の仕業であると知りなさい。(三四) 汝の愚かな息子スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)は、彼を頼りにして、あの敵を成敗する勇猛な神の息子たちを軽蔑している。(三五) しかし、すべてのパーンダヴァのうちの一人一人がかつて行なったような、非常になしがたい行為を、彼が以前にしたことがあるか。(三六) アルジュナが武勇を発揮して、ヴィラータの都で彼の愛しい兄弟を殺したのを見て、その時彼は何をしたか。(三七) アルジュナが集結したすべてのクル軍を攻撃して粉砕し、牛を取りもどした時、彼は不在だったのか。(三八) あなたの息子が牧場を視察した際にガンダルヴァ(半神)たちに捕えられた時、今このように吼えているカルナはどこにいたのか。(三九) あの場合も、アルジュナと偉大なビーマと双子がやって来て、ガンダルヴァたちをうち破ったのではないか。(四〇) バラタの雄牛よ、この常に法と実利を欠く法螺吹きは、多くの嘘をついた。あなたに幸いあれ。(四一)」

気高いドローナはビーシュマの言葉を聞くと、ドリタラーシトラに挨拶して、諸王の中で次のように言った。（四二）

「王よ、バラタの最上者ビーシュマが言ったようにしなさい。確かに欲にくらんだ者たちの言に従うことはよくない。（四三）戦争になる前に、パーンダヴァたちと講和するのがよいと私は考える。アルジュナは自分が言ってサンジャヤが伝えたようなことをすべて実行すると私は思う。三界において、彼に等しい弓取りは存在しないから。（四四―四五）」

しかし王は、ドローナとビーシュマの有益な言葉を無視して、またサンジャヤにパーンダヴァのことをたずねた。（四六）王がビーシュマとドローナに向かって適切に答えなかった時、すべてのクル族の人々は生きる希望を失った。（四七）　（第四十八章）

ドリタラーシトラ、和平に傾く

ドリタラーシトラはたずねた。

「あのダルマの息子であるパーンダヴァ王は、多くの軍隊が彼に敵対して集結したことを聞いて何と言ったか。（一）怒りから戦おうとしているユディシティラは何を望んでいるか。彼の弟や息子たちのうちで、いかなる人々が、彼の命令を望んでその顔を仰いでいるか（異本による）。（二）あの法（ダルマ）を知る徳行の王は、愚か者たちの詐術により怒ったが、その彼を、いかなる者たちが『講和せよ、戦え』と言って制御するのか。（三）」

サンジャヤは言った。

「パーンダヴァたちとパーンチャーラ族はユディシティラ王の顔を仰ぐ。あなたに幸いあれ。彼はすべての者たちを支配する。（四）パーンダヴァとパーンチャーラの戦車の群は、別々になって、クンティーの息子ユディシティラが来ると歓迎する。（五）闇が昇る太陽を歓迎するように、パーンチャーラ族は、昇った光輝の群のような、栄光に輝くクンティーの息子を歓迎する。（六）牛飼や羊飼に至るまで喜ばせるユディシティラに対し、パーンチャーラ、ケーカヤ、マツヤの人々は敬意を表する。（七）バラモンの女性、王女たち、実業者（ヴァイシュ）の娘たちは、遊んでいるうちに、戦いの準備をしたユディシティラを見るために集まって来る。（八）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、言ってくれ。パーンダヴァたちは我々に対し何者を起用したのか。軍司令官ドリシタデュムナか。ソーマカ（パーンチャーラ）とはどれほどの力を有するか。（九）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

集会場におけるクルの会合において、サンジャヤはそのようにたずねられて、ひどく長嘆息し、繰り返し考え込んでいたが、突然その場で理由もなく失神してしまった。（一〇）集会場の王の会合にいた男が言った。

「王よ、そこでサンジャヤが失神し、地面に倒れています。彼は知性と意識を失い、何も言葉を発しません。（一一）」

ドリタラーシトラは言った。

「きっとサンジャヤは、クンティーの息子である勇士たちを見て、彼の心はその人中の虎たちによってひどく乱されたのだ。（二二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

サンジャヤは意識を取りもどし、元気になると、集会場におけるクルの会合において、ドリタラーシトラに次のように言った。（二三）

「王中の王よ、私はクンティーの息子である勇士たちに会いました。彼らはマツヤ国王の宮殿に住んだ苦労により痩せていました。大王よ、パーンダヴァたちはあなた方に対し何者を起用したのか、お聞きなさい。（二四）徳性あるユディシティラは、決して怒りや恐怖や欲望や利益や理屈のために真実を捨てることはない。（二五）大王よ、その法（ダルマ）を保つ人々の最上者は、法における基準（よりどころ）である。パーンダヴァたちはそのアジャータシャトル（ユディシティラ）を起用した。（二六）その腕力にかけて、ビーマセーナに等しい者は地上に誰もいない。その弓取りは、すべての王たちを支配下に置いた。パーンダヴァたちは、そのビーマセーナを起用した。（二七）そのクンティーの息子である狼腹（ビーマ）は、彼らがラック（可燃物）の家から退去した時、また人食いのヒディンバの難を逃れた時、彼らの拠り所であった。（二八）クンティーの息子である狼腹は、シンドゥ国王がドラウパディーを掠奪した時、彼らの拠り所であった。（二九）彼はまた、ヴァーラナーヴァタにおいてすべてのパーンダヴァ兄弟が焼かれるところを救出した。彼らはあなた方に対し、その彼を起用した。（二〇）彼はクリシュナー（ドラウパディー）を喜ばせるために、険阻で恐ろしいガンダマーダナ山に入って、クローダヴァシャスを殺した。（二一）彼の両腕には一万頭の象の（テクスト訂正）力がそなわっている。パーンダヴァたちはそのビーマセーナを起用した。（二二）

勇士アルジュナは、かつてクリシュナとともに、火神を満足させるために、武勇を発揮して、戦うインドラに勝利した。（二三）彼は戦闘によって、偉大な神（マハーデーヴァ）、山の主、三叉の槍を持つ神、神々の神、ウマー（パールヴァティー）の夫である〔シヴァ〕自身を満足させた。（二四）その弓取りは、すべての世界の守護者たちを支配下に置いた。パーンダヴァたちは戦いにおいて、あなた方に対し、そのヴィジャヤ（アルジュナ）を起用した。（二五）

めざましく戦う戦士ナクラは、蛮族（ムレーッチャ）の群に満ちた西方を支配下に置いた。その彼が控えている。（二六）クル族の人々よ、パーンダヴァたちはその見目よい勇士、超戦士であるマードリーの息子（ナクラ）を起用した。（二七）サハデーヴァは、カーシ、アンガ、マガダ、カリンガを戦いにより征服した。パーンダヴァたちはそのサハデーヴァを起用した。（二八）その力に匹敵する人間は、地上に四人しかいない。すなわち、アシュヴァッターマン、ドリシタケートゥ、プラデュムナ、ルクミである。（二九）パーンダヴァはあなた方に対し、そのサハデーヴァを起用した。マードリーの次男である最高の人を。（三〇）

シカンディンはかつてカーシ国王の王女であったが、恐るべき苦行を行なった。バラタの雄牛よ、彼女は死んでも、ビーシュマを殺すことを願っていた。（三一）そして、運命のはか

らいにより、パーンチャーラ国王の娘として生まれ、更に男となった。人中の虎よ、彼は男と女の長所と短所を知っている。（三二）戦いに酔い痴れるそのパーンチャーラの王子は、カリンガ国を攻撃した。パーンダヴァたちは、あなた方に対して、その武器に通達したシカンディンを起用した。（三三）ある夜叉（ヤクシャ）が、ビーシュマを殺すために彼女を男にしたという。パーンダヴァたちはその恐るべき勇士を起用した。（三四）」（三五―四五略）

（第四十九章）／（第五十章、第五十一章略）

ドリタラーシトラは言った。

「パーンダヴァたちがすべて勇猛で勝利を欲するように、彼らの盟友も自己を捨て、勝利に専念している。（一）実にあなたは、勇猛な敵たちについて私に語った。パーンチャーラ、ケーカヤ、マツヤ、マガダ、ヴァッサの諸王……。（二）世界の最高者である強力なクリシュナは、もし望めばインドラを含むこの諸世界を支配できるが、その彼がパーンダヴァの勝利に専念している。（三）サーティヤキはすべての（武）術を速やかにアルジュナから修得した。そのシニの孫は、種をまくように矢を注ぎつつ、戦場に立つであろう。（四）パーンチャーラの王子ドリシタデュムナは、最高の武器を知り、恐るべき行為をなす勇士で、私の軍隊に対して戦うであろう。（五）友よ、ユディシティラの怒り、アルジュナの武勇、双子、ビーマセーナに対する恐怖が私に生じた。（六）これらインドラのような人々は、空中に、神的な網を広げて私の軍隊を滅ぼすであろう。サンジャヤよ、そこで私は嘆いているのだ。（七）パーンドゥの息子（ユディシティラ）は見目よく、賢明で、幸運にめぐまれ、神聖である。叡知あり、完成した知性をそなえ、徳性ある。（八）彼は友人や顧問にめぐまれている。馬や御者たちにもめぐまれている。弟たち、義父たち、勇士である息子たちにめぐまれている。（九）人中の虎であるパーンダヴァは、堅固さ（平静さ）をそなえ、秘密を守る。柔和で、寛大であり、廉恥あり、不屈の勇者である。（一〇）彼は博識で、自己を制し、長老に仕え、感官を制御している。そのすべての美質をそなえた、燃え上がり熱する火のような彼に対し、いかなる愚者が蝗（いなご）のように飛びかかるであろうか。防ぎようのないパーンダヴァの火に対し、いかなる愚者が、まさに死なんとして……。（一一―一二）その純金のように輝く王は、細く高い火焔のようであり、戦いにより私の愚かな息子たちを滅ぼすであろう。（一三）

彼らと戦わない方がよいと私は考える。クル族の人々よ、聞きなさい。戦えば必ずやすべての一族が滅亡するであろう。（一四）これが私の最終的な決意である（異本による）。そうすれば私の心は静まる。ところであなた方が非戦を望むなら、我々は平和に向けて努力しよう。（一五）我々が謙虚になれば、ユディシティラは無視しないであろう。彼は法（ダルマ）にもとるということで私を非難しているのだから。（一六）」

（第五十二章）

自軍の優位を説くドゥルヨーダナ

サンジャヤは言った。

「バラタ族の大王よ、あなたの言われた通りだ。戦いにおいて、ガーンディーヴァ弓によって王族が滅亡することが予見される。（一）しかし私にはこのことが理解できない。あなたはいつも賢明であり、アルジュナの勇気を知っているのに、息子の意見に従ってしまうのだ。（二）大王よ、今はそのように言う時ではない。あなたがいつも罪を犯したのだ。バラタの雄牛よ、まさにあなたが最初からパーンダヴァたちに辛く当たった。（三）父や親友でよく自制した者なら、（息子や友に対し）有益なことをすべきである。害を与えようとする者は親と言えない。（四）大王よ、賭博の際、『これが勝ち取られた、これが獲得された』と、彼らが負けたのを聞いて、あなたは子供のように喜んだ。（五）以前パーンダヴァたちがひどいことを言われていた時、あなたはそれを見過ごした。彼ら（息子たち）がすべての王国を勝ち取ったということで、自らの滅亡に気づかなかったのだ。（六）大王よ、未開地を含むクル国があなたの父祖の王国であった。後になって、あの勇士たちが征服したすべての領土をあなたは得たのである。（七）パーンダヴァたちは腕の力により征服した土地をあなたに引き渡した。ところが最高の王よ、あなたは自分でそれをしたと考えている。（八）あなたの息子たちが舟もない海で溺れるようにガンダルヴァ王に捕えられた時、ユディシティラは彼らを取りもどした。

最高の王よ。（九）賭博においてパーンダヴァたちが敗れ、森に亡命した時、王よ、あなたは子供のように何度も喜んだ。（一〇）

アルジュナが多くの鋭い矢の群を雨降らす時、海といえども干上がるであろう。いわんや肉より生ずる者（肉体を持った者）はなおさらである。（一一）射手のうちではアルジュナが最高である。弓のうちではガーンディーヴァが最高である。一切の生類のうちでクリシュナが最高である。円盤のうちでスダルシャナ（クリシュナの円盤）が最高である。（一二）旗のうちでは輝かしい猿の旗標（アルジュナの戦車の旗標）が最高である。戦場において白馬たちにひかれた戦車に乗り、以上のものをともなうアルジュナは、振り上げられたカーラ（破壊神）の円盤（輪時）のように我々を滅ぼすであろう。（一三）

バラタの雄牛である王よ、ビーマとアルジュナを戦士として擁するその王（ユディシティラ）には、今やすべての大地が属するであろう。最高の王よ。（一四）ドゥルヨーダナをはじめとするクル族の人々は、その軍隊がほとんどビーマに殺されて滅びるのを見てから滅亡するであろう。（一五）主よ、あなたの息子たちと彼らに従う王たちは、ビーマを恐れて、勝利を得ることはないだろう。大王よ。（一六）

今やマツヤ国はあなたを尊敬しない。パーンチャーラもケーカヤもそうだ。シャールヴァもシューラセーナも、すべてあなたを軽蔑する。彼らはすべて賢明なユディシティラの力を知り、彼のもとに行った。（一七）殺されるに価しない法をそなえた人々に悪事を働いたことにより、その悪人、あなたの息子は、あらゆる方策により制圧されるべきである。大王よ、

その点について悲しむ必要はない。(一八) 賭博の時、私は言った。賢明なヴィドゥラも言った。バーラタよ、今あなたはパーンダヴァについて無力の者のように嘆いたが、王中の王よ、すべての嘆きは無用である。(一九)」

(第五十三章)

ドゥルヨーダナは言った。

「大王よ、恐れることはない。あなたは我々について嘆くべきではない。王よ、我々は戦場において敵をうち破ることができる。(一) パーンダヴァたちが森で亡命生活をしていた時、敵の国土を粉砕する大軍とともにマドゥスーダナ(クリシュナ)が彼らのもとにやって来た。(二) ケーカヤ国の人々、ドリシタケートゥ、ドリシタデュムナ、その他多くの王たちがパーンダヴァたちにつき従った。(三) その勇士たちは、インドラプラスタから遠からぬ所に集結した。彼らはこぞって、あなたとクル族とを非難している。(四) クリシュナをはじめとして彼らは集まって、鹿皮をまとって座しているユディシティラに仕えている。バーラタよ。(五) 王たちはあなたとその関係者を殲滅しようと求め、王国を返還すべきであると言っている。(六) バラタの雄牛である王よ、私はそれを聞いて、親族が滅亡することを恐れ、ビーシュマとドローナとクリパに告げた。(七)

『あのパーンダヴァたちは約定を守らないと私は思う。ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は我々をすべて殲滅することを望んでいる。(八) ヴィドゥラを除き、あなた方すべての偉大な人々が

殺されるであろう。法(ダルマ)を知るクルの最上者ドリタラーシトラは殺されないであろう。(九) 父よ、クリシュナは我々すべてを殲滅してから、ユディシティラのもとにクルの王国を統一することを望んでいる。(一〇) 我々としては何をなすべき時か。服従か、逃亡か。それとも命を捨てて敵を迎え撃つか。(一一) しかし、もし対戦すれば我々の敗北は確実である。すべての王たちはユディシティラに服従しているのだから。(一二) 我々の地方は忠誠でなくなる。友邦は我々に対し怒っている。我々はすべての王たち、すべての親族に非難されている。(一三)

親族に服従することは永劫にわたって誤りではない。しかし私は、智慧の眼を有する(盲目の)王のことを悲しむ。父は私のために苦悩し、終わりの無い煩悩の虜になっている。(一四) あなた(ドリタラーシトラを指す)の息子たちは、私を喜ばせるために敵たちを妨害した。最高の人よ、あなたは前からそのことを知っていた。(一五) パーンダヴァの勇士たちは、ドリタラーシトラとその顧問たちの一族を殲滅して復讐するであろう。(一六)』

すると、ドローナとビーシュマとクリパと、ドローナの息子は、私が非常に思い悩み気が動転していると考えて、次のように告げた。バーラタよ。(一七)

『敵を悩ます勇士よ、敵が攻撃して来ても恐れる必要はない。王よ、敵は戦いにおいて我々に勝つことはできない。(一八) 我々一人一人がすべての王たちをうち破ることができる。彼らは来るがよい。我々は鋭い矢で彼らの誇りを取り除いてやろう。(一九) 実にビーシュマは、父が死んだ時、一人ですべての王たちを征服した。そのクルの最上者は、怒って一台の戦車

に乗り、猛り立って多数の王を殺した。そこで彼らは恐れ、そのデーヴァヴラタ（ビーシュマ）に庇護を求めた。(二〇―二一) そのビーシュマは、戦場において我々といっしょならば、より容易に敵を滅ぼすことができる。それ故、あなたの恐怖が去らんことを。バラタの雄牛よ。』(二二) かつてすべての大地は敵の支配下にあった。しかし今や、彼らは戦場で我々をうち破ることはできない。今では、敵であるパーンダヴァたちは味方を失い、力を失った。(二三) 大地は我々のものとなっている。バラタの雄牛よ。そして私が率いる諸王は、苦楽において同一の目的を有する。(二四) 彼らすべての王は、私のために、火中や海に入ることも厭わないであろう。クルの最上者である勇士よ、そのことを知りなさい。(二五) あなたが悩み、何度も嘆き、敵を過大評価して恐れるので、彼らはあなたのことを狂人のように思って笑うであろう。(二六) これらの王のうちの一人一人が、すべて自分はパーンダヴァに対抗できると考えている。あなたに訪れた恐怖が去らんことを。(二七)

インドラといえども私のすべての軍隊を滅ぼすことはできないだろう。自存者梵天（ブラフマー）によってもそれは滅ぼされない。(二八) ユディシティラは都市を捨てて、五つの村を要求している。彼は私の軍隊と私の実力を恐れているのだ。主よ。(二九) あなたはクンティーの息子である狼腹（ビーマ）が強力であると考えるが、それは間違いである。バーラタよ、あなたは私のすべての実力を知らない。(三〇) 棍棒の戦いにおいて私に等しい者は地上に誰もいない。私を凌駕する者は誰もいない。(三一) 私は専心し艱難辛苦して武術に通達した。それ故、ビーマやその他の者たちを恐れる必要はまったくない。(三二) 私がサンカルシャナ（バララーマ、クリシュナの兄）に仕えて生活した時、彼は『棍棒にかけてドゥルヨーダナに匹敵する者はいない』と結論した。汝に幸あれ。(三三) 戦闘において、私はサンカルシャナに等しい。力にかけては地上で最も優れている。ビーマは戦いにおいて、私の棍棒の打撃に決して耐えられないであろう。(三四) 王よ、私が怒ってビーマに一撃を食らわす。その一撃が彼を速やかに恐ろしいヤマ（閻魔）の住処に送るであろう。(三五) 王よ、棍棒を手にした狼腹を見たいものだ。それは、非常に長い間、私がいつも願っていた願望である。(三六) プリターの息子の狼腹は、戦いにおいて私の棍棒で撃たれ、四肢を砕かれ、息絶えて大地に倒れるであろう。(三七) ヒマーラヤ山でさえ、一たび私の棍棒で撃たれたら、百千に砕けるであろう。(三八) 彼（ビーマ）も、クリシュナもアルジュナもよく知っている。棍棒にかけてはドゥルヨーダナに匹敵する者はいないという定評がある。(三九) それ故、狼腹に対するあなたの恐怖は捨てるべきである。激戦において、私は彼を殺すであろう。王よ、落胆してはなりません。(四〇)

私が彼を殺す時、同等の、あるいはより優れた戦士たちが、速やかにアルジュナを殺すであろう。バラタの雄牛よ。(四一) ビーシュマ、ドローナ、クリパ、ドローナの息子、カルナ、ブーリシュラヴァス、プラーグジョーティシャの王（バガダッタ）、シャリヤ、シンドゥ国王ジャヤドラタ、(四二) これらの人々の一人一人が、パーンダヴァたちを殺すことができる。バーラタよ。これらの人々が結集したら、彼らを即座にヤマの住処に送るであろう。(四三) すべての諸王の軍隊は、どうして一人のアルジュナをうち破ることができないか。その理由が見

出されない。(四四)ビーシュマ、ドローナ、ドローナの息子、クリパたちの放つ幾百、幾千という矢の群により、アルジュナはヤマの住処に行くであろう。(四五)ガンガー（ガンジス）の息子である祖父ビーシュマは、〔父である〕シャンタヌよりも優れて生まれ、梵仙（バラモン出身の聖仙）のようであり、神々ですら対抗しがたい。というのは、満足した父が告げた。『お前が望まなければ死なない』と。(四六)ドローナは梵仙バラドゥヴァージャから、枡《ドローニー》の中に生まれた。ドローナから最高に武器に通じたその息子（アシュヴァッターマン）が生まれた。大王よ。(四七)そして最上の師匠クリパは、大仙ガウタマから、葦の茎の中に生まれた。その栄光ある男は殺されることはないと私は考える。(四八)アシュヴァッターマンの父と母（クリピー）と母方の伯父（クリパ）の三人は母胎から生まれなかった。大王よ。そしてその勇士は私の側についている。(四九)

大王よ、これらはすべて神に等しい偉大な戦士である。戦闘においてインドラをも苦しめるであろう。バラタの雄牛よ。(五〇)そしてカルナは、ビーシュマやドローナやクリパと同等であると私は考える。〔パラシュ〕ラーマが『汝は私に等しい』と認めた。バーラタよ。(五一)カルナは生まれつき美しく輝く耳環をつけていた。大インドラはシャチー（神妃）のために、その勇士に耳環をくれと要請した。こよなく恐ろしい必殺の槍と交換で。大王よ。(五二)アルジュナがその槍を受けたら、どうして生きながらえるだろうか。王よ、私の勝利は確実である。手中に収められた果実も同様だ。そして敵が全面的に敗北することも、地上において明白なことである。(五三)

バーラタよ、このビーシュマは一日で一万人を殺す。ドローナとその息子とクリパも彼に等しい勇士である。(五四)敵を苦しめる者よ、戦士の群（特攻隊）は宣誓《サンシャプタ》したという。『我々がアルジュナを殺すか、彼が我々を殺すかだ』と。(五五)彼らはアルジュナを殺す能力があると諸王は考えている。王よ、それなのにどうしてあなたは理由もなく悩んでいるのか。(五六)バーラタよ、そしてビーマセーナが殺されたら、敵たちのうちで他の誰が戦うであろうか。もし誰か知っていたら私に言って下さい。敵を苦しめる者よ。(五七)五人の兄弟、ドリシタデュムナ、サーティヤキ、以上で計七名の戦士が敵の主力である。(五八)それに対し我々には、最勝のビーシュマ、ドローナ、クリパなどがおります。更にドローナの息子（アシュヴァッターマン）、カルナ、ソーマダッタ、バーフリーカ、プラーグジョーティシャの王、シャリヤ、アヴァンティの王、ジャヤドラタ、ドゥフシャーサナ、ドゥルムカ、ドゥフサハ、シュルターユス、チトラセーナ、プルミトラ、ヴィヴィンシャティ、シャラ、ブーリシュラヴァス、あなたの息子ヴィカルナがいる。(五九―六一)王よ、私のもとには十一軍団《アクシャウヒニー》が集結しています。敵の軍団数はそれより劣り、七軍団に過ぎません。どうして私に敗北があるでしょう。(六二)『三分の一少ない軍隊とは戦うべきである』とブリハスパティは説く。王よ、私の軍隊は敵軍よりも三分の一多い。(六三)バーラタよ、敵には多くの欠陥があると私は見る。一方、味方には多くの長所、長所の上昇を認める。王よ。(六四)バーラタよ、このように私の軍が優れ、パーンダヴァ軍が劣っていることをすべて知り、迷妄に陥ってはなりませぬ。(六五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

敵の都市を征服する勇士（ドゥルヨーダナ）は、このように言ってから、その時宜にかなったことを知ろうと望み、更にサンジャヤにたずねた。（六六）（第五十四章）

非戦を勧める人々

ドゥルヨーダナはたずねた。

「クンティーの息子ユディシティラは七軍団を得て、王たちとともに何をしようと望んでいるのか。（一）」

サンジャヤは答えた。

「王よ、ユディシティラは戦いを期して、この上なく勇み立っている。ビーマセーナとアルジュナと双子たちも恐れていない。（二）クンティーの息子アルジュナは、〔武器の〕呪句（マントラ）を試してみたいと望み、すべての方角を輝かせつつ、神聖な戦車に馬をつないだ。（三）私たちは稲妻の輝く雲を見るように、具足をつけた彼を見た。彼は呪句について考察してから、勇み立って言った。（四）『この前兆を見よ。サンジャヤよ、我々は勝利するであろう』と。アルジュナが私に告げたように、私もそのように思う。（五）」

ドゥルヨーダナはたずねた。

「あなたは喜んで、あの賭博で負けたパーンダヴァたちを称讃する。アルジュナの戦車について話してくれ。馬はどのようであるか。旗はどのようであるか。（六）」

サンジャヤは答えた。

「王よ、バウヴァナ（ヴィシュヴァカルマン）トゥヴァシトリが、インドラや配置者（ダートリ）とともに、非常に多彩に、種々の形態を創造した。（七）彼らは神的な幻力（マーヤー）により、高価で神聖で偉大で軽い種々の形態を旗に仕立てた。（八）その旗は、水平に、上方に、すべての方向に、一由旬（ヨージャナ）の距離をおおった。それは樹々におおわれても引っかかることはない。バウヴァナはそのように幻力を工夫した。（九）多彩な色をして、それがいかなるものか我々は知らないインドラの弓（虹）が空で輝くように、それと同様にバウヴァナはその旗を作った。その形状は多様な外観をとって認められる。（一〇）火をともなう煙が、種々の色を帯び、輝く体をとって、空をおおって立ち上がるように、それと同様にバウヴァナはその旗を作った。それには重荷もなければ障害もないであろう。（一一）彼の戦車には風のように速い白い駿馬がつながれている。それらは神聖で、チトララタ（ガンダルヴァの王）に贈られたものである。その馬たちは、いくら殺されても、常に百頭を満たしている。以前にそのような恩寵が授けられたのである。（一二）同様に、王（ユディシティラ）の戦車には象牙色の大きい馬たちがつながれている。ビーマセーナの馬たちは羚羊のようで、戦場において風のように速く走る。（一三）サハデーヴァの馬たちはまだら色の体で、その背中はティッティリ（ウズラの類）のような多彩な色である。それらは兄のアルジュナが喜んで彼に与えたものである。その優れた馬たちは（原文に疑問の個所がある）喜び勇んでサハデーヴァ

を運ぶ。（二四）大インドラに与えられた最高の駿馬たちがナクラを運ぶ。風のように強力で俊足な馬たちは、インドラのような勇士を運ぶ。（二五）年齢と勇猛さと速度の点で以上の馬と等しい、比類のない良馬たち、神々から授けられた大きな馬たちが、スバドラーとドラウパディーの息子である王子たちを運ぶ。（二六）」

（第五十五章）

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、パーンダヴァのために、私の息子の軍と戦うべくそこに集結しているいかなる人々を見たか。（一）」

サンジャヤは答えた。

「私はアンダカ・ヴリシュニの指導者であるクリシュナが来ているのを見た。チェーキターナとユユダーナ・サーティヤキをそこで見た。（二）その有名な二人の偉大な戦士は、勇士であると自負し、それぞれ一軍団を率いてパーンダヴァたちのもとに来た。（三）パーンチャーラの王ドルパダは、ドリシタデュムナに率いられた、サティヤジットをはじめとする十人の息子たちに囲まれ、シカンディンに守られ、パーンダヴァの名誉を増大させつつ、一軍団をともなってやって来た。すべての兵士は装備していた。（四—五）ヴィラータ王は息子のシャンカとウッタラとともに、マディラーシュヴァに先導されるスーリヤダッタなどの勇士たちとともに、兄弟や息子たちとともに、一軍団に囲まれてパーンダヴァのもとに来た。（六—七）マガダのジャラーサンディ、チェーディの王ドリシタケートゥも、それぞれ一軍団をともなってやって来た。（八）すべてのケーカヤの五人の兄弟は、赤い軍旗を持ち、一軍団に囲まれて、パーンダヴァのもとに来た。（九）以上、これだけの人々がそこに集結しているのを私は見た。彼らはパーンダヴァたちのために、ドゥルヨーダナの軍に対して戦うであろう。（一〇）人間と神とガンダルヴァと阿修羅たちの配陣を知る、気高いドリシタデュムナが軍司令官となった。（一一）

王よ、シャンタヌの息子ビーシュマは、シカンディンが対戦するよう割り当てられている。ヴィラータはマツヤの戦士たちとともにシカンディンを補佐する。（一二）強力なマドラ国王（シャリヤ）は、パーンドゥの長男に割り当てられている。しかしある人々は、『彼らは対等ではないと考える』と言った。（一三）ドゥルヨーダナは息子や百人の兄弟とともに、そして東方と南方の諸王も、ビーマセーナに割り当てられた。（一四）アルジュナの相手は、カルナとアシュヴァッターマンとヴィカルナと、シンドゥ国王ジャヤドラタであると考えられている。（一五）アルジュナはまた、誰であれ攻撃しがたく、地上における勇士と自負しているすべての人々に割り当てられている。（一六）ケーカヤの五人の兄弟、偉大な射手である王子たちは、戦いにおいて、〔クル軍の側の〕ケーカヤ族を相手に戦うであろう。（一七）」（一八—二五略）

ドリタラーシトラは言った。

「いかさま賭博にふける私の愚かな息子たちはすべておしまいだ。激戦において、強力なビーマと戦えば。（二六）地上のすべての王は、時間（カーラ）の法（ダルマ）により犠牲として捧げられ、蝗が火中

に飛び込むように、ガーンディーヴァ弓の火に入るであろう。(二七) 私は怨みを抱くあの偉大な者たちにより、わが軍が敗走することを予知する。戦いにおいてパーンダヴァたちに粉砕される軍隊に誰が従うであろうか。(二八) 彼らはすべて勇猛な超戦士であり、名声あり栄光に満ちている。その威光にかけて太陽や火に等しい、常勝の者たちである。(二九) ユディシティラが彼らの指導者で、クリシュナが守護者である。戦士は、アルジュナとビーマというパーンダヴァの勇士である。(三〇) そしてナクラ、サハデーヴァ、ドリシタデュムナ、サーティヤキ、ドルパダ、ドリシタデュムナの息子、パーンチャーラのウッタマウジャス、無敵のユダーマニユ、シカンディン、クシャトラデーヴァ、ヴィラータの息子ウッタラ、カーシ国王、チェーディとマツヤの人々とすべてのスリンジャヤの人々、ヴィラータの息子バブル、パーンチャーラとプラバドラカの人々。(三一—三三) この戦いに長けた勇士たちがもし望まなければ、インドラといえどもこの大地を奪うことができないであろう。彼らは山々をも裂くことができる。(三四) この美質をそなえ、超人的な栄光をそなえたすべての者たちに対して、私の悪い息子は戦おうと望んでいる。私が泣いているのに。サンジャヤよ。(三五)」

　ドゥルヨーダナは言った。

「双方とも同族の出である。双方とも地面を歩く人間である。それなのにあなたは、どうして一方的にパーンダヴァが勝利すると考えるのか。(三六) 祖父（ビーシュマ）、ドローナ、クリパ、無敵のカルナ、ジャヤドラタ、ソーマダッタ、アシュヴァッターマン。(三七) これらの思慮深い勇士たちに対し、神々をともなうインドラといえども戦いにおいて勝利することはでき

ない。父よ、いわんやどうしてパーンダヴァたちが勝てるか。(三八) 父よ、高貴で勇猛な、武器をとるすべての王たちは、私のためにパーンダヴァたちを撃退することができる（異本による）。(三九) パーンダヴァたちはわが軍を見ることすらできない。というのは、私はパーンダヴァとその息子たちに対し、戦場で戦うに十分な力をそなえている。(四〇) バーラタよ、すべての王たちは私によかれと望んでいる。彼らは罠で鹿を捕えるようにパーンダヴァたちを阻止するであろう。(四一) パーンチャーラ軍とパーンダヴァ軍は、わが戦車隊と矢の群により敗走するであろう。(四二)」

　ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、私の息子は狂人のようにしゃべる。戦いによりダルマ王ユディシティラに勝利することができないから。(四三) 誉れ高い法（ダルマ）を知る偉大なパーンダヴァたちとその息子たちが強力であることを、ビーシュマは常に知っている。(四四) それ故、私はあの偉大な者たちと戦うことを望まない。しかしサンジャヤよ、彼らの動きについて再び私に話してくれ。(四五) あの強力なパーンダヴァの勇士たちを、誰がいっそう燃え上がらせているのか。供物（バター）により火が燃え上がるように。(四六)」

　サンジャヤは言った。

「バーラタよ、ドリシタデュムナがいつも彼らを燃え上がらせている。

『バラタ族の最上者たちよ、戦え。戦いを恐れるな。(四七) ドゥルヨーダナによって集められたいかなる王たちが、鎧の湖のような激戦の場に集結しようとも、私は一人で、怒れる彼

らすべてとその一族を、戦場において呑むであろう。鯨が水中の魚たちを呑むように。（四八―四九）ビーシュマ、ドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子、シャリヤ、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）。私はこれらの人々をも阻止するであろう。海岸が海を止めるように。（五〇）』

そのように言う彼に対し、徳性あるユディシティラ王は告げた。

『パーンチャーラとパーンダヴァたちはすべて、あなたの沈着さと勇猛さに依存している。戦闘から我々を救って下さい。（五一）勇士よ、私はあなたが王族の法（クシャトラダルマ）において確立していることを知っている。そして戦いを望むクル族の人々に対し一人で対抗できることを。あなたがやろうとしていることは、我々のためにもなる。敵を苦しめる者よ。（五二）戦いに敗れ、救いを求めて戦場から退却する〔敵たち〕に対して、勇武を示しつつ先頭に立つような勇士がいたら、千金でもって彼を買うべきである。これが政略を知る人々の説である（異本による）。（五三）まさにあなたは英雄であり、武勇に秀でた勇士である。人中の雄牛よ。疑いもなく、戦場において恐怖に悩む人々の守護者である。（五四）』

徳性あるユディシティラがこのように告げた時、恐れざるドリシタデュムナは私に次のように言った。（五五）

『サンジャヤよ、ドゥルヨーダナの戦士であるすべての国の人々に告げよ。プラティーパの家系のクル族、バーフリーカ、シャリヤ、カルナ、ドローナ、ドローナの息子、ジャヤドラタ、ドゥフシャーサナ、ヴィカルナ、ドゥルヨーダナ王、ビーシュマに対し、あなたは速やかに帰って告げよ。――よい人を介してユディシティラに近づきなさい。神々に守られたアルジュナが汝らを殺さないように。世界の英雄であるユディシティラに速やかに請願しなさい。（五六―五八）』

あの最高に武器に通じたアルジュナほど優れた戦士は、この地上に誰もいない。（五九）ガーンディーヴァ弓を持つ彼の神聖な戦車は、神々に守護されているから。人間は彼に勝利することはない。戦争に心を向けてはなりませぬ。（六〇）」（第五十六章）

ドリタラーシトラは言った。

「ユディシティラは幼少の頃から王族（クシャトラ）の威光を持ち、敬虔であった。愚かな息子たちは、私が嘆いているのに、その彼と戦おうと望んでいる。（一）ドゥルヨーダナよ、バラタ族の最上者よ、戦争を回避しなさい。いかなる状況にせよ、戦争は讃えられないから。敵を制する者よ。（二）お前と顧問たちが生活するためには領地の半分で十分である。パーンドゥの息子たちに適切な取り分を返還せよ。敵を制する者よ。（三）すべてのクル族の人々は、お前が偉大なパーンドゥの息子たちと講和を望むことが法（ダルマ）にかなうと考えている。（四）さあ、息子よ。この自分の軍隊を見よ。お前は滅亡しようとしている（異本による）。しかしお前は迷妄により気がつかない。（五）私は戦いを望まない。バーフリーカも戦いを望まない。ビーシュマ、ドローナ、アシュヴァッターマン、サンジャヤ、ソーマダッタ、シャリヤ、クリパ、サティヤヴラタ、プルミトラ、ジャヤ、ブーリシュラヴァスも戦いを望まない。（六―七）クル族が敵に苦しめられた時に頼りにする人々は戦争を望まない。それはお前を喜ばせるべきだ。（八）お前

は望んでそうしているのではない。カルナと邪悪なドゥフシャーサナとシャクニがお前にそうさせているのだ。（九）」

ドゥルヨーダナは言った。

「あなたと、ドローナ、アシュヴァッターマン、サンジャヤ、ヴィカルナ、カーンボージャ、クリパ、バーフリーカ、サティヤヴラタ、プルミトラ、ブーリシュラヴァス。私はこれらの人々や、あるいはその他のあなたの仲間に戦争の重荷を負わせて戦うのではない。（一〇―一一）お父さん、私とカルナは戦争という祭祀を行ない、ユディシティラを犠牲獣にして、潔斎の儀式をします。（一二）戦車が祭壇である。刀が小杓である。棍棒が大杓である。鎧がサダス（小屋）である。私の馬たちは四名の祭官である。私の矢がダルバ（クシャ草）である。名声が供物である。（一三）王よ、戦場において自己の犠牲によりヤマ（閻魔）に会い、自ら勝利し、敵を殺し、栄光に包まれて帰るでしょう。（一四）お父さん、私とカルナと私の弟のドゥフシャーサナ、以上我々三名は、戦いにおいてパーンダヴァたちを殺すでしょう。（一五）私はパーンドゥの息子たちを殺して、この大地を治めるでしょう。さもなくば、パーンドゥの息子たちが私を殺して、この大地を享受するでしょう。（一六）不滅の王よ、私は生命や財産や王国を捨てても、決してパーンダヴァたちといっしょに住みたくはありません。（一七）父上、鋭い針の先でついたほどの我々の土地でも、パーンダヴァに対して与えるべきではありません。（一八）」

ドリタラーシトラは言った。

「諸君、私はドゥルヨーダナを見放した。ヤマの領土に行ったも同然のこの愚か者に従うすべての人々のことを私は悲しむ。（一九）最高の戦士パーンダヴァたちは、戦場に集結して、鹿の群の中にいる虎のように、味方の勇士を次々と殺すであろう。（二〇）（二一―二七略）切られた大きな森のように、クル族の軍が戦場で倒れているのを見る時、お前は私の言葉を思い出すだろう。（二八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王はすべての王にこのように繰り返し告げてから、再びサンジャヤにたずねた。（二九）

（第五十七章）

クリシュナの言葉

ドリタラーシトラは言った。――

「偉大なヴァースデーヴァ（クリシュナ）とダナンジャヤ（アルジュナ）が告げたことを私に話してくれ。大知者よ、私はあなたの言葉を聞きたい。（一）」

サンジャヤは言った。

「王よ、聞きなさい。私がどのようにクリシュナとアルジュナに会ったか。そしてその二人の勇士がどのように語ったか。バーラタよ、私はそれをあなたに話します。（二）

王よ、私はその神のような二人と話すために、恭しく足の指を見て、合掌して彼らの宮殿に入った。(三)クリシュナとアルジュナとクリシュナー(ドラウパディー)と美しいサティヤバーマー(クリシュナの妻)のいるその場所には、アビマニユや双子でさえ近づくことはできなかった。(四)二人は蜜酒に酔い、栴檀香を塗り、花輪をつけ、上等の衣服を着て、神聖な装身具に飾られていた。(五)多くの宝石できらびやかな、黄金の大きな座席があり、種々の敷物でおおわれていた。そこに敵を制する二人の勇士が座っていた。(六)

クリシュナの両足がアルジュナの両膝にのせられているのを私は見た。そして偉大なアルジュナの両足はクリシュナーとサティヤー(サティヤバーマー)にのっていた。(七)その時アルジュナは黄金の足台を私に指し示した。私は手でそれに触れてから、地面に座った。(八)アルジュナが美しい足を足台からどけた時、私は足の裏に、吉相である上方に向かう筋がついているのを見た。(九)この黒色で大きく、シャーラ樹の幹のように背の高い二人の若者が一つの座席に座っているのを見て、大きな恐怖が私に入り込んだ。(一〇)彼らはインドラとヴィシュヌのようであった。しかし、そこにいる愚か者は、ドローナとビーシュマを頼り、カルナの大言を聞いて、それに気がつかない。(一一)その時、この二人がその命令に従うダルマ王(ユディシティラ)の心願は成就すると私は確信した。(一二)

私は飲食物でもてなされ、座り(異本による)、接待を受け、頭上で合掌し、二人にあなたのメッセージを伝えた。(一三)アルジュナは弓矢に親しんだ手で、クリシュナの吉相のある足を曲げて、彼をうながした。(一四)一切の装飾で飾られた、インドラの力に等しいクリシュナ

は、インドラの旗のように起き上がって座り、最高に雄弁な彼は私に語りかけた。その言葉は、喜ばしく、語るにふさわしいものであった。しかし、柔和ではあったが、ドリタラーシトラの息子たちにとっては、戦慄させる、非常に恐ろしいものであった。(一五―一六)私は語るにふさわしい彼のその言葉を聞いた。それは正しく発音され、適切な意味をそなえてはいるが、しまいには私の心を涸(か)らす言葉であった。(一七)

ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は言った。

『サンジャヤよ、クル族の長(ビーシュマ)とドローナが聞いている時、この言葉を賢明なドリタラーシトラに告げよ。(一八)

盛大な祭祀を行ないなさい。バラモンたちに謝礼を与えなさい。息子たちや妻たちと楽しみなさい。というのは、大なる危険があなたに訪れたから。(一九)適切な受者に財物を喜捨しなさい。願望により生じた息子たちを得なさい。愛しい者たちに好意をかけなさい。王(ユディシティラ)は勝利に向けて急いでいるから。(二〇)

この昔からの負債が私の心から去らない。あの時、クリシュナー(ドラウパディー)は、遠くにいる私に向かって、「ゴーヴィンダよ」と叫んだ。(二一)輝かしい無敵のガーンディーヴァ弓を持つ、私の親友であるアルジュナに、あなた方は敵対した。(二二)しかし、私といっしょにいるアルジュナを、誰が攻撃しようと望むか。カーラ(破壊神)にとりつかれていなければ。インドラ自身といえども……。(二三)彼は両腕で大地を支えることもできる。怒ったらこの生類を焼くであろう。天から神々を落とすであろう。そのアルジュナに誰が戦いにおいて勝利

するか。(二四) 神、阿修羅、人間、夜叉、ガンダルヴァ、蛇たちのうちで、戦いにおいてアルジュナに立ち向かえるような者を、私は見出すことができない。(二五) ヴィラータ王の都で大奇蹟があったと聞く。一騎で大勢に対抗したという。それが十分な証拠である。(二六) ヴィラータの都において、アルジュナは一騎で、大軍を破った。彼らは諸方に逃走した。それが十分な証拠である。(二七) その腕力、精力、威光、敏速さ、手練、嘆かないこと、沈着さ。これらはアルジュナ以外には認められない。(二八)』

サンジャヤは続けた。

「クリシュナはアルジュナを歓喜させつつ、以上のように言った。天空で季節に雨を降らせるインドラが雷鳴を響かせるように。(二九) クリシュナの言葉を聞くと、白馬にひかれるアルジュナは、身の毛がよだつ偉大な言葉を述べた。(三〇)」

(第五十八章)

ドゥルヨーダナ、父を説得する

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

智慧の眼を持つ(盲目の)王は、サンジャヤの言葉を聞くと、得失に関してその言葉を吟味し始めた。(一) 賢明な彼は、得失を詳細に計算した。息子たちの勝利を望み、事実に基づいて適切に。(二) 彼我の強弱を正しく決定し、知性ある王は能力を計算し始めた。(三) パーンダヴァが神的人的な能力と威光をそなえ、クル族が能力の点で劣ることを〔知り〕、彼はドゥル

ヨーダナに言った。(四)

「ドゥルヨーダナよ、私のこの心配は永遠に鎮まることはない。このことは現に真実であると思う。推量からそう思うのではない。(五) すべての生類は子供たちに対して最高の愛情を注ぐ。そして力の限り彼らに好ましいこと、有益なことをする。(六) まったく同様に、大概の場合、善き人々は恩人に対して大きな恩返しをするということが認められる。(七) このクルとパーンダヴァの非常に恐ろしい対戦において、アグニ(火神)はカーンダヴァの森でアルジュナに恩を受けたことを思い出して、彼の助力をするであろう。(八) ダルマ神などの神々は、〔息子たちに対する〕愛情にほだされて、パーンダヴァたちのもとにこぞって参集するであろう。(九) ビーシュマやドローナやクリパなどの危険から彼らを守ろうとして、神々は雷電のような怒りにかられると私は考える。(一〇) 武器に通達した強力な人中の虎パーンダヴァたちが神々と組んだら、人間は彼らを見ることさえできない。(一一)

アルジュナは耐えがたい最高の神弓ガーンディーヴァを持ち、ヴァルナ(水天)から授かった無尽の矢に満ちた二つの神的な箙(えびら)を有する。(一二) その神聖な猿の旗標は、妨げられることなく、煙のようにたなびく。その戦車は輝きの点で四辺に至るまで、それに等しいものはない。(一三) その大雲のような轟きが人々に聞かれる。その音は雷電のようで、敵たちを恐れさせる。(一四) すべての人々は、彼は力にかけて超人的であると考える。王たちは、彼が戦場において神々にすら勝利すると知っている。(一五) 一瞬のうちに、彼が五百本の矢をばらまくかのように放ち、遠くまで飛ばすのが認められる。(一六) ビーシュマ、ドローナ、ク

リパ、ドローナの息子、マドラの国王シャリヤ、中間の人々は、戦闘の準備をしたアルジュナについて言う。——非常に超人的な王たちも、その敵を制する戦士の虎をうち破ることができないと。(一七―一八) 彼は一度の早業で五百本の矢を放つことができ、腕力にかけてカールタヴィーリヤに等しい。(一九) 私はその偉大な射手アルジュナが、大インドラとウペーンドラ(クリシュナ)に守られ、激戦において我々を殺しているのを見る。(二〇)

バーラタよ、私は昼夜、以上のように考えて、クル族の平和を気づかい、眠れず、幸せを見出せないのだ。(二一) クル族の大帰滅が近づいている。この紛争の終結は、和平以外にはない。(二二) 息子よ、私はパーンダヴァとの和平を望んでいる。戦争は厭だ。私はいつも、クル族よりもパーンダヴァたちがより強力であると考えている。(二三)」(第五十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

非常に短気なドゥルヨーダナは、父のこの言葉を聞くと、激しく怒って、再び次のように言った。(一)

「あなたは神々に助けられたパーンダヴァたちがうち破られないと考えているが、その恐れを捨てなさい。最高の王よ。(二) 欲望と怨みに結びつかず、敵意と貪り(を離れ)(原文疑問)、諸々の感情を無視することにより、神々は神の位に達した。(三) ドゥヴァイパーヤナ・ヴィヤーサ、大苦行者ナーラダ、パラシュラーマは、かつてこのように我々に語った。(四) 神々

は、人間のように、決して欲望や貪り(妄迷)により、同情や怨みにより行動することはない。バラタの雄牛よ。(五) もしアグニ(神火)やヴァーユ(神風)やダルマ神やインドラやアシュヴィン双神が欲望と結びついて行動したとすれば、パーンダヴァたちは不幸になることはないであろうが。(六) それ故、あなたは決してそのように心配する必要はない。バーラタよ。神々はいつも神に関することにのみ関わるから。(七) もし欲望と結びつくことにより、怨みと貪りが(異本による)神々にあるとすれば、神々の権威は失墜するであろう。(八) 全世界をすっかり取り囲んで燃やそうとする火神は、私に呪いをかけられると鎮まる(異本による)。(九)

神々は最高の威光をそなえている。しかし私の威光は神々のそれよりも更に優れている。バーラタよ、そのことを知りなさい。(一〇) 大地や山々の峰が裂けても、世の人々の見ている前で、私は呪いをかけてそれらを確固たるものにするであろう。(一一) 有情無情、動不動の諸物を滅ぼそうとする、非常に恐ろしい、大音響をたてる岩石の雨や強風が生じても、私は絶えず生類を憐れみ、世の人々が見ている前で、私はいつもそれを鎮めることができる。(一二―一三) 戦車や歩兵などは、私が硬結させた水上を行くことができる(ドゥルヨーダナは水を硬結させる術を用いる)。私のみが神や阿修羅たちに関することに従事することができる。(一四) 私が何かの仕事で軍団とともにどこかの国々に行く場合も、どこでも私が望むところで、水が私のために働いてくれる。(一五) 王よ、私の領土には蛇などの危険はない。私の力により、危険なものが眠った生類に危害を加えることはない。(一六) 王よ、私の領土に住む人々のために、雲(または、雨神)は望むだけの雨を降らせる。臣民たちはすべて法(ダルマ)を守り、私の領土に災害はない。(一七) アシ

ユヴィン双神、ヴァーユ、アグニ、マルト神群、インドラ、ダルマ神は、私に憎まれた者たちを守ることはできない。(一八)というのは、もし神々がその力により私の敵たちを救うことができるなら、パーンダヴァたちは十三年間も苦しむ必要がなかったであろう。(一九)神々、ガンダルヴァ、阿修羅、羅刹は、私に憎まれた者たちを救うことはできない。私はこの真実をあなたに告げる。(二〇)もしいつでも私が友や敵について、善悪のことを望んだら、いまだかつてそれらが実現しなかったことはない。(二一)敵を悩ます者よ、私がこうなるだろうと言ったことは、いまだかつてその通りにならなかったことはない。それ故、私は真実を語る者と知られている。(二二)諸方面において有名な私の偉大性は、世の人々が証言するところである。王よ、私はあなたを力づけるためにこのように言った。自慢するために言ったのではない。(二三)王よ、私はかつて決して自慢したことがない。自慢することは悪しき行為であるから。(二四)パーンダヴァ、マツヤ、パーンチャーラ、ケーカヤ、サーティヤキ、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)が私に滅ぼされたと聞くことであろう。(二五)川は海に到達するとすべて解消する。それと同様に、彼らは私に達して、従者もろとも滅亡するであろう。(二六)私にはより優れた知性、威光、精力、学術がある。私のヨーガ(術策、または魔術)は彼らよりも優れている。(二七)祖父(ビーシュマ)、ドローナ、クリパ、シャリヤ、シャラなど、武器に通じた人々がすべて私のもとにいる。(二八)」

ドゥルヨーダナはこのように言った。〔ドリタラーシトラは〕戦いを望み、時が来たと考え、更にサンジャヤになすべきことをたずねた。(二九)　(第六十章)

ヴィドゥラの助言

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンダヴァたちについて熱心にたずねるドリタラーシトラを無視して、カルナはクル族の集会において、ドゥルヨーダナに次のように言って彼を喜ばせた。(一)

「かつて私が嘘をついて(パラシュ)ラーマからブラフマ・アストラ(梵天の武器)という武器を奪った時、彼はそれを知って私にこう言った。『お前が死ぬ時、それはお前に現われ出ないであろう』と。(二)大罪を犯したのに、私はその大仙の師からそれほどひどく呪われなかった(異本に基づく)。というのは、その激しい威光を持つ大仙は、海もろとも大地を燃やすこともできたのに。(三)私は彼に仕えることにより、そして自分の雄々しさにより、彼の心を満足させた。そこでその武器はまだ私に残っている。それ故、私は十分に能力がある。この重荷は私が担う。(四)その聖仙の恩寵により、私は一瞬のうちにパーンチャーラ、カルーシャ、マツヤを得て、パーンダヴァとその息子や孫たちを殺し、武器により征服して諸世界を獲得するであろう。(五)祖父(ビーシュマ)やドローナやすべての主立った王たちは、あなたのそばにとどまるがよい。私は軍の主力とともに進軍して、パーンダヴァたちを殺すであろう。この重荷は私が担う。(六)」

ビーシュマはこのように告げているカルナに言った。

「カーラ（破壊神）にとりつかれて分別を失った者よ、お前はどうして大口をたたくのか。カルナよ、お前は知らないのか。主力が殺されれば、ドリタラーシトラの息子たちも死ぬということを。(七) クリシュナをともなってアルジュナがカーンダヴァの森を焼いた時の行為を聞いただけで、お前とその縁者たちは自制すべきである。(八) 偉大な神である大インドラがお前に与えた槍も、クリシュナによりその円盤で破壊され、灰燼に帰し、砕けて落ちるのが見られるであろう。(九) 蛇の口の形をしたお前の矢は輝き、念入りに上等の花輪で敬意を表されているが、それはアルジュナの矢の群で撃たれ、カルナよ、お前とともに滅びるであろう。(一〇) カルナよ、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）がアルジュナを守る。彼は激戦において、お前と同等の、あるいはより優れた敵たちを殺すであろう。(一一)」

　カルナは言った。

「確かにヴリシュニ族の長（クリシュナ）は、あなたの言われた通り、あるいはそれよりも更に偉大である。しかし私は少し乱暴に言われた。祖父はその結果を聞くべきである。(一二) 戦闘において、私は決して武器を置くことはない（激しく戦う）。祖父は（王宮の）集会場において私を見るであろう。あなたが平安でいる時、すべての地上の王たちは、私の力を見るであろう。(一三)」

　ヴァイシャンパーヤナは語った。——

　その偉大な弓取り（カルナ）はこのように言って、集会場を出て、自分の家に帰った。しかし

ビーシュマは笑って、クル族の人々の中で、ドゥルヨーダナに告げた。(一四)

「あの御者（スータ）の息子（カルナ）は約束に忠実というが、どうして彼がそのように重荷に耐えることができよう。相手の布陣に対抗して布陣し、多くの頭を断ち切る、ビーマセーナによる世界の滅亡を見よ。(一五)（彼は言った。）『アヴァンティとカリンガの人々、ジャヤドラタ、ヴェーディドゥヴァジャ（おそらくユーパドゥヴァジャ。ブーリシュラヴァスのこと）、バーフリーカがいる所で、私は常に幾千幾万という戦士を殺すであろう』と。(一六) 非の打ち所のない尊い（パラシュ）ラーマの前で、カルナは自分はバラモンだと称して武器を修得した。まさにその時、その最低のカルナの法（ダルマ）と功徳（タパス）が消滅した。(一七)」

　ビーシュマがそのように述べ、カルナが武器を収めて去った時、暗愚なドゥルヨーダナはビーシュマに告げた。(一八)

（第六十一章）

　ドゥルヨーダナは言った。

「パーンダヴァたちはすべて、人間として（我々と）同じように生まれた（原文疑問）。どうして彼らが勝利すると一方的に考えているのか。(一) 我々はすべて同等の生まれだ。すべて人間の胎から生まれた。祖父（ビーシュマ）よ、どうしてパーンダヴァたちに勝利が帰すると考えるのか。(二) 私はあなたやドローナやクリパやバーフリーカやその他の王たちを当てにして進軍しようとは思わない。(三) 私とカルナと私の弟のドゥフシャーサナとで、戦場で五名のパー

ンダヴァを鋭い矢により殺すであろう。（四）それから王よ、多くの謝礼をともなう祭祀により、牛馬や財物により、バラモンたちを満足させるであろう。（五）」
　ヴィドゥラは言った。
「わが子よ、ある猟師が鳥を捕るために地面に罠を仕掛けたと古人が語ったのを聞いた。（六）共に生活している（異本による）二羽の鳥がその罠にかかった。二羽の鳥はその罠を持って逃げ去った。（七）その時、猟師は空に飛び上がった二羽を見ても失望することなく、二羽の行く後を追ってあちこち走りまわった。（八）猟師が鳥を求めて走りまわっていた時、勤行を終えた、隠棲所に住む一人の聖者が彼を見た。（九）聖者は、二羽の鳥を追って地上を走りまわっている彼に、次のような詩節により質問した。（一〇）
『猟師よ、私には不思議で驚くべきことに見える。あなたは徒歩で、空を飛ぶ二羽の鳥を追っているのだから。（一一）』
　猟師は言った。
『この二羽の鳥は協力すれば私の罠を奪うが、喧嘩をすれば私の支配下に帰すであろう。（一二）』
　ヴィドゥラは続けた。
「その二羽の鳥は、死神にとりつかれ、喧嘩を始めた。非常に愚かな彼らは争って、地面に落ちた。（一三）その二羽は死神の輪縄に支配され、激しく戦った。猟師は気づかれないように近づいて、彼らを捕えた。（一四）

　以上のように、親族が利益を求めて、相互に争えば、二羽の鳥のように、争いにより敵の支配下に帰する。（一五）共に食べ、共に語り、共にたずね、団結する。これらが親族のなすべきことである。決して争ってはいけない。（一六）みなが気持よく長老たちに仕える時、彼らは獅子に守られた森のように難攻不落になる。（一七）莫大な財産を得ても、卑しい者のように行動する人々は、敵たちに富貴を引き渡す。バラタの雄牛よ。（一八）親族は松明のようだ。離れていると煙り、いっしょになると燃え上がる。バラタの雄牛、ドリタラーシトラよ。（一九）
　私が山で見た別のことを話そう。クルの王よ、それを聞いてから、よりよいと思うようにしなさい。（二〇）我々はキラータ（山岳民）たちと北方の山を進んで行った。呪術や薬草学や解毒を知る、神のようなバラモンたちもいっしょだった。（二一）ガンダマーダナ山はすべて一面に〔蔓でおおわれ〕茂みのようであった。薬草の群が輝いていた。シッダやガンダルヴァ（いずれも半神）たちが住んでいた。（二二）我々一同はそこに、蜜蜂からとれたものでない黄色い蜜を見た。それは瓶にいっぱいあり、険阻な断崖絶壁に置かれていた。（二三）そして猛毒の蛇により守られていた。クベーラ神が非常にこの蜜を愛好している。それを食べると人間は不死になるのである。（二四）盲人は視力を取りもどし、老人は若者になる。薬草に通じたバラモンたちは以上のように説く。（二五）
　王よ、キラータたちはそれを見て取ろうと望み、その蛇のいる険阻な山の洞窟で死んだ。（二六）

これと同様に、あなたのこの息子は大地を一人占めしようと望む。彼は迷妄から蜜を見るが断崖を見ないのである。（二七）ドゥルヨーダナは戦場でアルジュナと戦うつもりだが、彼の威光や勇武がそれほどあるとは思われない。（二八）彼は戦車に乗り、一騎で地上を征服する。その勇士はあなたに会うことを待ちつつ耐えている。（二九）ドルパダとマツヤ国王と怒ったアルジュナは、風にあおられた火のように、戦場で一人残らず殺すであろう。（三〇）ドリタラーシトラよ、ユディシティラを膝にのせよ。戦闘において両者が戦えば、勝利は不確実であるから。（三一）」

（第六十二章）

ドリタラーシトラは言った。

「ドゥルヨーダナよ、お前に私が告げることをわかってくれ。息子よ。道を知らない旅人のように、お前は誤った道を正しい道と考えている。（一）お前が滅ぼそうとしている偉大なパーンドゥの五王子たちの威光は、五元素のそれのように強力である。（二）ユディシティラは最高に法（ダルマ）を守る男である。お前は死ぬまで彼の力を知らない。（三）力にかけてビーマセーナに等しい男はいない。戦いにおいて死神のようなそのビーマに対抗しようとお前は企てている。樹木が大風に逆らうように。（四）メール山が山々のうちで最上であるように、アルジュナは一切の武器を持つ者たちの最上者である。もし知性があるなら、一体誰が戦場において彼と戦うであろうか。（五）ドリシタデュムナは、インドラが雷電を放つように、敵中に矢を放って、何人（なんぴと）を殺さないだろうか。（六）アンダカ・ヴリシュニ族において敬われる無敵のサーティヤキも、パーンダヴァの幸せに専念し、お前の軍隊を破壊するであろう。（七）クリシュナは、その力量に関し、三界を凌駕している。もし知性があるなら、一体誰がそのクリシュナと戦うであろうか。（八）実に、彼の一方の側には、妻たち、親族と縁者、自身（アートマン）、大地があり、一方にはアルジュナがいる。（九）自制し無敵のクリシュナは、パーンダヴァがいるところにいる。そして大地によっても支えられない彼の軍隊は、クリシュナのいるところにいる。（一〇）わが子よ、お前の利益を説く善き友たちの言に従え。祖父である老ビーシュマの言葉を受け入れよ。（一一）クル族の利益を説いている私の言うところに従え。ドローナ、クリパ、ヴィカルナ、バーフリーカ大王も私と同様の意見であると思いなさい。バーラタよ、これらすべては法（ダルマ）を知り、私と同じようにお前を愛している。（一二―一三）

ヴィラータの都で、お前の軍は弟たちとともに牛たちを放って、非常に恐れ、粉砕された。（一四）そしてその都で、非常に驚くべきことが聞かれた。一騎が大軍に匹敵するという。それが証拠である。（一五）アルジュナ一人があのような仕事をした。いわんや彼らすべてがそろったらなおさらである。そこで彼らを兄弟として認めよ。生活の道を与えよ。（一六）」

（第六十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

大知者のドリタラーシトラは、ドゥルヨーダナにこのように告げてから、その栄光ある王

は再びサンジャヤにたずねた。(一)

「サンジャヤよ、残りを話してくれ。ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の後で、アルジュナはそなたに何と言ったか。私は最高に興味がある。(二)」

サンジャヤは言った。

「クリシュナの言葉を聞いてから、クンティーの息子である無敵のダナンジャヤ（アルジュナ）は、クリシュナが聞いている前で、適切な時に次のように言った。(三)

『ビーシュマ、ドリタラーシトラ、ドローナ、クリパ、カルナ、バーフリーカ大王、ドローナの息子、ソーマダッタ、シャクニ、ドゥフシャーサナ、シャラ、プルミトラ、ヴィヴィンシャティ、ヴィカルナ、チトラセーナ、ジャヤトセーナ王、アヴァンティ国王であるヴィンダとアヌヴィンダ、ドゥルムカ、無敵のシンドゥ国王、ブーリシュラヴァス、バガダッタ王、ジャラサンダ王、そしてクル族のためにそこに戦うべく集結した諸王。サンジャヤよ、彼らはドゥルヨーダナに招集されたが、燃え上がるパーンダヴァの火の中でまさに死なんとしている。(四―八) 私の言葉として、集結した彼らに、適切に息災か否かたずねて挨拶してくれ。サンジャヤよ、王たちの中で、最低の悪党であるスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）に告げるべきである。(九) 短気で愚かな王子、邪悪で貪欲なドリタラーシトラの息子と、その顧問たちに、私のすべての言葉を残らず聞かせるべきである。サンジャヤよ。(一〇)』

アルジュナはこのように言って私をとどまらせ、それから、端が赤い切れ長の眼をした賢明な彼は、クリシュナを見て、実利（アルタ）と法（ダルマ）にかなう言葉を述べた。(一一)

『あなたは偉大なマドゥの英雄（クリシュナ）が告げた適切な言葉を聞いた。同様にあなたは、私の言葉を集結した王たちにすべて伝えなさい。(一二)――

矢の火が煙り、戦車の車輪が（呪句を）響かせる大戦争において、武器と軍隊を滅ぼす弓という杓（しゃく）によって護摩（ホーマ）を行なわないように、集まって注意深く努力せよ。(一三)

敵を滅ぼすユディシティラが自分の取り分であると望む土地を彼に引き渡さないなら、私が鋭い矢により、お前たちを馬・歩兵・象もろとも、祖霊の住処に送ってやる。(一四)』

それからすぐに、私は四本の腕を持つハリ（クリシュナ）とアルジュナに別れを告げて敬礼し、その偉大な言葉をあなたのもとに届けるために、急いでここに帰って来た。神のように輝く王よ。(一五)」

（第六十四章）

クリシュナの本性

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドゥルヨーダナがその言葉を歓迎せず、みなが黙っていた時、王たちは立ち上がった。(一) 地上におけるすべての王が立ち上がった時、ドリタラーシトラ王は密かにサンジャヤにたずね始めた。(二) 息子に支配されている彼は、彼らの勝利を望み、自分と、他の人々と、パーンダヴァたちについて確実なところをたずねたのである。(三)

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、わが軍の現有の勢力の強さと弱さについて述べよ。そなたはパーンダヴァたちについて、すべて完全に知っている。彼らの優れている点は何か。彼らの劣っている点は何か。(四)すべてを見通すそなたは彼我の力を知っている。そなたは法と実利に通じ、真実を確定することを知っている。サンジャヤよ、私に問われたらすべてを告げてくれ。戦えばどちらの側が滅びるか。(五)」

サンジャヤは言った。

「王よ、私は人のいない所で何もあなたに話したくない。というのは、あなたは私を恨むであろうから。誓戒を堅持する父上(ヴィヤーサ)と王妃ガーンダーリーをお呼びしなさい。アージャミーダ(ドリタラーシトラ)よ。(六)その二人は法を知り、聡明で、真実を確定することを知っている。その二人の前で、私はクリシュナとアルジュナの考えをすべてあなたに話すでしょう。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、サンジャヤと息子の考えを知って、大知者クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ(ヴィヤーサ)はそこに来て言った。(八)

「サンジャヤよ、ドリタラーシトラはたずねている。彼の問いに対し、すべてを答えよ。クリシュナとアルジュナについて、知ることをすべてありのままに語れ。(九)」(第六十五章)

サンジャヤは言った。

「アルジュナとクリシュナは最高に尊敬される弓取りであるが、彼らの意志により、一切を帰滅させるために、等しく他の場所に生まれた。(一)賢明なクリシュナの円盤は、状況に応じて、空中に昇り、幻力により飛行する。(二)それはパーンダヴァたちには隠されているが、彼らに非常に評価されている。私は彼らの力の強さと弱さを知って、かいつまんで説くから聞きなさい。(三)

クリシュナは戯れるかのように、恐ろしい外観のナラカ、シャンバラ、カンサ、チェーディ国王を征服した。(四)この特別に偉大で強力な最高の人(プルショーッタマ)は、地・空・天を、思念するだけで自己の支配下に置く。(五)王よ、パーンダヴァたちについて、その力の強さと弱さを知りたいと、あなたは何度もたずねた。私はそれを話すから聞きなさい(この詩節は不適切な場所に入っている)。(六)

一方に全世界を置き、他方にクリシュナを置けば、重さの点でクリシュナは全世界よりも優れている。(七)クリシュナは思念するだけで全世界を灰にするであろう。しかし全世界はクリシュナを灰にすることはできない。(八)真実、法、廉恥、廉直があるところにクリシュナがある。クリシュナのいるところに勝利がある。(九)万物の本体である最高の人クリシュナは、戯れるかのように地・空・天を動かす。(一〇)彼はパーンダヴァたちを口実にして、世界を迷わせるかのように、非法にふける愚かなあなたの息子たちを燃やそうと望んでいる。(一一)尊いクリシュナは時間の車輪、世界の車輪、宇宙紀の車輪を、自己のヨーガにより絶

えずまわしている。（二二）ただバガヴァット（尊い神、クリシュナ）のみが、時間と死と動不動の諸物を支配する。私はこの真実をあなたに告げる。（二三）偉大なヨーギンであるハリ（クリシュナ）は全世界の主であるが、無力な耕作者のように諸行為をしようと企てる。（二四）それ故、クリシュナはマーヤー・ヨーガ（精神的原理を物質的原理に結びつけ、現象世界を発動させること）により全世界を欺く。しかし、彼にのみ帰依する人々は迷わない（『バガヴァッド・ギーター』七・一四、一五及び一八・六一参照）。（二五）

（第六十六章）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、どうしてそなたはクリシュナが全世界の偉大な主(マヘーシュヴァラ)であると知ったか。どうして私は彼について知らないのか。それを私に告げてくれ。（一）」

サンジャヤは言った。

「王よ、聞きなさい。あなたには明知がない。私の明知は欠けることがない。あなたは明知を欠き、闇(タマス)におおわれて、クリシュナを認識できない。（二）友よ、私は明知によりクリシュナを知っている。創造者であるが創造されない（初めから存在した）、万物が発生し帰滅するところのものである神を。（三）」

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、あなたが常にクリシュナに対して抱いている信愛(バクティ)とは何か。それによりあなたがクリシュナを真に知るところの。（四）」

サンジャヤは言った。

「私は幻影(マーヤー)に執着しない。あなたに幸あれ。私は徒(いたず)らに法(ダルマ)を実行しない。信愛により私は清浄な心になり、教典(シャーストラ)によりクリシュナを知る。（五）」

ドリタラーシトラは言った。

「ドゥルヨーダナよ、クリシュナに帰依せよ。我々はサンジャヤを信頼する。クリシュナに庇護を求めよ。（六）」

ドゥルヨーダナは言った。

「デーヴァキーの息子であるバガヴァット（クリシュナ）が、アルジュナとの友情を説きながら世界を滅ぼすなら、私はクリシュナのもとに行かないであろう。（七）」

ドリタラーシトラは言った。

「ガーンダーリーよ、非常に愚かなお前の息子は下方（地獄）へ行く。嫉妬深く、邪悪で、高慢で、優れた人々の言葉に背く男は。（八）」

ガーンダーリーは言った。

「権力を望む者よ、邪悪な者よ、長老たちの命令に背く者よ。愚か者よ、権力と生命を捨て、父と私を捨て、敵の喜びを増し、私の悲しみを増し、お前はビーマセーナに殺される時、父の言葉を思い出すであろう。（九―一〇）」

ヴィヤーサは言った。

「ドリタラーシトラ王よ、お前はクリシュナに愛されている。私の言うことを聞きなさい。

サンジャヤはお前の使者として彼のもとに行ったが、お前を幸福に導くであろう。(二一) 彼は古(いにしえ)のクリシュナと新しいクリシュナについて知っている。もしお前が専心して聞けば、彼はお前を大なる危険から救うであろう。(二二) ドリタラーシトラよ、人々は怒りと喜悦(欲)の闇におおわれている。彼らは多様な罠に束縛されているが、自分の財産に満足しない。(二三) 彼らは欲望に迷い、自己の行為により繰り返しヤマ(閻魔)の支配下に帰す。盲人が盲人の導き手に導かれているように。(二四) 賢者たちが行く道はこの一路(ブラフマンへの道)である。人はそれを見て、死を超越する。偉大な者はそこ(生死)に執着しない。(二五)」

ドリタラーシトラは言った。

「さあ、サンジャヤよ、何の恐れもない道を私に告げてくれ。その道を行けば、クリシュナに達し、最高の寂静に達することができるような……。(二六)」

サンジャヤは言った。

「自己を制していない者は、自己を制したクリシュナを決して知ることができない。感官の制御以外に自己を制する方法はない(テクスト疑問)。(二七) 興奮する諸感官の欲望を不放逸により捨てること。不放逸と不殺生とは、疑いもなく、知識の源泉である。(二八) 王よ、倦むことなく諸感官の制御に努力せよ。あなたの知性が失われることのないように。いたるところで知性(根源的思惟機能)を制御せよ。(二九) バラモンたちは、感官を制御することが不動の知識であると知っている。これが知識であり、賢者たちの進む道である。(三〇) 王よ、人は感官を制御しないでクリシュナに達することはない。自制した人は、聖典に通達し、ヨーガにより真理に

おいて静寂に至る。(三一)」

(第六十七章)／(第六十八章、第六十九章略)

(54) クリシュナの使節（第七十章―第百三十七章）

クリシュナ、使節になる

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

サンジャヤが帰った時、ダルマ王ユディシティラは、全サートヴァタ（ヴリシュニ）の雄牛クリシュナに告げた。（一）

「クリシュナよ、我々の友たちにとって時節が到来した。窮迫時において、あなた以外には我々を救うことができる人はいない。（二）というのはクリシュナよ、あなたに依存して、我々は恐れなく、迷妄により驕ったドゥルヨーダナとその顧問に対し自分の取り分を要求することができる。（三）敵を制する者よ、あらゆる窮迫時においてあなたがヴリシュニ族を守るように、あなたはパーンダヴァたちを守って下さい。我々を大なる危険から守って下さい。（四）」

バガヴァット（クリシュナ）は言った。

「勇士よ、私はここにいる。あなたの言いたいことを言いなさい。バーラタよ、あなたが言うことをすべて実行するであろう。（五）」

ユディシティラは言った。

「ドリタラーシトラとその息子たちが意図していることをあなたは聞いた。クリシュナよ、サンジャヤが私に言ったことは、すべてドリタラーシトラの意見である。サンジャヤは彼の心が顕（あらわ）になったものである。使節は言われた通りに述べる。別様に述べれば死に値する。（六―七）あの王は王国を返さないで我々と講和することを望んでいる。心の乱れた者の悪しき心に従って行動する貪欲な彼は。（八）ドリタラーシトラの命令により、我々は十二年間森で生活し、更に一年、隠れて生活した。（九）あの我々との約定をドリタラーシトラが守ると考えたからだ。主よ。我々は約定を破らなかった。クリシュナよ、そのことは我々のバラモンたちが知っている。（一〇）ところが老王ドリタラーシトラは自己の法（ダルマ）を見ない。もし見るとしても、息子を溺愛し、愚かな息子の指令に従う。（一一）クリシュナよ、あの王はスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）の考えに従い、貪欲で自分に好ましいことを求め、我々に対して不誠実にふるまう。（一二）クリシュナよ、これほど苦しいことがあろうか。母上の世話をできないとは。そして友たちの……。（一三）クリシュナよ、カーシ、チェーディ、パーンチャーラ、マツヤと、守護者であるあなたとともに、私は五つの村を要求した。（一四）すなわち、クシャスタラ、ヴリカスタラ、マーサンディー、ヴァーラナーヴァタ、その他もう一村である。（一五）『父よ、五つの村か都市を下さい。我々がいっしょに住めるような。我々のバラタ族が滅びることのないように。（一六）』

しかし邪悪なドゥルヨーダナは、所有権は自分にあると考え、それらさえも認めることはなかった。これほど苦しいことがあろうか。（一七）良家に生まれ育った者が、他者の財産に対して欲を出せば、貪欲が知性を滅ぼす。知性が滅びたら廉恥心を滅ぼす。（一八）廉恥が滅びたら法を滅ぼす。法が滅びたら繁栄を滅ぼす。繁栄が滅びたら人間を滅ぼす。人間にとっ

て貧乏は死である。(一九) 友よ、親族も友も祭官も、貧乏人から逃げ去る。鳥たちが花や実のない樹から去るように。(二〇) 友よ、そしてこのことも死である。我々が倒れたかのように、親族が我々から逃げ去ることは。気息が死体から離れるように。(二一) シャンバラは言った。『今日も明日も食物を見出さないということほど悪い状態は何もない』と。(二二) 財産は最高の法(ダルマ)であると言われる。財産においてすべてが確立する。この世では、財産を持つ人々は生き、財産のない人々は死んでいる。(二三) もし人々が自分の力に依存して、ある人から財産を奪えば、彼らは法と実利(アルタ)と享楽(カーマ)と、その人自身を滅ぼす。(二四) ある人々は、そのような状態に達したら死を選ぶ。ある人々は村に、ある人々は森に行き、またある人々は破滅に向かう。(二五) ある人々は狂人になり、他の人々は敵の力に帰する。ある人々は他者の奴隷になる。以上は財産が原因である。(二六) 人間にとって富貴を失うことは、死よりも大きい災いである。それは法と享受との原因であるから。(二七) 自然の死は一切万物にとって永遠の世間の道である。誰もそれを乗り越えることはできない。(二八)

クリシュナよ、もともと貧乏な人は、幸せに育った人が富貴を得てからそれを失った場合ほど苦しまない。(二九) 自分の過失により大なる災いに達した人は、インドラをはじめとする神々を非難するが、決して自分を非難しない。(三〇) すべての教典はその災いを鎮めることはできない（異本による）。そこで彼は従者たちに怒り、友たちを恨む。(三一) 怒りが彼に入り込み、彼は更に迷う。彼は迷妄に支配され、残酷な行為にふける。(三二) 悪行にふけり、彼は種姓の混合を助長する（原文疑問）。種姓の混合は地獄をもたらす。それは悪行の極致である。

(三三) クリシュナよ、もし彼が目覚めなければ、彼は地獄へ行く。智慧のみが彼の覚醒〔をもたらす〕。智慧の眼を持つ者は滅びることはない。(三四) 智慧を得れば人は専ら諸教典を考慮する。常に教典に専念すれば、彼は法(ダルマ)を考慮する。彼にとって廉恥が最高の要素である。(三五) というのは、廉恥ある人は悪を憎む。彼の繁栄は増大する。彼が繁栄を有する限り、彼は人間である。(三六) 彼は常に法に専念し、心は寂静で、常に仕事に専心し、非法(アダルマ)に心を向けず、悪行に従事しない。(三七) 破廉恥漢や迷える者は女でも男でもない。彼は法とは無縁であり、まるでシュードラ（四姓の最下位）のようである。(三八) しかるに廉恥ある人は、神々と祖霊と自分自身を満足させる。それにより人は不死に至る。これが善行の極致である。(三九)

クリシュナよ、あなたはこのことを私において目のあたりに見た。私が王位から堕ちてこのように生活して来た次第を。(四〇) そこで我々は、いかなる道理によっても繁栄（王権）を捨てることはできない。もし我々が努力して、死ぬとしても、それはかまわない。(四一)

クリシュナよ、我々にとって最善の選択は、我々と彼らが講和を結び、協力して、繁栄を享受することである。(四二) 我々がクル族を殺してその国土を統治するという場合は、恐ろしい行為により滅亡が生ずるという最悪の状態となる。(四三) クリシュナよ、敵が関係なく卑しい者たちでも、殺されるべきではない。いわんやあのような者たちの場合は。(四四) というのは、彼らは大部分我々の親族であり、友であり、師たちである。彼らを殺すことは最悪のことである。戦いにいかなる善があるか。(四五)

しかしこの悪は王族(クシャトリヤ)の法である。そして我々は王族である。これは非法かも知れぬが、

我々の本務（スヴァダルマ）である。他の生活法は非難される。（四六）シュードラは仕える。ヴァイシャは商業で生活する。我々は〔敵を〕殺すことにより生活する。バラモンたちは鉢（はち）を選ぶ。（四七）王族は王族を殺す。魚は魚を食べて生活する。犬は犬を殺す。クリシュナよ、見よ、法というものは様々だ。（四八）クリシュナよ、戦争においては常に闘争（カリ）が存する。戦場においては多くの生命が滅びる。政略を力として私は戦う（異本による）。勝敗は時の運だが。（四九）生死は生類の自由意志にはよらない。その時にならなければ、苦も楽も得られない。ヤドゥ族の最上者よ。（五〇）一人が大勢を殺すこともある。大勢が一人を殺すこともある。臆病者が勇士を殺す。誉れなき者が誉れ高い者を殺す。（五一）勝利はいずれの側にもある。敗北もいずれの側にもある。衰退も同様に双方に見られる。逃走すれば、滅亡と損失がある。（五二）あらゆる場合、戦争は悪である。相手を殺せば、どうして報復されないであろうか。クリシュナよ、殺された者には勝利も敗北も同じである。（五三）敗北は死と異なるとは私は思わない。クリシュナ、勝利した者も必ず滅びる。（五四）結局のところ、誰か他の人々が彼の愛しい者を殺す。クリシュナよ、ああ、息子や兄弟を見出さない力の劣る者にとって、あらゆる場合、人生に対する嫌悪が生ずる。（五五）戦いにおいて、廉恥あり、高貴で、慈悲を知る勇士たちが殺される。劣った人々は逃れる。（五六）クリシュナよ、敵たちを殺せば、常に後悔する。そこには悪い結果が残る。残る者は必ず残る。（五七）残った者は力を得て、相手を残らず滅ぼそうとする。対立を終わらせようと企て、全滅させようと努力する。（五八）勝利は敵意を生じさせる。敗れた者は苦しんで過ごす。寂静の人は勝敗を離れて安楽に眠る。

（五九）敵意を抱いた人は不安な心で、常に苦しんで眠る。蛇のいる家におけるように。（六〇）もし彼がすべてを破壊すれば、彼は名声を失う。彼は一切の生類における永遠の悪名に達する。（六一）敵意というものは長い時間が経っても鎮まることはない。一族に一人の男が生まれれば、〔彼に過去を〕語る人々がいる。（六二）クリシュナよ、敵意は敵意によって、鎮まることはない。それは火がバターによって強まるように一層増大する。（六三）一方の欠陥が決定的にならなければ（テクスト疑問）、平和はありえない。相手の隙をつこうと望む間は、この罪悪は絶え間なく続く。（六四）実に雄々しさ（武勇）は心を苦しめる強力な病気である。それを捨てることにより、あるいは心の休息により平和が訪れる。（六五）クリシュナよ、敵を根絶することにより大なる成果があるなら、それは非常に残酷なことであろう。（六六）

しかし、〔王国を〕捨てることによって平和があっても、それなしでは殺されたも同じだ。敵が疑ってこちらを根こぎにするから。（六七）我々は〔王国を〕捨てることも、一族の滅亡も望まない。むしろ恭順による平和がよい。（六八）あらゆる場合、非戦を望んで努力している人々は、懐柔が拒絶された時に戦うべきとされ、〔そうでなければ〕勇武を示すべきではない。（六九）懐柔が失敗した場合、恐ろしい結果となる。賢者たちは、それは犬どもの集まり（異本による）に似ているとする。（七〇）尾を振る。吠える。吠え返す。動きまわる。歯をむく。叫ぶ、それから戦いが始まる。（七一）強い方が勝ち、肉を食べる。クリシュナよ、人間の場合も同じで、まったく異なることはない。（七二）常により強い者は弱者に対して同じことをする。無視、対立。弱者は服従する。（七三）父、王、長老は、あらゆる場合、尊敬に値する。

それ故クリシュナよ、ドリタラーシトラは尊敬されるべきである。(七四) しかしクリシュナよ、ドリタラーシトラの、息子に対する愛情は強い。彼は息子に支配されているから、我々の恭順を拒絶するであろう。(七五)

クリシュナよ、このさし迫った時においてどのように考えるか。どうしたら実利（アルタ）と法（ダルマ）にもとらないですむか。(七六) クリシュナよ、この困難な状況において、あなた以外の誰にたずねることができるか。最高の人よ。(七七) あなたは親友で、我々の幸せを望み、一切の行為の帰趨を知っている。クリシュナよ、我々にとって、すべての結論を知るあなたのような友は他にいない。(七八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そのように告げられて、クリシュナはダルマ王に答えた。

「あなた方、双方のために、私はクル族の集会に行くであろう。(七九) 王よ、あなたの利益を損なわずに私がそこで和平を結ぶことができたら、私には非常に大きな功徳があろう。私の行為は大きな果報を有することになろう。(八〇) 私は怒ったクルとスリンジャヤ（パーンチャーラ）を死神の罠から解放しよう。パーンダヴァとドリタラーシトラの息子たちとこのすべての大地を解放しよう。(八一)」

ユディシティラは言った。

「クリシュナよ、あなたがクル族のもとに行くことに、私は賛成しない。あなたの言葉が見

事に説かれても、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）はそれを実行しないであろう。(八二) スヨーダナの支配下にある地上の王族がそこに集まっている。クリシュナよ、あなたが彼らの中に行くことはよくないと思う。(八三) 財物も神たることも我々を喜ばせない。どうして幸福が我々を喜ばせるか。すべての神々の主権も我々を喜ばせない。あなたが捕えられたら……。クリシュナよ。(八四)」

バガヴァット（クリシュナ）は言った。

「大王よ、ドゥルヨーダナの邪悪なことはよく知っている。しかし〔そこに行けば〕我らは全世界の王たちに非難されないであろう。(八五) それに、集まったすべての王は私に匹敵しない。怒った獅子の面前に他の獣たちが立つようなものだ。(八六) もし彼らが私に何か不適切なことをするなら、私はすべてのクルを焼くであろう。私はそう決意した。(八七) ユディシティラよ、私がそこに行くことは決して無駄にはならない。もしかすると目的を達成することもあるかも知れない。少なくとも非難されることは免れる。(八八)」

ユディシティラは言った。

「クリシュナよ、もしそうされたいなら、クル族のもとに行かれるがよい。御機嫌よう。あなたが目的を果たし、御無事で帰られるのを見るでしょう。(八九) クリシュナよ、クル族のもとに行き、彼らを鎮めなさい。すべてのバラタ族が幸せに仲よく暮らせるように。(九〇) あなたは兄弟であり友である。アルジュナと私にとって愛しい。友情の点では疑う余地はない。御機嫌よう。我々の繁栄のために行かれよ。(九一) あなたは我らと敵を知っている。

実利と言葉を知っている。クリシュナよ、我々のためになるようなことをすべてスヨーダナに告げるべきである。(九二)クリシュナよ、法をそなえた有益な言葉があれば、それをすべて述べるべきである。懐柔の言葉にせよ、その反対にせよ。(九三)』

(第七十章)

バガヴァット(クリシュナ)は言った。

「私はサンジャヤとあなたの言葉を聞いた。私は彼らの意図とあなたの意図を知っている。(一)あなたの知性は法に依存する。彼らの考えは敵意に依存する。戦わずして得られるものは、あなたにとって高く評価されるであろう。(二)王よ、王族が乞食を行なうということは、王族にとって窮極の仕事ではないと、すべての住期に属する人々が述べる。(三)王族にとって、戦場で勝利するか死ぬかが、配置者(創造者)に定められた本務である。憐れみは称讃されない。(四)憐れみによって生活することはできない。ユディシティラよ。勇士よ、勇武を発揮せよ。敵を制する者よ、敵を殺せ。(五)非常に貪欲なドリタラーシトラの息子たちは、長時間〔諸王と〕共に暮らしたので、友を作り、力をつけている。敵を悩ます者よ。(六)

王よ、彼らがあなたを平等に扱う可能性はない。彼らはビーシュマ、ドローナ、クリパなどにより強力であると考えているから。(七)王よ、あなたが彼らに対して柔和にふるまえば、彼らはあなたの王国を奪うであろう。敵を成敗する者よ。(八)ドリタラーシトラの息子が、

同情や憐れみから、また法と実利によって、あなたの望みをかなえることはあり得ない。敵を制する者よ。(九)パーンダヴァたちよ、あなたを下帯だけにするというひどいことをして、彼らは後悔しなかったということも、〔和平できない〕理由である。(一〇)祖父(ビーシュマ)、ドローナ、賢明なヴィドゥラなど、すべてのクルの長たちが実際に見ている前で、王よ、いつも布施し、柔和で、自制し、法を望み、誓戒を守るあなたを、あの悪党はいかさま賭博により騙し、しかもその残酷な行為を恥じないのである。(一一―一二)王よ、あのような性行の者に期待してはいけない。すべての人々にとって、彼らは殺されるべきである。いわんやあなたにとっては、なおさらである。バーラタよ。(一三)彼は弟たちとともに、あなたと弟たちを不適切な言葉で傷つけた。彼は自惚れ、喜び、次のように言った。(一四)

『今やパーンダヴァたちにとって、この世で自分のものは何もない。彼らの名前と族姓も残っていない。(一五)長い時間が経って、彼らは滅亡するであろう。本性を失った者たちは自然に帰するであろう。(一六)』

このような、そしてその他の乱暴な言葉を発して、あなたが森へ行く時、親族の間で自慢した。(一七)そこに集まっていた人々は、罪のないあなたを見て、涙で喉をつまらせて泣きながら集会場に座っていた。(一八)王たちとバラモンたちは、彼の行為を喜ばなかった。集会場にいる人々はすべてドゥルヨーダナを非難した。(一九)敵を滅ぼす者よ、良家の生まれの人にとって非難されることは死である。むしろ死は大なる美徳であるが、邪に生きて非難されることは悪徳である。(二〇)大王よ、地上のすべての王の間で非難された時、その恥知

らずは殺されたのだ。（二一）このようにふるまう者を殺すには苦労はいらない。根が切られた樹木が支柱で支えられているようなものだ。（二二）すべての人々にとって、卑しい邪悪な彼は、蛇のように殺されるべきである。敵を滅ぼす王よ、彼を殺せ。ためらってはならぬ。（二三）しかしあなたが父（ドリタラーシトラ、実は伯父）やビーシュマに恭順すべきだということは、あなたにふさわしいことで、私にも好ましいことだ。非の打ち所のない人よ。（二四）

ところで私は、出かけて行って、すべての人々の疑惑を断つであろう。王よ、人々にはドゥルヨーダナに対する二重の気持がある。（二五）そこで私は、諸王の中で、あなたの人間的な美質と彼の罪悪を語ろう。（二六）私の語る法(ダルマ)と実利(アルタ)にかなった有益な言葉を聞いて、様々な地方の主であるすべての王たちは、『彼は徳性あり真実を語る』とあなたについて考えるであろう。そして『彼は貪欲により行動する』と彼について考えるであろう。（二七―二八）そして、老若を問わず、市民と地方民、四姓の集まりの前で、私は非難しよう。（二九）あなたは和平を要請すれば、法にもとるということにはならない（異本による）。諸王はクル族とドリタラーシトラを非難するであろう。（三〇）王よ、ドゥルヨーダナが世人に捨てられた時、すなわち彼が殺された〔も同然の〕時、他に何かなされるべき仕事が残っているであろうか。（三一）

私はすべてのクル族のもとに出かけて行き、あなたの利益を損なうことなく、和平を結ぶことに努力しよう。そして彼らの行動を観察しよう。（三二）行って、クル族が戦争に向かう動きをしているのを知ったら、あなたの勝利のために引き返すであろう。バーラタよ。

（三三）いずれにせよ、敵と戦うことになると私は思う。私には、ありとあらゆる前兆が顕(あらわ)になっている。（三四）鳥獣が恐ろしく叫ぶ。夜の始めに主要な象や馬に恐ろしい形状が現われる。そして火が、恐ろしい多くの色を帯びる。人間界を滅ぼす恐ろしい死神(アンタカ)がやって来たのでなければ〔こうはならない〕。（三五）王よ、あなたのすべての戦士が、武器、矢、鎧、戦車、象、旗を用意し、努力し、象や馬や戦車の上で準備しているように。戦争に必要なものをすべて完備せよ。（三六）王よ、ドゥルヨーダナは生きている限り、決してあなたに王国を渡すことはない。以前はあなたのものであったが、賭博で奪われたあの繁栄した王国を。（三七）」

（第七十一章）

ビーマを試すクリシュナ

ビーマセーナは言った。

「クリシュナよ、クル族と講和するように話すべきである。戦争により、彼らを脅かすべきではない。（一）だがドゥルヨーダナは短気で、常に怒り、他者の幸せを妬み、高慢である。荒々しく話しかけるべきでない。優しく接すべきである。（二）彼は本性よりして邪悪で、悪魔(ダスユ)に等しい心を持ち、権力に酔い痴れ、パーンダヴァたちに敵対している。（三）先の見通しがなく、残酷に語り、人を非難し、無慈悲に勇猛で、執念深く、導きがたく、邪悪で、詐術を好む。（四）殺されても裂かれても自分の考えを捨てない。クリシュナよ、このような男

と講和することは最高に難しいと私は思う。(五) 彼は親しい人々に対しても邪(よこしま)で、法(ダルマ)にもとり、虚偽を好む。そして親しい人々の言葉と心を裏切る。(六) 彼は怒りに支配され、悪しき本性に従い、本性よりして悪を追求し、草で打たれた（異本「隠された」）蛇のようである。(七) ドゥルヨーダナがいかなる軍隊を有するか、あなたは知っている。いかなる本性、いかなる力、いかなる勇武を有するか、あなたは知っている。(八) かつてはクル族とその息子たちは満足し、また我々は、親族とともに、インドラの弟たちのようであった。(九) クリシュナよ、だがドゥルヨーダナの怒りにより、バラタ族は燃やされるであろう。寒季の終わりに森が火に焼かれるように。(一〇)

クリシュナよ、親族と友人と縁者たちを根絶した十八名の王が知られている。(一一) 法が転換する（滅びる）時期が来た時、威光によって燃えるかのような繁栄する阿修羅の王バリが生まれた。(一二) ハイハヤの王ウダーヴァルタ、ニーパの王ジャナメージャヤ、ターラジャンガの王バフラ、クリミの猛々しい王ヴァス、(一三) スヴィーラの王アジャビンドゥ、スラーシトラの王クシャルッディカ、バリーハの王アルカジャ、チーナの王ダウタムーラカ、(一四) ヴィデーハの王ハヤグリーヴァ、マハウジャスの王ヴァラプラ、スンダラヴェーガの王バーフ、ディープタークシャの王プルーラヴァス、(一五) チェーディ・マツヤの王サハジャ、プラチェータスの王ブリハドバラ、インドラ・ヴァッツァの王ダーラナ、ムクタの王ヴイガーハナ、(一六) ナンディヴェーガの王シャマ。以上のような、一族を汚す最低の人々が宇宙紀(ユガ)の終わりに生まれた。(一七)

今やこの一族を燃やす炭である最低の悪人のドゥルヨーダナは、宇宙紀の終わりに、カーラ（破壊神）に起用されて、クル族の滅亡をもたらすであろう。(一八) それ故、彼に対し、優しく穏やかに、ほとんど彼の望みにそうようにして、法(ダルマ)と実利(アルタ)にかなったことを言うべきである。(一九) クリシュナよ、我々はみな、ドゥルヨーダナに対し、へりくだり、恭しく従ってもよい。バラタ族が滅びないように。(二〇) クリシュナよ、我々はクル族に対して中立者の行動をとってもよい。災禍がクル族にふりかからないように。(二一) クリシュナよ、長老である祖父（ビーシュマ）やその他の会衆に告げてくれ。兄弟たちに兄弟愛があらんことを。ドゥルヨーダナが鎮められるように。(二二) 私は以上のように申し上げる。王も賛成する。アルジュナも戦争を望まない。彼には憐愍の情があるから。(二三)」

（第七十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

勇士クリシュナは、このビーマとしては前例のない柔軟な言葉を聞いて笑った。(一) 山が軽く、火が冷たくなったようなことだと思ったのである。クリシュナは憐れみに満ちて座っているビーマに、言葉で鼓舞するかのように告げた。風が火を鼓舞するように。(二―三)

「ビーマセーナよ、あなたは他の時には、戦いのみを好んでいる。殺戮を好む残酷なドリタラーシトラの息子たちを粉砕したいと望んでいる。(四) 敵を悩ます者よ、あなたは眠らない。

うつ伏せに休むが目覚めている。あなたはいつも、恐ろしく、荒々しい大声で話す。（五）火の色をした自分の怒りによって熱せられた息を吐き、煙を出す火のように心を騒がせている。ビーマよ。（六）あなたは一隅で、重荷に苦しむ弱虫のようにうめき声を出して寝る。よく知らない人々は、あなたのことを狂人のように思うだろう。（七）あなたは餌を食べている象のように、樹木を根こぎにし、足で大地を踏みつけ、うなりながら走りまわる。ビーマよ。（八）あなたはこの人々に喜びを感じない。むしろ密かに生活する。パーンダヴァよ。夜も昼も、他人を決して歓迎しない。（九）あなたは突然笑い、嘆くかのように密かに座す。眼を閉じて、両膝に頭をのせて長らく座っている。（一〇）またあなたは眉をひそめ、繰り返し唇を舐めている。ビーマよ、すべては怒りのせいだ。（一一）

『太陽が光を放って東に見え、北極星をまわって西に没するように、私は真実を告げる。それが違うことはない。おお、私は短気なドゥルヨーダナを棍棒で攻撃して殺すであろう。（一二―一三）』

あなたは兄弟たちの中で、このように誓って棍棒に触れた。このようなあなたが、今、講和を考えるとは。敵を悩ます者よ。（一四）ああ、戦いの時が近づいた時、戦いを望む人々の意が逆になるとは（異本による）。ビーマよ、恐怖にかられたのか。（一五）あるいはビーマよ、あなたは不吉な前兆を見たのか。眠っている時、あるいは目覚めている時に。それで講和を望むのか。（一六）あるいは不能者のように、自分のうちに何ら男らしい点を望めないのか。あるいは失意に襲われ、それで意が変わったのか。（一七）あなたの心臓はふるえる。あなたの気

は沈み込む。腿は麻痺する。それで講和を望むのか。（一八）ビーマよ、人間の心は動いたり止まったり不動である。シャールマリ樹の〔種の入った〕鞘のように激しい風に揺れる。（一九）

このような考え（講和しようという意見）はあなたにはふさわしくない。牝牛にとって人間の言葉がふさわしくないように。それはパーンドゥの息子たちの心を、舟のないもののように沈める。（二〇）ビーマセーナよ、そのような不釣合な言葉を述べるとは、私には大きな驚きだ。山が歩き出したかのようだ。（二一）

ビーマよ、自分の業績や良家の生まれであることを考えて、立ち上がれ。嘆いてはいけない。勇士よ、しっかりせよ。（二二）敵を制する者よ、しょげるのはあなたにふさわしくない。王族は力で得られないものを享受しない。（二三）」　（第七十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナにこのように言われて、その短気で常に怒るビーマは、すぐさま、駿馬のように駆けまわって告げた。（一）

「クリシュナよ、あなたは私の意図を取り違えている。私は戦いにおいてこの上なく幸せであり、約束を堅く守る。（二）クリシュナよ、あなたは私と長い間いっしょに住んでいたから、私の真実を知っているはずだ。あるいは、私のことを知らない。舟なくして湖を漂うように。

だから不適切な言葉で私を攻撃するのだ。(三) クリシュナよ、私、ビーマセーナのことを知っている誰が、あなたのように私に不適切なことを言うことができるか。(四) そこでクリシュナよ、他に比類のない自分の雄々しさと力とについて、次の言葉を述べよう。(五)
自分で自分を讃えるのは、あらゆる場合、貴人のすることではない。しかしあなたの非難で刺激されたから、自分の力について語ろう。(六) クリシュナよ、見よ。そこにこれらの生類が住んでいる、この天地を。それらは、不動で、無限の基底で、一切の母である。(七) もしこれらの天地が怒って、突然二つの岩のように衝突するなら、私は動不動の諸物もろとも、それらを両腕で制止するであろう。(八) 大きな鉄棒のような両腕の間を見よ。ここに入ってから逃げられる人を見たことがない。(九) ヒマーラヤと海とインドラ自身の三者がそろっても、私が力ずくでつかんだ者を助けることができない。(一〇) 私はパーンダヴァに危害を加えようとするすべての王族と戦うことができる。私は足の裏で彼らを地面に踏みにじることができる。(一一) クリシュナよ、あなたは私の勇武を知らないことはない。私が諸王をうち破り、支配下に置いた次第を。(一二) あるいは、もしあなたが昇る太陽の光のような私のことを知らないならば、恐るべき激戦において私のことを知るだろう。クリシュナよ。(一三) どうして乱暴な言葉で侮辱するのか。針で傷を刺すように。罪のない者よ。私の知る限りを申し上げた。しかし私はそれ以上であると知れ。(一四) 激しい戦いが起こり、殺戮の日において、あなたは象兵や戦車兵や騎兵が私に駆逐されるのを見るであろう。(一五) そしてあなたとその他の人々は、私が怒って王族の雄牛たちを殺し、最高の者たちを次々と滅ぼしている

るのを見るであろう。(一六) 私の髄は滅びてはいない。私の心はふるえてはいない。私は全世界の人々が怒っても恐れない。(一七) しかし、クリシュナよ、憐れみから私は敵に情けをかけているのだ。私はすべての苦難に耐えるであろう。我々のためにバラタ族が滅亡しないように。(一八)」（第七十四章）

バガヴァット（クリシュナ）は言った。
「私はあなたの気持を知りたいと思い、愛情からあのように言ったのだ。非難して、あるいは賢（さか）しらから、または怒りから、または何かの意図で言ったのではない。(一) 私はあなたの偉大性や力や業績を知っている。私があなたを軽蔑するはずはない。(二) パーンダヴァよ、あなたが自分にあると思っている美点の千倍もの美点があなたにあると私は思っている。(三) ビーマよ、あなたはすべての王に敬われるような一族に生まれた。縁者や友人たちにより、あなたはその一族にふさわしい。(四)
ビーマよ、不確実な法（ダルマ）について知ろうと望む人々は、運命と人間の努力との交代を決定することができない。(五) 人間の目的を成就する原因であったものが、彼の滅亡の原因になる。人間の行為というものは不確実である。(六) 欠点を見る賢者たちによってこのようであると見られたものが別様に転換する。激風が向きを変えるように。(七) 人間の行為は、いくらよく計画され、よく行なわれ、適正に遂行されても、運命により逆しまになる。(八) 寒暑、

雨、飢えと渇きというような、人がなしたのでない天災も、運命により人的努力により除去されることもある。(一九) 更に、心の決定(けつじょう)した人が自らなした行為は、運命により妨げられることがない。そこには吉相が存する。(二〇) パーンダヴァよ、世の人々は行為しないでは生活できない。このように知って行動すべきである。いずれにしても(運命によっても、人的努力によっても)果報があるであろう。(二一) このように知性を決定し、諸行為に従事すれば、失敗しても苦しまず、成功しても喜ばない。(二二)

ビーマセーナよ、私の言いたいことはこれだけのことだ。クル族との戦争において、必ず成功すると考えるべきではない。(二三) もし逆境にあっても、光を失ってはならぬ(異本による)。嘆いたり失望してはならぬ。このことをあなたに告げる。(二四)

パーンダヴァよ、私は明日、ドリタラーシトラのもとに行き、あなた方の利益を損なわないようにして和平工作に努力しよう。(二五) もし彼らが講和をすれば、私の名声は不滅になる。あなた方の望みはかない、彼らも最高の幸せを得る。(二六) もしクル族が固執して、私の言を受け入れないなら、戦争と恐ろしい所行があるであろう。(二七) ビーマセーナよ、その戦いにおいては、あなたに重荷が置かれる。くびきはアルジュナに担われるであろう。他の人々は運ばれるべきである。(二八) 戦いがあれば、私はアルジュナの御者になるであろう。これが彼の望みなのだ。私は戦いを望まぬから。(二九) それ故、ビーマよ、私はあなたの考えがわからなかったので、『不能者』という言葉により(異本による)あなたの威光を燃え上がらせたのだ。(三〇)」

(第七十五章)

クル族のもとへ出発するクリシュナ

アルジュナは言った。

「クリシュナよ、言うべきことはすでにユディシティラが言った。しかし敵を苦しめる者よ、あなたの話を聞いて、私にはこう思われる。(一) 主よ、あなたは講和が容易ではないと考えている。ドリタラーシトラが貪欲であるから。また、我々の現在の惨めな状況からして。(二) そしてあなたは、人間の努力は成果をあげないと考える。そして諸行為をすることなしに人間の努力によって果報が生ずることもないとも。(三) あなたが言った言葉はその通りであるともないとも思える。しかし、いかなるものも達成されないと見られるべきでない。(四) そしてあなたは、この災禍が我々を滅ぼすと考える(異本による)。そして彼らは、果報を生み出すことのできない人々がするような行為をしている。(五) 主よ、正しく行なわれれば行為は果報をもたらすだろう。そこでクリシュナよ、敵たちとともに守られるように行動してくれ。(六) あなたはパーンダヴァたちとクル族との最上の友である。造物主(プラジャーパティ)が神々と阿修羅たちの友であるように。勇士よ。(七) クル族とパーンダヴァとの安寧をもたらしてくれ。我々のためになることを行なうのは、あなたにとって難しくはないと思う。(八) もしそうなら、クリシュナよ、あなたのなすべきことをして下さい。ただ行くだけで、あなたは疑いもなくその仕事をするであろう。(九) 勇士よ、もしあの悪党と取り引きしたいと望むなら、す

べてあなたの意図の通りにして下さい。(二〇) 彼らと講和するか（異本による）そうでないか、あなたの意図がいずれにせよ、クリシュナよ、揺れ動くあなたの望みが我々にとっては大切である。(二一) あの邪悪な男と息子と縁者たちは死に値しないか。彼はダルマの息子（ユディシティラ）の富貴を見て、それを許容できなかった。(二二) そしてクリシュナよ、法（ダルマ）にかなった方法を見出せないで、いかさま賭博師（シャクニ）を用い、酷薄な方法によってそれを奪った。(二三) 王族（クシャトリヤ）に生まれた弓取りである男が、どうして挑戦されたら辞退できるであろうか。たとい命を捨てることになろうとも。(二四) 我らが非法によりうち負かされ、森に行ったのを見て、クリシュナよ、あのスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は私に殺されるべきものとなった。(二五)

クリシュナよ、あなたが友のためにやろうと望んでいることは不思議ではない。しかし、主としてどのように行動するか。穏やかにやるか、そうでないか。(二六) あるいは、彼らをすぐに殺す方がよいと思われるなら、すぐにそうしなさい。躊躇することはない。(二七) というのは、集会場の中であの悪党がドラウパディーを苦しめ、しかも彼が許容されたということを知っているから。(二八) クリシュナよ、そのような彼がパーンダヴァに対して正しく処するとは私には思えない。塩分のある土地にまかれた種のように。(二九) それ故、パーンダヴァにとって適切で有益だと思われること、我々のためにすぐにやるべきことを速やかにやって下さい、クリシュナよ。(三〇)」

（第七十六章）

バガヴァット（クリシュナ）は言った。

「パーンダヴァの勇士よ、あなたが言う通りだ。しかしアルジュナよ、このすべては二つの行為に依存している。(一) 田地が湿り、清浄で、耕作者に整えられても、雨なしでは決して実をもたらすことはないだろう。クンティーの息子よ。(二) この場合、人間の努力は、苦労して作られた灌漑のように有効であると言う人々もいるだろう。しかしその場合も、必ずや運命のもたらす（天災の）旱魃（かんばつ）がある。(三) 偉大な先人たちはその知性によりこのことを結論した。世界の事柄は天的な原因（運命）と人的な原因に結びついていると。(四) 私は人的努力によりベストを尽くすであろう。しかし天的な（運命の）行為はどうしても克服することはできない。(五)

あの悪党は、法（ダルマ）と真実を捨てて行動するが、そのような行為によって苦しむことはない。(六) そして彼の顧問であるシャクニとカルナと弟のドゥフシャーサナは、彼の最悪の考えを助長している。(七) スヨーダナは王国を譲渡することにより講和することを承認しないであろう。従者とともに殺されることがなければ。(八) ダルマ王（ユディシティラ）は、恭順により王国を捨てることを望まない。しかしあの悪党は要求されても引き渡さないだろう。(九) ユディシティラの勅令を彼に言うべきであると私は思わない。ダルマ王に言われた意図を……。バーラタよ。(一〇) 邪悪なクルの王子はそのすべてを行なわないだろう。それが行なわれなければ、彼はすべての人々に殺されるに値するであろう。(一一) 私にも世人にも殺されるべきだ。彼は幼少の頃、あなた方すべてを苦しめたから。(一二) あの残酷な悪党はあ

なたの王国を奪った。その悪人は、ユディシティラの富貴を見て、平静でいられなかったのだ。(二三) アルジュナよ、彼は何度も私をあなたから離間させようとした。しかし私は彼の悪いもくろみを受け入れなかった。(二四) 勇士よ、あなたも彼の悪い了見を知っている。私がダルマ王によかれと望んでいることも知っている。(二五) 彼の心と私の最も好意的な考えを知りながら、知らないかのように、アルジュナよ、今どうして急に疑惑を抱くのか。(二六) そしてまた、あなたは運命に定められた最高に神的な秘密を知っている。アルジュナよ、どうして他者による守護があろうか。(二七) パーンダヴァよ、言葉と行為とによりできることがあれば、私はそれをやろう。しかし敵と講和することは望まない。(二八) 一年前に彼らが牛を奪った時、ビーシュマに要請されたにもかかわらず、彼はそのような守護を望んで何かを告げるであろうか(原文疑問)。(二九) あなたが意図する時、彼らはすでにうち負かされた。スヨーダナは、王国を部分的に、一瞬の間だけ所有することに満足しない。(三〇) しかし、いずれにせよ、私はダルマ王の命令を実行すべきである。再びあの悪党の悪行について考えるべきである。(三一)」(以上、難解というより、テクストに混乱があるようである)(第七十七章)/(第七十八章—第八十章略)

アルジュナは言った。

「今やあなたはすべてのクル族(パーンダヴァも含む)の最上の友である。あなたは常に両陣営の親友である。(二) パーンダヴァとドリタラーシトラの息子たちの安寧が確立されるべきである。クリシュナよ、あなたはこれらを講和させる能力がある。(二) 蓮の眼をした人よ、あなたはここから短気なスヨーダナ(ドゥルヨーダナ)のもとに行き、和平のために言うべきことを彼に言うべきである。敵を殺す者よ。(三) あなたは彼を祝福し、健康についてたずね、法(ダルマ)と実利(アルタ)にかなったことを告げる。もしあの愚か者がその有益な言葉を受け入れなければ、彼は運命の支配下に赴くであろう。(四)」

バガヴァット(クリシュナ)は言った。

「私は法にかない、我々に有益なこと、クル族の安寧を望んで、ドリタラーシトラ王のもとに行くであろう。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、闇が去り汚れない太陽が昇った時、そしてミトラ神の刻限に、太陽が柔らかな輝きになった時、カウムダの月(カールッティカ月、十月—十一月)、レーヴァティー星宿のもと、秋が終わって冬が来る頃、作物が豊かに実る心地よい時期に、勇気ある者たちの最上者(クリシュナ)は支度をした。(六—七) 彼は喜んだバラモンたちの、神聖な響きの吉祥な祝福の言葉を聞いた。インドラが聖仙たちの讃歌を聞くように。(八) クリシュナは朝の儀礼を行なってから沐浴し、清浄になり、飾られ、太陽と火を崇拝した。(九) 彼は雄牛の背中に触れ、バラモンたちにおじぎをし、火を右まわりにまわり、吉祥の品を眼の前に見た。(一〇) それからクリシュナはパーンダヴァ(ユディシティラ)の言葉を思い出し、座っているシニの孫、サーティヤキに話しかけた。

（二一）

「法螺と円盤と棍棒を戦車に乗せなさい。箙(えびら)と槍とすべての武器も。（二二）というのは、ドゥルヨーダナとカルナとシャクニは邪悪である。強力な者は、平凡な敵といえども侮るべきでない。（二三）」

円盤と棍棒を持つクリシュナの望みを知るや、従者たちは戦車に馬をつなぐために走りまわった。（二四）その戦車は、終末の火のように輝き、空中を飛行するかのように進行し、月と太陽のように輝く両輪によって飾られていた。（二五）それは半月、満月、魚、鳥獣の模様や、種々の花や、宝玉や宝物でいたるところ飾られていた。（二六）それは朝日のようで、大きく、魅力的な外観であった。その車体は宝玉や黄金で燦然と輝き、美しい旗や幢(のぼり)を立てていた。（二七）それは美しく装備され、無敵であり、虎皮におおわれている。敵たちの名声を砕き、ヤドゥ族の喜びを増大させるものである。（二八）彼らはその戦車に、沐浴して、すべての具足をそなえた、サイニヤ、スグリーヴァ、メーガプシュパ、バラーハカという馬をつないだ。（二九）その美しい音を響かせる戦車は、鳥の王（ガルダ）の旗が立ち、クリシュナの偉大さを更に増大させた。（二〇）（二一—二八略）

このように、栄光ある大仙の群や聖者たちに敬意を表されて、クリシュナはクル族の住処に向けて出発した。（二九）出発する彼を送って、ユディシティラ、ビーマセーナ、アルジュナ、双子たちがついて行った。（三〇）（三一—三二略）栄光あるユディシティラは、しばらくクリシュナの後について行ったが、諸王の中でクリシュナに話しかけた。（三三）クリシュナは欲望や恐怖や貪欲や利欲のために不正を犯すことなく、確固たる知性をそなえ、何かを切望することがない。（三四）法(ダルマ)を知り、平静で、一切の生類に関する叡知をそなえている。万物の主であり、神の中の神であり、威光に満ちている。（三五）その、一切の美質をそなえ、シュリーヴァッツァ（牛）の印をそなえたクリシュナに対し、ユディシティラは抱きしめてから話し始めた。（三六）

「幼少の頃から我々を育ててくれたあの女性（クンティー）は、いつも断食と苦行を行ない、常に吉祥の儀式に専念している。（三七）彼女は神と客人の供養と、師(グル)（上目）に仕えることに専念する。息子を愛する優しい母であり、我々に愛されている。（三八）彼女はスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）の危険から我々を救ってくれた。舟が海から〔人を〕救い上げるように、大なる死の危険から我々を引き上げて。（三九）彼女は苦労にふさわしくないのに、我々のためにいつも苦労している。その母上に、息災かどうかたずねて欲しい。（四〇）息子への嘆きにかきくれている彼女を、しっかりと慰めて欲しい。おじぎをしてから、パーンダヴァたちのことを告げながら、抱きしめて欲しい。（四一）結婚して以来、彼女はそれにふさわしくないのに、義理の親たちから苦しみや侮辱を受け、苦労して来た。（四二）

クリシュナよ、この苦しみが逆になる時がいつかあるだろうか。私が苦しむ母上を幸せにできるような。（四三）我々が亡命した時、哀れな彼女は息子たちを切望して後を追いかけて来た。しかし我々は泣いている彼女を置いて、森へ行った。（四四）クリシュナよ、もし彼女が生きるものなら、苦悩により死ぬことはないはずだ。息子についての悲しみに深く苦しみ

ながら、アーナルタ族に世話されて暮らしているだろう。（四五）主クリシュナよ、私の言葉により、彼女に挨拶して欲しい。クル族のドリタラーシトラや我々よりも年長の王たちにも挨拶してくれ。（四六）ビーシュマ、ドローナ、クリパ、バーフリーカ大王、ドローナの息子、ソーマダッタ、すべてのバラタ族たちを、一人一人抱きしめてくれ。（四七）クル族の顧問官ヴィドゥラは大知者で、底知れぬ知性を持ち、法を知っている。クリシュナよ、その彼を抱きしめてくれ。（四八）」

ユディシティラは諸王の中でクリシュナにこのように言って別れを告げ、クリシュナを右まわりにまわって敬意を表してから引き返した。（四九）しかしアルジュナは立ち去りつつも、人中の雄牛である友人、敵の勇士を殺す無敵のクリシュナに話しかけた。（五〇）

「主ゴーヴィンダよ、我々が以前に政策決定において決めた王国の半分を返還する件は、すべての王たちの間で知られている。（五一）もし彼が執着なく、礼儀正しく、軽蔑することなくそれを与えるなら、勇士よ、私には喜ばしいことで、彼らは大きな危険から逃れることができよう。（五二）しかしもしドゥルヨーダナが正しい方法を知らず、別様に行動するなら、私は必ずや王族を滅亡させるであろう。クリシュナよ。（五三）」

アルジュナがこのように言った時、狼腹（ビーマ）は大喜びした。そして彼は怒りにかられ、繰り返し身ぶるいした。（五四）ビーマは身ぶるいし、大声で叫んだ。彼はアルジュナの言葉を聞いて、その心は喜びにあふれていたのである。（五五）弓取りたちは彼のその叫びを聞いてふるえた。そしてすべての馬は糞尿を流した。（五六）

アルジュナはクリシュナにこのように言い、そしてその決意を告げ、彼を抱きしめてから別れを告げて引き返した。（五七）すべての王が引き返した時、クリシュナは喜び勇んで、サイニヤとスグリーヴァを御して、急いで出発した。（五八）ダールカ（御者の名）に鼓舞されたクリシュナの馬たちは、天空を呑むかのような勢いで道路を疾駆した。（五九）

その時、勇士クリシュナは途中で聖仙たちを見た。彼らはブラフマンの光輝で輝きつつ、道の両側に立っていた。（六〇）クリシュナは急いで戦車から降りて挨拶し、敬意を表しつつ、適切にそのすべての聖仙たちにたずねた。（六一）

「諸世界は恙無いですか。法はよく実践されていますか。三つの種姓はバラモンの命令に従っていますか。（六二）」

クリシュナは彼らに敬意を表してから、再び言った。

「尊師たちはどこで成就されたのか。あなた方はいかなる道をたどられたのか。（六三）ここにいかなる用事があるのか。私はあなた方に何をすればよいか。尊師たちはどんな目的で地上に来られたのか。（六四）」

ジャーマダグニヤ（パラシュラーマ）は以前からクリシュナの善友であったが、クリシュナに近づき、抱きしめて言った。（六五）

「神聖な行為の神仙たち、博識のバラモンたち、王族出身の聖仙たち、尊敬に値する苦行者たち、彼らは古の神々と阿修羅たちの〔戦いを〕目撃した。輝きに満ちたクリシュナよ。今や彼らはすべて、集まった地上の王族たちや、集会場にいる諸王や、真実であるあなたを見

たいと望んでいる。クリシュナよ、我々はこの大きな見物を見ようとしてやって来たのだ。(六六―六八) そして、クル族の諸王の中であなたが告げようとしている、法と実利にかなった言葉を聞きたいと願っている。敵を苦しめるクリシュナよ。(六九) ビーシュマ、ドローナなど、大知者ヴィドゥラ、そしてヤーダヴァの虎であるあなたが、集会場に集まるであろう。(七〇) クリシュナよ、そこであなたと彼らの神聖で真実で美しい言葉を聞きたいと我々は望んでいる。(七一) 勇士よさようなら。我々は再び会うであろう。勇士よ、恙無く行きなさい。集会場であなたに会うであろう。(七二)」(第八十一章)

主クリシュナがやって来る

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

敵の勇士を苦しめる十人の勇士たちが武器を持って、進んで行く強力なデーヴァキーの息子(クリシュナ)につき従った。(一) そして千名ずつの歩兵と騎兵、豊富な糧食、他に幾百の召使たちもいっしょだった。(二)

ジャナメージャヤはたずねた。

「偉大なクリシュナはどのように進んで行ったか。そして強力な彼が進む時、いかなる前兆があったか。(三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

偉大な彼が進む時、神的、運命的な災禍を告げるいかなる前兆があったか、私の言うことを聞きなさい。(四) 雲のない空に、稲妻をともなう雷鳴が轟いた。雲がないのに、雨神は後方でひどく雨を降らせた。(五) 東方に向かって流れる諸々の最高の大河は西方に流れた。すべての方角は逆になり、何も区別できなくなった。(六) 火は燃え上がり、大地は震動した。幾百の井戸も瓶も水をあふれ出させた。(七) その時、全世界が闇におおわれた。ほこりによって、すべての方角が区別できなくなった。(八) 空中に大きな音声が生じたが、身体はまったく認められなかった。王よ、一切の方角において、このような奇蹟のようなことが起こった。(九) 南西の風が、群なす樹を根こぎにし、荒々しく恐ろしい音をたてて、ハースティナプラを粉砕した。(一〇) バーラタよ、道中、クリシュナがいるあらゆる場所で快い風が吹いた。すべてが吉祥であった。(一一) 花の雨が降った。蓮の花がたくさんあった。道は平坦で苦労がなく、クシャ[のように鋭い草や]茨がなかった。(一二) 王よ、その強力な勇士は進んで行き、いたるところで財宝を与え、バラモンたちに心地よい接待の品で歓迎された。(一三) 女たちは道々集まって来て、一切のものの幸福に専念する偉大な彼に、森に産するよい香の花々をまき散らした。(一四)

彼は心地よいシャーリバヴァナ(森の名)を通り過ぎた。そこはすべての作物に満ち、快適で、最高に神聖であった。(一五) 彼は多くの家畜のいる、美しく心を満足させる村々を見て、都

市や種々の地方を通過した。(二六) 都の人々は、常に喜び親切で、バラタ族に守られているので敵軍におびやかされることなく、災いをまったく知らず、クリシュナを見たいと望み、こぞって道に立っていた。そして彼らはすべて、ウパプラヴィヤから来た、有名な燃える火のような主、来客として訪れた敬うべき彼を歓迎した。(二七―一九)

敵の勇士を殺すクリシュナは、光線を放射する汚れなき太陽が赤くなる時、ヴリカスタラに着いた。(二〇) 彼は速やかに戦車から降り、作法通りに浄めの式を行ない、戦車から馬を放つよう指示し、黄昏（サンディヤー）を念想した。(二一) ダールカ（御者の名）は馬たちを車から放ち、〔馬の〕論書に基づいて世話をし、その防具をすっかり解いた。そして彼らを放って自由にした。(二二) このようなことをすべて終えてから、クリシュナは言った。

「ユディシティラのための仕事を行なうために、ここで夜を過ごそう。(二三)」

人々は彼の考えを受けて宿舎を作った。そしてすぐに、すばらしい飲食物を提供した。(二四) 王よ、その村に住む主要なバラモンたちで、気高く、家柄がよく、廉恥心あり、梵的な（神聖な）生活に従っている者たちは、敵を制する偉大なクリシュナに近づいて、祝福と吉祥の言葉とともに、適切に供養をした。(二五―二六) 彼らは全世界で尊敬されているクリシュナを供養してから、その偉大な男に、宝物に満ちた家をさし出した。(二七) 彼らに対し、主は「もう十分です」と言って、それぞれにふさわしく敬意を表し、彼らの家に行ってから、再び彼らとともに宿舎にもどった。(二八) そこでクリシュナは、バラモンたちにおいしい食事を食べさせた。そして食事をしてから、彼ら一同とともにその夜を快適に過ごした。(二九)

（第八十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

使いの者たちからクリシュナが来ることを知って、ドリタラーシトラは強力なビーシュマに敬意を表して言った。(一) 更に、ドローナ、サンジャヤ、大知者ヴィドゥラ、ドゥルヨーダナとその顧問たちに、〔喜びで〕総毛立って次のように言った。(二)

「クルの子孫よ、私は非常に驚くべき奇蹟を聞いた。女たち、子供たち、老人たちが家々で話している。(三) ある者たちは恭しく話している。またある者たちは集まって話している。四辻において、また集会場において、種々のことが語られている。(四) 勇猛なクリシュナが、パーンダヴァのためにやって来るという。クリシュナはあらゆる場合、我々にとって尊敬されるべきであり供養されるべきである。(五) というのは、彼において世の営みがある。彼は万物の主である。彼クリシュナにおいて、堅固さと叡知と力が存する。(六) その最高の人は尊敬されるべきである。というのは、彼は永遠の法（ダルマ）である。彼は尊敬されれば幸福をもたらす。尊敬されなければ不幸をもたらす。(七) その敵を制するクリシュナがもし我々の奉仕によって満足すれば、すべての王たちの間で、我々はすべての意図を残らず達成するであろう。(八)

敵を苦しめる者よ、今日中に彼をもてなす準備を整えなさい。彼の通る道に、一切の願望

をかなえる館(やかた)を建てなさい。(九) 強力なドゥルヨーダナよ、彼がお前に満足するように行動しなさい。ビーシュマよ、あなたはどう思われるか。(一〇)」

ビーシュマをはじめとする一同は、ドリタラーシトラ王に対し、その言葉に敬意を表して、「すばらしい」と言った。(一一) その時ドゥルヨーダナ王は、彼らが同意したことを知って、心地よい館の用地を指示し始めた。(一二) それから人々は、方々の心地よい土地に、少しずつ、すべての宝物に満ちた多くの館を作った。(一三) 種々の美質をそなえたきらびやかな座席、女たち、お香と装飾品、繊細な衣服、上等の飲食物、種々の食品、よい香りの花輪。王は以上のものを贈った。(一四―一五) 特にヴリカスタラの村においては、クル族の王は宿舎として、多くの宝物に満ちた魅力的な館を建てた。(一六)

ドゥルヨーダナ王は神々にふさわしい人知を超えたすべての準備を整えてから、ドリタラーシトラに報告した。(一七) しかしクリシュナは、これらのすべての館と種々の宝を無視して、クル族の住処に近づいて行った。(一八)

(第八十三章)

ドリタラーシトラは言った。

「ヴィドゥラよ、クリシュナはウパプラヴィヤからここに近づいている。彼はヴリカスタラに滞在している。明日ここに到着するであろう。(一) アーフカの主、すべてのサートヴァタの指導者、偉大で強力、最高のジャナールダナ。(二) 繁栄するヴリシュニの家系の主、守護者であるマーダヴァ、三界の尊い神、曾祖父。(三) ヴリシュニ・アンダカ族は満足して彼の智慧を敬う。アーディティヤ神群、ヴァス神群、ルドラ神群がブリハスパティ(神々の師)の知性を敬うように。(四) その偉大なクリシュナに私は敬意を表する。法(ダルマ)を知る者よ、私は直々にあなたに語るから聞きなさい。(五)

私は彼に十六の黄金の戦車を与えるであろう。それらには純黒の体のバーフリ(バクトリア)産の最高の四頭の馬がつながれている。(六) 私は八頭の戦闘象をクリシュナに与えよう。それらの象は常に発情し、巨大な牙を持ち、一頭ずつ八人の従者がつく。(七) 私は彼に、いまだ子を産んでいない、金色をした美しい百人の奴隷女を与えよう。同じ数の男の奴隷も与えよう。(八) 私は山に住む人々から贈られた、非常に手ざわりのよい、一万八千枚の羊皮を彼に与えよう。(九) チーナ(中国)で産する千枚の鹿皮を、クリシュナにふさわしいだけ与えよう。(一〇) この汚れなき宝石は美しい光を放って、昼も夜も輝いている。クリシュナにふさわしいその宝石を与えよう。(一一) 一日に十四由旬(ヨージャナ)を飛ぶように走る、雌騾馬(らば)にひかれた車を彼に与えよう。(一二) 私はいつも、彼の馬などや従者たちが食べる量の八倍の食料を彼に与えよう。(一三) ドゥルヨーダナを除く私のすべての息子や孫たちが、すばらしい戦車で飾られたクリシュナを出迎えるであろう。(一四) よく飾りつけた美しい千人の最高の遊女たちが徒歩で栄光あるクリシュナを出迎えに行くだろう。(一五) 美しい少女たちが、ヴェールをかぶらずに、都から出てクリシュナに会いに行くであろう。(一六) 女性と男性と子供など、都の人々が、太陽を見るように偉大なクリシュナを見つめるであろう。(一七)

すべての方角で、彼の通る道路は大きな旗と幢で飾られ、水をまかれ、ほこりを除去されるべきである（原文の一部疑問）。〔一八〕ドゥフシャーサナの家はドゥルヨーダナの家よりもよい。そこで彼の家をすぐによく掃除し飾りつけなさい。〔一九〕その家は美しい外観の楼閣によって飾られている。吉祥で心地よく、すべての季節が現出し、莫大な財物に満ちている。〔二〇〕私とドゥルヨーダナのすべての宝物がその家にある。疑いもなく、クリシュナにふさわしいものをすべて与えるべきである。〔二一〕」

（第八十四章）

ヴィドゥラは言った。

「王よ、あなたは最上者として三界の者たちに尊敬されている。そして人々に評価され敬愛されている。バーラタよ。〔一〕あなたはこのように晩年にあり、論書や論理に基づいて何を言おうとも堅固である。あなたは長老であるから。〔二〕岩石に条（すじ）（異本は「月」に弦）があるように、太陽に輝きがあるように、海に大波があるように、大王よ、あなたには法（ダルマ）があると臣民は確信している。〔三〕王よ、人々は常にあなたの美質の群により満足している。そこで縁者たちとともに、諸々の美質を守ることに常に努力せよ。〔四〕廉直であるよう努力せよ。愚かしさから多くを失ってはならぬ。王国を、息子や孫たちを、非常に親しい友たちを。〔五〕王よ、あなたが客であるクリシュナにいかに多く与えても、クリシュナはそのすべてに、その他のものにも、地上すべてにも値する。〔六〕しかしあなたは、法に基づいて、または彼によかれと望んで、クリシュナにそれを与えようと願うのではない。私は真実にかけて誓う。〔七〕これは詐術だ。虚偽だ。偽装だ。多大の謝礼を払う王よ、私は外的な行為によりあなたの隠された考えを知る。〔八〕王よ、五名のパーンダヴァはわずかに五つの村を望んでいる。しかしあなたは彼らにそれを与えようとしない。誰が講和するであろうか。〔九〕あなたは強力なクリシュナを財物でひきつけようとしている。この方策によって彼をパーンダヴァから切り離そうとしている。〔一〇〕財産や努力や非難によってはアルジュナから彼を別れさせることはできない。私はこの真実をあなたに告げる。〔一一〕私はクリシュナの偉大さを知っている。私は彼の堅い愛情を知っている。彼が生命にも等しいアルジュナを捨てるはずがないことを私は知っている。〔一二〕クリシュナは水の満ちた瓶、洗足の水以外は、また、息災かとたずねること以外は、何も望まない。〔一三〕王よ、あの尊敬に値する偉大な人物に対し、親密な接待をしなさい。クリシュナは尊敬にふさわしいから。〔一四〕クリシュナは有益なことを望んでクル族のもとに来る。彼が来る目的をかなえなさい。〔一五〕クリシュナはあなたとドゥルヨーダナと、パーンダヴァたちとの講和を望んでいる。王中の王よ、彼の言う通りにせよ。〔一六〕王よ、あなたは父親である。彼らは息子である。あなたは老年である。彼らは若い。彼らに対し父のようにふるまいなさい。彼らは息子のように行動しているから。〔一七〕」

（第八十五章）

ドゥルヨーダナは言った。

「ヴィドゥラがクリシュナについて言ったことはすべて真実だ。クリシュナはパーンダヴァたちに対しこよなく愛情を注いでいる。(一) しかし、接待のためにクリシュナに与えようと、多様な財物を決して与えるべきではない。王中の王よ。(二) 時と場合が不適切である。クリシュナがそれにふさわしくないというのではない。というのは王よ、『私を恐れて敬意を表する』とクリシュナは思うであろう。(三) 王よ、王族(クシャトリヤ)に軽蔑されるようなことを、知者はすべきではないというのが私の信念である。(四) 蓮の眼の神クリシュナは三界の者たちにこよなく尊敬されている。私はそれはよく知っている。(五) しかし彼に贈り物をすべきではない。王よ、そのようにすべきです。戦争が近づいている。非戦(好友)によっては静まらない。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼の言葉を聞いて、クル族の祖父ビーシュマは、ドゥルヨーダナ王に次のように言った。(七)

「もてなされても、もてなされなくても、クリシュナは怒らない。クリシュナは軽んじられても相手を軽んじない。(八) 勇士よ、なすべきであると彼が考えたら、何人(なんぴと)も、あらゆる手段を講じて、その通りに行なわなければならない。(九) あの勇士が言うことを、ためらうことなく実行すべきである。我々の拠り所であるクリシュナと、そしてパーンダヴァたちと、

速やかに講和せよ。(一〇) 徳性あるクリシュナは、必ずや法(ダルマ)と実利(アルタ)にかなったことを言うであろう。お前は縁者たちとともに、彼に親密な言葉を述べなさい。(一一)」

ドゥルヨーダナは言った。

「王よ、このすべての富貴をパーンダヴァたちとともに私が一生(異本による)享受するという選択肢はありません。祖父よ。(一二) 私が考え出した大仕事について聞きなさい。パーンダヴァの最後の拠り所であるクリシュナを捕えるであろう。(一三) 彼が捕えられれば、ヴリシュニ族、パーンダヴァたち、及び全地上が私の支配下に帰すであろう。彼は明朝に来るだろう。(一四) クリシュナが気づかないような方法について、また何の危険もないように、私に教えて下さい。(一五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナに関するその恐ろしい言葉を聞いて、ドリタラーシトラとその顧問たちは悩み、呆然とした。(一六) それからドリタラーシトラはドゥルヨーダナに言った。

「臣民を守る者よ、そのように言ってはならぬ。それは永遠の法ではない。(一七) クリシュナは使節であり、我々の親しい友である。彼はクル族に対して悪いことをしていない。どうして禁固に値するか。(一八)」

ビーシュマは言った。

「ドリタラーシトラよ、この非常に愚かなお前の息子は(死に)とりつかれた。彼は友人の

群に要請されても、不利益を選び利益を選ばない。(一九)邪悪な従者を持つこの悪党は、道ならぬ道に立っているが、お前は親しい人々の言葉を聞かないで彼に従おうとしている。(二〇)お前の大馬鹿者の息子は、汚れなき行為のクリシュナに近づいて、顧問たちとともに一瞬のうちに滅びるであろう。(二一)愚かにも法（ダルマ）を捨てた残酷な悪党の無益な言葉を聞くのは、どうしても我慢できない。(二二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このように告げて、老いたバラタ族の最上者は、最高に怒って立ち上がった。そして不屈の勇者であるビーシュマは、そこから立ち去った。(二三)

（第八十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

翌朝、クリシュナは起床し、すべての朝の勤めをすませた。そしてバラモンたちに別れを告げ、都に向けて出発した。(一)すべてのヴリカスタラの住民たちは、その出発する勇士に別れを告げてから引き返した。(二)ドゥルヨーダナを除くドリタラーシトラのすべての息子たちは、美しく着飾って、やって来るクリシュナを出迎えた。ビーシュマやクリパなども出迎えた。(三)そして多くの市民たちも、クリシュナを見たいと望んで彼を出迎えた。ある者たちは種々の車により、またある者たちは徒歩で。(四)クリシュナは途中で、汚れなき行動のビーシュマ、ドローナ、ドリタラーシトラの息子たちに会い、彼らに囲まれて都に行った。

(五)都はクリシュナに敬意を表するために美しく飾りつけられていた。そして大通りは多くの宝石でおおわれていた。(六)女性も老人も幼児も、誰も家の中にいなかった。みなクリシュナを見たいと望んだのである。(七)クリシュナが都に入った時、人々は大通りで、大地にひれ伏して、彼を讃えていた（異本による）。(八)美しい女たちにあふれた家々は、非常に大きいにもかかわらず、重みによって地面の上で揺れるかのように見えた。(九)そしてクリシュナの駿馬たちは、大通りで人々に囲まれた時、速度を落とした。(一〇)

敵を滅ぼす、蓮の眼をしたクリシュナは、楼閣で飾られたドリタラーシトラの白い宮殿に入った。(一一)敵を制するクリシュナは、王宮の三つの広間を過ぎて、ドリタラーシトラ王のもとに行った。(一二)クリシュナが近づいた時、智慧の眼を持つ（盲目の）誉れ高い王は、ドローナとビーシュマとともに立ち上がった。(一三)クリパ、ソーマダッタ、バーフリーカ大王もすべて、クリシュナに敬意を表して席から立ち上がった。(一四)それからクリシュナは、誉れ高いドリタラーシトラ王とビーシュマに近づき、速やかに挨拶の言葉を述べて敬意を表した。(一五)クリシュナは法（ダルマ）に従って彼らに敬意を表し、年齢の順に王たちに挨拶した。(一六)それからクリシュナは、ドローナとその息子、誉れあるバーフリーカ、クリパ、ソーマダッタに会った。(一七)そこに豪奢で快い大きな座席があった。クリシュナはドリタラーシトラの指示によりそこに座った。(一八)ドリタラーシトラの司祭たちは、牛と接客用の品と水を、規定に従って与えた。(一九)クリシュナはもてなされ、すべてのクルの人々に冗談を言い、クルの人々に取り巻かれ、色々と親縁者の話をしながら座った。(二〇)

それから誉れ高い敵を制する勇士は、ドリタラーシトラに敬意を表され、もてなされてから、王に別れを告げて退出した。(二一) クリシュナはクルの集会場においてクル族の人々と作法に従って会ってから、心地よいヴィドゥラの邸宅に向かった。(二二) ヴィドゥラはありとあらゆる祝福の言葉でクリシュナを出迎え、すべての願いをかなえようと奉仕し、彼に敬意を表した。(二三) 一切の法(ダルマ)を知るヴィドゥラは、クリシュナをもてなしてから、パーンドゥの息子たちの健康についてたずねた。(二四) ヴィドゥラは親密な友人で、博識であり、常に法を守り、過失を離れて、賢明である。最高の知者、一切を直接に見るクリシュナは、そのヴィドゥラに、パーンダヴァたちのすべての行動を詳細に語った。(二五―二六)

(第八十七章)

クリシュナ、クンティーに会う

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

敵を制するクリシュナはヴィドゥラに会ってから、午後、父の妹(プリター、クンティー)のところに行った。(一) プリターは明るい太陽のように輝くクリシュナが来るのを見て、首に手をまわして抱擁し、自分の息子たちのことを思い出して泣いた。(二) あの気力ある息子たちの間で、行動を共にしているクリシュナに久しぶりで会って、プリターは涙を流したのである。(三) 戦士たちの主であるクリシュナがもてなされて座った時、彼女は涙で口ごもり、乾いた口で彼に言った。(四)

「パーンダヴァたちは幼少の頃から目上に仕えることに専念し、お互いに友として尊敬し、心を一にしている。(五) 彼らは詐術により王国を追われ、人々に囲まれているのにふさわしいのに、人気(ひとけ)のない森へ行った。彼らは怒りと喜びを離れ、敬虔で、真実を語る。(六) 彼らは喜びと幸せを離れ、嘆いている私を捨てて森へ行き、私の心を根こそぎに奪って行った。(七) ねえクリシュナよ、その偉大なパーンダヴァたちは、それにふさわしくないのに、獅子や虎や象に満ちた森で、どのように生活していたのか。(八) 彼らは幼くして父に捨てられ、いつも私に可愛がられたが、自分の両親を見ないで、どのようにして大森林で暮らしていたのか。(九) クリシュナよ、パーンダヴァたちは子供の頃から、法螺や種々の太鼓や笛の音で目覚めた。(一〇) 家において彼らはいつも、象の鳴き声、馬のいななき、戦車の車輪の響きにより目覚めた。(一一) 法螺と太鼓の音、笛や琵琶(ヴィーナー)の音、バラモンたちによる一日を祝福する音により敬意を表されつつ。(一二) 彼らは衣服と宝物と装飾によりバラモンたちを敬った。そして偉大なバラモンたちの祝福をともなう歌により(敬われた)。(一三) 敬われ、尊敬に値する、讃えつつある人々によって祝福されて、楼閣の頂上でランク鹿の毛皮に寝ている彼らはいつも目覚めさせられていた。(一四) クリシュナよ、彼らは大森林で野獣の鳴き声を聞き、それに慣れていないので、きっと眠れなかったことであろう。(一五) クリシュナよ、種々の太鼓の音、法螺貝や笛の音、女たちの甘美な歌声、讃歌を唱える種々の吟誦者(バンディン、マーガダ、スータ)たちにより目覚めさせられた彼らが、どうして、大森林で野獣の鳴き声で目覚めさせられた

のか。（一六―一七）
　ユディシティラは廉恥心あり、約束を堅く守り、自制し、生類を憐れむ。愛憎を支配し、善き人々の道に従う。（一八）アンバリーシャ、マーンダートリ、ヤヤーティ、ナフシャ、バラタ、ディリーパ、ウシーナラの息子シビという、古（いにしえ）の王仙（王者出身の聖仙）の、担いがたい重荷を担い、徳性と徳行をそなえ、法（ダルマ）を知り、約束に忠実である。（一九―二〇）すべての美質をそなえ、純金のように輝く徳性あるアジャータシャトル（ユディシティラ）は、三界の王にもなれたであろう。（二一）法の点で、博識と行動の点で、すべてのクル族の最上者である、見目麗しい勇士ユディシティラはどのようにしているか。クリシュナよ。（二二）
　またビーマは、一万の象の力を持ち、風のように激しく、短気だが、いつも兄にとって愛しく、好ましいことをする。（二三）キーチャカとその親族を殺し、クローダヴァシャ族とヒディンバとバカを殺した勇士。（二四）勇武の点ではインドラに等しく、激しいことは疾風のようである。怒りにかけてはマヘーシュヴァラ（シヴァ）に等しく、戦士たちの最上者である。（二五）その敵を苦しめる勇士は、怒りと力と恨みを抑制し、自己を制し、猛々しくはあるが兄の命令に従う。（二六）ビーマセーナは威光の群であり、偉大で、無量の力を持つ。クリシュナよ、その見るだけでも恐ろしいビーマセーナについて教えて下さい。その狼腹は今どうしているか。（二七）
　クリシュナよ、パーンダヴァの三男アルジュナは、鉄棒のような腕をし、二本の腕ながら、千の腕を持つ先人のアルジュナ（カールタヴィーリヤ）に常に匹敵する。（二八）彼は一度の射撃により五百本の矢を射る。弓にかけてカールタヴィーリヤ王に等しい。（二九）彼は威光にかけて太陽に等しく、自制にかけて大仙（偉大な聖仙）に等しい。忍耐にかけて大地に等しく、大インドラに等しい勇武を有する。（三〇）彼は力により、クル族の諸王の輝きに満ち拡大した主権を奪う。（三一）その恐ろしい腕力にクル族の人々は仕える。約束を堅く守るアルジュナはすべての戦士たちの最上者である。（三二）インドラが神々の拠り所であるように、彼はパーンダヴァたちの拠り所である。あなたの兄弟であり友であるそのアルジュナは、今どうしていますか。（三三）
　サハデーヴァは一切の生類に対し憐れみあり、廉恥により自制し、強力な武器に通じ、柔和で、繊細であり、徳性あり、私にとって愛しい。（三四）サハデーヴァは偉大な射手で、戦場で輝く勇士である。クリシュナよ、彼は兄たちに仕え、法（ダルマ）と実利（アルタ）に通じた若者である。（三五）クリシュナよ、兄弟たちはいつも、行ない正しい偉大な彼の行為を称讃する。（三六）マードリーの息子サハデーヴァは、目上を敬う勇士で、戦士たちの主で、私に仕える。クリシュナよ、その彼について私に話して下さい。（三七）
　ナクラは繊細な若い勇士で、見目麗しい。クリシュナよ、彼はすべての兄弟たちにとって、外部にある生命のように愛しい。（三八）ナクラは強力でめざましく戦う偉大な戦士である。あの幸せに育った私の可愛い子は無事でいますか。（三九）ナクラは幸福に慣れ、苦しみにふさわしくなく、強力な戦士だが繊細である。勇士よ、私はそのナクラを再び見ることができるでしょうか。（四〇）勇士よ、瞬きする間もナクラなしでは私は幸せでいられない。その私

が今も生きている。私を見なさい。（四一）
　クリシュナよ、ドラウパディーは私のすべての息子たちにとって最愛の妻である。彼女は良家の生まれで、よい性質をそなえ、一切の美質にめぐまれている。（四二）真実を語る彼女は、子供たちよりも夫たちを選び、愛しい子供たちを捨て、パーンダヴァたちに従った。（四三）偉大な家柄に生まれ、すべての願望をかなえられて敬われる王妃、あらゆる点ですばらしいドラウパディーはどうしているか。クリシュナよ。（四四）火のような戦士である、偉大な射手である五人の勇猛な夫たちにめぐまれながら、ドラウパディーは苦労している。（四五）敵を制する者よ、私は十四年間、真実を語るドラウパディーに会っていない。息子たちのことを心配して悲嘆に暮れているでしょう。（四六）
　もしこのように行動するドラウパディーが不滅の幸福を享受しないなら、人は善行によって幸福を享受することはないでしょう。（四七）アルジュナやユディシティラやビーマセーナや双子も、私にとってクリシュナー（ドラウパディー）よりも愛しくない。集会場にいる彼女を見た時、私にとってそれ以上苦しいことはそれ以前にありませんでした。ドラウパディーは風のないところに立ち、舅たちのそばにいて、怒りと貪欲に従う悪人に拉致され、すべてのクル族が見ている中で、一衣のみをまとい集会場にいました。（四八―五〇）ドリタラーシトラ、バーフリーカ大王、クリパ、ソーマダッタ、失望したクル族の人々がいるところで、そのすべてが臨席する集会において、私はヴィドゥラに敬意を表する。というのは、クリシュナよ、行為によって人は貴人となるのであり、財産や学術によってではない。（五一―五二）クリシュナよ、その偉大な知

性をそなえた、深遠で偉大なヴィドゥラの徳性、飾りが、諸世界をおおって存在する。（五一―五三）
　彼女はやって来たクリシュナを見て、悲嘆に暮れ、また喜び、種々の苦労をすべて語った。（五四）
「敵を制する者よ、昔の悪い王たちに行なわれた賭博や狩猟が彼らを楽しませたでしょうか。（五五）ドリタラーシトラの息子たちが、集会場で、クル族の面前で、クリシュナー（ドラウパディー）を悩ませたということは、私を死にそうに燃やします。（五六）そして都から出たこと、亡命生活。クリシュナよ、私は多種多様な不幸の住処（すみか）である。そして人知れず生活すること、子供たちとの別離。（五七）敵を苦しめる者よ、私と息子たちにとって、ドゥルヨーダナに辱しめられたほど辛いことはない。今や十四年になる。（五八）もし苦しみから幸福が生じないならば、功徳や果報がないことになってしまう。私は決してドリタラーシトラの息子たちに対し、パーンダヴァたちと差別したことはありませんでした。（五九）クリシュナよ、この真実にかけて、私はあなたがパーンダヴァたちとともに、敵を殺し、繁栄に囲まれ、この戦争を無事に切り抜けるのを見たいものです。彼らは決して敗れるはずはない。彼らの勇気はあのようであるから。（六〇）
　私は自分やスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）を非難しません。父だけを非難します。賭博師たちが財物をやりとりするように、父は私をクンティボージャに与えました。（六一）あなたの祖父は、毬を持って遊んでいた幼い私を、親友である偉大なクンティボージャに与えたのです。

（六二）このように私は父と舅たちにひどい目にあいました。敵を苦しめるクリシュナよ。私はこの上なく苦しみました。私に何の生き甲斐があるでしょう。（六三）

アルジュナが生まれた日、夜、ある声が私に言いました。

『汝の息子は地上を征服するであろう。そして彼の名声は天界に達するであろう。（六四）アルジュナは内戦においてクル族を殺し、王国を得て、兄弟たちとともに、三つの祭祀を行なうであろう。（六五）』

私はその言葉を疑いません。創造者であるダルマ神に敬礼。偉大なクリシュナに敬礼。法（ダルマ）は常に生類を支える。（六六）クリシュナよ、もし法が存在すれば、真実も存在するでしょう。そしてあなたは、すべてその通りに実現させるでしょう。（六七）クリシュナよ、夫を失ったことも、財産を失ったことも、敵があることも、息子たちがいないことほど私を悲しませないでしょう。（六八）ガーンディーヴァ弓を持つ最高の戦士アルジュナを見ないなら、どうして私の心の平安があるでしょう。（六九）クリシュナよ、私がユディシティラ、アルジュナ、双子、ビーマに会えなくなって十四年になります。（七〇）人々は生き別れた者たちのために祖霊祭（シュラーッダ）をします。実際、私にとって彼らは死んだも同然、彼らにとっても私は死んだも同然です。クリシュナよ。（七一）

クリシュナよ、徳性あるユディシティラ王に告げなさい。『あなたの法は衰退している。わが子よ、不適切に行動してはなりません』と。（七二）クリシュナよ、私は他者に依存して生きています。何という生活！ 憐れみによって生きるよりも、身寄りのない生活の方がま

しです。（七三）

またアルジュナに、そして常に努力しているビーマに告げなさい。

『王族の女がその時のために息子を生んだ、まさにその時がやって来ました。（七四）もしその時が来て、あなた方が徒（いたずら）に時を過ごせば、あなた方がいくら人々に敬われていても、非常に卑劣なことをしたことになる。（七五）あなた方が卑劣であれば、私は永遠にあなた方を捨てます。というのは、時が来たら、生命をも捨てるべきですから。（七六）』

いつも王族の法（クシャトリヤダルマ）に専念するマードリーの双子に告げなさい。『生命を賭しても、勇武により勝ち取った諸楽を選びなさい』と。（七七）というのは、勇武により得られた財物は、王族の法により生きる人の心を常に喜ばせるから。最高の人よ。（七八）

強力な人よ、行って一切の戦士たちの最上者である勇士アルジュナに告げなさい。『ドラウパディーの足跡に従え』と。（七九）というのは、あなたも知るように、ビーマとアルジュナは怒った死神（アンタカ）のようで、神々をも死出の旅に送るほどであるから。（八〇）あの時クリシュナー（ドラウパディー）が集会場にいて、ドゥフシャーサナとカルナが乱暴な言葉を言ったということが、その二人にとって屈辱的であったから。（八一）ドゥルヨーダナはクルの指導者たちが見ている前で、賢明なビーマセーナを侮辱した（テクスト疑問）。彼はその報いを見るであろう。（八二）狼腹（ビーマ）は怨みを抱いたら鎮まることはない。ビーマの怨みは非常に長い時間が過ぎても鎮まらない。その勇士が敵どもを殺すまでは。（八三）

王国を奪われたことも、賭博で敗れたことも、息子たちが亡命したことも、私にとってそ

れほど苦しみをもたらさない。(八四)あの高貴で黒色の女性が一衣のみまとい、集会場で、乱暴な言葉を聞いていた時ほど苦しかったことがあろうか。(八五)常に王族の法に専念する、美しい尻のクリシュナーは、生理期間中だった。彼女は夫たちがいながら、寄る辺を見出せなかった。(八六)

クリシュナよ、あなたは私と息子たちの寄る辺です。最強の(バラ)ラーマと勇士プラデュムナもそうです。(八七)そこで私は、今はこのような苦しみに耐えられます。最高の人よ。無敵のビーマと退くことのないアルジュナが生きている時。(八八)」

アルジュナの友であるクリシュナは、息子ゆえの悩みにうちひしがれて悲しむ叔母のプリター(クンティー)を慰めた。(八九)

「叔母上、この世であなたのような女性はいるでしょうか。シューラ王の娘であるあなたは、アージャミーダの家に嫁ぎました。(九〇)偉大な一族の出であるあなたは、蓮が池から池に移るように嫁ぎました。あなたはあらゆる点ですばらしい王妃であり、夫に最高に尊敬されました。(九一)勇士の妻であるあなたは勇士たちを生み、一切の美質にめぐまれています。叡知に満ちた女性よ、あなたのような人は苦楽に耐えることができる。(九二)眠気と倦怠、怒りと喜び、飢えと渇き、寒暑。プリターの息子である勇士(パーンダヴァ)たちはこれらを克服して、いつも幸福を求めている。(九三)プリターの息子たちは村(や町)の幸福(平凡な幸福)を捨て、常に英雄の幸せを好む。偉大な気力を持つ強力な彼らは、わずかなものでは満足できない。(九四)剛毅な人々は窮極を求める。村の幸福を好む人々は中位を求める。剛毅な人々は、人

間につきものの非常な苦難と享楽を窮極において楽しむ。中途半端には楽しまない。彼らは窮極に達することを幸福と呼ぶ。そして中途半端を不幸と呼ぶ。(九五―九六)パーンダヴァたちとクリシュナーは、あなたに挨拶しています。彼らは自分たちが息災であることを告げ、あなたが健康であるかたずねています。(九七)あなたはすぐにパーンダヴァたちに会うでしょう。彼らは健康で、すべて目的を成就し、全世界の主であり、敵を滅ぼし、繁栄に囲まれているでしょう。(九八)」

このように慰められたクンティー(プリター)はクリシュナに答えた。息子ゆえの悩みで沈み込みながらも、無知から生じる闇を克服して。(九九)

「強力なクリシュナよ、あなたが彼らにとって適切と思うことを何でも、その通りにやって下さい。(一〇〇)法《ダルマ》を損なうことなく、欺瞞なしに。敵を苦しめる者よ。クリシュナよ、私はあなたの真実と高い生まれの力を知っています。(一〇一)そして、決定《けつじょう》、友人、知性と勇武に関する力を知っています。あなたこそ我々一族の法であり、真実であり、偉大な苦行《タパス》(功徳力)です。(一〇二)あなたは救済者であり、偉大なブラフマン(絶対者)であり、あなたにおいて一切が確立しています。あなたが告げたことはその通りになります。あなたにおいて真実があるでしょう。(一〇三)」

強力なクリシュナは彼女に別れを告げ、右まわりにまわって敬意を表してから、ドゥルヨーダナの邸に向かった。(一〇四)

(第八十八章)

ドゥルヨーダナの招待を辞退する

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

敵を制するクリシュナはプリター（クンティー）に別れを告げ、右まわりにまわって敬意を表してから、ドゥルヨーダナの家に行った。(一)それは最高の光輝をそなえ、インドラの宮殿のようであった。彼は門衛に止められることなく三つの広間を過ぎた。(二)それから誉れ高いクリシュナは、雲の群のような、そびえる山の峰のような、光輝で燃え上がるかのような宮殿に昇った。(三)そこでクリシュナは、数千の王とクルの人々に囲まれて、座席に座っている強力なドゥルヨーダナを見た。(四)そしてドゥフシャーサナ、カルナ、シャクニが、ドゥルヨーダナの近くに座っているのを見た。(五)

クリシュナが近づくと、誉れ高いドゥルヨーダナは、顧問たちとともに、クリシュナに敬意を表しつつ立ち上がった。(六)クリシュナはドゥルヨーダナと顧問たちに会い、王たちにも年齢の順に会った。(七)クリシュナはそこで、黄金で作られ、美しく飾られ、種々の敷物でおおわれた長椅子に座った。(八)クルの王はクリシュナに牝牛と接客用の飲食物を贈ってから、家々と王国とを〔儀礼的に〕さし出した。(九)そこで清らかな太陽のように輝いて座っているクリシュナに対し、すべてのクルの人々は諸王とともに敬意を表した。(一〇)それからドゥルヨーダナ王は、最高の勝利者クリシュナを食事に招待した。しかしクリシュナは

辞退した。(一一)

それからドゥルヨーダナは、諸王の集会において、カルナに合図してから、穏やかに、しかし邪悪さを秘めて、クリシュナに言った。(一二)

「飲食物、衣服、寝台はあなたのために贈られたものだ。クリシュナよ、どうして受け取らないのか。(一三)あなたは両方の側を援助している。両方の幸福に専心している。クリシュナよ、あなたはドリタラーシトラの親愛なる友である。(一四)クリシュナよ、あなたは法（ダルマ）と実利（アルタ）をすべて正しく知っている。あなたが辞退した理由を聞きたいと思う。円盤と棍棒を持つ者よ。(一五)」

そのように言われて、気高いクリシュナは大きな腕を上げて答えた。雨季の雨雲のような声をして。(一六)その言葉は明瞭で、呑みこまれず、途切れず、よどみのないものであった。蓮の眼のクリシュナは、王に道理にかなった最高の言葉を告げた。(一七)

「使者というものは目的を果たした時に食事し、もてなしを受ける。私が目的を果たした時、顧問たちとともに私をもてなしなさい。バーラタよ。(一八)」

このように言われて、ドゥルヨーダナはクリシュナに答えた。

「あなたが我々に対し不適切にふるまうのはよくない。(一九)あなたが目的を果たそうと果たすまいと、クリシュナよ、我々はあなたをもてなそうと努力する。ところが我々はできない。(二〇)クリシュナよ、我々は喜んでもてなしたのに、あなたが考慮しなかった。その理由を我々は知らない。最高の人よ。(二一)クリシュナよ、我々には敵意はなく、あなたと争

ってもいない。そこであなたは考慮されたい。そのように言われるのは適切でない。（二二）」

このように言われて、クリシュナはドゥルヨーダナと顧問たちを見て、笑って答えた。（二三）

「私は欲望や怨みにより、営利により、論争により、貪りにより、決して法を捨てはしない。（二四）食事は愛情で食べるか、困窮の時に食べるかである。王よ、あなたには愛情は感じられないし、我らは困窮してもいない。（二五）王よ、あなたは生まれた時から、理由もなくパーンダヴァたちを憎んでいる。彼らは好意的で、諸々の美質にめぐまれた、兄弟同様の者たちであるのに。（二六）理由もなく彼らを憎むのはよろしくない。彼らは法に立脚している。誰が彼らを非難することができよう。（二七）彼らを憎む者は私を憎む者だ。彼らに従う者は私に従う者だ。私は法を践むパーンダヴァたちと一体であると知れ。（二八）欲望と怒りにかられ、迷妄から、有徳な人を憎み敵対しようとする者を、最低の人と言う。（二九）すばらしい美質を持つ親族を、迷妄と貪りにより見ようとする者は、自己に克つことなく、怒りを制することなく、長らく繁栄することはない。（三〇）美質をそなえた人々を、心の中では好きではないのだが、好意をかけて支配下に置く人は、長いこと名声を保つ。（三一）

この食物はすべて罪過をともない、食べられるべきではない。ヴィドゥラがくれたものだけが食べられるべきであると私は考える。（三二）」

強力なクリシュナは、短気なドゥルヨーダナにこのように告げると、輝かしいその館から退出した。（三三）偉大で強力なヴァースデーヴァは外に出ると、滞在するために、偉大なヴィドゥラの家に行った。（三四）

強力なクリシュナがヴィドゥラの家に滞在していた時、ドローナ、クリパ、ビーシュマ、バーフリーカなど、クル族の人々が彼を訪れた。（三五）クル族の人々はやって来て、クリシュナに告げた。

「クリシュナよ、我々は宝物もろとも家をあなたに寄進します。（三六）」

すると威光に満ちたクリシュナはクル族の人々に言った。

「みな様方、帰られるがいい。もてなしは十分にしていただいた。（三七）」

クル族の人々が帰った時、ヴィドゥラは努力して、無敵のクリシュナを、すべての望みをかなえてもてなした。（三八）それからヴィドゥラは、清らかで美質をそなえた多くの飲食物を、偉大なクリシュナに出した。（三九）クリシュナはまずそれらによってバラモンたちを満足させてから、ヴェーダ学者たちに最高の財産を与えた。（四〇）それから、マルト神群を連れたインドラのように、随行の人々とともに、彼は清らかで美質をそなえたヴィドゥラの食事を食べた。（四一）

（第八十九章）

ヴィドゥラとクリシュナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クリシュナが食事をして寛いだ時、夜、ヴィドゥラは彼に言った。

「クリシュナよ、あなたが来訪したことは、適切な判断ではない。(一)クリシュナよ、ドゥルヨーダナは実利(アルタ)と法(ダルマ)を逸脱し、愚かで怒りっぽく、人を尊敬せず自らは尊敬を望み、長老たちの命令を無視する。(二)法典を逸脱し、愚かで性格が悪く頑固である。より優れた人々の教えに従わず、邪悪である。クリシュナよ。(三)欲深で、自分の知恵を鼻にかけ、友を裏切り、すべての人を疑う。なすべきことをせず、恩知らずで、法を捨て、虚偽を好む。(四)このような、またその他の多くの欠点をそなえた彼は、あなたに最善のことを言われても、傲慢なために受け入れないであろう。(五)クリシュナよ、幼稚な彼は地上における大軍を見て、愚かにも自分は目的を成就したと考えている。(六)愚かな彼はカルナ一人で敵をうち破ることができると結論した。だから彼は講和しようとしないだろう。(七)そして彼はビーシュマ、ドローナ、クリパ、ドローナの息子、ジャヤドラタを高く評価して、講和しようと考えない。(八)クリシュナよ、ドリタラーシトラの息子たちとカルナは、パーンダヴァたちはビーシュマとドローナとクリパに対抗できないと結論する。(九)

クリシュナよ、あなたが同胞愛を望んで努力している間、すべてのドリタラーシトラの息子たちは合意していた。(一〇)『我々はパーンダヴァたちに、彼らの取り分を返還しない』と。彼らはそう決定していた。彼らに何か言っても無駄であろう。(一一)クリシュナよ、よいことを言っても悪いことを言っても同じなのだ。何も言うべきではない。歌手が聾者の前で歌わないように。(一二)クリシュナよ、無軌道で無知な愚者たちの前で語ることは適切で

ない。バラモンがチャーンダーラ(被差別民)の前で語らぬように。(一三)あの愚か者は、力に頼り、あなたの言葉に従わないだろう。彼に対するあなたの言葉は無駄になってしまうだろう。(一四)

あの邪悪な者たちがすべて一堂に会している時、あなたが彼らの間に行くことは、クリシュナよ、私にはよいと思われない。(一五)彼らは愚かで、無教養で、邪悪であり、大勢である。彼らの間であなたが批判的な言葉を言うことは、クリシュナよ、よいとは思われない。(一六)富貴と迷妄により慢心し、若さを誇り、寛容でなくて、長老を敬わないから、彼はあなたの有益な言葉を受け入れないであろう。(一七)あなたは強力であるが、もし彼の力についてあなたが語るなら、彼はあなたに対し大きな疑いを抱き、あなたの言葉に従わないだろう。(一八)インドラと神々でさえ、戦いによって彼らの軍にかなわないと、すべてのドリタラーシトラの息子たちは考えている。クリシュナよ。(一九)

このようにして彼らが欲望と怒りに捕われている時、あなたの有益な言葉も無力になるであろう。(二〇)

愚かなドゥルヨーダナは、象兵、戦車兵、騎兵の中に立ち、恐れもなく(異本による)、俺はすべての大地を征服したと考えている。(二一)彼は競争者のいない地上の大帝国を望んでいる。彼においては、講和は全くあり得ない。関連の財物はすべて得られたと考えるから。(二二)この大地はカーラ(時間、破壊神)に煮られて滅びる。地上のすべての戦士、諸王、領主が、ドゥルヨーダナのために、パーンダヴァと戦おうとして集結しているから。(二三)そしてこれらす

べての王たちは、以前にあなたに財産を奪われて、怨みを抱いている。クリシュナよ。これらの勇士たちはあなたを恐れて、ドリタラーシトラの息子たちに庇護を求め、カルナと固く結びついている。(二四) すべての戦士は、命懸けでパーンダヴァと戦うべく、ドゥルヨーダナと結束している。あなたが彼らの中に入ることは、私には賛成できない。勇士クリシュナよ。(二五)

あの多くの邪悪な敵たちが一堂に会している中に、どうしてあなたは行くのか。敵を粉砕する者よ。(二六) しかしいずれにせよ、勇士よ、あなたは神々によってさえ対抗しがたい。私はあなたの力と勇気と知性を知っている。敵を殺す者よ。(二七) クリシュナよ、私はパーンダヴァたちに対すると同様、あなたに対して好意を抱いている。愛情と尊敬と友情から忠告するのである。(二八)」

(第九十章)

バガヴァット(クリシュナ)は言った。

「賢明な大知者にふさわしい言葉だ。あなたのような親友にふさわしい言葉だ。(一) あなたは父母のように、法(ダルマ)と実利(アルタ)にかない、あなたにふさわしい真実の言葉を述べた。(二) あなたが私に告げたことは真実であり、尤もであり、適切である。ヴィドゥラよ、私が来た理由を聞きなさい。注意深くあれ。(三)

ヴィドゥラよ、私はドゥルヨーダナの邪悪さと王族たちの怨みをすべて知りながら、今、

クル族のもとに来たのである。(四) しかし、ひっくり返った全大地を馬や戦車や象もろとも、死神の罠から解放する者は、最高の法(ダルマ)に到達するであろう。(五) 人が力の限り努力しても法にかなう仕事を達成できなくても、その功徳を得ることができる。私はそのことを疑わない。(六) 人が心で悪いことを考えても、行動に移そうと望まないなら、その果報を受けることはない。法を知る人々はこのように知っている。(七)

ヴィドゥラよ、そこで私は本気で、戦えば滅亡するであろうクル族とスリンジャヤ(パーンチャーラ)族とを講和させるよう努力するであろう。(八) この非常に恐ろしい災禍は、まさにクル族に生ずるであろう。というのは、それはカルナとドゥルヨーダナの引き起こしたことであるから。しかし、すべての者が巻き込まれる。(九) 災いに苦しむ友がいたら、力の限り慰めて助けない者を、賢者たちは無慈悲な者と知る。(一〇) 髪をつかむことさえして、なすべきでないことから友を引きもどす者は、力の限り努力したのであるから、誰にも非難されない。(一一)

ヴィドゥラよ、適切で正しく、法と実利(アルタ)にかなった有益な私の言葉を、ドゥルヨーダナとその顧問たちは受け入れるべきである。(一二) 私は本心から、ドリタラーシトラの息子たちと、パーンダヴァたちと、地上の王族たちのために努力している。(一三) もしドゥルヨーダナが彼のために努力している私を疑うなら、私の好意は借りがなくなるであろう。(一四) もし親族同士の離反において友が全力をあげて介入せず、無関心でいるならば、賢者たちは彼を友と考えない。(一五) 法を知らない人々、愚者たち、親しくない人々が、私のことを、「ク

リシュナはそれができるのに、クルとパーンダヴァの争いを止めなかった」と言わないように。(二六)

私は両方の側の利益を成就させるために来たのである。その努力をしても、私は人々の間で非難されないであろう。(二七) 私の法と実利をそなえた健全な言葉を聞いても、あの愚か者がもし受け入れないなら、彼は運命に支配されるであろう。(二八)

もし私が、パーンダヴァの利益を損なうことなく、クル族との和平を適切にまとめることができれば、私の清浄な行為は大きな利益をもたらすであろう。そしてクル族は、死神の罠から解放されるであろう。(二九) 聖賢の言葉、法（ダルマ）にかない、実利（アルタ）をともない、害のない適切な言葉を私が語る時、ドリタラーシトラの息子たちがそれを考慮するなら、クル族の人々は私が来たことを歓迎するであろう。(三〇) そしてまた、すべての王たちがいっしょになっても、怒った私の前に立つことはできない。他の獣たちが獅子に対抗できないように。(三一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ヤドゥ族の幸福をもたらす、ヴリシュニ族の雄牛（クリシュナ）はこのように言うと、感触のよい寝台で横になった。(三二)

(第九十一章)

クリシュナの勧告

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

英邁な二人がこのように話し合っている間に、星の輝くその吉祥の夜は過ぎた。(一) 偉大なヴィドゥラは、無量の威光を持つクリシュナの法（ダルマ）と実利（アルタ）と享楽（カーマ）にかない、多彩な内容と語をともなう種々の言葉を聞き、クリシュナも同様に適切なヴィドゥラの言葉により、夜が明けるのを望まないかのようであったが、しかしその間にその夜は過ぎた。(二・三) それから、多くの美声の吟誦者（スータ）と讃嘆者（マーガダ）たちが、法螺と太鼓の音とともに、クリシュナを目覚めさせた。(四) そこで、すべてのサートヴァタ族の雄牛であるクリシュナは起き上がり、朝になすべきすべての必要なことを行なった。(五) クリシュナは沐浴して聖句を唱え、護摩をたき、身を飾り、昇る太陽を崇拝した。(六) その時、ドゥルヨーダナとシャクニは暁光を崇拝している無敵のクリシュナに近づいた。(七) そして、ドリタラーシトラと、ビーシュマをはじめとするクル族の人々と、すべての地上の王が集会場に集まっていると告げた。(八)

「クリシュナよ、天界で神々がインドラを待つように、彼らはあなたを待っています。」

クリシュナは最高に優しいねぎらいの言葉で彼らを歓迎した。(九) それから、太陽が明るくなった（昇った）時、敵を苦しめるクリシュナはバラモンたちに、黄金と衣服と牝牛と馬を贈った。(一〇) 無敵のクリシュナが種々の宝を与えて立っている時、御者がやって来て挨拶をした。(一一) そこで気高い彼は、大雲のような音をたて、一切の宝で飾られた神聖な戦車が近くに来たのを知った。(一二) クリシュナは火とバラモンたちの周囲を右まわりにまわって敬意を表してから、カウストゥバ宝珠をつけ、最高の光輝に輝いた。(一三) すべてのヤドゥ

族の長クリシュナは、クル族に囲まれ、ヴリシュニ族に守られて戦車に乗った。（一四）一切の法（ダルマ）を知るヴィドゥラは、一切の生類の最上者、一切の法を守る人々のうちの最上者であるクリシュナの後から乗った。（一五）それから、ドゥルヨーダナとシャクニは第二の戦車に乗って、敵を苦しめるクリシュナの後について行った。（一六）サーティヤキとクリタヴァルマンとヴリシュニ族の勇士たちは、戦車と馬と象に乗って、クリシュナの後に従って行った。（一七）進んで行く彼らの、黄金の飾りをつけ最高の馬たちをつないだ戦車は、音をたて、魅力的に輝いた。（一八）やがて光輝に輝く賢明なクリシュナは、大通りにさしかかった。大通りは浄められ水をまかれ、王仙たちが歩いていた。（一九）クリシュナが進んで行くと、太鼓が打たれ、法螺が吹かれ、その他の楽器が演奏された。（二〇）獅子のように勇猛な、敵を苦しめる全世界の若い勇士たちが、クリシュナの戦車を取り囲んで進んで行った。（二一）その他、きらびやかで驚嘆すべき衣裳をまとい、剣と槍とその他の武器を持つ幾千の兵士が、クリシュナの前を進んだ。（二二）百頭以上の象と幾千の駿馬が、進んで行く無敵の勇士クリシュナにつき従った。（二三）クル族の市民たちが、老人、子供、女性を連れて、敵を制するクリシュナを見たいと望んで、大通りに出て来た。（二四）家々は露台に出た大勢の女たちの重みで揺れるかのようであった。（二五）クリシュナはクルの人々に敬意を表され、種々の言葉を聞きつつ、ふさわしい場合は答礼し、方々見まわしながら、徐々に進んで行った。（二六）それから集会場に着くと、クリシュナの随行者たちは、笛と法螺の音をすべての方角に響かせた。（二七）無量の威光を持つ王たちの集会はすべて、クリシュナの到着を待ち望んで、喜

びで揺れた。（二八）やがてクリシュナが近づくと、諸王は雷雲の音のような戦車の響きを聞いて喜んだ。（二九）全サートヴァタの雄牛であるクリシュナは、集会場の門に着くと、カイラーサの峰のような戦車から降りた。（三〇）それから彼は集会場に入った。それは山の雲のようで、光輝により燃えるかのようであり、大インドラの宮殿のようであった。（三一）誉れ高い男は、ヴィドゥラとサーティヤキの手をとり、太陽が星々の輝きをおおうように、その光輝によりクル族をおおった。（三二）カルナとドゥルヨーダナの両者はクリシュナの前方に、ヴリシュニ族とクリタヴァルマンはクリシュナの背後にいた。（三三）ドリタラーシトラを先頭にして、ビーシュマ、ドローナなどはみな、クリシュナに敬意を表して座席から立ち上がった。（三四）クリシュナが近づくと、智慧の眼を有する（盲目の）気高く誉れ高い王は、ビーシュマやドローナとともに立ち上がった。（三五）ドリタラーシトラ王が立ち上がると、幾千の王たちが一斉に立ち上がった。（三六）ドリタラーシトラの命により、クリシュナのためにそこに座席が設けられていた。それは黄金で飾られ、どこから見てもすばらしいものであった。（三七）

徳性あるクリシュナは笑みを浮かべながら、王とビーシュマとドローナと他の王たちに、年齢の順に挨拶した。（三八）クリシュナがまさに集会場に来た時、地上の王たちとすべてのクル族の人々は彼に敬意を表した。（三九）敵の都市を征服し、敵を苦しめるクリシュナは、そこで諸王の中央に立ち、虚空にいる聖仙たちを見た。（四〇）ナーラダをはじめとする聖仙たちを見て、クリシュナは穏やかにビーシュマに告げた。（四一）

「王よ、聖仙たちが地上の集会を見るためにやって来ました。彼らに座席を出し、もてなして、大いに歓迎すべきです。(四二) 彼らが座らないうちは、誰も座ることはできません。心の浄らかな聖者たちのために、すぐに供養をしなさい。(四三)」

ビーシュマは集会場の入口に聖仙たちがいるのを見ると、急いで「座席を」と従者たちをうながした。(四四) 彼らは清浄で大きい、宝石と黄金できらびやかな座席を運んで来た。(四五) 聖仙たちがそこに座り、接客用の品を受けた時、クリシュナも座席に座り、諸王もそれぞれの席に座った。(四六) ドゥフシャーサナはサーティヤキに最上の席を与えた。ヴィヴィンシャティはクリタヴァルマンに黄金の座席を与えた。(四七) クリシュナの近くに、偉大で短気なカルナとドゥルヨーダナの二人が、一つの座席に座った。(四八) ガーンダーラの国王シャクニは、ガーンダーラの人々に守られて、息子たちとともに席に座った。(四九) 大知者ヴィドゥラは、クリシュナの席に触れるほど近い所に、白い最高に上等の鹿皮におおわれた、宝石をちりばめた座席に座った。(五〇)

すべての地上の王たちは、長いことクリシュナを見ていても、甘露を飲むように、飽きることがなかった。(五一) クリシュナは亜麻の花のような色で、黄色い衣服を着て、集会場の中央で、黄金にはめこまれた宝石（サファイヤ）のように輝いていた。(五二) それからすべては、クリシュナに心を集中して沈黙していた。いかなる人も、決して何も言わなかった。(五三)

（第九十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

すべての王が沈黙して座っていた時、美しい歯のクリシュナは、太鼓のような音声を発し、次のように言った。(一) 夏の終わり（雨季）の雲のような音をたて、集会場にいるすべての人に聞こえるように、クリシュナはドリタラーシトラを見つめて告げた。(二)

「バーラタよ、クル族とパーンダヴァとが講和するように、勇士たちが死なないように（本異による）と、努力するためにここに来た。(三) 王よ、あなたの幸せをもたらす言葉を別に言うつもりはない。敵を制する者よ、あなたは知るべきことをすべて御存知であるから。(四) 王よ、あなたのこの一族はすべての王家のうちで最高である。それは学識と行動にめぐまれ、すべての美質をそなえている。(五) バーラタよ、クル族においては、思いやりと同情、憐れみ、温情、廉直、忍耐、真実が特に優れている。(六) 王よ、王家がこのように偉大である時、とりわけあなたが原因で不適切なことになるのはよろしくない。(七) というのは、クルの最上者よ、あなたはクル族の人々が外部者や内部者に対して誤ってふるまう時、彼らを制御する最高の人であるから。(八)

クルの王よ、ドゥルヨーダナをはじめとするあなたの息子たちは、法（ダルマ）と実利（アルタ）に背を向け、邪悪にふるまっている。(九) 彼らはしつけが悪く、常軌を逸し、貪欲にかられて自分の大事な親族に対して正気を失っている。バラタの雄牛よ、そのことを知りなさい。(一〇) 今や非常に恐ろしい災禍がクル族に生じた。クルの王よ、その災禍は、放っておけば地上を滅ぼす

であろう。(一一) しかしバーラタよ、もしあなたが望めば、それを鎮めることは可能なのだ。私の意見では、この場合、和平は難しくはない。バラタの雄牛よ。(一二) 王よ、和平はあなたと私に依存している。クルよ、息子たちを制止せよ。私は他の者たちを制止する。(一三) 王中の王よ、あなたの息子たちとその従者たちがあなたの命に従うようにせよ。彼らがあなたの命に従えば、彼らにとって非常に有益なことだ。(一四) あなたにとっても有益であり、従ってパーンダヴァたちにとっても有益である。彼らは和平に努力している私の命令を期待しているから。(一五) 王よ、自ら総合的に判断して実行しなさい。バラタ族はまさにあなたと行動を共にするであろう。(一六) 王よ、パーンダヴァたちに守護されて、法（ダルマ）と実利（アルタ）を実践せよ。あのような者たちは、いくら努力してもうち破ることはできないから。王よ。(一七) 偉大なパーンダヴァたちに守られているあなたを、神々を率いたインドラでさえうち破ることはできない。いわんや人間の王たちはなおさらである。(一八)(一九—二七略)

大王よ、戦争においては大々的な滅亡が訪れる。王よ、双方が滅亡する場合、あなたはいかなる法を見出すのか。(二八) 戦闘においてパーンダヴァたちや強力な息子たちが殺されたら、王よ、あなたはいかなる幸福を見出すか、言って下さい。バラタの雄牛よ。(二九) パーンダヴァとあなたの息子たちは、すべて勇士で、武器を修得し、戦闘を好む。大なる危険から彼らを守りなさい。(三〇) 戦いがあれば、我々はクル族もパーンダヴァたちも、すべて見ることはできなくなる。彼ら両軍の勇士たちは、戦士に攻撃されて戦車から落ちて死ぬ。(三一) 最高の王よ、地上の王たちは一堂に会し、怒りにかられてこれらの臣民を殺すであろう。(三二) 王よ、この世界を救いなさい。この臣民が滅びることのないように。あなたが本来の状態にもどれば世界は救われるだろう。クルの王よ。(三三)(三四—三九略)

王よ、パーンダヴァたちはあなたに挨拶し、御機嫌をうかがい、こう言いました。

『我々と従者たちは、あなたの命令により苦難を味わいました。(四〇) 我々は森で十二年間住みました。十三年目は、人々の間に、正体を知られずに住みました。(四一) あの父親も約定に従ったと考え、我々も約定に従い、約定を捨てることはありませんでした。伯父上、そのことは我らのバラモンたちが知っております。(四二) 我々は約定を守ったのですから、あなたも我々との約定に従って下さい。バラタの雄牛よ。王よ、我々はいつも苦しみました。我々のものである王国の部分をいただきたいです。(四三) あなたは法（ダルマ）と実利（アルタ）を適用して、我々を正しく救って下さい。あなたを尊父（グル）と考えて、我々は多くの苦難に耐えているのです。(四四) そこであなたは父母のように我々に対してふるまって下さい。師（グル）に対して弟子は恭しくふるまいます。バーラタよ。(四五) 我々が間違った道にいたら、父親が我々を制止すべきです。我々を正しい道に立たせて下さい。王よ、あなたも自己の道に立ちなさい。(四六)』

バラタの雄牛よ、あなたの息子（パーンダヴァ）たちはこの集会の人々に言いました。

『法を知っている会衆の間では、不適切なことは御法度である。(四七) 見ている前で、法が非法により、真実が虚偽により損なわれるなら、そこの会衆が殺される。(四八) 非法に刺された法が集会場（廷法）に避難して来ても、会衆がその棘を断たないなら、その場合、会衆が刺されることになる。川が沿岸に生ずる樹木を害するように、法が彼らを破滅させる。(四九)』

バラタの雄牛よ、彼らは法を見つつ沈思黙考して座っています。彼らは真実と法と道理を説きます。（五〇）王よ、彼らの土地を返す以外に、何か他のことを言うことができますか。もし私が法と実利を考慮して真実を述べているなら、集会場に座っている王たちはどうすべきか言って欲しい。（五一）王族の雄牛よ、この王族たちを死神の罠から解放しなさい。バラタの最上者よ、講和しなさい。怒りに支配されてはならぬ。（五二）父から受け継いだ分を、パーンダヴァたちに適切に返還して、それから息子たちとともに目的を成就して、諸楽を享受しなさい。敵を苦しめる者よ。（五三）あなたはユディシティラが常に善き人々の法に立脚していることを知っている。そしてあなたと息子たちにいかなる行動をとっているかも。（五四）あなたと息子たちは、彼を焼死させようとしたり、追放したり、インドラプラスタに追いやったりしたが、彼は再びそのあなたに寄る辺を求めた。（五五）彼はそこに住み、すべての王を支配下に置いたが、王よ、あなたを頭(かしら)にし、あなたに背くことはなかった。（五六）彼がそのようであったのに、シャクニは国土や財物や穀物を奪おうとして、最高の詭計を用いた。（五七）ユディシティラはあのような状態になり、集会場に連れて来られたクリシュナー（ドラウパディー）を見ても、王族の法(クシャトラダルマ)から逸れることはなかった。（五八）バーラタよ、私はあなたと彼らにとって最善のことを望みます。法と実利と享楽にかけて。王よ、臣民が滅びるようにしてはなりません。（五九）自分の不利益を利益と考え、利益を不利益と考え、貪欲にかられた息子たちを制御しなさい。王よ。（六〇）敵を制するパーンダヴァたちは、恭順の準備とともに、戦いの準備をしています。敵を苦しめる王よ、あなたにとって最も有益な立場をとりなさい。（六一）」

すべての王たちは彼の言葉を心の中で称讃した。しかし誰も自分からは口を切らなかった。（六二）

（第九十三章）

高慢なダンボードバヴァ王

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

偉大なクリシュナがその言葉を告げた時、すべての会衆は静まり返り、喜びで総毛立って座っていた。（一）「いかなる人が彼から言われたことに答えることができるか」と、すべての王は心で考えていた。（二）このようにすべての王が沈黙していた時、ジャマダグニの息子（パラシュラーマ）はクルの集会において次のように言った。（三）

「王よ、疑うことなく、この真実である譬(たと)え話を聞きなさい。それを聞いて、もしよいと思ったら、最善のことを受け入れなさい。（四）

かつて全地上の王であるダンボードバヴァという王がいた。彼はすべての大地を残らず享受したと聞いている。（五）

この強力な勇士は夜が終わり朝になると、起床し、バラモンや王族たちに問いつつ座していた。（六）

『従僕(シュードラ)であろうと、実業者(ヴァイシャ)であろうと、王族(クシャトリヤ)であろうと、バラモンであろうと、武器を

とる者で、戦闘において、私より優れているか、または私に等しい者は誰かいるか。(七)」
その王はこう言いながら、この地上を遍歴した。彼は非常な高慢さで酔っていたので、他に誰もいないと考えていた。(八)
ヴェーダに通じ、何も恐れない気高いバラモンたちは、繰り返し自慢している王を制止した。(九) しかしいくら制止されても、富貴に酔い、自惚れた彼は、何度もバラモンたちにたずねた。(一〇) 苦行を積み、偉大で、ヴェーダの誓戒をそなえたバラモンたちは、怒りに燃え、高慢な王に告げた。(一一)
「二人の人中の獅子がいて、多生にわたって友情を結んでいる。王よ、あなたは決してその両者に匹敵することはない。(一二)」
このように言われて、王は再びバラモンたちにたずねた。
「その勇士たちはどこにいるか。どこで生まれたか。何をしているか。二人は何者か。(一三)」
バラモンたちは言った。
「その二人はナラとナーラーヤナという苦行者であると聞いている。彼らは人間界に来ている。王よ、彼らと戦いなさい。(一四) その偉大なナラとナーラーヤナの両者は、ガンダマーダナ山で、筆舌に尽くしがたい恐るべき苦行を行じている。(一五)」
ラーマは続けた。
「その王は我慢できなくなり、六部門からなる大軍を召集して、その無敵の両者のいる所に

進軍した。(一六) 彼は険阻で恐ろしいガンダマーダナ山に行き、その無敵の苦行者たちを探しながら進んで行った。(一七) 最高の人である両者は、飢えと渇きでやつれ、血管が全身に浮き出て、寒風と熱に苦しんでいた。王は二人に近づいて彼らの足を抱いて敬礼し、息災かどうかをたずねた。(一八) 彼らは根と木の実により、座席と水により王をもてなしてから、『どのような仕事をしたらよいか』と彼にたずねた。(一九)
ダンボードバヴァは言った。
『私の両腕により、大地は征服され、すべての敵は殺された。私はあなた方と戦いたいと願ってこの山に来たのだ。この歓迎をして下さい。これが私の長年の願望である。(二〇)』
ナラとナーラーヤナは答えた。
『最高の王よ、この隠棲所は、怒りと貪欲を離れている。というのは、この隠棲所には戦いはなく、どこに武器や不正があろう。他の場所で戦いを求めよ。地上には大勢の王族(クシャトリヤ)たちがいる。(二一)』
ラーマは続けた。
「ダンボードバヴァ王はそのように言われても、なおも言い張った。何度も許しを乞われなだめられたが、王は戦いを求めて二人の苦行者に執拗に挑戦した。バーラタよ。(二二) クルの王よ、それからナラは一握りの葦を持って言った。
『戦いが好きな王族よ、さあ戦え。(二三) すべての武器を持て。軍隊の準備を整えよ。今後はあなたが戦い好きでなくなるようにしてあげよう。(二四)』

ダンボードバヴァは言った。

『苦行者よ、もしその武器が我々にふさわしいと思うなら、あなたがそれしか持たないでも私はあなたと戦うであろう。戦いのためにここに来たのであるから。(二五)』」

ラーマは続けた。

「ダンボードバヴァは、その苦行者を殺そうとして、兵士たちとともに、一面に矢の雨を降らせた。(二六) 彼が敵の体を断つ恐ろしい矢を放っている間に、その聖者は葦によってそれらを役に立たなくして破壊した。(二七) それから無敵な聖者は、恐ろしい葦を王に向けて放った。その葦は抗しがたい武器となった。それは奇蹟のようであった。(二八) 的を貫くその聖者は、幻力を用い、葦によって兵たちの眼や耳や鼻を撃った。(二九)

王は葦でおおわれて白くなった空を見て、ナラの足もとに平伏し、『私に吉祥がありますように』と言った。(三〇) 王よ、庇護を求める者たちの寄る辺であるナラは彼に告げた。

『敬虔で徳性ある者であれ。二度とあのようにしてはならぬ(三一) 決して慢心して誰かを侮ってはならぬ。より劣った者でも、より優れた者でも……。王よ、それはあなたにとって最高に有益なことだ。(三二) 智慧を完成し、貪欲を離れ、我執なく、自己を保ち、自制し、忍耐あり、柔和で、臣民を守れ。王よ。(三三) さらばじゃ。御機嫌よう。行きなさい。二度とあのようにしてはならぬ。我々の言葉に従い、いつもバラモンたちに息災かとたずねなさい。(三四)』

そこで王は偉大な両者の足下に敬礼して、自分の都にもどった。そしてこの上なく功徳(ダルマ)を積んだ。(三五) かつてナラがなした行為は非常に偉大である。ナーラーヤナは非常に多くの美質により、それよりも偉大である。(三六) 王よ、それ故アルジュナが最高の弓ガーンディーヴァに矢をつがえないうちに、慢心を捨てて彼のもとに行きなさい。(三七) カークディーカ、シュカ、ナーカ、アクシサンタルジャナ、サンターナ、ナルタナ、ゴーラ、第八にアースヤモーダカという飛道具を。(三八) これらに射られ、すべての人は死ぬ。あるいは気が狂い、うろつき、意識を失い、失神する。(三九) そして人々は眠りこけ、跳ねまわり、吐き、絶えず小便をし、泣き、笑う。(四〇) アルジュナの美質は無数であり、クリシュナはそれよりも優れている。あなたはアルジュナがクンティーの息子であると考えている。(四一) しかし大王よ、あのナラとナーラーヤナの両者がまさにアルジュナとクリシュナという人中の雄牛である勇士だと知りなさい。(四二) もしこのように知り、私を疑わないなら、気高い決意をして、パーンダヴァたちと講和しなさい。バーラタよ。(四三) もし離間が生じない方がよいと考えるなら、講和せよ。バラタの最上者よ、戦争を考えてはならぬ。(四四) クルの最上者よ、あなたの一族は地上において尊敬されている。ずっとそうであるように。どうか自分の利益を考えなさい。(四五)」

(第九十四章)

マータリ、娘の婿を求めて地底界に行く

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ジャマダグニの息子（バラシュラーマ）の言葉を聞くと、尊いカヌヴァ仙も、クルの集会において、ドゥルヨーダナに次のように言った。（一）

「世界の祖父である梵天（ブラフマー）は不滅で永遠である。尊い聖仙ナラとナーラーヤナも同様である。（二）すべてのアーディティヤ神群のうちでは、ただヴィシュヌのみが永遠である。無敵で、不滅で、恒常で、主権者（プラブ）であり、主宰神（イーシュヴァラ）である。（三）他の月と太陽、大地、水、風、火、虚空、惑星、星座は死滅するものである。（四）それらは世界の帰滅において、常に三界を捨てて滅亡する。すべては繰り返し創造される。（五）その他のもの、人間、鳥獣、その他の生命界でうごめく畜生たちは瞬時にして死ぬ。（六）大概の王たちは、繁栄を享受してから、命終の時、死んで善悪の行為の果報を享受する。（七）

そこであなたは、この場合、ダルマの息子（ユディシティラ）と講和すべきである。パーンダヴァたちとクル族とで大地を守護せよ。（八）スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）よ、自分は強力であると考えるべきではない。というのは、強力な者は強力な者によって認められるから。人中の雄牛よ。（九）強力な者たちの間では、単なる力は力ではない。クルの王よ。すべてのパーンダヴァは強力で、神のように勇猛である。（一〇）

ここにおいて、娘を与えようと望み、婿を探すマータリについての古（いにしえ）の物語（イティハーサ）が例としてあげられる。（一一）

マータリというのは、三界の王（インドラ）に尊敬されている御者のことである。彼の家に一人の娘がいて、容色の点で世に知れわたっていた。（一二）彼女はグナケーシーという名で、神

のような容姿をしていた。彼女は輝かしさと体の美しさの点で、他の女性を凌駕していた。（一三）マータリとその妻は、彼女を嫁にやる時が来たと知り、そのことに専念して考え、熟慮した。（一四）

『徳性あり、高く、誉れあり、気力にあふれた人々の家において、娘が成長するということは、何たることか。（一五）娘というものは、母方の家、父方の家、嫁ぎ先という、三つの善人の家族を危険に陥れる。（一六）私は心の眼により神々と人間の二つの世界をすべて探したが、私の気に入る婿はいなかった。（一七）神々、魔類、ガンダルヴァ、人間、多くの聖仙たちも、婿として私の気に入らなかった。（一八）』

夜、マータリは妻のスダルマーと相談して、竜の世界に行く決意をした。（一九）

『神々や人間の間には、容姿の点でグナケーシーに似合いの婿は誰もいない。きっと竜の間にいるであろう。（二〇）』

彼はこのように相談して、スダルマーを右まわりにまわって敬意を表し、娘の頭に接吻し、地界に入った。（二一）」

（第九十五章）

カヌヴァは語った。

「マータリは進んで行くうちに、途中でたまたま大仙ナーラダに出会った。ナーラダはヴァルナ（水天）に会いに行くところであった。（一）その時ナーラダは彼に言った。

『あなたはどこに行こうとしているのか。御者よ、自分の用でか、それともインドラの命令でか。(二)』
道を行くナーラダにこのように問われたマータリは、自分の用事をありのままますべてナーラダに（異本による）告げた。(三) するとその聖者は彼に言った。
『いっしょに行こう。私もまた水の主（ヴァルナ）に会うために天界を出たのである。(四) 私はあなたに地界を見せて、すべてを説明しよう。そこに誰か婿を見つけて選ぼう。マータリよ。(五)』
それから偉大なマータリとナーラダの両者は、地中に飛び込んで、世界守護神である水の主に会った。(六) そこでナーラダは、神仙にふさわしいもてなしを受けた。そしてマータリも、大インドラにふさわしいもてなしを受けた。(七) 両者は心から喜び、用向きを知らせて、ヴァルナに別れを告げ、竜の世界を遍歴した。(八) ナーラダは地中に住む一切の生類について、残らずすべて御者に説明した。(九)
ナーラダは言った。
『友よ、あなたは息子と孫たちに囲まれたヴァルナを見る。あらゆる面ですばらしく、豪華な水の主の住居を見なさい。(一〇) ここにいるのが、水の主ヴァルナの聡明な息子である。彼は徳性と行動と清さの点で父をも凌駕する。(一一) この蓮の眼をしたプシュカラという息子は父に愛されている。彼は容姿端麗で、ソーマ神の娘に夫として選ばれた。(一二) 彼女はジョーツナーカーリーと呼ばれ、容姿にかけて吉祥天（シュリー）に匹敵する。牡牛（水）の息子である

彼は、アーディティヤ（太陽神）の最年長の息子にされたと伝えられる（原文疑問）。(一三)
すべて黄金造りの、ヴァールニー（ヴァルナの妃、酒の女神スラーとも呼ばれる）の御殿を見なさい。彼女を得て、神々（スラ）は神性（スラ）を得た。神々の主の友よ。(一四) マータリよ、ここに輝く一切の武器が見られるが、それらは王国を奪われた魔物たちのものだ。(一五) マータリよ、それらは不滅であり、方々転々として、神々に得られた。それらを用いるには強い力が必要とされる。(一六) マータリよ、ここには羅刹の類と鬼霊（ブータ）の類がいる。彼らは神的な武器を持っていたが、古（いにしえ）の神々に滅ぼされた。(一七) ここには、ヴァルナの湖（うみ）に、大きな輝きを有する〔海中の〕火が存する。また、無煙の火に満ちたヴィシュヌの円盤がある。(一八) ここに、世界を滅するために作られた、サイの角（ガーンディー）で作った弓がある。それは常に神々に守られている。それがガーンディーヴァ弓である。(一九) それは用いられるべきことが起きると、必ずや常に十万の〔弓の〕力を発揮する。(二〇)
これがヴェーダを唱える梵天により作られた、最初に生じた杖（ダンダ）である（これが「ブラフマ・ダンダ」（梵杖）であろう）。それは羅刹のような王たちのうちの、処罰しがたい者たちを処罰する。(二一) これは、大インドラに作られた（異本による）人間の王たちの武器である。水の王の息子たちがその輝かしい武器を持っている。(二二) ここ蓋（きぬがさ）の間にあるのは、水の王の傘である。それは雲のように、一面に冷たい水を雨降らしている。(二三) この傘から降る水は、月のように清浄である。しかし、それは闇におおわれて見えない。(二四) マータリよ、ここで多くの驚異を見ることができる。しかし、あなたのなすべきことを妨げるから、ぐずぐずせずに行こう。(二五)』

（第九十六章）

ナーラダは続けた。

『竜の世界の臍（中心）のところに、パーターラと呼ばれる都市がある。そこにはダイティヤとダーナヴァ（魔類）が住む。（一）動不動のいかなる生類でも、水とともにそこに入ると、恐怖に苦しみ、大声で叫ぶ。（二）ここでは阿修羅である火（海中の火）がいつも水を食べて燃えている。それは自制した行動をし、自分の限界を知っている。（三）神々は敵を滅ぼし、甘露を飲んでからそれをここに置いた。ここから月の満ち欠けが見られる。（四）ここで、月相の変わり目ごとに、神聖なる馬の頭が現われる。それは金色に輝き、水により世界を満たす。（五）

ここでは、すべての水を体とするものが落ちる（パタンティ）から、それ故、この最高の都市はパーターラと呼ばれている。（六）世界を益するアイラーヴァタ（インドラの象）はここから冷たい水を取って雲に注ぎ、それを大インドラは雨として降らせる。（七）ここに、多様な姿をした種々の鯨たちが住む。それらは水中で月光を飲み、水を移動する。（八）パーターラに住む者たちは、太陽の光線に貫かれて昼間は死に、夜中に再生する。御者よ。（九）月は光線に包まれて常にここに昇り、甘露に触れてから、生類に触れてよみがえらせる。（一〇）

ここには、インドラに栄光を奪われた魔物たちが住む。彼らは非法に専念し、カーラ（時間、破壊神）に苦しめられて束縛されている。（一一）ここには一切の生類の偉大な主であるブータ

パティ（シヴァ）が、一切の生類の繁栄のために、最高の苦行を行じている。（一二）

ここに、牛の誓戒を守るバラモンたちがいる。彼らは偉大な聖仙で、ヴェーダの学習と伝承に苦労し、生命を捨てて天界を獲得した。（一三）常にいかなるところでも寝て、いかなるものをも食べ、いかなるものをも着る者が、ここで「牛の誓戒を守る者」と呼ばれる。（一四）

象王アイラーヴァタ、ヴァーマナ、クムダ、アンジアナ、これらの最高の象たちはスプラティーカの家系に生まれた。（一五）

マータリよ、見よ。もしここに美質の点であなたの気に入る婿がいたら、我々は努力して彼のもとに行き、婿に選ぼう。（一六）ここに、美々しく輝いている卵が水中に置かれている。それは生類の創造以来、壊れることも動くこともない。（一七）私の知る限り、その誕生や創造は語られたことがない。誰もその父や母を知らない。（一八）終末の時、それから大火が生じ、動不動のものを含む三界すべてを焼くであろうと言われている。マータリよ。（一九）』

カヌヴァは続けた。

「マータリはナーラダの言葉を聞くと、『ここには私の気に入るものは誰もいない。すぐに他に行ってくれ』と答えた。（二〇）

（第九十七章）

ナーラダは言った。

『これはヒラニヤプラと呼ばれる大都市であり、幾百の幻力で動きまわるダイティヤとダーナヴァ（魔類）に属する。（一）マヤ（悪魔の建築師）が思考（意）によって設計し、ヴィシュヴァカルマン（一切の造者）が少なからぬ努力により建設したものである。それはパーターラの表面に建っている。（二）かつてここに、恩寵を与えられた勇猛なダーナヴァたちが住んでいた。彼らは幾千の幻力を発揮し、強力であった。（三）インドラや、その他ヴァルナ、ヤマ、クベーラたちも、彼らを支配下に置くことはできなかった。（四）ヴィシュヌの足から生じたカーラカンジャという阿修羅たちや、梵天の足（異本による）から生じたヤートゥダーナという悪魔（ナイルリタ）たちがここにいる。（五）彼らは牙を持ち、恐ろしい姿で、疾風のように勇猛である。幻力と精力をそなえ、自分たちを守って住んでいる。（六）また、ニヴァータカヴァチャという、好戦的なダーナヴァたちがいる。あなたも知るように、インドラは彼らを制することができない。（七）マータリよ、あなたと息子のゴームカと、神々の王インドラとその息子は、幾度も彼らにうち破られた。（八）

マータリよ、金銀でできた家々を見よ。それらは〔建築の〕規定に基づく仕事により仕上げられている（原文疑問）。（九）瑠璃により緑色、珊瑚により輝かしく、アルカスパティカー（水晶）のように白く、ダイヤモンドのように輝かしい。（一〇）それらは土や木や石でできているように見えた。あるいは星々のように見えた。（一一）太陽のようにも見え、燃える火のようにも見えた。宝石をちりばめた格子窓で多彩であり、高くそびえ、密集している。（一二）その形状、素材、特性を表現することはできない。それらは完成し、大きさと美質をそなえている。（一三）ダイティヤたちの遊園を見よ。また寝台、宝石をちりばめた高価な食器、座席を見よ。（一四）滝のある雲のような山々、望みのままに花と実をつけ、自由に移動する樹々を見よ。（一五）マータリよ、ここに誰かあなたの気に入る婿はいるか。あるいは、もしあなたが望むなら、地〔底界〕のうちのどこか他の場所に行こうか。（一六）』

カヌヴァは続けた。

「そのように言うナーラダに対し、マータリは答えた。

『神仙よ、私は神々に不快なことはできない。（一七）というのは、神々とダーナヴァたちは、常に敵対している兄弟である。どうして私が敵方と親縁関係になることを喜ぶか。（一八）他へ行った方がいい。私はダーナヴァたちを見ていられない。私はどうしても彼女を〔適切な者に〕やりたいのだ。（一九）』

（第九十八章）

ナーラダは言った。

『これが蛇を食う鳥スパルナ（金翅鳥）たちの世界である。勇猛さと飛行において、また重荷を運ぶ際に、彼らには疲労は存しない。（一）御者よ、この一族はヴィナターの息子（ガルダ）の六名の息子たちによって発展した。すなわちマータリよ、スムカ、スナーマン、スネートラ、スヴァルチャス、鳥の王スルーパ、スバラ。以上、ヴィナターの一族を支える者たちにより、速やかに、幾百幾千という鳥の王の高い家系は繁殖した。彼らはまたカシャパ（造物主の名。ヴィナターの夫）

の家系にも属し、その栄光を高めるものである。(二一四) 彼らはすべて繁栄し、卍(まんじ)の印がある。すべて繁栄を望み、力を保持している。(五) 彼らはその行為の点で王族(クシャトリヤ)であり、情け容赦なく蛇を食べる。親族（蛇とガルダは親族）を滅ぼすことにより、清浄な状態を得ることはない。(六)(七一一五略) マータリよ、もしいずれかがよいと思わないなら、他へ行こう。あなたが好ましい婿を見出すような場所に連れて行ってあげよう。(一六)』

（第九十九章）

ナーラダは言った。

『これがラサータラという第七の地底界である。そこに、甘露(アムリタ)から生まれたスラビという牛族の母がいる。(一) 彼女はいつも地上の最上のものを生み出す乳を出している。それは六味の精髄によって、一つの最高の味となっている。(二) この非の打ち所のない牝牛は、かつて祖父(ピターマハ)（梵天）が甘露に満腹し、精髄を吐き出した時、その口から生じた。(三) 地面に落ちた彼女の乳の流れから、乳をたたえた湖が作られた。それは最高に浄化するものである。(四) その周囲は花が咲いたような泡でおおわれていた。そこに「泡を飲む」最高の聖者たちが、泡を飲みつつ住んでいる。(五) マータリよ、彼らは泡を食べて生活するから、「泡を飲む者」と名づけられる。彼らは激しい苦行を行なっており、神々も彼らを恐れる。(六) マータリよ、スラビから他の四頭の牝牛が生まれ、すべての方角に住んでいる。それらは諸方の守護者として、諸方を保持していると伝えられる。(七) スラビの娘スルーパーは東方を守る。ハンサカーは南方を守る。(八) スバドラーはヴァルナの方角である西を守る。この牝牛は常に強力で一切の姿をとる。マータリよ。(九) サルヴァカーマドゥガーという牝牛は北方を守る。北方は神聖な方角で、イラヴィラの息子（クベーラ）に支配されている。(一〇)

神々は阿修羅たちとともに、マンダラ山を攪拌棒にして、これらの牝牛たちの乳が混じった海（乳海）の水を攪拌した。(一一) マータリよ、そしてヴァールニー（酒の女神）、ラクシュミー（吉祥天）、甘露(アムリタ)、馬の王ウッチャイヒシュラヴァス、宝珠カウストゥバが取り出された。(一二)

スラビは乳を出し、スダーを食する者たちにはスダーを、スヴァダー（祖霊への供物）を食する者たちにはスヴァダーを、アムリタを食する者たちにはアムリタをもたらす。(一三) この点につき、ラサータラに住む者たちは、かつて詩句(ガーター)を唱えた。その古い詩句は、世間において、賢者たちにより聞かれ、唱えられている。(一四)

「竜の世界においても、天界においても、天宮(ヴィマーナ)においても、トリヴィシタパ（インドラの世界）においても、ラサータラにおけるほど生活は快適ではない。(一五)」』

（第百章）

ナーラダは言った。

『これがヴァースキ（竜王の名）に守られたボーガヴァティーという都である。それは神々の王の最高の都アマラーヴァティーのようである。(一) ここにシェーシャ竜が住む。強力な彼は、世にも優れた苦行により、常に大地を支えている。(二) 彼は白い山のような形状で、種々の

飾りをつけ、千の頭を持ち、火焔の舌を持ち、大力である。(三) ここに、スラサーの息子である竜たちが安楽に住んでいる。彼らは種々の姿をし、種々の飾りをつけている。(四) 宝玉、卍、円盤の印をつけ、水瓶の印をつけている。その数は数千、すべて強力で、その性格は猛々しい。(五) ある蛇たちは千の頭を、ある者たちは五百の頭を、またある者たちは百の頭を、ある者たちは三つの頭を持つ。(六) ある者たちは十の頭を、ある者たちは七つの頭を持つ。彼らは大きな傘状の頸部を持ち、巨大な体を持ち、山のようにとぐろを巻いていた。(七) 一つの家系の竜たちが、幾千、百万、一億もいる。主要な者を挙げるから聞きなさい。(八)

ヴァースキ、タクシャカ、カルコータカ、ダナンジャヤ、カーリーヤ、ナフシャ、カンバラ、アシュヴァタラ、(九) パーヒヤクンダ、マニ、アプーラナ、カガ、ヴァーマナ、エーラパトラ、ククラ、ククナ、(一〇) アーリヤカ、ナンダカ、カラシャ、ポータカ、カイラーサカ、ピンジャラカ、アイラーヴァタ、(一一) スマノームカ、ダディムカ、シャンカ、ナンダ、ウパナンダ、アープタ、コータナカ、シキン、ニシュトゥーリカ、(一二) ティッティリ、ハスティバドラ、クムダ、マーリヤピンダカ、二名のパドマ、プンダリーカ、プシュパ、ムドガラパルナカ、(一三) カラヴィーラ、ピータラカ、サンヴリッタ、ヴリッタ、ピンダーラ、ビルヴァパトラ、ムーシカーダ、シリーシャカ、(一四) ディリーパ、シャンカシールシャ、ジョーティシュカ、アパラージタ、カウラヴィヤ、ドリタラーシトラ、クマーラ、クシャカ、(一五) ヴィラジャス、ダーラナ、スバーフ、ムカラ、ジャヤ、バディラ、アンダ、ヴィクン

ダ、ヴィラサ、スラサ。(一六)

以上、及びその他多くの者がカシャパの息子たちであると伝えられる。マータリよ、見よ。このうちで誰か婿としてあなたに気に入る者はいるか。(一七)』」

カヌヴァは続けた。

「マータリは注意深く、ある竜をじっと見つめて、ナーラダにたずねた。それが気に入ったようであった。(一八)

『カウラヴィヤとアーリヤカの前に立っている者は、輝きを放ち、見目麗しい。彼は誰の一族に属するか。(一九) 誰が彼の父母であるか。彼はいかなる蛇の家系に属するか。彼はいかなる家系に、大きな旗のように立っているのか。(二〇) 精神統一、平静さ、容姿、若さにより、彼は私の気に入った。神仙よ、グナケーシーの夫として最高である。(二一)』

スムカ（竜の名）を見て、マータリが気に入ったのを知り、ナーラダは彼の優れた点と生まれと行為を告げた。(二二)

『彼はアイラーヴァタの一族に生まれたスムカという名の竜王である。彼はアーリヤカの孫（息子の息子）であり、ヴァーマナの娘の子である。(二三) マータリよ、彼の父はチクラという竜である。彼は最近ガルダ鳥によって殺された。(二四)』

それからマータリは心から喜んでナーラダに言った。

『友よ、この最高の竜は婿として私の気に入った。(二五) 私は彼に満足した。私の愛しい娘をこの竜王に与えるよう、努力して下さい。聖者よ。(二六)』

（第百一章）

ガルダ鳥をこらしめるヴィシュヌ

ナーラダは言った。

『このマータリという御者は、インドラの親しい友人である。彼は清潔で、徳性と美質をそなえ、威光を持ち、精力あり強力である。(一) 彼はインドラの友であり、顧問であり、御者でもある。連戦において、その力はインドラに引けを取らない。(二) 彼は神々と阿修羅の戦いにおいて、千頭の馬をつないだ最高の戦車ジャイトラを、ただ思念するだけで操縦する。(三) インドラは、マータリが馬たちにより征服した敵たちを、その両腕により征服する。マータリが先に敵を攻撃して、それからインドラが攻撃するのである。(四)

マータリの娘は美しい尻をし、容色にかけて地上に並ぶ者がない。彼女は善性と徳性と美質をそなえ、グナケーシーという名で知られている。(五) 神のように輝く方よ、彼が努力して三界を探しまわっていた時、あなたの孫のスムカが、娘の夫として彼の気に入りました。(六) 最高の蛇である親愛なるアーリヤカよ、もしあなたがよろしければ、ぐずぐずせずに、速やかに娘を受け入れる決心をしなさい。(七) ヴィシュヌの家におけるラクシュミー(吉祥天)のように、火神の家のスヴァーハーのように、美しい胴のグナケーシーがあなたの家の嫁になるように。(八) それ故あなたは、孫のためにグナケーシーを受け取りなさい。彼女と彼とは似合いである。シャチーとインドラとが似合いであるように。(九) 彼には父はいないが、

その美質により我らは彼を選んだ。あなたとアイラーヴァタに対する尊敬の念から、そしてまたスムカの徳性、清潔さ、自制などの美質により。(一〇) あのマータリ自身がやって来て、娘を与えようと努力しているのだから、あなたも彼に敬意を表すべきです。(一一)』

カヌヴァは続けた。

「自分の息子は死んだが、孫が婿に選ばれたので、アーリヤカは悲しむとともに喜んで、ナーラダに言った。(一二)

『神仙よ、あなたのお言葉が私にとって有難くないはずはない。インドラの親友である彼〔と親類になること〕を誰が望まないだろうか。(一三) しかし、偉大な聖者よ、その土台が弱いから私は考えこんでいるのです。輝きに満ちた友よ、彼の父親である私の息子は、ガルダに食われました。それ故、我々は悲嘆に暮れております。(一四) また、ガルダは立ち去る時に言いました。「一カ月後に俺はスムカを食べるであろう」と。主よ。(一五) それは必ずやその通りになるでしょう。我々は彼の決意を知っています。そこで、スパルナ(ガルダ)の言葉により、我々の喜びは失せました。(一六)』

しかしマータリは彼に言った。

『私は決意した。あなたの孫スムカは婿として選ばれた。(一七) その蛇は、私やナーラダとともに行き、三界の主、神々の主であるインドラに会うべきだ。(一八) 彼の寿命の残りがどうであるか知ろう。そしてスパルナを妨害しよう。最上の者よ。(一九) スムカは私とともに神々の主のもとに行くべきである。目的を成就するために。あなたに幸あらんことを。蛇よ。

(二〇)」

そこで威厳に満ちた彼らはすべて、スムカを連れて、輝きに満ちて座している神々の王インドラに会った。(二一)たまたまそこに、四本の腕を持つ尊いヴィシュヌ神がいた。そこでナーラダは、マータリに関することをすべて告げた。(二二)するとヴィシュヌは、世界の主であるインドラに言った。

『彼に甘露(アムリタ)を与えよ。神々に等しくしなさい。(二三)インドラよ、マータリがナーラダとスムカとともに、あなたの願いにより、望み通りの願望を得るように。(二四)』

そこでインドラは、ガルダの勇猛さを考えて、ヴィシュヌに言った。『あなた自身で与えなさい』と。(二五)

ヴィシュヌは言った。

『あなたは動不動の全世界の主である。あなたが与えたのに、誰がそれを無効にできようか。主よ。(二六)』」

カヌヴァは続けた。

「そこでインドラはその蛇に最高の長寿を与えた。しかしインドラは彼が甘露(アムリタ)を飲むようにはしなかった。(二七)しかしその恩寵を受けて、スムカは美しい顔を持つ者(スムカ)となった。そこで彼は結婚し、望みのままに家に帰った。(二八)そしてナーラダとアーリヤカも、目的がかなって喜び、輝きに満ちた神々の王に挨拶してから引き返した。(二九)」

(第百二章)

カヌヴァは続けた。

「バーラタよ、それから強力なガルダは起こったことを聞いた。インドラが竜に長寿を与えたことを。(一)スパルナ鳥(ガルダ)は最高に怒り、翼のたてる強風により三界を悩ませ、インドラのもとに飛んで行った。(二)

ガルダは言った。

『神よ、あなたは前に自分の意志で私に〔蛇を食う〕恩恵を与えながら、私が飢える恐れがあるのに、どうして私を蔑(ないがし)ろにして、そのようにふるまったのか。(三)万物の主である配置者(ダートリ)が、一切の生類を創造してこの方、私の餌食を定めた。どうしてあなたはそれを妨げるのか。(四)私はこの大蛇を選び、期日を定めた。神よ、私はこの蛇により多くの子供たちを養わなければならない。(五)彼が不死身になれば(異本による)、私は他の者を殺すことはできない。神々の王よ、あなたは勝手に、好きなようにして遊んでいる。(六)私は今や死ぬであろう。私の取り巻きも、家にいる私の従者たちも死ぬであろう。インドラよ、喜ぶがよい。(七)しかしインドラよ、私はそれに値するのだ。私は三界の主でありながら、他者(ヴィシュヌ)の従者となっている。(八)神々の主よ、あなたがいる場合、ヴィシュヌは私の拠り所ではない。というのは三界の王ヴァーサヴァよ、あなたに永遠の王権があるのだから。(九)

私の場合も、ダクシャの娘が母でありカシャパが父である。私もまた力により全世界を担うことができる。(一〇)私の力は広大で、すべての生類はそれに対抗しがたい。私もまた、

悪魔との戦いにおいて非常に大きな業績をあげた。(二一)私もまた、シュルタシュリ、シュルタセーナ、ヴィヴァスヴァット、ローチャナームカ、プラサバ、カーラカークシャなどの悪魔を殺した。(二二)

しかし、私があなたの弟(ヴィシュヌ)の旗の上に止まり、苦労して仕え、彼を運ぶので、それであなたは私を軽蔑するのか。(二三)他の誰が私ほど重荷に耐えるか。他の誰が私より強力であるか。私は優れているのに、彼とその親族を運ぶのである。(二四)私はあなたに蔑ろにされ、食物を奪われたのだから、あなたと彼の私に対する尊敬は失われてしまった。インドラよ。(二五)これらの力と勇武に満ちた神々がアディティに生まれた。彼らすべてのうちで、あなたは特に強力であるという。(二六)しかし私は、疲れることもなく翼の一部であなたを運ぶ。静かによく考えて見なさい。この場合、誰が最も強力であるかと。(二七)』」

カヌヴァは続けた。

「ガルダ鳥の威しの言葉を聞いて、車輪を持つ神(ヴィシュヌ)は揺るぎなきガルダを動揺させて、彼に告げた。(二八)

『ガルダよ、お前は非常に弱いのに、自分のことを強力だと考えている。鳥よ、吾輩の面前で自慢してはならぬ。(二九)三界すべてといえども、私の体を支えることはできない。まさに私が自分自身で自分を支えている。そしてお前を支えている。(三〇)試しに私の右腕だけを担ってみよ。もしその一本を担うことができたら、お前の自慢は正当である。(三一)』

そこでその尊い神はガルダの肩に腕をのせた。ガルダは重さに苦しみ、動揺し、意識を失って倒れた。(三二)その一本の腕の重さを、山々を含む地球全体の重さのように考えた。(三三)しかしこの上なく強力なヴィシュヌは、彼を力まかせに苦しめなかった。そして彼の生命を奪わなかった。(三四)その鳥は重荷に苦しみ、口を開き(異本による)、体を落とし、狼狽し、動揺し、多くの羽根を落とした。(三五)ガルダ鳥は頭を下げてヴィシュヌに敬礼して、狼狽し、動揺し、落胆し、やっとのことで言った。(三六)

『尊い神よ、世界の精髄に等しい、気ままに拡げた美しい腕により、私は地面に押しつぶされました。(三七)神よ、私をお許し下さい。あなたの旗にいて、力の熱に燃やされて、動揺している愚かな鳥を。(三八)主なる神よ、私はあなたの力を知りませんでした。それ故、私は自分の力が他の者たちと比較にならないと考えていました。(三九)』

すると尊い神はガルダに好意をかけ、『二度とこのようにしてはならぬ』と愛情をこめて彼に告げた。(四〇)

ガーンダーリーの息子よ、あなたもまた、戦いにおいてあの勇猛なパーンドゥの息子たちを攻撃しない限り生きながらえる。わが子よ。(四一)風神の息子である大力のビーマは戦士たちの最上者である。そのビーマと、インドラの息子アルジュナとは、戦いにおいて何者を殺さないであろうか。(四二)ヴィシュヌ、ヴァーユ(風神)、インドラ、ダルマ、アシュヴィン双神。あなたはどうしてこれらの神々と対戦することができるか。(四三)そこで王子よ、敵対することをやめよ。和平を結べ。ヴァースデーヴァ(クリシュナ)を拠り所として一族を守るがよい。(四四)この大苦行者ナーラダがこの一切者であるヴィシュヌの、すなわちここにいる円

盤と棍棒を持つ方の、偉大さの（異本による）目撃者である。（三五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ところがドゥルヨーダナは、それを聞くとため息をつき、眉をひそめ、カルナを見て、大声で笑った。（三六）その邪悪な男は、カヌヴァ仙の言葉を嘲って、象の鼻のような腿をたたいて次のように言った。（三七）

「大仙よ、私は主が定めたようになる。自然的にそうなるように、帰趨（命運）のままになる。おしゃべりが何になるか。（三八）」

（第百三章）

ガーラヴァ物語――ヴィシュヴァーミトラが梵仙になる

ジャナメージャヤはたずねた。

「ドゥルヨーダナは自分の益にならぬことに固執し、他人の財産に対する貪りに迷い、卑しい人々に満足し、死に急いでいる。（一）親族たちの不幸をもたらし、縁者たちの悲しみを増大させる。親しい人々に苦しみを与え、敵たちの喜びを増大させる。（二）縁者たちはどうして友情により、悪しき道に立つ彼を制止しないのか。また、友愛に満ちた尊い祖父（ビーシュマ。ヴィヤーサという説もある）はどうして制止しないのか。（三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

尊いビーシュマは適切な言葉を述べた。ナーラダも色々と語った。それを聞きなさい。（四）

ナーラダは言った。

「こちらの言うことをよく聞いてくれる友は得がたい。有益な〔ことを言う〕友は得がたい。というのは、〔悪い〕友がいる場合、〔よい〕友はいないから。（五）クルの王子よ、友たちの〔言葉は〕聞かれるべきであると私は思う。強情を張ってはならぬ。強情さは非常に危険である。（六）ここでも、ガーラヴァが強情さのために失敗したという昔話が例にあげられる。（七）

かつてダルマ（正義の神）は、苦行しているヴィシュヴァーミトラを試すために、尊い聖仙ヴァシシタとなって、自ら彼に近づいた。（八）バラタ族の王よ、ダルマは七仙の一人（ヴァシシタ）に変装して、飢えて食を求め、カウシカ（ヴィシュヴァーミトラ）の隠棲所を訪れた。（九）そこでヴィシュヴァーミトラはあわててチャル（米などをバターやミルクで調理したもの）を作ろうと努力した。苦労して最高の料理を出そうとしたが、相手はそれを待てなかった。（一〇）彼は他の苦行者たちに与えられた食物を食べた。その時、ヴィシュヴァーミトラが、非常に熱い食物を持って近づいて来た。（一一）ところが尊者は、『私はすでに食べた。しばらく待っていなさい』と告げて、行ってしまった。王よ、それから光輝に満ちたヴィシュヴァーミトラは立ったままでいた。（一二）誓戒を厳守する（異本による）彼は、頭上にその食物を両腕で持って、柱のように動かずに、

風を食べて（断食して）立っていた。(二三) ガーラヴァという隠者が、彼に対する尊敬と愛情により、彼によかれと望んで、努力して彼に仕えていた。(二四)

さて、満百年が過ぎた時、ダルマは再びヴァシシタに変装し、食物を求めてカウシカのもとに近づいた。(二五) 彼が見ると、英邁な大仙ヴィシュヴァーミトラは、風を食べ、頭で食物を支えながら立っていた。(二六) それからダルマは、まだ熱くて新鮮な食物を受け取って食べた。そして『私は満足した。梵仙（バラモン出身の聖仙）よ』と彼に告げて、その聖者は立ち去った。(二七) その時ヴィシュヴァーミトラは、ダルマの言葉により、王族（クシャトラ）の身分を離れてバラモンの位に達し、大いに喜んだ。(二八)

ところでヴィシュヴァーミトラは、弟子である苦行者ガーラヴァの奉仕と献身的な愛情に満足して、彼に言った。

『可愛い弟子よ、私はお前が去ることを許す。望みのままに行くがよい、ガーラヴァよ。(二九)』

ガーラヴァはそう言われて喜び、光輝に満ちた最高の聖者ヴィシュヴァーミトラに優美な声で答えた。(三〇)

『師（グル）の行為をしていただいたことに対し、謝礼として先生に何をさし上げたらよいでしょうか。人間の行為（祭式）は謝礼をともなって完成しますから。(三一) というのは、謝礼を与える者は目的を成就する（異本による）。謝礼は天界における祭祀の果報であり、寂静であると善き人々に説かれる。私は師のために何を持って来ましょうか。先生、おっしゃって下さい。

(三二)』

尊者ヴィシュヴァーミトラは、弟子の奉仕により自分は満足したと思い、何度も『行きなさい』と彼をうながした。(三三) しかしガーラヴァは、ヴィシュヴァーミトラに何度も『行きなさい』と言われても、『何をさし上げたらよいでしょうか』と幾度も繰り返して言った。(三四) ヴィシュヴァーミトラは苦行者ガーラヴァの度重なる強情さによって、いささか怒って、次のように告げた。(三五)

『月光のように白く、それぞれ黒い耳をした、八百頭の馬を私にくれ。ガーラヴァよ、ぐずぐずしないで行け。(三六)』

（第百四章）

ガーラヴァを助けるガルダ鳥

ナーラダは続けた。

「英邁なヴィシュヴァーミトラにこのように言われて、ガーラヴァは座ることも寝ることも食事をすることもできなかった。(一) 彼は骨と皮になり、蒼ざめ、もの思いにふけり、悲嘆に暮れ、この上なく悲しみ、後悔にさいなまれた。(二)

『私にとって、どこに裕福な友がいるか。どこに財産があるか。どこに蓄えがあるか。月光のように白い八百頭の馬がどこにいるか。(三) 私にとって、どこに食物に対する望みがあろう。どこに幸福に対する望みがあろう。生きる望みすら断ち切られた。私にとって生命が何

になるか。(四) 私は海の彼岸、大地の遥か彼方に行って自殺しようか。私にとって生命が何になるか。(五) 財産がなく、目的を果たさず、種々の果報に捨てられ、負債を抱えている者にとって、どこに無欲による幸せがあるか。(六) 友たちの財産を享受し、望ましい友情を結びながら、恩返しができない者にとって、生きているより死んだ方がましだ。(七) やると約束して、なすべきことをしない者は、虚言により焼かれ、彼の慈善の行為は滅びる。(八) 嘘つきには美しさはない。嘘つきには子孫はない。嘘つきには主権はない。どうしてよい帰趨(運命)があろうか。(九) 恩知らずにどうして名声があろうか。どうして地位が、どうして幸福があろうか。恩知らずは信頼されるべきでない。恩知らずには贖罪はない。(一〇)

財産のない悪人は生きながらえない。悪人にどうして支え(原文疑問)があるか。(一一) この私は悪人で、恩知らずで、哀れな男で、嘘つきである。目的を成就しながら師が言われたことを行なわない。そこで私は、最高に努力してから、生命を捨てよう。(一二)

私はいまだかつて神々に何も請願したことがない。すべての神々は祭祀の執行において私を評価している。(一三) ヴィシュヌは最高の神であり、三界の主であり、クリシュナであり、寄る辺を持つ者たちの最高の寄る辺である。私はその神のもとに行こう。(一四) 彼はすべての神々や阿修羅を遍満し、彼により諸々の享受は確立する。私は努力して、その不滅なる偉大なヨーギンに会いたいものである。(一五)』

このように言われた時、彼の友である、ヴィナターの息子ガルダ鳥が現われた。その鳥は彼によかれと望み、喜び勇んで彼に言った。(一六)

『あなたは私の友である。友というものは、力がある時は、友たちの望んでいる願望をかなえるべきであると思う。(一七) そして私には力がある。バラモンよ。私は前もってあなたのことを、インドラの弟(ヴィシュヌ)に告げた。彼は私の望みをかなえてくれた。(一八) そこであなたは行くべきである。さあ、行こう。私は快適にあなたを大地の彼方に連れて行こう。ガーラヴァよ、ぐずぐずせずに行こう。(一九)』

(第百五章)

東方に行ったガルダ

スパルナ(ガルダ)は言った。

『ガーラヴァよ、私はその起源が知られない神によって教えられた。まず最初にどの方角を見に行ったらよいか言ってくれ。(一) 東方か、南方か、西方か、北方か。最高のバラモンであるガーラヴァよ、私はどこへ行こうか。(二) 全世界を繁栄させる太陽が昇るのは東方である。そこでサーディヤ神群の苦行が、薄明の時に行なわれる。(三) そこで、第一に叡智(マティ)が生じ、それによりこの世界は遍く満たされた。そこに法(ダルマ)の二つの眼があり、そこで法は確立する。(四) その口を通じて供物が(火中に)投じられ、一切の方角に広がる。それはまた、一日の道程の門である。最高のバラモンよ。(五) そこでダクシャの娘たちは、最初に生類を生んだ。その方角で、カシャパの息子たちは増大した。(六) その方角は神々の繁栄の源である。そこでインドラは神々の王位につく灌頂(かんじょう)式を受けた。そして神々はここで苦行を積んだ。

梵仙よ。(七) バラモンよ、このような理由でこの方角は「第一(プールヴァー)」(プールヴァーは「東」をも意味する)と呼ばれる。第一の時期に、最初に神々におおわれたから。(八) それ故、幸福を望む人は、古人(プールヴァ)たちが見ている間に、神聖な最初(プールヴァ)の儀式を行なうべきである。(九)

ここで、世界を在(あ)らしめた聖なる神は、最初にヴェーダを唱えた。ここでサヴィトリ(太陽神)は、ヴェーダ学習者に、サーヴィトリー讃歌を唱えた。(一〇) 最上のバラモンよ、太陽神(スーリヤ)はここでヤジュス(祭詞)を授けた。ここで、恩寵を得た神々は、祭祀においてソーマを飲んだ。(一一) ここで、供物を運ぶ(火)は満足し、自分の源(液体の供物。火は水から生じたとされる)を享受する。ここでヴァルナ(水天)は地底界(パーターラ)に寄る辺を求め、繁栄に達した。(一二) バラモンの雄牛よ、ここでかつて、古(いにしえ)のヴァシシタの誕生と確立と死があった。(一三) ここで聖音オームの百の分岐が生じた。ここで、ソーマを飲む聖者たちは、ハヴィルダーナ小屋(主な火壇の西側の場所)においてソーマを飲む。(一四) そこで多くの猪などの森の獣たちが犠牲(いけにえ)にされ、インドラにより神々の配分とされた。(一五) ここで昇る太陽は怒って、有害な人々、忘恩の人々、阿修羅たちをすべて殺した。(一六) これは三界の門である。天界と幸福の門である。以上が東の方角である。もしあなたが望むなら、そこへ行こう。(一七) 私がその人の言葉に従う時、その人に好ましいことをしなければならぬ。ガーラヴァよ、言いなさい。私はそこに行くであろう。しかし、また他の方角について聞きなさい。(一八)」

(第百六章)

(続いてガルダは南西北の説明をする。第百七章、第百八章、第百九章略)

ガーラヴァは言った。

「ガルダよ、竜王たちの敵よ、スパルナよ、ヴィナターの息子よ、ダールクシュヤよ、法(ダルマ)の二つの眼がある、東へ私を連れて行ってくれ。(一) まず最初に説明した東の方角に行きなさい。そこには神々が居るとあなたは告げた。(二) そこには真実と法があると、あなたはまさに語った。私はすべての神々と会いたい。アルナの弟(ガルダ)よ、私はそれらの神々を見ることを望む。(三)」

ナーラダは続けた。

「ガルダはそのバラモンに『乗りなさい』と言った。そこで聖者ガーラヴァはガルダに乗った。(四)

ガーラヴァは言った。

『蛇を食う者よ、飛行するあなたの姿は、朝の太陽の姿のように見える。(五) 樹々は翼のたてる風に打たれ、あなたの後を追って、共に進むかのようである。鳥よ、私はそこに樹々の進路を見る。(六) 鳥よ、海や森もろとも、山や森林もろとも、あなたは翼のたてる風で大地を引き寄せるかのように見える。(七) 翼の風で、絶えず強風が吹き、魚や蛇や鰐もろとも海水が空に持ち上げられるかのようである。(八) 同じ姿と顔をした魚たち、鯨(ティミ)、ティミンギラ(鯨を食う魚)、人面の蛇たちが攪拌されているかのようであるのを私は見る。(九) 大海の音により私の耳は聞こえなくなる。私は聞くことも、見ることもできない。自分が何をやろうとしているのかも忘れた。(一〇) どうかゆっくり行って下さい。バラモン殺しを犯すかも知れない。

友よ、太陽も方角も空も見えない。鳥よ。(二一)私はただ闇のみを見る。あなたの身体は見えない。鳥よ、あなたの両眼が美しい宝石のように光っているのが見える。(二二)あなたと私の身体は見えない。進むごとに水から火焔が燃え上がるのを見る。(二三)それは突然に私の両眼を襲って、再び静まる。それ故、引き返してくれ。長い時間飛行した。ヴィナターの息子よ。(二四)蛇を食べる者よ、私は進んで行っても何にもならない。高速の鳥よ、引き返してくれ。私はあなたの速さに耐えられない。(二五)私は師(グル)に八百頭の馬を約束した。月光のように白く、それぞれ黒い耳をした馬を。(二六)しかしそれを果たす道を見出せない。鳥よ。そこで自分の生命を捨てるより他に道がないのだ。(二七)私には財産は何もないし、財産のある友人もない。しかも、大きな財産によってもそれを果たすことはできない。(二八)』

ナーラダは続けた。

「このようにガーラヴァが非常に落胆して話しているのに対し、ガルダは飛行を続け、笑って答えた。(二九)

『梵仙よ、あなたはあまり賢明ではない。自殺しようと望むのだから。カーラ(時間、運命)は人が作るものではない。カーラは最高の主である。(三〇)どうしてあなたは前もって私に頼まなかったのか。願いがかなうよい方法がある。(三一)海岸に(異本による)リシャバという山がある。ガーラヴァよ、そこで休んで食事をしてから引き返そう。(三二)』」

(第百十章)

ナーラダは続けた。

「それから、バラモンとガルダ鳥は、リシャバ山の峰に下り、そこで苦行を積んだシャーンディリーというバラモン女を見た。(一)ガルダとガーラヴァは彼女に挨拶し、敬意を表した。そして彼女からも『ようこそ』と言われ、両者は座席に座った。(二)彼女により施食と聖句(マントラ)で神聖にされた御飯を速やかに食べてから、両者は食物で〔満腹し〕、惑わされ、地面で眠った。(三)

しばらくしてガルダ鳥は目覚め、出発しようとした。すると、自分の体から羽根が抜け落ちているのに気づいた。(四)その鳥は、顔と足はついていたが、肉の団子のようになってしまった。ガーラヴァは彼がそのようであるのを見て、落胆してたずねた。(五)

『あなたはここに来た結果として、どうしてそのようなことになったのか。我々はどのくらいの時間、ここに滞在しなければならないのか。(六)あなたは心で何か法(ダルマ)を損なうような悪いことを考えたか。あなたにはごくわずかの過失もないであろうが。(七)』

するとガルダはバラモンに答えた。

『バラモンよ、私はこの成就した女性を、造物主(梵天)や、偉大な神(シヴァ)や、永遠なるヴィシュヌや、ダルマ(法)やヤジュニャ(祀祭)のところに連れて行こうとした。彼女はそこに住むべきだと考えて。(八—九)

そこで私は、平伏して尊母にお願いする。私は本当に、あなたによかれと望み、気の毒になって、心であのように考えたのである。(一〇)だから、尊敬の念から私はあのようなあな

たに不快なことをしたのである。しかしよい行為にせよ悪い行為にせよ、寛大さによりお許し下さい。(一一)』

すると彼女は満足し、鳥の王とバラモンの雄牛に言った。

『恐れることはありません。ガルダよ、あなたはスパルナ（美しい翼を持つ者）でしょう。恐れを捨てなさい。(一二) わが子よ、あなたは私を侮辱しました。私は侮辱には我慢できません。私を侮辱するような悪者は諸世界から脱落するでしょう。(一三) 私はあらゆる不吉の相を離れ、非の打ち所がなく、よい行ないを守り、この最高の成就を得ました。(一四) 人はよい行ないにより法(ダルマ)を得る。よい行ないにより財産を得る。よい行ないにより繁栄を得る。よい行ないは不吉の相を滅ぼす。(一五)

そこで、鳥の主であるあなた様は、ここから望みのままに行かれるがよい。侮辱されるべき女といえども、決して侮辱してはいけません。(一六) あなたは前と同じように、勢力と精力をそなえるでしょう。』

それから彼の両翼はより強力になった。(一七) そしてシャーンディリーに別れを告げ、来た道を引き返した。しかしガーラヴァは、例のような姿の馬を手に入れることはできなかった。(一八)

その時ヴィシュヴァーミトラは進んで行くガーラヴァを見た。その話し手のうちの最上者は、ガルダの前で彼に告げた。(一九)

『バラモンよ、もしよければ、お前が自ら私に約束したものを引き渡す時が来た。(二〇) 私はもうしばらく待とう。バラモンよ、目的がかなうように道を見出しなさい。(二一)』

するとガルダが、ひどく悩んで落胆しているガーラヴァに言った。

『ヴィシュヴァーミトラが言ったことを、今、私は実際に聞いた。(二二) さあ、最高のバラモンよ、行こう。ガーラヴァよ、相談しよう。師にすべての財産を与えないでは、あなたは座ることができない。(二三)』

(第百十一章)

ヤヤーティはガーラヴァに娘を与える

ナーラダは続けた。

「その時、最高の鳥ガルダは、落胆したガーラヴァに言った。(以下、一―四略)

『財産なしでは、あなたが馬を得る見込みはない。誰か、王仙の家系に生まれた王に財産を求めなさい。都の人々を苦しめないで、我らの目的をかなえるような王に。(五) 月の子孫である家系に生まれた一人の王で、私の友人がいる。彼のところに行こう。彼のもとには地上における大金がある。(六) それはナフシャの息子である不屈の勇者ヤヤーティという王仙である。私が頼み、あなた自身が請願すれば、彼は与えるだろう。(七) 彼は財富の主（クベーラ）のような財産を持っていた。しかし賢明な彼は、このように布施することにより財産を清浄にした。(八)』

両者がこのように話して、適切なことを考えているうちに、プラティシターナにいるヤヤ

ーティ王のもとに着いた。（九）そこでガルダは、水などもてなしの品を受け、最高の食事を受けてから、来訪の理由を問われ、次のように言った。（一〇）

『ナフシャの息子である王よ、ここにいるのは私の友人で、苦行を積んだガーラヴァである。彼は何万年もの間、ヴィシュヴァーミトラの弟子であった。（一一）この尊いバラモンは、師から去ることを許された時、恩を返すことを望んで師に言った。

『師への謝礼としてあなたに何をさし上げたらよいでしょうか。（一二）』

彼から何度もたずねられ、師は少し怒って、彼の財産がわずかなことを知りながら、次のように言った。

『それぞれ黒い耳をした、純血種の、月のように輝く白馬を八百頭くれ。（一三—一四）ガーラヴァよ、もしよければ、それを師のためにくれ。』

苦行を積んだヴィシュヴァーミトラはこのように告げた。（一五）

そこでこのバラモンの雄牛は、その謝礼を払うことができず、大いに嘆き苦しみ、それ故あなたに寄る辺を求めたのである。（一六）人中の虎よ、もし彼があなたから施物を受ければ、苦悩は去り、師への謝礼を払い、大いなる苦行を行なうであろう。（一七）その苦行の配分をあなたにも与えるであろう（自分の積んだ苦行の力の一部を施者に廻向する）。自身の王仙としての功徳に満ちたあなたを更に満たすであろう。（一八）王よ、馬を与える者たちは、馬に生えている毛と同じだけの数の世界を獲得するであろう。（一九）彼は受けるにふさわしい器である。またあなたは、与えるにふさわしい器である。法螺貝にミルクを注ぐような〔適切な布施を〕しなさい（法螺貝にミルクが

生じることは、不可能なことのたとえとされる）。（二〇）』」

（第百十二章）

ナーラダは続けた。

「このように、ガルダが真実で最高の言葉を述べた時、王は何度も熟慮してから決意した。（一）幾千の祭祀を行ない、気前よく布施する施主である王、ヴァッツァとカーシの王であるヤヤーティは、親友のガルダとバラモンの雄牛ガーラヴァを見て、〔ガーラヴァは〕苦行を体現した者であり、その施物の要請は称讃されるべきものであると見て、そして、『この両者は他の太陽の家系に生まれた諸王を差し置いて私のもとに来た』と考慮して、次のように言った。（二—四）

『今日、私の生まれは実りあるものとなった。今日、私の一族は救われた。今日、私の国土はあなたによって救われた。非の打ち所のないガルダよ。（五）しかし友よ、聞いてもらいたい。あなたが前に知っていたようには、私は金持ちではない。私の財産は尽きてしまったから。友よ。（六）しかし鳥よ、あなたの来訪を無駄にすることはできない。また、この梵仙の希望を空しくすることもできない。（七）彼の目的をかなえるようなものを私は与えるであろう。やって来て、希望をかなえられずに帰る者は、〔受け入れ側の〕一族を燃やすから。（八）友ガルダよ、この世で、「下さい」と言うのに対し「ない」と言って希望をかなえないことほど悪いことはないと言われる。（九）重んぜられる人が、希望がかなえられず、目的を果た

さず、傷つけられるなら、彼は願いをかなえなかった者の（異本による）子々孫々までを害する。（一〇）

ところで、この私の娘は四つの家系を確立させる者で、神の娘のようであり、すべての法（ダルマ）を栄えさせる。（一一）その若い娘は、その容姿の美しさで、いつも神や人間や阿修羅たちに切望されている。それ故ガーラヴァよ、私の娘を受けなさい。（一二）王たちは彼女を妻とする婚資として、必ずや王国をも与えるであろう。いわんや八百頭の黒い耳の馬などたやすいことだ。（一三）あなたは私の娘のマーダヴィーを受け取りなさい。私は娘の子（孫）を持つことになろう。それが私の願いである。（一四）』

ガーラヴァはその娘を受け取ると、ガルダ鳥とともに、『またお会いしましょう』と告げて、娘を連れて出発した。（一五）ガルダ鳥は、『馬を入手する入口が得られた』と言って、ガーラヴァに別れを告げて、自分の住処に帰って行った。（一六）

鳥の王が去った時、ガーラヴァは娘とともに、婚資を贈れる王のことを考えながら進んで行った。（一七）彼はアヨーディヤーの、イクシュヴァークの家系に属する最高の王ハリアシュヴァのところへ行く決意をした。その王は強力で、四部よりなる軍隊をそなえていた。（一八）彼は国庫と穀倉と軍事力をそなえ、市民に愛され、バラモンに友好的である。彼は子孫を望み、寂静の生活をし、最高の苦行を行じている。（一九）バラモンのガーラヴァは、ハリアシュヴァに近づいて言った。

『王中の王よ、ここにいる私の娘は、子孫をたくさん生んで、一族を繁栄させます。（二〇）

ハリアシュヴァよ、婚資と引きかえに、彼女を妻として受け取りなさい。いかなる婚資であるか、あなたに告げましょう。それを聞いて、考慮して下さい。（二一）』（第百十三章）

ヤヤーティの娘、四人の男と交わる

ナーラダは続けた。

「それからハリアシュヴァ王はよくよく考えた。そして、その最高の王は、子孫を望んで、長く熱いため息をついて言った。（一）

『彼女は六つの盛り上がるべき場所は盛り上がり、七つの細くあるべき場所は細く、三つの深くへこむべき場所はへこみ、五つの赤くあるべき場所は赤い。（二）彼女は多くの神々や阿修羅たちの光であり、多くのガンダルヴァに見られ、多くの吉相をそなえ、多くの子孫を生むであろう。（三）彼女は息子として転輪聖王を生むことができる。最高のバラモンよ、私の財産を考慮して、婚資について述べよ。（四）』

ガーラヴァは答えた。

『それぞれ黒い耳をし、適切な土地で生まれた（純血の）、すばらしい体の、月のように白い八百頭の馬を私に下さい。（五）そうすればこの切れ長の眼の美しい女はあなたの息子たちを生むでしょう。火鑽（ひきり）棒が火を生み出すように。（六）』

ナーラダは続けた。

「王仙ハリアシュヴァは、その言葉を聞くと、愛欲にかられたが落胆して、最高の聖仙ガーラヴァに言った。(七)

『私はあなたの言ったような馬を二百頭だけ手もとに持っている。他の馬なら、私の〔領内に〕幾百頭となくうろついているのだが(異本による。五・一一六・二参照)。(八) ガーラヴアよ、そこで私は彼女との間に一人の息子を作りたい。この私の願望をかなえて下さい。(九)』

それを聞くと、その娘はガーラヴァに告げた。

『あるヴェーダ学者が私に一つの恩寵を授けました。(一〇)「子を生むたびにお前は処女(むすめ)にもどるであろう」という。そこであなたは私を王に与え、最高の馬たちを受け取りなさい。(一一) 四人の王たちにより、あなたの望む八百頭はすべて整うでしょう。そして私には四人の息子ができるでしょう。(一二) 最高のバラモンよ、師のために〔馬を〕集めなさい(異本による)。これが私の考えたことです。あるいは、お考えの通りになさって下さい。バラモンよ。(一三)』

娘にこのように言われて、聖者ガーラヴァはハリアシュヴァ王に次のように告げた。(一四)

『最高の人ハリアシュヴァよ、この娘を受け取りなさい。婚資の四分の一で、一人の息子を作りなさい。(一五)』

その王はガーラヴァに感謝してその娘を受け取った。そしてしかるべき場所と時において、望んでいた息子を得た。(一六) 彼はヴァスマナスという名で、ヴァス神群よりも富裕であった。そして富神(ヴァス)のような、財宝を与える王となった。(一七)

そして適当な時に、賢者ガーラヴァは再びもどった。もどって来て、心から喜んでいるハリアシュヴァに言った。(一八)

『王よ、あなたに朝日のような息子が生まれた。最高の人よ、他の王のところへ施物を求めに行くべき時である。(一九)』

ハリアシュヴァは約束を守り、男らしさを保ち、他の馬たちを得られなかったので、マーダヴィー(娘の名)を再び返した。(二〇) マーダヴィーは輝かしい王の富貴を捨て、望みのままに処女になり、ガーラヴァの後について行った。(二一) ガーラヴァは〔王に〕『馬たちをあなたのもとに預かって下さい』と告げ、娘とともにディヴォーダーサ王のもとに行った。(二二)

(第百十四章)

ガーラヴァは言った。

『カーシ国の強力な王で、ビーマセーナの息子のディヴォーダーサという王がいる。(一) 美しい女よ、そこへ行こう。おとなしくついて来なさい。嘆いてはいけない。その王は徳性あり、自制に専心し、約束を守る。(二)』

ナーラダは続けた。

「聖者ガーラヴァはその王に近づき、王に正しくもてなされてから、子孫を作るよう王をか

りたてた。（三）

ディヴォーダーサは言った。

『私はすでにそのことを聞いている。バラモンよ、詳しく話す必要はない。最高のバラモンよ、そのことを聞くやいなや、私はそのことを待ち受けていた。（四）他の王たちを差し置いて、このように私のもとに来られたということは、私にとって非常に光栄なことだ。それは疑いもなく実現する。（五）ガーラヴァよ、私にも同じだけの財産（馬）がある。私も彼女に一人の王子を生んでもらう。（六）』

ナーラダは続けた。

「最高のバラモンは、『承知した』と答えて、娘を王に与えた。王はその娘を、作法に従って受け取った。（七）その王仙は、太陽がプラバーヴァティーを愛するように彼女を愛した。火神がスヴァーハーを、インドラがシャチーを愛するように。（八）（九―一四略）

ディヴォーダーサ王がそのように愛している間、マーダヴィーはプラタルダナという一人の息子を生んだ。（一五）約定の時がやって来た時、尊者ガーラヴァがディヴォーダーサのもとに来て、次のように告げた。（一六）

『あなた様、娘を私に返して下さい。馬たちは預かっていて下さい。その間、私は婚資を求めて他へ行って来ます。王よ。（一七）』

そこで徳性あるディヴォーダーサ王は、約束に従って、約定の時に、ガーラヴァに娘を返した。（一八）」

（第百十五章）

ナーラダは続けた。

「約束に忠実な誉れ高いマーダヴィーは、前と同じように、富貴を捨て、処女にもどり、バラモンのガーラヴァの後に従った。（一）自分の目的に専心するガーラヴァは、熟慮して、アウシーナラ（ウシーナラ）王に会うために、ボージャ族の都に行った。（二）彼はそこに行き、不屈の勇者である王に言った。

『ここにいる娘は、あなたのために二人の王子を生むでしょう。（三）王よ、あなたは彼女との間に太陽と月のような二人の息子を作って、この世とあの世において目的を成就した者になるでしょう。（四）しかし一切の法（ダルマ）を知る人よ、あなたは婚資として、それぞれ黒い耳をした月のように輝く四百頭の馬を私に与えるべきである。（五）この企ては師のためである。私には馬は用はない。大王よ、もしできるならそうして下さい。ためらってはなりませぬ。（六）王仙よ、あなたには息子がいない。王よ、二人の息子を作りなさい。息子という舟により、祖霊たちと自分とを救いなさい。（七）というのは王仙よ、息子という果報を享受する者は天界から落ちることはない。息子のいない者たちが行く恐ろしい地獄に行くこともない。（八）』

ガーラヴァがこのように、またその他にも色々と言うのを聞いて、ウシーナラ王は彼に答えた。（九）

『ガーラヴァよ、あなたが言った言葉を聞いた。しかしバラモンよ、私の心は乗り気であるが、運命は強力である。(一〇) 最高のバラモンよ、私にはそのような馬が二百頭だけいる。他の馬なら、私の〔領内に〕幾千頭となくうろついているのだが。(一一) ガーラヴァよ、私もまた彼女との間に一人の息子を作りたい。バラモンよ、私も他の王たちがたどった道に従いたい。(一二) 婚資の点でもあなたのために同じことをしたい。最高のバラモンよ。だが私の財産は市民と地方民たちのためのもので、私個人の楽しみのためのものではない。(一三) 王が自分の欲望のために他人の財産を〔婚資として〕引き渡すなら、彼は法（ダルマ）や名声を得ることはない。徳性ある人よ。(一四) そこで私は彼女を受けよう。あなたは私にその神の子のような娘を与えよ。私に一人の息子が生まれるように。(一五)』

このように色々と快いことを言うウシーナラ王に対し、最高のバラモンであるガーラヴァは敬意を表した。(一六) ガーラヴァはウシーナラに娘を引き渡してから森へ行った。福徳を積んだ人が繁栄を楽しむように、王は彼女を得て楽しんだ。(一七)(一八―一九略)

それから、適切な時に、朝日のように輝く息子が彼に生まれた。彼は最高の王になり、シビという名で有名になった。(二〇)

そこでバラモンのガーラヴァは、彼に近づいて、その娘を取りもどしてから、出発してヴィナターの息子（ガルダ）に会った。(二一)」

（第百十六章）

ナーラダは続けた。

「ガルダは笑って、ガーラヴァに言った。

『バラモンよ、おめでとう。あなたは目的を達したようだ。(一)』

ガーラヴァの方はガルダの言葉を聞いて、『その仕事はまだ四分の一残っている』と告げた。(二) しかし最高の鳥スパルナ（ガルダ）はガーラヴァに答えた。

『あなたはもう努力する必要はない。それは成就しないであろう。(三)

かつて、リチーカはカーニヤクブジャ（都市名）にいるガーディの娘サティヤヴァティーを妻として求めた。ガーディは彼に言った。(四)『尊者よ、それぞれ黒い耳をした、月のように輝く千頭の馬を私に下さい』と。ガーラヴァよ。(五) リチーカは『承知した』と言って、ヴァルナ（水天）の住処に行った。そしてアシュヴァ・ティールタ（聖地の名）で馬たちを得て、王に与えた。(六) 王はプンダリーカという祭祀を行なって、それらの馬をバラモンたちに与えた。その時、〔あの三名の〕王たちがそれらを二百頭ずつ買い上げた。(七) 最高のバラモンよ、残りの四百頭は、ヴィタスター川を渡っている間に、川に奪われた。ガーラヴァよ、このようなわけで、得ることが不可能なものを得ることは決してできない。(八) 二百頭の馬の代わりにこの女性をヴィシュヴァーミトラに贈りなさい。六百頭の馬とともに。徳性ある者よ。そうすればあなたは迷いを離れ、目的を達するであろう。バラモンの雄牛よ。(九)』

ガーラヴァは彼に『承知した』と告げた。それから彼はガルダとともに、馬たちと娘を連れてヴィシュヴァーミトラのもとに行った。(一〇)

ガーラヴァは言った。

『お望みのような馬を六百頭と、二百頭の代わりにこの娘をお受け下さい。（二一）王仙たちと彼女との間に三人の徳性ある息子が生まれました。最高の人よ、あなたも第四番目の息子を一人もうけなさい。（二二）このようにすれば、八百頭の馬がすべてあなたのものになったことになります。私はあなたに借りを返し、快く苦行を行なうことができます。（二三）』

ナーラダは続けた。

「ヴィシュヴァーミトラはガーラヴァとガルダ鳥と、その美しい尻の娘を見て、次のように言った。（二四）

『ガーラヴァよ、どうしてこの娘を最初に私に与えなかったのか。（二五）〔まあよい。〕一人の息子を得るために私はこの娘を受けるであろう。そして馬たちは、すべて私の隠棲所に連れて来てとどめておきなさい。（二六）』

栄光に満ちたヴィシュヴァーミトラは、マーダヴィーと楽しみ、彼女に息子のアシタカを生ませた。（二七）栄光に満ちた彼は、息子が生まれるやいなや、息子に実利（アルタ）と法（ダルマ）を教え、馬たちを与えた。（二八）かくてアシタカは、月（ソーマ）の都のように輝かしい都に出発した。カウシカ（ヴィシュヴァーミトラ）の方は、弟子に娘を返して森へ行った。（二九）

ガーラヴァはガルダとともに、師に対する謝礼を払って心から喜び、娘に次のように言った。（三〇）

『お前は気前のよい施主である息子と、勇士である息子と、真実と法（ダルマ）に専念する息子と、祭官である息子を生んだ。（三一）それ故、美しい尻の女よ、帰りなさい。お前の父は息子たちにより救われた。そして四名の王と私も救われた。美しい胴の女よ。（三二）』

ガーラヴァはガルダ鳥に別れを告げ、その娘を父親に返し、森へ行った。（三三）」

（第百十七章）

隠者になったヤヤーティの娘

ナーラダは続けた。

「ヤヤーティ王はさらに、娘の婿選び式（スヴァヤンヴァラ）を行なおうと望み、ガンガー（ガンジス）とヤムナーの合流点の隠棲所に行った。（一）花輪や花づなで飾られた娘のマーダヴィーを戦車に乗せて、プールとヤドゥ（息子たち）が妹の後を進み、隠棲所に行った。（二）そこには竜（蛇）や夜叉や人間たち、半神（異本による）や鳥獣たち、山や樹木や森に住む者たちが集まっていた。（三）その森は種々の国々の（テクスト疑問）王たちで満ちあふれ、梵天のような聖仙たちで、いたるところ満ちていた。（四）しかるにその美しい顔色をした女は、求婚者たちが指名された時、すべての求婚者を素通りして、その森を夫として選んだ。（五）ヤヤーティの娘は戦車から降り、親類の人々に敬礼してから、清浄なる森に入って苦行を行じた。（六）種々の断食、潔斎、誓戒により、彼女は自身を軽やかにし、鹿のような生活をした。（七）瑠璃（ヴァイドゥーリヤ）の芽（ヴィドゥーラの地で、雷により宝玉が芽生えるとされる）のよ

うな、柔らかい緑色の若草、苦くまた甘いすばらしい若草を食べた。（八）神聖な流れの、清らかなおいしい水、冷たくて汚れのない最上の水を飲んだ。（九）獅子が住まず、鹿が獣の王である密林、森火事がなくて、人気のない密林において、彼女は鹿たちとともに、森を歩く雌鹿のように歩きまわった。こうして彼女は、梵行（清浄行）を守って、偉大な法を実践した。（一〇―一一）

一方ヤヤーティは、昔の王たちの行為にならい、幾千年も生きてから、時間の法に従った（死んだ）。（一二）最高の人であるプールとヤドゥの二人はその家系において繁栄し（異本による）、その両者によって、ナフシャの息子（ヤヤーティ）は現世と来世において名声を確立した。（一三）ヤヤーティ王は天界に住んで栄光に輝いた。その強力な王は大仙のように、天界における最高の果報を享受した。（一四）

幾千年の幾倍もの時間が過ぎた時、そこにいる王仙や偉大な聖仙の間にあって、ヤヤーティは、その知力が迷い、慢心し、人間やすべての神々や聖仙の群を軽蔑した。（一五―一六）インドラ神は彼のことがわかった。すべての王仙たちは、『何たること』と言った。（一七）そして、ナフシャの息子を見て、疑惑が生じた。

『彼は誰か。どの王の息子か。どうして天界へ来たか。（一八）いかなる行為により彼は成就したか。彼はどこで苦行を積んだか。どのようにして天界において知られるか。また誰によって知られるか。（一九）』

天界に住む王たちがこのように疑惑を抱き、お互いに見て、ヤヤーティ王についてたずね合った。（二〇）幾百の天宮の番人、天界の門衛、天の座席の番人たちは、たずねられて、『我々は知らない』と答えた。（二一）彼らはすべて知力がおおわれ、その王を認識しなかった。その時、その王はたちまち威光を失ってしまった。（二二）」

（第百十八章）

ナーラダは続けた。

「ヤヤーティはその地位から堕ち、その席から堕ちた。心はふるえ、悲嘆の火に悩まされた。（一）その花輪はしおれ、知力は失せ、王冠と腕環は落ち、目がまわり、全身だらりとし、装身具と衣服はずり落ちた。（二）彼は他からは見られず、何度も他者を見ても見えず、空虚であり、空ろな心をして、今にも地面に倒れそうであった。（三）

『私は心でどのような法を汚す悪いことを思ったのか。その地位から堕ちるとは』と王は考えた。（四）しかし、そこにいる王たち、シッダ（半神の一種）たち、天女たちは、拠り所を失い堕ちたヤヤーティを見ることはなかった。（五）その時、功徳の尽きた者を追放するある人が来て、神々の王の命によりヤヤーティに告げた。（六）

『あなたは非常に高慢になり、あらゆる者を軽蔑した。王よ。あなたは慢心により天界から堕ちた。あなたはそれにふさわしくない。もはやあなたはそこで認められることはない。去れ。堕ちよ。』

その人は彼にそう告げた。（七）ヤヤーティは、『善き人々の間に落ちたい』と三回言ってから、寄る辺を持つ人々のうちで最高の彼は、落ちながら自分の帰趨について考えた。（八）まさにその時、その王はナイミシャの森に四名の王中の雄牛を見て、そして彼らの中に落ちた。（九）プラタルダナ、ヴァスマナス、ウシーナラの息子シビ、アシタカが、ヴァージャペーヤ祭によって神々の王を満足させていたのである。（二〇）彼らの祭祀から生じた煙は、天界に直結する門である。ヤヤーティはその煙を嗅ぎながら地上に落ちた。（二一）王は地上と天上を結ぶ、ガンガー（ガンジス）のように流れる煙の川をたどって、世界守護神のような、最高の祭祀を主催する栄光ある四名の親族たちの間に落ちた。（二二―二三）このように王仙ヤヤーティは、功徳が尽きた時、供物を投じられた偉大な祭火のような四名の獅子王の中に落ちたのである。（二四）すべての王たちは、光輝く（異本による）彼にたずねた。

『あなたは誰か。誰の親類か。どの国、どの都に属するのか。（二五）夜叉であるか、神であるか、ガンダルヴァであるか、羅刹であるか。あなたは人間の姿をしていないので。あなたはいかなる目的を願っているのか。（二六）』

ヤヤーティは答えた。

『私は王仙ヤヤーティである。功徳が尽きて天から堕ちたものである。「善き人々の間に落ちたい」と考えていたところ、あなた方の間に落ちた。（二七）』

王たちは言った。

『人中の雄牛よ、あなたの望みが真実のものとなれ。我々すべての祭祀の果報と法（ダルマ）とをお受けなさい。（二八）』

ヤヤーティは言った。

『私は受けることを財産とするバラモンではない。王族（クシャトリヤ）である。私はまた他人の功徳を失わせようとは思わぬ。（二九）』」

ナーラダは続けた。

「まさにこの時、例のマーダヴィーが鹿のような生活をして遍歴しているうちに、そこにやって来た。彼女を見て、王たちはおじぎをしてからたずねた。（三〇）

『あなたがここに来た目的は何か。我々はあなたのどんな命令を行なえばよいか。お命じ下さい。我々はすべてあなたの息子ですから。苦行を積んだ女よ。（三一）』

マーダヴィーは彼らの言葉を聞き、最高に喜んで、父のヤヤーティに近づいて挨拶した。（三二）その苦行女は、息子たちが頭を下げて敬礼しているのを見て、次のように言った。

『王中の王よ、彼らはあなたの娘の子供たちです。私の息子たちです。あなたにとって他人ではありません。彼らはあなたを救うでしょう。これは昔から定められたことです。（三三）王よ。私はあなたの娘のマーダヴィーで、鹿のような生活をしています。私もまた功徳（ダルマ）を積んでいます。その半分をお受け下さい。（三四）王よ、すべての人は子孫の〔功徳の〕果報の配分に与るから、あなたの場合のように、娘の息子を望むのです。大地の主よ。（三五）』

そこでそのすべての王たちは、頭を下げて母に挨拶してから、母方の祖父に敬礼して〔同様に〕告げた。（三六）高らかで優しい、比べるもののない声で大地を満たして……。かくて

王たちは、天から堕ちた母方の祖父を救った。（二七）それからガーラヴァもそこにやって来て、ヤヤーティ王に告げた。

『あなたは私の苦行の力の八分の一により天に昇りなさい。（二八）』

（第百十九章）

ナーラダは続けた。

「人中の雄牛ヤヤーティは、善き人々に再認識されるやいなや、苦熱も去り、神的な地位を取りもどした。（一）彼は神聖な花輪と衣服をつけ、神聖な装身具で飾られ、神聖な香りと美質をそなえ、足で地に触れることはなかった。（二）

まず、施主として世に知られるヴァスマナスは、高らかに声を発して、その時ヤヤーティ王にこう言った。（三）

『私がこの世で、すべての種姓（ヴァルナ）に対する非難の余地のない行為によって得たもの、それを与えるであろう。あなたはそれを受けなさい。（四）私が布施を習いとしたことの果報、忍耐を習いとしたことの果報、聖火を保ったことの果報、あなたはその果報を受けなさい。（五）』

それから、王族（クシャトリヤ）の雄牛であるプラタルダナも言った。

『常に法（ダルマ）に専念した。常に戦いに専念した。（六）私は世間において、王族の法から生じた名声に達した。そして勇士と呼ばれる果報を得た。あなたはそれを受けなさい。（七）』

聡明なるウシーナラの息子シビは、甘美な言葉を述べた。

『私は子供や女性に対しても、ふざけている時も、戦闘においても、落ち込んでいる時も、緊急時や災禍の時も、いまだかつて虚偽を言ったことがない。その真実にかけて、あなたは天界へ行きなさい。（八―九）王よ、私は生命、王国、仕事、幸福を捨てるとも、真実を捨てはしない。その真実にかけて、あなたは天界へ行きなさい。（一〇）私の真実によりダルマ神、火神、インドラは満足した。その真実にかけて、天界へ行きなさい。（一一）』

すると法（ダルマ）を知る王仙アシタカ、つまりカウシカ（ヴィシュヴァーミトラ）の息子、マーダヴィーの息子は、幾百の祭祀を主催したヤヤーティに言った。（一二）

『王よ、私は百というプンダリーカとゴーサヴァ（祭祀の名）を積み重ねた。ヴァージャペーヤ祭をも行なった。それらの果報を得なさい。（一三）私が祭祀において用いなかった宝物、財産、その他の備品はない。その真実にかけて天界へ行きなさい。（一四）』

娘の息子たちがその王に語しかけている間に、王は大地を離れて、次第に天へ昇って行った。（一五）このように、そのすべての王たちは、その善行により、天から堕ちたヤヤーティを速やかに救った。（一六）これらの娘の息子たちは、四つの王家に、一族を栄えさせる者として生まれ、それぞれの法と祭祀と布施と行為とにより、母方の祖父である偉大な知者を天界へ昇らせた。（一七）

王たちは言った。

『我々は王の法と美質をそなえ、一切の法と美質をそなえた、あなたの娘の息子たちである。王よ、天界へ昇りなさい。（一八）』」

（第百二十章）

ナーラダは続けた。
「祭祀において多くの謝礼を払う善王たちにより天界へ昇らされたヤヤーティは、その娘の息子たちに別れを告げ、天界に着いた。(一) 彼は種々の花で芳香のする雨を浴び、清らかな香りのする神聖な風に抱かれ、娘の息子たちの功徳により獲得された不動の地位に昇り、自分の行為（の果報）により強められ、最高の栄光により輝いた。(二―三) 彼は天界において、ガンダルヴァや天女の群により、歌や踊りで歓迎され、太鼓の音により喜びをもって迎えられた。(四) 種々の神仙や王仙やチャーラナ（天上の歌手）たちに讃えられ、最高の接待でもてなされ、神々に歓迎された。(五) そして彼は天界の果報を得た。

満足して心が静まった彼に、梵天はその言葉で満足させるかのように告げた。(六)

『汝は世間における行為により、四足をそなえた（完全な）法（ダルマ）を積んだ。王仙よ、この世界は今や再び汝にとって不滅である。そして天界における汝の名声も不滅である。汝の善行によって。(七) すべての天界に住む者たちの心は闇（タマス）におおわれた。そこで彼らは汝を認知しなかった。知らないので汝は落とされたのだ。(八) 娘の息子たちが喜びをもって汝を救ったので、汝はここに来た。汝は自己の行為により獲得した地位を再び得た。不動、永遠、神聖、最高の、確固とした不滅の地位を。(九)』

ヤヤーティは言った。

『尊い神よ、私にはある疑問があります。どうかそれを解いて下さい。他の者にたずねることはできないから。世界の祖父（梵天）よ。(一〇) 幾千年間も続く私の大なる果報は、臣民を守護することで増大し、多くの祭祀と布施の洪水により獲得されたものである。(一一) どうしてわずかな時間で尽き、私が落とされることになったのか。尊い神よ、あなたは私が獲得した永遠の世界を知っている。(一二)』

梵天は言った。

『幾千年間も続く果報は、臣民を守護することで増大し、多くの祭祀と布施の洪水により汝に獲得された。(一三) それは次のような過失によって尽き、汝は落とされたのである。王中の王よ、汝は慢心により、天界に住む人々に非難されたのである。(一四) 王仙よ、慢心、暴力、傷害、悪意、詐術があれば、この世界は永遠ではない。(一五) 王よ、汝は劣った者、優れた者、中位の者を軽蔑すべきではない。いかなる所でも慢心に燃やされた人々に等しい者は誰もいない。(一六)

汝が（天界から）堕ちたことと再びそこに昇ったことを語る人々は、疑いもなく、困難なことに直面してもそれらを乗り越えるであろう。(一七)』

ナーラダは続けた。

「王よ、かつてヤヤーティは、慢心によってこのような憂き目に逢った。ガーラヴァはあまりにも強情だったので苦労した。(一八) よかれと望み、繁栄を望む友たちの言葉を聞くべきである。強情なことをするべきではない。強情は破滅をもたらす。(一九) それ故、ガーンダ

ーリーの息子よ、あなたも慢心と怒りを避けるべきである。勇猛な王よ、パーンダヴァたちと和平を結べ。怒りを捨てよ。(二〇)王よ、何であれ与え、行ない、苦行を行じ、火中に供物を投じた場合、それがなくなったり減少したりすることはない。他の者はそれを享受せず、行為者のみが享受する。(二一)この最高の偉大な物語、怒りと愛欲を離れた博識者たちに尊重される物語を考察すれば、三目的（法、実利、享楽）を洞察する目が、世界に多様に拡まり、地上に遍満する。(二二)」

（第百二十一章）

ドゥルヨーダナ、クリシュナたちの勧告を拒否する

ドリタラーシトラは言った。

「尊者ナーラダよ、あなたの言われる通りだ。私もそのように望んでいる。しかし私の自由にはならないのだ。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。

彼はこのように言って、それからクリシュナに告げた。——

「クリシュナよ、あなたは天界とこの世界に関する、法(ダルマ)にかなった正当なことを述べた。(二)しかし友よ、私の自由にはならないのだ。私の好きなようにはしてもらえないのだ。ああ、勇士クリシュナよ、最高の人よ、私の教えに背く愚かなドゥルヨーダナを説得するよう

努力してくれ。そうすればあなたは、非常に大きな友の義務を果たすことになろう。ジャナールダナよ。(三―四)」

すると一切の法(ダルマ)と実利(アルタ)の真実を知るクリシュナは、短気なドゥルヨーダナの方を向き、優しい言葉をかけた。(五)

「クルの最上者ドゥルヨーダナよ、私の言うことを聞いてくれ。それは特にあなたとあなたの縁者にとって有益な言葉だ。バーラタよ。(六)大知者よ、あなたは良家に生まれ、正しく行動するにふさわしい。博識と品行にめぐまれ、あらゆる美質をそなえている。(七)友よ、家柄の悪い者、邪悪な者、卑劣な者、破廉恥な者たちなら、あなたがよいと考えているようにふるまうであろうが……。(八)この世では、善き人々の行動は法と実利をそなえていると認められる。一方、善からぬ人々の行動は逆であると認められる。バラタの雄牛よ。(九)繰り返しあなたに認められる行動はまさに逆である。そのようなことに固執することは、法を欠き、非常に恐ろしく、生命を害なうものである。(一〇)バーラタよ、何度もあなたが原因で不名誉なことが起こっている。もしそのような不利益なことをやめれば、あなたは自分に最善なことをすることになろう。(一一)そして弟たちと従者たちと友たちを、法にもとる不名誉な行為から救うであろう。敵を悩ます者よ。(一二)

パーンダヴァたちは叡知あり、勇猛で、大なる気力あり、自制あり、博識がある。人中の虎よ、バラタの雄牛よ、パーンダヴァたちと和平を結びなさい。(一三)英邁なドリタラーシトラ、梵天、ドローナ、大知者のヴィドゥラにとっても、それは有益で好ましいことである。

(一四) クリパ、ソーマダッタ、英邁なバーフリーカ、アシュヴァッターマン、ヴィカルナ、サンジャヤにとっても。王よ。(一五) 親族にとっても、ほとんどの友たちにとっても。敵を悩ませる者よ。友よ、平和において、全世界の守護があるであろう。(一六) あなたは廉恥あり、良家に生まれ、知識あり、邪悪でない。友よ、父と母の教えに従え。(一七) バーラタよ、父が教えること、それが最上であると考えられる。最高の災禍に陥った者は、すべて父の教えを思い出す。(一八) 友よ、あなたの父とその顧問たちは、パーンダヴァと同盟することを望んでいる。クルの最上者である友よ、あなたも同様に望みなさい。(一九) もし人が親しい人々の教えを聞いても従わないなら、それは結果として、キンパーカ（薬草の名）を食べたようにその人を燃やすであろう。(二〇) 迷妄により、有益な助言を受け入れないでぐずぐずする者は、目的を成就せず、後悔することになる。(二一) 一方、有益な助言を聞いてすぐに受け入れ、自分の考えを捨てる者は、この世で安楽に栄える。(二二) 有益なことを望む人の言葉を、不快であるからといって受け入れないで、本当は有害な言葉を聞く者は、敵たちの支配下に帰す。(二三) もし人が善き人々の意見を無視して、善からぬ人々の意見に従えば、彼の親しい人々はすぐに彼の災禍を見て悲しむ。(二四) 主要な顧問たちを捨てて、劣った者たちに従う者は、恐ろしい災いに陥り、それから救われることはない。(二五) 悪人とつき合い、不適切にふるまい、いつも親しい人々の言葉を聞かず、敵を選んで味方を憎むような者を、大地の女神は呪う。バーラタよ。(二六)

あなたはあの勇士たちと対立し、他の教養がなく能力がなく愚かな者たちに救いを求めて

いる。バラタの雄牛よ。(二七) この地上において、あなた以外のいかなる人が、インドラに等しい勇士である親族を無視して、他の者たちに救いを求めるであろうか。(二八) 生まれて以来、あなたはクンティーの息子たち（パーンダヴァ）に常にひどいことをして来た。しかし徳性あるパーンダヴァたちは決して怒らなかった。(二九) 友よ、生まれて以来、パーンダヴァたちは卑劣な手段に悩まされた。しかし勇士よ、あの誉れ高い者たちは、あなたに対し正しくふるまった。(三〇) バラタの雄牛よ、あなたも同様にふるまうべきだ。自分の主要な親族に対し、怒りにかられてはならぬ。(三一) バラタの雄牛よ、知者たちの企ては三目的（法、実利、享楽）をそなえている。三目的すべてが不可能な時は、人々は法（ダルマ）と実利（アルタ）とに専念する。(三二) それぞれ別個の場合、賢者は法に専念する。中位の人は実利に、愚者は最悪の享楽（カーマ）に専念する。(三三) 諸感官にかりたてられ、貪欲により法を捨てる者は、不正な手段で享楽と実利とを欲して滅びる。(三四) 享楽と実利を欲する人も、まず法を実践すべきである。というのは、実利や享楽も、決して法から逸れることはないから。(三五) 王よ、法のみが三大目的の手段であると言われる。法によって求める者は、木材の中の火のように速やかに増大するから。(三六) 友よ、バラタの雄牛よ、あなたは今、一切の王に周知の輝きに満ちた王権を、不適切な手段により求めている。(三七) 王よ、正しくふるまう者たちに対し邪悪にふるまう者は、森を斧で切るように、自分自身を切る。(三八) その人の破滅を望まないなら、その人の考えを断ち切るべきではない。断ち切られない賢者の考えは、有益なことに向けられる。(三九) バーラタよ、三界において、人は捨身の者を迫害すべきではない。その他の一般の者をも迫

害すべきではない。いわんや、あのパーンダヴァの雄牛たちを迫害すべきではない。(四〇)
人は怒りに支配されると何もわからなくなる。引き伸ばされたものはすべて切れる。バーラタよ、その根拠を見よ。(四一) あなたにとって邪悪な人々と〔結ぶ〕より、パーンダヴァたちと結びつく方が優れている。彼らと仲よくすれば、あなたはすべての願望を達成するであろう。(四二) 最高の王よ、あなたはパーンダヴァたちに獲得された土地を享受しているのに、彼らに背を向けて、他の者たちからの救済を望んでいる。(四三) バーラタよ、あなたはドゥフシャーサナ、ドゥルヴィシャハ、カルナ、サウバラ（シャクニ）に権力を与えて繁栄を望んでいる。(四四) しかし彼らは知識においてあなたに匹敵しない。そして、法（ダルマ）と実利（アルタ）と勇武において、パーンダヴァたちに匹敵しない。(四五) これらすべての王たちがあなたといっしょになっても、戦場において、怒ったビーマセーナの顔を見ることすらできない。(四六) 友よ、このすべての集結した王の軍隊、このビーシュマ、ドローナ、カルナ、クリパ、ブーリシュラヴァス、ソーマダッタの息子、アシュヴァッターマン、ジャヤドラタ、彼らすべては、アルジュナに対抗することができない。(四七―四八) というのは、怒ったアルジュナは、すべての神と阿修羅、人間、ガンダルヴァたちによってもうち負かされない。戦いに心を向けてはならぬ。(四九) すべての王の軍隊において、戦場でアルジュナと遭遇し、無事に家に帰れる男が誰かいるだろうか。(五〇)(五一―五六略)

バラタの最上者よ、息子たちを見よ。兄弟、親族、縁者たちを見よ。あなたが原因で彼らが死ぬことがないように。(五七) クル族が残存するように。この一族が滅びることのないように。あなたが名誉を失い、一族の破壊者と呼ばれることのないように。王よ。(五八) 勇士たちはあなたのみを皇太子の位につけるであろう。そして父上のドリタラーシトラ王を大王の位につけるであろう。(五九) 友よ、訪れつつある高まった繁栄を軽んじてはならぬ。パーンダヴァたちに〔王国の〕半分を与えれば、大なる繁栄を得るであろう。(六〇) 友たちの助言に従って、パーンダヴァたちと和平を結びなさい。友たちと仲よくすれば、あなたは長く幸福を享受するでしょう。(六一)」　（第百二十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それからビーシュマは、クリシュナの言葉を聞くと、短気なドゥルヨーダナに告げた。(一)

「クリシュナは友人たちの平和を望んで、お前にこのように言った。そこでわが子よ、それを考慮せよ。怒りにかられてはならぬ。(二) わが子よ、偉大なクリシュナの言葉に従わないならば、お前は決して至善、幸福、繁栄に到達できないだろう。(三) わが子よ、クリシュナは法（ダルマ）にかなったことをお前に言った。そのことを受け入れなさい。王よ、臣民を滅ぼしてはならぬ。(四)

一切の王におけるバラタ族のこの輝かしい繁栄を、お前は悪しき性（さが）の故に、ドリタラーシトラが生きている間に滅ぼすであろう。(五) お前自身と顧問たち、息子や家畜や親族たち、

友人たちを、お前はよからぬ了見により殺害することになろう。(一六) クリシュナや父や英邁なヴィドゥラの、有意義な真実の言葉に背いて……。バラタの最上者よ。(一七) 一族の破壊者、最低の男、無思慮であって、悪しき道を進んではならぬ。老いた父を悲しませてはならぬ。(一八)」

ドゥルヨーダナは怒りにかられ、何度も息を吐いていたが、その時ドローナが彼に次のように告げた。(一九)

「わが子よ、クリシュナはそなたに法（ダルマ）と実利（アルタ）をそなえた言葉を述べた。またビーシュマも同様である。王よ、喜んでそれに従え。(二〇) その二人は知者で、叡知あり、自己を制し、有益なことを望み、博識である。彼らはそなたに有益な言葉を述べた。それを受け入れなさい。敵を悩ます者よ。(二一) 大知者よ、クリシュナとビーシュマが告げたことに従え。思慮のない者たちの言葉に従ってはならぬ。敵を悩ます者よ。(二二) そなたを煽動している者は、決してそなたの利益をもたらさない。彼らは戦いにおいて、敵の怨みを首のまわりにつけるであろう。(二三) すべてのクル族、息子たち、兄弟たちを殺してはならぬ。クリシュナとアルジュナがいれば、その軍は無敵であると知れ。(二四) 親しいクリシュナとビーシュマの説は真実である。わが子よ、もしそなたが受け入れなければ、後悔するであろう。パーラタよ。(二五) アルジュナはジャマダグニの息子（バラシュラーマ）が告げた通り〔優れているが〕、それよりももっと偉大である。またデーヴァキーの息子クリシュナは、神々によっても対抗しがたい。(二六) バラタの雄牛よ、ここでそなたに快い好ましい言葉のみを述べて何になろう。以上、すべてそなたに告げた。そなたの望むようにしなさい。もうこれ以上そなたに言うことはできない。バラタの最上者よ。(二七)」

その会話の間、ヴィドゥラも、短気なドゥルヨーダナを見て言った。(二八)

「ドゥルヨーダナよ、私はお前のことを悲しまない。しかしガーンダーリーとお前の父親という老人たちが気の毒だ。(二九) その二人は、お前という邪悪な保護者のせいで、身寄りなしで生活するであろう。友を殺され、顧問を殺されて。翼を失った鳥のように。(三〇) 乞食（こつじき）となり、嘆きつつこの地上をさまようであろう。このような一族を滅ぼす悪人を生んだがために。(三一)」

その時、ドリタラーシトラ王は、弟たちとともに、諸王に囲まれて座っているドゥルヨーダナに告げた。(三二)

「ドゥルヨーダナよ、偉大なクリシュナが告げたことを聞きなさい。それは非常に吉祥で、安寧をもたらし、不変であるから、それを受け入れなさい。(三三) というのは、この汚れない行為のクリシュナという協力者により、我々はすべての王の間で、すべての願望を達成するであろう。(三四) わが子よ、クリシュナとしっかりと結束して、ユディシティラのもとに行きなさい。バラタ族に繁栄と幸運をもたらすことをすべて行なえ。(三五) わが子よ、拠り所であるクリシュナと結束せよ。今やその機会だと思う。ドゥルヨーダナよ、それを逸してはならぬ。(三六) もしお前が和平を求め、お前のために話しているクリシュナを拒絶するなら、お前は必ず破滅するだろう。(三七)」

（第百二十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ドリタラーシトラの言葉を聞くと、ビーシュマとドローナはそれに同意して、命令に従わないドゥルヨーダナに次のように言った。――

「二人のクリシュナ（クリシュナとアルジュナ）が具足をつけぬうちに、ガーンディーヴァ弓が静止しているうちに、ダウミヤ（パーンダヴァの司祭）が敵の軍隊を軍隊の火の中に焼べないうちに、偉大な戦士である廉直なユディシティラがお前の軍に対して怒らぬうちに、敵意が鎮まるように。（二―三）偉大な戦士ビーマセーナが自分の軍隊のうちにいるのが認められないうちに、敵意が鎮まるように。（四）彼が軍隊を歓喜させつつ道を進まないうちに、彼が戦場でその勇士を殺す棍棒により、象兵たちの頭を、時が経って完熟した樹木の果実のように砕かないうちに、敵意が鎮まるように。（五―六）ナクラ、サハデーヴァ、ドリシタデュムナ、ヴィラータ、シカンディン、シシュパーラの息子たちが鎧をつけ、武装し、速やかに矢を射つつ、鰐が海に入るように〔戦場に〕入らないうちに、敵意が鎮まるように。（七―八）恐ろしい禿鷲の羽根の矢が、諸王の繊細な身体に入らないうちに、敵意が鎮まるように。（九）強力な戦士たちが、武装し、速やかに矢を射る。その遠方から射る者たちが、栴檀香やアガル香を塗り、真珠の飾りをつけた戦士たちの胸に矢を放たないうちに、敵意が鎮まるように。（一〇―一一）
王中の象であるダルマ王ユディシティラが、頭を下げて挨拶をするお前を、両手で迎える

ように。（一二）その気前のよい彼が、和平のために、幟旗と鉤の印がついた彼の右腕をあなたの肩に置くように。バラタの雄牛よ。（一三）彼が宝石の弓籠手と弓懸をつけた〔原文疑問〕手で、座っているお前の背中をなでるように。（一四）シャーラ樹のような広い肩をした強力な狼腹（ビーマ）が、和平のために、お前を抱き、仲よくしようとして挨拶するように。バラタの雄牛よ。（一五）アルジュナと双子との三人に挨拶されて、王よ、彼らの頭に愛情をこめて口づけして挨拶せよ。（一六）お前がパーンダヴァの勇猛な兄弟たちと結束したのを見て、諸王が歓喜の涙を流さんことを。（一七）諸王の首都において、すべての人々の繁栄が喧伝されるように。兄弟の関係により大地を享受するように。苦熱を離れよ。（一八）」（第百二十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ドゥルヨーダナはクルの集会においてこの不快な言葉を聞くと、誉れ高い強力なクリシュナに答えた。（一）
「クリシュナよ、よく考えてからものを言うがよい。あなたは特別に私だけの悪口を言い、非難している。（二）あなたは理由もなくパーンダヴァたちのことを愛情をもって語るから。クリシュナよ。いつも非難するが、どうして〔相互の〕強さと弱さを見てからにしないのか。（三）あなたとヴィドゥラと王と師匠（ドローナ）と祖父（ビーシュマ）は、私だけを非難して、他の王を誰も非難しない。（四）私は自分にいかなる過失があるとも思わない。しかし王を含むあなた方はすべて私を憎んでいる。（五）敵を制するクリシュナよ、いくら考えても、何かはなはだし

い罪を犯したとも、ごくわずかな罪をも犯したとも思えない。（六）クリシュナよ、パーンダヴァたちは喜んで受け入れた賭博において、シャクニに王国を勝ち取られた。私に何の罪があると言うのか。（七）しかもそこで彼らが勝ち取られた財産を、あの時すべて彼らに返してやったのに。クリシュナよ。（八）無敵のパーンダヴァたちがまた賭博で敗れ、森に亡命したのも、私の罪ではない。最高の勝利者よ。（九）またクリシュナよ、パーンダヴァたちは能力がないのに、好敵手を得たかのように喜んで、いかなる非を難じて、敵たち（我々）と争うのか。（一〇）我々は彼らに何をしたのか。またいかなる過失に対して、パーンダヴァたちとスリンジャヤ（パーンチャーラ）たちはドリタラーシトラの一族を滅ぼそうと望むのか。（一一）我々は恐ろしい行為や言葉により、恐れて平伏することはない。インドラの危険がある場合でも。（一二）クリシュナよ、戦って我々に勝利することができるような、王族の法（クシャトラダルマ）を実践する者を私は知らない。敵を滅ぼす者よ。（一三）というのはクリシュナよ、ビーシュマ、クリパ、ドローナとその一族は、戦いにかけて神々にすら敗れることはない。いわんやパーンダヴァたちによっては。（一四）クリシュナよ、もし戦いにおいて我々が自己の法（スヴァダルマ）を実践していて、武器によりふさわしい時に死んだとしたら、それは天界に達することである。（一五）戦闘において矢の床に横たわることは、我々王族の主要な法である。クリシュナよ。（一六）我々が今、もし戦場において敵に屈伏することなく、英雄の床を得るなら、クリシュナよ、それは我々を苦しめることはない。（一七）良家に生まれ、王族の法に従いながら、何人（なんぴと）が恐怖にかられて生きながらえることを望み、誰かに平伏するであろうか。（一八）『〔王族は〕いつも奮起すべきである。屈伏すべきではない。実に奮起は雄々しさであるから。もし時に利あらずとも（テクスト疑問）、何人（なんぴと）にも屈伏すべきではない（一九）』というマータンガ（聖者の名）の言葉を、幸せを望む人々は守ろうとする。私のような者は、法（ダルマ）のためにのみバラモンたちに敬礼するであろう。（二〇）生ある限り、他の何者をも考慮することなく、そのように行動すべきである。これが王族の法であり、常に私の意見である。（二一）

かつて私の父は彼らに王国の一部を譲渡したが、私が生きている限り、それは決して再び得られることはない。クリシュナよ。（二二）そしてクリシュナよ、ドリタラーシトラ王が生きている限り、我々と彼らは武器を控えて、彼に従って生活する。（二三）クリシュナよ、かつて私が子供の頃、他に従属していた時、無知の故に、または恐怖により、与えるべきでない王国を与えた。（二四）しかし今は、パーンダヴァたちはそれを再び得ることはできない。強力なクリシュナよ、私が生きている限り、クリシュナよ、鋭い針の先で刺されるほどの土地も、パーンダヴァたちに譲渡できない。（二五―二六）」（第百二十五章）

ガーンダーリーが息子を諭す

ヴァイシャンパーヤナは語った。――するとクリシュナは笑い、怒りに満ちた眼をして、クル族の集会においてドゥルヨーダナに次のように告げた。（一）

「あなたは英雄の床（矢の床）を得るであろう。あなたはその望みを得るであろう。顧問たちとともにじっと待っていなさい。大帰滅があるであろう。（二）愚か者よ、あなたは自分にはパーンダヴァに対して何の過失もないと考えている。王たちよ、すべてを聞いてくれ。（三）あなたは偉大なパーンダヴァたちの繁栄に苦しみ、サウバラ（シャクニ）とともに謀議して賭博を企てた。バーラタよ。（四）なあ、善き人々に敬われる、曲ったことをしない、すばらしい親族たちは、どうして邪悪な男とともに、あのような不正な賭博に立ち会うことができたか。大知者よ、それは善き人々に苦痛と滅亡をもたらす。賭博において、邪悪な人々に離間と災禍とが生ずる。（五―六）あなたは無思慮にも、邪悪な者たちと連座する善行の人々とともに、賭博を発端とするこの恐ろしい災禍をなしたのだ。（七）他の誰が、親類の妻を虐待することができるか。集会場にドラウパディーを連れて来て、あなたが言ったようなことを言うことができるか。（八）良家の生まれで、徳性をそなえ、パーンダヴァたちにとって生命よりも大切な妻を、あなたはあのように虐待したのだ。（九）パーンダヴァの勇士たちが森に行く時、ドゥフシャーサナがクルの集会において彼らに何を言ったか、すべてのクル族の人々は知っている。（一〇）正しく行動し、貪欲でなく、常に法（ダルマ）を実践する自分の親類に対し、いかなる善人がこのように不適切にふるまえようか。（一一）あなたとカルナとドゥフシャーサナは、何度も、無慈悲で下劣で乱暴な言葉を述べた。（一二）

ヴァーラナーヴァタにおいては、若かった彼らを母とともに焼こうとして、あなたは最高に努力したが、成功しなかった。（一三）その時パーンダヴァたちは母とともに、エーカチャ

クラーのバラモンの家に、非常に長い間、隠れて滞在した。（一四）〔その他にも〕あなたは毒や蛇や縛めを用い、パーンダヴァたちを滅ぼすためにありとあらゆる方策を用いて彼らを苦しめたが、あなたの企ては成功しなかった。（一五）あなたはこのような了見で、パーンダヴァに対して常に邪なふるまいをしたのに、どうして偉大なパーンダヴァに対してあなたに過失がないと言えるのか。（一六）あなたは下劣で、邪悪な行為をし、パーンダヴァに対し、無慈悲にも多くのなすべきでないことをしたのに、今は偽りを述べている。（一七）あなたの父母、ビーシュマ、ドローナ、ヴィドゥラは、講和せよと繰り返しあなたに言うが、王よ、あなたは講和しない。（一八）講和すれば、あなたとパーンダヴァの双方に非常に大きな利益がある。しかし王よ、あなたはそれを望まない。他でもない、思慮が足りないからである。（一九）王よ、友たちの言葉を無視すれば、あなたは幸福にはなれぬ。王よ、あなたは不徳で不名誉なことをしている。（二〇）」

クリシュナが短気なドゥルヨーダナにこのように告げた時、クルの集会において、ドゥフシャーサナは次のように言った。（二一）

「王よ、自分の意志によってパーンダヴァたちと講和しなければ、クル族の人々はあなたを縛ってクンティーの息子たちに引き渡すようだ。（二二）人中の雄牛よ、ビーシュマとドローナとあなたの父は、カルナとあなたと私の三人をパーンダヴァたちに引き渡すであろう。（二三）」

ドリタラーシトラの息子スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は、この弟の言葉を聞くと怒り、大蛇のよ

うに息を吐き、飛び上がって出て行った。(二四) ヴィドゥラ、ドリタラーシトラ、バーフリーカ大王、クリパ、ソーマダッタ、ビーシュマ、ドローナ、クリシュナ、これらすべての人々を無視して、その愚かで恥知らずな、教養のない者のように節度がなく、高慢で、敬われるべき人を軽んずる男は、出て行った。(二五―二六) その人中の雄牛が出て行くのを見て、弟たちと顧問たちとすべての王たちが彼に従って行った。(二七) ドゥルヨーダナが怒って立ち上がり、弟たちとともに出て行くのを見て、ビーシュマは彼に言った。(二八)

「法(ダルマ)と実利(アルタ)を捨て、怒りに身をまかせるなら、遠からずして、その人の災禍において敵たちが笑う。(二九) この邪悪なドゥルヨーダナ王子は方策を知らず、誤って王位を誇り、怒りと貪欲に支配されている。(三〇) クリシュナよ、すべての王族(クシャトラ)はカーラ（時間、破壊神）に煮られていると私は思う。というのは、顧問たちとともに、すべての王たちが迷妄にかられて退出したから。(三一)」

ビーシュマの言葉を聞くと、蓮花の眼をした強力なクリシュナは、ビーシュマやドローナなどのすべての人々に告げた。(三二)

「この権力に酔い痴れた王を制止しないのは、すべてのクルの長老たちの大罪である。(三三) 敵を制する人たちよ、その仕事をすべき時が来たと私は考える。それがなされたら、すべてはよりよくなるであろう。罪のない人々よ、聞きなさい。(三四) 私は直々にあなた方に有益な言葉を申し上げる。もしあなた方が好意をもってそれを受け入れて下さるなら。バーラタたちよ。(三五)

老いたボージャの王の息子は悪行をなし、自己を制御せず、父が生きているのに権力を奪い、怒りに支配された。(三六) そのウグラセーナの息子カンサは、親族に見放された。私はその親族によかれと願い、激しい戦闘において彼を成敗した。(三七) 我らと親族たちは、再びアーフカ・ウグラセーナに敬意を表し、ボージャの王家を栄えさせる彼を王にした。(三八) 一族のためにカンサ一人を捨てることにより、すべてのヤーダヴァ族、アンダカ・ヴリシュニ族は結束して幸福に栄えた。バーラタよ。(三九)(四〇―四六略)

同様に、ドゥルヨーダナとカルナとシャクニとドゥフシャーサナを捕えて、パーンダヴァたちに引き渡しなさい。(四七) 一族のために人を捨てよ。村のために一族を捨てよ。地方（国土）のために村を捨てよ。自己のために大地を捨てよ。(四八) 王よ、ドゥルヨーダナを捕えて、パーンダヴァたちと講和すれば、王族(クシャトリヤ)はあなたのために滅びることはない。王族の雄牛よ。(四九)」

（第百二十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドリタラーシトラ王はクリシュナの言葉を聞くと、急いで、すべての法(ダルマ)を知るヴィドゥラに告げた。(一)

「弟よ、行って大知あり先見の明あるガーンダーリーをここに連れて来なさい。彼女といっ

しょにあの愚か者を説得しよう。(二) もし彼女があの邪悪で悪い了見の男を鎮めることができれば、我々は友であるクリシュナの言葉に従うことになろう。(三) もし彼女が適切な言葉を述べるなら、あの貪欲に支配され、悪友を持つ愚者に正しい道を示すことができよう。(四) ドゥルヨーダナがもたらした、我々の恐ろしい大災禍を、彼女は長期間にわたって鎮めるであろう。安寧をもたらし、絶えることなく。(五)」

ドリタラーシトラ王の言葉を聞くと、ヴィドゥラはその命令に応じて、先見の明のあるガーンダーリーを連れて来た。(六)

ドリタラーシトラは言った。

「ガーンダーリーよ、お前のあの邪悪な息子は命令に背き、権力欲にかられて、権力と生命とを失うであろう。(七) あの愚か者は、教養のない者のように節度なく、友の言葉を無視し、邪悪な者たちとともに集会場から出て行った。(八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

誉れ高い王妃ガーンダーリーは、夫の言葉を聞くと、大きな幸せを望んで、次のように述べた。(九)

「王国を求める病にかかった息子をすぐに連れて来なさい。法(ダルマ)と実利(アルタ)を欠いた無教養な男は王国を治めることができませんから。(一〇) ドリタラーシトラよ、この点に関し息子を愛するあなたも大いに非難されるべきです。彼が邪悪だと知っていながら、彼の悪知恵に従っ

たのですから。(一一) 彼は欲望と怒りにかられ、迷妄に陥り、あなたはもはや彼を力ずくで制止することはできない。王よ。(一二) 愚かで幼稚で邪悪で、悪友を持つ貪欲な息子。そんな彼に王国を譲った果報を、ドリタラーシトラは享(う)けている。(一三) 大なる叡知を有する人が、どうして自分の一族における離間を見過ごすことができよう。自分の親族と離間したあなたを、敵たちが支配するであろう。(一四) 大王よ、懐柔や贈与策により災禍が克服され得る場合に、誰が自己の親族に対して武力を用いるでしょうか。(一五)」

ドリタラーシトラの命令であり、母の言葉であるということで、ヴィドゥラは短気なドゥルヨーダナを再び集会場に入らせた。(一六) 彼は母の言葉を聞こうとして、赤い眼をし、怒って息を吐く蛇のように、再び集会場に入った。(一七) ガーンダーリーは悪しき道をたどる息子が入ったのを見て、非難しつつ適切な言葉を述べた。(一八)

「わが子ドゥルヨーダナよ、私の言うことを聞きなさい。あなたとあなたに従う者たちに有益で、将来の幸せをもたらす言葉を。(一九) あなたは講和すれば、ビーシュマや父親や私を敬い、ドローナをはじめとする親しい人々を敬うことになります。(二〇) 大知者よ、自分の欲望によっては、王国を得ることも守ることも享受することもできません。バラタの雄牛よ。(二一) というのは、感官を制御していない者は、長い間王国を享受することができません。それに反し、自己を制御した知者が王国を守ることができます。(二二) 欲望と怒りが人間を実利(アルタ)から引き離します。王はその二つの敵を征服して地上を支配するのです。(二三) 世界の主であること、王であることは偉大なことである。邪悪な者たちは王国を望んでも、それを

長く守ることはできない。(二四) 偉大さを望む者は、実利と法（ダルマ）とに従って、諸々の感官を制御すべきである。制御された諸感官により知性が増大する。薪により火が増大するように。(二五) 実に制御されない諸感官は〔持主を〕殺すこともできる。制御されない、慣れない馬たちが、悪い御者を殺すように。(二六) もし自己に勝つことなく顧問たちに勝とうと望むなら、自己と顧問を制することなく、どうしようもなく滅びる。(二七) 国を征服するようにまず自分自身に勝てば、顧問たちと敵たちを征服しようと望んで空しくなることはない。(二八) 感官を制御し、顧問を支配し、罪を犯した者たちを罰し、よく考慮してことをなせば、繁栄（幸運の女神）はその賢者にこの上なく仕える。(二九) 細かい目の網にかかった二匹の大魚が〔それを破る〕ように、体に存する欲望と怒りは、知性を断ち切る。(三〇) 罪のない者が天界に昇る場合でも、欲望と怒りが増大したら、神々はそれらを恐れて、天界の入口を閉じた。(三一) 王が欲望、怒り、貪り、偽善、慢心を正しく制することができれば、彼は大地を征服する。(三二) 王は実利と法を望み、敵を征服したいと望むなら、常に諸感官を制することに専心すべきである。(三三) 欲望に支配され、あるいは怒りにかられて、自分の身内や他者に対し誤って行動するなら、彼には仲間がいなくなる。(三四)

パーンダヴァたちは結束し、大知者であり、勇士で、敵を滅ぼす。わが子よ、彼らとともに、幸せに大地を享受しなさい。(三五) わが子よ、ビーシュマや勇士ドローナが言ったことは真実です。クリシュナとアルジュナは無敵です。(三六) 強力で汚れなき行為のクリシュナに寄る辺を求めなさい。クリシュナは双方の幸せを喜ぶから。(三七) 有益なことを望む友た

ち、学を修めた賢明な友たちの教えに従わない人は、敵を喜ばせるものである。(三八) わが子よ、戦争にはよいことはない。法（ダルマ）と実利（アルタ）はない。どうして幸福があろうか。そして勝利は常にあるとは限らない。戦争に心を向けてはなりませぬ。(三九)

大知者よ、ビーシュマとあなたの父とバーフリーカとは、離間を恐れてパーンドゥの息子たちに王国の一部を与えました。敵を制する者よ。(四〇) あなたは今、その贈与の果報を得ているのです。あの勇士たちによりすっかり棘（危険）を除かれたすべての大地を享受しているのですから。(四一) 敵を制する者よ、もしあなたと顧問たちが、地上の半分を享受したいと望むなら、パーンドゥの息子たちにふさわしいものを与えなさい。(四二) あなたと顧問たちが生活するには、地上の半分で十分です。親しい人々の言葉に従えば、あなたは名声を得るでしょう。パーラタよ。(四三) 栄光あり、自己を制し、知性あり、感官を制御したパーンダヴァたちと戦うことは、わが子よ、あなたを大きな幸せから突き落とすでしょう。(四四) 友たちの怒りを収め、彼らの持ち分をパーンダヴァたちに与えて、王国を適切に統治しなさい。バラタの雄牛よ。(四五)」(四六―五三略)

(第百二十七章)

クリシュナを捕えようとする

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

しかしドゥルヨーダナは、母の述べた意味深い言葉を無視し、怒って愚かな者たちのもと

に行った。（一）彼は集会場から出て、賭博に通じた王シャクニと協議した。（二）ドゥルヨーダナとカルナとシャクニとドゥフシャーサナの行状は以下のようである。（三）

「迅速なクリシュナが、ドリタラーシトラ王やビーシュマとともに我々を捕える前に、我々の方が力ずくで人中の虎クリシュナを捕えよう。インドラがヴィローチャナの息子（バリ）を捕えたように。（四―五）パーンダヴァたちは、クリシュナが捕えられたのを聞くと、牙の折れた蛇のように意気沮喪し、気力を失ってしまうだろう。（六）というのは、この勇士は彼らすべての寄る辺であり保護者であるから。すべてのサートヴァット（ヤーダヴァ族）の雄牛である、願いをかなえるクリシュナが捕えられれば、パーンダヴァたちとソーマカ族は気力を失うであろう。（七）それ故、ドリタラーシトラは嘆いているが、我々はこの場で迅速に行動するクリシュナを捕えてから、敵と戦おう。（八）」

徴候を読みとることができる賢者サーティヤキは、邪な心をしたその悪人たちの悪い意図を速やかに知った。（九）そのために彼はクリタヴァルマンとともに出て来ていた。彼はクリタヴァルマンに告げた。

「速やかに軍隊の準備をせよ。（一〇）陣形を整え、武装して、集会場の入口で待っておれ。私は汚れなき行為のクリシュナに知らせて来るから。（一一）」

この勇士は獅子が山窟に入るように集会場に入り、偉大なクリシュナに陰謀のことを告げた。（一二）それからドリタラーシトラとヴィドゥラに報告した。彼は微笑して、彼らにその陰謀について話した。（一三）

「あの愚かな者たちが、法（ダルマ）と実利（アルタ）にもとる、善き人々に非難される行為を行なおうと望んでいるが、決して成功するはずはない。（一四）あの邪悪な愚か者たちは、かつて徒党を組んで悪事をなした。彼らは欲望と妬みに損なわれ、怒りと貪りに支配されている。（一五）あの愚か者たちは今、あの蓮の眼のクリシュナを捕えようと望んでいる。ちょうど子供や白痴が燃える火を布で捕えようと望むように。（一六）」

先見の明のあるヴィドゥラは、そのサーティヤキの言葉を聞くと、クルの集会において、強力なドリタラーシトラに告げた。（一七）

「敵を苦しめる王よ、あなたの息子たちの命運は尽きた。不名誉で不可能な行為を企てるとは。（一八）というのは、彼らはこぞって、あのインドラの弟である蓮の眼をしたクリシュナを襲って、力ずくで捕えようと望んでいるのだから。（一九）あの不可侵で無敵な人中の虎を攻撃すれば、彼らは生きながらえることはなかろう。蝗（いなご）が火を攻撃するように。（二〇）もしクリシュナが怒ってそう望めば、彼らすべてをヤマ（閻魔）の住処に行かせるであろう。怒った獅子が獣たちを殺すように。（二一）しかしこのクリシュナは、決して非難される行為を行なわないであろう。最高の人である彼は、法から外れることはないであろう。（二二）」

ヴィドゥラがこのように言った時、クリシュナはドリタラーシトラを見て、親しい人々がこぞって聞いている中で、次のような言葉を述べた。（二三）

「王よ、もしあれらの怒った者たちが力ずくで私を捕えようとするなら、私が彼らを捕えることも認めなさい。王よ。（二四）というのは、私はあの激しているすべての者たちを捕える

ことができるから。しかし私は、非難される悪い行為を決してしないであろう。(二五) あなたの息子たちは、パーンダヴァの財産を望んで自分の財産を失うであろう。もし彼らがそのように望むなら、ユディシティラは目的を果たすであろう。バーラタよ、今日のうちに、私は彼らと彼らに従う者たちを捕えて、パーンダヴァたちに引き渡すことができる。王よ、そうしてもいかなる罪悪があろうか。(二七) しかしバラタ族の大王よ、あなたの前では、怒りと悪い心から生じる非難される行為に従事したくはない。(二八) 王よ、ドゥルヨーダナの望むがままになるがよい。バーラタよ、私の方はすべての約定を認めるであろう。(二九)」

ドリタラーシトラはこれを聞くと、ヴィドゥラに言った。

「あの王国を貪る邪悪なスヨーダナをすぐに連れて来なさい。(三〇) 友人、顧問、兄弟、従者たちとともに。再び正しい道にもどすことができるかも知れない。(三一)」

それからヴィドゥラは、弟たちや王たちに取り巻かれた、厭がるドゥルヨーダナを、再び集会場に入らせた。(三二) そこでドリタラーシトラ王は、カルナやドゥフシャーサナや諸王に囲まれているドゥルヨーダナに告げた。(三三)

「卑劣な男よ、極悪人よ、お前は卑しい仲間を持ち、邪悪な仲間たちと組んで悪行をやろうと望んでいる。(三四) 愚かで一族の面汚しであるお前のような者が、善き人々に非難される不可能で不名誉な行為をしようとしている。(三五) 不可侵で無敵のあの蓮の眼をした人を、お前は邪悪な仲間と組んで捕えようと望んでいるという。(三六) インドラなどの神々も力ずくで支配できないあのクリシュナを、愚か者よ、お前は捕えようと望んでいる。子供が月を

求めるように。(三七) 神々、人間、ガンダルヴァ、阿修羅、蛇たちも、戦いにおいてクリシュナに太刀打ちできないということを、お前は知らない。(三八) 風は手でつかめない。月は手で触れることができない。大地は頭で支えられない。クリシュナは力ずくで捕えられない。(三九)」

ドリタラーシトラがこのように述べると、ヴィドゥラも短気なドゥルヨーダナを見て言った。(四〇)

「サウバの門のところで、ドゥヴィヴィダという名の猿王は、石の大雨を降らせてクリシュナを埋めた。(四一) 彼はありとあらゆる努力をして、クリシュナを捕えようと奮闘したが、彼を捕えることはできなかった。その彼をお前は力ずくで捕えようと望んでいる。(四二) ニルモーチャナにおいて、偉大な阿修羅は六千の輪縄によりクリシュナを縛ったが、彼を捕えることができなかった。その彼をお前は力ずくで捕えようと望んでいる。(四三) クリシュナがプラーグジョーティシャにいた時、ナラカ(魔王の名)は悪魔たちとともに彼を捕えることはできなかった。その彼をお前は力ずくで捕えようと望んでいる。(四四) 幼年期において、小児の彼はプータナー(魔女の名)を殺し、牛を救うためにゴーヴァルダナ山を支えた。バラタの雄牛よ。(四五) アリシタ、デーヌカ、大力のチャーヌーラ、アシュヴァラージャ、カンサたちは悪事を行なって彼に殺された。(四六) ジャラーサンダ、ヴァクラ、強力なシシュパーラ、バーナ、その他の王も、戦闘において彼に殺された。(四七) ヴァルナ王も彼に敗れた。無量の力を持つ火神も。インドラ自身も、パーリジャータ樹を奪おうとする彼に敗れた。(四八) 唯

一の大洋に寝ている彼は、マドゥとカイタバを殺した。彼はまた、他の生においてハヤグリーヴァ（頸馬）を殺した。（四九）
彼は創造者であるが、作られることはない。諸々の力の原因である。クリシュナは望むことをすべて苦もなくやってのける。（五〇）恐ろしく勇猛なクリシュナをお前は知らない。威光の塊である、うち勝たれがたい、怒った毒蛇のような彼を。（五一）汚れなく行動する、強力なクリシュナを攻撃すれば、あなたと顧問たちは生きながらえないだろう。蝗が火を攻撃するように。（五二）」

（第百二十八章）

奇蹟を現ずるクリシュナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
ヴィドゥラがこのように言った時、敵の群を殺す強力なクリシュナは、ドゥルヨーダナに告げた。（一）
「あなたは迷妄により、私が一人であると考えて、私を襲って捕えようと企てている。愚かなスヨーダナよ。（二）しかしまさにここに、すべてのパーンダヴァたち、アンダカとヴリシュニの人々、アーディティヤ神群、ルドラ神群、ヴァス神群、大仙たちがいる。（三）」
このように言って、敵の勇士を殺すクリシュナは高らかに笑った。偉大なクリシュナが笑った時、火のように輝く、稲光のような姿の、親指ほどの神々が出てきた。（四）梵天は彼の額に居て、ルドラ（シヴァ）は胸の上にいた。世界守護神たちは腕のところにいた。火神（アグニ）は口から生じた。（五）アーディティヤ神群、サーディヤ神群、ヴァス神群、アシュヴィン双神、マルト神群とインドラ、一切諸神、種々の夜叉、ガンダルヴァ、羅刹がいた。（六）その両腕に、サンカルシャナ（バララーマ）とアルジュナが現われた。右腕に弓を持つアルジュナが、左腕に鋤を持つラーマが。（七）クリシュナの背中にビーマとユディシティラとマードリーの双子が、そして前に、プラデュムナをはじめとするアンダカとヴリシュニの人々がいて、偉大な武器を振り上げていた。クリシュナの多くの腕には、法螺、円盤、棍棒、槍、シャールンガ弓、鋤、ナンダカ（刀の名）が認められ、振り上げられた一切の武器がいたるところ輝いていた。（八－一〇）彼の眼や鼻や耳から、いたるところ、煙とともに非常に恐ろしい火焔が生じた。そして毛穴から、太陽の光線のような光が生じた。（一一）
王たちは偉大なクリシュナの恐ろしい体を見て、怖気をふるって眼を閉じた。（一二）ドローナ、ビーシュマ、大知者ヴィドゥラ、気高いサンジャヤ、苦行を積んだ聖仙たちを除いて……。尊者クリシュナは彼らに天眼を与えていたのである。（一三）集会場において、クリシュナの大奇蹟を見て、神々の太鼓は鳴り、花の雨が降った。（一四）全大地は震動し、海は動揺した。王たちは最高の驚愕に達した。バラタの雄牛よ。（一五）
それからその敵を制する人中の虎は、自己の神々しい驚異的で多彩で神通力のある体をもとにもどした。（一六）それからクリシュナは、サーティヤキとクリタヴァルマンの手をとって、聖仙たちに別れを告げて退出した。（一七）そして喧噪の中、ナーラダなどの聖仙たちも

姿を消した。それはまさに奇蹟であった。(一八)

　彼が出発したのを見て、クル族の人々は諸王とともに、その人中の虎について行った。神々がインドラにつき従うように。(一九) 豪胆なクリシュナは、すべての王の群を考慮することなく、煙をともなう火のように進んで行った。(二〇)

　それから、ダールカ（御者の名）が、美しく大きい戦車に乗って現われた。その戦車は鈴の音を響かせ、黄金の網によりきらびやかで、高速であり、雷雲のような音をたて、見事に装備され、美しく、虎皮でおおわれ、防護板をつけ、サイニヤとスグリーヴァ（馬の名）がつながれていた。(二一―二二) また、ヴリシュニ族に尊敬されている強力な勇士クリタヴァルマンも戦車に乗って現われた。(二三) 敵を制するクリシュナが、戦車に乗り、出発しようとした時、大王ドリタラーシトラは再び告げた。(二四)

「クリシュナよ、私がどのくらい息子たちを制止したか見たであろう。敵を滅ぼす者よ、すべてあなたの見ている所でなされた。何も隠していることはない。(二五) クリシュナよ、私がクル族の和平を望んで努力したこと、そしてこのような私の状態を知って、私を疑ってはならない。(二六) クリシュナよ、私にはパーンダヴァに対する悪意はない。というのは、私がスヨーダナに言った言葉を知っているだろう。(二七) すべてのクル族の人々と地上の王たちは、私が全力をあげて和平に努力したことを知っている。クリシュナよ。(二八)」

　すると強力な勇士は、ドリタラーシトラ王、ドローナ、祖父ビーシュマ、ヴィドゥラ、バーフリーカ、クリパに告げた。(二九)

「クルの集会において、あなた方の見ている前で起きたことだ。あの愚か者は、教養のない者のように、怒りにかられて何度も席を立った。(三〇) そして大知者ドリタラーシトラは、自分自身は無力であると言った……。あなた方すべてにお別れする。私はユディシティラのもとに行きます。(三一)」

　クリシュナは別れを告げると、戦車に乗って出発した。偉大な勇士たち、バラタの雄牛たちはその後に従って行った。(三二) ビーシュマ、ドローナ、クリパ、ヴィドゥラ、ドリタラーシトラ、バーフリーカ、アシュヴァッターマン、ヴィカルナ、勇士ユユツ。(三三) それから、鈴の音が響く大きくて美しい戦車に乗り、クル族の人々が見ている中を、クリシュナは父方の叔母のプリター（クンティー）に会いに行った。(三四)

（第百二十九章）

クンティー夫人、語り始める

　ヴァイシャンパーヤナは語った。——

　クリシュナはクンティーの館に入り、その両足におじぎをし、クルの集会で起こったことを手短に説明した。(一)

　ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「私と聖仙たちは、道理にかない、受け入れられるべき多くの言葉を述べた。しかし彼はそれを受け入れなかった。(二) ドゥルヨーダナに支配されるこのすべての一族はカーラ（時間、破壊神）

に煮られている。私は貴女に別れを告げてから、すぐにパーンダヴァたちのもとに発ちます。(三)私は彼らに、あなたからの伝言として何を告げましょうか。大知ある方よ、おっしゃって下さい。あなたのお言葉をうかがいたい。(四)」

クンティーは言った。

「クリシュナよ、徳性あるユディシティラ王に伝えて欲しい。

『あなたの法(ダルマ)は非常に衰微した。息子よ、空しく行動してはならぬ。(五)王よ、あなたの知性は、聡明でない愚かなヴェーダ学者の知性のように、反復により損なわれ、一つの法のみを考慮している。(六)さあ、自存者(スヴァヤンブー)に創造された通りの法を考慮しなさい。王族(クシャトリヤ)は創造者の胸から創造され、腕力により生活するものである(異本による)。常に残酷な行為に従事し、臣民を守ることに従事する。(七)この点に関し、私が長老たちから聞いた一つの譬(たと)え話を聞きなさい。

昔、満足したヴァイシュラヴァナ(クベーラ)は、王仙ムチュクンダにこの大地を与えた。しかし彼はそれを受け取らなかった。(八)「私は腕力によって獲得した王国を享受したいと望みます」と言って。するとヴァイシュラヴァナは満足しながらも驚いた。(九)その後、ムチュクンダ王は、腕力により獲得した大地を治めた。正しく王族の法(クシャトラダルマ)に専念して。(一〇)

もし王が臣民たちをよく守護すれば、王は彼らが実践した法(功徳)の四分の一を得る。パーラタよ。(一一)もし王が法を実践すれば、神の位に達することができる。もし非法(アダルマ)を行なえば、彼は地獄へ行く。(一二)王が自己の法に従って政治学(ダンダニーティ)(刑罰)を用いるなら、それは四姓(バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ)を制御し、非法を制止する。(一三)王が政治学に正しく全面的に従事する時、クリタ・ユガ(黄金時代)という最上の時代が始まる。(一四)時代が王の原因であるか、王が時代の原因であるかという疑問がないように。王が時代の原因である。(一五)王がクリタ・ユガの創造者である。そして王がトレーターとドゥヴァーパラと、第四のユガ(カリ)の原因である。(一六)王はクリタ・ユガの原因であることにより、最高の天界を得る。トレーターの原因であることにより、王は最高ではないが、天界を享受する。ドゥヴァーパラに関することにより、彼はその分に応じて天界を享受する。(一七)悪行の王は永遠の間、地獄に住む。というのは、世界は王の過失により触れられ、王は世界の過失により触れられるから。(一八)(一九―三一略)

王族の法(ラージャダルマ)により戦いなさい。祖先たちを沈み込ませてはなりませぬ。あなたは弟たちとともに、功徳を失って、悪しき帰趨に趣いてはいけません。(三二)』」　(第百三十章)

鉄の心を持つ母ヴィドゥラー

クンティーは続けた。

「この点についても、ヴィドゥラーとその息子との対話という古(いにしえ)の物語(イティハーサ)が例として引かれる。敵を苦しめる者よ。(一)彼が更により幸せになるように、あなたは彼に告げるべきです(異本による)。

ヴィドゥラーは良家に生まれ、誉れ高く、気性が激しく、輝かしい女性であった。王族の法に専念し、幸運で、先見の明があり、大勢の王によく知られ、文章を学び、博識であった。(三) この真実を語るヴィドゥラーは、ある時、実の息子を非難した。その時、彼はシンドゥ国王に敗れ、意気消沈して寝ていた。身内を喜ばせず、法を知らず、敵たちの喜びを増す者であった。(四)

『あなたは私から生まれた者でも父から生まれた者でもない。どこから来たのか。怒りがなくては男と見なされず（異本による）、去勢者に等しい。(五) 生きている間、あなたは希望がない。幸せになりたいなら、重荷を担いなさい。自己を軽んじてはなりませぬ。わずかなものによって保身を図ってはなりませぬ。幸せになる決意をして、恐れてはなりませぬ。勇気を出しなさい。(六) ああ、臆病者よ起き上がりなさい。敗れてそのように寝ていてはなりませぬ。あなたは誇りがなく、敵たちを喜ばせ、親類を悲しませる。(七) 小川はすぐにあふれる。鼠の掌はすぐに一杯になる。臆病者はすぐに満足し、ごくわずかでも満足する。(八) 蛇の牙を砕かないで犬が死ぬように死ぬか（英訳注の訂正に従う）、あるいは生命を危険にさらして勇ましく戦うか。(九) あるいは鷹のように、声を出し、または無言で、大空を恐れることなく飛びまわり、敵の弱点を見出すか。(一〇) あなたは雷に撃たれたかのように、どうしてそのように死んだように寝ているのか。立ち上がりなさい。ああ、臆病者よ。敗れてそのように寝ていてはなりませぬ。(一一) 哀れなあなたは消え失せてはなりませぬ。自分の行為により有名になりなさい。あなたは中位にも最後にも下にも立つべきではない。力強くありなさい。(一二) ティンドゥカ樹の松明のように、たとえ一瞬でも燃え上がりなさい。もみがらの火のように燻ってはならぬ。臆病に生きようと欲して（テクスト疑問。読みを修正して訳した）。一瞬でも燃え上がる方がよい。永く燻ってはならぬ。(一三) いかなる王の家にも、雌驢馬のように柔和な息子が生まれないように。最高の戦場に行き、男らしい行為をして、〔王族の〕法をすっかり果たせば、自己を非難することはない。(一四) 勝っても負けても、賢者というものは嘆くことはない。そしてその直後に彼は〔次の仕事を〕始める。生命を惜しむことはない。(一五)(一六—二三略) 気力旺盛で、獅子のような足どりで歩む勇士が死んでも、彼の領土にいる（異本による）臣民は満足する。(三四) 自分の好むことと幸福を捨てて繁栄を求める者は、遠からずして顧問たちの喜びをもたらす。(三五)』

息子は言った。

『もしあなたが私を見ることがなければ、あなたにとってすべての大地は何になるのか。あなたにとって、装飾品や諸楽や生命が何になるのか。(三六)』

母は言った。

『我々の敵たちが召使（あるいは「臆病者」?）たちの世界に達するように。我々の親しい人々が自尊心のある人々の世界に行くように。(三七) 従者たちに捨てられ、他人の施食を食べて生活する、哀れで勇気のない者たちの行動に従事してはならぬ。(三八) わが子よ、バラモンや親しい人々があなたに依存して生きるように。諸生物が雨に、神々がインドラに依存して生きるように。(三九) サンジャヤ（息子の名）よ、一切の生類が、実の熟した樹木に対するように、彼に依存

して生きるなら、その人の生は有意義である。（四〇）インドラの勇武により神々が栄えるように、その勇士の勇武により親族が幸福に繁栄するなら、その人の生はすばらしい。（四一）自分の腕力に依存して見事に生きる人は、この世で名声を得、来世でよき帰趨を得る。（四二）』

（第百三十一章）

ヴィドゥラーは言った。

『もしこのような状態にあって、勇気を捨てようと望むなら、あなたはすぐに卑しい者がたどる道を進むことになるでしょう。（一）もし王族(クシャトリヤ)が生命を惜しんで、勇武により力の限り威光を発揮しないなら、彼は盗人であると知られる。（二）私の言葉は意義あり、適切で、長所をそなえているが、あなたには届かない。薬が瀕死の人に効かないように。（三）確かにシンドゥ国王の多くの従者たちは満足している。しかし無力さから、愚かな彼らは多大な災いを待っている。（四）仲間を増やし、いたるところで決断すれば、他の者たちはあなたの勇気を見て満足するでしょう（異本による）。（五）彼らと結集し、山城に籠りなさい。時が過ぎ、敵王が災禍に陥るのを待ちつつ。敵王も不老不死ではない。（六）

あなたはサンジャヤ（勝利）とは名ばかりです。私はあなたに勝利を見ない。わが子よ、その名にふさわしい者になりなさい。名前負けしてはいけない。（七）あなたが子供の頃、正しく予見する大知者のバラモンがあなたについて告げた。「彼は非常な困難に陥ってから、再び繁栄するであろう」と。（八）彼の言葉を思い出し、あなたの勝利を望んでいるから、わが子よ、私は繰り返しあなたに言うし、これからも言うでしょう。（九）その人の目的が成就すると他の人々が繁栄する場合、政策に従って目的を追求すれば、彼の目的は必ず成就する。（一〇）サンジャヤよ、私の先祖たちも栄枯盛衰があったと知り、戦いに心を向けよ。退いてはいけませぬ。（一一）シャンバラは言いました。「今日、明日の食物が見出せないほど惨めな状態はない」と。（一二）貧困とは夫や息子の死よりもひどい不幸であると言われる。それは繰り返し死ぬことであるから。（一三）

私は高い家柄に生まれ、池から池に移るように〔高貴な家に嫁し〕、奥方となって、ありとあらゆるすばらしいものごとにより、夫にこよなく敬われた。（一四）私の友の群は、以前は、私が高価な花輪と装飾をつけ、優雅な衣服を着ているのを見たが、今は私がひどく困窮しているのを見ている。（一五）私や自分の妻がひどく困っているのをあなたが見る時、サンジャヤよ、あなたにとって生きていることは何の意味もないでしょう。（一六）（一七—三七略）

精励であれ。屈服してはならぬ。精励こそ雄々しさであるから。もし時に利あらずとも（五・一二五・一九参照）、誰にも屈服してはならぬ。（三八）気高い者は、発情した象（強い象）のように歩きまわるべきである。常にバラモンと法(ダルマ)とに敬礼すべきです。サンジャヤよ。（三九）他の種姓(ヴァルナ)を制御し、すべての悪者たちを成敗し、仲間がいるにせよいないにせよ、生命のある限りこのようであるべきです。（四〇）』

（第百三十二章）

息子は言った。

『あなたの心は鉄を固めて作ったかのようである。私の母よ。無慈悲で妬み深い、短気な母よ。(一) あなたは王族(クシャトラ)の慣習に関し、一人っ子の私に対し、他人であるかのように、このように非難したが、ああ、そんなものはどうでもよい。(二) あなたが私を見てくれないなら、すべての大地が何になるか。あなたの装飾品が何になる。諸楽や生命が何になるか。(三)』

母は言った。

『わが子よ、賢者たちのすべての企ては、法(ダルマ)と実利(アルタ)のためである。まさにそれらを考慮して、サンジャヤよ、私はあなたを鼓舞したのである。(四) 今やそれについて方策を講ずべき重大な時がやって来ました。この時が来たのに、なすべきことをしないなら、あなたは人には尊敬されず、非常にひどいことをすることになるでしょう。(五) サンジャヤよ、あなたが不名誉に陥ったのにもし何か言わなければ、私の愛情は無力で理性を欠いた雌驢馬の愛情のようなものだと言われる。(六) 善き人々に非難され、愚者がたどる道を捨てなさい。生類が寄る辺を見出す無明は実に大きいものである。(七) あなたがもし善き人の行動をするなら、あなたは私にとって愛しい。法と実利の長所をそなえた行動をし、それに反することは決してしてはならぬ。神的、人的な要件をそなえ、善き人々に践み行なわれたことをしなさい。(八) 修養なく精励でない息子と孫に喜ぶ者は、子孫という果報を得ても空しいものだ。(九) 最低の人々は、[なすべき] 行為をやらず、非難された行為をして、現世と来世において幸福

を得ない。(一〇)

サンジャヤよ、王族(クシャトリヤ)は戦うため、勝利するために創造された。常に残酷にふるまい、臣民を守護するように[作られた]。勝利しても殺されても、彼はインドラの世界を得る。(一一) しかし、インドラの天上の神聖な住処にはあの幸福が存しない。王族が敵どもを支配して味わうところの幸福が。(一二)』(一三―一六略)

息子は言った。

『母上、あなたはそのような考えを言ってはなりませぬ。特に息子に対しては。憐れみのみを考慮しなさい。聾唖者のように。(一七)』

母は言った。

『あなたがそう考えることは、私を非常に喜ばせる。あなたが私に説教するとは(テクスト疑問)。そこで私はあなたをもっとかりたてます。(一八) あなたがすべてのサインダヴァ(シンドゥ族)を殺したら、私はあなたを尊敬します。私はあなたが全面的に勝利するだろうと見ています。(一九)』

息子は言った。

『国庫も援助者もいない私に、どうして勝利があるでしょう。自分で自分のこのように惨めな状態を知って、私は王国を諦めています。罪人が天界を諦めるように。(二〇) しかし豊かな叡知がある者よ、もしあなたが何かの方策を御存知なら、おたずねします。正しく御教示下さい。私はその教えをすべてその通りに実行します。(二一)』

母は言った。

『息子よ、過去の不幸によって自分を軽んじてはならぬ。というのは、財産はなくなったかと思うと現われ、別の財産が生じてそして滅する。(二二)非常に愚かな者たちは、妬みのみによって財産を(得ようとするが)得られない。わが子よ、常にすべての行為は結果に関して不定である(時勢は時の運)。(二三)(成否は)不定であると知る人々は、時に失敗し時に成功する。しかし、行動しない人々は決して成功しない。(二四)企てをしない時には、一つの結果しかない。すなわち、行為の成果はない。また、企てる時には二つの結果がある。すなわち、成功するかしないかである。(二五)予めすべてのものごとは無常(不定)であると知っている人は、増進と繁栄が疑わしくなる時は、それを遠ざけるであろう。王子よ。(二六)

「それは成功するだろう」と決意して、常に悩むことなく、立ち上がり、覚醒し、繁栄をもたらす行為に専念すべきである。まず、バラモンたちや神々とともに吉祥の式を行なってから。(二七)息子よ、賢明な王にとって、隆盛が速やかに実現する。幸運の女神が彼に近づく。太陽が東に巡るように。(二八)多くの例証、方策、激励に対して、あなたは関心を示したように見えます。雄々しい行為をしなさい。あなたは今、願わしい人間の目的を得ることができる。(二九)誰か怒れる人々、貪欲な人々、疲弊した人々、非難された人々、軽蔑された人々、競い合っている人々がいたら、彼らについて注意深く考察しなさい。(三〇)このようにして、あなたは大きな集団を分裂させるであろう。強烈な風が立って、雲を吹き散らすように。(三一)彼ら(不満分子)に前もって贈り物をすべきである。彼らの意にそうよう努力し(原文疑問)、

好ましく語るべきである。彼らはあなたに好ましいことをなし、必ずやあなたを先頭に立てるであろう。(三二)敵は対立者が命懸けなのを知るや、彼を恐れるであろう。家に入った蛇を恐れるように。(三三)』(三四―三七略)　(第百三十三章)

母は言った。

『王はいかなる窮迫時においても恐れるべきではない。もし恐れても、決して恐れているように見せるべきでない。(一)というのは、王が恐れるのを見れば、すべてが恐れるであろう。王国、軍隊、大臣たちは、別個の考えを抱くであろう。(二)ある人々は敵に寄る辺を求める。また他の人々は王を捨てる。また、以前に軽んじられた者たちは、彼を攻撃しようとする。(三)非常に親しい人々だけが彼に仕える。彼らは無力で、吉祥を望んでいる。仔牛が捕われた牝牛のように。逝去した親族を悼むように、彼らは悲しむ王に従って嘆く。(四)以前に王に尊敬された人々や、友人と考えられた人々も、王が災禍に陥った時には、その王国を望む。あなたは恐れてはなりませぬ。親しい人々が恐れたあなたを捨てないように。(五)

私はあなたの力、勇気、知性を知ろうとして、このように告げてあなたを鼓舞したのです。力ある者が無力の者を元気づけるように。(六)サンジャヤよ、もし私が言ったことを理解するなら、もし私の言ったことが正しいなら、自分が柔和でないかのようにふるまって、勝利のために立ち上がりなさい。(七)あなたは知らないが、我々には多大な宝庫があります。私

はそれを知っていますが、他の者は知りません。私はそれをあなたに引き渡します。(八) そしてサンジャヤよ、あなたには幾百の友たちがいます。彼らは苦楽に耐え、一人で百人に匹敵する勇士で、敵に後ろを見せません。(九) 繁栄を望む人は、このような協力者を持つべきです。何か好ましいことを得ようと望む(異本による)敵を苦しめる顧問を。(一〇)』

息子は言った。

『このようなすばらしい意味と語句に満ちた言葉を聞けば、たとえ愚かな者でも、どうしてその闇が払われないことがあろうか。(一一) 未来のことを見るあなたが私を導いて下されば、私は水中に沈んだこの重荷(国王)を持ち上げて、坂を登ることができる。(一二) 私はあなたから色々な言葉を聞きたいと望み、何度も若干口答えしつつ沈黙していました。(一三) 親族からようやく得られた甘露のような言葉に飽きることなく……。今や私は、敵たちを制圧することに努力します。(一四)』」

クンティーは続けた。

「彼女の言葉の矢に撃たれてかりたてられた良馬のように、彼はすべて教えられた通りに実行した。(一五) 王が敵に苦しめられて沈み込んでいる時、顧問官はこのような最高に威光を増大させる、恐るべき激励を王に説くべきである。(一六) 勝利を望む者は、この『ジャヤ』(利勝)という物語を聞くべきである。聞けば、彼は速やかに大地を征服し、敵たちを粉砕する。(一七) そしてそれは、息子の誕生、勇士の誕生をもたらす。妊産婦が繰り返し聞けば、必ずや勇士を生む。(一八) 学問、苦行、自制にかけて勇猛な者(秀でた者)、苦行者を生む。ブラフマン(梵、ヴェーダ)の栄光で輝き、称讃の言葉により敬われる……。(一九) 光り輝き、力をそなえ、気高い勇士を生む。堅固で(異本による)、征服され得ない、無敵の勝利者を。(二〇) その王族の女は、悪者たちを成敗し、法(ダルマ)を行なう人々を守護する、約束を堅く守る勇士を生む。(二一)」

(第百三十四章)

クンティー夫人と別れる

クンティーは続けた。

「クリシュナよ、アルジュナに告げて下さい。

『あなたが生まれた時、私は隠棲所において、女たちに囲まれて座っていました。(一) その時、空中に、神々しく魅力的な声が聞こえました。

『クンティーよ、汝の息子は、千眼者(インドラ)に等しい者になるであろう。(二) 彼は戦闘において、ビーマセーナをともない、集結したすべてのクル族を征服するであろう。そして世界を破壊するであろう。(三) 汝の息子は大地を征服するであろう。そして彼の名声は天上に届く。クリシュナを協力者とし、戦場において(異本による)クル族を殺して……。(四) 彼は失った父方の(土地の)部分を取りもどすであろう。栄光ある彼は兄弟たちとともに三つの祭祀を行なうであろう。(五)』』

クリシュナよ、あの約束を守る、強力で無敵なアルジュナを私が知る限りでは、そのお告

げのようになるでしょう。（六）クリシュナよ、もし法（ダルマ）が存在するなら、その通り真実になるでしょう。そしてあなたも、その通りにすべてを実現するでしょう。（七）私はその言葉が告げたことを疑わない。偉大なる法に敬礼。法は生類を維持する。（八）
以上のことをアルジュナに言って下さい。また、常に努力する狼腹（ビーマ）に次のように言って下さい。
『その時のために王族の婦人が出産するところの、その時が今やって来ました。人中の雄牛たちは、戦いに臨んでひるむことはない。（九）』
あなたは常にビーマの気性を知っています。敵を苦しめる彼は、敵どもを滅ぼすまでは鎮まることはありません。（一〇）クリシュナよ、美しく誉れ高いクリシュナー（ドラウパディー）に告げて下さい。すべての法の特性を知る、あの偉大なパーンドゥの嫁に。（一一）
『気高く、良家に生まれた、誉れ高い女よ。あなたが私のすべての息子たちに対して適切にふるまっていることは結構なことです。（一二）』
最高の人よ、王族の法（クシャトリヤダルマ）に専念するマードリーの双子に告げて下さい。
『生命よりも、勇武により勝ち取った諸楽を選びなさい。というのは、勇武により得られた財産は、王族の法により生きる男の心を常に喜ばせるから（一三—一四）。』
我々が見ている前で、すべての徳を積んだパーンチャーリー（ドラウパディー）が乱暴なことを言われたということは、誰が許せようか。（一五）王国を奪われたことも、賭博に負けたことも、息子たちが追放されたことも、私にはそれほどの苦しみの種ではない。（一六）あの時、高貴

で黒色の彼女が集会場で泣きながら乱暴な言葉を聞いていたこと、それが私にとってより苦しいことだと思われる。（一七）その美しい腿のクリシュナーは、常に王族の法に専念しているが、あの時、生理期間に、夫を持っているのに保護者を見出さなかった。（一八）
勇士よ、一切の戦士のうちの最上者、人中の虎であるアルジュナに告げて下さい。『ドラウパディーの足跡をたどれ（忠実に従え）』と。（一九）
あなたはよく知っている。ビーマとアルジュナは、この上なく怒ったヤマ（閻魔）と死神（アンタカ）のようで、神々をも滅ぼすであろう。（二〇）このことは二人にとって屈辱である。クル族の人々が見ている前で、クリシュナー（ドラウパディー）が集会場に連れて来られ、ドゥフシャーサナがビーマにひどいことを言ったということは。そのことを再び思い出させて下さい。（二一）
パーンダヴァたちとその息子たちとクリシュナーとに、息災かとたずねて下さい。また私も息災でいると、彼らに告げて下さい。クリシュナよ。道中、恙無く（つつがなく）お行きなさい。私の息子たちを守って下さい。（二二）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
勇士クリシュナは彼女に挨拶し、右まわりにまわって敬意を表してから、獅子のような足どりで退出した。（二三）それから彼は、ビーシュマなどのクルの雄牛たちと別れた。そしてカルナを戦車に乗せ、サーティヤキとともに出発した。（二四）クリシュナが出発した時、クルの人々は互いに集まり、クリシュナに関する最高に驚嘆すべき大奇蹟について語り合った。

(二五)「すべての大地が呆然として、死神の罠に捕えられた。ドゥルヨーダナの愚かしさからそうなったのだ」と人々は言った。(二六) それからその最高の人は、都から出て進んで行った。その時、彼はカルナと非常に長い間、語り合った。(二七) それから全ヤーダヴァ族の英雄はカルナと別れ、全速力で馬たちをかりたてた。(二八) 馬たちはダールカ(御者の名)にかりたてられ、虚空を呑むかのように、全速力で進んで行った。思考か風のように速く。(二九) 駿馬たちは鷹のように速やかに道程を行き、日が高いうちにウパプラヴァ(ヴィラータの都)にクリシュナを運んで行った。(三〇)

(第百三十五章)

講和を勧める人々

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クンティーの言葉を聞くと、勇士ビーシュマとドローナは、教えに背くドゥルヨーダナに次のように告げた。(一)

「人中の虎よ、クリシュナの前で平静に述べられたクンティーの言葉を聞いたであろう。それは意義深く、法(ダルマ)にかない、最高である。(二) クンティーの息子たちは、クリシュナの同意のもと、それを実行するであろう。クルの王よ、彼らは王国の返還なしには決して鎮まることはあるまい。(三) あの時、集会場において、パーンダヴァたちとドラウパディーは、法の

輪縄に縛られて、お前に苦しめられた。そこで彼らはお前を容赦した。(四) しかし、武器を修得したアルジュナと決意したビーマと、ガーンディーヴァ弓と、二つの箙(えびら)と、戦車と、軍旗と、協力者であるクリシュナとを得たからには、ユディシティラはもはや容赦しないであろう。(五) 勇士よ、お前は実際に見たであろう。かつて英邁なアルジュナが、ヴィラータの都で、我々すべてを戦いにおいてうち破った次第を。(六)(七―八略)

バラタの最上者よ、兄弟(同様である)パーンダヴァたちとともに講和して、死神の牙の間に入ったすべての大地を守護せよ。(九) 長兄(ユディシティラ)はいつも法(ダルマ)を実践し、愛情あり、柔和に語り、清らかである。今お前は罪過を捨て、あの人中の虎のもとに行け。(一〇) 栄光あるお前が弓を捨て、眉をひそめるのをやめたのを、もしユディシティラが見れば、我々の一族の和平がもたらされる。(一一) 顧問たちとともにあの王に近づいて抱きしめ、以前と同じように挨拶しなさい。敵を制する者よ。(一二) そしてユディシティラが、親愛の情から、挨拶しているお前を両手で受け入れるようにさせなさい。(一三) 最高の戦士であり、太くて長い大きな腕をした、獅子のような肩と腿と腕を持つビーマが、両腕でお前を抱きしめるようにさせなさい。(一四) それから獅子のような首をし、蓮の眼をしたアルジュナが、お前に挨拶するようにさせなさい。(一五) アシュヴィン双神の息子たち、人中の虎たち、容姿にかけて地上に並ぶものなき二人(ナクラとサハデーヴァ)が、目上(グル)に対するように、愛情と尊敬をもってお前を立ち上がって迎えるようにさせなさい。(一六) ダーシャールハ(クリシュナ)をはじめとする王たちが、喜びから生じる涙を流すようにさせなさい。王よ、慢心を捨て兄弟たちといっしょに

なりなさい。(一七) そして兄弟たちとともに地上すべてを統治せよ。王たちが喜んで抱き合って、それぞれ帰国するようにさせなさい。(一八) 王中の王よ、戦争をする必要はない。友たちの制止(異本による)を聞きなさい。戦えば王族(クシャトリヤ)たちは必ずや滅亡すると予見される。(一九) 星々は不吉である。鳥獣は恐ろしい相を示している。王族を滅ぼす種々の凶兆が認められる。勇士よ。(二〇) 特にここには、我々が滅びる前兆がある。お前の軍隊は燃える流星によって滅ぼされる。(二一) 象馬は喜ばず、泣いているかのようだ。王よ。禿鷲たちがお前の軍隊のまわりをいたるところ徘徊している。(二二) 都も王宮も以前のようではない。ジャッカルどもは不吉な声をあげて、燃えている地平線をうろついている。(二三)

父母と我々のよかれと願う言葉に従いなさい。勇士よ、和平も戦争もお前に依存している。(二四) 敵を苦しめる者よ、もし親しい人々の言葉に従わないなら、アルジュナの矢に苦しめられる軍隊を見て、お前は苦しむだろう。(二五) 戦場で叫ぶ強力なビーマの大声を聞き、ガーンディーヴァ弓の音を聞いて、お前は私の言葉を思い出すだろう。もしお前が私の言葉に背くならば。(二六)」

(第百三十六章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドゥルヨーダナはこのように言われて、意気消沈し、横目で見て、うつ向き、眉間にしわを寄せ、何も発言しなかった。(一) 二人の人中の雄牛は、彼が意気消沈したのを見て、互いに見合って、再び彼に告げた。(二)

ビーシュマは言った。

「我々がユディシティラと戦うほど嘆かわしいことがあるか。彼は〔目上に〕従順で、敵意なく、敬虔で、約束を守る。(三)」

ドローナは言った。

「私は私の息子のアシュヴァッターマンよりもアルジュナの方を尊敬している。王よ。そしてアルジュナにはより大きな謙譲の美徳がある。(四) もし私が王族の法(クシャトラダルマ)により、息子よりも愛しいアルジュナと戦わなければならないなら、王族の生活なんて下らない。(五) 世間には彼に等しい弓取りは誰もいない。私の恩寵により、アルジュナは他の弓取りたちよりも優れている。(六) 友を裏切る者、邪悪な性質の者、無神論者(虚無論者)、不正直な者、狡猾な者は、善き人々の間で尊敬を得ない。祭祀に訪れた愚者のように。(七) 悪性の者は、悪を制止されても悪を望む。善性の者は、罪悪によりうながされても、善を望む。(八) 彼らは欺かれても好ましくふるまう。バラタの最上者よ、お前の罪過は不幸をもたらす。(九) クルの長老である私はお前に忠告した。ヴィドゥラもクリシュナも忠告した。しかしお前は何がよいことかわからない。(一〇) お前は自分には力があると考えて、性急に渡ろうとしている。雨季に、鮫や鰐や海豚のいるガンガー(ガンジス)の激流を渡るように。(一一) お前は欲にかられて、捨てられた花輪を得るようにユディシティラの富貴を得て、着物を身につけているように〔自分のものと〕考えている。(一二) ユディシティラはドラウパディーをともなって森にいるが、武

装した弟たちに取り巻かれている。王国にいる者でも、誰がそのユディシティラを凌駕できるか。(一三)(一四―二〇略)

私は再び繰り返して述べる。幸せを願う友は、友たちが災禍の海で溺れている時、そのようにすべきであるから。(二一) 戦争をしてはならぬ。お前はクル族の繁栄のために、あの勇士たちと講和せよ。息子や顧問や軍隊とともに敗北に向かってはならぬ。(二二)」

(第百三十七章)

(55) カルナとの密談（第百三十八章―第百四十八章）

カルナを勧誘するクリシュナ

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、クリシュナは王子や顧問たちに囲まれたが、カルナを戦車に乗せて出発した。（一）敵の勇士を殺すクリシュナは、戦車の中でカルナに何を言ったのか。クリシュナはカルナにどのような懐柔策を用いたのか。（二）時に応じ激流や雷雲のような音声を発するクリシュナが述べた、柔和な、あるいは鋭い言葉、それを私に語ってくれ。サンジャヤよ。（三）」

サンジャヤは語った。——

柔軟で優しい言葉、好ましく、法（ダルマ）にかなった言葉、真実で有益な言葉、心を捉える言葉を、無量の心を持つクリシュナはカルナに順次に説いた。（四―五）

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「カルナよ、あなたはヴェーダに通じたバラモンたちに仕えて来た。そして不満なく、注意深く真理についてたずねた。（六）カルナよ、実にあなたは永遠なるヴェーダの言葉を知っている。あなたはまさに、微妙な法典（ダルマシャーストラ）に通達している。（七）ある娘に生まれたカーニーナ（未婚娘の息子）またはサホーダ（連れ子）の場合、その娘を娶った男を彼の父とすると、教典を知る

人々は述べる（マヌ法典九・一七二―一七三参照）。（八）カルナよ、あなたはそのように生まれた。法の上ではパーンドゥの息子なのだ。来なさい。法典の規定によりあなたは王になるだろう。（九）父方においてはプリターの息子たちがあなたの肉親であり、母方ではヴリシュニ族があなたの親族である。人中の雄牛よ、この二つの家系が親族であると知りなさい。（一〇）友よ、今日、私とともにあなたがあちらへ行き、パーンダヴァたちに、あなたがユディシティラよりも先に生まれたクンティーの息子であると知らせよう。（一一）パーンダヴァの五兄弟はあなたの両足をつかんで敬礼するであろう。ドラウパディーの五人の息子たちも、スバドラーの無敵の息子もそうするであろう。（一二）パーンダヴァのために集結した王や王子たち、すべてのアンダカ・ヴリシュニ族の人々は、あなたの両足をつかんで敬礼するだろう。（一三）金銀や土で作った瓶、薬草、すべての種、すべての宝物、蔓草。（一四）王妃や王女たちが、あなたの即位式に、それらのものを運んで来るだろう。そしてドラウパディーも、第六の時期に、あなたのもとに（妻として）近づくだろう。（一五）今日、四ヴェーダに関わるバラモンたちと、パーンダヴァたちの司祭が、虎皮に座ったあなたを灌頂（かんじょう）するであろう。（一六）人中の雄牛であるパーンダヴァの五兄弟、ドラウパディーの五人の息子、パーンチャーラとチェーディの人々も同様にするであろう。（一七）私もまたあなたを王位につけるため灌頂するであろう。クンティーの息子であるユディシティラ王があなたの皇太子になるだろう。（一八）誓戒を厳守する徳性あるユディシティラは、白い扇を持って、あなたの後から戦車に乗るであろう。（一九）

クンティーの息子よ、クンティーの息子である強力なビーマセーナは、大きくて白い傘を、灌頂を受けたあなたのために捧げ持つであろう。(二〇) 百の鈴を鳴り響かせ、虎皮でおおわれ、白馬たちにつながれた戦車を、アルジュナが操縦するであろう。(二一) アビマニユ、ナクラ、サハデーヴァ、ドラウパディーの五人の息子たちは、常にあなたのそば近くに控えているだろう。(二二)

パーンチャーラの人々と勇士シカンディンはあなたに従うであろう。私とすべてのアンダカ・ヴリシュニの人々もあなたに従うであろう。ダーシャールハとダシャールナの人々もあなたにつき従うだろう。王よ。(二三) 勇士よ、兄弟のパーンダヴァたちとともに王国を享受せよ。祈禱、護摩、種々の祝福の儀式を行なって。(二四)」(二五—二八略)

（第百三十八章）

戦争は祭祀である

カルナは言った。

「クリシュナよ、疑いもなくあなたは親しみと愛情から、友情により、またよかれと願って、私にこのように告げた。(一) そして私はすべてを了解した。法(ダルマ)によれば私はパーンドゥの息子である。クリシュナよ、法典の規定によれば、あなたの考えている通りである。(二) クリシュナよ、その乙女は太陽神から胎児を授かり、太陽神の言葉に従い、生まれた私を捨てた。(三) それ故クリシュナよ、私は法によればパーンドゥの息子として生まれた。しかしクンティーは、不吉なものであるかのように私を捨てた。(四) スータ（御者、吟誦詩人を仕事とするカースト）のアディラタが私を見つけて家に連れて行った。そして慈しみから、私をラーダーに託した。クリシュナよ。(五) すると私への愛情から、ラーダーにすぐに乳が出るようになった。彼女は私のおしめを替えてくれた。(六) どうして私のような者が彼女に団子(ピンダ)（祖霊への供物）を供えないでいられようか。私は法(ダルマ)を知り、いつも法典を学ぶことに専念しているのに。(七) 御者のアディラタも私を息子だと考えている。そして私も、いつも親愛の情から、彼を父だと考えている。(八)

クリシュナよ、彼は息子への愛情から、教典に見られる作法に従い、私に誕生式などを受けさせた。(九) 彼はバラモンたちに頼んで、私にヴァスシェーナという名前をつけてもらった。そして私が青年期に達した時、彼は私のために妻たちをもらった。(一〇) 私と彼女たちとの間に息子たちが生まれ、やがて孫たちが生まれた。クリシュナよ、私の心は愛により彼女たちに束縛されている。(一一)

クリシュナよ、すべての大地や黄金の群と引き替えても、喜びや恐怖によっても、私は偽りを言うことはできない。(一二) クリシュナよ、私は十三年の間、ドリタラーシトラの一族において、ドゥルヨーダナの庇護のもと、棘（危険）のない王国を享受した。(一三) 私は何度もスータたちとともに多くの祭祀を行なった。私はスータたちとともに、家庭的祭祀や結婚式を行なった。(一四) そしてクリシュナよ、ドゥルヨーダナは私をあてにして武器に頼り、パーンダヴァたちと争った。(一五) それ故クリシュナよ、彼は満足して、一騎打ちにおいて、アルジュナの最高の好敵手として私を選んだ。(一六) 死、捕縛、恐怖、貪欲によっても、私に

賢明なドゥルヨーダナを裏切らせることはできない。クリシュナよ。（二七）クリシュナよ、もし今、私がアルジュナと一騎打ちをしないなら、私とアルジュナとの双方にとって不名誉なことになろう。（二八）

クリシュナよ、疑いもなくあなたはよかれと思って言ってくれた。そしてパーンダヴァたちは、あなたに服従しているから、すべてあなたの言ったようにするであろうことも疑いない。（二九）最高の人よ、この密議がもれないようにして下さい。この場合、それがよいことだと思う。全ヤーダヴァの長よ。（二〇）もし誓戒を厳守する徳性ある王（ユディシティラ）が、私のことをクンティーの長男であると知れば、彼は王国を受けないであろう。（二一）クリシュナよ、もし私が繁栄する大王国を受ければ、それを他ならぬドゥルヨーダナに与えるであろう。敵を制する者よ。（二二）あの徳性あるユディシティラが永遠に王であるべきだ。クリシュナを導き手とし、アルジュナを戦士として。（二三）（二四—二八略）

クリシュナよ、ドゥルヨーダナの『武器の祭祀』があるであろう。あなたはその祭祀の証人になるであろう。クリシュナよ、その祭祀において、あなたはアドヴァアリユ祭官（行祭僧）を務めるであろう。（二九）猿の旗標を持つ武装したアルジュナはホートリ祭官（勧請僧）を務める。ガーンディーヴァ弓が杓《しゃく》（供物を火中に注ぐ道具）となる。男たちの勇武が酥油《そゆ》（バター状の乳製品）となるであろう。（三〇）そこでは、インドラの武器、パーシュパタ（シヴァの武器）、梵天の武器（ブラーフマナ）、ストゥーナーカルナなど、アルジュナが用いる武器（呪句とともに放つ）が呪句《マントラ》となるであろう。クリシュナよ。（三一）勇武にかけて父に勝るとも劣らないスバドラーの息子（アビマニユ）は、そこで正しくグラーヴァストゥット祭官を務めるであろう。（三二）また非常に強力で、雄叫びをあげ、戦場で象軍を滅ぼす、人中の虎ビーマは、そこでウドガートリ祭官（歌詠僧）とプラストートリ（ウドガトリの助手）を務めるであろう。（三三）徳性ある永遠の王ユディシティラはそこで、祈禱と護摩を行ない、ブラフマン祭官（祈禱僧）の役を務めるであろう。（三四）クリシュナよ、法螺貝、太鼓、小鼓の音、高らかな獅子吼が、スブラフマニヤー（ソーマ祭における祈りの言葉）となるであろう。（三五）マードリーの二人の息子である勇猛で誉れ高いナクラとサハデーヴァは、そこでまさにシャミトリ祭官の仕事をするであろう。（三六）クリシュナよ、多彩な旗を掲げた汚れなき戦車の柱は、この祭祀において、祭柱として用いられるだろう。（三七）様々な矢はソーマの容器に、弓は濾過器になるであろう。（三八）刀剣は瓦筒《かわらけ》に、〔死者の〕頭はプローダーシャ餅になる。クリシュナよ、その祭祀において、血は供物（精製バター）になるであろう。（三九）槍と輝かしい棍棒は、薪と囲いの棒となる。ドローナとクリパの弟子たちがサダスヤ祭官となるであろう。（四〇）アルジュナが放った矢、偉大な戦士やドローナとその息子が放った矢が〔ソーマを飲む〕器となるであろう。（四一）サーティヤキがプラティプラスタートリ（アドヴァリユ祭官の助手）の仕事をするであろう。（四二）そこにおいて、ドゥルヨーダナが祭主になり、彼の大軍が祭主の妻となるであろう。勇士よ、大力のガトートカチャは、そこで夜通し続く祭祀が行なわれている時、犠牲獣を殺す役をするであろう。（四三）クリシュナよ、火から生まれた栄光あるドリシタデュムナは、その犠牲祭が行なわれている時、その祭祀の〔バラモンに対する〕謝礼となるであろう。（四四）

私はドゥルヨーダナのために、パーンダヴァたちに対して辛辣な言葉を言ったが、今その行為により私は苦しんでいる。（四五）クリシュナよ、私がアルジュナに殺されるのをあなたが見る時、それはその祭祀の『再開』（プナシュチティ）になるであろう。（四六）ビーマが大声で叫んでいるドゥフシャーサナの血を飲む時、それがまさにソーマの抽出になるであろう。（四七）二人のパーンチャーラ（ドリシタデュムナとシカンディン）がドローナとビーシュマを倒す時、それが祭祀の最後になるであろう。クリシュナよ。（四八）大力のビーマセーナがドゥルヨーダナを殺す時、ドゥルヨーダナの祭祀は完了するであろう。クリシュナよ。（四九）クリシュナよ、犬や禿鷲や尾白鷲に満ちたその祭場において、夫や息子や保護者たちを殺された、ドリタラーシトラの息子と孫の妻たちが集まって、ガーンダーリーとともに泣いている時、それが祭祀の終わりの沐浴となるであろう。（五〇—五一）

王族の雄牛クリシュナよ、学術と年齢の点で長老であるこれらの王族（クシャトリヤ）たちが、あなたのために無駄に死ぬことのないように。（五二）このおびただしい王族の集団が、三界において最も神聖なクルクシェートラにおいて、武器によって死に赴くように。クリシュナよ。（五三）蓮の眼をしたクリシュナよ、王族がすべて天界に到達できるように、ここで考えを決めなさい。（五四）

クリシュナよ、山や川がある限り、（彼らの）名声を讃える（原文疑問）声が永遠に続くように。（五五）クリシュナよ、バラモンたちは集会において、王族たちの名誉を担う偉大なバラタ族（マハーバーラタ）の戦いを語り継ぐであろう。（五六）敵を苦しめるクリシュナよ、クンティーの息子

（アルジュナを指すと思われる）を戦いのため私のもとに連れて来なさい。永久にこの相談の秘密を守って。（五七）」

（第百三十九章）

勝利と敗北の前兆

サンジャヤは語った。——

敵の勇士を殺すクリシュナは、カルナの言葉を聞くと、微笑して次のように言った。（一）

「カルナよ、王国を得るという提案はあなたを熱くしないのか。私に与えられた大地を統治したいと望まないのか。（二）

パーンダヴァたちが勝利するということは確実である。それに何ら疑問の余地はない。アルジュナの勝利の旗が認められる。恐るべき猿王（の旗標）は高くそびえ立っている。（三）それはバウヴァナ（ヴィシュヴァカルマン、一切造者）により創られた神々しい幻術（マーヤー）で、インドラの旗のようにそびえ立っている。そこに、恐怖を催させる恐ろしい神的な生き物たちが認められる。（四）それは山や樹木にひっかかることはない。上に、水平に、一由旬（ヨージャナ）（距離の単位）ほど広がっている。カルナよ、アルジュナの栄光ある旗は、火のような形状でそびえ立っている。（五）

アルジュナが戦場で白馬にひかれ、クリシュナを御者とし、インドラの武器、火神と風神の武器を用い、雷のようなガーンディーヴァ弓の音を響かせているのをあなたが見る時、トレーターもクリタもドゥヴァーパラ（すべて宇宙紀の名）もなくなるであろう（カリと呼ばれる恐ろしい宇宙紀が来る）。（六—七）

ユディシティラが戦場で祈禱と護摩を行ない、自分の大軍を守り、太陽のように不可侵で、敵の軍隊を苦しめているのをあなたが見る時、トレーターもクリタもドゥヴァーパラもなくなるであろう。(八―九) 強力なビーマセーナが戦場で、ドゥフシャーサナの血を飲んで、敵象を殺す発情した象のように、戦場で踊るのをあなたが見る時、トレーターもクリタもドゥヴァーパラもなくなるであろう。(一〇―一一)(一二―一五略)

カルナよ、ここから引き返し、ドローナやビーシュマやクリパに告げよ。今はめでたい月である。飼料も燃料も豊富に得られる。(一六) 作物は実り、森は繁栄している。果実は実り、蚊は少ない。ぬかるみはなく、水は味がよい。暑すぎず寒すぎず、快適である。(一七) 七日後に新月があるであろう。その日に戦争を始めなさい。それはシャクラ(インドラ)神の日と呼ばれるから。(一八) また、戦うために集まったすべての王たちに告げなさい。『あなたが望んでいることを、すべて私は成就する』と。(一九) ドゥルヨーダナの支配下にある諸王と諸王子は、武器により死に赴き、最高の帰趨(昇天)に達するであろう。(二〇)」

(第百四十章)

サンジャヤは語った。――

有益で好意的なクリシュナの言葉を聞くと、カルナはクリシュナに敬意を表してから言った。

「勇士よ、あなたはすべてを知りながら、どうして私を迷わせようと望んだのか。(一) 大地

が全滅する時は近づいた。シャクニと私とドゥフシャーサナとドゥルヨーダナ王がその原因である。(二) クリシュナよ、パーンダヴァたちとクル族の恐ろしい血にまみれた大戦争が、今や疑いもなく近づいた。(三) ドゥルヨーダナに支配される諸王と諸王子は、戦いにおいて、武器と火に焼かれ、ヤマ(閻魔)の住処に行くであろう。(四) というのは、クリシュナよ、多くの恐ろしい夢が見られるから。また、恐ろしい前兆、非常におぞましい不吉な現象が認められるから。(五) それら身の毛がよだつ種々の前兆は、ドゥルヨーダナが敗れ、ユディシティラが勝利することを告げるかのようである。クリシュナよ。(六) 鋭く大きい光を放つ土星は、ローヒニー星宿を苦しめる。生類をよりいっそう苦しめつつ。(七) 火星はジェーシター星宿において逆行し、友愛を滅するかのように、アヌラーダー星宿を追い求めている。クリシュナよ。(八)

クリシュナよ、疑いもなくクル族に大きな危険が近づいている。特に惑星(グラハ)がチトラー星宿を苦しめている。(九) 月の斑点はその位置を変えている。ラーフ(食を起こす悪魔)は太陽に近づこうとしている。流星は天空から落ち、突風と地震をともなう。(一〇) 象はうめき声を出し、馬は涙を流し、水や飼料を喜ばない。クリシュナよ。(一一) これらの前兆が現われる時は危険が近づいていると言われる。生類が滅びる、恐ろしい危険が。勇士よ。(一二) ドゥルヨーダナのすべての軍隊においては、馬や象や人はわずかしか食べないのに、多くの糞が認められる。クリシュナよ、それは敗北の兆であると賢者らは説く。(一三―一四) クリシュナよ、パーンダヴァたちの象馬は喜び勇んでいると言われる。獣は彼らを右まわりにまわる。それらは勝

利の兆である。(一五) クリシュナよ、すべての獣はドゥルヨーダナを左まわりにまわる。姿の見えない者の声が聞こえる。それは敗北の兆である。(一六) 孔雀、瑞相の鳥(異本による)、ハンサ鳥、サーラサ鳥、チャータカ鳥、ジーヴァンジーヴァカ鳥の群がパーンダヴァたちにつき従う。(一七) 禿鷲、鴉、鳶、鷹、悪鬼、ジャッカル、蚊の群がクル族につき従う。(一八)
ドゥルヨーダナの軍隊においては、太鼓の音は聞こえない。しかしパーンダヴァの軍隊においては、太鼓は打たれなくても鳴り響く。(一九) ドゥルヨーダナの軍隊においては、井戸は雄牛のようにうなり声をあげる。それは敗北の兆である。(二〇) クリシュナよ、神は肉や血の雨を降らせる。輝かしいガンダルヴァの都(蜃気楼)が現われる。それは塁壁と堀と城壁と美しいトーラナ門を有する。(二一) 日の出と日没の薄明に、黒い鉄棒が太陽をおおって存在する。それは大きな危険を告げ知らせる。ジャッカルたちが(異本による)恐ろしく鳴く。それは敗北の兆である。(二二) 非常に恐ろしい黒い首をした鳥たちが降下し、〔朝夕の〕薄明に向かって行く。それは敗北の兆である。(二三) ドゥルヨーダナはまずバラモンたちを憎み、目上(グル)(師)を憎み、それから忠誠心のある臣下たちを憎む。それは敗北の兆である。(二四) 東方は血のように赤い。南方は刀剣のような色をしている。西方は生の器のような〔土色〕をしている。クリシュナよ。(二五) ドゥルヨーダナにとって、すべての方角は燃え上がるかのようである。クリシュナよ、この凶兆において、それらは大なる危険を告げ知らせている。
(二六) クリシュナよ、私は夢で、ユディシティラが弟たちとともに、千の柱で支えられた宮殿に

登るのを見た。(二七) 彼らがすべて白いターバンをつけ、白衣を着ているのが認められた。そして彼らすべての、白く輝く座席を見た。(二八) そしてクリシュナよ、私は夢で、あなたが血にまみれた地面を内臓でおおっているのを見た。(二九) 無量の威厳をそなえたユディシティラは骨の山に登り、喜んで、黄金の器でギーの混じった粥を食べていた。(三〇) ユディシティラがあなたから与えられたこの大地を呑んでいるのを私は見た。明らかに彼は大地を享受するであろう。(三一)

恐るべき行為の狼腹(ビーマ)は、高い山に登っていた。その人中の虎は棍棒を手に持ち、この大地を凝視するかのようであった。(三二) 明らかに彼は、激戦において、我々すべてを滅ぼすであろう。クリシュナよ、私は知っている。法(ダルマ)のある所に勝利があるということを。
(三三) クリシュナよ、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナは、あなたとともに白象に乗り、最高の光輝により輝いていた。(三四) クリシュナよ、私は確信するが、あなた方はその戦場で、ドゥルヨーダナをはじめとするすべての王を殺すであろう。(三五)」(三六―四二略)

クリシュナは言った。

「確かに今や大地は滅亡に近づいている。というのは、カルナよ、私の言葉はあなたの心に達しないから。(四三) 友よ、万物の滅亡が近づく時、道理を装う非理が心から離れないものだ。(四四)」

カルナは言った。

「勇士クリシュナよ、この勇士を帰滅させる大戦争を我らが生き延びることができたら、またあなたに会うであろう。(四五) あるいはクリシュナよ、きっと我々は天界で会うであろう。我らはそこであなたと再会する。非の打ち所のない人よ。(四六)」

サンジャヤは語った。――

カルナはこのように告げると、クリシュナをしっかりと抱擁した。そしてクリシュナに別れを告げ、戦車から降りた。(四七) それからカルナは、黄金で飾られた自分の戦車に乗り、落胆して、我々とともに引き返した。(四八) それからクリシュナは、サーティヤキとともに、全速力で進んで行った。何度も御者に「行け、行け」と声をかけながら。(四九)

(第百四十一章)

クンティー夫人、カルナに会う

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

懐柔策が成功せず、クリシュナがクル族からパーンダヴァたちのもとに去った時、ヴィドゥラはプリター(クンティー)のところに行き、嘆くかのように静かに告げた。(一)

「生きている息子たちの母よ、あなたは私の心がいつも好意的であると知っている。しかしスヨーダナ(ドゥルヨーダナ)は、いくら私が叫んでも聞く耳を持たない。(二) あちらではユディシテ

イラが、チェーディ、パーンチャーラ、ケーカヤの王とともに、またビーマ、アルジュナ、クリシュナ、ユユダーナ、双子たちとともに、ウパプラヴィヤに駐屯し、親族への親愛の情から、法(ダルマ)のみを望んでいる。強力であるのに弱者であるかのように。(三―四) しかし、あの年老いたドリタラーシトラは講和しない。息子への愛に酔い痴れて、彼は法にもとる道を歩んでいる。(五) ジャヤドラタ、カルナ、ドゥフシャーサナ、シャクニたちの悪い判断により、相互の離間が進んでいる。(六) 彼らは法に基づく王国を無法にも奪ったのだから、法は彼らに報いをもたらすだろう。(七) クル族により法が力ずくで奪われる時、何人(なんぴと)が熱しないだろうか。講和をしないでクリシュナが帰った時、パーンダヴァたちは戦いの準備をするであろう。(八) クル族の悪い政策が勇士の滅亡に帰するであろう。私は考えこんで、昼も夜も眠ることができない。(九)」

よかれと願う彼が述べた言葉を聞いて、クンティーは苦悩してため息をつき(異本による)、心の中で考えた。(一〇)

「財産に災いあれ。そのために親族は殺し合い、大帰滅があるのだから。この親縁者たちの戦いにおいては、敗北のみがあるでしょう。(一一) パーンダヴァ、チェーディ、パーンチャーラ、ヤーダヴァが集結して、バラタ族と戦うなら、それよりも悲しいことがあろうか。(一二) 戦争は必然的に罪悪であると私は思います。そして戦争は敗北に帰すると。人は財産がなくて死ぬ方がましです。親族を殺して勝利するよりは。(一三) シャンタヌの息子である祖父(ビーシュマ)、戦士の主である師匠(ドローナ)、そしてカルナが、ドゥルヨーダナに味方して、私

の恐れをかきたてます。(二四) ドローナ師は決して自ら望んで弟子（パーンダヴァ）たちと戦わないでしょう。祖父（ビーシュマ）は、パーンダヴァたちに愛情を示さないはずはありません。(二五) しかし、邪見を抱き、常に迷って邪悪なドゥルヨーダナに従い、パーンダヴァたちを憎む一人の悪人がいます。(二六) カルナは特別に強力で、いつもパーンダヴァたちの非常な不利益になるように固執しています。今それが私を苦しめます。(二七) 今日、私はカルナのもとに行き、真相を明らかにして、彼の心がパーンダヴァに好意を寄せるようにさせたいと思います。(二八)

私が父の家に住んでいた時、ドゥルヴァーサス尊者は私に満足し、神を呼び出すことができるという恩寵を与えました。(一九) 私はクンティボージャに大事に育てられていましたが、婦人部屋で色々と心を悩ませて考えていました。(二〇) 〔バラモンから教わった〕呪句の効果について、またバラモンの言葉の力について。女の浅はかさから、また子供であったので、何度も考えていました。(二一) 信頼の置ける乳母に守られ、友たちに囲まれて、間違いのないようにして、父の名誉を守りつつ。(二二)

『どうしたらうまくやって、しかも罪にならないようにできるのか』と考え、あのバラモンのことを拝んでいました。(二三) ところが、好奇心から、また幼稚さから、とんでもないことをしてしまったのです。生娘であった私は、太陽の神を呼び出しました。(二四) そこでカルナは未婚の私の息子として生まれました。道にかない兄弟に有益な私の言葉にどうして従わないでしょうか。(二五)」

クンティーはこのように最高の義務を果たそうと決意して、その仕事のために外出し、バーギーラティー（ガンガー）川に行った。(二六) それからプリター（クンティー）は、ガンガーの岸で、憐れみ深く信義を守る息子が朗誦している声を聞いた。(二七) その哀れな女は目的を果たすために、東方を向いて腕を上げている息子の背後で、彼の祈禱が終わるのを待っていた。(二八) 彼女は太陽の熱に苦しみ、しおれた蓮の花輪のように、カルナの上衣の陰に立っていた。(二九) 誓戒を堅く守る彼は、背中が熱くなるまで祈禱してから、ふり向いてクンティーを見た。威光に満ち、誇り高く、法（ダルマ）を守る者たちのうちの最高者である彼は、彼女に挨拶してから、作法通りに合掌してそばに立っていた。(三〇)

（第百四十二章）

カルナは言った。

「私はアディラタとラーダーの息子カルナです。あなたにご挨拶します。あなた様は何のために来られたのか。あなたのために何をすべきか、おっしゃって下さい。(一)」

クンティーは答えた。

「あなたはクンティーの息子です。ラーダーの息子ではありません。またアディラタはあなたの父親ではありません。あなたはスータ族（御者、吟誦者の階層）の家の生まれではありません。カルナよ、私の言葉を聞きなさい。(二)

あなたは未婚娘の私から生まれた息子です。私のお腹を痛めた最初の息子です。クンティ

ボージャの家で。わが子よ、あなたはプリターー（クンティー）の息子です。（三）熱し光照作用のあるあのヴィローチャナ（太陽）の神が、カルナよ、最高の戦士であるあなたを私に生ませました。（四）無敵の息子よ、〔生まれつき〕耳環をつけ、鎧を着た神の子、栄光に満ちたあなたは、父（クンティボージャ）の家で私から生まれました。（五）あなたが実の弟たちのことを知らずに、迷妄から、ドリタラーシトラの息子たちに仕えていることは、あなたには特にふさわしくないことです。息子よ。（六）法（ダルマ）に関する結論のうち、父祖と一途に子を愛する母とが彼に満足するなら、それが人間にとって最高の法の果報である。息子よ。（七）かつてアルジュナにより獲得されたユディシティラの繁栄を、悪人たちが欲にかられて奪った。ドリタラーシトラの息子たちからそれを断ち切り、あなたが享受しなさい。（八）兄弟愛によりカルナとアルジュナとが結びつくのを、今日、クル族の人々に見せてあげなさい。それを見て、悪人たちが服従するようになさい。（九）カルナとアルジュナとが、〔バラ〕ラーマとクリシュナとの〔兄弟の〕ようになるべきです。両者が心を合わせれば、世界で成就しないものはないでしょう。（一〇）カルナよ、五人の弟たちに囲まれて、きっとあなたは輝くでしょう。梵天が四ヴェーダとヴェーダ補助学に囲まれて輝くように。（一一）諸々の美質をそなえ、優れた親類のうちで最高であり最も年長であるあなたは、スータの息子と呼ばれることはありません。あなたは強力なパールタ（プリターの息子）です。（一二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

（第百四十三章）

その時カルナは、太陽から発せられた言葉を聞いた。その父のような太陽の発した言葉は、愛情にあふれ、侵しがたいものであった。（一）

「カルナよ、プリターは真実の言葉を述べた。母の言葉に従え。人中の虎よ、すべてその通りに行動すれば、お前は幸せになれるだろう。（二）」

母と父の太陽により直々に告げられても、信義を堅く守るカルナの心は動揺しなかった。（三）

カルナは言った。

「王族の婦人よ、あなたの言われたことを信じないわけではない。そしてあなたの指令を実行することが、私にとって法（ダルマ）の門であろう。（四）しかしあなたは、私に対し非常にひどい罪を犯した。あなたは私を捨てたのだ。その罪は私の名誉を失わせるものであった。（五）私は王族として生まれたのに、王族にふさわしい尊敬を得られなかった。それもあなたのせいだ。敵でもこれほどひどいことはしないだろう。（六）あなたはなすべき時に、私に憐れみを示すことなく、浄化の儀式（誕生式など）を受けなかった私を今やせきたてている。（七）あなたは以前、母親らしく私によかれと行動したことはない。そのあなたが、今、単に自分の利益を望んで、私に説教している。（八）

クリシュナと組んだアルジュナを誰が恐れないだろうか。もし今、私がパーンダヴァたちと手を組めば、私が怖気づいたと考えない者がいようか。（九）以前には私には兄弟がいないと考えられていたが、戦いの時に〔私が彼らの兄だと〕明らかにされた。もし私がパーンダ

ヴァ側に行けば、王族は私について何と言うだろう。(二〇) ドリタラーシトラの息子たちは、私のすべての望みをかなえてくれて、いつも私を非常に尊敬してくれた。そのことをどうして無にすることができよう。(二一) 相手方と敵対関係になってからも、彼らはいつも私に尽くしてくれた。いつも敬意を表してくれた。ヴァス神たちがヴァーサヴァ(インドラ)を敬うように。(二二) 彼らは私の力により敵と対抗できると考えているのに、今、どうして私は彼らの願望を断ち切ることができるか。(二三) 彼らは私を舟として、乗り越えがたい戦争を渡ろうとしている。大海を渡ろうと望む彼らを、どうして私が捨てることができるか。(二四) ドゥルヨーダナに養われている人々にとって、今や時がやって来た。私は命懸けで彼の恩に報いるべきである。(二五) 悪人たちは、よく養われ満足させられても、恩を返すべき時が来ても、恩を考慮せず、信義なく裏切る。(二六) 王を欺き、主人の餅を奪う悪行の彼らには、この世もなければあの世もない。(二七)

私はドリタラーシトラの息子たちのために、全力であなたの息子たちと戦います。私はあなたに虚偽は言いません。(二八) 私は善人にふさわしい温情の行為を守ります。あなたの言葉は有益かも知れませんが、私はそれに従いません。(二九) しかし、あなたが私に働きかけた努力が無駄にならないようにしましょう。戦場であなたの息子たちと対戦し、殺すことができる場合でも、私は彼らを殺さないでしょう。ユディシティラとビーマと双子は。ただしアルジュナは除きます。(三〇) ユディシティラの軍隊の中で、私はアルジュナとのみ戦います。私は戦いにおいてアルジュナを殺して、目的を達成するのです。あるいは、アルジュナに殺されて名誉を受けるのです。(三一) 誉れある婦人よ、あなたの五名の息子は滅びることはないでしょう。アルジュナを欠く時はカルナがいて、私が殺された時はアルジュナがいるのですから。(三二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

カルナの言葉を聞くと、クンティーは苦悩のあまり身をふるわせた。平静さを失わない息子のカルナを抱きしめて、彼女は言った。(三三)

「カルナよ、あなたが言うようになるでしょう。そうして、クル族は滅亡するでしょう。運命は非常に強力です。(三四) でも、敵を粉砕する者よ、あなたは四人の兄弟の安全を保証しました。その約束を果たすと誓って下さい。(三五) 元気でね、御機嫌よう。」

プリター(クンティー)はカルナにそう告げた。カルナは喜んで彼女に挨拶した。そして二人はそれぞれ別々の方角へ行った。(三六)

(第百四十四章)

クリシュナの報告

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

敵を制するクリシュナは、ハースティナプラの都からウパプラヴィヤに帰ると、パーンダヴァたちに一部始終を残らず告げた。(一) クリシュナは非常に長い時間話をして、何度も協

議してから、休息をとるために自分の宿舎に行った。(二) 太陽が西に沈む時、パーンダヴァの五人の兄弟は、ヴィラータをはじめとするすべての王たちをひきとらせた。(三) 彼らは黄昏（サンディヤー）を崇拝してから、クリシュナのことだけを一心に考えていた。そしてクリシュナを呼んで来させ、再び協議をした。(四)

ユディシティラは言った。

「蓮の眼をした人よ、あなたは象の都（ハースティナプラ）に行って、集会場でドゥルヨーダナに何と言ったのか。それを我々に話してもらいたい。(五)」

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「私は象の都に行って、集会場で、ドゥルヨーダナに真実で道にかなった有益なことを述べた。しかしあの悪党はそれを受け入れなかった。(六)」

ユディシティラは言った。

「ドゥルヨーダナが誤った道に陥った時、クルの長老である祖父（ビーシュマ）は短気な彼に何と言ったのか。クリシュナよ。また強力なバラドゥヴァージャの息子である師匠（ドローナ）は何と言ったか。(七) そして我々の叔父、法（ダルマ）を保つ人々の最高者であるヴィドゥラは、息子（甥）たちのことで心配しているが、その彼はドゥルヨーダナに何と言ったか。(八) また、集会場に座っているすべての王たちは何と言ったか。クリシュナよ、ありのままに話してくれ。(九) あの貪欲に支配され、知者だと自惚れている愚か者に対して、クルの長（ドリタラーシトラ）たちが告げた言葉については、あなたはすでにすべて報告した。(一〇) しかしクリシュナよ、不愉快なことは私の心にはとどまらない。主クリシュナよ、私は彼らの言葉を聞きたいのだ。(一一) 友よ、時が過ぎないようにしてくれ。実にあなたは我々の寄る辺である。クリシュナよ、あなたは保護者であり師である。(一二)」

ヴァースデーヴァは言った。

「聞きなさい、王よ。クル族の中で、集会場で、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）王はどのような言葉を告げられたかを。王中の王よ、私の話を聞きなさい。(一三)

私の言葉が終わると、ドゥルヨーダナは笑った。するとビーシュマは怒って、次のように言った。(一四)

『ドゥルヨーダナよ、一族のために私がお前に告げることを聞きなさい。王中の虎よ、それを聞いて、自分の一族に有益なことをしなさい。(一五)

なあ王よ、私の父は世に有名なシャンタヌである。私は（最初は）彼の一人息子であった。息子を持つ者たちの最上者よ（異本に従う）。(一六) どうしたら第二の息子ができるかという気持が彼に起こった。一人息子は息子がないに等しいと賢者たちは説く。(一七) どうしたら一族は断絶せず、名声が広まるか。

私は彼の望みを知ると、母となるべきカーリー（サティヤヴァティー）を連れて来た。(一八) 私は父と一族のために、行ないがたい誓約をした。王にならないという誓いと、禁欲を守るという誓いとである。そのことはお前もよく知っているだろう。私はこの通り、誓約を守りつつ満足して暮らしている。(一九) 彼女に、私の弟であるヴィチトラヴィーリヤ王が生まれた。強力で

栄光あり、クルの一族を支える、徳性ある男であった。(二〇)
父が昇天した時、私はヴィチトラヴィーリヤを自国の王に即位させ、自分は臣下となってその下で働いた。(二一) 王中の王よ、私は諸王の群をうち破って、彼に似合いの妻たちを娶らせた。これも何度も聞いたであろう。(二二) その後、私は戦いにおいて、ラーマ(パラシュラーマ)と一騎打ちをした。実に彼はラーマを恐れて、都の人々に追放された。そして彼は妻たちに耽溺したので結核にかかった。(二三) 王国に王がいなくなって、神々の王(インドラ)はそこに雨を降らせなくなった。臣民たちは飢えと恐怖に苦しんで、私のもとに急いでやって来た。(二四)

臣民たちは言った。

「臣民は全滅してしまいます。我々の存続のために王になって下さい。シャンタヌの一族を栄えさせる者よ、どうかこの災害を取り除いて下さい。(二五) すべての臣民は非常に恐ろしい病気で苦しんでいます。わずかしか残っていません。ガンガーの息子よ、彼らを救ってやって下さい。(二六) 勇士よ、あなたは病気を除去し、臣民を法(ダルマ)により守って下さい。あなたが生きているのに、王国を滅ぼしてはなりませぬ。(二七)」

ビーシュマは続けた。

『私の心は泣き叫ぶ臣民たちによっても、全く乱されることはなかった。私は善き人の行ないを想起し、例の誓約を守っていたからである。(二八) 大王よ、それから都の人々も、私の美しい母カーリーも、臣下、司祭、王師、博識のバラモンたちも、非常に心配して、絶えず

私に告げた。

「王になって下さい。(二九) プラティーパに守られた王国は、あなたに至って滅びるでしょう。そこであなたが、我々のために王となって下さい。大知者よ。(三〇)」

息子よ、私はそう言われて困り、ひどく悩み、合掌して、父を尊重して誓約したことを彼らに何度も告げた。私は一族のために、禁欲を守り、そして王にならないということを。(三一) そして王よ、私は合掌して母を何度もなだめた。

「母上、私はシャンタヌから生まれ、クル族の家系を担っていますが、誓約を反故にすることはできません。(三二) 特にあなたのために〔このようにしたのですから〕。私に重荷を担わせないで下さい。息子を愛する母よ、私はあなたの召使であり奴隷です。(三三)」

このように母と他の人々をなだめてから、私は偉大な聖者ヴィヤーサに、弟の妻たちに息子を授けてくれと頼んだ。(三四) 大王よ、私は母とともにその聖仙に懇願して、子孫を授けてくれるように頼んだ。そして彼は恩寵を授け、その時三人の息子を作った。バラタの最上者よ。(三五) お前の父は盲目で身障者であったので、王にならなかった。世に知られた偉大なパーンドゥが王となった。(三六) 彼は王であり、彼の息子たちは父の遺産を相続するものである。わが子よ、争ってはならぬ。王国の半分を与えなさい。(三七) 私が生きている限り、いかなる男が〔一人で〕王国を治められるか。私の言葉を軽んじてはならぬ。私はいつもお前たちの平和を望んでいるのだ。(三八) 息子よ、私はお前と彼らを差別しない。王よ。これはお前の父や、ガーンダーリーや、ヴィドゥラの考えでもある。(三九) もし長老の言うこと

が聞かれるべきであるなら、私の言葉を疑ってはならぬ。自分と大地をすべて失ってはいけない。（四〇）』」

（第百四十五章）

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「ビーシュマがこのように述べると、それから雄弁なドローナが諸王の中でドゥルヨーダナに告げた。あなたに幸いあれ。（一）

『わが子よ、プラティーパの息子シャンタヌが、一族のために努力したように、デーヴァヴラタすなわちビーシュマは、一族のために尽くした。（二）それから、感官を制し約束を守るパーンドゥ王が、クル族の王となった。徳性あり、誓戒を守り、節制ある王であった。（三）ところがクルの家系を栄えさす彼は、賢明な兄のドリタラーシトラと、弟のヴィドゥラに王国を譲った。王よ、それから不滅の兄を玉座に座らせて、パーンドゥは二人の妻とともに森へ行った。非の打ち所のない王子よ。（四―五）人中の虎であるヴィドゥラはへりくだって、払子を振って、召使のようにドリタラーシトラに恭しく仕えた。（六）わが子よ、それからすべての臣民は、パーンドゥ王に仕えたように、作法通りにドリタラーシトラ王に仕えた。（七）

一方、敵の都市を征服する勇士パーンドゥは、ドリタラーシトラとヴィドゥラに王国を委ね、すべての地上をさまよった。（八）約束を守るヴィドゥラは、国庫の確保、贈与、臣下の

監督、すべての者を養うことに努めた。（九）敵の都市を征服する、威光に満ちたビーシュマは、和平と戦争（外交）にあたり、また王の補佐に努力した。（一〇）強力なドリタラーシトラ王は玉座に座り、常に偉大なヴィドゥラにつき従われていた。（一一）

そなたは彼の一族に生まれながら、どうして一族を離間させようとするのか。兄弟たちとともに結束して諸楽を享受せよ。王よ。（一二）私は決して優柔不断から言っているのでも、利欲のために言っているのでもない。最高の王よ、私はビーシュマに与えられたものを食べている。そなたに与えられたものではない。（一三）私はそなたから生活の手段を望まない。王よ。ビーシュマのいるところドローナがいる。ビーシュマが言うことに従いなさい。（一四）パーンドゥの息子たちに王国の半分を与えなさい。敵を悩ます者よ。わが子よ、私はいつもそなたと彼らとの共通の師である。（一五）私にとって白馬の男（アルジュナ）はアシュヴァッターマンと同様である。多言を要しない。法のあるところに勝利がある。（一六）』

大王よ、無量の威光を持つドローナがこのように告げた時、法を知り約束を堅く守るヴィドゥラは、父（ビーシュマ）の方を向き、その顔を見て言った。（一七）

『デーヴァヴラタ（ビーシュマ）よ、私の言う言葉を聞いて下さい。クル族の家系は滅びかけましたが、あなたにより再び救い上げられました。（一八）そこで、嘆いている私の言葉をあなたは〔何故〕見過ごすのですか。（一九）この一族において、ドゥルヨーダナという男は、何たる一族の面汚しだ。（二〇）彼は貪欲に支配され、益なき男で恩知らずだ。その心は貪欲に蝕まれている。彼は法と実利を見通す父の教令に背いている。あなたはその彼の考えに従っているの

だ。(二〇) このクル族はドゥルヨーダナのせいで滅亡する。偉大な王よ、クル族が滅びないようにして下さい。(二一) 輝きに満ちた人よ、かつて私とドリタラーシトラを、絵師が絵を作るように作っておいて、ここで滅ぼさないで下さい。造物主が生類を創造してから帰滅させるように、一族の滅亡を見ながら見過ごさないで下さい。強力な勇士よ。あるいは、滅亡が近づいたので、あなたの知性は失せたのか。それなら、私とドリタラーシトラとともに森に行きなさい。(二二―二三) あるいは、邪悪で暗愚なドゥルヨーダナを捕えて、この王国をパーンダヴァたちに治めさせるのがよい。(二四) 王中の虎よ、どうかお願いです。パーンダヴァとクルと無量の威光を持つ王たちの大帰滅が予見されます。(二五)』

ヴィドゥラはこのように告げると沈黙した。彼は意気消沈し、何度もため息をついて考えこんでいた。(二六)

それからスバラ王の娘(ガーンダーリー)は、一族の滅亡を恐れ、邪悪で冷酷な息子のドゥルヨーダナに、怒って、王たちが見ている前で、法と実利にかなう言葉を述べた。(二七)

『この王の集会場に入っている王たち、梵仙(バラモン出身の聖仙)、その他の会衆たちは聞いて下さい。邪悪なお前と顧問グループの罪状を告げるであろう。(二八) クル族の王国は順番に統治される。これは代々伝わった一族(クラ)の法(ダルマ)です。邪悪で冷酷な男よ、あなたは非道によりクル族の王国を滅ぼす。(二九)

賢明なドリタラーシトラは王国に住し、先見の明があるヴィドゥラは彼に従う。ドゥルヨーダナよ、今あなたは迷妄により、その二人を差し置いて、どうして王位を求めるのか。

(三〇) 気高い王とヴィドゥラは、ビーシュマがいる限り、彼に従属するであろう。しかし最高の人である偉大なビーシュマは、法を知っているから、王国を望まない。(三一)

ところで、この王国がパーンドゥのものであったということは侵しがたい。今や他ならぬ彼の息子たちがそれを所有する権利がある。それ故、この全王国はパーンダヴァたちのものである。父祖伝来の、子々孫々の領土である。(三二) 我々は自己の法(王族の本務)を守って、偉大なクルの長、約束を堅く守る賢明なデーヴァヴラタ(ビーシュマ)が言うこと、それをすべて法であると考えて受け入れるべきである。(三三) そしてこの偉大な誓戒を守るビーシュマの承認のもとで、王(ドリタラーシトラ)とヴィドゥラは何かを告げるべきである。そして親しい人々は、法を前提として、非常に長い期間、努力してそれを実行すべきである。(三四) ダルマの息子ユディシティラが、道理により得られたこのクル族の王国を統治すべきです。ドリタラーシトラ王によりうながされ、シャンタヌの息子(ビーシュマ)に先導されて……。(三五)』

(第百四十六章)

ヴァースデーヴァは言った。

『王よ、ガーンダーリーがこのように告げた時、ドリタラーシトラ王は諸王の中央で、ドゥルヨーダナに言った。(一)

『息子ドゥルヨーダナよ、私がお前に言うことを聞きなさい。もし父を尊敬するなら、どう

かお願いだ。私の言う通りにしてくれ。（二）かつて造物主ソーマがクルの家系を創設した。ソーマから六代目が、ナフシャの息子ヤヤーティ（一・七〇、五・一二参照）である。（三）彼には最高の王仙である五人の息子がいた。彼らのうちで、長男のヤドゥは、大威光を有する王であった。（四）最も若いプールが我々の家系を栄えさせた。（五）バラタの最上者よ、ヤドゥはデーヴァヤーニーの息子であった。つまり彼は、無量の威光を有するシュクラ・カーヴィヤの娘の子である。わが子よ。（六）ヤドゥはヤーダヴァ族の創設者であり、強力であり、その力により尊敬されていたが、慢心し理性を失い、王族を軽んじた。（七）彼は力に酔い慢心して、父の命に従わなかった。無敵の彼は、父と弟たちを軽蔑した。（八）強力なヤドゥは四辺に至るまでの大地における諸王を支配して、象の都（ハースティナプラ）に住んだ。（九）ガーンダーリーよ、彼の父であるヤヤーティは非常に怒り、息子を呪って、王国から追放した。（一〇）そしてヤヤーティは、力に驕ったヤドゥと同様の行為をした弟たち、すなわち自分の息子たちに対しても怒り、彼らを呪った。（一一）そしてその最高の王は、自分の言うことを聞いた、柔順な末子のプールを王位につけた。（一二）このように、長男といえども傲慢な者は王国を得られない。末子といえども、長老に仕えることにより王国を得られる。（一三）

同様に、私の父の祖父であるプラティーパ王は、一切の法を知り、三界において有名であった。（一四）その王中の獅子が、法に従って王国を治めていた時、神のような、名声を有する三人の息子が生まれた。（一五）デーヴァーピが長男、バーフリーカが次男、私の祖父で

ある志操堅固なシャンタヌが三男であった。わが子よ。（一六）デーヴァーピは威光に満ち、最高の王族で、徳性あり、真実を語り、父に仕えることに専念し、市民や地方民に尊敬され、善き人々に敬われ、すべての老若の心を魅了していたが、しかし彼は重い皮膚病であった。（一七―一八）彼は知者で、約束を堅く守り、一切の生類を益することに専念し、父とバラモンたちの命令に従っていた。（一九）彼はバーフリーカと偉大なシャンタヌとの親密な兄であった。結束した彼ら偉大な者たちの兄弟愛は最高であった。（二〇）

さて時が過ぎて、最高の王は老い、教典に従って即位灌頂式を行なうための準備をした。そしてその君主はすべての吉祥の式を行なわせた。（二一）ところが、すべての長老のバラモンたちや、市民や地方民たちは、デーヴァーピを灌頂することを制止したのである。（二二）王は灌頂が制止されたことを聞いて、涙で喉をつまらせて、息子のことを嘆いた。（二三）このように、デーヴァーピは寛大で、法を知り、約束を守り、臣民に愛されたが、皮膚病の故に難ありとされたのである。（二四）神々は身障者が王になることを喜ばないということで、バラモンの雄牛たちは最高の王となるべき彼を拒絶したのである。（二五）それから、プラティーパ王は、息子のことで悲しみ、心乱れて死んだ。彼が死んだのを見て、デーヴァーピは森に隠棲した。（二六）バーフリーカは王権を捨てて、母方の叔父のもとに住んだ。彼は父と兄弟たちを捨て、〔母方の〕繁栄する都市を獲得したのであった。（二七）父が死んだ時、バーフリーカに認められて、世に名高いシャンタヌ王が王国を統治した。王よ。（二八）これとまったく同様に、私も長男であったが、賢明なパーンドゥと〔比較され〕、熟慮の

末、身障者（盲人）ということで王位につけなかったのである。パーラタよ。(二九) パーンドゥ王は弟であったが王位についた。彼が死んだら、この王国は彼の息子たちのものになる。敵を制する者よ。私が王位につけなかったのに、どうしてお前は王位を望むのか。(三〇)

偉大なユディシティラは王の息子である。この王国は正しくは彼が継承する。彼はクル族の人々の主君であり、威厳に満ちた統治者である。(三一) 彼は約束を堅く守り、常に不放逸である。教典に従い、縁者たちに善良である。臣民に愛され、友たちに情け深い。感官を制し、善き人々の保護者である。(三二) 寛恕と忍耐、自制、廉直、誓いに忠実であること、博識、不放逸、生類に情け深いこと、教令。ユディシティラには以上のすべての王の美質がそなわっている。(三三) それに反しお前は王の息子でなく、行ないが気高くなく、貪欲で、縁者たちに悪い考えを持つ。この王国は正しくは他者が継承する。修養のないお前がどうしてそれを奪うことができるか。(三四) お前は迷妄を離れ、王国の半分と、馬や象や従者たちを返還せよ。王よ、そうすればお前と弟たちは生き残ることができるだろう。(三五)』

（第百四十七章）

ヴァースデーヴァは言った。

「ビーシュマ、ドローナ、ヴィドゥラ、ガーンダーリー、ドリタラーシトラがこのように告げても、その愚か者は目覚めなかった。(一) 彼は怒りで眼を赤くし、彼らを無視して憤然と

立ち上がった。彼のために命を捨てる王たちは、彼につき従った。(二) そしてその邪悪な男は、王たちに何度も命令した。

『クルクシェートラに進軍せよ。今日はプシャ星宿（が上昇点にある）。(三)』

それから王たちは軍隊をともなって進軍した。彼らはカーラ（時間、破壊神）にかりたてられて勇み立ち、ビーシュマを軍の総司令官にした。(四) 諸王の十一の軍団が集結し、それらの頭に、棕櫚の旗標を掲げるビーシュマが輝いていた。

王よ、それ故ここで適切なことを行ないなさい。(五) 王よ、以上のように、ビーシュマ、ドローナ、ヴィドゥラ、ガーンダーリー、ドリタラーシトラが、私の見ているところで告げたこと、クルの集会で起こったことをあなたに語った。(六) 王よ、私はまずよい兄弟関係を望んで、懐柔策を用いた。クル族の家系が分裂しないように、また臣民が栄えるように。(七) 懐柔策が受け入れられなかった時、私は次に離間策を用いた。そして神的人的なあなたの行為を列挙した。(八) また、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）が懐柔策に基づく私の言葉を考慮しなかった時、すべての王を集めて、離間させようとした。(九) そして、恐ろしくて凄まじい奇蹟、超人的な行為を示した。バラタ族の王よ。(一〇) 私は何度も諸王を威し、スヨーダナを草のように（取るに足らぬものに）して、カルナとシャクニを恐れさせた。(一一) 私は何度もドリタラーシトラの息子たちの卑小さを非難した。すべての王たちを、言葉と密議により離間させようと度々試みて。(一二) 私はまた、クル族の分裂を防ぐため、また仕事の必要上、懐柔策に結びついた贈与に言及した。(一三)

「あの若いパーンダヴァたちは、誇りを捨てて、すべてドリタラーシトラ、ビーシュマ、ヴィドゥラに服従するであろう。(二四) 彼らがあなたに王国を引き渡すように、彼らが支配者でないようにさせよう。王(ドリタラーシトラ)とビーシュマとヴィドゥラが言うようにしよう。(二五) すべての王国があなたのものになる。五つの村を与えなさい。必ずやあなたの父が彼らを養うであろう。最高の王よ。(二六)」

このように告げられても、その邪悪な男は考えを変えなかった。あの悪党どもには、第四の手段である武力行使しかないと思う。(二七) 王たちは滅びるために、クルクシェートラに向けて進軍している。以上、クルの集会において起こったことをすべてあなたに語った。(二八) パーンダヴァよ、彼らは戦わずして王国を引き渡すことはない。彼らはすべて滅亡の原因であり、彼らの死は近づいている。(二九)」(第百四十八章)

(56) 進軍(第百四十九章—第百五十二章)

ドリシタデュムナ、総司令官になる

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ダルマ王ユディシティラは、クリシュナの言葉を聞くと、クリシュナの見ている前で、弟たちに告げた。(一)

「お前たちはクルの集会場において起こったことを聞いたであろう。クリシュナの言葉をすべて熟考したであろう。(二)それ故、最高の人々よ、私の軍隊の配置を整えよ。七つの軍団(アクシャウヒニー)が勝利のために集結している。(三)それらには高名な七人の指導者がいる。彼らの名を聞きなさい。ドルパダ、ヴィラータ、ドリシタデュムナ、シカンディン、(四)サーティヤキ、チェーキターナ、そして強力なビーマセーナである。これらはすべて身命を擲(なげう)つ勇猛な軍の指導者である。(五)すべてヴェーダを知る勇士で、誓戒を忠実に実行し、廉恥心あり、政略を知り、戦いに通じ、矢などの武器に巧みで、すべての武器により戦う。(六)いかなる指導者が七つの軍団の配置を知るか。誰が戦場において、矢という光線の火にも似たビーシュマに対抗できるか。(七)クルの王子サハデーヴァよ、人中の虎よ、まずお前が言いなさい。誰が我々の軍の総司令官になれるか。(八)」

サハデーヴァは答えた。

「マツヤ国王ヴィラータは、我々の親戚であり、労苦を共にし、気力ある王である。我々は

法(ダルマ)を知る彼に依存して自己の取り分を要求している。彼は強力で、武器に通じ、戦いに酔い痴れる。彼なら、戦いにおいて、ビーシュマやあの勇士たちに対抗できるであろう。(九―一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

サハデーヴァがこのように言うと、すかさず雄弁なナクラが次のように述べた。(一一)

「ドルパダは年齢の点でも学問の点でも冷静さの点でも家柄の点でも生まれの点でも(長老である)。彼は廉直で、家柄よく、栄光あり、すべての教典に通じている。(一二)バラドゥヴァージャから兵器について知り、無敵で、約束を堅く守る。彼は常に強力なドローナやビーシュマに対抗して来た。(一三)諸王の群の先頭における、讃えられるべき軍司令官である。彼は息子や孫に囲まれ、百の枝を持つ樹木のようである。(一四)その戦場において輝く勇士である王は、怒ってドローナを滅ぼすために、妻とともに恐ろしい苦行を行じた。(一五)その王中の雄牛である彼は、いつも我々に対して父のようにふるまって来た。その、我々の義父であるドルパダが、軍隊を先導すべきである。(一六)彼はドローナとビーシュマが来ても対抗できると私は思う。というのは、その王は神的な武器を知り、アンギラス(バラドゥヴァージャ)の友であるから。(一七)」

マードリーの二人の息子(ナクラとサハデーヴァ)が彼らの意見を述べた時、インドラの息子であるクルの王子、インドラに等しいアルジュナが言った。(一八)

「苦行の力により、また聖仙を満足させることにより、火の色をした強力な神々しい男児が生じた。(一九) 彼は弓と鎧と刀を持ち、神的な駿馬たちをつないだ戦車に乗り、火炉から立ち上がった。(二〇) その強力な勇士は戦車の音により大雲のような音をたて、獅子のように堅固で、獅子のように勇壮に歩む。(二一) 獅子のような胸をし、大きな腕を持ち、大力で、獅子のように吼え、獅子のような肩をした、輝きに満ちた勇士である。(二二) 美しい眉、歯、顎、腕、顔を持ち、逞しく、美しい鎖骨をし、美しくて大きい眼をして、美しい足を持ち、姿勢が正しい。(二三) 一切の武器に断たれることなく、発情した(強い)象のようである。真実を語り、感官を制する彼は、ドローナを滅ぼすために誕生した。(二四) そのドリシタデュムナが、ビーシュマの矢に対抗できると私は思う。電雷のような、燃える口をした蛇のような矢に。(二五) その矢は速さにおいてヤマ(閻魔)の使者に等しく、火のように襲来する。かつて〔パラシュ〕ラーマは戦場でそれらの矢に〔やっとのことで〕耐えた。それらは金剛杵(ヴァジュラ)の激突のように恐ろしい。(二六) ドリシタデュムナを除いて、偉大な誓戒を守るビーシュマに対抗できる男は他にいないというのが私の考えだ。王よ。(二七) 彼は手練の早業で、めざましく戦い、断ち切られない鎧をつけ、栄光あり、象の群の長のようであって、わが軍の総司令官にふさわしいと私は考える。(二八)」

ビーマは言った。

「ドルパダの息子シカンディンはビーシュマを殺すために生まれたと、シッダ(半神族)や聖仙たちが集まって告げている。王中の王よ。(二九) 彼が戦場の中央で神的な武器を駆使する時、

人々はその姿を見て、偉大なラーマの姿のようであると思う。(三〇) 王よ、シカンディンが戦場で武装して戦車に立つ時、戦いにおいて彼を貫くことができる者を私は見出さない。(三一) 王よ、シカンディンを除いて、偉大な誓戒を守る勇士ビーシュマと一騎打ちできる者は他にいない。彼がわが軍の総司令官にふさわしいと私は考える。(三二)」

ユディシティラは言った。

「諸君、全世界の長所短所、強さ弱さについて、徳性あるクリシュナは過去と未来にわたってすべて知っている。(三三) クリシュナが指名する者をわが軍の総司令官にしよう。たといその者が武術に巧みであるにせよないにせよ、長老であろうと若年であろうと……。(三四) 諸君、その者が我々の勝敗の根である。我々の生命、王国、存亡、幸不幸は彼にかかっている。(三五) 彼は配置者(ダートリ)であり制定者(ヴィダートリ)である。成就は彼において確立する。クリシュナが指名する者がわが軍の総司令官にふさわしい。最も雄弁なクリシュナが指名すべきである。夜が過ぎてしまう。(三六) それから、クリシュナの意向に従って彼を総司令官にして、夜の残りが過ぎたら、我々の武器をお香で浄め、〔戦勝祈願の〕儀式を行なって、戦場へ向けて進軍しよう。(三七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。──

賢明なダルマ王(ユディシティラ)の言葉を聞くと、蓮の眼をした〔クリシュナ〕はアルジュナを見て言った。(三八)

「大王よ、あなた方が挙げた軍司令官候補たちは勇猛な戦士で、すべてあなたの敵どもを粉砕することができる。(三九) 彼らは激戦において、インドラにすら恐怖を生じさせるだろう。いわんや、邪悪で貪欲なドリタラーシトラの息子たちなど問題ではない。(四〇) 敵を制する勇士よ。私もあなたによかれと思い、講和のために大きな努力をした。バーラタよ。法(ダルマ)への借りは返した。非難しようとする者たちも、我々を非難することはできない。(四一) 賢明でないドゥルヨーダナは、愚かにも自分は目的を達したと思うであろう。実際には苦しんでいるのに、自分は強力だと考えている。(四二) よく軍隊の準備をせよ。彼らは殺されて初めて降参すると思う。

ドリタラーシトラの息子たちは、アルジュナを見たら立っていられない。(四三) 怒ったビーマセーナ、ヤマ(閻魔)のような双子、短気なドリシタデュムナとユユダーナ(サーティヤキ)、アビマニユ、ドラウパディーの息子たち、ヴィラータとドルパダ、その他の軍団の指導者たち、勇猛無比な王たちを見たら立っていられない。(四四―四五) 我々の近寄りがたい無敵の精強軍は、戦いにおいて、疑いもなくドリタラーシトラの軍を殺すであろう。(四六)」

クリシュナがこのように告げた時、王たちは大喜びした。喜んでいる彼らの音声は非常に大きかった。(四七) 兵たちは急いで走りまわり、「戦闘準備」と叫んだ。馬や象は叫び、車輪の音がいたるところでした。法螺と太鼓が、いたるところで大きな音をたてていた。(四八) パーンダヴァたちがすべての軍を率いて進軍する時、その軍隊は満水のガンガーのように抗しがたいものに見えた。(四九)

前衛には、ビーマセーナと鎧を着たマードリーの双子、スバドラーの息子(アビマニユ)、ドラウパディーの息子たち、ドリシタデュムナが進み、プラバドラカ軍、パーンチャーラ軍がビーマセーナの後を進軍した。(五〇) それから、満月の日における海のような音が生じた。喜び勇んで進軍する人々の喧噪が天に届くほどであった。(五一) 戦士たちは喜び勇み、鎧を着、敵軍をうち破る勢いであった。彼らの中央を、クンティーの息子ユディシティラ王が進んだ。(五二) 車輛、商品、すべての車をひく動物、宝庫、器械、武器、内科医、外科医、(五三) 弱体な軍、疲弊し弱った軍隊、従者たち。以上を統合して王は進軍した。(五四)

真実を語るパーンチャーラの王女ドラウパディーは、男女の僕(しもべ)に囲まれて、女たちとともにウパプラヴィヤに残った。(五五) パーンダヴァたちは、動不動の軍隊により本拠地の守りを固めてから、大軍を率いて進軍した。(五六) 王よ、彼らは宝玉に飾られた戦車に乗って、バラモンたちに囲まれて讃えられて、牛や黄金を与えながら行進した。(五七)

ケーカヤ軍、ドリシタケートゥ、カーシ国王の至高の息子、シュレーニマット、ヴァスダーナ、無敵のシカンディン。(五八) 彼らはすべて喜び満足し、鎧を着て、刀剣を持ち、飾りたてられて、ユディシティラ王を囲んでつき従った。(五九) そして殿(しんがり)には、ヴィラータ、ヤジュニャセーナ、ソーマキ、スダルマン、クンティボージャ、ドリシタデュムナの息子がいた。(六〇) 六万の戦車兵、その五倍の騎兵、十倍の歩兵、六万の象兵がいた。(六一) アナードリシティ、チェーキターナ、チェーディ国王、サーティヤキは、すべてクリシュナとアルジュナを囲んで行進した。(六二) パーンダヴァの戦士たちは、陣形を整えてクルクシェートラ

に着いた。彼らは吼える雄牛のようであった。(六三) 敵を制する彼らはクルクシェートラに入って、法螺貝を吹き鳴らした。クリシュナとアルジュナも法螺貝を吹いた。(六四) 雷鳴のように轟くパーンチャジャニヤ（アルジュナの法螺）の音を聞いて、すべての兵士たちはすっかり喜んだ。(六五) つわものたちの雄叫びは、法螺や太鼓の音と混じり、天地と海に鳴り響いた。(六六)

それからユディシティラ王は、平坦で心地よく、草と薪に富む土地に、軍隊を野営させた。(六七) ただし、火葬場、神殿、偉大な聖仙たちの隠棲所、聖地と聖域を除いて。(六八) ユディシティラ王は、心地よく、塩分を含まない、吉祥で神聖な土地に野営させた。(六九) それから彼は、馬や象が休息すると、快活に再び立ち上がり、幾百幾千の王たちに囲まれて進軍した。(七〇) クリシュナとアルジュナはいたるところ見まわったので、ドゥルヨーダナの幾百の〔斥候の〕部隊は逃亡した。(七一) ドリシタデュムナと栄光ある勇士サーティヤキ（ユユダーナ）は野営場を測量した。(七二) やがてクルクシェートラを流れる聖河ヒランヴァティーに着いた。その川は美しい岸を持ち、清らかな水が流れ、砂利と泥がなかった。(七三) そこにクリシュナは濠を掘らせた。そして指示を与えて、そこに防御のための軍隊を置いた。(七四) クリシュナは、偉大なパーンダヴァたちの野営場と同じ方法で他の王たちの野営場を作らせた。(七五) そこには多くの水と木材があり、難攻であり、幾百幾千の飲食物をそなえていた。(七六) そこにおける王たちの高価な野営場は、一つ一つ、地上に降下した天宮のようであった。(七七)

そこには幾百の有能な建築師たちがいて、報酬を払われていた。すべての必需品をそなえた、非常に有能な医師たちがいた。(七八) 弓の弦、弓、防具、刀剣、蜜、乳酪（サルピス）、それと樹脂と砂を山積みにしたもの。(七九) 多量の水、よい草、もみがら、炭。ユディシティラ王は以上のものを宿舎ごとに配った。(八〇) また大きな器械、鉄矢（ナーラーチャ）、投槍（トーマラ）、槍（リシティ）、斧、弓、鎧など（以下、テクスト疑問）を配った。(八一) そこには、有棘の装備をし、鉄の防具を身にまとい、山々のようで、百千の兵と戦うことができる象たちが見られた。(八二)

パーンダヴァたちがそこで野営したのを知って、盟友たちは軍隊や象馬とともに各地から集まって来た。(八三) 王たちは梵行（欲禁）を守り、ソーマ酒を飲み、〔バラモンに〕多くの謝礼を払って〔儀式を行ない〕、パーンドゥの息子たちの勝利のために集結した。(八四)

（第百四十九章）

ドゥルヨーダナ側の配陣

ジャナメージャヤはたずねた。

「ユディシティラは戦おうとして、軍隊とともに進軍し、クリシュナに守られてクルクシェートラに野営した。(一) 彼はヴィラータとドルパダと、その二人の息子たちをともない、ケーカヤとヴリシュニの人々、その他幾百という王たちに囲まれていた。(二) 彼はさながらア

ーディティヤ神群に守られた大インドラのように、勇士たちに守護されていた。ドゥルヨーダナ王は彼について聞いて、どのように対処したか。(三) 苦行者よ、私はそのことを詳しく聞きたいと思う。クルの末開地(ジャーンガラ)における激しい争乱において何が起こったか。(四) というのは、パーンダヴァ、クリシュナ、ヴィラータ、ドルパダ、ドリシタデュムナ、パーンチャーラ国王、勇士シカンディン、神々も太刀打ちできない勇猛なユユダーナ(サーテイヤキ)は、合戦において、神々の軍をも戦慄させることであろう。(五—六) 苦行者よ、私はこのことを詳しく聞きたいのだ。クル軍とパーンダヴァ軍との種々のふるまいを。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クリシュナが引き返した時、ドゥルヨーダナ王はカルナとドゥフシャーサナとシャクニに言った。(八)

「クリシュナは任務を果たさずにパーンダヴァたちのもとに帰った。彼は必ずや怒りにかられて彼らに報告するだろう。(九) ビーマセーナとアルジュナはクリシュナの意見に従う。(一〇) そしてユディシティラはビーマとアルジュナの意向に従う。かつて私は、ユディシティラとすべての弟たちを迫害した。(一一) またヴィラータとドルパダとは、私と敵対関係にある。これらの二人の軍隊の長はクリシュナの意向に従う。(一二) 身の毛がよだつ激しい戦争になるだろう。それ故、孜々として一切の戦いの準備をせよ。(一三) 王たちはクルクシェートラに野営場を作れ。十分なスペースをそなえ、敵たちに占領されがたい野営場を。

(一四) 近くに水と木材があり、食糧を補給する道が断ち切られることなく、多くの宝に満ち、様々な武器に満ち、旗や幡のひるがえる野営場を幾百幾千と。(一五) 都から外の、野営場まで行く道を平坦にすべきである。今すぐ、明日に進軍するということを布告すべきである。(一六)」

偉大な彼らは喜び勇み、「その通りにします」と約束して、その翌日、王たちの宿舎のために(異本による)命令を実行した。(一七) すべての王たちはその王の命令を聞くと、高価な座席から猛々しく立ち上がった。(一八) 彼らは徐(おもむ)ろに、金の腕輪で輝き、栴檀や沈香で飾られた鉄棒のような腕をさすった。(一九) 彼らは蓮のような手でターバンをつけ、下衣、上衣、装飾品をすべてつけた。(二〇) 戦車に乗る最上の戦士たちは戦車を、馬に巧みな者たちは馬を、象学に通じた人々は象を準備した。(二一) それから彼らは、多くのきらびやかな黄金の鎧や、種々の武器をすっかり準備した。(二二) 多くの歩兵たちは、黄金のきらびやかな種々の武器を身に帯びた。(二三)

ドゥルヨーダナの首都は、喜び勇んだ人にあふれ、祭りのような賑やかさであった。(二四) 王よ、それは月が昇る時の海のように見えた。すなわち、群衆という水が渦巻き、戦車と象と馬という魚を有し、法螺貝と太鼓が海鳴りのようで、大量の宝庫(軍資金)という宝物(真珠、珊瑚など)を持ち、きらびやかな飾りをつけた鎧の波を持ち、汚れなき武器という泡を持つ。宮殿の列という山で囲まれ、道路と市場という湖を有する。戦士という月が昇り、クルの王という海原を持つ。(二五—二七)

(第百五十章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ユディシティラはクリシュナの言葉を思い出して、再びクリシュナにたずねた。

「その愚か者はどのように言ったか。（一）クリシュナよ、今このような時が来て、我々に適切なことは何か。我々はどのようにふるまったら自分の法を踏み外さないですむか。（二）クリシュナよ、あなたはドゥルヨーダナとカルナとシャクニの考えを知っている。そして私と弟たちの考えも知っている。（三）あなたはヴィドゥラとビーシュマとの両者の言葉を聞いた。またクンティーの賢明な言葉もすべて聞いた。大知者よ。（四）勇士よ、それらすべてはさておいて、何度もよく考えて、我々に適切なことを躊躇することなく言って下さい。（五）」

ダルマ王（ユディシティラ）の法と実利にかなった言葉を聞くと、クリシュナは雷雲や太鼓のような声で告げた。（六）

「私は法と実利にかなう有益な言葉を述べた。しかしそれは、邪悪なドゥルヨーダナには効果がなかった。（七）その邪悪な男は、ビーシュマやヴィドゥラや私の言うことを何も聞かず、すべてを無視した。（八）彼は法を望まない。彼は名誉を望まない。その邪悪な男はカルナに依存して、すべて勝ち得たも同然と考えている。（九）スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は私を捕える命令すら出した。しかしその教令に背く邪悪な男は望みを果たせなかった。（一〇）ビーシュマもドローナも、そこで適切な言葉を述べなかった。ヴィドゥラを除いて、すべての者たちは結

局、彼に従った。不滅の人よ。（一一）シャクニとカルナとドゥフシャーサナは、愚かにも、その短気な愚か者に向かって、あなたについて不適切な助言をしている。（一二）クル族の連中が言っていたことを私が報告して何になろう。要するにあの邪悪な男はあなたに対して不正にふるまっている。（一三）あなたの軍隊のすべての王たちにおける悪は、彼一人における悪ほどひどくない。（一四）我々といえども、あまりにも譲歩してクル族と講和するつもりは決してない。この上は戦いしかない。（一五）」

クリシュナの言葉を聞いて、すべての王たちは何も言わないで王の顔を見た。（一六）一方ユディシティラは、諸王の意向を察して、ビーマとアルジュナや双子とともに、戦闘準備を命じた。（一七）戦闘準備が命じられた時、兵士たちは喜び、パーンダヴァの軍隊は歓声をあげた。（一八）ダルマ王ユディシティラは、殺されるべきでない者たちが死ぬことを予見して、ため息をつき、ビーマセーナとアルジュナに告げた。（一九）

「それを避けるために私は努力して森に住み、苦難を経験したが、その最高の災禍が我々に近づいて来る。（二〇）それを避けるために我々は努力をしたが、それは我々の努力によって滅することはなかった。それを求めて努力したわけではないのに、大きな災禍が我々に近づいた。（二一）というのは、どうして殺すべきでない人々と戦わなければならないのか。どうして、師や長老たちを殺して我々に勝利があるというのか。（二二）」

ダルマ王の言葉を聞くと、敵を苦しめるアルジュナは、クリシュナが先に述べた言葉を告げた。（二三）

「デーヴァキーの息子（クリシュナ）は、クンティーとヴィドゥラの言葉を述べた。そして王よ、あなたはそれをすっかり理解した。（二四）そしてその二人が法（ダルマ）にもとることを言うことはないと私は確信する。また、ユディシティラよ、戦わないで退却することは適切でない。（二五）」

アルジュナの言葉を聞くと、クリシュナは笑って、「その通りである」とユディシティラに告げた。（二六）

そこでパーンドゥの息子たちは戦う覚悟を決めて、その夜を快適に過ごした。（二七）

（第百五十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その夜が明けた時、ドゥルヨーダナ王はその十一の軍団を配陣した。（一）王は人員、象、戦車、馬を、精強か中位か弱体かに応じて、すべての軍隊に割り当てた。（二）〔予備の〕車軸、〔戦車用の〕矢筒、戦車の防護用のおおい、投槍、〔騎兵・象兵用の〕矢筒、槍、〔歩兵用の〕矢筒、攻城の岩石（以上、一応の訳語を当てたが疑問）、（三）旗と幡、弓と投槍、多彩な綱、輪縄、敷布、（四）（五―七略）その他、色々なものを持って、美しい多彩な軍隊は、燃え上がる火のようであった。諸々の武器に通達し、良家の出で、馬の血統に通じた、鎧を着た勇士たちが、御者を務めていた。すべての戦車には除災の薬草が結びつけられ、鈴の列がつけられ、旗と幡が立っ

ていた。それらは四頭立てで、すべて武器を搭載していた。すべて勇み立つ馬をつなぎ、すべて百の弓を積んでいた。（八―一〇）一人の御者は轅（ながえ）につないだ二頭の馬を御し、他の二人は両側の馬を御する。それに最上の二名の戦車兵と馬に通じた御者がいる。（一一）すべて金色に輝く千台の戦車があり、それらは敵に難攻な、防備を固めた都城のようであった。（一二）

戦車と同様に、象たちも鈴をつけ、美しく飾られ、宝を有する山のようであった。一頭に七名の人員がつく。（一三）そのうち、二人は鉤棒（かぎ）を持ち、二人は弓の名手、二人は刀剣の名手で、一人は槍と旗を持つ。（一四）クル族の軍は幾千の鎧や武器を積んだ猛々しい象で満ちあふれていた。（一五）そして幾万の馬たちは、色とりどりの鎧をまとい、旗を持ち、美しく飾られた騎手たちに乗られていた。（一六）それらの馬たちは、よく制御され、よく満足し、黄金の飾りをつけ、無数にいて、騎手たちの命に従っていた。（一七）そして歩兵たちは、様々な姿と装いをし、様々な鎧と武器を身につけ、黄金の環で飾られていた。（一八）

一台の戦車には十頭の象がつき、一頭の象には十頭の馬がつき、一頭の馬には十人の歩兵がつきその足もとをいたるところ守った。（一九）補欠要員としては、一台の戦車の予備が五百頭の象、一頭の象の予備が百頭の馬、一頭の馬の予備が七名の人である。（二〇）セーナー（軍隊の単位）は五百頭の象、同数の戦車を有する。十セーナーがプリタナーである。十プリタナーがヴァーヒニーである。（二一）しかし、〔一般的には〕ヴァーヒニー、プリタナー、セーナー、ドゥヴァージニー、サーディニー、チャムー、アクシャウヒニー、ヴァールーティニーは〔「軍隊」という意味で〕同義語として用いられる。

賢明なクル族の王は以上のように配陣した。(二二) 合計で十八軍団（アクシャウヒニー）が集結した。パーンダヴァの軍は七軍団で、クル族の軍は十一軍団である。(二三)

パッティは二百五十の人員である。三パッティがセーナームカまたはグルマと呼ばれる。(二四) 十グルマがガナである。ドゥルヨーダナの軍隊（セーナー）には、戦いを好む戦士である一万のガナが存在した。(二五) 強力なドゥルヨーダナ王はそこにおける知性ある勇士たちを調査して、彼らを軍司令官（セーナーパティ）に任じた。(二六) そして各軍団の指導者として、最高の人物である王たちを集めて、作法に基づいて任命した。(二七) すなわち、クリパ、ドローナ、シャリヤ、偉大な戦士であるシンドゥ国王、カーンボージャのスダクシナ、クリタヴァルマン、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）、カルナ、ブーリシュラヴァス、シャクニ、偉大な戦士バーフリーカ。(二八―二九) 毎日のように王は、あらゆる時に、繰り返し、直々に彼らに対し種々の指示を与えた。(三〇) このように統制されて、すべての戦士と彼らの従者たちは、王の機嫌を取ることを望んだ。(三一)

(第百五十二章)

(57) ビーシュマの任命（第百五十三章―第百五十六章）

ビーシュマ、総司令官になる

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それからドゥルヨーダナは合掌して、すべての王たちとともにビーシュマに告げた。(一)

「軍司令官なしでは、非常に大きな軍隊といえども、戦闘において蟻の巣のように崩壊してしまう。(二)というのは、二人の人の意見は決して同じではない。また指導者たちの勇武は相互に競い合う。(三)大知者よ、かつてすべてのバラモンがクシャ草の旗を掲げて、無量の威厳をそなえたハイハヤ一族を攻撃したという。(四)祖父よ、その時、実業者(ヴァイシャ)や従僕(シュードラ)たちがバラモンたちについて行った。片や三つの種姓(ヴァルナ)、片や王族(クシャトリヤ)の雄牛ということだ。(五)三種姓は戦いにおいて、繰り返し攻撃したが、いつも王族が一方的にその大軍をうち破った。(六)そこで、最高のバラモンたちは王族たちにたずねた。祖父よ、法(ダルマ)を知る王族たちは、ありのままに彼らに答えた。(七)

『我々は戦いにおいて、非常に賢明な一人の意見を聞く。しかるにあなた方はすべてそれぞれ自分の考えに従って行動する。(八)』

そこでバラモンたちは、政策に巧みで勇猛な一人のバラモンを軍司令官にした。その結果、彼らは王族たちに勝利した。(九)このように、巧妙で、有益なことに専念し、罪過のない勇士を軍司令官にする者たちは、戦いにおいて敵に勝利する。(一〇)

あなたは、(政略にかけて)ウシャナス(悪魔たちの師)に匹敵する。そして常に私に有益なことを望んでいる。不死身であり法(ダルマ)に基づいている。我々の総司令官になって下さい。(一一)あなたは光線を持つもののうちの太陽、薬草のうちの月、夜叉たちのうちのクベーラ、マルト神群のうちのインドラ、山々のうちのメール、鳥類のうちのスパルナ(ガルダ)、鬼霊(ブータ)のうちのクマーラ(スカンダ)、ヴァス神群のうちの火神のような方だ。(一二―一三)神々がインドラに守られているように、我々があなたに守られる時、必ずや我々は神々によってすらうち破られないであろう。(一四)あなたは我々の先頭を行進して下さい。スカンダが神々の先頭を進むように。我々はあなたについて行きます。牛たちが最上の雄牛について行くように。(一五)」

ビーシュマは言った。

「強力なバーラタよ、お前の言う通りだ。しかし私にとってパーンダヴァたちはお前たちと同様である。(一六)王よ、私は彼らの幸福をも語るべきである。だが私は、約定のようにお前のために戦わなければならぬ。(一七)私は地上に、自分と等しい戦士を見出さない。ただし、あの人中の虎であるクンティーの息子アルジュナは例外である。(一八)というのは、あの勇士は神的な武器をすべて知っている。しかしアルジュナは決して、戦闘において公然とは私と戦わないであろう。(一九)この私は、武力により、神や阿修羅や羅刹をともなうこの世界から即座に人間を駆逐するであろう。(二〇)しかし王よ、私はパーンドゥの息子たちを滅ぼすことはできない。それ故、私は計画的に毎日一万の戦士を殺すであろう。(二一)このようにして、もし彼らが戦いにおいて、先に私を殺すことがなければ、私は彼らを滅亡させ

るであろう。クルの王よ。(二二)

王よ、私が快くお前の軍の総司令官になるには、もう一つ条件がある。それを聞いてもらいたい。(二三) カルナが先に戦うべきか、私が先に戦うべきかということだ。王よ。カルナは戦いにおいて、常に私と激しく張り合って来たから。(二四)」

カルナは言った。

「王よ、私はビーシュマが生きている限り決して戦わない。ビーシュマが殺された時、私はアルジュナと戦うであろう。(二五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからドゥルヨーダナは作法に従ってビーシュマを軍の総司令官に任命した。〔その即位式にあたり〕多くの謝礼を払った。ビーシュマは灌頂（かんじょう）を受けて輝いた。(二六) それから男たちは、王の命令により、幾百という太鼓、小鼓、法螺を一心不乱に演奏した。(二七) 様々な獅子吼、象馬の嘶き声が空中に湧き上がり、血に汚れた雨が降った。(二八) 突風、地震、象の叫び声が、すべての戦士たちの意気を消沈させた。(二九) 空から姿の見えないものの声が聞こえ、流星が降った。ジャッカルたちは危険を予告して、猛烈な声で激しく吠えた。(三〇) 王がビーシュマを総司令官に任命した時、これらの幾百という恐ろしい前兆があった。(三一) ドゥルヨーダナは、敵の軍を苦しめるビーシュマを総司令官にしてから、多くの金と牛を与えて、最高のバラモンたちに讃歌を唱えさせて、勝利の祈りにより力づけられ、軍隊に囲まれて進軍した。彼はビーシュマを先頭にして、弟たちとともに、大軍を率いてクルクシェートラに行った。(三二―三三) クルの王はカルナとともにクルクシェートラを視察して、平坦な土地に野営場を造らせた。(三四) 心地よく、塩分を含まない土地、多くの草と薪のある土地に造られた野営場は、まるでハースティナプラのように輝いていた。(三五)

(第百五十三章)

バララーマとルクミン、戦争から手を引く

ジャナメージャヤはたずねた。

「ガンガー川の偉大な息子であるビーシュマは、武器をとる者たちの最上者であり、バラタ族の王たちの祖父であり、すべての王たちの旗（代表者）である。(一) 彼は知性にかけてブリハスパティ（神々の師）に等しく、忍耐にかけては大地に等しい。深みにかけては海のようで、ヒマーラヤのように不動である。(二) 高貴さにかけては造物主（プラジャーパティ）のようで、威光にかけては太陽のようである。矢の雨により大インドラのように敵を滅ぼす。(三) ユディシティラは、そのビーシュマが、恐ろしく凄まじい身の毛がよだつ戦闘という祭祀において、長い夜々、潔斎して準備した（総司令官に任命された）ことを聞いた。(四) その時、その一切の法（ダルマ）に通じた勇士は何と言ったか。また、ビーシュマセーナやアルジュナは何と言ったか。また、クリシュナはどのように対応したか。(五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

窮迫時(アーパッド)の法(ダルマ)の内容に通じた大知者ユディシティラは、すべての弟とクリシュナを集めた。そして最も雄弁である彼は、まずねぎらいの言葉をかけてから次のように言った。(六)

「軍隊を巡回させなさい。鎧をつけ、準備を整えていなさい。我々はまず最初に祖父(ビーシュマ)と戦うことになろう。それ故、私の七つの軍団における指導者を見つけなさい。(七)」

ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は言った。

「この時が近づいた時、あなたが言うにふさわしいような、意義ある言葉があなたに述べられた。バラタの雄牛よ。(八) 強力な者よ、私も賛成だ。すぐにそうしなさい。あなたの軍隊の七名の指導者が任命さるべきである。(九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、ユディシティラは、ドルパダ、ヴィラータ、サーティヤキ、ドリシタデュムナ、ドリシタケートゥ、シカンディン、サハデーヴァを召集した。(一〇) そして彼は、これら七名の戦いを好む偉大な勇士たちを、作法に従って、軍隊の指導者に任命した。(一一) そしてドリシタデュムナを全軍の総司令官に任命した。彼はドローナを殺すために、燃える火から生じたのであるから。(一二) そして、アルジュナをこれらすべての偉大な人々全体の大元帥(軍司令官たちの長)に任命した。(一三) 大知者である聖クリシュナは、そのアルジュナの指導者で、そしてその馬たちの御者になった。(一四)

災いに満ちた戦争が近くに迫ったのを見て、鋤を武器とする者(バララーマ)は、パーンダヴァの王の宿舎に入った。(一五) アクルーラなどや、ガダ、サーンバ、ウルムーカなどや、チャールデーシュナに先導されたルクミニーの息子(プラデュムナ)、アーフカの息子が彼につき従った。(一六) その勇士は、マルト神群に守られるインドラのように、強力な虎のようなヴリシュニの長たちに守られていた。(一七) 彼は濃紺の絹の衣をまとい、カイラーサの頂のようであった。獅子のような足どりで、栄光あり、酔いで赤い眼をしていた。(一八)

彼を見ると、ユディシティラと、輝きに満ちたクリシュナと、恐ろしい行為の狼腹(ビーマ)は立ち上がった。(一九) アルジュナとその他そこにいたすべての王たちは、そばに寄ってそのバララーマに敬意を表した。(二〇) パーンダヴァの王は手で彼の手に触れた。そしてクリシュナをはじめとするすべての者たちが挨拶した。(二一) 敵を制するバララーマは、長老のヴィラータとドルパダに挨拶してから、ユディシティラとともに座った。(二二)

それから、すべての王が座った時、ローヒニーの息子(バララーマ)は、クリシュナを見て言った。(二三)

「非常に恐ろしくておぞましい、人類の滅亡が起こるであろう。これは確かに運命であって、避けることはできないと私は思う。(二四) あなた方と親しい人々が、息災で身体健全でこの戦争を乗り越えるのを見たいと考える。(二五) 疑いもなくカーラ(時間、破壊神)に熟されて(煮られて)、地上の王族が集結している。肉と血にまみれた非常に大きな戦争が起こるであろう。(二六)

私はクリシュナに、密かに何度も告げた。「マドゥスーダナよ、親族たちに対して公平に行動せよと。（二七）というのは、我々にとって、ドゥルヨーダナ王はパーンダヴァたちと同じである。彼に対してもふさわしく敬意を払いなさいと。このように繰り返し述べた。（二八）しかしクリシュナは、あなたのために、私の言う通りにしなかった。そして彼はアルジュナを見て、全身全霊で専念した。（二九）パーンダヴァたちの勝利は確かであると私は確信する。クリシュナがそちらを愛しているから。バーラタよ。（三〇）そして私は、クリシュナなしでは世界を見ることができないから、私はクリシュナの意向に従う。（三一）ビーマとドゥルヨーダナ王に対して、私は等しい愛情を抱いている。二人の勇士はともに私の弟子であり、棍棒戦に通達しているから。（三二）それ故、私はサラスヴァティー川の諸々の聖地を訪れて、そこに滞在しよう。クル族が滅亡するのを見ていることができないから。（三三）」

強力なラーマはこのように言うと、パーンダヴァたちに別れを告げ、〔送って来る〕クリシュナを引き返させて、聖地巡礼に行った。（三四）

（第百五十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その時、偉大なヒラニヤローマン・ビーシュマカ王の息子で、ルクミンという名で諸方に知られる者が訪れた。ビーシュマカは、インドラ自身の友であり、非常に誉れ高いボージャ族で、アーフリティの王であり、南部地方（ダークシナーティヤ）の君主であった。（一―二）ルクミンは、ガンダマーダナ山に住むキンプルシャ（半神の一種）の獅子（雄英）の弟子で、四部門よりなるすべての弓のヴェーダ（兵法）を修得していた。（三）その勇士は、威光にかけてガーンディーヴァ弓やシャールンガ弓に等しい、神聖で不滅な大インドラの弓を得た。（四）これら神々の三種の神聖なる弓がある。すなわち、ヴァルナのガーンディーヴァ弓、大インドラのヴィジャヤ弓、ヴィシュヌのシャールンガ弓。シャールンガは神聖な威光よりなる弓と言われる。その敵の軍隊を恐れさせる弓をクリシュナが持っていた。（五―六）アルジュナはカーンダヴァ森において、火神からガーンディーヴァを得た。威光に満ちたルクミンはヴィジャヤをドルマ（キンプルシャの王の名）から得た。（七）クリシュナはムラ（阿修羅の名）の張りめぐらした縄を断ち切り、その力によってムラを殺し、大地の女神の息子ナラカ（阿修羅の名）を征服し、宝石の耳環と、一万六千の女と、種々の宝物を奪ってから、最高の弓シャールンガを得た。（八―九）

さて、ルクミンは雷雲のような音をたてるヴィジャヤ弓を得てから、世界を恐れさせるかのような勢いでパーンダヴァたちに近づいた。（一〇）この自分の腕力に驕った勇士は、かつて賢明なクリシュナが〔妹の〕ルクミニーを略奪したことを決して許さなかった。（一一）彼はクリシュナを殺さないうちは自分は帰らないという誓いをたてて、それ以来、一切の戦士たちの最上者であるクリシュナを追っているのであった。（一二）彼は四部門よりなる、遠方より射撃する、多彩な武器と防具を有する、増水したガンガーのような大軍とともに、ヨーガの主であるクリシュナを攻撃したが、彼は敗北して恥じ、クンディナに帰らないのである。（一三―一四）敵の勇士を殺す彼がクリシュナに戦いで敗れたまさにその場所に、彼はボージャカタという最高の都を建設した。（一五）大軍により、多くの象と馬により、そのボージャカタ

という名の都は地上に知れわたった。(一六)

その強力なボージャ王（ルクミン）は、大軍に囲まれ、軍団とともにパーンダヴァたちに近づいた。(一七) それから、鎧を着て刀と弓矢と弓籠手（ゆごて）と戦車を持ち、太陽のような色の旗とともに、〔パーンダヴァの〕大軍に入った。(一八) 彼〔の来訪〕はパーンダヴァたちに知られた。ユディシティラ王はクリシュナによかれと願い、彼を出迎えて歓待した。(一九) 彼はパーンドゥの息子たちに敬意を表され、適切にもてなされて、彼らみなに答礼した。そして、軍隊とともに休息した彼は、勇士たちの中で、クンティーの息子アルジュナに告げた。(二〇)

「パーンダヴァよ、もし戦場においてあなたが恐れたら、私はあなたの助勢となろう。敵どもが耐えられないような助勢をしよう。(二一) この世で武勇にかけて私に匹敵する男は誰もいない。アルジュナよ、戦場で敵を殺してあなたに引き渡すであろう。(二二)」

ダルマ王とクリシュナのそばで、またその他すべての王中の王たちが聞いている中で、このように言われた英邁なアルジュナは、クリシュナとダルマ王を見て、友好的に笑って告げた。(二三―二四)

「〔クル族の〕牧場巡察において、私が非常に強力なガンダルヴァたちと戦っていた時、誰が私に助勢する友であったか。(二五) また、神々や魔類がひしめく、恐ろしいカーンダヴァの森で戦った時、誰が私の助勢であったか。(二六) また、私が魔物のニヴァータカヴァチャやカーラケーヤと戦った時、誰が私の助勢であったか。(二七) また、ヴィラータの都において、クル族との戦いにおいて、誰が大軍と戦う私の助勢であったか。(二八) (二九―三一略) どうして私のような者が『自分は恐れた』などという不名誉な言葉を言うだろうか。インドラ御自身に対しても。人中の虎よ。(三二) 勇士よ、私は恐れることはない。助勢を求めることもない。どこか他へ去るなり、ここにとどまるなり、好きなようにしなさい。(三三)」

そこで、ルクミンは、その海のような軍隊を撤退させ、ドゥルヨーダナのもとに行った。(三四) ルクミン王はそこに行って前と同様に告げた。そしてその時も、勇士だと自惚れるドゥルヨーダナによって拒絶された。(三五)

すなわち、二人の男がその戦争から手を引いた。ヴリシュニ族のラーマと、それからルクミン王とである。(三六) ラーマが聖地巡礼に行き、ビーシュマカの息子（ルクミン）も去った時、パーンダヴァたちは再び協議するために座った。(三七) ダルマ王の集会場は王たちで混雑し、星々と月で輝く空のように輝いていた（異本を参考にした）。(三八)

（第百五十五章）

人間は操られている

ジャナメージャヤはたずねた。

「バラモンの雄牛よ、クルクシェートラにおいて軍隊が布陣した時、クル族の人々はカーラ（時間、破壊神）にせきたてられて何をしたか。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

バラタの雄牛である大王よ、それらの軍隊が布陣した時、ドリタラーシトラはサンジャヤに言った。(一)

「さあ、サンジャヤよ、私に残らず語ってくれ。クルとパーンダヴァの軍隊の軍営において起こったことを。(三) 運命のみが最高であると私は思う。人間の努力は空しい。滅亡をもたらす戦争の罪悪を知っていながら、いかさま賭博をする邪悪な息子を止めることができないし、自分に有益なことをすることができない。(四—五) 吟誦者(スータ)よ、私には罪悪を予見する知性がある。しかし、ドゥルヨーダナに対しては、その知性は撤退してしまう。(六) このような次第であるから、なるようにしかならないのだ。サンジャヤよ。それに、戦いにおいて身体を捨てるということは、讃えられている王族の法(クシャトラダルマ)である。(七)」

サンジャヤは言った。

「大王よ、あなたがたずねられたことは、あなたにふさわしい。しかしこの過失をドゥルヨーダナだけのせいにするのは適切ではない。王よ、私は残らず語るからお聞きなさい。(八) 人が自分の悪い行為から不幸になる場合は、天命(ダイヴァ)やカーラを非難することはできない。(九) 大王よ、人々の間ですべての非難さるべきことを行なう人は、すべての世人に非難されることをやったのだから殺されるべきである。(一〇) 最高の人よ、パーンダヴァたちとその顧問たちは、邪悪な者たちにより賭博で欺かれたが、あなたのことを考慮して屈辱に耐えた。(一一)

馬や象や、無量の威光を有する王たちが、戦場において死ぬことを、すべて私から聞きなさい。(一二) 大王よ、気を確かに持って、大戦争において全世界の滅亡をありのままに聞いて、落胆してはなりませぬ。(一三) というのは、人間は善悪の行為の作者(きしゃ)ではない。人間は自由ではなくて、木製のしかけ(操り人形)のように操られている。(一四) ある者たちは主宰神(イーシュヴァラ)に定められている。ある者たちはたまたまそうなっている。他の者たちは前生の業によって定められている。このように三様に定められている(異本による)。(一五)」

(第百五十六章)

(58) ウルーカの使節（第百五十七章―第百六十章）

ドゥルヨーダナの言葉を伝えるウルーカ

サンジャヤは語った。——

大王よ、偉大なパーンダヴァたちがヒランヴァティー河畔に野営した時、ドゥルヨーダナは、カルナとシャクニとドゥフシャーサナとともに、ウルーカを呼び、密かに告げた。(二)

「賭博師（シャクニ）の息子ウルーカよ、パーンダヴァとソーマカの連中のところに行き、クリシュナの聞いているところで私の言葉を伝えよ。(三)

『長年の懸案であった、世界を恐れさせるパーンダヴァ家とクル族の戦争が今ここに訪れた。(四) クンティーの息子よ、サンジャヤはクル族の人々の中でお前の大言壮語を報告したが、今やそれを実行する時がやって来た。お前が約束したように、すべてを行ないなさい。(五) パーンダヴァよ、お前の遺恨、王国を奪われたこと、森に住んだこと、ドラウパディーの苦しみを思い出して、男らしくなれ。(六) 王族（クシャトリヤ）の女がそのために子供を生んだところのことが今やって来た。腕力、気力、勇武、手練の武器さばき、雄々しさを示して、戦いにおいて遺恨を晴らせ。(七) 権力から堕ち、長いこと苦しみ悩んで生活したら、いかなる人の心が裂けないだろうか。(八) 良家に生まれた勇士で、他者の財産を望む者は、もしその王国が攻撃されて奪取されたら、どうして彼の怒りは燃え上がらないか。(九) 言った言葉を、行為によって現実のものにしなさい。行為をしないで自慢しても、善き人々に臆病者と思われる。(一〇) 敵を支配下に置くこと。そして王国を取りもどすこと。戦う者には二つの目的がある。それ故、男らしさを発揮せよ。(一一) お前は我々をうち破ってこの大地を治めよ。あるいは、我々に殺されても、勇士の世界（天界）に行くであろう。(一二) パーンダヴァよ、王国を追放されたこと、あの苦難、森での生活、クリシュナー（ドラウパディー）の苦しみを思い出して、男になれ。(一三) 憎い者たちの言葉に従って何度も亡命したことに対し、今こそ怒りを見せろ。実に怒りはまさに男らしさである。(一四) ユディシティラよ、お前の怒り、腕力、気力、知力、手練の武器さばきを、この戦いにおいて発揮せよ。男になれ。(一五)』

ウルーカよ、あのビーマセーナの奴に私の言葉を繰り返し伝えろ。あの去勢された馬鹿、大食いで無学なビーマセーナに。(一六)

『狼腹よ、できもしないのに集会場の中でお前が誓ったように、もしできるならドゥフシャーサナの血を飲むがよい。(一七) 武器の浄めの式は終了した。クルクシェートラはぬかるんでいない。馬たちは肥え、兵士たちは養われている。クリシュナとともに、明日戦え。(一八)』」

(第百五十七章)

サンジャヤは語った。——

賭博師の息子（ウルーカ）はパーンダヴァの軍営に着くと、パーンダヴァたちと会い、ユディシ

ティラに言った。（一）
「あなたは使節の言葉がどういうものか知っておられる。私はドゥルヨーダナの指示を、言われた通りに伝えますから、それを聞いて怒らないで下さい。（二）」
ユディシティラは答えた。
「ウルーカよ、恐れることはない。心配しないで、貪欲で短慮なドゥルヨーダナの考えを伝えなさい。（三）」
サンジャヤは語った。――
それからウルーカは、光輝ある偉大なパーンダヴァ、すべてのスリンジャヤ、誉れあるクリシュナ、ドルパダとその息子、ヴィラータ、その他すべての王たちの前で告げた。（四―五）
「気高いドゥルヨーダナ王は、クルの勇士たちが聞いている中で、あなたに対して次のように言った。王よ、それを聞きなさい。（六）
お前は賭博で敗れた。そしてクリシュナー（ドラウパディー）は集会場に連れて来られた。自分が男だと考えている人なら怒るはずだ。（七）また十二年間、お前たちは家を離れて森で生活した。そして一年間、ヴィラータの召使として生活した。（八）パーンダヴァよ、お前の怒り、王国を奪われたこと、森での生活、ドラウパディーの苦しみを思い出して、男になれ。（九）できもしないのにビーマセーナが誓ったように、もし彼ができるならドゥフシャーサナの血を飲むがよい。パーンダヴァよ。（一〇）武器の浄めの式は終了した。クルクシェートラはぬ

かるんでいない。道は平坦で兵士たちは養われている。クリシュナとともに、明日戦え。（一一）
戦場でビーシュマに出会う前に、どうして自慢するのか。ガンダマーダナ山に登りたいと望む愚者のように。（一二）最高の戦士であり、インドラのように戦うドローナを、戦いにおいて破らないのに、お前はどうして王国を望むのか。ユディシティラよ。（一三）ドローナはブラフマンを説くヴェーダと、弓のヴェーダ（兵学）との二つに通じた師匠であり、戦闘における揺るぎなき第一人者で、不滅の将軍である。（一四）ユディシティラよ、お前は迷妄によりそのドローナを戦闘でうち破ろうと望むが、それは空しい。実にメール山が風によって破壊されたとは、聞いたことがない。（一五）風がメール山を運ぶだろう。天が大地に落ちるであろう。宇宙紀（ユガ）が逆転するだろう。もしお前が私に言ったことが実現するなら……。（一六）象や馬や人が、生きることを望んでいても、敵を制する彼に出会ったら（異本による）、どうして無事で家に再び帰れるか。（一七）足で大地に触れて歩く者は、戦場でこの二人が彼のことを考えたり恐ろしい武器で攻撃したりしたら、どうして生きて解放されることがあろうか。（一八）
井の中の蛙のように、お前はこの集結した王の軍勢を知らないのか。神々の軍隊のように無敵で、神々に守られている天界のように、諸王に守られている軍勢を。（一九）東西南北の地方の諸王、カーンボージャ族、シャカ族、カサ族、シャールヴァ族、マツヤ族、中部クル族、ムレーッチャ族、プリンダ族、ドラヴィダ族、アーンドラ族、カーンチュヤ族。（二〇）

これらの種々の民族が戦いに向けて群がっている。それはガンガーの激流のように防ぎがたい。そして私が象軍の中にいるのを知らないのか。愚か者よ、お前はどうして戦いを望むのか。（二一）」

ウルーカはダルマの息子ユディシティラに以上のように言うと、アルジュナの方を向いて、次のように告げた。（二二）

「高言をせずに戦え。アルジュナよ、どうして大言壮語するのか。方策によって成就がある。自慢によって成就するのではない。（二三）アルジュナよ、もしこの世において、自慢によって成就するなら、すべての者が目的を成就することができる。不幸な者はこの上なく自慢するであろうから。（二四）

クリシュナがお前の協力者であることを私は知っている。お前のガーンディーヴァ弓が棕櫚のように長い（または、「ターラ（長さの単位）ほどである」）と知っている。お前のような戦士はいないと知っている。知っていながら、私はお前の王国を奪う。（二五）人は巡り合わせにより大きな成果をあげるのではない。実に配置者（ダートリ）（創造神）がその意（こころ）のみにより彼を支配するのである。（二六）お前が嘆いている間、私は十三年間王国を享受した。私はお前と仲間を殺して、更に長く統治するであろう。（二七）お前が賭で奴隷として勝ち取られた時、ガーンディーヴァ弓はどこにあったか。その時、ビーマセーナの腕力はどこにあったか。アルジュナよ。（二八）あの時お前たちが解放されたのは、棍棒を持つビーマセーナによってではなく、またガーンディーヴァを持つアルジュナによってでもない。非の打ち所のないクリシュナー（ドラウパディー）がいなければ、解放

されなかった。（二九）お前たちが奴隷の仕事に従事し、人間以下のことに拘束されていた時、あの情熱的な女が、奴隷の状態になったお前たちを解放してくれたのだ。（三〇）私はお前たちを不毛の胡麻と呼んだ（二・六八・八参照）。それはその通りだった。というのは、ヴィラータの都において、アルジュナは弁髪を結っていた。（三一）そしてビーマセーナはヴィラータの台所において、料理人の仕事をして疲れていた。これが私の力である。（三二）王族（クシャトリヤ）というものは、常にこのように王族を罰する。お前は女形（おやま）の身なりをして、弁髪を結い、少女に踊りを教えていた（異本による）。（三三）アルジュナよ、私がクリシュナやお前を恐れて王国を引き渡すことはない。クリシュナとともに戦え。（三四）幻術（マーヤー）や魔術や手品は、戦いにおいて武器をとった私を恐れさせはしない。むしろ怒りをかきたてる。（三五）千人のクリシュナ、百人のアルジュナが私を攻撃しても、私の矢は的を外すことはない。彼らは十方に逃げ去るだろう。（三六）ビーシュマと交戦せよ。頭で山を砕け。非常に深いこの人間の海を両腕で渡れ。（三七）その海には、クリパという大魚がいる。ヴィヴィンシャティという魚で満ちている。ブリハドバラが波である。ソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）がティミンギラ（鯨を食う魚）である。（三八）その海では、ドゥフシャーサナが暴流である。シャラとシャリヤが魚である。スシェーナとチトラーユダが竜と鰐である。ジャヤドラタが（海中の）山である。プルミトラが深みである。ドゥルマルシャナが水である。シャクニが断崖である。（三九）武器という激流を有する。お前は不滅で非常に増大したこの海に飛び込み、疲労で気を失うであろう。すべての縁者が殺される時、お前の心はひどく苦しむだろう。（四〇）アルジュナよ、その時お前の心は、大地

を統治することを諦めるだろう。清らかでない者の心が天界に行くことを諦めるように。お前が王国を統治することは非常に難しい。苦行を積まない者が天界を望んでも難しいように。(四二)」

（第百五十八章）

パーンダヴァからの伝言

サンジャヤは語った。──

ウルーカは再びアルジュナに、言われた通りの伝言を述べた。その言葉という棒で怒った毒蛇を打つように。(一) その言葉を聞いて、パーンダヴァたちは最初からひどく怒っていたが、ウルーカにより傷つけられて、更に怒りが激しくなった。(二) 彼らは座席に座っていられず、腕を拡げた。そして怒った毒蛇のようにお互いに見つめ合った。(三) ビーマセーナは頭を下げ、毒蛇のように息を吐き、目尻を赤くしてクリシュナを見た。(四)

ひどく怒りにかられて苦しむ風神の息子（ビーマ）を見て、クリシュナは微笑してウルーカに答えた。(五)

「賭博師の息子よ、速やかに去るがよい。スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）に告げなさい。『汝の言葉は聞いた。趣旨はわかった。汝の考え通りになるだろう』と。(六) そして更に私の言葉をスヨーダナに伝えるべきである。

さあ、明日こそ見るがよい。愚か者よ、男になれ。(七) 愚者よ、アルジュナが御者として選んだのだから、クリシュナは戦わないと考え、汝は恐れないかも知れない。(八) しかし、最後の時には、私は怒ってすべての王たちを焼き尽くすであろう。火が草を燃やすように。(九) だが、ユディシティラの指令により、自己を知る偉大なアルジュナが戦っている間、私はその御者の仕事をするであろう。(一〇) もし汝が三界を飛行しようと、また地下に潜ろうとも、明日の朝、汝はいたるところで、アルジュナの戦車を眼前に見るであろう。(一一) またもし汝が、ビーマセーナが空言を吐いたと考えても、ドゥフシャーサナの血はすでに飲まれたも同然と思い知るべきである。(一二) アルジュナもユディシティラ王もビーマセーナも双子も、逆しまに語る汝を考慮しない。(一三)」

（第百五十九章）

サンジャヤは語った。──

バラタの雄牛は、そのドゥルヨーダナからの伝言を聞くと、目尻を非常に赤くしてウルーカを見た。(一) 誉れ高いアルジュナは、クリシュナを見てから、太い腕を握って、ウルーカに言った。(二)

「自分の力に依存して敵に挑戦し、恐れることなく敵と戦う者（異本による）、それが男であると言われる。(三) しかし、能力がないので、他人の力に依存して敵に挑戦する者は、名前だけの王族で、最低の男である。(四) お前は他人の力により、自分に力があると考えている。自分は愚かで臆病者なのに、他の人々を攻撃しようと望んでいる。(五) というのは、すべての

王のうちの長老であり、利他を望み、感官を制御した大知者〔ビーシュマ〕を、死を招くことになる〔総司令官に〕任命して、お前は高言している。(六) 我々はお前の魂胆を知っている。愚かな一族の面汚しめ。パーンダヴァたちは憐れみによりビーシュマを殺さないだろう〔とお前は考えている〕。(七) しかしドゥルヨーダナよ、お前がその力を頼りにして高言しているビーシュマを、すべての弓取りたちが見ている前で、私はまず第一に殺すであろう。(八)

賭博師の息子よ、バラタ〔ルク〕族のもとに帰り、スヨーダナに告げよ。――アルジュナは承知したと言った。夜が終わったら合戦があるであろう。(九)(一〇―一三略)

明日、スヨーダナは『高言』〔が真実であること〕を知るであろう。私が祖父〔ビーシュマ〕を矢の群で苦しめるのを見て。(一四) スヨーダナよ、お前の弟のドゥフシャーサナは法（ダルマ）を知らず、常に怨み、悪い了見で、卑劣である。怒ったビーマセーナが集会場の中で彼に言ったこと、その誓いがすぐに真実になることを見るであろう。(一五―一六) 自慢、高慢、怒りと粗暴、薄情、尊大さ、自惚れ、(一七) 残酷さ、辛辣さ、法を憎むこと、無法、暴言、長老に背くこと、曲った見解、一切の悪い政策。スヨーダナよ、お前はすぐにそれらの恐ろしい報いを見るであろう。(一八―一九)

というのは愚かな王よ、私とクリシュナが怒ったら、どうしてお前は生命や王国を望めるか。(二〇) ビーシュマとドローナが滅し、カルナが倒されたら、お前は生命と王国と息子たちに対して希望を失うであろう。(二一) スヨーダナよ、お前の兄弟や子供たちの死を見て、

自分もビーマセーナに殺された時、お前は自分の悪行を思い出すだろう。(二二)

クリシュナは二度誓いを立てることはない。私は真実を述べる。以上すべては真実になるであろう。(二三)」

このように言われて、ウルーカはその言葉を記憶にとどめ、その場を辞して、引き返して行った。(二四) ウルーカはパーンダヴァのもとから帰り、ドゥルヨーダナのところに行き、クルの集会において、言われた通りにすべて報告した。(二五) バラタの雄牛はクリシュナとアルジュナの言葉を聞くと、ドゥフシャーサナとカルナとシャクニに告げた。(二六) そして彼は、王の軍隊と盟友の軍隊に、日の出前に陣形を整えて戦いの準備をするように命じた。(二七) それから、カルナに指示された使者たちが、急いで戦車に乗り、または駱駝や雌馬に乗り、あるいは高速の良馬に乗り、速やかに全軍をまわって、王たちにカルナの命令を伝えた。「日の出前に準備をせよ」と。(二八―二九)

(第百六十章)

(59) 戦士と超戦士の列挙（第百六十一章―第百六十九章）

戦士たちの対戦相手を指定する

サンジャヤは語った。——

クンティーの息子ユディシティラは、ウルーカの言葉を聞くと、ドリシタデュムナに率いられる軍隊を出陣させた。(一) 歩兵、象兵、戦車兵、騎兵よりなる四種の軍隊は恐ろしく、大地のように揺るぎなかった。(二) ビーマセーナや勇士アルジュナなどに守られ、ドリシタデュムナに指揮される軍隊は、静かな海原のように越えがたかった。(三)

その先頭で、ドローナを求めて戦いに酔う、パーンチャーラの勇士ドリシタデュムナが兵たちを率いていた。(四) 彼は腕力と気力に応じて戦士たちの〔対戦相手を〕指定した。カルナに対してアルジュナを、ドゥルヨーダナに対してビーマを当てた。(五) アシュヴァッターマンに対してナクラを、クリタヴァルマンに対してシビ国王を、シンドゥ国王(ジャヤドラタ)に対してヴリシュニのユユダーナ(サーティヤキ)を前衛に配した。シャクニに対してサハデーヴァを指定した。(六) そしてビーシュマに対してシカンディンを前衛に配した。シャクニに対してサハデーヴァを、シャラに対してチェーキターナを当てた。(七) シャリヤに対してドリシタケートゥを、ガウタマ(クリパ)に対してウッタマウジャスを、五名のトリガルタに対してドラウパディーの息子たちを指定した。(八) ヴリシャセーナとその他の王たちに対してスバドラーの息子(アビマニュ)を当てた。というのは、アビマニュは戦いにおいて〔父の〕アルジュナに勝るとも劣らない力があると考えたからである。(九)

火のような顔色をした勇士(ドリシュタデュムナ)は、このように別個に、あるいはいっしょに、戦士たちの組み合わせを決めてから、ドローナを自分に割り当てた。(一〇) それから、聡明な総司令官である勇士ドリシタデュムナは、形のごとく布陣して、戦いの決意を堅めた。(一一) 彼は以上述べたようにパーンダヴァ軍を準備させた。そしてパーンドゥの息子たちの勝利のために、準備を整えて戦場に立っていた。(一二)

(第百六十一章)

クル軍の戦士と超戦士たち

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、アルジュナがビーシュマを殺すことを誓った時、ドゥルヨーダナなど私の愚息たちは何をしたか。(一) というのは、私は父ビーシュマが、戦いにおいて、クリシュナをともなう強弓を持つアルジュナに殺されるのをすでに見るからである。(二) そして、その無量の叡知を持つ最高の戦士ビーシュマは、アルジュナの言葉を聞いて何と言ったか。(三) クル族の重荷を担う、大なる知性と勇武をそなえたそのガンガーの息子(ビーシュマ)は、総司令官の地位を得て、どのように行動したか。(四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

そこでサンジャヤは、無量の威光を有するクルの長老ビーシュマに告げられた通りに報告

した。(五)

　王よ、シャンタヌの息子ビーシュマは総司令官の地位を得て、元気づけるかのように、ドゥルヨーダナに告げた。(六)

「槍を手に持つ神々の将軍クマーラ（スカンダ）に敬礼してから、私は今日、疑いもなくあなたの総司令官になるであろう。(七)私は軍事行動と種々の陣形に通じている。また雇用されている兵とそうでない兵を共に働かせることができる。(八)行軍、戦闘とその停止について、私はブリハスパティ（神々の師）のように非常によく知っている。大王よ。(九)私は神やガンダルヴァや人間に属する大規模な陣形を知っている。私はそれらによりパーンダヴァ軍を茫然自失せしめるであろう。お前の苦熱が消えるように。(一〇)そこで私は、お前の軍隊を守りつつ、論書に基づき適切に戦うであろう。お前の心の苦熱が消えるように。(一一)」

　ドゥルヨーダナは言った。

「強力なガンガーの息子よ、私はすべての神々や阿修羅たちをも恐れない。私はこの真実をあなたに告げる。(一二)いわんや無敵のあなたが総司令官の地位にあり、人中の虎ドローナが戦いを歓迎して控えていてくれれば。(一三)あなた方二人の人中の虎がいて下されば、私は勝利する。クルの最上者よ、確かに神々の王位ですら得られがたくはない。(一四)ところでクルの勇士よ、敵味方の戦士（ラタ）と超戦士（アティラタ）の数をすべて知りたいと思います。(一五)

というのは、祖父は敵味方に通じておられるから。私はこれらすべての王たちとともに、お聞きしたいです。(一六)」

　ビーシュマは言った。

「ガーンダーリーの息子よ、王中の王よ、味方の軍の戦士の数を聞け。王よ、戦士と超戦士とについて。(一七)お前の軍隊には幾千、幾万、幾百万の戦士がいる。しかしそのうちの主な者を私から聞きなさい。(一八)

　まず第一にお前はすばらしい戦士である。ドゥフシャーサナをはじめとする百名のすべての弟たちも同様である。(一九)すべて武術を修得し、切ったり貫いたりすることに長け、戦車の戦い、象の戦い、棍棒戦、刀と楯を用いた戦いに巧みである。(二〇)〔戦車その他を〕操縦するのに巧みで、武器を修得し、優れた攻撃者であり、重大な仕事を成就する。弓術その他の武術については、彼らはドローナとクリパの弟子である。(二一)これら気力あるドリタラーシトラの息子たちは、パーンダヴァたちに害されたら、戦場で戦いに酔うパーンチャーラ軍を殺すであろう。(二二)バラタの最上者よ、それからお前の軍の総司令官である私がいる。私はパーンダヴァたちを苦しめて敵を滅ぼすであろう。しかし自分の美質を説くことはやめる。お前たちに知られているから。(二三)

　一方、ボージャ族の最高の戦士クリタヴァルマンは超戦士である。彼は疑いなく戦場においてお前の目的を成就するであろう。(二四)彼は武器に通じた人々にも傷つけられることなく、遠方から射撃し、強固な武器をとる者である。大インドラが悪魔たちを殺すように、彼

はお前のために敵を殺すであろう。(二五)マドラの王である偉大な射手シャリヤは、超戦士であると私は思う。彼は常に、色々な戦いにおいてクリシュナと競い合う。(二六)お前の最高の戦士シャリヤは、自分の妹（マードリー）の息子たち（ナクラとサハデーヴァ）を捨てて、戦いにおいて、円盤と棍棒を持つクリシュナと戦うであろう。(二七)海の波のような激しさで敵軍を溺れさせるかのような、武術を修得したブーリシュラヴァスもお前の親しい友である。(二八)ソーマダッタの息子であるこの偉大な射手は、戦士の群の長たちの長である。彼は敵の大軍を滅ぼすであろう。(二九)大王よ、シンドゥの王（ジャヤドラタ）は二人前の戦士（二人の戦士に匹敵する者）であると私は思う。王よ、その最高の戦士は戦場において勇ましく戦うだろう。(三〇)彼はかつてドラウパディーを掠奪した時、パーンダヴァたちに苦しめられた。敵の勇士を殺す彼は、その苦しみを思い出して戦うであろう。(三一)王よ、その時、彼は恐るべき苦行を行なって、パーンダヴァたちと戦場で戦うという、得られがたい恩寵を得た。(三二)そこでわが子よ、この戦士の中の虎は、その怨みを思い出して、戦場で捨てがたい生命を捨ててパーンダヴァたちと戦うであろう。(三三)」

（第百六十二章）／（第百六十三章略）

ビーシュマは言った。

「王よ、お前の母方の叔父シャクニは一人前の戦士である。彼はパーンダヴァたちと敵対関係にあり、疑いなく戦うであろう。(一)彼の無敵の軍隊は、戦いにおいて退却することなく、

珍らしい多くの武器を持ち、風のように迅速である。(二)ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は、一切の弓取りたちを凌駕する偉大な射手であり、戦場でめざましく戦い、強固な武器をとる偉大な戦士である。(三)大王よ、アルジュナに匹敵する彼の弓から放たれた矢は、お互いにくっついて（連続して）飛行する。(四)しかし私は、この勇士を最高の戦士に数え挙げることはできない。なるほど、この誉れ高い男は、もし望めば三界をも燃やせるであろう。(五)隠棲所に住んでいた時、彼は苦行の力により、怒りと威光を増大した。彼は高邁な知性を有し、ドローナは彼に恩寵をかけ、神聖な武器を与えた。(六)バラタの雄牛よ、ところが彼には一つの大きな欠陥がある。そのために私は彼を戦士とも超戦士とも考えないのだ。最高の王よ。(七)彼にとって生命が殊の外に愛しいのである。バラモン（ドローナの息子はバラモン）は常に生命を望むものだ。しかし、彼に等しい者は両軍に誰もいない。(八)彼はただ一騎で、神々の軍をも滅ぼすであろう。この美丈夫は、弓籠手の音により、山をも裂くことができる。(九)彼は無数の美質を有し、勇猛な攻撃者で、恐るべき光輝を放つ。彼は杖をとる神（ヤマ）のように耐えがたく、カーラ（時間、破壊神）のように徘徊するであろう。(一〇)その怒りに関しては宇宙紀の終わりの火に等しく、獅子のような首をし、大知者で、戦争の余燼を鎮めるであろう。バーラタよ。(一一)

一方、彼の父（ドローナ）は、大威光を有し、老いたりとはいえ若者たちに勝る。戦いにおいて大きな働きをする。その点、私はまったく疑わない。(一二)矢という激風にあおられ、軍隊という枯草と薪に燃え上がらされて、勝利をめざして、パーンドゥの息子の軍隊を燃やすで

あろう。(二三) この人中の雄牛であるバーラドゥヴァージャの息子（ドローナ）は、戦士の群の長たちの長であり、お前たちのために恐るべき働きをしてくれるだろう。(二四) このすべての王たちの師匠、長老である尊師（グル）は、スリンジャヤ軍を滅ぼすであろう。しかし、アルジュナは彼にとって愛しい。(二五) この偉大な射手は、汚れなき行為のアルジュナを決して殺さないだろう。彼はアルジュナの美質に圧倒された輝かしい師匠時代のことを思い出すのである。(二六) このパーラドゥバージャの息子である勇士は、常にアルジュナの多様な美質を誇りにし、彼のことを息子以上に考えていたのである。(二七) この栄光ある男は、戦場においてただ一騎で、神とガンダルヴァと魔類が一丸となったものをも、神聖な武器により滅ぼすことができる。(二八)」(一九—三八略)　（第百六十四章）

ビーシュマは言った。

「アチャラとヴリシャカの兄弟は、二人で無敵の戦士であり、お前の敵を滅ぼすであろう。(一) 彼らは強力な人中の虎で、強固な怒りを有する戦士である。ガーンダーラの中の長であり、若く見目麗しく大力である。(二)

カルナ・ヴァイカルタナはお前の親友であり、常に果敢に戦う。王よ、彼はパーンダヴァとの戦いにお前をかりたてる。彼は荒々しく、自慢し、卑しい。お前の顧問、指導者、友人である。高慢で、この上なく尊大である。(三—四) 彼は決して完全な戦士でもなく、超戦士でもない。王よ。彼は常に慈善家で、愚かにも、生まれつき着ていた鎧を手離し、神聖な耳環をも失ってしまった。(五) 〔パラシュ〕ラーマの呪い、バラモン（ドローナ）の言葉、資具（鎧と耳環）を失ったこと、以上により彼は半人前の戦士であると私は思う。彼はアルジュナと会ったら、生きては逃れられない。(六)」

サンジャヤは語った。——

それから、最高の戦士である勇士ドローナが言った。

「あなたの言った通りだ。何も偽りはない。(七) 戦闘ごとに彼は自慢するが、いつも退却してばかりいる。彼は慈善家だが、不注意である。それ故、彼は半人前の戦士だと私は考える。(八)」

王中の王よ、それを聞くとカルナは怒りで眼を見開き、鞭のように、その言葉でビーシュマを打ちながら言った。(九)

「祖父よ、あなたは好きなように言葉の矢で私を傷つける。憎しみにより、このようにいつも折あるごとに、罪もない私を……。私はドゥルヨーダナのために、そのすべてに耐えている。(一〇) しかるにあなたは私のことを無能力で臆病者と考えている。あなたこそ半人前の戦士であると私は思う。疑う余地はない。(一一) ガンガー（ガンジス）の息子よ、私は偽りを言わない。あなたは常に全世界の人々とクル族の人々にとって有益でない。しかし王たちは気づかない。(一二) というのは、いかなる者が戦いにおいて分裂させようと望んで、等しく高邁な

行為の王たちについて、その権威を低めるようなことをするか。あなたが彼らの美質を列挙して、しかもあらを捜しているように……。（二三）王族（クシャトリヤ）は年齢、白髪、財産、縁者により優れた者になるとされる。しかるに従僕（シュードラ）は年齢の上の者が優れているとされる。しかるに、バラモンは聖句（マントラ）により優れた者とされる。クルの勇士よ。（二四）王族は力により優れた者とされる。実業者（ヴァイシャ）は財産により優れた者とされ、しかるにバラモンは聖句により優れた者とされる。

強力なドゥルヨーダナよ、どうかよく見ていただきたい。あなたに災いをなすこの邪悪なビーシュマを捨てなさい。（二七）王よ、実に分裂した軍隊は再び結束させがたい。譜代の軍隊でさえそうだ。いわんや新たに編成されたものはなおさらである。人中の虎よ。（二八）バーラタよ、このように戦いにおいて、戦士たちの間に分裂が生じた。特に我々の眼の前で我々の権威が低められたのだから。（二九）この小知なビーシュマがどうして戦士たちを識別することができるか。私がパーンダヴァの軍隊を退けるであろう。（二〇）私の矢は的を射損じることはない。パーンダヴァとパーンチャーラの軍は、私に会って、十方に逃げ去るだろう。雄牛たちが虎に会って逃げ去るように。（二一）ビーシュマは高齢で愚鈍でカーラ（時間、破壊神）に迷わされているのに、どうして戦争の混乱や政策や適切な助言に対処できるか。（二二）彼はいつも全世界の人々と競っている。彼は誤った見解を持ち、他の人を誰も評価しない。（二三）長老の意見は聞くべきであると教典は説く。しかしあまりにも老いた人々の子供じみた意見は聞く必要はない。（二四）私は見事な戦いにおいて、一人でパーンダヴァたちを殺す

であろう。疑問の余地はない。人中の虎よ。しかし名誉はビーシュマに帰してしまう。（二五）王よ、あなたはビーシュマを総司令官にした。功績は総司令官に帰し、決して兵士たちに帰することはないだろう。（二六）王よ、ビーシュマが生きている限り、私は決して戦わないであろう。ビーシュマが殺された時、私はすべての偉大な戦士たちと戦うであろう。（二七）」

（百六十五章）

パーンダヴァ軍の戦士と超戦士たち

ビーシュマは言った。

「ドゥルヨーダナの戦争において、長年の間考えて来た、海のような非常に大きなこの重荷が私にかかった。（一）その苦しく身の毛がよだつ時が来た時、仲間割れはしたくない。それ故、お前は生きながらえているのだ。御者（スータ）の息子（カルナ）よ。（二）さもなければ、私は老いたりとはいえ勇武を発揮して、若僧のお前の戦いたいという望み、生きる望みを断ち切ってやるのだが。御者の息子よ。（三）ジャマダグニの息子ラーマ（パラシュラーマ）が偉大な武器を放っても、私はまったく恐れなかった。お前が私に何ができるか。（四）なるほど、自分の力を誇ることは善き人々に讃えられないが、私は怒ってお前に言うのだ。卑しい一族の面汚しめ。（五）

カーシ王の婿選び式（スヴァヤンヴァラ）において、王族たちが集まった時、私は一騎でその王たちを破り、娘たちを速やかに奪った。（六）更に私は、戦場において、幾千という同様の優れた者たちとそ

の軍隊を一騎でうち破った。(七)
敵意に満ちた男であるお前を得て、クル族の大きな災いが近づいた。滅亡に向けて努力せよ。男になれ。(八)戦場でお前の競争相手のアルジュナに対して戦え。邪悪な男よ、私はお前がその戦いから逃げ出すのを見るであろう。(九)」

サンジャヤは語った。——

するとドゥルヨーダナ王はビーシュマに言った。

「ガンガーの息子よ、私を見なさい。重大な仕事が近づいているから。(一〇)まず第一に、私が最高に幸せになるように考慮して下さい。あなた方は二人とも私のために大なる働きをするであろう。(一一)

更に、敵方の最高の戦士について聞きたいと思います。また超戦士について、そして戦士の群の指導者について。(一二)ビーシュマよ、敵の強さと弱さを聞きたいのです。夜が明けたら戦闘があるであろう。(一三)」

ビーシュマは言った。

「王よ、私はお前の戦士と超戦士と、それから半人前の戦士を列挙した。次はパーンダヴァ側について聞け。(一四)強力な王よ、もし興味があるなら、今度はパーンダヴァの軍における戦士と王たちの列挙を聞きなさい。(一五)

パーンドゥとクンティーの息子である王（ユディシティラ）自身が高邁な戦士である。わが子よ、

彼は戦場において、火神のようにふるまうであろう。疑問の余地はない。(一六)王中の王よ、一方ビーマセーナは、八人前の戦士で、一万の象の力を有し、誇り高く、威光にかけて超人的である。(一七)マードリーの息子である二人の戦士（ナクラとサハデーヴァ）は、ともに人中の雄牛である。容色と威光をそなえ、アシュヴィン双神のようである。(一八)

彼らは自分たちの苦難を思い出し、軍隊の前衛にいて、ルドラ（シヴァ）のようにふるまうであろう。私はそれを疑わない。(一九)これら偉大な者たちは、すべてシャーラ樹の幹のように背が高い。彼らは身長の点で他のいかなる男たちよりも指尺だけ大きい。(二〇)これらすべてのパーンドゥの強力な息子たちは、獅子のように堅固で、梵行（清浄行）を行ない、すべて非常な苦行を積んでいた。(二一)彼らは廉恥心あり、人中の虎であり、虎のように強力である。その速度、攻撃力、戦闘能力にかけて、彼らはすべて超人的である。世界制覇において、彼らはすべて、諸王を征服した。バラタの雄牛よ。(二二)(二三―二七略)

ナーラーヤナ（クリシュナ）をともなう、赤い眼をしたアルジュナ、彼ほど勇猛な戦士は、両軍にいない。(二八)神々、魔類、蛇（竜）、羅刹、夜叉において、いわんや人間において、英邁なアルジュナのように完全な戦士は、いまだかつて聞いたこともなかったし、これから聞くこともないであろう。大王よ。(二九―三〇)ヴァースデーヴァ（クリシュナ）が御者である。アルジュナが戦う者である。その弓は神弓ガーンディーヴァである。馬たちは風のように速い。(三一)神聖な鎧は貫通されない。大きな箙は無尽〔の矢を蔵する〕。武器の群は、大インドラ、ルドラ、クベーラの武器である。(三二)また、ヤマ、ヴァルナの武器である。その棍棒は恐ろ

しい形状をしている。そして金剛杵（ヴァジュラ）などをはじめとする多様な兵器がある。(三三) 彼は一騎で、戦闘においてヒラニヤプラに住む幾千の魔類を殺した。彼に匹敵する戦士は誰かいるか。(三四) 約束を堅く守るその強力な勇士は、怒って、自軍を守りつつ、お前の軍隊を殺戮するであろう。(三五) 私または師匠（ドローナ）はアルジュナに対抗できる。しかし、両軍のうちで、矢の雨を降り注ぐ彼に対抗できる第三の戦士は存在しない。王中の王よ。(三六) 彼は強風に動かされる夏の終わり（雨季）の雲のように〔矢の雨を降り注ぐ。〕アルジュナはクリシュナをともない、万全である。彼は若く敏腕だが、我々二人は老いさらばえている。(三七)」

サンジャヤは語った──

ビーシュマの言葉を聞くと、王たちの黄金の腕環をはめ、栴檀を塗った太い腕はだらりと下がった。(三八) 彼らは不安な心によって、パーンダヴァたちが以前に発揮した能力を、眼前に見るかのように思い出したのである。(三九)

(第百六十六章)

ビーシュマは言った。

「大王よ、ドラウパディーの五人の息子はすべて偉大な戦士である。ヴィラータの息子ウッタラも偉大な戦士だと私は思う。(一) 大王よ、アビマニユは戦士の群の長たちの長である。戦闘において、アルジュナやクリシュナに等しいであろう。(二) 彼は巧みに武器を用い、めざましく戦い、思慮深く、確固たる勇武を発揮する。彼は自分の父の苦難を思い出して勇ましく戦うだろう。(三) マーダヴァ族のサーティヤキは勇士で、戦士の群の長たちの長である。(四) 王よ、ウッタマウジャスは偉大な戦士であると私は思う。ヴリシュニ族の勇士のうちでも最も猛々しく、恐れを克服している。(五) 彼らには幾千の戦車、象、馬がある。彼らは身命を擲（なげう）って戦うだろう。王中の王であるユディシティラの幸せを願って、お前の軍隊に対して、パーンダヴァたちとともに、ユデパーラタよ。火と風のように、互いに呼ばわり合って。(六―七)

老いたヴィラータとドルパダの二人は、戦いにおいて無敵である。この二人の人中の雄牛は、偉大な戦士で非常に強力であると私は思う。(八)」(九―一四略)

(第百六十七章)

ビーシュマは言った。

「バラタ族の王よ、パーンチャーラの王の息子シカンディンは、敵の城砦を征服する勇士で、パーンダヴァ側の主要な戦士であると私は思う。(一) 彼は戦場において、以前の状態を無にして（彼はかつて女性であった）、お前の軍隊に対して戦うであろう。最高の名声を広めつつ。バーラタよ。(二) 彼にはパーンチャーラとプラバドラカの多くの軍隊が属する。彼はその戦士の群により大きな仕事をするであろう。(三)

全軍の司令官のドリシタデュムナは超戦士であると私は思う。バラタ族の王よ、この偉大

な戦士はドローナの弟子である。（四）彼は戦場において敵を殺しつつ、宇宙紀（ユガ）の終末におけるシヴァ神のように戦うであろう。（五）戦いを好む人々は、戦場における彼の戦車隊について語っている。それは海原のように広大で、神々の軍隊のようであると。（六）」（七―二五略）

（第百六十八章）

ビーシュマは言った。

「バラタ族の大王よ、パーンダヴァ軍のローチャマーナは偉大な戦士である。彼は戦場において、敵軍に対し神のように戦うであろう。（一）ビーマセーナの母方の伯父、プルジット・クンティボージャは強力で偉大な射手である。彼は超戦士であると私は思う。（二）この勇士は、偉大な射手であり、敏腕で巧妙である。めざましく戦い、有能で、戦士の中の雄牛であると私は思う。（三）彼はインドラが魔類と戦うように勇猛に戦うであろう。彼の兵士たちはすべて戦闘に通達し有名である。（四）この勇猛な王は、パーンダヴァたちの幸せを願い、妹の息子のために戦場で非常に大きな働きをするであろう。（五）

大王よ、ビーマセーナとヒディンバーの息子（ガトートカチャ）は羅刹の王である。彼は多くの幻力（マーヤー）を有し、戦士の群の長たちの長であると私は思う。（六）わが子よ、戦いを好む彼は、戦場で幻力を用いて戦うであろう。そして彼の命に従う勇猛な羅刹の顧問たちも戦うであろう。（七）

これらの、そしてその他の多くの諸国の王が、クリシュナを先頭として、パーンダヴァのために集結している。（八）王よ、以上が偉大なパーンダヴァの戦士と超戦士と半人前の戦士たちの主な人々であると考えられる。（九）王よ、彼らが戦いにおいて、ユディシティラの恐るべき軍隊を指導するであろう。そしてその軍隊は、大インドラのような勇士アルジュナに守られる。（一〇）勇士よ、彼らが戦いにおいて勝利を求めてお前へ向かって来る時、私は戦場で、勝利あるいは死を望んで彼らと戦うであろう。（一一）ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナと円盤を持つクリシュナは、黄昏（または暁）の月と太陽のようである。私はその二人の最高の人物と交戦するであろう。（一二）私は戦いの最中、これらのパーンドゥの息子の最高の戦士とその軍隊に対して進軍するであろう。（一三）

王よ、以上私はお前の軍の戦士と超戦士の主要なものを列挙した。また、幾人かの半人前の戦士をも。同様にパーンダヴァたちのそれらも列挙した。クル族の王よ。（一四）アルジュナとクリシュナとその他の王を見かけたら、私はすべて食い止めるであろう。パーラタよ。（一五）しかし勇士よ、パーンチャーラ族のシカンディンが戦場で矢をつがえて戦いを挑んで来ても、私は彼を殺さないだろう。（一六）世の人々は知っている。私が父の幸せを求めて、到来した王国を捨てて、梵行（禁欲）を堅く誓ったことを。（一七）私はチトラーンガダをクル族の王位につけた。そして、幼いヴィチトラヴィーリヤを皇太子に即位させた。（一八）地上のすべての王に、デーヴァヴラタ（神誓）であることを広く知らしめたからには、私は決して女性を殺さないし、前に女性であった者を殺さない。（一九）というのは王よ、お前も聞いたか

も知れぬが、シカンディンは前に女性であった。少女でありながら男になった。バーラタよ、私は彼と戦わない。（二〇）しかしバラタの雄牛よ、その他の王たちに戦場で会ったら、私は彼らを殺すであろう。ただし、クンティーの息子たちは殺さない。王よ。（二一）」

（第百六十九章）

(60) アンバーの物語 （第百七十章―第百九十七章）

シャールヴァ王から捨てられたアンバー

ドゥルヨーダナはたずねた。

「バラタの最上者よ、いかなるわけであなたはシカンディンを殺さないのか。戦場で彼が矢をつがえ、弓を引き絞って攻撃するのを見ても。（一）ガンガーの息子である勇士よ、まずパーンダヴァ軍とソーマカ軍を殺すであろうと言っておきながら……。祖父よ、そのわけを私に語って下さい。（二）」

ビーシュマは語った。――

ドゥルヨーダナよ、これらの王たちとともに聞きなさい。戦場でシカンディンを見ても私が彼を何故殺さないのか、その物語を。（三）

私の父であるバラタの雄牛、徳性あるシャンタヌ大王は、時至って逝去した。（四）バラタの最上者よ、そこで私は誓約を守って、弟のチトラーンガダを大王の位につけた。（五）そして彼が死んだ時、私はサティヤヴァティーの考えに従い、ヴィチトラヴィーリヤを作法通りに王に即位させた。（六）王中の王よ、私が法（ダルマ）に従って王に即位させたヴィチトラヴィーリヤは、若くはあったが徳性あり、私のみを頼りにした。（七）わが子よ、私はそれから、彼の嫁をもらいたいと思い、ふさわしい家からと考えて余念がなかった。（八）勇士よ、その時私は、

すべて容色にかけて比類のないカーシ国の王女である三人の少女の婿選び式（スヴァヤンヴァラ）があることを聞いた。その三人とは、アンバーとアンビカーとアンバーリカーである。（九）そして、地上の王たちが呼び集められていた。バラタの雄牛よ。彼女らのうちでは、アンバーが長女で、アンビカーが次女で、アンバーリカーが最も下の王女であった。王中の王よ。（一〇）

そこで私はただ一騎でカーシ国王の都へ行った。そしてそこで、美しく飾られた三人の少女と、諸侯に囲まれた国王たちを見た。強力な王よ。（一一）それから私は、戦おうと身構えたすべての王に挑戦し、その少女たちを戦車に乗せた。バラタの雄牛よ。（一二）勇武により彼女らを得る婚資を払おうと考えて、私は彼女たちを戦車に乗せ、そこに集まっているすべての王に告げた。「シャンタヌの息子ビーシュマが、娘たちを奪って行く」と何度も。（一三）「すべての王は、彼女らを救うために全力を尽くして努力せよ。王たちよ、あなた方の見ている前で、私は力ずくで彼女らを連れて行く。（一四）」

すると王たちは武器を振り上げて立ち上がった。彼らは「戦闘準備、戦闘準備」といきり立ち、御者たちをせきたてた。（一五）王たちは雲のような音をたてる戦車により、また象で戦う者たちは象により、その他の王たちは馬に乗り、武器を振り上げて立ち上がった。（一六）王よ、それからすべての王は、戦車の大群により私をすっかり取り囲んだ。（一七）私は彼らに対し、おびただしい矢の雨を浴びせた。私は神々の王（インドラ）が魔類を征服するように、すべての王たちを破った。（一八）私は攻撃して来る彼らの、黄金で飾られたきらびやかな旗を、一本ずつ矢で大地に射落とした。（一九）私はその戦いで笑いながら、彼らの馬、象、御

者たちを、輝かしい矢で倒した。人中の雄牛よ。(二〇) 彼らは私の手練の早業を見て、総崩れになって退却した。私は諸王を破ってから、ハースティナプラに帰った。(二一) バラタ族の勇士よ、それから私はその少女たちを弟のためにもたらし、その行為をサティヤヴァティーに報告した。勇士よ。(二二)

（第百七十章）

ビーシュマは語った。――

バラタの最上者よ、それから私は漁師の娘であった、勇士たちの母である母に近づき、抱きしめて次のように言った。(一)

「私は諸王を破り、ここにいるカーシ国王の娘たちを勇武により婚資を払い、ヴィチトラヴィーリヤのために獲得しました。(二)」

するとサティヤヴァティーは眼に涙を浮かべ、私の頭に接吻し、喜んで「息子よ、よくぞあなたは勝利した」と告げた。王よ。(三)

サティヤヴァティーは結婚を承知した。その日が近づいた時、カーシ国王の長女が恥じらいながら言った。(四)

「ビーシュマよ、あなたは法(ダルマ)を知り、すべての論書に通達しています。私の言葉を聞き、どうか法にかなうようにして下さい。(五) 私は以前、心のうちでシャールヴァ王を夫に選びました。彼もまた、以前、父に知られず密かに私を選びました。(六) ビーシュマ王子よ、あなたは〔法の〕論書を学びながら、どうして他の男を愛する私をこの家に住まわせるのでしょうか。しかもとりわけクル族の人なのに。(七) バラタの雄牛よ、このことを念頭に置いて、心で決定して、この場合あなたにふさわしいことをして下さい。勇士よ。(八) 王よ、きっとあのシャールヴァ王は私を待っています。勇士よ、法(ダルマ)を守る人々の最上者よ、どうかお慈悲です。というのは、勇士よ、あなたは地上において誓戒に忠実な方とお聞きしていますから。(九)」

（第百七十一章）

ビーシュマは語った。――

それから私は、サティヤヴァティーと顧問官たちとバラモンや宮廷祭僧たちの同意を得て、長女のアンバーが去るのを許した。王よ。(一) 出発の許可を得たその少女は、老バラモンたちに守られ、乳母につき従われ、シャールヴァ王の都へ行った。そして旅程を終え、シャールヴァ王のもとに着いた。(二) 彼女はシャールヴァ王のもとに行くと、このように告げた。

「輝きに満ちた勇士よ、私は来ました。あなたのもとに。(三)」

王よ、するとシャールヴァ王は笑うかのように彼女に言った。

「美しい顔色の女よ、あなたは先に他の男のものになったから、私は妻としては望まぬ。(四) 美しい女よ、ビーシュマのもとにもどりなさい。ビーシュマに力ずくで奪われたあなたを私は望まない。(五) あの時あなたはビーシュマに勝ち取られ、喜んで連れて行かれた。ビ

ーシュマが激戦において王たちを破ってあなたに触れた後で。あなたが先に他の男のものになったのに、私は妻として望まない。美しい顔色の女よ。(六) どうして私のような、分別をわきまえ法(ダルマ)を他人(ひと)に教える王が、先に他の男のものとなった女性を家に入れることができるか。美しい女よ、欲するがままに行くがよい。時間を無駄にしてはならぬ。(七)」

王よ、アンバーは愛の神の矢に苦しめられて彼に言った。

「王様、そのようにおっしゃってはなりませぬ。決してそのようではありません。(八) 敵を滅ぼす者よ、私は喜んでビーシュマに連れて行かれたわけではない。彼は王たちを逃走させて、嘆き悲しむ私を力ずくで連れて行ったのです。(九) シャールヴァ王よ、あなたを愛している罪のない娘の私を愛して下さい。というのは、愛している者を捨てるのは法にもとることですから。(一〇) 私は戦いにおいて退却することのないビーシュマに相談しました。他ならぬ彼に承認されて、あなたの家に来たのです。(一一) 王よ、勇士ビーシュマは私を求めませんでした。ビーシュマは弟のためにあのように企てたと私は聞いています。(一二) 王よ、私の妹のアンビカーとアンバーリカーも連れて行かれましたが、ビーシュマはその二人を弟のヴィチトラヴィーリヤに与えました。(一三) 人中の虎であるシャールヴァ王よ、あなたを除いて他の男のことを想ったことはありません。私の頭にかけて誓います。(一四) 王中の王よ、私は先に他の男のものになって、あなたのもとに来たのではありません。シャールヴァよ、私は真実を述べています。自分自身にかけて誓います。(一五) 大きい眼の人よ、私を愛して下さい。王中の王よ、処女である私は、自らあなたのもとに来ました。いまだかつて私

のような女は他におりませんでした。あなたの恩寵を求めております。(一六)」

カーシ国王の娘はこのように述べたが、シャールヴァは、蛇が古い皮を捨てるように彼女を捨てた。バラタの最上者よ。(一七) 非の打ち所のないバラタの雄牛よ、このように多様な言葉で彼女に懇願されても、シャールヴァ王はその少女のことを信じなかった。(一八) そこでそのカーシ国王の長女は怒りにかられ、眼に涙を浮かべ、悲しみにむせぶ声で言った。(一九)

「王よ、あなたに捨てられた私が行くところどこにでも、善き人々が私の寄る辺でありますように。私の言ったことが真実ならば。(二〇)」

彼女はこのように告げて、ひどく嘆き悲しんだが、シャールヴァ王は無慈悲にも彼女を捨てた。クル族の王よ。(二一) シャールヴァは彼女に何度も「去れ、去れ」と言った。「美しい尻の女よ、私はビーシュマを恐れる。そしてあなたはビーシュマの所有物だ。(二二)」

短慮なシャールヴァにこのように言われて、彼女は哀れにも、雌の鶚(みさご)のように嘆声をあげながら都を出て行った。(二三)

(第百七十二章)

アンバーとパラシュラーマ

ビーシュマは語った。——

バーラタよ、彼女は都から出て考えた。

「地上に私ほど不幸な若い女はいない。私は親族を失い、そしてシャールヴァには拒絶され

たのだから。（一）そして象の都（ハースティナプラ）に再びもどることはできない。私はシャールヴァに行くことを条件に、ビーシュマから去ることを許されたのであるから。（二）私は自分自身を難ずべきか、あるいは無敵のビーシュマを難ずべきか。それとも、私の婿選び式をした愚かな父を難ずべきか。（三）これは私が自分で犯した誤ちである。前に、あの死闘が行なわれていた時、シャールヴァのためにビーシュマの戦車から飛び降りなかったのだから。これがその報いである。それで私は馬鹿のように苦しんでいるのだ。（四）ビーシュマはひどい。私の心迷える愚かな父はひどい。父は勇猛を婚資として、私を娼婦のように〔色々な男に売り〕渡したのだから。（五）私自身もひどい。シャールヴァ王もひどい。配置者（創造神）もひどい。この者たちの不手際により、私はこの上なく不幸なことになった。（六）あらゆる場合、人間は自分に定められた運命を受ける。

しかし、シャンタヌの息子ビーシュマがこの私の不幸の始まりだ。（七）そこで私は今、ビーシュマに復讐すべきであると思う。苦行（禁欲の誓い）によっても、戦闘によっても、彼は私の苦しみの原因であると考えられる。だが、いかなる王がビーシュマと戦って勝つことができるか。（八）」

彼女はこのように〔ビーシュマに復讐しようと〕決意して、都から外に出て行った。それから、清らかな生活をしている偉大な苦行者たちの隠棲所へ行き、苦行者たちに囲まれてその夜を過ごした。（九）強力なバーラタよ、それからその美しい微笑の女は、自分に起こったことをすべてありのまま詳細に語った。ビーシュマに掠奪されたこと、解放されたこと、そしてシャールヴァに拒絶されたことを一部始終。（一〇）

そこに、シャイカーヴァティヤという、誓戒を厳守する偉大なバラモンがいた。苦行の点で長老で、教典と森林書（ヴェーダ聖典の一つ）において師であった。（一一）偉大な苦行者である聖者シャイカーヴァティヤは、苦しんでため息をつき、悲嘆に暮れている貞節な少女にたずねた。（一二）

「可愛い娘よ、そのようであるなら、苦行者たちは何をすることができるか。隠棲所に住み、常に苦行を行じている、栄光ある偉大な苦行者たちでも……。（一三）」

王よ、しかし彼女は彼に答えた。

「私に好意をかけて下さい。私はここで出家をしたく存じます。難行苦行をいたします。（一四）愚かな私は、前生において、定めし悪業をなしたのでしょう。きっとこれはその報いです。（一五）苦行者たちよ、私は親族のもとにもどるわけには行きません。シャールヴァに拒絶され、追い出され、何の楽しみもなく……。（一六）私はここで、あなた方に苦行の道を教えていただきたいのです。罪障を離れた神のような方たちよ。私に哀れみをかけて下さい。（一七）」

その苦行者は〔他の不幸な人々の〕例をあげ、聖典の教えを引用し、道理を説いて、その少女を慰め、平静にさせた。そしてバラモンたちとともに、その件を承知した。（一八）

（第百七十三章）

ビーシュマは語った。——
それから、すべての高徳の苦行者たちはそれぞれの仕事についたが、その少女について「どのようにすべきか」と考えていた。(一)ある苦行者たちは、「父の家に連れて行くべきだ」と言った。ある最高のバラモンたちは、私を非難することを考えた。(二)ある人々は、シャールヴァ王のもとに行って要請すべきであると考えた。ある者たちは、「それはよくない。彼女は彼に拒絶されたのだから」と考えた。(三)誓戒を厳守するすべての苦行者たちは、再び告げた。

「可愛い娘よ、このような事情で、賢者たちは何をすることができるだろうか。(四)お嬢さん、ここで出家してはいけない。有益な言葉を聞きなさい。どうかここから父の家に帰りなさい。(五)王であるあなたの父は、次になすべきことをするであろう。美しい女よ、すべての美質をそなえたあなたは、そこで幸せに暮らすだろう。お嬢さん、あなたには父に勝る寄る辺は他にないから。(六)美しい顔色の女よ、女性にとって夫か父が寄る辺である。順境にある女にとって夫が寄る辺であるが、逆境にある女にとっては父親が寄る辺である。(七)出家というものは実に難儀なものである。特に繊細な女性にとっては。あなたは生まれつき王女で、しかも処女である。美しい女よ。(八)美しい顔色の令嬢よ、あなたが隠棲所に住めば多くの難点がある。父の家ではそういうことはなかろう。(九)」

それからバラモンたちは、その哀れな女に更に告げた。

「この人気のない深い森に、あなたが一人でいるのを見たら、王中の王たちがあなたに言い寄るであろう。それ故、そのように考えてはならぬ。(一〇)」

アンバーは言った。

「私はカーシ国の都に、父の家に、もどることはできません。私は親族たちに軽蔑されるでしょう。(一一)苦行者の方々、私はかつて子供のころには父の家に住みました。どうかお願いです。私は父のもとには帰りません。私は苦行者たちに守られて苦行を行じたいのです。(一二)来世においても、またこのような苦しみ、不幸を経験しないように。最高のバラモンたちよ。ですから私は苦行を行じます。(一三)」

ビーシュマは語った。——

このようにバラモンたちがあれこれと考えていた時、苦行を積んだホートラヴァーハナという王仙（王族出身の聖者）がその森を訪れた。(一四)そこですべての苦行者たちは、敬意を表し、「ようこそ」などと述べ、座席や水を出してその王をもてなした。(一五)そして彼が座り、休息し、〔一同の話を〕聞いている時、森に住む人々は少女に関する話を彼にした。(一六)実はその王仙はアンバーの母親の父であった。彼はアンバーとカーシ国王の話を聞くと、ふるえながら立ち上がり、その少女を膝に乗せて抱きしめて慰めた。バラタ族の王よ。(一七)彼は彼女に、この災難が起こった次第を、始めからすっかりたずねた。彼女は彼に一部始終を詳しく報告した。(一八)するとその苦行を積んだ王仙は嘆き悲しみ、心の中でなすべきことを考

えた。(一九) 彼は非常に苦しみふるえながら、その苦しむ少女に言った。

「可愛い娘よ、父の家に行ってはならぬ。私はお前の母の父親だ。(二〇) 私はお前の苦しみを断ち切ってやろう。娘よ、私を頼りにしなさい。娘よ、お前の心はそのように苦しんでいるが、もう十分だ。(二一) 私の言葉に従い、ジャマダグニの息子である苦行者ラーマ（パラシュラーマ）のもとへ行け。ラーマはお前の大きな苦しみと悲しみを取り除いてくれるだろう。彼は戦いにおいてビーシュマを殺すであろう。もしビーシュマが彼の言葉に従わないなら。(二二) その終末の火のように輝くブリグ族の最上者（ラーマ）のところへ行け。その大苦行者は、お前を平坦な道にもどしてくれるだろう。(二三)」

すると、何度も涙を流し、声を出して泣いていた彼女は、母方の祖父のホートラヴァーハナに、頭を下げておじぎをして言った。(二四)

「あなたの命令に従い、私は行きます。しかしその聖者は世間で有名な方です。今すぐに会うことができるでしょうか。(二五) そしてそのブリグ族の聖者は、どのようにして私の激しい苦しみをなくして下さるのですか。このことを聞きたいと思います。それからそこへ行きます。(二六)」

(第百七十四章)

ホートラヴァーハナは言った。

「娘よ、お前は大森林で、ジャマダグニの息子ラーマに会うであろう。激しい苦行を行じ、

約束を守る強力なラーマに。(一) 最高の山マヘーンドラにおいて、ヴェーダを知る聖仙たちやガンダルヴァや（半神）天女(アプサラス)たちは、常にラーマに仕えている。(二) どうかそこに行き、まず頭を下げて、その長年苦行を積み誓戒を堅持する聖者に挨拶してから、私のこの言葉を伝えるように。(三) そして可愛い娘よ、お前が望んでいることを彼に述べるように。もし私の名前をあげれば、ラーマはそれをすべてやるであろう。(四) 娘よ、ジャマダグニの息子である勇士ラーマは私の親友である。彼はすべての戦士たちの最上者である。(五)」

ホートラヴァーハナ王が少女にこのように告げている時、ラーマの親しい仲間であるアクリタヴラナが姿を現わした。(六) そこで、おびただしいすべての隠者たちは立ち上がった。スリンジャヤ族の老王であるホートラヴァーハナも立ち上がった。(七) それから森の住人たちは、お互いに礼儀正しく挨拶を交わしてから、アクリタヴラナを囲んで、いっしょに座った。バラタの最上者よ。(八) 王中の王よ、それから彼らは、色々な魅力ある話を語り合った。美しく、神聖で、愛と喜悦に満ちた話を。(九)

話が終わった時、偉大な王仙ホートラヴァーハナは、アクリタヴラナに、大仙のうちの最上者であるラーマについてたずねた。(一〇)

「あのヴェーダを知る者たちの最上者、栄光あるジャマダグニの息子には、今どこでお会いできるか。強力なアクリタヴラナよ。(一一)」

アクリタヴラナは答えた。

「王よ、ラーマはいつもあなたのことを話している。『スリンジャヤの王仙は私の親友であ

る』と。(二二)ラーマは明日の朝、ここに現われると私は思う。彼はあなたに会いたいと望んでここに来るから、あなたは彼に会えるだろう。(二三)ところで王仙よ、この娘はどのような目的で森に来たのか。誰の娘か。彼女はあなたの何なのだ。知りたいものだ。(二四)」

ホートラヴァーハナは言った。

「非の打ち所のない方よ、この美しい娘はカーシの王女で、私の娘の娘である。長女である彼女は、二人の妹とともに婿選び式に立っていた。(二五)カーシ国王の長女で、アンバーという名である。二人の妹はアンビカーとアンバーリカーである。苦行者よ。(二六)そこで王侯が娘のためにカーシの都に集まった。梵仙(バラモンの聖者)よ、そこに大きな祭典があった。(二七)それから、シャンタヌの息子である威光に満ちた強力なビーシュマが、諸王を尻目にかけて、三人の娘たちを奪ったということだ。(二八)そして、清い性質のビーシュマは、王たちをうち破り、娘たちとともに象の都(ハースティナプラ)に帰った。(二九)ビーシュマは彼女らをサティヤヴァティーに渡して、すぐさま、弟のヴィチトラヴィーリヤの結婚を行なうよう命じた。(三〇)

結婚式の準備が整えられるのを見て、この娘は顧問たちの中でビーシュマに言った。バラモンの雄牛よ。(三一)

『勇士よ、私は心の中でシャールヴァ王を夫に選びました。法(ダルマ)を知る人よ、他の男を想う私を結婚させるのはよくありません。(三二)』

その言葉を聞くと、ビーシュマは顧問たちと協議して結論し、サティヤヴァティーの意見

にも従い、彼女を解放した。(三三)ビーシュマに去ることを許され、この娘は喜んで、やがてサウバの国王シャールヴァ(のもとに行き)次のように言った。(三四)

『私はビーシュマに解放されました。私が法(ダルマ)にかなうようにして下さい(テクスト疑問)。王中の雄牛よ、私は前にあなたを心の中で選びました。(三五)』

しかしシャールヴァは、彼女の行為を疑って拒絶した。そこで彼女は苦行林にやって来た。強く苦行の生活を望んでいるのだ。(三六)そして私は、その家系が言及されたので、彼女を孫だと知ったのである。彼女は今、ビーシュマがその苦しみの原因であると考えている。(三七)」

アンバーは言った。

「尊者よ、私の母の父である、スリンジャヤのホートラヴァーハナ王が言った通りです。(三八)苦行者よ、私は自分の都にもどることはできません。人々の軽蔑を恐れ、また恥ずかしいからです。大仙よ。(三九)最高のバラモンよ、私は何よりも尊者ラーマが私に言われることを第一にすべきだと思います。尊者よ。(四〇)」

(第百七十五章)

アクリタヴラナは言った。

「美しい女よ、二つの苦しみのうち、どちらを癒したいと願っているのか。可愛い娘よ、私に言いなさい。(一)可愛い娘よ、もしサウバの国王が(結婚せよと)指示されるべきだとあ

なたが考えているなら、偉大なラーマはあなたの幸せを望んで、彼に指示するであろう。(二)また、もし英邁なラーマが戦いにおいて、〔ガンガー〕川の息子ビーシュマをうち破るのを見たいなら、ラーマはそれもやるであろう。(三)美しい微笑の女よ、ホートラヴァーハナとあなたの言葉を聞いてから、その次に何をなすべきか、それを今すぐ考えるべきである。(四)」

アンバーは言った。

「尊者よ、ビーシュマは事情を知らないで私を連れ去りました。バラモンよ、ビーシュマは私の心がシャールヴァにあるのを知らなかったのです。(五)あなたはそのことを考慮し、適切に判断して処置して下さい。(六)クルの虎ビーシュマに対し、あるいはシャールヴァ王に対し、またはその両者に対し、バラモンよ、適切なことを行なって下さい。(七)以上、私は苦しみの原因をありのままにお話ししました。尊者よ、適正に処置を講じて下さい。(八)」

アクリタヴラナは言った。

「美しい顔色の可愛い女よ、法(ダルマ)に関してあなたの言ったことは尤もだ。しかし私の言葉も聞きなさい。(九)もしビーシュマがあなたを象の都(ハースティナプラ)に連れて行かなかったら、シャールヴァはラーマにうながされて、あなたを頭を下げて受け入れるであろう。可愛い女よ。(一〇)だが美しい女よ、あなたは彼に勝ち取られ、連れて行かれたから、シャールヴァ王はあなたを疑っているのだ。美しい胴の女よ。(一一)ビーシュマは男らしさを誇り、勝ち誇っているから、あなたはビーシュマに復讐するのがよい。(一二)」

アンバーは言った。

「バラモンよ、私の心にもいつもこのような大望があります。戦いにおいてビーシュマを殺せないものかという。(一三)それが、ビーシュマであろうと、シャールヴァ王であろうと、過失があるとお考えの者を罰して下さい。強力な方よ。その者のために私が苦しんだのですから。(一四)」

ビーシュマは語った。――

バラタの最上者よ、彼らがこのように話している間にその日は過ぎ、寒くも暑くもない快適な夜も過ぎた。(一五)それから、威光で燃えるようなラーマが現われた。王よ、その聖者は髪を編み、綴(つづ)れをまとい、弟子たちに囲まれていた。(一六)彼は弓と刀と斧を持ち、元気いっぱいで、体にはほこりがついていなかった。王中の虎よ、彼はスリンジャヤの王(ホートラヴァーハナ)に近づいた。(一七)苦行者たちと、その苦行を積んだ王と、その哀れな少女は、彼を見て、すべて合掌して立ち上がった。(一八)彼らは接客用の飲食物により、そのブリグ族の聖者を注意深く接待した。ふさわしく歓待されて、彼は彼らとともに座った。(一九)バーラタよ、それからスリンジャヤの王仙とジャマダグニの息子とは、過去の話を語り合った。(二〇)そしてその話が終わった時、王仙は適切な機会に、ブリグ族の最上者である強力なラーマに、穏やかに重大な内容の言葉を述べた。(二一)

「ラーマよ、ここにいるのは私の娘の娘で、カーシ国王の娘である。主よ。彼女にはなすべ

きことがある。仕事に通じた方よ、それをありのままに聞きなさい。(二二)」
「よろしい、語りなさい」とラーマは彼女に告げた。そこで彼女は、燃える火のようなラーマのそば近くに行った。(二三)そしてその美しい女は、頭を下げてラーマの両足に挨拶し、蓮弁のような両手で触れてから前に立った。(二四)彼女は嘆き、涙で眼を曇らせて泣いた。そしてすべての寄る辺であるブリグの聖者に庇護を求めた。(二五)

ラーマは言った。

「王女よ、私はそなたに対して、そなたの祖父と同じような気持を抱いている。そなたの心の苦しみを言いなさい。そなたの言葉のようにしてあげよう。(二六)」

アンバーは言った。

「大誓戒を守る尊者様、私は今日、あなたに寄る辺を求めます。主よ、恐ろしい悲しみの泥海から私を救い上げて下さい。(二七)」

ビーシュマは語った。——

ラーマは彼女の容姿と若さと繊細さを見て、深く考えこんだ。(二八)「彼女は何を言うのであろうか」とブリグの最上者であるラーマは憐れみに満ち、長く考えていた。(二九)「語りなさい」とまたラーマに言われて、その美しい微笑の女は、すべてをありのままラーマに語った。(三〇)ラーマは王女の言葉を聞くと、結論して、美しい尻の女に言った。(三一)

「美しい女よ、私はクルの最上者ビーシュマに使いを遣る。ビーシュマは私の法(ダルマ)にかなった言葉を聞いてその通りにするであろう。(三二)もしビーシュマが私の言葉に従わないなら、私は戦いにおいて、武器の威光により彼と顧問たちを燃やすであろう。可愛い女よ。(三三)あるいは王女よ、そなたの考えが変わるなら、まず勇猛なシャールヴァ王にその仕事をやらせる。(三四)」

アンバーは言った。

「ブリグの聖者よ、まずビーシュマは、私の心がシャールヴァ王を愛していると聞くやいなや私を解放しました。(三五)そこで私はサウバ国王(シャールヴァ)のもとに行き、言いがたい言葉を述べました。しかし彼は、私の貞節を疑い、私を受け入れませんでした。(三六)ブリグの聖者よ、御自身の判断により、このすべてを考慮して、この場合適切なことをお考え下さい。(三七)大誓戒を守るビーシュマが私のこの災難の原因です。彼はあの時、私を力ずくで〔戦車に〕引き上げ、支配下に置いたのですから。(三八)勇士よ、ビーシュマを殺して下さい。彼のために私はこのような災難に陥り、最高に惨めになったのですから。ブリグ族の虎よ。(三九)ブリグの聖者よ、彼は貪欲で高慢で勝ち誇っている。ですからあなたが彼に復讐して下さることは正しいのです。非の打ち所のない方よ。(四〇)主よ、あの時ビーシュマが私を掠奪している時、その大誓戒を守る男を殺したいものだという願望が私の心に生じました。(四一)ですから非の打ち所のないラーマよ、今こそ私のその望みをかなえて下さい。勇士よ、ビーシュマを殺して下さい。インドラがヴリトラを殺すように。(四二)」

(第百七十六章)

ビーシュマは語った。——

王よ、ビーシュマを殺せと言われたラーマは、何度も催促する泣いている少女に言った。(一)

「美しい顔色のカーシの王女よ、私は自由に武器をとることができない。ブラフマン（ヴェーダ）を知っている人々以外のためには……。そなたのために他に何かできることはないか。(二)王女よ、ビーシュマとシャールヴァは私の言葉に従うであろう。欠点のない身体の女よ、それを私はするであろう。嘆くでない。(三)しかし私は、バラモンに要請された場合を除いては、決して武器をとることはない。美しい女よ。私はそのように誓っている。(四)」

アンバーは言った。

「尊者は私の苦しみを取り除いて下さい。それもビーシュマのせいです。主よ、私のために彼をすぐに殺して下さい。(五)」

ラーマは言った。

「カーシの王女よ、他のことを頼みなさい（テクスト疑問）。ビーシュマは尊敬に値するが、その彼が私の言葉により、頭を下げて、そなたの両足に触れるであろう。(六)」

アンバーは言った。

「ラーマよ、私に好意をかけたいなら、戦ってビーシュマを殺して下さい。あなたが約束されたことを、どうか真実のものにして下さい。(七)」

ビーシュマは語った。——

王よ、ラーマとアンバーの二人がこのように話し合っていた時、アクリタヴラナはラーマに言った。(八)

「勇士よ、庇護を求めて来た娘を捨てることはよくない。ラーマよ、戦いにおいて、阿修羅のように吼えるビーシュマを殺せ。(九)偉大な聖者ラーマよ、もしビーシュマがあなたに挑戦されれば、彼は『私は参りました』と言うか、またはあなたの言葉に従うであろう。(一〇)ブリグの聖者よ、そうすればこの娘の目的も成就し、あなたの誓いも真実になるであろう。勇猛な主よ。(一一)ラーマよ、あの時あなたはこの誓いをたてた。すべての王族（クシャトリヤ）を征服してから、あなたはバラモンたちに約束した。(一二)ブリグの聖者よ。『バラモン、王族、実業者（ヴァイシャ）、従僕（シュードラ）が、もし戦いにおいてバラモンの敵になるなら、私はその者を殺す』という。(一三)また、『私が生きている限り、恐れ、生きたいと願って庇護を求めて来た者たちを捨てることはできない。(一四)戦場に集結したすべての王族をうち破るような男でも、高慢な者は、これを殺すであろう』とも。ブリグの聖者よ。(一五)ラーマよ、あのクルの一族の長であるビーシュマは、そのような勝利者である。戦場において彼と会って戦いなさい。ブリグの聖者よ。(一六)」

ラーマは言った。

「最高の聖仙よ、私は前に誓ったことを覚えている。和解の道も探ってみよう。(一七)バラ

モンよ、カーシの王女が心に抱いている目的は重大なことだ。私自身で、娘を連れて、ビーシュマのいるところへ行こう。(一八) もし戦いを誇るビーシュマが私の言葉に従わないなら、私はその思い上がった男を殺すであろう。私はそう決意した。(一九) 私に射られた矢は人々の体の中にはとどまらない(貫通する)。王族との戦いにおいて、そのことはあなたも見たであろう。(二〇)」

ビーシュマは語った。——
ラーマはこのように言うと、出発する決意をし、ブラフマン(ヴェーダ)を唱える人々とともに立ち上がった。(二一) それから苦行者たちは、その夜をそこで過ごし、火中に供物を献じ、呪句を唱え、私を殺す意図をもって出発した。(二二) それからラーマは、バラモンの雄牛たちとその娘とともに、クルクシェートラに行った。バラタ族の大王よ。(二三) そして、ブリグの最上者に先導されたすべての偉大な苦行者たちは、サラスヴァティー川に着いて、そこに野営した。(二四)

(第百七十七章)

ビーシュマとラーマの激戦

ビーシュマは語った。——
王よ、それから三日後に、平坦な地に滞在した、大誓戒を守るラーマは、「私は到着した」

と私に使いをよこした。(一) 強力なラーマが国境に来たと聞いて、私は喜び、急いでその威光に満ちた聖者に近づいた。(二) 王中の王よ、私は牝牛を先に立て、バラモンや神のような祭官や宮廷祭僧たちに囲まれていた。(三) 栄光あるラーマは、私が来たのを見ると、接待を受け入れ、そして次のように言った。(四)
「ビーシュマよ、汝はどのように判断して、このカーシの王女が望まないのに彼女を連れて行き、そして更に解放したのか。(五) 汝により、この誉れ高い女は法(ダルマ)から堕ちた(異本による)。というのは、汝に触れられた彼女に、男は誰も近づけないから。(六) バーラタよ、彼女は汝に連れて行かれたということで、シャールヴァに拒絶された。それ故、私の指令により、彼女を受け入れなさい。バーラタよ。(七) 人中の虎よ、この王女が自己の法(スヴァダルマ)を行なえるようにしなさい。非の打ち所のない者よ、王である汝が、このように彼女を軽んじるのはふさわしくないことだ。(八)」
それから私は、彼が不満を抱いている(異本による)と見て、次のように言った。
「バラモンよ、私はもはや弟に与えることは決してできない。(九)『私はシャールヴァのもの』と彼女は前に私に告げたから。そこで私は彼女が去るのを許し、彼女はサウバの都に行ったのだ。(一〇) 私は恐怖や同情や貪りや利欲により王族の法(クシャトラダルマ)を捨てはしない。私はこの誓戒を守る。(一一)」
するとラーマは憤慨し眼を怒らせて、「クルの雄牛よ、もし私の言葉に従わないなら、お前と顧問たちを今すぐ殺すであろう」と、怒って何度も私に告げた。(一二―一三) 私は繰り返し

その敵を制するブリグの虎に好ましい言葉で懇願したが、彼は鎮まらなかった。（一四）そこで私は頭を下げてその最高のバラモンに敬礼して言った。

「あなたが戦いたいと望む理由は何ですか。（一五）私は子供の頃、あなたに四種の武器を教わりました。ブリグ族の勇士よ、私はあなたの弟子です。（一六）」

するとラーマは、怒りで眼を赤くして私に言った。

「ビーシュマよ、お前は私を師と知っているのに、私のために、このカーシの王女を受け取らないのか。クル族の王よ。（一七）クルの王子よ、もし受け取らないなら、お前に平安はない。勇士よ、彼女を受け取れ。自分の一族を守れ。彼女はお前によってまともな道から外され、夫を得ることができないのだ。（一八）」

敵の都城を征服するラーマがこのように言っているのに対し、私はこう答えた。

「もはやそのようにはなりません。梵仙よ、そのように努力しても無駄です。（一九）尊者ラーマよ、あなたは昔の師であると考えて、私はあなたにお願いしているのです。私は前に彼女を捨てました。（二〇）他の男を愛する雌蛇のような女を、誰が家に住まわせるか。大きな危険をもたらす女性の欠陥を知りながら……。（二一）輝きに満ちた人よ、たといインドラに脅されても、私は法（ダルマ）を捨てはしない。私をお許し下さい。あるいは、あなたのなすべきことをすぐにやって下さい。（二二）清らかな心の聖者よ、大知者よ、古伝説（プラーナ）の中に偉大なマルッタが歌った詩節が入っている。（二三）

『師が尊大であっても、すべきこととすべきでないことを知らなくても、誤った道にあっても、その命令に従うべきだ。（二四）』

そこで私は、師であるということで、愛情から、あなたを非常に尊敬した。しかしあなたは師にふさわしくふるまえない。そこで私はあなたと戦うであろう。（二五）私は戦いにおいて師を殺すことはできない。いやんやバラモンはなおさらである。そして更に、苦行を積んだ長老である者はなおさら殺せない。そこで私はあなたを大目に見たい。（二六）しかし、バラモンが戦闘において、王族（クシャトラ）のように武器を振り上げ、逃げることなく戦う時は、それを見て怒って彼を殺しても、バラモン殺しの罪になることはないと、法（ダルマ）において結論されている。（二七）苦行者よ、私は王族だ。王族の法に従う。相手のふるまいに応じて、相手に対しふるまう人は、非法に陥ることはなく、至福を得る。（二八）

実利（アルタ）や法に通達し、場所と時とを知る者が有益かどうかという疑惑に陥ったら、疑惑をなくすことにより、よりよい状態になる。（二九）この疑わしいことについて、あなたは不適切に（異本による）ふるまっているから、ラーマよ、私は激しい戦いにおいてあなたと戦うであろう。私の超人的な腕力と勇武とを見よ。（三〇）ブリグの聖者よ、このようなことになったが、私はできるだけのことをする。バラモンよ、クルクシェートラであなたと戦おう。偉大な聖者ラーマよ、望みのままに、決闘の準備をしなさい。（三一）その激戦において、あなたは私に幾百の矢を浴びせられて殺され、武器で浄化されて、あなたが前に獲得した世界（天界）に達するであろう。（三二）

戦いを好む者よ、そこであなたはクルクシェートラに引き返しなさい。苦行を積んだ勇士

よ、私はあなたと戦うために、そこに行くであろう。(三三) そこはかつてあなたが父親のために浄めの儀式をしたところだ。私もそこで、あなたを殺して浄めてあげよう。ブリグの聖者よ。(三四) 戦いに酔い痴れるラーマよ、あなたは急いでそこへ行きなさい。私はあなたの古ぼけた誇りを取り除いてあげる。自称バラモンよ。(三五) ラーマよ、あなたは何度も集会において自慢した。私は一人で世界中の王族をうち破ったと。しかし、聞きなさい。(三六) その時には、ビーシュマすなわち私のような王族は生まれていなかった。あなたの戦いによる誇りや戦いの願望を取り除けるような王族は……。(三七) しかし勇士よ、今や私が、敵の都城を滅ぼすビーシュマが生まれた。ラーマよ、私は戦いにおいてあなたの誇りを取り除くであろう。疑うことはない。(三八)」

(第百七十八章)

ビーシュマは語った。——

バーラタよ、それからラーマは笑って私に言った。

「ビーシュマよ、私と戦うことを望むとは、めでたいことだ。(一) クルの勇士よ、お前といっしょにクルクシェートラに行こう。お前の言ったことに従おう。敵を苦しめる者よ、そこに行こう。(二) ビーシュマよ、そこで、お前の母ガンガー（ガンジス）は、お前が幾百の矢を浴びせられて私に殺され、禿鷲や鷲(カンカ)や鴉の餌になるのを見るであろう。(三) 王よ、シッダやチャーラナ（いずれも半神の種類）に仕えられた女神は、今日私に殺された哀れなお前を見て泣くであろう。(四) バギーラタの娘である栄光ある（ガンガー）川はそのようになるにふさわしくない。愚かで戦いを望む病んだお前を生んだ女神は……。(五) ビーシュマよ、さあ行こう。今日、私と戦おう。クルの勇士よ、バラタの雄牛よ、戦車などすべてを取って来い。(六)」

敵の都城を征服するラーマがこのように言った時、王よ、私は頭を下げて彼に敬礼し、「そのようであれ」と告げた。(七)

ラーマはこのように言って、戦おうとしてクルクシェートラに行った。私は都に入って、サティヤヴァティーに報告した。(八) それから、私は吉祥の儀式を受け、母に祝福されて、バラモンたちに祝福と別れの言葉をもらった。栄光に満ちた者よ。(九) それから私は美しい銀の戦車に乗った。(一〇) それは白馬たちにひかれ、見事に装備され、乗り心地がよく、虎皮でおおわれていた。王よ、すべての道具をそなえていた。王よ、それは良家の出で、勇猛で、馬の論書を知り、熟練で、私の行動をしばしば見ている御者を乗せていた。私は美しい白い鎧をまとっていた。(一一—一二) バラタの最上者よ、そして私は白い弓を持って出陣した。私の頭上には白い傘がかざされていた。(一三) 王よ、私は白い払子(ほっす)（ヤクの尾）で扇がれていた。白衣をまとい、白いターバンを巻き、すべて白で飾られていた。(一四) 私は勝利の祈りに讃えられて象の都（ハースティナプラ）を出て、戦場であるクルクシェートラに近づいた。バラタの雄牛よ。(一五)

王よ、御者にかりたてられた馬たちは、思考か風のように速く、全速力で私を最高の戦場に運んだ。(一六) 私と栄光あるラーマはクルクシェートラに行き、戦うためにお互いに猛烈

に勇猛さを誇示した。王よ。(一七)私は偉大な苦行者ラーマの見える所に立ち、最高の法螺をとり、高らかに吹き鳴らした。(一八)王よ、それからその森に住むバラモン、苦行者、神々、聖仙の群が、その神聖な戦いを見物した。(一九)そして何度も、神々しい花輪が現われた。そして神聖な器楽が聞こえ、雲の群が出現した。(二〇)ラーマに従うすべての苦行者たちは、戦場を取り巻いて観客となった。(二一)

王よ、それから一切の生類の幸せを望む女神である私の母（ガンガー）が自ら現われて私に言った。

「あなたは何を求めているか。(二二)私はラーマのところへ行き、何度も彼に請願しよう。『弟子であるビーシュマと戦ってはならぬ』と。(二三)そして息子である王よ、あなたもバラモンのラーマに対し強情を張ってはいけません。戦場でラーマと戦うなどと嚇かしては。(二四)そして息子よ、あなたが戦おうと望むラーマは、王族（クシャトリヤ）を滅ぼし、その勇猛さはハラ（アシヴァ）に等しいと、あなたも知っている。(二五)」

そこで私は合掌して女神に敬礼し、婿選び式（スヴァヤンヴァラ）で起こったことをすべて告げた。バラタの最上者よ。(二六)そして私が前にどのようにラーマをなだめたか、またカーシの王女の以前の望みがどうであったかを。王中の王よ。(二七)すると私の母である大河の女神は、ラーマに近づき、私のためにそのブリグの聖仙に許しを乞うた。そして「弟子であるビーシュマと戦ってはなりませぬ」と言った。(二八)すると彼は請願している彼女に言った。

「ビーシュマの方を止めなさい。彼は私の願いに従わないから彼と戦うのだ。(二九)」

サンジャヤは語った。――

そこでガンガー（ガンジス）は、息子への愛情から、再びビーシュマの方にもどった。しかし彼は、怒りで眼を三角にして、彼女の言葉に従わなかった。(三〇)その時、ブリグの最上者である徳性ある大苦行者が現われた。そしてその最高のバラモンは、戦うために再び挑戦した。(三一)

（第百七十九章）

ビーシュマは語った。――

私は笑いながら、戦うべく身構えている彼に言った。

「戦車に乗っている私は、地面に立っているあなたと戦うことはできない。(一)強力な勇士よ、戦車に乗り、鎧をつけなさい。もし戦場で私と戦いたいと望むなら。(二)」

すると戦場でラーマも笑いながら私に言った。

「ビーシュマよ、大地が私の戦車だ。諸ヴェーダがそれをひく動物だ。駿馬のような……。(三)風が私の御者だ。ヴェーダの母たち（ガーヤトリー、サーヴィトリー、サラスヴァティー）が私の鎧だ。それらによりよくおおわれて、私は戦場で戦うであろう。クルの王子よ。(四)」

ドゥルヨーダナよ、約束を堅く守るラーマは私にこのように言いながら、おびただしい矢の群で、私をすっかりおおった。(五)

それから、私はラーマが神々しい戦車に乗っているのを見た。それは一切の武器をそなえ、美しく輝き、奇蹟的な形をしていた。（六）それは彼の意で作り上げられたものである。清浄で、広大で、都市のようであった。神的な馬たちをつなぎ、戦闘の準備を整え、黄金で飾られていた。（七）そして月の印をあしらった旗で飾られていた。そして弓を持ち、箙をつけ、弓籠手と弓懸をつけ、ヴェーダを知るラーマの無二の親友である強力なアクリタヴラナが、戦おうとするラーマの御者の役を務めていた。（八―九）ラーマは戦場で私に挑戦し、「突撃」と何度も叫び、私の心を奮い立たせた。（一〇）昇る太陽のように無敵の、王族を滅ぼしたその強力なラーマに対し、私は一騎打ちを挑んだ。（一一）

　それから私は、三射程（矢の届く距離の三倍）の距離に乗物を止めて、車から降り、弓を置き、徒歩で、その最高のバラモンの聖仙ラーマに敬意を表するために近づいた。そして彼に作法通りに挨拶し、次のような最高の言葉を述べた。（一二―一三）

「ラーマよ、あなたは私の目上で、より優れていて、徳性ある師であるが、私は戦場であなたと戦うであろう。主よ、私の勝利を祝福して下さい。（一四）」

　ラーマは言った。

「クルの最上者よ、繁栄を望む者はそのようになすべきである。というのは勇士よ、そのようにすることは、より優れた者と戦おうとする者たちの義務である。（一五）王よ、もしそのようにして近づいて来なければ、私はお前を呪うところだった。クルの王子よ、お前は冷静さを保ち、努力して戦場で戦え。（一六）しかし私はお前の勝利を祝福するわけにはゆかない。お前をうち破るためにここにいるのだから。行け。法に従って戦え。お前のふるまいは気に入ったぞ。（一七）」

　ビーシュマは語った。――

　それから、私は彼に敬礼し、急いで戦車に乗って、戦場で再び、黄金で飾られた法螺を吹き鳴らした。（一八）バラタ族の王よ、それから私と彼との戦いが行なわれた。お互いに勝利を望んで、それは何日も続いた。（一九）その戦いにおいて、まず彼は、鷲の羽根のついた九百六十本の火のように輝く矢を私に射かけた。（二〇）王よ、私の四頭の馬と御者は悩まされた。しかし、鎧を着た私は、平然として戦場に立っていた。（二一）

　バーラタよ、私は神々とバラモンたちに敬礼し、戦場に立っている彼に笑って言った。（二二）

「あなたは常軌を逸したが、私の師匠であることが尊敬に値する。しかしバラモンよ、法の集成における要件を私から聞きなさい。（二三）あなたの体にある諸ヴェーダ、あなたの偉大なバラモンの性質、非常に大きな苦行の力、私はそれらに関してあなたを攻撃しない。（二四）しかしあなたが採用した王族の法について攻撃するのである。というのは、武器を振り上げることにより、バラモンは王族の状態になるから。（二五）私の弓の力を見よ。私の腕の力を見よ。勇士よ、この私はあなたの弓矢を二つに断ち切ってみせる。（二六）」

　バラタの雄牛よ、私は彼に鋭い半月形の先の矢を射かけた。それにより彼の弓の先は断ち

切られ、地面に落ちた。(二七) 私はまた、鷲(カンカ)の羽根のついた九百の真っ直ぐの矢を、ラーマの戦車めがけて放った。(二八) それらの矢は、彼の体に刺さり、風に動かされて、血を吐いている蛇のようにふるえていた。(二九) 王よ、その全身は傷だらけになり、それらの傷口から血を流し、その時ラーマは鉱物を流出しているメール山のように見えた。(三〇) あるいはラーマは、冬の終わりに、赤い花房で飾られたアショーカ樹かキンシュカ樹のようであった。王よ。(三一)

それからラーマは怒って、他の弓をとり、黄金の羽根のついた鋭い矢を雨のように降らせた。(三二) それらの急所を断つ多くの恐ろしい矢は、猛烈な勢いで私に達して、蛇の猛毒のように私をふるわせた。(三三) しかし私は戦場において自分の身を立て直し、怒って、幾百の矢をラーマに浴びせた。(三四) それらの火や太陽のような、毒蛇のような鋭い矢に苦しめられ、ラーマは気を失ったかのようであった。(三五) そこで私は憐愍の情を催し、自分で自分を非難した。「何とひどいものだ。戦いとは。王族(クシャトリヤ)とは」と言いながら。バラタの雄牛よ。(三六) そして王よ、私は悲しみの激流に圧倒されて何度も言った。

「ああ、私は王族の仕事をして、何という悪事をなしたのか。(三七) 師である徳性あるバラモンをこのように矢で苦しめるとは。」

それからバーラタよ、私は更にラーマを攻撃しなかった。(三八)

その時、千の光線を持つ太陽は、大地を熱してから、昼の終わりに西山に沈んだ。そして我々の戦いは終わった。(三九)

(第百八十章)

ビーシュマは語った。——

王よ、それから私の熟練の御者は、自分と馬たちと私に刺さった矢を取り除いた。(一) 翌日、太陽が昇った時、馬たちは水浴し、歩きまわり、水を飲み、元気になった。そしてそれから戦闘が再開された。(二) 私が鎧をまとい急いで戦車に乗るのを見て、栄光あるラーマは戦車の準備をすっかり整えた。(三) それから私は、戦いを望んでラーマが近づいて来るのを見て、最高の弓を捨て、急いで戦車から降りた。(四) バーラタよ、私は前日と同じように挨拶してから再び戦車に乗り、戦いを望んで恐れることなくラーマの正面に立った。(五) 彼は私に矢の大雨を浴びせた。私もまた矢の雨を浴びせた。(六) 王よ、怒ったラーマは再び燃えるような口をした蛇のような矢を私に放った。(七) 私は急いでそれらを、鋭い半月形の先の矢で、空中において、幾百、幾千と、繰り返し断ち切った。(八)

それから、栄光あるラーマは、神的な武器を私に放った。私はより優れた業を示そうとして、矢を放ってそれらを防いだ。すると勇士よ、空中いたるところに大音響があがった。(九―一〇) それから私はラーマに対してヴァーユ(神風)の武器を用いた。それをラーマはグヒヤカ(鬼神の一。夜叉の類)の武器により迎撃した。バーラタよ。(一一) そこで私はアグニ(神火)の武器を加持して放った。主ラーマはそれをヴァルナ(天水)の武器により防いだ。(一二) 同様にして、私はラーマの神的な武器を防いだ。そして神聖な武器に通じ、敵を制する威光あるラーマも、私

の武器を防いだ。(二三) 王よ、それから最高のバラモンである強力なラーマは怒り、私を左側に見て（左まわりにまわり）、私の胸を射た。(二四) バラタの最上者よ、そこで私は最高の戦車に沈み込んだ。ラーマの矢に苦しみ、私がひるんだ時、御者は急いで一ゴールタ（牛の鳴き声が届く距離）離れた所に私を運んで行った。(二五) 私がひどく傷ついて気を失い、退却したのを見て、アクリタヴラナなど、ラーマに従っている者たちと、カーシの王女は、みな喜んで歓声をあげた。バーラタよ。(二六)

やがて意識を取りもどし、状況を知った私は御者に言った。
「御者よ、ラーマのいる所へ行け。苦痛は去り、私は戦いの準備をした。(二七)」
そこで御者は私をそこへ運んだ。最高に美しい馬たちは、踊るかのようで、風のように速く進んだ。クルの王よ。(二八) 私はラーマに近づくと、うち破ろうとして猛り立ち、猛る彼に矢の群を浴びせた。クルの王よ。(二九) ところがラーマは、その戦闘において、それらの真っ直ぐに飛ぶ矢に対し、それぞれに三本の矢を用いて速やかに迎撃した。(三〇) 戦場において、私のすべての鋭い矢は破壊され、幾百と、ラーマの矢によって二つに断ち切られた。(三一) そこで私はラーマをうち破ろうとして、更に一本の矢を放った。それは燃えるようで、強い輝きを放ち、カーラ（時間、破壊神）のような矢であった。(三二) ラーマはそれにしたたか撃たれて、矢傷の痛みで失神し、突然地面に倒れた。(三三)

バーラタよ、ラーマが地面に倒れた時、すべての人々は、あたかも太陽が落ちたかのように取り乱した。(三四) すべての苦行者やカーシの王女は非常に取り乱して、急いでラーマのそばに駆け寄った。(三五) 彼らはラーマを抱き、水で冷たくなった手により、また勝利の祝福により、徐々に彼を元気づけた。クルの王よ。(三六) するとラーマは錯乱して立ち上がり、弓に矢をつがえて私に言った。
「ビーシュマよ、立て。お前は御陀仏だ。(三七)」(三八ー五五略)
バラタの最上者よ、このようにして戦闘は続いた。しかし、黄昏が過ぎる頃、私の師（ラーマ）は引き上げた。(五六)

（第百八十一章）

ビーシュマは語った。――
バラタの最上者よ、私は翌日またラーマに会い、再び非常に恐ろしい激戦があった。(一) それから、来る日も来る日も、神的な武器を知る勇士、徳性ある主（ラーマ）は、多くの神的な武器を使用した。(二) バーラタよ、その激戦において、私は捨てがたい生命を賭して、それらの武器を迎撃兵器により破壊した。(三) 私の武器により多くの武器を破壊されて、威光に満ちたラーマは怒り、戦いに命懸けになった。(四)
偉大なラーマは私の矢に防ぎ止められ、恐ろしい形状の槍を投げた。それはカーラに放たれた槍のようで、流星のように燃え、その先端は光り輝き、その光輝で諸世界をおおっていた。(五) その終末の太陽のように輝いて飛来する槍を、私は輝く矢により、三つに断ち切って地面に落とした。するとと、芳香のする風が吹いた。(六) その槍が断ち切られた時、ラーマ

は怒りに燃え、十二の恐ろしい槍を投じた。バーラタよ、それらの形状は、光輝を放ち、高速であるので表現できなかった。（七）しかし私はそれらを見て動揺した。それらはすべて諸方から飛来する大火焔のようで、多様な形をし、恐ろしい光輝で燃え上がり、世界の終末に現われる十二の太陽のようであった。（八）王よ、それから襲来する矢の群を見て（異本による）、それをこちらの矢の群で断ち切り、私は戦場で十二の矢を放ち、恐ろしい姿のそれらの槍を破壊した。（九）（二〇―二四略）

やがて、矢の雨がやんだ時、私は矢の洪水を師（ラーマ）に浴びせかけた。ラーマはそれらの矢に傷つき、その身体から絶えず大量の血を流した。（二五）ラーマが矢の群に苦しみ、私も大そう深傷を負ったので、昼の終わり、太陽が西山にかかった時、その戦闘は終わった。（二六）

（第百八十二章）

ビーシュマは語った。——

王中の王よ、朝に汚れなき太陽が昇った時、ラーマと私の間に再び戦闘が行なわれた。（一）最高の戦士であるラーマは、動きまわる戦車に立ち、矢の雨を私に降らせた。インドラが山に矢を注ぐように。（二）私の親しい御者は、その矢の雨に撃たれ、私の心を悲しませつつ戦車の座席に倒れた。（三）そして私の御者は、非常に重い症状に陥り、矢の傷により、地面に倒れて失神した。（四）そしてラーマの矢に苦しんで御者は生命を捨てた。王よ、その時

ほんの一瞬の間、恐怖が私に入り込んだ。（五）王よ、御者が殺されて、私が放心して彼に矢を放っていた時、ラーマは死神のような矢を私に放った。（六）御者の不幸に際し嘆いている私に対し、ラーマは強力な弓を引き絞り、矢でしたたか私を撃った。（七）王中の王よ、血を喰うその矢は私の鎖骨の間に落ち、私とともに地面に落ちた。（八）バラタの雄牛よ、それからラーマは、私が死んだと思い、何度も雷雲のような音で叫び、高らかに歓声をあげた。（九）王よ、私が倒れていた時、ラーマは喜んで、従者たちとともに大声で叫んだ。（一〇）私のそばにいたクル族の人々と、戦いを見にそこにやって来た人々は、私が倒れた時、最高に嘆き悲しんだ。（一一）

王中の獅子よ、倒れた私は、その時、太陽か火のように輝く八人のバラモンを見た。彼らは戦場で、私をぐるりと取り囲み、その腕で私を抱いて立っていた。（一二）私はそれらのバラモンに守られて、地面に触れることはなかった。親族のようなバラモンたちに支えられて空中に立っていたのだ。空中で眠っているかのような私に、彼らは水滴をふりかけた。（一三）王よ、それからそのバラモンたちは私を抱いて、みなして一斉に繰り返して言った。

「恐れることはない。汝に幸いあれ。（一四）」

私は彼らの言葉で元気づき、突然立ち上がった。その時私は、最高の川である私の母が戦車の上に立っているのを見た。（一五）クルの王よ、大河の女神（ガンガー）が戦場において私の馬たちを御してくれたのだ。私は母の足下に平伏し、またアールシティセーナ（ビーシュマの伯父デーヴァーピのことであろう。デーヴァーピについては、五・一四七・一四―二八参照）に敬礼して、戦車に乗った。（一六）彼女は私の戦車と馬たちと用具を守

ってくれたのだ。私は彼女に合掌して、また別れを告げた。(一七) それから私は自ら風のように速い馬たちを操縦し、昼の終わりまでラーマと戦った。バーラタよ。(一八)(一九―二五略) やがて太陽はその光輪の光を弱め、西山に行き闇の群に没した。そして快い涼風の吹く夜が訪れた。そこで我々両者は戦いをやめた。(二六) 王よ、このようにして休戦があり、それからまた夜が明けると、来る日も来る日も非常に恐ろしい戦いがあった。それは二十日と更に三日続いた。(二七)

(第百八十三章)

ラーマ、ビーシュマと和解する

ビーシュマは語った。——

王中の王よ、それから私は夜中、バラモン、祖霊、すべての神々、夜行の生き物、夜の女神に敬礼してから床に入り、心の中で密かに考えた。(一―二)

「私とラーマとのこの最高に恐ろしくこよなく危険な戦闘は、もう何日も非常に長く続いている。(三) しかし私はこの激戦において、気力に満ちた強力なバラモンのラーマを破ることはできない。(四) 私が栄光あるラーマに勝つことができるかどうか、神々は好意をもって、今夜、私に示して下さい。(五)」

王中の王よ、それから私は、矢傷が痛むもので、右脇を下にして眠った。さて、夜も明けそうな頃のことである。(六) 私が戦車から落ちた時、立ち上がらせて支え、「恐れることはない」と励ましてくれたあのバラモンたちが、私の夢に現われ、私を取り囲んで告げた。クルの王よ、それを聞きなさい。(七―八)

「立ち上がれ、恐れることはない。ガンガーの息子よ、汝には何の危険もないのだ。人中の虎よ、我々は汝を守っている。というのは、汝は我々自身の体だから。(九) ラーマが戦いで汝に勝つことは決してない。バラタの雄牛よ、汝はまさに戦いにおいてラーマに勝つであろう。(一〇)

汝はこの愛用の武器を再認識するであろう。前生においても汝はこれを知っていたのだから。(一一) バーラタよ、これは一切を造った造物主(プラジャーパティ)の武器で、プラスヴァーパ(催眠)という名である。ラーマといえどもこれを知らない。地上においてこれを知る人はどこにもいない。(一二) 勇士よ、これを念じて、激しく用いなさい。王よ、ラーマはこの武器により死ぬことはない。(一三) 誇りを与える者よ、汝は決して罪悪に陥ることはない。ラーマは汝の矢に撃たれて眠るだけである。(一四) ビーシュマよ、汝はこのようにして戦場においてラーマをうち破ってから、また愛用のサンボーダナ(覚醒)という武器を用いて彼を立ち上がらせなさい。(一五) クル族の王子よ、明日戦車に乗り、このようにしなさい。我々は、眠った者も死んだ者も同一であると考える。(一六) 王よ、ラーマは決して死なない。それ故、出現したこのプラスヴァーパを使用しなさい。(一七)」

すべての最高のバラモンたちは、そう告げると姿を消した。王よ、それらの八名は、すべて同じような姿をし、輝かしい体を持っていた(これらの八名はヴァス神である。一・九一・二〇参照)。(一八)

(第百八十四章)

ビーシュマは語った。――

バーラタよ、夜が過ぎた時、私は目覚めた。そして夢のことを考え、私は最高に喜んだ。(一)バーラタよ、それから再び私と彼との戦闘が行なわれた。その激しい戦いは、一切の生類にとって身の毛がよだつものであり、驚異的であった。(二)ラーマは私に矢の雨を降らせた。私はそれを矢の網(群)で防いだ。バーラタよ。(三)〔両者とも一度ずつ気を失ってて倒れた(四―一四略)。〕

その時、大誓戒を守るラーマは意識を取りもどし、怒り恨み、最高の武器である梵天の武器(ブラーフマ)を呼び起こした。(一五)そこでそれを迎撃するために、私も最高の梵天の武器を用いた。それは宇宙紀(ユガ)の終末を出現させるかのように燃え上がった。(一六)それらの梵天の武器(ブラフマ・アストラ)は、ラーマにも私にも達することなく、中間で衝突した。バラタの最上者よ。(一七)そこで空中に一面、光輝の塊が生じた。そしてすべての生類が苦しんだ。王よ。(一八)バーラタよ、その武器の光輝に悩まされ、聖仙、ガンダルヴァ、神たちは最高の苦しみを味わった。(一九)それから大地は、山や森や樹もろとも震動し、生類は苦しんで最高に嘆き悲しんだ。(二〇)王よ、空は燃え上がり、十方は煙った。虚空を飛ぶものたちは、その時、空中にいることができなくなった。(二一)神や阿修羅や羅刹のいる世界が「ああ、ああ」と嘆声を上げていた時、私は「今がチャンスだ」と思い、ヴェーダを説く人々(バラモンたち)の言葉に

従い、気に入りの武器プラスヴァーパを用いようと望んだ。バーラタよ、私が心の中でその武器のことを考えると、それはたちまち出現した。(二二―二三)

(第百八十五章)

ビーシュマは語った。――

王よ、それから天空に大音声があがった。

「クルの王子ビーシュマよ、プラスヴァーパを放ってはならぬ。(一)」

しかし私はその武器をラーマに対して用いるところであった。その時ナーラダは、プラスヴァーパを用いようとしている私に告げた。(二)

「クルの王子よ、天空に神々の群が立っている。彼らは今、あなたを制止している。プラスヴァーパを用いてはならぬ。ラーマは苦行者であり、敬虔なバラモンであり、あなたの師である。クルの王子よ、彼を軽んじるようなことは決してしてはならぬ。(三―四)」

それから私は、あの八人のヴェーダを説く人(バラモン)が空に立っているのを見た。王中の王よ、彼らは私に微笑し、徐(おもむ)ろに告げた。(五)

「バラタの最上者よ、ナーラダの言った通りにしなさい。それが世のために最もよいことだから。バラタの雄牛よ。(六)」

そこで私はその戦いにおいて、眠りを催させるその武器(プラスヴァーパ)を撤回し、梵天の武器を作法通りに輝かせた。(七)王子よ、ラーマは怒ったが、その武器が撤回されたのを見て、

突然、次のような言葉を発した。

「非常に愚かな私は、ビーシュマに敗れた。（八）」

それからラーマは父（ジャマダグニ）と、父の父、そのまた父たちを見た。彼らは彼を取り囲んで立っていた。そして彼らは、その時、彼をなだめながら告げた。（九）

「わが子よ、もう決してこのような無謀なことをしてはならぬ。特にビーシュマのような王族と交戦するなどという……。（一〇）ブリグ族の聖者よ、戦いというものは王族の法である。バラモンにとっては、ヴェーダ学習と誓戒を履行することが最高の財産である。（一一）何かの機会には、我々は武器をとることを説いた。そして汝はその恐ろしい仕事を実行した。（一二）わが子よ、ビーシュマと汝の合戦は、もうこれで十分である。勇士よ、この戦闘から手を引け。（一三）弓を持つのもこれが最後だ。汝に幸あれ。無敵のブリグの勇士よ、弓を捨てよ。苦行を行じなさい。（一四）このシャンタヌの息子ビーシュマは、すべての神々に制止され、『この戦いから手を引け』とうながされた。（一五）そして何度も言われた。『師であるラーマと戦ってはならぬ。そなたが戦いにおいてラーマに勝つことは適切ではない。クルの王子よ。ガンガーの息子よ、戦場でバラモンに敬意を払いなさい。（一六）』

我々は汝の目上である。それ故、汝を止めたのである。ビーシュマはヴァス神群の一体である。息子よ、汝は幸いなことに生きている。（一七）ガンガーとシャンタヌの息子であるこの誉れ高いヴァス神を、どうして汝が戦いにおいて破ることができるか。ラーマよ、退却せよ。（一八）

パーンドゥの最強の息子アルジュナは、インドラの息子であり、強力で、勇猛な造物主、永遠なる古の神ナラである。（一九）気力ある彼は、三界において『左ききの勇士』（サヴィヤサーチン）として有名である。そのアルジュナが時至ってビーシュマを殺す者であると自存者（梵天）は定めたのである。（二〇）」

祖霊たちにこのように告げられたラーマは、祖霊たちに次のように言った。

「戦いにおいて退却しないというのが私の守っている誓戒である。（二一）私はかつて戦いの最中に退却したことは決してなかった。御先祖たちよ、どうか川の息子（ビーシュマ）がこの戦いから退却してもらいたい。私は決してこの戦いから退却しないであろう。（二二）」

王よ、するとリチーカをはじめとし、ナーラダをともなった聖者たちは集まって、こぞって次のように告げた。（二三）

「わが子よ、この戦いから退却しなさい。最高のバラモンを敬いなさい。」

私は王族の法を考慮して、彼らに「それはできない」と答えた。（二四）これはこの世における私の誓戒である。私は決して敵に後ろを見せて戦いから退却しない。背後から矢で射られるようなことはしない。（二五）私は貪欲、優柔不断、恐怖から、または利益のために、永遠の法を捨てはしないと、そう決意している。（二六）」

王よ、それからナーラダをはじめとするすべての聖者たちと、私の母のガンガーが、戦場の中央に進み出た。（二七）しかし私は、前と同じように弓矢を持ち、決意も堅く、戦うべく戦場に立っていた。すると彼らはこぞって、ブリグ族の勇士ラーマに再び告げた。（二八）

「バラモンの心はバターでできているかのようだ。ラーマよ、和解せよ。ラーマよ、ラーマよ、最高のバラモンよ。この戦闘から手を引きなさい。というのは、汝はビーシュマを殺すことができず、またビーシュマは汝を殺すことができない。ブリグの聖者よ。(二九)」

このように告げて、彼らすべては戦場を封鎖した。そしてラーマの祖霊たちは、彼に武器を捨てさせた。(三〇)

その時、私は再びあの八人のヴェーダを説く人々(バラモンたち)を見た。彼らは輝かしく、八つの星が昇ったかのようであった。(三一)彼らは戦場に立っている私に愛情をこめて言った。

「勇士よ、師のラーマのもとに行きなさい。世界に有益なことをしなさい。(三二)」

ラーマが親しい者たちの忠告により手を引いたのを見て、私も、世界に有益なことをしようとして、その忠告を受け入れた。(三三)私はひどく傷ついていたが、ラーマのもとに行き敬礼した。偉大な苦行者ラーマも、愛情により微笑して私に言った。(三四)

「この世で、地上を行く王族(クシャトリヤ)で、お前に等しい者は誰もいない。ビーシュマよ、行くがよい。この戦いで、私はお前に非常に満足した。(三五)」

ラーマは私の見ている前で、例の少女(アンバー)を呼び、苦行者たちの中で、悲し気な声で次のように告げた。(三六)

(第百八十六章)

ビーシュマを殺すために苦行するアンバー

ラーマは言った。

「美しい女よ、すべての世界の者たちが見ている前で、私は全力をあげて大なる勇武を発揮した。(一)しかし私は戦いにおいて、最高の戦士ビーシュマに勝つことはできなかった。最高の武器を徹底的に用いたのに。(二)これが私の最高の能力だ。ありったけの力だ。可愛い女よ、望みのままに行くがよい。そなたのために他に何か私ができることはあるか。(三)他ならぬビーシュマを頼るがよい。そなたにとって、他に寄る辺はないから。ビーシュマは偉大な武器を放って私をうち破ったのだ。(四)」

ビーシュマは語った。――

気高いラーマは、このように告げると、ため息をついて沈黙した。その時、その少女はラーマに言った。(五)

「尊者よ、あなた様の言われた通りです。この高邁なビーシュマは、戦いにおいて、神々にすら敗れることはありません。(六)あなたは私のためになすべきことを能力の限り、気力の限りなさって下さいました。その戦いにおいて、力と種々の武器とを出し惜しみすることなく。(七)しかし結局、戦いにおいてビーシュマに勝つことはできませんでした。しかし私は、再びビーシュマのもとに行くつもりは毛頭ありません。(八)苦行者よ、私はむしろ戦いにおいてビーシュマを自分自身で倒せるような場所に行きます。ブリグの勇士よ。(九)」

少女はこのように告げると、怒りで眼を曇らせて立ち去った。私を殺すことを考え、苦行

する決意をして。(一〇) それからブリグの最高者ラーマは、聖者たちとともに、私に別れを告げ、マヘーンドラ山に引き返して行った。バーラタよ。(一一) 大王よ、そこで私は戦車に乗り、バラモンたちに讃えられて都に入り、母のサティヤヴァティーに一部始終を報告した。するると彼女は喜んで私を祝福してくれた。(一二)

私は例の少女の動静を探るよう、賢明な情報員たちに指令した。私に起用された情報員たちは、私のためによかれと思い、毎日のように、彼女の行方、言葉、動作を報告した。(一三) その少女が苦行の決意をして森へ行った時から、私は苦しみ悩み、平常心を失ったかのようになった。(一四) というのは、わが子よ、王族(クシャトリヤ)は誰も戦いにおいて、力によって私を破ることはできない。ただし、苦行により誓戒を厳守する、ブラフマン(ヴェーダ)を知る者は別だ。(一五) 王よ、私は恐れて、ナーラダとヴィヤーサにこのことを告げた。すると二人は私に言った。(一六)

「ビーシュマよ、カーシの王女についてあなたは悩む必要はない。誰が人間の努力により運命を回避することができるか。(一七)」

ところで大王よ、その少女は隠棲所の集団に入り、ヤムナー川の岸に住み、超人的な苦行を行じた。(一八) その苦行女は、絶食して痩せ、肌は荒れ、髪を編み、汚れにまみれ、六カ月の間風のみを食べ(完全に断食し)、樹幹のように動かなかった。(一九) その美しい女は、また更に一年間、ヤムナーの岸にいて、絶食し、水中に立って過ごした。(二〇) そして更にもう一年、激しく怒った彼女は足の爪先で立ち、一枚の枯葉だけで過ごした。(二一) このようにして、

彼女は十二年間、天地を熱し続けた。親族たちが彼女を制止したが、決してやめさせることができなかった。(二二)

それから彼女はシッダやチャーラナ(いずれも半神族)の住むヴァッツァブーミに行った。それは清浄な戒行を守る偉大な苦行者たちの隠棲所であった。(二三) そこで、カーシの王女は日夜、清浄な場所で沐浴し、気の向くままに歩きまわった。(二四) クルの大王よ、ナンダの隠棲所、ウルーカの清浄な隠棲所、チャヴァナの隠棲所、梵天の場所、神々の祭場プラヤーガ、神々の森、ボーガヴァティー、カウシカ(ヴィシュヴァーミトラ)の隠棲所、マーンダヴィヤの隠棲所、ディリーパの隠棲所、ラーマの池、パイラガールギヤの隠棲所を、彼女は歩きまわった。(二五―二七) 王よ、カーシの王女はこれらの聖地で沐浴し、激しい苦行を行なった。(二八)

クルの王よ、私の母(ガンガー)は水から上がって彼女にたずねた。

「可愛い女よ、あなたは何のために身を苦しめているのです。真実を私に言いなさい。(二九)」

王よ、するとその非の打ち所のない女は合掌して女神に告げた。

「魅力的な眼の方よ、ラーマは戦いにおいてビーシュマに勝てませんでした。(三〇) 他の誰が、弓矢をとるビーシュマに勝つことができるでしょうか。そこで私は、ビーシュマを殺すために、非常に恐ろしい苦行を行じています。(三一) 女神よ、私はビーシュマを殺すべく、地上をさすらっています。この誓戒の果報が、私の他生においてありますように。(三二)」

するると川の女神は告げた。

「美しい女よ、あなたのふるまいは曲っている。欠陥のない身体をした女よ、あなたはその願望を達成することはできない。(三三)カーシの王女よ、もしビーシュマを殺すために誓戒を行なっているなら、そしてあなたが誓戒を守って身体を捨てるなら、美しい女よ、あなたは雨季にしか水のない曲りくねった川になるであろう。(三四)その雨季にのみ流れる川は、沐浴に適さず、人に知られず、八カ月は干上がり、恐るべき鰐がいて、おぞましく、すべての生き物に恐怖を催させる。(三五)」

王よ、私の美しく気高い母は、微笑を浮かべ、このように告げてカーシの王女を止めた。(三六)しかしその美しい顔色の少女は、ある時は八カ月、ある時は十カ月の間、水さえもとらなかった。(三七)そしてクルの王よ、カーシの王女は、聖地を求めてあちこち遍歴していたが、やがて再びヴァッツァブーミにもどった。(三八)彼女はヴァッツァブーミで、アンバー川として知られる川となった。パーラタよ。その川は雨季にのみ流れ、鰐に満ち、沐浴に適さず、曲りくねっていた。(三九)王よ、ところがその少女は苦行の力により、ヴァッツァにおいて、半身のみ川になり、半身は少女のままであった。(四〇)

(第百八十七章)

ビーシュマは語った。——

すべての苦行者たちは、彼女が決意も堅く苦行しているのを見て、「娘よ、どうしようと言うのか」と言って彼女を止めた。(一)すると少女は、苦行に関して長老である聖仙たちに告げた。

「私はビーシュマに拒絶されました。そして夫〔となるべき人〕への義務(ダルマ)を妨げられました。(二)苦行者たちよ、私は天界へ行くためではなく、彼を殺すために潔斎しております。ビーシュマを殺して平安になりたいと決意しています。(三)ビーシュマのために、この永遠に続く不幸な生活があります。そして彼のために、夫と暮らす世界を奪われ、今は女でも男でもありません。(四)そのビーシュマを戦いにおいて殺さないうちは引き下がりません。苦行者たちよ、これは私の心願です。(五)私は女であることがつくづく厭になりました。男になりたいと決意しました。私はビーシュマに復讐します。もう止めることはできません。(六)」

槍を持つウマーの夫である神(シヴァ)は、偉大な聖仙たちの中で、自らの姿をとってその美しい女の前に現われた。(七)彼女は願いをかなえてもらい、私をうち破ることを願った。神はその気高い女に、「汝は殺すであろう」と告げた。(八)そこでその少女は再びルドラ(シヴァ)に言った。

「神よ、女の私がどうして戦いにおいて勝利することができるでしょうか。ウマーの夫よ、私は女であるから、私の心は猛々しくありません。(九)生類の主よ、あなたはビーシュマが敗れると約束して下さいました。雄牛の旗標を持つ方よ、その約束が真実になり、私が戦場においてビーシュマに会って殺すようになさって下さい。(一〇)」

雄牛の旗標を持つ偉大な神(マハーデーヴァ)は少女に告げたという。

「可愛い女よ、私が述べた言葉は偽りにはならぬ。その通りに実現するであろう。(二一)汝は男性になって、戦いにおいてビーシュマを殺すであろう。そして汝は、他の身体をとっても、すべてを記憶しているだろう。(二二)汝は偉大な戦士として、ドルパダの家に生まれるであろう。手練の武技を発揮し、めざましく戦う戦士として尊敬されるようになろう。(二三)美しい女よ、すべて予言通りになるだろう。若干の時間の経過の後に、汝は男になるであろう。(二四)」

雄牛の旗標を持つ、大威光あるカパルディン(シヴァ)は、このように告げると、バラモンたちが見ている前で、忽然と姿を消した。(二五)

それから、その美しい顔色をした、非の打ち所のない女は、大仙たちが見ている間、その森から薪を集めて来た。(二六)そして非常に大きな薪の堆積を作り、火をつけた。火が燃え上がった時、彼女は怒りに燃える心により、「ビーシュマを殺すため」と言って火中に入った。王よ、カーシの王女はヤムナー川のほとりでこのように行動した。(二七―二八)

(第百八十八章)

王女シカンディン、妻を娶る

ドゥルヨーダナはたずねた。

「ガンガーの息子よ、シカンディンは最初は女であったが、どのようにして男になったのか。戦いにおける最上者である祖父よ、それを私に語って下さい。(一)」

ビーシュマは語った。――

王中の王よ、ドルパダ王の愛妻である王妃は子供を産まなかった。(二)大王よ、この頃、ドルパダ王は息子を得るために、シャンカラ(シヴァ神)を満足させようとしていた。(三)我々を殺すために息子が欲しかったのだ。彼は決意して、恐るべき苦行を行なった。「偉大な神よ、私に娘でなく息子が生まれますように」と言って(異本による)。(四)「尊い神よ、ビーシュマに復讐するために私は息子を望みます。」〔と彼は頼んだが、〕神の中の神は、「汝に女男が生まれるであろう」と告げた。(五)

「王よ、引き返しなさい。それは決して別様にはならぬ。」

彼は都に帰り、妻に言った。(六)

「王妃よ、私は息子を得るために大いに努力して苦行した。しかしシヴァは、娘が生まれ男になるであろうと予言した。(七)私は何度も懇願したが、シヴァは『それは運命である。それは別様にはならない。そうなるべく定められているのだ』と告げた。(八)」

それから、ドルパダ王の気高い妻は節制し、受胎に適した時期にドルパダと交わった。(九)そして彼女は、運命が定めたように、ドルパダにより妊娠した。王よ、ナーラダが私に話したことだが……。(一〇)それから蓮の眼をした王妃は胎児を守り、強力なドルパダ王は、息子に愛着して、その愛妻に幸せな気持で奉仕した。クルの王よ。(一一)やがて彼女は、息

子のいないドルパダ王のために、すばらしい姿の娘を産んだ。王よ。(二二) その誉れ高い女は息子のいないドルパダ王のために、「私に息子が生まれた」と一般に知らせた。王中の王よ。(二三) 王よ、それからドルパダ王は、その「隠された娘」に、息子であるかのように、すべての息子のための儀式を執り行なわせた。(二四) ドルパダの妃は、ありとあらゆる努力をして、息子だと言って、その秘密を守った。都においては、ドルパダ以外には誰も彼女のことを知らなかった。(二五) 王は驚異的な威光を持つ神の言葉を信じて、彼女が娘であることを隠し、男であると言っていた。(二六) 王はその子のために、男児のように、作法通り誕生式などすべての儀式を行なわせた。その子はシカンディン(男子の名)と呼ばれた。(二七) しかし私だけは、スパイにより、ナーラダの言葉により、真相を知っていた。そしてまた、アンバーの苦行とあの神の予言とによっても……。(二八)

(第百八十九章)

ビーシュマは語った。——

ドルパダは娘のすべての行為に関し(異本による)努めて注意を払った。娘は書道などや技芸に通達した。また弓術に関してはドローナの弟子であった。王中の王よ。(一) 大王よ、彼(彼女)の美しい顔色の母親は、娘が息子であるかのように、妻を娶らせるようにと王をせきたてた。(二) ドルパダはその娘が青春期に達したのを見て、やはり女だと考え、妻とともに心配した。(三)

ドルパダは言った。

「私の娘は年頃になった。それが心配をかきたてる。私はシヴァの言葉により、彼女が女であることを隠して来た。(四) 王妃よ、それは決して偽りにはならないだろう。三界を創造した神が、どうしてそれを偽りにすることができるか。(五)」

妻は言った。

「王よ、もしよろしければ申し上げます。私の言葉をお聞きなさい。聞いたらそれを実行して下さい。プリシャタの息子よ。(六) 王よ、作法通りに妻を娶らせましょう。神の言葉は真実になると私は確信します。(七)」

ビーシュマは語った。——

その夫婦はそのように決定して、ダシャールナの王の娘を嫁に選んだ。(八) 王中の獅子であるドルパダ王は、すべての王の家柄を調べて、ダシャールナの王の娘をシカンディンの妻として選んだのであった。(九) ダシャールナの王はヒラニヤヴァルマンという名であった。その王は娘をそのシカンディンに与えた。(一〇) そのダシャールナ国の王であるヒラニヤヴァルマンは、偉大で無敵な気高い王で、大軍を擁していた。(一一)

最高の王よ、結婚式が行なわれた時、その王女は青春に達していた。一方、乙女であるシカンディニー(シカンディンの女性形)も同様であった。(一二) 妻を娶ったシカンディンはカーンピリヤ(パーンチャーラの首都)にもどった。妻はしばらくの間、その乙女(シカンディン)が女であることに気づかなかった

という。(二三) しかし、やがてヒラニヤヴァルマンの娘は、パーンチャーラの王女シカンディニーが娘であることを知り、恥じらいながらも、乳母や友たちに知らせた。(二四) 王中の虎よ、ダシャールナから来た乳母たちは非常に悩み、悩んだあげく国もとに使いを出した。(二五) 使者はダシャールナ国王にその詐欺行為をすべてありのまま報告した。国王は大いに怒った。(二六) 大王よ、シカンディンの方は、王家において、女であることを隠し、機嫌よく男のようにふるまっていた。(二七)

バラタの雄牛よ、王中の王よ、ヒラニヤヴァルマンは報告を聞いて数日の間、怒りのあまり苦しみ悩んだ。(二八) それから、ダシャールナの王は激しい怒りにかられ、ドルパダの王宮に使者を送った。(二九) ヒラニヤヴァルマンの使者はドルパダのもとに着くと、一人で、王を一隅に連れて行き、密かに告げた。(三〇)

「非の打ち所のない王よ、ダシャールナの王はあなたに欺かれ、その侮辱により怒って、あなたに次のように告げます。(三一)

『王よ、あなたは私を確かに侮辱した。私はあなたに欺かれた。あなたは血迷って、自分の娘のために私の娘を嫁に望んだのだ。(三二) 悪党め、今やその詐術の果報を受けるがよい。私はあなたと家族と顧問たちを根こぎにしてやる。覚悟せよ。(三三)』」

(第百九十章)

性転換したシカンディン

ビーシュマは語った。――

王よ、捕えられた盗賊のように、ドルパダが使者にこう告げられた時、彼の口からは言葉が出て来なかった。(一) 彼はとりなす親族たちにより、甘い言葉を述べる使者たちにより、「そうではない」と伝えるなど、最大の努力をした。(二) ヒラニヤヴァルマン王は、パーンチャーラ王女が娘であると、再び事実を確かめると、急いで出陣した。(三) それから、無量の力を有する友邦たちに使いを出し、乳母たちに報告されたその娘に関する詐術を知らせた。(四) それから、その最高の王は軍隊を召集して、ドルパダに対して進軍しようと決意した。バーラタよ。(五) そして、ヒラニヤヴァルマン王は、盟友たちとともにパーンチャーラの王に対する対策を協議した。王中の王よ。(六) その偉大な王たちの結論は次のようであった。

「王よ、もしそれがシカンディニーという少女であったら、パーンチャーラ国王を捕えて家から(異本による)追い出そう。(七) 他の王をパーンチャーラの国王にして、ドルパダ王とシカンディンを殺そう。(八)」

ヒラニヤヴァルマン王はそれを知ると、再び侍従を使者としてドルパダに送った。

「私はあなたを殺す。覚悟せよ。(九)」

(一〇) ドルパダ王はその本性からして臆病であり、罪も犯したので、激しい恐怖にかられた。(一一) ドルパダ王は悲嘆に暮れ、ダシャールナ国王に使者を送り、妻と会って密かに話しかけた。(一二) 彼の心中には大きな恐怖が入りこみ、悲嘆に暮れ、パーンチャーラ国王は愛しいシカンディンの母に言った。(一三)

「私の親戚である非常に強力なヒラニヤヴァルマン王は怒って、軍隊を率いて私に対して進軍して来る。(二三) 愚かな私は、今、この娘についてどのようにすればよいか。お前の息子のシカンディンは、娘であると疑われた。(二四) あの王はそれは事実だと結論して、自分は欺かれたと考え、盟友をともない、軍隊を率いて、私を根こぎにしようと望んでいるという。(二五) 美しい尻の美しい女よ、この場合何が真実で何が虚偽であるか。美しい女よ、言ってくれ。お前の言うことを聞いたら、その通りにするであろう。(二六) 私は危機に陥った。そしてこの少女シカンディニーも、お前も、非常に危険なことになった。美しい顔色の王妃よ。(二七)」(以上は「密かに」妻に告げたことである。以下は、「公に」言ったことである。)

「問うている私に、お前はみなを救うために真実を告げてくれ。美しい尻の女よ。私はこの件に関し言われた通りにする。美しい微笑の女よ。シカンディンについて心配することはない。私は真実に即して対処するであろう。(二八) 美しい尻の女よ、息子のために行なうべき儀式によって私は騙されていた。そして私はダシャールナの国王をも欺いたことになる。王妃よ、言ってくれ。私は善処するであろう。(二九)」

王は事実を知っていたのだが、わざと敵に知らせるために、公には王妃にこう言ったのである。王妃は王に答えた。(三〇)

(第百九十一章)

ビーシュマは語った。——

強力な王よ、それからシカンディンの母は、娘のシカンディニーについて、夫に真実をありのままに告げた。(一)

「王よ、私は息子がなかったので、ライバルの妃たちを恐れ、娘のシカンディニーが生まれた時、男だと報告したのです。(二) 最高の人よ、私への愛情からあなたもそれを喜び、その娘のために息子のための儀式を行ないました。王中の雄牛よ。そしてあなたは、ダシャールナ国王の娘を嫁に迎えました。(三) そしてあなたは、以前、神の言葉の内容を示して、『娘が生まれ男になるであろう』と言いました。そこで私は楽観していたのです。(四)」

ドルパダ・ヤジュニャセーナはそれを聞くと、すべての事実を顧問官たちに知らせた。王よ、それから王は臣民を守るための適切な政策を色々と協議した。(五) 自分は欺いたが、それでもダシャールナ国王と姻戚関係があると考えて、彼は協議に専念し、妥当な結論に達した。王中の王よ。(六)

王中の王であるバーラタよ、その都市は緊急時に対し、自然環境により守られていたが、彼はそれに全面的に防備をほどこし、更に守りを堅固にした。(七) しかし、王と王妃は、ダシャールナ国王との不和によりこの上なく悩んでいた。バラタの雄牛よ。(八)「どうしたら親戚との大きな諍いを避けることができるか」と考えて、彼はその時、心中で神々に祈った。(九) 王よ、その時、神に専念し崇拝している彼を見て、王妃は次のように言った。(一〇)

「神々に帰依することは、常に善き人に讃えられる(異本による)。苦海に沈み強く信仰している我々にとっては、それはいっそう好ましい。(一一) すべての神々を供養して、(バラモンたち

に）多くの謝礼を払いましょう。ダシャールナ国王を撤退させるように、護摩を焚きなさい。（二二）彼が戦わないで引き返すように、心の中で考えなさい。王様、神々の恩寵により、すべてが実現するでしょう。（二三）大きい眼の王よ、この都が滅びないように、顧問官たちと協議した通りに実行しなさい。（二四）天命に人事が加われば、大成功を収めるでしょう。王よ。しかしこの二つが相互に矛盾すれば成功はあり得ません。（二五）それ故、大臣たちとともに都のために適切な処置をとり、それからお望みのままに神々を崇拝しなさい。王よ。（二六）」

夫婦がこのように話して悲嘆に暮れているのを見て、気高い娘のシカンディニーは恥ずかしく思った。（二七）私のためにこの二人は悩んでいると考え、彼女は自殺する決心をした。（二八）彼女はひどく悲嘆に暮れて、家を出て人のいない密林に行った。（二九）王よ、その森は、神通力のあるストゥーナカルナという夜叉に守られていた。その夜叉を恐れて、人々はその森を避けていたのである。（三〇）そこに、ストゥーナの白い漆喰を塗った家があった。そこは米を炒める煙に満ち、高い壁とトーラナ門をそなえていた。（三一）

王よ、ドルパダの娘シカンディニーはその森に入り、幾日も断食し、身体を憔悴させた。（三二）蜜のような眼をした夜叉ストゥーナは、彼女の前に姿を現わした。

「お前は何を求めてそのように企てているのか。かなえてあげよう。すぐに言いなさい。（三三）」

彼女は「それは不可能なことです」と繰り返し夜叉に告げた。するとグヒヤカ（夜叉）は彼

女に言った。

「私はかなえるであろう。（三四）王女よ、私は財主（クベーラ）の従者で、願いをかなえる夜叉だ。与えられないものでも与えるであろう。お前の願望を言いなさい。（三五）」

そこでシカンディンは、夜叉の長ストゥーナカルナに一部始終を残らず話した。バーラタよ。（三六）

「夜叉よ、私の父は困っています。遠からず滅びるでしょう。ダシャールナの国王が怒って彼に向かって進軍して来ます。（三七）そのヒラニヤヴァルマン王は強力で気力に満ちています。夜叉よ、私と私の父母を守って下さい。（三八）あなたは私の苦しみを除くと約束しました。夜叉よ、私はあなたの恩寵により、非難されない男になりたいのです。（三九）偉大な夜叉よ、あの王が私の都を攻撃する前に、恩寵をかけて下さい。グヒヤカよ。（四〇）」

（第百九十二章）

ビーシュマは語った。――

バラタの雄牛よ、夜叉はシカンディンの言葉を聞くと、心の中で考えてから、運命にせきたてられて告げた。クルの王よ、実にそうなるべく定められたことが私の苦しみをもたらすのだ。（一）

「可愛い女よ、お前の望みをかなえてあげよう。しかし条件がある。聞きなさい。しばらく

の間、私は自分の『男性』をお前にあげる。時が来たら、お前はそれを返さなければならぬ。私はこの真実をお前に告げる。（二）私は願望が成就する主で、望みのままの姿をとり、空を飛ぶことができる。私の恩寵により都とすべての親族を救いなさい。（三）王女よ、私はお前の『女性』を引き受ける。必ず約束を守ると言ってくれ。私はお前に好意をかけるであろう。（四）」

シカンディンは言った。

「尊者よ、私はあなたの『男性』をお返しするでしょう。夜行の者よ、しばらくの間、『女性』を引き受けて下さい。（五）ダシャールナ国王ヒラニヤヴァルマンが引き返したら、私は再び元の娘になり、あなたは男性にもどるでしょう。（六）」

ビーシュマは語った。——

このように言って、両者はお互いを裏切らないという約定を交わした。王よ。それから、両者は性を交換した。（七）王よ、ストゥーナ夜叉は「女性」を引き受けた。シカンディンは輝かしい夜叉の姿をとった。（八）

王よ、パーンチャーラの王子シカンディンは男性になって、喜んで都に入り、父のドルパダに会い、起こったことをすべて父に報告した。（九）ドルパダは彼の話を聞いて、妻とともに最高に喜んだ。そして大インドラの言葉を想い起こした。（一〇）王よ、それから彼は、ダシャールナ国王のもとに使者を送って、「私の息子は男性である。私を信じて下さい」と告

げた。（一一）

その時、ダシャールナ国王は、苦悩と怒りを抱き、パーンチャーラ国王ドルパダに対して、猛然と進軍して来た。（一二）ダシャールナ国王は、カーンピリヤに到着すると、ヴェーダを知る最高のバラモンに敬意を払い、使者として派遣した。（一三）

「使者よ、私の言葉だと言って、あの最低の王であるパーンチャーラ国王に告げよ。

『悪党め、自分の娘のためによくも私の娘を嫁に迎えたな。疑いもなく、今日、その侮辱の果報を受けるであろう。（一四）』」

最高の王よ、そのバラモンの使者は、ダシャールナ国王にこのように命じられて、都に行った。（一五）そしてその宮廷祭僧（使者）は都でドルパダに会った。ドルパダ王はシカンディンとともに、彼をよくもてなし、牝牛と接客用の品を贈った。王中の王よ。（一六）ところが使者はそのもてなしを喜ばず、次のように告げた。（一七）

「勇猛なヒラニヤヴァルマン王は言われた。

『最低のふるまいをする悪党め、お前は娘のことで私を騙した。その悪行の果報を受けよ。（一八）王よ、私と戦え。今日、激戦において、大臣や息子や親族もろとも、速やかにお前を滅ぼしてやる。（一九）』」

このようにドルパダ王は、顧問たちのいる中で、ダシャールナ国王の宮廷祭僧により、侮辱に満ちた言葉を聞かされたということだ。（二〇）バラタの最上者よ、ところがドルパダは恭しく敬礼して言った。

「バラモンよ、私の姻戚（ヒラニヤヴァルマン）の言葉としてあなたが私に告げたことに対する回答は、私の使者が告げるであろう。[二一]」

それからドルパダも、偉大なヒラニヤヴァルマンに対して、ヴェーダに通じたバラモンを使者として派遣した。[二二] 王よ、彼はダシャールナ国王と会い、ドルパダに言われた言葉を伝えた。[二三]

「調査をして下さい。私の息子は明らかに男です。誰かが讒言したのです。信じてはなりません。[二四]」

王はドルパダの言葉を聞くと考えこみ、シカンディンが女か男かを調べるために、非常に魅力的な姿の最高の若い女たちを派遣した。[二五] 派遣された女たちは事実を知ると、喜んですべてをダシャールナ国王に報告した。「シカンディンは強力な男性である」と。クル族の王よ。[二六]

その王は調査の結果に喜び、姻戚と会って幸せに過ごした。[二七] 満足した王はシカンディンに財産を与えた。すなわち、象、馬、牛、幾百の女奴隷を与えた。その王はそこでもてなされて、娘を夫のもとにもどらせてから、引き返して行った。[二八] ダシャールナ国王ヒラニヤヴァルマンが怨みを捨て、喜んで引き返した時、シカンディニー（シカンディン）もこよなく喜んだ。[二九]

その少し後で、人間を乗り物とするクベーラ（毘沙門天）は、世界を巡回しているうちに、ストゥーナの住処に来た。[三〇] 財主（クベーラ）は、これがストゥーナ夜叉の家だと聞いて、彼の家の

上を飛行して観察した。それは花づなで色とりどりに、美しく飾られていた。[三一] 炒り米、芳香、天蓋により快適なものにされ、お香をたきしめられていた。旗や幡で飾られ、種々の飲食物や肉を供えて護摩が行なわれていた。[三二]

いたるところ飾られている彼の住処を見て、夜叉の王（クベーラ）は随行の夜叉たちに言った。[三三]

「無量の勇武を持つ者たちよ、このストゥーナの家は美しく飾られている。しかし、あの大馬鹿者は今日、どうして私の前に出て来ないのか。[三四] あの大馬鹿者は知っていながら私の前に出て来ないから、彼に重い刑罰を科す必要があると私は考える。[三五]」

夜叉たちは言った。

「王よ、ドルパダ王にシカンディニーという娘が生まれました。ある理由で、ストゥーナはその娘に『男性』を与えました。[三六] 彼は『女性』を受け取り、女になって家に蟄居しています。そこで彼は女性の姿になり、恥じて出て来ないのです。[三七] 王よ、以上のような理由で、ストゥーナは今日、あなた様に会わないのです。お聞きになったからは、後は適切になさって下さい。天車をここに止めましょう。[三八]」

ビーシュマは語った。――

それから夜叉の王は、「ストゥーナを連れて来い」と言った。そして、「私は彼を罰してやる」と何度も告げた。[三九] 王よ、ストゥーナは夜叉の王に呼ばれて出て来た。大王よ、彼

は女の姿をとって、恥じながら立っていた。(四〇)クルの王よ、財主は怒って彼を呪った。
「グヒヤカたちよ、この悪者はずっと女性であり続けるように。(四一)」
それからその偉大な夜叉の王は更に言った。
「悪党め、お前は夜叉たちを侮辱し、シカンディンに『男性』を与え、『女性』を受け取った。(四二)悪党め、お前はかつて行なわれなかったことをした。であるから、今日から、お前は女性で、彼は男性であり続ける。(四三)」
それから夜叉たちはストゥーナのために、ヴァイシュラヴァナ(クベーラ)をなだめ、「呪詛に期限をつけて下さい」と何度も頼んだ。(四四)そこで偉大な夜叉の王は、呪詛に期限をつけようと考え、随行しているすべての夜叉の群に告げた。(四五)
「ストゥーナ夜叉は、シカンディンが戦いにおいて殺される時、自分の姿を取りもどすであろう。心の広い彼は安心するように。(四六)」
尊い神はこのように告げると、夜叉や羅刹たちに敬意を表され、一瞬のうちにどこにでも行ける彼らすべての者たちとともに立ち去った。(四七)
一方ストゥーナは、呪詛を受けてからも、その場にとどまっていた。そしてシカンディンは、約束の時間にその夜叉のところにやって来た。(四八)彼は夜叉に近づき「尊者よ、私は参りました」と告げた。ストゥーナはシカンディン王子が正直にやって来たのを見て、「私は嬉しい」と何度も言った。そして、起こったことをすべてシカンディンに告げた。(四九—五〇)

夜叉は言った。
「王子よ、あなたのために私はヴァイシュラヴァナ(クベーラ)に呪われた。もう行きなさい。望みのままに世間で幸せに暮らしなさい。(五一)これは前もって定められたことだと思う。変えることはできない。お前がここに来たことも、クベーラが訪れたことも……。(五二)」
ビーシュマは語った。——
ストゥーナ夜叉にこのように言われて、シカンディンは大喜びで都に帰った。バーラタよ。(五三)彼は種々の香や花輪や莫大な財産で、バラモン、神々、聖域(チャイティヤ)、四辻を供養した。(五四)こうして、パーンチャーラ国王ドルパダは、目的を達したシカンディンや親族の人々とともに最高に喜んだのである。(五五)クルの雄牛である大王よ、そして彼は、前は女性であった息子のシカンディンを、弟子としてドローナに託した。(五六)王子シカンディンとドリシタデュムナは、お前たちとともに四部門よりなる弓のヴェーダ(兵学)を学んだ。(五七)わが子よ、私がドルパダに対して起用した、愚者、盲人、聾者に変装したスパイたちが、以上のことを正確に報告してくれた。(五八)
クルの最上者である大王よ、このようにして、「女男」であるドルパダの息子シカンディンは最高の戦士になった。(五九)バラタの雄牛よ、つまりカーシ国王の長女であるアンバーと知られる娘が、ドルパダの家に生まれたシカンディニー(シカンディン)であるのだ。(六〇)彼が弓を持ち、戦おうとして近づいて来ても、私は一瞬でも彼を見ることはできないし、攻撃する

こともできない。（六二）私のこの誓いは地上に知れわたっている。女性、前に女性であった者、女の名を持つ者、女の本性を持つ者に対しては、私は矢を放ちはしないという。クルの王よ、このような理由で私はシカンディンを殺さないのだ。（六二―六三）わが子よ、私はこのようにシカンディンの出生を真実に知っている。そこで戦場で彼が私に危害を加えようとしても、私は彼を殺さない。（六四）もしビーシュマが女性を殺すなら、彼は自分自身を殺すであろう。以上よりして、彼が戦場にいるのを見ても、私は彼を殺さないのである。（六五）

サンジャヤは語った。――

クルの王ドゥルヨーダナは、それを聞くと、しばらくの間考え込んでから、これはビーシュマにふさわしいことだと思った。（六六）

（第百九十三章）

クル軍とパーンダヴァ軍の長所と短所

サンジャヤは語った。――

その夜が明けた時、あなたの息子は全軍の中で、再び祖父（ビーシュマ）にたずねた。（一）

「ガンガーの息子よ、このパーンダヴァの最高の軍隊は、多くの人員、象、馬を擁し、偉大な戦士に満ちている。（二）ドリシタデュムナをはじめとし、ビーマ、アルジュナなど、世界守護神に等しい強力な勇士たちに守られている。（三）それは難攻であり、抑止できず、膨れ

上がった海のようである。この軍隊の海を、戦いにおいて神々も揺るがすことができない。（四）光輝に満ちたガンガーの息子よ、どのくらいの時間でそれを滅ぼすことができるか。また、偉大な射手である師匠（ドローナ）や強力なクリパは。（五）また、戦いにおいて誉れ高いカルナや、最高のバラモンであるドローナの息子（アシュヴァッターマン）は。私の軍隊にいるあなた方はすべて神的な武器に通じているから。（六）私はこのことを知りたいと思います。私はいつもこの上ない好奇心を抱いていますので。勇士よ、それを私に告げて下さい。（七）」

ビーシュマは言った。

「クルの最上者である王よ、あなたにふさわしいことだ。敵と味方との長所と短所をたずねたことは。（八）王よ、聞きなさい。戦いにおける私の最大限の能力と、戦いにおける私の両腕の武力とを。強力な者よ。（九）普通の者に対しては、まっとうな方法で戦うべきである。詐術を用いる者に対しては、詐術により戦うべきである。これが武士道（ダルマ）の結論である。（一〇）光輝に満ちた勇士よ、私はパーンダヴァの軍隊を、毎日午前中に、一万人の兵士と一千の戦車兵を単位として殺すことができる。これが私の単位であると考える。（一一―一二）私は武装し、常に努力して、このようなやり方で、この時間で大軍を滅ぼすことができる。（一三）しかしもし私が戦場にあって十万人を殺せる偉大な武器を放てば、一カ月で敵軍を滅ぼすことができる。バーラタよ。（一四）」

サンジャヤは語った。――

王中の王よ、ビーシュマの言葉を聞いてから、ドゥルヨーダナ王は最高のアンギラス族であるドローナにたずねた。（二五）「師匠よ、あなたはどのくらいの時間でパーンドゥの息子の軍隊を滅ぼすことができるか。」

ドローナは微笑して彼に答えた。（二六）「クルの最上者よ、私は老人である。私の気力や行動力は衰えた。しかし私は武器の火でパーンダヴァ軍を燃やすことができる。（二七）ビーシュマと同じく、一カ月でできると思う。これが私の最大限の能力で、最大限の武力である。（二八）」

クリパは「二カ月で」と言った。ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は十日で敵軍を滅ぼすと約束した。また偉大な武器に通じたカルナは、「五日で」と約束した。（二九）ビーシュマはカルナの言葉を聞くと大声で笑い、次のように言った。（三〇）「弓矢と刀を持ち、クリシュナをともない、戦車に乗って出撃するアルジュナに戦場で会わないうちは、カルナよ、そのように考えておれ。お前はそのように、もっと好きなように言うがよい。（三一―三二）」

（第百九十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

バラタの最上者（ジャナメージャヤ）よ、ユディシティラは以上のことを聞くと、密かにすべての弟たちを呼ぶと、次のように言った。（一）

「ドゥルヨーダナの軍隊にいる私のスパイたちが、今朝この報告をもたらした。（二）ドゥルヨーダナは大誓戒を守るビーシュマに、『主よ、どのくらいの時間でパーンダヴァ軍を滅ぼすことができるか』とたずねたという。（三）彼は邪悪なドゥルヨーダナに、『一カ月でできる』と答えた。ドローナも同じ時間でできると約束した。（四）ガウタマ（クリパ）はその二倍の時間でできると答えたと聞いている。また偉大な武器に通じたドローナの息子は、十日でできると約束した。（五）また、神的な武器を知るカルナは、クルの集会でたずねられて、敵軍を五日で滅ぼすことができると約束した。（六）

それ故アルジュナよ、私もお前の言葉を聞きたい。戦いにおいてどのくらいの時間で敵どもを滅ぼすことができるかと。（七）」

王にこのように問われて、アルジュナはクリシュナを見てから、次のように答えた。（八）

「彼らはみな偉大で、武器を修得し、めざましく戦う者たちである。大王よ、疑いもなく彼らはあなたの軍隊を殺すであろう。（九）しかしあなたは心配する必要はない。私は真実に即して申し上げる。私は一騎で、クリシュナとともに、動不動のものを含む三界を、神々もろとも、過去と現在と未来にわたって、一瞬のうちに滅ぼすことができると思う。（一〇―一一）あの山岳民（実はシヴァ神）との戦いにおいて、パシュパティ（シヴァ）が私に与えた恐ろしい偉大な武器が私のもとにある。（一二）宇宙紀の終末にパシュパティが万物を滅ぼすために用いるあの武器が私のもとにあるのだ。人中の虎よ。（一三）王よ、ビーシュマもドローナもクリパもドローナの息子もその武器を知らない。いわんや御者の息子（カルナ）がどうして知っているか。

(二四)しかし戦いにおいて、普通の人を神的な武器で殺すのはよろしくない。我らはまっとうな戦いによって敵をうち破ろう。(二五)

王よ、これらの人中の虎たちがあなたの仲間である。すべて神的な武器に通じ、すべて戦いを好む。(二六)彼らはすべて、ヴェーダを修了した時に沐浴をし、無敵であり、戦場で神々の軍隊をもうち破ることができる。パーンダヴァよ。(二七)すなわち、シカンディン、ユユダーナ(サーティヤキ)、ドリシタデュムナ、ピーマセーナ、双子(ナクラとサハデーヴァ)、ユダーマニユ、ウッタマウジャス、戦いにおいてピーシュマとドローナに匹敵するヴィラータとドルパダの両者……。そしてあなた自身も、三界を破壊することさえできる。(二八―一九)インドラに等しい光輝を持つ者よ、あなたが怒ってある人を見たら、その人は必ず速やかに滅するであろう。ユディシティラよ、私はあなたを知っている。(二〇)」

(第百九十五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

翌朝は晴天であった。王たちはドゥルヨーダナに命じられて、パーンダヴァ軍に対して進軍した。(一)彼らはすべて沐浴して清浄になり、花輪をつけ、白衣をまとい、武器と旗を持ち、スヴァスティ(吉祥)と唱えながら火中に供物を投じた。(二)すべての勇士たちはヴェーダに通じ、すべて誓戒を実践し、すべて祭式を行ない、すべてが戦いの〔傷〕あとを持っていた。(三)彼らは強力で、戦いにおいて他の世界(天界)を勝ち得ようと望んでいた。すべて心を一つ

の目的に集中し、相互に信頼し合っていた。(四)アヴァンティ国のヴィンダとアヌヴィンダ、ケーカヤとバーフリーカたちは、すべてバラドゥヴァージャの息子(ドローナ)に先導されて進軍した。(五)アシュヴァッターマン、ピーシュマ、シンドゥ国のジャヤドラタ、南部地方の諸王、西部の諸王、山岳地帯の戦士たち、(六)ガーンダーラ国王シャクニ、東部と北部のすべての諸王、シャカ族、キラータ族、ヤヴァナ族、シビ族、ヴァサーティ族。(七)これらの偉大な戦士たちには、それぞれの主要な戦士を取り囲んで、それぞれの軍隊がつき従っていた。以上すべては、第二軍として進軍した。(八)軍隊を率いるクリタヴァルマン、強力なトリガルタ軍、弟たちに囲まれたドゥルヨーダナ王、シャラ、ブーリシュラヴァス、シャリヤ、コーサラ国のブリハドバラ。これらの人々はドゥルヨーダナに先導されて後衛で行進した。(九―一〇)

これらの偉大な戦士たちは武装し、戦闘準備を整えて、平坦な道を進み、クルクシェートラの西側に位置を占めた。(一一)ドゥルヨーダナはそこに野営場を作らせた。パーラタよ、それは飾りつけられ、あたかも第二のハースティナプラのようであった。(一二)その都に住む賢明な人々ですら、都とその野営場とを区別できないほどであった。王中の王よ。(一三)クルの王は、他の王たちのためにも、まったく同じような要塞を幾百幾千と作らせた。(一四)王よ、それらの軍営は幾百のグループで、その戦場に円形をなして五由旬(ヨージャナ)も広がっていた。(一五)王たちは気力と武力に応じて、幾千の財物を持って、それらの陣営に速やかに入った。(一六)ドゥルヨーダナ王は、軍隊と乗物(異本による)をともなうそれらの偉大な王たちに、

最高の食料品を分配した。(一七) 象、馬、人員、技師（建築家など）、吟誦者（スータ）、讃嘆者（マーガダ）、崇拝者（バンディン）など、その他の従者たち、商人、遊女、娼婦、見物人たち。クルの王は彼らすべてに対して、作法通りにめんどうを見た。(一八—一九)

（第百九十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クンティーとダルマの息子ユディシティラの方も、同様にして、ドリシタデュムナをはじめとする勇士たちに命令を出していた。バーラタよ。(一) その時彼は、チェーディとカーシとカルーシャの勇猛極まりない指導者、敵を滅ぼす軍司令官、ドリシタケートゥ、ヴィラータ、ドルパタ、ユユダーナ、シカンディン、パーンチャーラ国の勇士ユダーマニユとウッタマウジャスに命じた。(二—三) 彼ら勇士たちは、色とりどりの鎧を着て、黄金の耳環をつけ、火炉においてバターを注がれて燃え上がる火のようであった。これらの偉大な射手たちは、燃える惑星のように輝いていた。(四)

人中の雄牛である王は、兵たちにふさわしく敬意を表し、軍隊に進軍を命じた。(五) ユディシティラはドリシタデュムナに率いられたアビマニユ、ブリハンタ、ドラウパディーの息子たちを送り出した。(六) 次にユディシティラは第二軍として、ビーマ、ユユダータ、アルジュナを送り出した。(七) 兵士たちは喜び勇み、馬具などをつけ、歩きまわり、走りまわり、彼らの声は天にもとどかんばかりであった。(八) ユディシティラ王自身は、ヴィラータとドルパダ、及びその他の王たちとともに、後衛として進んで行った。(九)

ドリシタデュムナに率いられる、恐ろしい弓取りのいる軍隊は、澱みかつ流れる満水のガンガー（ガンジス）のように見えた。(一〇) それから英邁な王は、ドリタラーシトラの息子たちの判断を（異本による）迷わせるために、軍隊を再編成した。(一一) ユディシティラは、偉大な射手であるドラウパディーの息子たち、アビマニユ、ナクラ、サハデーヴァ、すべてのプラバドラカたち、一万頭の馬、二千頭の象、一万人の歩兵、五百の戦車、そして無敵のビーマセーナを第一軍（前衛）に任命した。また中衛として、ヴィラータ、マガダ国のジャヤトセーナ、パーンチャーラの勇士ユダーマニユとウッタマウジャス——この両者は棍棒と弓の使い手で、強力で偉大である——を任じた。クリシュナとアルジュナは中衛に従った。(一二—一五)

武器に通じた人々は非常に激昂していた。勇士たちは彼らの二万本の旗を守っていた。(一六) 五千頭の象、すべての戦車の軍団、弓と刀と棍棒を持つ幾千人の勇猛な歩兵が、前方と後方におびただしくつき従った。(一七)

多くの王たちは、ユディシティラ自身がいる軍隊の海に位置を占めていた。(一八) そこには、千頭の象、一万頭の馬、千台の戦車、千人の歩兵がいた。バーラタよ、以上に依存してユディシティラはスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）に対して進軍したのである。(一九) そしてその後に、幾百、幾千、幾万の人々が、幾千のグループになってつき従った。(二〇) 幾千幾万の人々は、勇み立って、そこで幾千の太鼓、幾万の法螺貝を鳴らした。(二一)

（第百九十七章）

（第五巻　おわり）

ちくま学芸文庫

原典訳マハーバーラタ5

二〇〇二年九月十日　第一刷発行

訳　者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）

発行者　菊池明郎

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都台東区蔵前二—五—三　〒一一一—八七五五

振替〇〇一六〇—八—四一二三

装幀者　安野光雅

印刷所　三松堂印刷株式会社

製本所　株式会社積信堂

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市櫛引町二—六〇四　〒三三一—八五〇七

電話番号　〇四八—六五一—〇〇五三

© KATSUHIKO KAMIMURA 2002 Printed in Japan

ISBN4-480-08605-6 C0198